昭和五年九月十日印刷
昭和五年九月二十日發行

國譯一切經 大集部 一

不許複製

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝{三二〇一四〇 三一一四六}番

製本所　兩角製本所

際有ること無し、虛空法界も、亦邊際無し、能く如來の此の經法を持せば、功德無邊なること、亦復是の如くならん』と。

爾の時功德莊嚴菩薩、佛に白して言さく『我れ今如來所說の義趣を信解するが如く、後の五百歲〔一二九〕に、法の滅せんと欲する時、諸の大乘〔一三〇〕心を發さん衆生、其れ此の經法を受けざれば、將に是の如き等の、魔の爲に持せられて、佛法の外に墮せん。世尊、我れ今如來の滅後に此の經を受持するを堪任せん。佛の法をして久しく世に住せしめんと欲するが故に』と。

爾の時世尊、此の經を囑累せんが爲の故に、大光明を放ち、普く十方の無量阿僧祇の諸佛世界を照したまふに、彼の諸の如來も、亦此の經法を〔一三一〕囑累せんが爲の故に、皆眉間より〔一三二〕白毫相の光を放ち、普く十方一切の世界を照らして、周遍せざる無し。此の經を說き已つて、如來、大神力を以て光明を放ちたまふ、時に無量阿僧祇の諸佛世界は、六變に振動し、無量阿僧祇の衆生有つて無上道心を發し、無量阿僧祇の菩薩は無生法忍を得、又復無量阿僧祇の菩薩有つて、一生補處の善根を得、又復是の無量阿僧祇に過ぐる衆生は、聲聞乘を得て學・無學地に住したり。

佛、經を說き已りたまふに、虛空藏菩薩、大德阿難、諸の菩薩の大衆、及び諸の聲聞・諸天・世人など、佛の所說を聞きて皆大に歡喜したり。

大方等大集經卷第十八

【一二九】唐譯はたゞ後末世時とのみいふ。大集月藏經卷十には佛の滅後に、五種の五百年を說く。茲にいふ後五百年とは、その第五期にして鬪諍を事とし、三學を廢し、邪見の增長する時期に當る。經はこの期に於て佛の白法の隱沒損減することを說く。

【一三〇】心の字、麗・宋本に無し、元・明に依つて加ふ。

【一三一】如、麗等の四本知に作る。今宮內省本に依る。

【一三二】經の弘通を囑托するをいふ。

【一三三】世尊の眉間に白玉のそげあり、淸淨柔軟にして細香の如く、右旋宛轉して光を放つ。これを白毫相といふ。

し第一供養を以て如來を供することを成ずるありや不や』と。佛の言はく『善男子、第一もて如來を供養することを成ぜざれば、亦此の因緣を以て無量の功德を得る能はじ。如かず、善男子・善女人の、此の經を受持せば、功德の甚だ多きに』と。爾の時、世尊卽ち偈を說いて言はく、

『我れ佛眼を以て、見る所の佛刹は、十方に週遍して、廣大無邊なるも、爾所の諸界に、珍寶を盛滿し、〔一二二〕菩薩此を以て、恒に用て布施せんよりは、若し此の甚深の妙經・無所得の法・諸佛の所說をば、能く受持して、人の爲に演說する有らんに、此の人の功德は、復彼よりも多し。華香・瓔珞、塗香・末香、寶蓋・幢幡、上妙の衣服など、是の供具を以て、普く諸世界に滿たし、如來を供養し、佛道に迴向せんよりも、若し後の末世に、法の滅せんと欲する時、救世の法に於て、勤修護助し、正法を受持して、不放逸を行ぜは、此の功德の聚は、復彼よりも多からん。十方世界の、一切の巨海に、盡く中に、上妙の香油を盛滿し、大燈〔一二三〕炷を作すこと、猶し須彌の如くし、然して以て〔一二四〕一切の諸佛を供養せんよりは、〔一二五〕法炬の若し斷滅せんと欲するの時、世の衆生の、無明に覆はるるを知り、若し能く此の大法炬を然さんに、此の人の功德は、復彼に勝れん。我れ見る所の、無量の諸佛に、億千劫のあいだ、種種に供養し、〔一二六〕諸天の上〔一二七〕衣を、意に適ひて供養すと雖も、此の妙經典をば受持する能はじ。若し諸佛に於て、重恩有るを知り、三寶を擁護し――報恩の爲の故に、一切衆生を饒益せんと欲するが爲に、此の經を受持せば、その福彼に勝る。我れ佛眼を以て、見る所の衆生、若し能く敎へて、盡く釋・梵を成ずる有らんに、所得の功德は、此の經を書寫し・持する者の、功德甚だ多きに如かず。大千世界の所有衆生、若し能く敎へて、盡く二乘を成ぜしむる有らんも、若し能く菩提心を發す者有り、此の經を護持せば、功德復勝れん。持經の功德を、〔一二八〕假令是れ色とせんに、悉く當に十方世界を充滿すべし、唯如來の無上大智を除き、更に能く知る者無けん。此の功德は、如來の智の如く、邊

【一二二】本文に菩薩以此、恒用布施とあり。唐譯には、盡皆普施二諸菩薩一とす。

【一二三】炷は燈心なり。

【一二四】唐譯に燃レ燈供二養佛制底一とす。

【一二五】佛の法よく無明の闇を照らすを炬に譬へしなり。

【一二六】唐譯相當文に以二天適意一妙供養とあり。

【一二七】衣、麗本は妙に作る、今三本に依る。

【一二八】唐譯相當文に、假令經福皆爲レ色、盡二虛空界一不二能受一と。

の甚深の經典を廣說せんが爲なり。我れ復當に人中の、此の經典を受持讀誦せん者をして、手に是の經を得ては、胸懷に執在して經卷を離さざらしめむべし。世尊、若し復末世に、法の滅せんと欲する時、此の經を受持し、轉た人の爲に說かん者有らば、當に知るべし、皆是れ彌勒の威神の建立する所たり。世尊、爾の時に於て諸の魔事多くして行人を嬈亂し、諸の說法者も、煩惱魔に依り、魔の爲に持せらるるが故に、此の經を樂まず、勤めて修習せず、互に相是非すと雖も、我等俱に當に勤めて方便を作し、說法の者をして是の經を愛樂し、常に勤めて修習し、讀誦通利し、廣く人の爲に說かしむべし』と。

爾の時世尊、彌勒菩薩を讚へて言はく『善い哉・善い哉、彌勒、[一六]汝乃ち能く正法を護持せんが爲の故に、師子吼を作せることや。汝は但に今我が前に於て師子吼を作すのみならず、亦過去に於ても無量阿僧祇の諸佛の前に於て師子吼を作し、正法を護持したりき』と。

爾の時世尊、大德阿難に告げて言はく『汝是の經を受持するや』と。阿難佛に白して言はく『唯然り、世尊、佛の神力を以ての故に、我れ已に受持したり』と。佛の阿難に言ふらく『汝常に當に廣く四衆の爲に分別解說すべし。若し先に善根を種え、勝法を樂む者有らんに、是の如き等の人聞き已り、則ち能く信解・受持・讀誦して廣く人の爲に說かば、其の人則ち無量無邊不可思議の大功德聚を得ん』と。阿難即ち佛に白して言さく『世尊、當に何が斯の經を名け、云何が奉持すべき』と。佛阿難に言はく『此の經をば勸發菩提・莊嚴菩提と名け、當に是の如く之を奉持すべし』と。

爾の時、[一七]功德莊嚴菩薩、衆の中に在り、即ち座より起ち、[一八]右膝着地し、合掌して佛に向ひ、佛に白して言はく『希有なり世尊、如來は正法と及び說法の者とを擁護したまはんが爲の故に、善能く是の如く此の經を[一九]讚歎したまへり。世尊、[二〇]諸の[二一]新學の菩薩、菩提の爲の故に諸の善根を種え、種種の華香・瓔珞・末香・塗香を以て、勤めて如來を供養し、而も此の經を受持せざれば、是の人頗

【一六】唐譯には、こゝに、破二煩惱魔一、壞二諸外道一、成二熟有情一、護二持正法一の四種菩薩行を說く。

【一七】唐譯には福莊嚴菩薩とす。

【一八】右膝を地に着けて禮するなり。

【一九】讚歎、麗本は快讚に作る。今三本に從ふ。

【二〇】この段、以下唐譯全く異る。

【二一】新に發心して佛道を修學する菩薩なり。

『彌低　首脾　摩訶彌低　達摩彌低　天多加麗　三摩彌低　薩遮彌低　那提咩　阿兗多麗　阿兗
頭離　阿兗勒差　薩婆薩埵阿兗伽醯　阿那兗多卑　修冀低　阿毘盧提　阿毘伽醯　浮提菩舍咩
膩魑　遏他尼低　泥提羅尼　阿那他婆差帝　咩低　咩低闍耶私　修莎羅

『汝等、禪の樂より起ち、來つて持法の者を護れ、諸世界の世尊も、皆悉く共に受持したまはん』。

爾の時、梵自在天王、即ち座より起ち、彼の釋・梵・護世諸天を讃へて言はく『善哉善哉、汝等乃ち能く、正法と法を持し・法を說く者とを護らんが爲の故に、大莊嚴を發したることや。汝等正に應に是の如くなるべし、甚だ其の宜しきを得たり。如來の法・律に隨ひ、世に住すること久近ならん。爾の所の時中に於ては、當に正行・法行を識別する有らん。爾の所の時中に於ては、諸天・世人甚だ當に熾盛にして宮宅に充滿すべく、此の法滅せん時、諸天・世人は轉た當に減少して、宮宅空荒なるべし』と。

爾の時世尊、彌勒菩薩に告げて言はく『彌勒、汝此の甚深の經典を受持し、讀誦書寫して廣く人の爲に說け。彌勒、我れ今斯の如き等の甚深の經典をば、汝に囑累す。此の大法をして久しく世に住せしめんがための故に、諸魔を降伏せんがための故に、一切衆生を利益せん爲の故に、一切の[一三]外道をして便を得ざらしめんための故に、一切菩薩に敎勅し、此の經に親近して遠離せざらしめんための故に、佛法の大明をして、久しく世に住して衰滅せざらしめんと欲するが故に、佛法僧の種をして斷絕せざらしめんための故に』と。

爾の時彌勒菩薩、即ち佛に白して言はく『世尊、我れ如來の在世及び[一四]滅度の後に於て、常に當に此の甚深の經典を受持し廣宣流布すべし。所以は何。此の法を受持するは、則ち過去・未來・現在の諸佛の正法を受持せんが爲にして、但に一如來の法を受くる非ざればなり。世尊、我れ亦自ら己が法を護らんが爲の故に。世尊、我れ常に諸天[一五]大衆と普く會して兜率天宮に處るは、每に是の如き等

【一三】佛敎以外の諸教學をいふ。轉じて異端邪說をも指す。

【一四】涅槃の譯。涅槃に入れば、永に生死の苦を滅し、煩惱の潮流を超度するが故に滅度といふ。

【一五】大、麗本は人に作る、今三本に從ふ。

當に章句を說き、護世四天王天、帝釋・梵天王等の諸神を召すべし。此の章句を以て召すが故に、護世四天王天・帝釋・梵天王など、皆當に諸の說法師、ならびに此の經を持せん者を擁護し、此の世の信じ難しとする所の甚深の經典を說かん時も、能く留難を作す無からしむべし。所謂若し王の大臣にして駈遣して國を出で、若しは重病を得、若しは鬪諍の[二〇]起らん時、若しは國土に疾病あらんに、是の如き等の事起らん時は、呪術の力を以ての故に、卽ち消滅して成就を得さらしめん。何等をか呪術の章句とは爲すとならば、所謂[二一]

『頭頭麗　提提麗　陀夜䥫帝　陀夜羅伽羅　泥帝提　毘婆知　賒咩　賒彌多毘　目企　羶帝低　尼嗜𧫂禰　阿㝹多麗　嗚多羅尼　婆䥫斯　鉢他輸陀尼　鉢陀㝹枳　鉢陀散提　般若牟麗　阿婆究麗　浮陀勒差　伊那薩枝　多婆薩枝　多婆鉢低

『佛意に隨ひ、法性に順じ、僧を恭敬せば、世主信ぜん、護世の四王は、諸の佛子の爲に、此の呪を受持し、說法の者を護らん』

爾の時四天王、卽ち座より起ち、合掌向佛して佛に白して言さく『世尊、我等當に諸の佛子の、經を受持する者をば護るべし』とて、卽ち呪を說いて曰はく、

『首鞞　首婆鉢低　首提帝　因哆擁　陀梨擁　陀羅尼　頗耽𣑥　阿丘擁怯卑　阿目企　阿羅尼陀擁　藪首矖婆醯那　脾提脾陀賴散提　三咩　婆夜咩　三摩賴彌　波扇多㖒　休休　醯醯　丘樓丘麗』

時に四大天王と自在者とは、此の不可犯の呪を說き已る。爾の時天帝釋、卽ち座より起ち、心淨くして悅豫し、合掌して佛に向ひ、偈を說いて言はく、

『末世の飢饉の時、[二二]大稱の諸賢士、此の經を受持して說かんに、我れ當に爲に給侍すべし』

是に於て帝釋、此の偈を說き已り、卽ち呪を說いて曰はく、

【二〇】起時、麗本は時起とす、今宋元明本に從ふ。

【二一】以下の諸眞言、唐譯によれば、佛の所說にして、而も本經のそれと全く異る。

【二二】大名稱の菩薩をいふ。

如し、汝所言の如し、唯如來のみ能く是の諸葶藶子の、若しは百數・千數・百千萬數[108]なるを知る』と。

佛の言はく、『賢士、若し一人有りて、[109]神足を成就して無量の威德あり、能く口を以て是の諸葶藶を吹いて十方に布散するに、一の葶藶子は一の佛世界に墮ち、終に一を過ぎざらんには、賢士、汝の意に於て云何、是の諸葶藶の所及び世界は、寧ろ多しと爲すや不や』と。虛空藏、佛に白して言はく、『世尊、是の諸世界は乃ち心力の能く分別する所に非ず、若し說いて分別せば、人心をして迷ひて錯亂せしめん』。『賢士、我れ今汝に告ぐ、若し菩薩道を行ずる善男子・善女人有り、日日に爾所等の世界を滿たす無量の珍寶を以て、持用て布施して休廢有らず・餘事を營まざらん。若し復善男子善女人有り、此の甚深の經典を受持・讀誦・書寫して利養を求めず、――菩提の爲の故に、乃至一人の爲に說き、其の人をして聞かしめ已り、勸めて阿耨多羅三藐三菩提に於て、乃至一の善念を發さん――正法をして久しく世に住せしめんと欲するが故――に、此の人の功德は復彼の布施者の上に過ぐること、百倍千倍百千萬倍、乃至算數・譬喩の及ぶ所に非ざらん。何に況んや能く阿耨多羅三藐三菩提に住せしめん者をや。何を以ての故に、賢士、能く是の如き無量の善根を說き、諸の菩薩を成就するを以てなり、正法を護持せんが爲の故に。賢士、我れ菩薩更に餘法の、能く是に過ぐる有るを見ず。堅固の正行は諸の善法を攝し、衆生を敎化すればなり』と。

爾の時虛空藏菩薩、佛に白して言はく、『希有なり、如來の不思議や。如來の大法も亦不可思議なり。如來の大法の不可思議なるが如く、其れ此の經典を受持せば、得る所の功德も亦不可思議ならん。唯願はくは世尊、此の經を護持し、當來の世の爲に、此の正法を受持せしめたまへ。諸の善男子善女人にして、手に是の經を得ば、執つて胸懷に在つて此の經を離さざれ。若し應に生死を離るべくば、他より聞かずして、自然に菩提を悟るを得、菩提を悟り已つては廣く他の爲に說かんを』と。佛の言はく、『賢士、諦に聽き諦に聽け、善く之を思念せよ。吾當に此の經を護らんが爲の故に、

【一〇八】同に乃至知二緊迦羅、彌末羅、阿閦婆等一とあり。是等の數は、俱舍論第十二に矜羯羅、頻跋羅、阿芻婆とせらる。同論參照。

【一〇九】神足通の略、五通の一。游涉往來の自在なる通力なり。

等、失志の人の如く、是の經を聞いては憂へ、鼾りて鏡に照すが如し。其れ方便を作して、之を聞かんと欲せず、復餘人に教へて、非正の法なりと言ふ。又數國の王は、臣民の心を壞し、正法を誹謗して、佛說に非ずと言ふ。我等時に、佛力を以ての故に、正法を持せんが爲に、身命を惜まざらん。世尊は、我れの、言に二有ること無く、當に堅く護持して、是の正法に住せすべきを知りたまふ。誠實の語を作し、如說に行ぜば、諸佛を悅可せしめ、乃ち菩提を成ぜん』と。

爾の時虛空藏菩薩、諸菩薩を讚へて言はく、『善哉善哉、諸大士、汝等乃ち能く誠實の願を發して、如來甚深微妙無上の大法を受持すること、甚だ快しと爲す』と。虛空藏菩薩、佛に白して言はく、『世尊、其れ善男子・善女人有り、[一〇三]此の經典を受持讀誦せば、幾所の福をか得る』と。佛虛空藏に告げて言はく、『賢士、譬へば東方の十の三千大千世界と、南西北方、四維上下の、各十の三千大千世界とを、盡く末として微塵と爲し、爾所の塵を以て集めて一聚と爲し、設し一人有り、神足を成就して無量の威德あり、壽命長遠ならんに、此の人、この諸微塵を持つて、東方の爾所の塵數の世界を過ぎては乃ち一塵を下し、是の如く展轉して東行し、此の塵聚を盡くすも、而も諸の世界は猶ほ盡すべからざるが如し。東方世界の如く、南西北方・四維上下にも、亦爾所の佛土を過ぎて乃ち一塵を下し、是の如くにして諸方の世界に展轉し、此の塵聚を盡すも、諸の世界は猶ほ盡すべからずんば、虛空藏、汝の意に於て云何。[一〇四]是の諸世界は寧ろ多しと爲すや不や』と。虛空藏、佛に白して言はく、『甚だ多く甚だ多し。世尊、無量無邊にして計り知るべからず』。佛の言はく、『賢士、[一〇五]是の諸世界の微塵所著の處及び不著の處と、此の微塵所及の世界を盡くし已り、還た一大城と爲し、[一〇六]縱廣高下悉く皆同等とし、其の城中に[一〇七]葶藶子を滿たさんに、賢士、是の諸葶藶子は數へ知るべきや不や』と。虛空藏、佛に白して言はく、『世尊、假設の譬喩も猶ほ了すべからず、況んや數へ知るべけんや、唯如來を除きて能く數ふる者無し』と。佛虛空藏に告げて言はく、『是の如く是の

【一〇三】唐譯によればこの問は、かの諸菩薩の言として、前の偈の末尾に存す。

【一〇四】唐譯には如ㇾ是十方世界、所ㇾ下微塵、知二其數一不と云へり。

【一〇五】同に是諸世界、若下二微塵一、及不ㇾ下處、盡二諸世界一、以爲二大城一とあり。

【一〇六】唐譯に上至二有頂一、下窮二水際一とす。

【一〇七】同に諸芥子とす。

事・田・宅・居・業、及び販賣の事を說き、勸めて息利を求めて、猶ほ沙門と言ひ、傲慢にして有に著し、邪嶮の見に依り、性空の法を聞いては、當に大に驚怖すべし、[八六]後は長遠なりと言ひ、但だ現報を求め、[八七]當に虛妄の說をなし、非法をば法なりと云ふべし。[八八]是の如き大災をば、弊惡の比丘、魔及び魔子は、復當に佐助すべし。經文は是れ一なるも、義を說くこと各異り、各己が論を是なりとせん、愚者當に爾るべし。諸の深妙の經は、[八九]能く解脫を與ふるも、當に之を[九〇]擁遏し、[九一]反つて淺事を說き、「我れ勝れたり、汝劣る、勝に依つてこそ果を得ん」とて、佛法中に於て、當に是の如く競ふべし。是の如く競はん時、[九二]衆生數壞せん、[九三]非法王の爲に惱逼せらる。是の末世に於ては、[九四]壞は甚だ畏るべし、[九五]我れ正法を持し、世の所說を救はん。我れ常に慈心もて、法・律を捨てず、正しく大悲を生じて、世の爲に護と作らん。毀禁して惡を作し、正法に住せざれば、何の道に墜墮すべきやを、我れ常に憂愍す。見の故に惡を作し、正[九六]法を誹毀せば、我れ終に共に親黨と爲らじ。常に我が力に任せ、善く口の過を護り、無用の人を見るも、其の短を說かじ。[九七]我れ聖種に住し、頭陀もて戒を護り、定に處つて慧を習ひ、常に勤めて修行し、世の憒鬧を離れ、樂んで閑靜に處り、著無きこと[九八]鹿の如く、善く調して足るを知らん。若し聚落に至らんに、[九九]根を攝して少語し、說法の者を見なば、共に正法を論ぜん。愛語もて利益し、以て衆生を化し、又與に法を說き、惡行を斷ぜしめん。我れ正法の爲には、極遠にも當に往き、彼の爲に法を說くべし、衆を利益せんがための故に。若し凡愚と缺失有る者とを見なば、但だ當に自ら護り、法に住して忍を行ぜん。毀辱と恭敬とには、[一〇〇]當に須彌の如くなるべし、世法に染せずして、世の導師と爲らん。毀禁の比丘、若し來らば呵責し、[一〇一]自ら己が行を省みて、是の業報を將て、[一〇二]當に是れ等嫉惡の衆生の爲に、意を先にし言を善くし、現に恭敬を爲すべし。彼即ち念を生ずらく「我れも亦沙門、是の德を成就し、若干の惡無けん」と。諸の毀禁のもの

【八六】以下二句、唐譯に不レ信レ有二業集一、言レ無二後世報一とあり。
【八七】同に但作二虛妄語一とあり。
【八八】以下の八句、唐譯異る。
【八九】唐譯には、與二解脫一相應とす。
【九〇】擁は遮なり、障なり、遏は止なり、絕なり。
【九一】反、麗本及に作る、今宋等の三本に從ふ。
【九二】唐譯相當文に悉皆被二滅壞一とあり。
【九三】同に非法無道王とす。
【九四】同に無レ不レ懷二恐怖一とあり。
【九五】次の二句は、同に護二持佛所說、無上之正法一とあるもの、之に當るか。
【九六】法、麗に者に作る、今三本に從ふ。
【九七】この四句、唐譯は次の四句の後に出す。
【九八】唐譯によれば、俗務に親近せざること、鹿の自在なるが如しと。
【九九】以下唐譯やゝ異る。
【一〇〇】唐譯によれば、敬と不敬とに對しても、安住すること、須彌の如くなるべしと。
【一〇一】次の二句、同に觀二是自身業一、亦不レ起二報心一と。
【一〇二】以下唐譯やゝ異る。

故に、是の如き等の甚深の經典を說きたまふ、我れ先に世尊を觸惱せんが爲の故に、大火坑を作し、及び毒飯を設けたり、而も大衆如來は是れ害すべからざる者たりき、故に我れ佛に於て信敬の心を生じたり。爾より以來、疑悔の心結は[七四]尙ほ未だ除滅する能はざりき。今佛より此の甚深微妙の經典を聞き、疑悔卽ち除き、心に障礙無く、[七五]安樂行を得たり。是の故に我が信敬の心は轉復增長す。[七六]今我が家中に諸の財寶多し、當に以て佛・法・僧及び諸の沙門・婆羅門・貧窮・孤獨・下賤・乞兒に供養すべし。誰か當に是の一切の縛を斷ずる甚深の經典を聞いて、一切の諸物に於て貪著を生ずべけんや』と。

爾の時虛空藏菩薩、佛に白して言さく『世尊、諸佛如來の無上菩提は、甚だ甚深にして測知すべきこと難しと爲す。若し菩薩有り、未來世に於て、己が身命及び利養名譽を捨て、能く佛の菩提を[七七]持せんこと、甚だ有り難しと爲す』と。爾の時、衆中に六十八億の菩薩有り、座より起ち、合掌して佛に向ひ、一時に聲を同じくして偈を說いて言はく、

『世尊の滅したまはん後、我等能く忍び、身と壽命とを捨てん、正法を護らんが爲に。利と名譽とを捨て、諸の貪著を離れて、正法を護らんと願ぜん、佛智の爲の故に。罵詈と呵責、及び譏刺の語をば、正法を護らんための故に、當に之を忍受すべし。輕賤と毀弄と、惡名を唱說するとを、當に慈を以て忍ぶべし、此の經を護らんが爲に。來世の比丘、諸有に計著し、魔と黨を爲して、正法を誹謗し、禁を毀ちて惡を行じ、俗累に樂著し、利の爲に覆はれ、正法を樂はず、[七八]俗典を怙恃し、憍慢放逸にして、高く己が[七九]能を歎じ、正行の者を蔑み、常に[八〇]閑靜を捨て、樂んで[八一]憒閙に處り、[八二]世の文辭を習ひ、吾我に計著し、[八三]敎化を營まず、智慧を業とせず、座禪を捨離し、[八四]三寶に親しまず、智慧有ること無く、群黨して利を求め、結と俱に動じ、樂うて他の供を受け、他の慈心の施をも、惜むこと猶ほ己が有のごとく、屢[八五]彼に往到して、諸の世

【七三】この段、唐譯によれば室利毱多優婆塞と佛との問答たり。

【七四】尙、麗本常に作る、今宋等の三本に從ふ。

【七五】唐譯には法光明を獲たりとす。

【七六】唐譯によれば、佛は室利毱多に作佛（離一切纏如來と名く）の記を授けたまふこと、此所に見ゆ。

【七七】持、麗本侍に作る、今宋等の三本に從ふ。

【七八】唐譯に好二習於外道一と。

【七九】能、麗本に利とす、今三本に依る。唐譯は自讃二歎己身一とす。

【八〇】阿練若の謂。

【八一】憒は亂なり、閙はさわがしきなり。

【八二】この二句、唐譯に常樂二無利言一、好二習惡呪術一とす。

【八三】この二句、同に、或樂知二僧事一、與レ僧作二留難一と。

【八四】以下八句、唐譯異る。

【八五】彼とは唐譯によれば白衣（卽ち俗人）の家なり。

不可思議の無上福田と作る』と。佛復諸の天・人に告げて言はく、[六五]『心性は常に淨なり、而も凡愚の衆生は如實に知見する能はず、如實に知見する能はざるが故に、是を垢と言ふ。能く正しく知見するが故に、便ち是を淨と言ふ。而も第一實義中には、一法として淨むべく汚すべき無し。汝等當に知るべし、諸の煩惱は方無く・處無く・[六六]內に非ず・外に非ず。不善順の思惟を以ての故に便ち煩惱を生じ、善順の思惟の故に則ち煩惱無し。增と減と等しからざれば則ち煩惱を生じ、增減無ければ則ち煩惱無し。虛僞と妄想とは便ち是れ煩惱、妄想有ること無ければ則ち煩惱無し。是の故に我れ言ふ、如實に邪見を知らば則ち是れ正見なり、而も邪見は亦即ち是れ正見にはあらず。能く如實に知らば、則ち虛妄・增減・取著無し、是の故に名けて正見とは爲す』と。佛復諸の天・人に告げて言はく、『喩へば[六七]大地は水界に依つて住し、大水は風界に依つて住し、大風は虛空に依つて住し、虛空は依住する所無きが如く、[六八]是の如く大地は依住する所無し、而も假に依住の名有り、是の故に汝等當に是の如く之を知るべし。苦は業に依り業は結に依る。而も苦と業と結とは都て所依無し、心性は常に淨なるを以ての故に。是の如く當に知るべし、一切の諸法は根本有ること無く、都て住する所無し、而も言說を假るを以ての故に、有りと言ふも實には無きなり。是の故に一切法の本性は常に淨なり、究竟して無生無起なりと說く』と。

佛復諸の天・人に告げて言はく、『是の故に汝等當に知るべし、此の法門は名けて[六九]性常淨の法門と爲す。菩薩此の門に通達せば、一切煩惱の爲に染汚せられず、[七〇]而も亦此の清淨の門を恃まず。一切の諸恃・動を捨つるを以ての故に、便ち平等の道を得、能く魔界を過ぎて佛界に入り、亦能く諸の衆生界に[七一]入るを得、法界を動ぜずして一切法の界無く非界無きを知り、能く速に一切智界に[七二]至る』と。此の法を說きたまへる時に當り、五百の菩薩有つて無生法忍を得たりき。

[七三]爾の時申越長者、衆中に在つて座より起ち、佛足を頂禮して佛に白して言さく、『世尊は我が爲の

【六五】唐譯には、夫心者是淺生法、譬如二染纈一、或處受レ色、或處不レ受云云、といふ。

【六六】唐譯に亦無二住處一、復無二積聚一云云と。

【六七】古代印度に於ける世界說に依れば、最下位に虛空輪あり、次で風輪あり、その上に水輪あり、その上に地輪あり、之が上に九山八海あつて、一の世界を作るとなす。茲にいふ地水風空の依存關係は、この四輪の層を指す。因に輪とは、かの四者、各々の周は圓形をなすが故に名くと。

【六八】唐譯は虛空を以て以下の譬とす。本文に大地の無所依住を云ふは、虛空が依住する所無きを以て、大地も結局は依住する所無きを示せるなり。

【六九】唐譯には自性清淨法光明門とす。

【七〇】而も亦……平道の道を得、唐譯相當文に亦不二思惟一此清淨法一、以二不思一故、則滅二一切尋伺緣慮一、證二清淨性一とあり。

【七一】入るを得……一切智界に至る、唐譯相當文に、以レ住二佛境一、則超二有法境一、入二不動法界一……即入二平等一差別境一、則名レ獲レ得二一切智智一と。

【七二】至、麗本生に作るも、今宋等の三本に從ふ。

尊、唯然り、已に見る』と。佛復阿難に告げて言はく、[五七]『此の語は卽ち諸の魔子の爲に、當に魔事を離るる因と作るべし、[五八]不深の心を以て菩提を發すが故に』と。佛復阿難に告げて言はく、『未來世に於て、當に佛有り世に出現すべし、無垢相如來應正遍知と名く。此の魔波旬は彼の佛所に於て乃ち當に退轉せず、阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。阿難、彼の無垢相如來は、其の深心の成就たるを知るが故に、當に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし。爾の時に當り、亦當に魔王と作り、深心もて如來の正法を敬信すべし。彌勒の出でん時の如きも、魔王有り、名けて導師と曰ひ、深心もて佛法と聖衆とを敬信すべし。此の諸の五百の魔子も、亦當に彼に於て魔の中に生じ、當に彼の佛所に於て、菩提の爲の故に諸の善根を種え、乃至波旬の成佛せん時、阿耨多羅三藐三菩提の記を與授せらるべし』と。

佛阿難に告げて言はく『此の魔波旬は、今菩提心を發すと雖も、[五九]猶豫不定にして、[六〇]少疊毳の如くなり。爾りと雖も當に漸漸に無量の功德を成就し、世の導と爲らんこと、今の我が身の如けん』と。[六一]

[六二]爾の時衆中に無量無邊の諸天・世人・釋・梵・護世など、魔波旬の、記を授けられ當に成佛するを得べきを聞き、歡喜踊躍し、未曾有なるを怪み、合掌向佛して是の言を作す、『甚だ奇にして希有なり。其れ佛を見まつる者は必ず無量の功德法寶の聚を成就するを得ん。然る所以は、或は不信の衆生有り、如來を撓亂せんと欲するが爲の故に、佛を見るを得、或は遇會ひて佛を見るを得る者有らば、卽ち彼の衆生の爲に因と作り、乃至涅槃を得しめたまへばなり』と。又佛に白して言さく、『世尊、如來・[六三]應・正遍知を除かんよりは、誰か能く是の如く分別して衆生の根を知らん』と。

[六四]佛諸の天・人に告げて言はく、『汝等所言の如く、其れ如來を見るを得る者有らば、益を蒙らざる無し。汝等當に知るべし、或は衆生有つて善根都て盡き、無量阿僧祇・那由他劫に於て、人の身分無き、是の如き衆生も、如來を見るが故に、卽便作善の因乃至涅槃を得。如來は乃ち能く是の如く、無量

【五七】以下、唐譯卷第七終まで、說相異る。就て見るべし。

【五八】不深とは、菩提を求むる心の深重ならざるをいふ。たとひこの心深重ならざるも、旣に佛道に向へるによつて、魔事を離るる因といへり。

【五九】躊躇して決定せざるをいふ。

【六〇】毳は細く柔な羽毛なり、これより作れる僧衣を毳衣といふ。疊は劫貝(Karpāsa)なるべし。劫貝の絮を以て布を作るに用ふ。毳も、疊も、多量ならば、衣とし布となすべきも、少量にては以て爲すべき無し。是を菩提心の猶豫不定なるに喩へしならん。

【六一】唐譯卷第七の終。

【六二】唐譯卷第八。

【六三】應は應供(Arhat)の略、一切の惡を斷じて、人天の供養を受くべきもの。正遍知はまた正覺(Samyak saṃbodhi)ともいひ、眞正に遍く一切法を知る者をいふ。共に佛の十號の一なり。

【六四】この段、唐譯は說相同じからず。

『阿跋低　跋低　毘跋低　婆醯多兎散提　頭樓陀羅尼　涅伽多涅伽多尼　鉢伽多尼　迷羅育低　伽樓那涅耐提　薩遮跋低　浮多勒差　達摩涅折低　達摩勒差　郁鳩離　尸鳩離　咻樓咻樓咻樓　徳迦攤　多婆婆帝低　尸羅兎婆帝低　阿叉夜涅涕池　枳耆婆迦利拖　佛馱遏提魅低　達摩蔚耆　羅泥　僧伽兎銅咩　阿兎頭隷　不可濟度　壞魔眷屬　若犯此者　無諸刀杖　順已處行　聖衆所住　吉吉等句　順流解脱　破諸外論　降伏魔衆

[五一]『四王は常に護り、及び天帝釋と、梵王世主と、佛を奉ずる諸天の、菩提を護る者と、是の如き等の神は、常に當に擁護すべし、諸魔を降伏し、衆生を利するが故に、正法を受持し、説法の師を護り、盡く當に擁護すべし』と。

虚空藏菩薩、此の呪を説き已るに、卽時に此の妙寶莊嚴堂及び三千大千世界は、[五二]六變振動す。時に諸の魔子、上虚空中に、[五三]五百の[五四]密迹有つて[五五]金剛杵を執り、熾然たること火の如くにして甚だ怖畏すべきを見たり。時に諸の密迹、是の如き言を唱ふ、『若し魔子及び諸の魔神有り、若し此の呪を聞き、其の阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる有らば、吾等當に其の頭を破りて七分と作らしむべし』と。爾の時魔子及び諸の眷屬は、驚怖戰悚して身毛皆竪つ。卽ち合掌して佛を禮し佛に白して言さく、『我等今阿耨多羅三藐三菩提心を發す。善い哉世尊、願はくは我等を救ひ、此の恐怖を離れて無畏の樂を得せしめたまはんを』と。

爾の時世尊、侍者阿難に告げて言はく、『向に此の諸魔子説く所の言の如く、「我等當に來世に於て此の經典に留難を作すべし」とならば、必ず當に其の本誓に稱ひて留難を作すべし。斯の經典の如きは、唯當に佛の神力及び諸菩薩の受持を以ての故に、當に世に流布するを得、多人の受持・讀誦・分別・解説有ること無かるべし』と。[五六]佛復阿難に告げて告げたまはく、『汝は此の諸魔子が、恐怖を脱せんが爲の故に阿耨多羅三藐三菩提心を發したるを見たるや不や』と。阿難佛に白して言はく、『世

【五一】この文、唐譯に無し。

【五二】唐譯に六種震動に作る。

【五三】唐譯には、この段と次の段と前後す。

【五四】また密迹力士、祕密主などいふ。梵に（Guhyapāda）、手に金剛の武器を執り、佛を警固する夜叉神の總名なり。彼常に佛に親近して、佛の祕密の事迹を聞かんとする本誓あるが故に密迹と名く。密、麗本に蜜とするも、今三本に依つて密に作る。

【五五】梵に（Vajra）、印度の兵器たり。五胡杵ともいふ。堅固不壞にして能く物をくだくが故に金剛といふ。密家に在りては煩惱を破り、魔を伏する堅利の智を幟す。

【五六】この段、以上の相當文、唐譯に缺く。

時に魔波旬、卽ち是の念を作す、『大慈世尊は今我を憐愍して、能く我が爲に菩提心の法を說きたまふ。我れ今宜しく應に如來の所に於て少善根を種ゆべし』と。是に於て波旬、卽ち八萬四千の殊妙寶蓋及び無量の華鬘・瓔珞・末香・塗香を化作し、己が眷屬に告げて言はく、『諸佛世尊の出世は甚だ難し、卿等諸人、咸應に共に世尊の所に來至すべし、供養の爲の故に』と。爾の時魔天の眷屬中に八萬四千の衆有り、及び魔波旬、各共に殊妙の寶蓋及び無量の華香・瓔珞・末香・塗香を持つて、世尊の所に至り供養を設け已り、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。諸の餘の魔の眷屬諸天の、菩提心を發さざる者は、形に相[四四]嗤笑議論して[四五]言はく、『希有なり、波旬は乃ち能く沙門[四六]瞿曇の前に於て、是の如き篤信の相を詐現し、狀至親の如し。然る所以は、波旬は或は沙門瞿曇所學の呪・幻・方術を欲すればなり。是の故に今面前に於て善讃譽を現ずるのみ』と。

爾の時魔子の[四七]醜面及び餘の魔子等、悉く信心無く、各是の言を說けり、『假使沙門瞿曇は諸の方術を以て魔王を迴轉せんも、我等共に當に諸の方便を設け、是の如き等の經をして流布するを得ざらしめん。設し流布せしめんも、亦當に護助する有ること少なからしむべし、信受して行ずる者も亦甚だ少なからしめ、[四八]常に多人の爲に薄賤・輕弄せられ、常に邊方に墮して中國に宣傳する所たらしめず、唯諸の威德無き貧窮の衆生をして當に之を聞くを得しめ、常に諸の大威德、豪富の人、信ぜずして誹謗するものたらしむべし』と。

爾の時世尊、虛空藏菩薩に告げて言はく、『賢士、汝は此の諸の魔子の、是の惡言を出すを聞くや不や』と。虛空藏佛に白して言さく、『唯然り、已に聞く』と。佛の言はく、『善男子、是の故に[四九]汝當に此の妙經典を安慰護助すべし、諸の魔神を降伏せんが爲の故に』と。是に於て虛空藏菩薩、卽ち佛に白して言さく、『諸佛世尊は皆已に是の如き等の經を護持したまふ、我等も亦當に安慰受持すべし』と。爾の時虛空藏菩薩、卽ち[五〇]呪を說いて言はく、

【四四】嗤はあざわらふなり、議はそしるなり。

【四五】議論の次に、麗、宋、元、明共に「波旬復」の三字を加ふ。大正本によれば、宮內省本には之を缺くと。今之に從ふ。

【四六】また喬答摩、Gautamaの音寫。釋迦種の姓の名なり。釋尊また此を姓としたまへり。故に沙門瞿曇は釋迦牟尼佛を謂ふなり。

【四七】唐譯は惡面に作る。

【四八】常は麗本當に作るも、今宋等の三本に從ふ。

【四九】唐譯には、汝當下宣二說摧一伏制二止、諸魔眷屬一、明眞言句上と云ひ、更にこの明眞言句によつて、魔衆として悉く無上菩提に安住せしむべきことを述べたまふ。

【五〇】唐譯に、明眞言とす。次の呪、唐譯大に異る。

を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時虛空藏菩薩、佛に白して言さく、『世尊、喩へば究竟して垢無く、究竟して明淨に、究竟して一切煩塵雲霧の干繞する所と爲らざるが如く、菩薩も亦復是の如し。心は虛空の如く、一切法性の常に淸淨なるを知り、亦復〔四〇〕客塵煩惱の干繞する所と爲らず、般若波羅蜜の彼岸に度つて諸の闇冥を離るるを得、諸の法に於て慧の光明を得ば、是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時文殊師利法王子菩薩の佛に白して言さく、『世尊、〔四一〕若し言語有れば則ち滯礙有り、若し滯礙有れば、則ち是れ魔界なり。若し法にして一切言說の表はす所と爲らずんば、乃ち滯礙無し。何をか法の不可言說とは謂ふとならば、所謂第一義なり、其の第一義中には亦文字及び義無し。若し菩薩能く第一義諦を行ぜば、一切法に於て盡く所行無し、是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す。過つ所無きが故に』と。

〔四二〕爾の時世尊、波旬に告げて言はく、『汝は魔界を過ぐるの法を說けるを聞きたりや不や』と。波旬の言はく、『世尊、唯然り、已に聞けり』と。佛の波旬に言はく、『若し是の如き等の法を行ずる者有らば、一切の諸魔之をいかんともする無し。若し諸の魔有り、行人に於て魔事を起さんと欲するも、終に能く辦ぜずして、更に無量の罪聚を成就す。是の故に波旬、汝阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし、是の如き魔界を過ぐる法に於て、應に堅持奉行すべし、汝若し能く是の如くに行ぜば、則ち能く一切諸魔の國界を過ぎん。波旬、喩へば百千年の〔四三〕垢膩も一日の浣にて鮮淨ならしむるが如く、是の如く百千劫中所集の諸不善業も、佛法力を以ての故に、善く順じて思惟せば、一日一時に於て盡く能く消滅せん。波旬、乾草の積の大さ須彌の如くなる有らんも、少火を以て中に投ずるに速に能く燒盡せんが如し。是の如く少慧力を以ての故に、能く無量の諸闇冥の聚を除滅せん。何を以ての故に、波旬、慧明は勇猛なるが故に、無明は劣弱なるが故に』と。

【四〇】心の本性は常なるも、煩惱外より之を汚すが故に客塵といふ。干はおかすなり、繞はめぐらし、まつはるなり。
【四一】唐譯の說相、やゝ異る。
【四二】以下の二節唐譯全く異る。
【四三】膩はあぶらなり。

其の便を得。世尊、若し菩薩有り、諸法の中に於て最も自在を得、自然に開悟せば、諸佛の授記する所と爲り、菩提の法に於て終に退轉せず。是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時山相擊[三二]王菩薩、佛に白して言さく『世尊、若し心に缺漏有れば則ち是れ魔界なり、若し菩薩にして戒に[三三]缺漏無く心に缺漏無く、一切の諸空法の行を成就せば、是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時喜見菩薩、佛に白して言さく『世尊、若し佛を見ず法を聞かざる有れば、魔其の便を得。若し菩薩有り、常に諸佛を見るに色像に著せず、常に諸の法を聽いて文字に著せざれば、[三四]法を見るを以ての故に佛を見ると爲し、言說無きを以ての故に能く諸の法を聽く。是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時帝網菩薩、佛に白して言さく『世尊、[三五]若し恃有り動有れば則ち是れ魔界なり。若し菩薩、善く精進に[三六]順じ、一切法の究竟を知らば、成就の相無きが故に、不恃・不動なり。是を菩薩能く魔界を過ぐと爲す』と。

爾の時[三七]德明菩薩、佛に白して言さく『世尊、若し[三八]二法を行ずるならば則ち魔は其の便を得。若し菩薩有りて、一切法の法性に同じきを知らば、則ち魔界と法性と異解有るを見ず、法性と魔界と等しきを知る、不二の相を以ての故に。是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時香象菩薩、佛に白して言さく『世尊、若し菩薩有り、[三九]怯弱にして甚深の法を畏れなば、則ち魔其の便を得。若し勇健の菩薩あり、善能く三解脫門に通達せば、甚深の法に於て驚かず畏れず。能く現前に諸法の實性を證知するを以ての故に。是を菩薩能く魔界を過ぐと爲す』と。

爾の時彌勒菩薩、佛に白して言さく『世尊、喩へば大海中の水の、同一鹹味なるが如く、佛法の海中も亦復是の如く、同一法味なり、所謂解脫味・離欲味なり。若し菩薩善く一味の法を解せば、是

【三二】王、麗本は音に作るも、宋等の三本王に作り、唐譯また之に同じ、故に王と爲す。この所說も唐譯やゝ異る。

【三三】戒は堤防の如し、以て比丘の過を防ぐ。依て戒を守らざるを缺といひ、戒を守らざるにより過失を外に漏すを漏といふ。

【三四】唐譯には於二一切法一、都無二所見一、是眞見佛。見レ法者、於二一切法一、離二於作意一、不レ見二文字一、不レ生二貪著一、是眞見レ法と。

【三五】唐譯に起レ念思惟、名爲二魔業一。菩薩於二彼因緣一、若有二動念一思惟、不如理作意、皆不レ應レ作。若不動不念、不レ起二思惟一、不レ生二於觸一則超二魔境一と。

【三六】麗本は善相順精進とするも、三本相の字を缺く、今之に從ふ。

【三七】唐譯に功德王光明菩薩とす。

【三八】同に若有二對治一、則爲二魔業一、若無二對治一、則爲二法界一云云とす。

【三九】法、麗本は性に作る、今宋等の三本に從ふ。

爾の時[19]寶德菩薩、佛に白して言さく、『世尊、[20]樔窟に依倚する有らば、是を魔界と爲し、若し菩薩有りて、樔窟に依らず、一切法は相の得べき無しと知り、[21]則ち能く諸衆生の爲に、樔窟に倚るを斷ずるの法を說かば、是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時寶手菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若し我と我所とを取る有らば、是を魔界と爲し、若し菩薩有りて、我と我所とを取らざれば則ち諍競無く、諍競無きを以ての故に、[22]則ち心の行無し、況んや當に魔界有るべきや。是を菩薩は能く諸の魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時[23]無諍勇菩薩、佛に白して言さく、『世尊、[24]觸有り離有らば則ち諍訟有り、諍訟有らば魔その便を得。[25]若し觸無く離無ければ自ら諍訟せず、亦他をして諍訟せしめず、無我を得るを以ての故に、惱行無ければ、能く魔界を過ぐ』と。

爾の時[26]寶思菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若し妄想分別有らば則ち是れ煩惱、及び煩惱の有る處は則ち是れ魔界なり。若し菩薩有つて、一切の諸法は相貌無きを知らば、諸の煩惱に於て則ち妄想無く、若しは內・若しは外も亦別知せず、一切の妄想分別を去離するが故に。是を菩薩は能く魔界を過ぐと爲す』と。

爾の時[27]樂作菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若し[28]樂・不樂有る處には則ち憎有り愛有り、若し憎有り愛有らば則ち是れ魔界なり。若し菩薩有り、憎愛を去離して平等に行ぜば、諸法の中に於て則ち二の想無く、不可思議界に入るを得、是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時[29]離諍菩薩、佛に白して言さく、『世尊、魔界は我に由つて起る、若し菩薩能く我を知らば、無我忍を得、卽ち我の淨を知る。我の淨を知るが故に、一切法の淨を知り[30]一切法の淨を知るが故に諸法の性淨なること、虛空の如くなるを知る。是を菩薩は能く魔界を過ぐとは爲す』と。

爾の時[31]法自在菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若し煩惱法に順じて愛の所使と爲らば、魔則ち

【一九】同に寶吉祥とす。
【二〇】同に心緣慮者、爲二魔境界一と。
【二一】同に則獲二無阿賴耶一、彼何有二魔之所爲作一とす。
【二二】同に與一與二、不共心俱、とす。
【二三】唐譯に寶勇とす。
【二四】觸と離とは、唐譯に空・有とす。
【二五】同に若不レ隨二空・有一、隨二順相識一、而無レ所二轉住一、無二相際一、則超二魔境一と。
【二六】同に寶思惟とす。
【二七】唐譯に寶藏菩薩とす。
【二八】樂と不樂は、唐譯に染と不染とす。染は染著の謂なり。
【二九】唐譯に離寶とす。
【三〇】同によれば、我の淨と一切法の淨との間に「煩惱の清淨」を入る。
【三一】唐譯に法王菩薩とす。この菩薩の所說、唐譯全く異る、就て見るべし。

疑と[一二]猶豫とを生ずるを以ての故なり』と。

爾の時魔波旬、自ら過有るを見て憂愁惶恐し、前んで佛足を禮し、一面に在つて立てり。時に虛空藏菩薩は魔波旬に問ひて言ひけらく、『汝は何を以て憂愁・悵悸・戰慄・悚息し、狀[一三]失志の人の如くにして、一面に在つて立てるや』。魔波旬答へて言はく、『善男子、我れ如來より、是の如き等の畏るべき事を說きたまへるを聞く、是の故に以て憂愁恐怖を爲す、當に何の趣にか墮し、誰か當に我を救ふべき。我れ如來所說の法・律の力に於て、數無量の諸[一四]留難の事を作せり、是の故に憂ふのみ』と。虛空藏の言はく、『波旬、佛法の中には出罪の法有り、汝世尊の所に來至すべし、誠心もて、作す所の諸惡を懺悔し、更に復作す莫るべし。若し能く是の如くせば善利を獲べし、空過せずと爲す』。

爾の時天魔波旬、卽ち前んで[一五]五體を地に投じ、世尊の足下を禮し、如來を仰視して流淚涕泣し、佛に白して言さく、『世尊、我れ今誠心もて懺悔しまつる、昔より以來、如來所說の法・律中に於て、數無量の諸留難の事をば作せり、唯願はくは世尊、大悲心を起したまへ、慈愍を以ての故に願はくは懺悔を受けたまはんを』と。佛の言はく、『善哉・善哉、波旬、汝乃ち能く自ら所作の諸惡を見たり。上善哉と爲す、能く是の如く過罪を悔ひん者は、佛法中に於て則ち如來の法藏を弘廣すと爲す。諸佛も亦其の人の悔過を受けたまふ、是の故に汝今更に復作す莫れ』と。

爾の時世尊、衆の菩薩に告げて言はく、『諸の賢士よ、汝等今魔界を過ぐる行法を說け、憐愍を魔波旬に生ぜんが爲の故に』と。爾の時衆の中に一菩薩有り、[一六]金山王と名く、衆中に在つて坐し、卽ち佛に白して言さく、『世尊、[一七]若し內界を防護する者有らば、則ち未だ魔界を過ぎずと爲す。若し復菩薩有りて、一切の諸界は佛界に同じと見、[一八]此の佛界は卽ち是れ非界なるを知らば、是を菩薩能く魔界を過ぐとは爲す』と。

【一二】躊躇の謂。

【一三】失神の謂。

【一四】人の善事を留止し、修行の障難をなすをいふ。

【一五】また五輪著地ともいふ、兩肘、兩膝、頂を地に着けて禮すればなり。最敬の禮たり。

【一六】唐譯に山王とのみ云ふ。

【一七】同に若有レ求レ離ニ魔之境界一、是墮ニ魔界一とあり。こゝには相對差別の見に囚はれたるを指す。

【一八】同に入ニ佛境界一者、尙不レ見レ有ニ佛之境界一、況餘界と。

せんと欲する時、多く憍慢の衆生あり、彼の諸衆生は、我が所說の文字に著して、方便なるを知らざるが故に、各各諍競を生じ、法を思惟することを捨し、捨し已つて正しく行ずるところは、利養・名譽・衣服・飮食の爲なり。自ら纒縛[六]の故に、樂んで世俗の種種の諸事及び世典・文辭を論じて、第一實義[七]を論ぜず、佛の無上道を翫習することを樂はず、反つて他人に向ひ、是の如き等の眞實深妙の經典を譏論し、則ち諸佛を誹謗して、無量の大苦惱聚を積集し、魔神・諸天は彼の人を佐助す。利養・恭敬及び名聞の爲の故に、重ねて放逸・憿慢を增す。彼の諸人等、憿慢を以ての故に、若し持戒賢行の比丘有り、此の經典を受持・讀誦するを見なば、輕慢・憎嫉して橫に謗毀を生ぜん。彼の諸愚人は則ち現世に禁戒を破犯せるが爲に、其の中に或は不活を畏るる者、或は人に慚耻して假に袈裟[八]を被る者有り、或は戒を捨てて俗に還附する者有らん。是の如きの人、身壞命終せば、阿鼻地獄[九]に墮して諸の苦報を受けん』と。

佛復波旬に告げたまはく『未來世中に、若し菩薩[一〇]乘を求むる衆生有らんに、諸の因緣に著して善根微淺なるか、または新に道意[一一]を發して、但だ文字に著し義を了する能はざるがために、是の如き等の甚深の經典をば、受持し・讀誦し・人の爲に說く時、則ち他人の爲に輕賤・陵蔑せらるるを以ての故に、便ち是の如き等の甚深の經典を捨て、聲聞・辟支佛相應の經典を讀誦し、利養・名譽・種種の所須の爲に纒縛せらるるが故に、反つて是の如き眞實甚深の經典を誹謗毀呰し、又復此の經典を受持讀誦せん者を輕賤せん、乃至眼を以て之を觀るを欲せず。常に卑行を樂み菩薩大乘の法を退失せん、所謂淳至心及び深心を退失せん。魔神・諸天は是の如き等の人の便を得るが故に、勸めて方便を作して其の心を壞亂し、乃至是の如き等の經を聞かざらしめん。設し聞くに當つては、大誹謗を生じ信心有ること無けん。此の人亦復無量の罪聚を積集し、破法の重業を成就し、永く三寶を離れて、佛を見・法を聞き及び僧を供養するを得じ。所以は何ん。波旬、如來所說の法と律との中に於て、

【六】 有情を纒縛して三界の獄につなぐもの、卽ち一切煩惱の結をいふ。

【七】 世俗諦に對する第一義諦をいふ。諦とは眞實の道理なり、此の道理は諸法中に於て第一なれば第一義といひ、眞實なるが故にまた眞俗といひ、殊勝の妙義なれば、勝義諦ともいふ。

【八】 梵に(Kasāya)、不正・壞・染など譯す。比丘の法衣に大中小の三あり、共に、靑・黃・赤・白・黑の五種の正色(卽ち單色)を避けて、他の雜色(混合色)を用ふべき制なるを以て、その色に依つて、是を袈裟と名く。

【九】 梵に(Avici)、八大地獄の一、無間と譯す、苦を受くること間斷なき義。最極の人之に墮すと云はる。

【一〇】 梵に(Yāna)、行法に名く。乘は乘載の義。行人を乘せて其の果地に至らしむる意なり。

【一一】 菩提道を修せんとするの意。

卷の第十八

虛空藏菩薩品　第八之五

[一]此の偈を說き已れる時、魔波旬、[二]四種の兵を嚴じて佛所に來詣し、到り已つて長者の形を化作し、前んで佛足を禮し、一面に在つて立ち、佛に向つて言はく、『希有なり世尊、此の諸大士は、能く是の如き不可思議なる種々の神變を成就し、又能く不可思議莊嚴の事を示現することや。世尊、未來世に幾所の衆生有り、此の不可思議神變を聞いて開悟を得、決定して疑はざる』と。

佛魔波旬に告げて言はく、『未來世中に、衆生有ること少し、若しは一・若しは二ならん。此の不可思議神變の經典を聞き、信解を得ん者少し。波旬、喩へば一毛を析いて百分と爲し、その一分毛を以つて、大海中より、一滴の水を取らんが如し。汝の意に於て云何。取る者多きや、在る者多きや』波旬の言はく『世尊、取る者甚だ少く、在る者甚だ多し』。佛復波旬に告げて言はく、『海中より取る所の水、甚だ少きが如く、衆生の是の不可思議神變の經典を聞き、能く信解せん者甚だ少きこと、亦復是の如くなり。大海中の水の、在る者甚だ多きが如く、不可思議神變の經典を信解せざる者の多きこと、亦是の如くなり』と。

[三]佛復波旬に告げたまはく、『若し一人有り、恒河沙等の劫に於て、日日に以て三千大千世界を滿たし、中に滿てる珍寶を、持用て布施せんも、善男子・善女人の、是の不可思議神變の經典を聞き、能く信解せんもの、其の福甚だ多きに如かじ。所以は何んとならば、波旬、若し是の經典を信解せん者有らば、則ち知る、其の人は釋迦牟尼如來に親從し、是の經典を聞いて信解し、疑無かりしを。何を以ての故に。波旬、若し未だ善根を種えざる衆生は、此を聞くも[四]世の信じ難しとする所の經典となさん。能く信解する者は、是の處有ること無ければなり。波旬、我れ[五]般涅槃の後、法の滅

【一】唐譯卷第七の半なり。
【二】象兵・馬兵・車兵・步兵の四種。
【三】以下四〇〇頁の、魔界を過ぐる行法の段に至るまでの間、唐譯の說相全く異る。
【四】原文に聞此世所難信經典。
【五】Parinirvāṇa の音寫、略して涅槃、泥洹などいひ、寂滅・滅度・圓寂など譯す。

と亦是の如し。風の如く無礙に、山のごとく不動、淨きこと虚空の如く、照らすこと日の如し。
佛子は光を放つて甘露を雨らす、是の故に我れ佛及び子を禮しまつる。大千の海水は尙ほ量るべし、十方の虚空も猶ほ涉るべし、諸衆生の心も尙ほ同じくすべきも、世尊の功德は盡すべからず』
と。

大方等大集經卷第十七

虚空藏菩薩品第八之四

百二十八法の爲に攝せらると爲す』」

爾の時寶手菩薩、虛空藏菩薩より是の如き等を分別するの法門を聞き已り、歡喜踊躍して未曾有を得、卽ち虛空藏菩薩に白して言はく『希有なり大士、汝乃ち能く斯の如き捷疾の辯才及び巧分別辯を成就し、事事の所問を盡く能く開解せり。我れ今汝所說の義趣及び文字を解する如くんば、是の如きの方便を以て、若しは一劫、若しは減の一劫のあひだ、說くも盡すべからず、辯も亦斷無けん』と。爾の時佛、寶手菩薩に告げて言はく『善男子、是の如く是の如し、汝所言の如し。此の虛空藏菩薩は、若し一句の義を演ぶるに、若しは一劫、若しは減の一劫なるも、說盡すべからず、說くに亦斷無けん。虛空藏菩薩は是の如き無量無邊不可思議無盡の辯才有ればなり』と。

爾の時寶手菩薩、手を以て遍く妙寶莊嚴堂を覆ひ、其の手中に無量の花香・瓔珞・末香・塗香・衣服・嚴身の具・及び諸の幢幡・妙蓋を出し、是の如き等の上妙の供具を雨らし、如來及び虛空藏を供養したるに、上空中に於て、百千の音樂は鼓せざるに自ら鳴り、諸音の中に於て諸の妙偈を出し、以て如來を讚ふらく、

『德を持し德を開いて百福を具し、上意もて調伏し念不動なり、沙門の賢士は天人を降し、十力の佛子は十方に現はる。大豨威德の自在尊は、有畏を降伏して癡闇を除き、能く漂流の諸天人を度し、惡趣の門を閉ぢて清涼ならしめたまへり。聖尊巧說の音は微妙なり、無錯無謬にして音は清淨なり、三界に等しき無く三垢無し、十力の所說は衆に樂を施したまふ。意念堅固にして寂靜を樂み、最勝の十力もて彼の力を降し、已に諂曲を捨てて甘露を得、塵累有ること無く衆歸仰しまつる。世尊は衆に處して動轉したまはず、而も十方の無量の衆を化し、衆生の行に隨つて能く隨順したまふ、佛子も亦樂うて此の行を修す。日の翳無ければ能く普く照らし、能く衆華をして開敷するを得しむるが如く、佛智慧の光照長流して、諸子の悟を得るこ

【一二】現、麗本に叱に作る、今宋等の三本に從ふ。
【一三】三毒なり、卽ち貪瞋・癡。

の爲に攝せられ、在屏處不行惡は自證知及び諸神天證知の爲に攝せられ、不慠慢は不自歎譽・不譏彼人の爲に攝せられ、知自下は不虛稱及び不顯己德の爲に攝せられ、身端は不行三不善業及び不犯禁戒の爲に攝せられ、心直は常省己過及び不說彼短の爲に攝せられ、具靜定は寂靜心及び滅煩惱の爲に攝せられ、修智慧は選擇諸法及び知無我の爲に攝せられ、不奄猾は常行益事及び順忍の爲に攝せられ、不兩舌は自足眷屬及び和合離別者の爲に攝せられ、不捨菩提心は爲衆生及び、爲佛智の爲に攝せられ、念道場は欲壞於魔衆及び成正覺の爲に攝せられ、捨魔事は正觀及び不捨菩提志の爲に攝せられ、佛神力持は堅固行及び善淳至の爲に攝せられ、不輕躁は堅護諸根及び不捨境界の爲に攝せられ、不掉亂は觀苦及び觀空の爲に攝せられ、如石山は不高及び不下の爲に攝せられ、不可移轉は斷愛及び除恚の爲に攝せられ、所作善業は智所作業及び捨魔事の爲に攝せられ、無熱惱は淨戒及び淨定の爲に攝せられ、無虛誑は誠實語及び不望果報の爲に攝せられ、不捨歸趣は成就賢士業及び不行怯弱の爲に攝せられ、離邊見は觀無生及び不敗壞觀の爲に攝せられ、順觀甚深因緣は觀因及び觀緣の爲に攝せられ、善巧は第一無諍競及び不慠慢の爲に攝せられ、方便は離方便及び無生方便の爲に攝せられ、不懈慢は身力及び心力の爲に攝せられ、勇猛は勝進心及び害怨敵の爲に攝せられ、大欲は不求利養及び不愛身命の爲に攝せられ、增進は無愚冥及び不退還の爲に攝せられ、見如來は修念佛及び淸淨信の爲に攝せられ、聞法は樂至講所及び樂請問の爲に攝せられ、捨諸地過患は不散亂行及び捨離惡知識の爲に攝せられ、得諸地功德は方便迴向及び不捨本行の爲に攝せられ、無憎嫉は能施一切及び稱意而捨の爲に攝せられ、信樂は無垢行及び不濁心の爲に攝せられ、敬順は知世宜及び隨順行の爲に攝せられ、不逆敎勅は捨除不淨及び淨正行の爲に攝せられ、無常觀は動轉觀及び敗壞觀の爲に攝せられ、無我觀は不得作者及び不得受者の爲に攝せられ、修無相は不緣境界及び除覺所得の爲に攝せられ、不怙涅槃は除去無明及び斷愛著の爲に攝せらる。善男子、是を六十四法は

られ、正住意は不輕躁及び不掉亂の爲に攝せられ、不悼動は[九八]如石山及び不可移轉の爲に攝せられ、如說は所作の善業及び[九九]無熱惱の爲に攝せられ、能行は[一〇〇]無虛誑及び不捨歸趣の爲に攝せられ、正發は[一〇一]離邊見及び順觀甚深因緣の爲に攝せられ、正進は[一〇二]善巧及び方便の爲に攝せられ、必勝は[一〇三]不懈慢及び勇猛の爲に攝せられ、不退は[一〇四]大欲及び增進の爲に攝せられ、樂勝は[一〇五]見如來及び聞法の爲に攝せられ、[一〇六]上求は捨諸地過患及び得諸地功德の爲に攝せられ、親近善知識は[一〇七]無憎嫉及び信樂の爲に攝せられ、悅可善知識は[一〇八]敬順及び不逆教勅の爲に攝せられ、智慧は[一〇九]無常觀及び無我觀の爲に攝せられ、善觀は[一一〇]修無相及び不怙涅槃の爲に攝せらる。善男子、是の三十二法は六十四法の爲に攝せらる』と。

寶手復問ふ『此の六十四法は、復幾の法の爲に攝せらるるや』。虛空藏答へて言はく『善男子、此の六十四法は[一一一]百二十八法の爲に攝せらる。何等をか百二十八法とは爲す。所謂護我は斷一切惡及び成就一切善根の爲に攝せられ、護彼は忍辱及び柔和の爲に攝せられ、無別異は猶如水心及び如風心の爲に攝せられ、一味は法界觀及び如如觀の爲に攝せられ、如夢觀は無移轉觀及び無眞實觀の爲に攝せられ、如幻は適性示現及び無自性觀の爲に攝せられ、諸神通は了義及び了智の爲に攝せられ、方便は大悲及び般若波羅蜜の爲に攝せられ、羞恥は不覆藏所犯及び悔過の爲に攝せられ、信有業報は不放逸及び畏惡趣の爲に攝せられ、少欲は淨處有齊限及び離宿穢の爲に攝せられ、知足は易稱及び易養の爲に攝せられ、無發惱は究竟及び究竟邊際の爲に攝せられ、無散失は得忍及び不退轉地の爲に攝せられ、捨吾我は不計我身及び壽命の爲に攝せられ、離我所は無貪及び無愚癡の爲に攝せられ、求法は智及び斷の爲に攝せられ、欲法は不著五欲及び離煩惱の爲に攝せられ、敬重は起世尊想及び療救想の爲に攝せられ、無疲惓は身輕及び翹勤省眠の爲に攝せられ、內心斷除は身念處及び受念處の爲に攝せられ、外不行は心念處及び法念處の爲に攝せられ、信樂佛智は深敬重及び淨信

法語とす。
【九三】同に不動以身不曲及心不曲所攝とす。
【九四】同に除三垢及び修三脫門とす。
【九五】同に無爲獷及び無離間語とす。
【九六】同に不缺要期、以觀菩提心及順菩提場所攝とす。
【九七】同に決定拔濟、以覺悟魔業、及諸佛加持所攝とす。
【九八】同に心如山とす。
【九九】同に不追悔とす。
【一〇〇】同に實性及び眞性とす。
【一〇一】同に順緣生及び離斷常とす。
【一〇二】同に加行及び如理とす。
【一〇三】同に精進とす。
【一〇四】同に正斷及び不懈慢とす。
【一〇五】同に從多聞、以善友及び求法所攝とす。
【一〇六】同に如理作意、以奢摩他資糧、及毘鉢舍那資糧所攝とす。
【一〇七】同に承順及び恭敬とす。
【一〇八】身輕利及び心輕利とす。
【一〇九】涅槃及離欲とす。
【一一〇】因不壞、果不壞とす。
【一一一】以下の百二十八法も、上に示せる如く、唐譯との間に、可成りの相違あるも、煩を恐れて略す。

す』。寶手の言はく『善男子、此の十六法は復幾の法の爲に攝せらるるや』。虛空藏の言はく『善男子、此の十六法は三十二法の爲に攝せらる。何等か三十二なる。所謂大慈は無礙心及び於一切衆生[七四]等心の爲に攝せられ、大悲は無厭惓及び勤給足一切衆生の爲に攝せられ、身調は[七五]不觸撓及び不加害の爲に攝せられ、心調は[七六]定及び寂靜の爲に攝せられ、忍辱は[七七]受正教及び順行の爲に攝せられ、柔和は慚及び愧の爲に攝せられ、無憍慢は[七八]謙卑及び禮敬の爲に攝せられ、[七九]無滯礙は無垢穢及び不强梁の爲に攝せられ、堅固は[八〇]不犯所行及び成就本願の爲に攝せられ、力は[八一]住正意及び不掉動の爲に攝せられ、如所作は[八二]如說及び能行の爲に攝せられ、正行は[八三]正發及び正進の爲に攝せられ、始發は[八四]必勝及び不退の爲に攝せられ、[八五]不捨は樂勝及び上求の爲に攝せられ、求多聞は親近善知識及び[八六]悅可善知識の爲に攝せられ、思惟所聞は[八七]智慧及び善觀の爲に攝せらる。善男子、是を十六法は三十二法の爲に攝せらると爲す』。

寶手の言はく『善男子、此の三十二法は、復幾の法の爲に攝せらるる』。虛空藏答へて言はく『善男子、是の三十二法は六十四法の爲に攝せらる。何等か六十四法なる。所謂無礙心は護我及び護彼の爲に攝せられ、於一切衆生等心は無別異及び一味の爲に攝せられ、無厭惓は如夢觀及び知生死如幻の爲に攝せられ、勤給足一切衆生は諸神通及び方便の爲に攝せられ、[八八]不觸撓は羞恥及び信有業報の爲に攝せられ、不加害は少欲及び知足の爲に攝せられ、[八九]定は無發惱及び無散失の爲に攝せられ、寂靜は捨吾我及び離我所の爲に攝せられ、受正教は求法及び欲法の爲に攝せられ、順行は敬重及び平等無疲惓の爲に攝せられ、慚は[九〇]內心斷除及び外不行の爲に攝せられ、愧は[九一]信樂佛智及び在屛處不行惡の爲に攝せられ、謙卑は[九二]不憿慢及び知自下の爲に攝せられ、禮敬は[九三]身端と心直との爲に攝せられ、無垢穢は[九四]具寂靜及び修智慧の爲に攝せられ、[九五]不强梁は不角觸及び不兩舌の爲に攝せられ、[九六]不犯所行は不菩提心及び念道場の爲に攝せられ、[九七]成就本願は捨魔事と及び佛神力持の爲に攝せ

【七四】平等心なり。
【七五】唐譯に自財知足とす。
【七六】同に調柔とす。
【七七】同に慚・愧は寂靜(卽ち本經の忍辱)の所攝、柔和は善語及び安樂住の所攝とす。
【七八】同に無垢及び無傷語とす。
【七九】同に無我以謙下及不同所攝とす。
【八〇】同に不缺要期及び決定拔濟とす。
【八一】同に善住慧及び不動慧とす。
【八二】同に如說性及び能作とす。
【八三】同に正加行及び精進とす。
【八四】唐譯に超勝とす。
【八五】同に增勝加行、以從多聞、及如理作意所攝とす。
【八六】同に隨順善知識とす。
【八七】同に正行勇猛及び靜慮觀察とす。
【八八】同に、不害の下に羞恥等を說き次句の少欲・知足を自財知足(本經の不觸撓)の下に說く。
【八九】同に調柔以不躁動、及不欺誑所攝とす。
【九〇】同譯に內觀察及び攝諸根とす。
【九一】同に護外境及び敬有德とす。
【九二】同に謙下以不貢高及如

復昔德本を植えし五千の梵天有つて、無生法忍を得たりき。[六三]

[六四]爾の時衆中に一菩薩有り、名けて寶手と曰へるが、虛空藏菩薩に問ひて言はく『希有なり、善男子、一切諸法及び如來の法は、甚深にして測り難く不可思議なり。又善男子、何をか一切佛法を安ずる根本とは謂ふ』。虛空藏菩薩、寶手に答へて言はく『善男子、菩提心こそ是れ一切佛法を安ずる根本たり。一切法は菩提心に住するが故に便ち增長を得ればなり』。寶手菩薩の言はく『善男子、菩提心は何の法に攝せられ、忘失せずして能く速に[六五]不退轉地に至るを得るや』。虛空藏の言はく『善男子、菩提心は二法の爲に攝せられて、忘失せずして速に不退轉地に至るを得るなり。何等をか二と爲す、所謂[六六]淳至と畢竟、是をば二法の爲に攝せられて忘失せず、能く速に不退轉地に至るを得とは名く』。寶手の言はく『善男子、此の二は幾の法の爲に攝せらるる』。虛空藏の言はく『此の二法は四法の爲に攝せらる、何等をか四と爲す。所謂淳至は不虛詐・不諂曲の爲に攝せられ、畢竟は[六七]無我及び上進の爲に攝せらる。此をば、二法は四法の爲に攝せらると爲す』。寶手の言はく『善男子、此の四法は幾の法の爲に攝せらるるや』。虛空藏の言はく『善男子、此の四法は八法の爲に攝せらる。何等をか八と爲す、所謂不虛詐は、[六八]不猶豫及び體眞淨の爲に攝せられ、不諂曲は正直及び正住の爲に攝せられ、無我は[六九]不退沒及び進の爲に攝せられ、上進は功德資糧及び智資糧の爲に攝せらる。是を四法は、八法の爲に攝せらると爲す』。寶手の言はく『善男子、此の八法は復幾の法の爲に攝せらるるや』。虛空藏の言はく『善男子、是の八法は復十六法の爲に攝せらる。何等か十六なる。所謂不猶豫は大慈及び大悲の爲に攝せられ、體眞淨は[七〇]身調及び心調の爲に攝せられ、正直は[七一]忍辱及び柔和の爲に攝せられ、正住は[七二]無憍慢及び無滯礙の爲に攝せられ、不退沒は堅固及び力の爲に攝せられ、上進は[七三]如所作及び正行の爲に攝せられ、功德資糧は[七三]始發及び究竟不捨の爲に攝せられ、智資糧は求多聞及び思惟所聞の爲に攝せらる。是を八法は十六法の爲に攝せらると爲

【六三】唐譯卷第六終。
【六四】同卷第七首。
【六五】梵に阿惟越致(Avaivartika)、佛道修行の過程に於て、旣に得たる功德を決して退失すること無き地位に至るをいふ。
【六六】唐譯に意樂と增上意樂の二とす。
【六七】同に不雜心及び勝進修行の二とす。
【六八】同に無虛假及び清淨意樂とす。
【六九】同に不退沒心と不退精進とす。
【七〇】同に身と心の清淨とす。
【七一】同に寂靜とす。
【七二】同に無我及び無憍とす。
【七三】同に加行及び增上加行とす。

以は何、虚空性は卽ち是れ色なるが故に。一切佛法も亦是の性に同じ。受・想・行・識は是れ無作句なり、所以は何、無作性は卽ち是れ識なるが故に。一切佛法も亦是の性に同じ。地大は是れ虚空句なり、所以は何、虚空は卽ち是れ地大の故に。一切の佛法も亦是の性に同じ。水大・火大・風大は是れ法界句なり、所以は何、法界の性は卽ち是れ風なるが故に。一切の佛法も亦是の性に同じ。眼は是れ涅槃句なり、所以は何、涅槃の性は卽ち是れ眼なるが故に。一切の佛法も亦是の性に同じ。耳・鼻・舌・身・意は是れ涅槃句なり、所以は何、涅槃の性は卽ち是れ意なるが故に。一切の佛法も亦是の性に同じ。梵天、是を一句總じて一切佛法を攝すと爲す。菩薩は是の如き等の一一の智門に入り、皆一切佛法の、一句に入るを見る。梵天、喩へば大海の能く衆流を呑むが如く、一一の句中に一切佛法を攝すること亦復是の如し。喩へば虚空の、悉く能く一切色像を[六一]包容するが如く、一一の句中に一切佛法を攝すること亦復是の如し。是の如き等の一切佛法の、若しは攝し若しは攝せざるも、若しは說き若しは說かざるも、不增不減なり、究竟して相を離るるが故に。梵天、喩へば算師の、數を數ふるに、[六二]算籌を以て算局の上に布在するに、然も局中に籌無く籌中に局無きが如し、所以は何、究竟して相應せざるが故に、究竟して離るるが故に。是の如く上の一一の句中に於て名數を假るが故に、一切の佛法皆一句に入ると言ふ。而も諸佛の法は名數もて算計すべからず、究竟して相應せざるが故に、究竟して離るるが故なり。梵天、佛法の名數なるが如く、卽ち是の一切法も名數なり、何を以ての故に、一切法卽ち是れ佛法なり、此の法は法に非ず非法に非ず。自性空なるが故に、自性離なるが故に、自性は究竟して無性なるが故に。無性は卽ち是れ虚空なり、虚空の性は一切法性に同じ。此の法性は生相に非ず、滅相に非ず、有處相に非ず、無處相に非ず。是の故に一切法を無相非無相と名くるなり』と。

是の如き一法門を說ける時、彼の梵衆中に、萬二千の梵天有り、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、

【六一】包、麗本に苞に作るも、今宋等の三本に從ふ。

【六二】籌は、竹・木を以て作り、數をかぞふるに用ふ。

は所謂所聞に隨つて行ずるなり、能く正しく是の如き等の行に住ぜば、是を出要と名く。　復次に善根とは佛に値ふて悦可するなり、資糧とは所謂一切の諸波羅蜜と諸の攝法及び助道の方を護るなり、方便とは所謂能く一地より一地に至るなり、智とは所謂無生法忍を得るなり、菩薩能く正しく是の如き等の行に住せば、是を善根・資糧・方便・智の出要を成就すと名くるなり』と。

爾の時、光明莊嚴梵天、佛に白して言さく『希有なり世尊、如來は能く[五八]四句の義を以て一切菩薩の行を總說したまふ。世尊、一切の佛法は應に中に於て求むべし』と。爾の時虛空藏菩薩、梵天に語つて言はく『一句も亦能く總じて一切の佛法を攝す。何をか謂つて一とは爲す、所謂離欲句なり。然る所以は、一切の佛法は離欲に同じきを以てなり、佛法の如く一切の法も亦然り。梵天、是を一句總じて一切佛法を攝すと爲す。復次に梵天、一空句は總じて一切佛法を攝す、一切佛法は空に同じきが故に、佛法の如く一切法も亦然り。梵天、是を一句總じて一切佛法を攝すと爲す。所謂無相句、無願句、無作句、無生句、無起句、如句、法性句、眞際句、離句、滅句、盡句、涅槃句も總じて一切佛法を攝す、一切の佛法は涅槃に同じきを以ての故に。佛法の如く一切法も亦然り。梵天、是を一句總じて一切佛法を攝すと爲す。所以は何、是の如き等の句は皆句に非ざるを以ての故に、一切の佛法も句に非ず、假に名けて句と爲せばなり。　復次に梵天、欲は是れ離欲句なり、所以は何、離欲の性は卽ち是れ欲なるが故に。一切の佛法も亦是の性に同じ。瞋恚は是れ離瞋句なり、所以は何、離瞋恚の性は卽ち是れ瞋恚の故に。愚癡は是れ離愚癡句なり、所以は何、離愚癡の性は卽ち是れ愚癡なるが故に。一切の佛法も亦是の性に同じ。[五九]身見は是れ實際句なり、所以は何、實際性は卽ち是れ身見なり、一切の佛法も亦是の性に同じ。無明は是れ明句なり、所以は何、明性は卽ち是れ無明なるが故に。一切の佛法も亦是の性に同じ。乃至苦惱は是れ離苦惱句なり、所以は何、離苦惱の性は卽ち是れ苦惱なるが故に。一切の佛法も亦是の性に同じ。色は是れ[六〇]虛空句なり、所

【五八】唐譯に曰、三句の義を以てすと。

【五九】また有身見ともいひ、我見と我所見とを云ふなり。唐譯には身見と無身見句とを對せしむ。

【六〇】唐譯は無色句を以て之に代ふ。

の如く是の如し、汝所言の如し、諸の菩薩は已に善根・資糧及び出要の智・方便を成就するが故に、能く是の如き不可思議功徳莊嚴の事を現じて、憶想分別無く、亦分別せざる無し』と。

[五六]梵天佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩は[五七]善根・資糧及び出要の智・方便を集する』と。佛光明莊嚴梵天に告げて言はく『善根に三種有り、何等か三と爲す、所謂無貪善根、無恚善根、無癡善根、是を善根と名く。資糧とは、所謂一切の所有を捨して慈・觀の諸法を修するなり、是を資糧と名く。方便とは、所謂凡夫地を去離し、聲聞・辟支佛地を願樂せず、諸の菩薩地に進入する、是を方便と名く。智とは所謂不善法を捨することを知るの智、善法を集すること知るの智、迴向菩提を知るの智、是を智と名く。菩薩能く是の如き等の正行に住せば、是を出要と名く。 復次に善根とは阿耨多羅三藐三菩提心を發すなり、資糧とは所謂一切善法を求むるなり、方便とは所謂已作未作の善根を終に廢忘せざるなり、智とは所謂心の幻化の如くなるを知るなり、是の如き等の法現前に了知せば是を出要と名く。 復次に善根とは所謂淳至なり、資糧とは所謂發動なり、方便とは所謂深心なり、智とは所謂無持無動なり、能く是の如き等の法を行ぜば、是を出要と名く。 復次に善根とは所謂善法を欲するなり、資糧とは所謂勝進なり、方便とは所謂不放逸に安住するなり、智とは所謂一切の依著を捨するなり。能く是の如き等の行を行ぜば、是を出要と名く。 復次に善根とは所謂正信なり、資糧とは所謂本願を捨せざるなり、方便とは所謂念・定を捨せざるなり、智とは所謂慧なり、能く正しく是の如き等の行に住せば、是を善根・資糧・智・方便の出要を成就すと名く。 復次に善根とは所謂諸善知識を悅可するなり、資糧とは所謂所須を給待し、恭敬・供養・尊重・利益するなり、方便とは所謂善知識に於て世尊の想を生ずるなり、智とは所謂時・非時を知つて法を問ふなり、能く正しく是の如き等の行に住せば、是を出要と名く。 復次に善根とは所謂善く順じて法を聽くなり、資糧とは所謂受持して廢忘せざるなり、方便とは所謂聞に隨つて能く觀ずるなり、智と

【五六】この段、唐譯の文と並行せず。
【五七】唐譯には善根・福・智を說き方便を說かず。

に白して言さく『世尊、何の因緣を以て、衣を遣して彼に至らしむる』と。佛の言はく『此の衣を以て彼の世界に於て佛事を施作せんと欲すればなり。虛空藏菩薩の此に於ける所說は、[五二]虛空等の如き三昧印法門なり、此の三昧は彼の衣中に於て當に其の[五三]法音を演ぶべし。彼の世界の無量阿僧祇の諸菩薩は、此の法を聞くが故に當に無生法忍を得べし。諸比丘當に知るべし、菩薩は是の如き種種の方便を作して衆生を利益す』と。此の法を說きたまへる時、上虛空中に於て無量の[五四]金色華を雨らし、此の諸花を以て遍く妙寶莊嚴堂を覆ひ、諸の花中に是の如き法音を出せり『其れ衆生有つて、此の虛空藏所說の法を信じ、善く順じて其の義を思惟分別せば、皆當に不退轉印の爲に印せられ、畢定して無上の道場に至るを得べし』と。

爾の時阿難、佛に白して言さく『世尊、是れ何の瑞應なれば乃ち此の花を雨らし、是の如き妙音を出して衆生をば安慰する』と。佛阿難に告げたまはく『梵天有り名けて[五五]光明莊嚴と曰へるが、梵天上より六十八百千の梵衆と倶に此に來詣せんと欲すればなり』と。如來此の語を說き已りたまへる時、諸の梵衆は忽然として妙寶莊嚴堂上に來至し、佛足を頂禮し右遶七匝し、遶ること七匝し已つて一面に在つて立ち、合掌向佛して佛に白して言さく『希有なり世尊、虛空藏菩薩は不可思議なり、戒聚清淨にして善く諸定を修し、善く大智慧を分別し、善能く諸大神通に遊戲し、善能く大弘誓の願を滿足し、善能く大權方便を成就し、能く身口及び意を莊嚴し、善能く諸法中に於て大自在力を成就したり。此の虛空藏菩薩は、身口及び意都て所作無く、分別憶想有ること無きも、而も能く此の不思議の莊嚴神變を現じ、又能く無量百千の法門を顯現し、亦能く百千の諸三昧門に出入するは、昔より以來常に樂んで諸善法を修習成就したるが故なり。世尊、諸の菩薩は往昔所修の善根に應ぜず、其の因を知らず、諸の善根を集めて亦應に厭くこと無し。所以は何、是れ往昔所種の善根の果報に因るが故に、能く是の如き不可思議の神變を現ず』と。佛梵天に告げたまはく『是

【五二】麗本に如虛空藏等とあるも、今三本に從ふ。
【五三】麗本に義音とす、今三本に從ふ。
【五四】唐譯には日月光華、皆如二火色一昔所レ未レ見といふ。
【五五】同に光莊嚴といふ。

現し、終つて[四五]應化の身を隱さず。是の如き行者は皆之を名けて身行を證すと爲すべし』。阿難問ふて言はく『善男子、[四六]汝法に於て頗證する有りや』。虛空藏答へて言はく『大德阿難、[四七]我は法が身を離れ、身が法を離るるを見ず』。阿難の言はく『善男子、汝若し身證したらんには、汝阿羅漢果を得たるや』。虛空藏の言はく『大德、[四八]得・不得無し、無所得の故に、一切法に於て惱行無きが故に、貪欲・瞋恚・愚癡を離れたるが故に、是を阿羅漢と謂ふ』。阿難の言はく『善男子、汝何の時にか當に[四九]般涅槃すべき』。虛空藏の言はく『大德、阿羅漢には般涅槃無し。一切法究竟して是れ涅槃なるを知れば亦涅槃の相無し、凡愚の人は是の如き分別・戲論有りて行じ、「此は是れ生死・此は是れ涅槃なり」と言ふ。阿羅漢は是の戲論無し』。大德阿難の言はく『善男子、我れ汝所說の義を解するが如くんば、夫れ菩薩は應に是れ凡夫なりと言ふべからず、應に[五〇]是れ學なりと言ふべからず、應に是れ無學なりと言ふべからず、二相を去離するが故に』。虛空藏の言はく『大德阿難、善い哉善い哉、凡夫に非ず・學に非ず・無學に非ざるを以ての故に、在在處處に皆能く示現し、一切處に於て亦取著せざるなり』と。

爾の時、五百の大聲聞、各己身所著の[五一]欝多羅僧を以て虛空藏に奉上し、奉上し已つて一時同聲に、是の如き言――其れ衆生有つて深心にして阿耨多羅三藐三菩提を發せば、快く善利を得、是の如き大智の法藏中にあつて、其の外に墮せず、――を說くに、所上の衣は卽便現ぜず。彼の諸聲聞、虛空藏に問ふて言はく『衣は何處にか至れる』と。虛空藏の言はく、『我が藏中に入りぬ』と。又言はく『如來之を知り給ふ、汝等問ふべし』と。

爾の時、諸の聲聞は佛に白して言さく『世尊、衣は何所にか至れる』と。佛諸比丘に告げたまはく『東方に此を去る無量阿僧祇の諸佛刹土を過ぎ、世界有り名けて袈裟幢と曰ひ、其の界に佛有り、號して山王如來と曰ふ。虛空藏は已に此の衣を遣はして彼の世界に至らしむ』と。諸の聲聞卽ち佛

【四五】應は應現、化は變化。衆生の機類と、緣とに應じ、種々に身を變現するを應化身といふ。

【四六】唐譯によれば、前の文につづきて、大士、汝證法身耶と。

【四七】同に如我所解、無身、我身卽法、法卽我身、若法若身、無有二相、故言身證と。

【四八】同に無所得故所得、所以者何、阿羅漢者、善能通達無諍法故云云と。

【四九】Parinirvāṇa の音寫。入寂、圓寂など譯す。常に略して涅槃といふ。

【五〇】有學、卽ち理を究め惑を斷ぜんが爲に、尙ほ學すべきもののある人なり。之に對して、更に修學すべきもののなきを無學といふ。

【五一】麗本に欝多羅縮とするも、今三本に從へり。上に著くる服なり。

別なり、實際及び衆生・壽命・養育人際は無二無別なり、實際及び我見の際は無二無別なり、我見の中に於て實際有ること無し。能く是の如く如實に知れば、則ち二十種の我見有ること無し。所以は何、實際中に一無く多無きを以ての故に、實際と平等と等しく、來無く去無く盡無く滅無し、實際は究竟して空なるが故に。是の故に一切法は是れ無盡門・無盡際なりと言ふ。涅槃は無盡なり、所謂空の故に、無性の故に。涅槃の盡無く不盡無きが如く、一切法も亦復是の如し、是を以ての故に一切法と涅槃と等しと言ふ。諸法は等無く不等無く[三六]儔匹無き故に。喩へば虛空の儔匹有ること無きが如く、一切諸法も亦復是の如し。若し[三七]儔匹有るを見、涅槃有りと言はば、已に涅槃有りと言ふ[が故に]、便ち涅槃を求むるも賢聖と相違す。已に涅槃有りと言ふが故に、便ち此は應に知るべし・此は應に斷ずべし・此は應に證すべし・此は應に修すべし・此は應に生ずべし・此は應に滅すべしと言はん。是の如く行具せざれば、如實に知る能はず、如實に見る能はず、則ち識らず解せず知らず見ず。一切法を識らず解せざるが故に、則ち文字に著し、諸法中に於て妄に諍競を生ず、諍競を生ずれば佛法中に於て則ち愍むべしと爲す。然る所以は、如來說いて「沙門の法は應に諍競すべからず」と言へばなり』。

爾の時、大德阿難、佛に白して言さく『希有なり世尊、此の[三八]賢士の才辯は乃ち能く是の如く、甚深明了にして解し難く測り難し。一切の法に於て他より受けず、身自證したるが如く、能く是の如くに說けり』。虛空藏菩薩即ち阿難に謂つて言はく『大德、[三九]我れ已に自身に證知す、是の故に證知する所の如く、能く是の如くに說く。何を以ての故に、我が身即ち是れ虛空、虛空を以て一切法を證知し、虛空印の印する所と爲る。[四〇]大德阿難、凡そ諸の菩薩、身を修め善く身相を解せば、能く此の身を以て諸の佛事を作し、種種の色像を現じ、而も亦眞の[四一]法身を退せず、亦復[四二]結業の[四三]生身を離れず、又復平等の性を過ぎず、化身を[四四]變現して悉く自在を得、一切の佛國に於て普く能く示

【三六】 たぐひ、ともがらをいふ。

【三七】 麗本訓に作り、宋本疇とす、今元明兩本に從ひ儔とす。

【三八】 三本共に大士に作る。賢士は菩薩の稱なり。

【三九】 唐譯に曰、大德、不レ應ニ說言ニ我自身證一。所以者何。我身即虛空、以ニ身虛空一故、知ニ一切法、悉爲ニ虛空一。

【四〇】 以下、唐譯によれば、右所引に次ぎ、阿難の「身若し空ならば、何の身を以て佛事を作すや」の問に答へて、「以ニ法身一故、法身無レ有ニ遷變一、離虛界等不生不滅、非ニ顚倒一身、得ニ隨意現一、意所成身、而作ニ佛事一」といへり。

【四一】 法とは眞如法性の理、身は積聚の義、依止の義。無色無形なる、眞如法性の理佛を法身といふ。

【四二】 結は惑をいひ、惑に由つて起す善惡の所作を業といふ。

【四三】 衆生濟度の爲、父母に托して胎生する肉身を生身といふ。

【四四】 麗本に現變とす、今宋元明三本に從ふて變現に作る。

故に應に置いて答へざるべし』。寶德問ふて言はく『云何が應に置くべき』。虛空藏の言はく『法性の住するが如く、應に是の如く置くべし』。寶德の言はく『云何が法性の住なる』。虛空藏答へて言はく『虛空性の住するが如く、住するも所住無きなり。法性も亦是の如くに住し、法性の如く衆生性も亦爾り、衆生性の如く一切法も亦爾り、一切法の如く如來も亦是の如くに住す。住して所住無く、住處無きが故に住無く不住無し。是の故に生と言ふを得ず、滅と言ふを得ざるなり』。寶德の言はく『善男子、如來出世の事は甚深甚深なり』。虛空藏答へて言はく『善男子、若し能く如實に緣生の法を解了せば、名けて佛の出世と爲す』と。寶德の言はく『善男子、誰か當に此の說を解すべき』。虛空藏答へて言はく『若し一切法中に於て增減を得ざる者「是を解せん」。

寶德問て言はく『何をか謂つて增と爲すや』。虛空藏答へて言はく『增とは所謂增上の句なり、無の中に於て妄に增長を生ずるを謂ふ。無增上の句とは是れ平等の句なり、無等句なり、無文字句なり、無句・無敎句なり。無敎の中には句無く增上無く、亦心意識無し、是を以ての故に句に非ず。喩へば空中の鳥跡は究竟して無く、無に當つて鳥跡と言ふが如し。一切法中に於て字句有ること無きこと亦復是の如し。句無きを假に名けて句と爲す、跡無きに假に名けて跡と爲すが如し。如來の出世も亦出有ること無きに、假に名けて出と爲すこと、亦復是の如し。是の故に智者は應に取著すべからず、取著無きを以ての故に假に名けて出と爲す、而も常に無出に依る。所以は何、無生は是れ一切諸法の實性なるを以ての故に。無生なれば則ち無所有なり、是の故に一切法は所有の性無しと名く。所有の性無ければ住處有ること無く、住處無きが故に是れ住際無し。一切諸法と及び住際無きとは、卽ち是れ實際なり、實際は卽ち是れ一切の法際なり、是の故に一切法と實際と等しと言ふ。實際と言ふは是れ[三五]三場分斷の際なり、不可壞の際なり、不斷不常の際なり、如實の際なり、三世等際なり。是の如き等の際は一切法際に等しきを以てなり。所以は何、實際及び我際は無二無

【三五】三場とは三世なるべし。

の神力たり』。寶德復問ふらく、『善男子、諸如來の辯は菩薩の心に轉至するを得べきや不や』。虚空藏答へて言はく『しからず』。寶德の言はく『云何が如來の力に由るが故に辯說を得るや』。答へて言はく『善男子、喩へば巧に果樹を種うるに、因緣和合して便ち果實を得、然も樹は卽ち果に非ず、果は樹を離れざるが如し。善男子、如來所說の法は、菩薩此の法中に於て善く順行するが故に、便ち大智明辯を生ず、佛說に因つて得れども亦轉有ること無し』。寶德の言はく『希有なり善男子、因緣生の法は是の如く甚深にして測り難し』。虚空藏の言はく『善男子、一切諸法は究竟して無生なり』。寶德の言はく『善男子、諸法とは因緣より生ずるを謂ふ』。虚空藏の言はく『善男子、生じ已るも生なり、未だ生ぜざるも生なり』。寶德の言はく『善男子、生じ已れば不生なり、未だ生ぜざるも亦不生なり』。虚空藏の言はく『善男子、是の故に無生なり』。寶德の言はく『善男子、緣中に因有るや』。虚空藏答へて言はく『無し』。寶德の言はく『因中に緣有るや』。虚空藏答へて言はく『無し』。寶德の言はく『汝の意に於て云何。若しは因若しは緣、自ら實に性有るや』。虚空藏の言はく『無し』と。寶德の言はく『善男子、汝の意に於て云何。諸法は因緣無くして生ずるや』。虚空藏答へて言はく『しからず、善男子、是の故に一切法は自性無く生無く起無く出無し、是を以て緣は因を生ぜず、因は緣を生ぜず、自性は自性を生ぜず、他性も亦他性を生ぜず、自性は他性を生ぜず、他性は自性を生ぜず。是の故に一切法の自性は無生なりと說く。所以は何。如は無生無滅なるを以て、法性の實際も亦無生無滅なり、如如は法性の實際なればなり、如來所覺の一切諸法も亦復是の如く無生無滅なり』。

　寶德の言はく『善男子、如來亦不世出なるや』。虚空藏答へて言はく『此れ應に說くべからず。所以は何。如來は一切法に於て、盡く說くべからず、出と言ふべからず、不出と言ふを得ず。若し人有り問ふて言はく「如來は出世なりや、不出世なるや」と言はんに、智者は如來を謗ぜざらん爲の

し。何をか受無く取無しとは謂ふ。謂はく色にして若しは常若しは無常にして受無く取無ければ、受・想・行・識も、若しは常、若しは無常にして無受・無取なり。色にして若しは苦・若しは樂、若しは有我・若しは無我、若しは淨、若しは不淨にして無受・無取ならば、受・想・行・識も、若しは苦・若しは樂、若しは有我、若しは無我にして無受・無取なり。色にして若しは空・若しは非空にして無受・無取ならば、受想行識も、若しは空・若しは非空にして無受・無取なり。色にして若しは離・若しは非離にして無受無取ならば、受想行識も、若しは離・若しは非離にして無受無取なり。菩薩は無受無取を以ての故に、諸法無受三昧を得。是の三昧に住し已らば、諸佛世尊は無上心の通を以て、是の菩薩に記を授けて、「是の菩薩は涅槃に入り、一切衆生の究竟して涅槃の性に同じきを見ると雖も、衆生を敎化せんが爲の故に、大誓莊嚴及び菩薩の大悲を捨てず」と。

『「云何が菩薩は涅槃に入りて菩薩の行を行ずるとならば、善男子、[二九]凡そ所作有るを名けて生死と爲し、凡そ所作無きを名けて涅槃と爲す。菩薩は正智慧を以て、一切諸行の離相を見る、菩薩は[三〇]法眼を以て明了に見るが故に、能く如來の智明と說く』と。

爾の時[三一]寶德菩薩、虛空藏菩薩に問ふて言はく『善男子、汝何爲ぞ自ら己が智を隱して盡く是れ如來の[三二]力と言ふや』。虛空藏寶德に答へて言はく『善男子、如來豈に善を隱し惡を顯はすことを說きたまはざらんや。善男子、我還汝に問はん、意に隨つて我に答へよ。善男子、汝の意に於て云何。若し[三三]阿那婆達多龍王無かりし時、阿耨大池は能く四河を出し、諸の衆生をして受用するを得しめたるや不や』。寶德答へて言はく『しからず』。虛空藏の言はく『善男子、若し如來無ければ則ち法・律無し、菩薩は、大智の海を成ずるを得るに由る無くんば、亦一切衆生を利益する能はず、如來の出世を以ての故に則ち法律有り、諸の菩薩も大智の海を成ずるを得、亦能く一切衆生を[三四]化度す。善男子、是の故に當に知るべし、一切菩薩所得の辯說の、能く以て衆生を利益するは、皆是れ如來

【二九】この文は、前段の虛空藏の佛に對する言につゞく。而も玆に善男子と云へるは、寶德菩薩に對して解せる詞なるを示すか。

【三〇】麗本に法明眼となすも、宋等の三本は法眼に作る、今是に從ふ。緣生の差別法をば分明に觀察するを法眼とす。

【三一】唐譯には寶・祥に作る。

【三二】唐譯に加持とす。

【三三】また阿耨達ともいふ。梵に(Anavatapta)、無熱と譯す。西域記一によれば、贍部洲の中心、香山の南、大雪山の北に池あり、阿耨達といひ、周り八百里、金沙彌滿して清波皎鏡たり。八地の菩薩願力を以て、化して龍となり、中に潜宅し(阿那婆達多龍王即ち是なり)、清冷なる水を出して、贍部洲に給すと稱せらる。この水、東より恒河(Gaṅgā)、南より信度(Sindhu)、西より縛芻(Vakṣu)、北より私陀(Sītā)の四河となりて流ると。

【三四】麗本に度化とす、宋等の三本化度に作る、今是に從ふ。

も菩提を求めず。菩薩は求無きを以ての故に、清淨の戒聚に住し、無願解脫門を修し、一切諸願を滿足し、生死の性は涅槃の性に同じきを知り、究竟涅槃に入ると雖も衆生の虛妄顚倒を斷除せんが爲の故に菩薩行を行じ、亦行法の行ずべき無し。善男子、是の如き菩薩は、涅槃に入つて菩薩行を行ず。

『善男子、凡そ所作有るは皆是れ生死、所作有ること無き、是を涅槃と名く。菩薩の行ずる所は是れ所作無し、是の故に菩薩をば涅槃に入つて菩薩行を行ずと名く。善男子、凡そ染著・樔窟・妄想・戲論の取相有るは是を生死と名け、涅槃とは染著・樔窟・妄想・戲論の取相無き、是を涅槃と名く。菩薩は染著・樔窟・妄想・戲論の取相無きを修し、菩薩の行を行ずるを以て、是を菩薩涅槃に入りて菩薩の行を行ずとは名く』と。此の法を說ける時に當つて、五百の菩薩有つて無生法忍を得たり。

爾の時世尊、虛空藏菩薩を讚へて言はく『善い哉善い哉、大士、快く法性を說き、菩薩の行に稱ひて、眞實不異なり』と。虛空藏の佛に白して言さく『世尊、此は是れ如來の快なり、所以は何ん。世尊の慧明に由るが故に、我等斯の辯の分を得たり。世尊、喩へば日光の閻浮提を照らすに、日の威德力に由るが故に、有眼の者は色像を見、諸の事業を作すが如し。如來の大智力に由るが故に、一切の衆生及び諸の世界を照らすこと亦復是の如し。諸法の實性は言說すべからず、諸の言說の性は虛空と同じ、是の故に諸法は數を得べからず。凡そ數の法有らば則ち限量有り、凡そ限量有れば則ち是れ有爲なり、凡そ是れ有爲ならば則ち知るべく・斷つべく・修すべし。凡そ是れ知るべく・斷つべく・修すべければ、則ち得有り證有り名・數の法有りて、思惟籌量分別す。法の知るべく斷つべく修すべく證すべく得べき有るを見ざるが故に、卽ち得有ること無し。然る所以は、一切法は無生なるを以ての故なり。能く是の如く諸法を正見し、諸法の中に於て愛染を生ぜず、愛染無きを以ての故に則ち著有ること無く、著無きを以ての故に則ち近無く、近無きを以ての故に則ち受無く取無

現在際は無住なるを以ての故なり。善男子、是を世の淨と爲す。善男子、世中の世淨なるを以ての故に則ち我淨なり、我淨なるを以ての故に是を道の淨と名く』と。

寶德の言はく『善男子、是の如き淨道は能く何の爲す所かある』。虛空藏答へて言はく『能く大智慧光明と作り、此の慧明力を以ての故に、能く一切法の過去・未來際を知るなり』。寶德復問ふて言はく『何をか過去・未來法の際とは謂ふ』。虛空藏答へて言はく『一切法は過去際に於て無生、未來際に於て無滅なり、是を過去・未來の際を知るとは名く』。寶德復問ふらく『若し過去・未來際を見なば、何の所見をか爲す』。虛空藏答へて言はく『二俱に離なるを見る』。寶德復問ふらく『何をか二俱に離なりとは謂ふ』。虛空藏答へて言はく『斷常を離るとは、善男子、若し法の生ずるを見、及び法に著する有らば、則ち是れ斷・常の見なり。然る所以は、生有るに由るが故に則ち滅有り、生滅有るが故に則ち斷常の見有り。若し法有つて自性他性より生ずるを見ざれば則ち因緣を見る、若し因緣を見れば則ち法を見る、若し法を見れば則ち如來を見る、若し如來を見れば則ち如を見る、若し如を見れば則ち斷に滯らず、亦常に執せず、若し不常・不斷ならば卽ち無生無滅なり』と。

寶德復問ふ『善男子、若し無生無滅ならば、云何が名數有る』。虛空藏答へて言はく『言說を假るが故に之を法と名くるのみ。善男子、猶し空有るが故に色の差別名有り、所謂靑・黃・赤・白の色、紫色・頗梨色・琉璃色、（三七）麁色・細色、長色・短色、方色・圓色なり、虛空は是の如き等の法の爲に染せられず、然も一切の色は自性亦空なるが如し。一切の諸法も亦復是の如く、虛空の性に同じ。但だ言說を假れば名・數有るのみ、所謂善法・不善法、世間法・出世間法、（三八）應作法・不應作法、有漏法・無漏法、有爲法・無爲法なり。而も菩薩は亦一切の非福の行を作さず、所作の福行は皆是れ虛誑にして、非眞不堅固なり。是の菩薩は一切の行と非行とを知り、平等に一切の相を捨離し、般若波羅蜜の力を成就するが故に、菩提に迴向して亦菩提の有增有減を見ず、色中に菩提を求めず、亦受・想・行・識中に

【三七】麁色細色等の色は物質の謂なり。

【三八】應に作すべきの法と、應に作すべからざる法となり。

四魔を過ぐる行法と名け、本願を捨せざるが故に進無滯礙と名け、一切煩惱の流を渡るが故に無有上と名け、一切世間に能く降伏するもの無きが故に〔二四〕無詶對と名く。善男子、此の道は是の如き等、及び諸餘の無量の功德を成就す。一切の大士は此の道に乘ずるが故に能く往來して無量の衆生を敎化す、是を莊嚴と爲す。諸の煩惱無くして現に煩惱に入る、是れ其の莊嚴なり。生死を觀じて實際を證せず、空・無相・無作の門に到つて、能く諸見・諸相・諸願を行ずる衆生を敎化する、是れ其の莊嚴なり。現に聲聞・辟支佛の涅槃に入つて生死を捨てざる、是れ其の莊嚴なり。現に諸趣に生を受くるも法性に於て不動なる、現に一切の言敎を說くも無言に於て不動なる、是れ其の莊嚴なり。能く一切の佛事を現じて菩薩の行を捨せざる、是れ其の莊嚴なり。善男子、是を菩薩の大誓莊嚴・大乘莊嚴・道莊嚴と爲す。菩薩は大誓莊嚴を以て自ら莊嚴する故に、能く大乘に乘じて出世間の聖道に順じ、未だ薩婆若を得ざるも、衆生の爲の故に能く佛事を作すなり』と。

〔二五〕爾の時衆中に菩薩有り、名けて〔二六〕寶德と曰へるが、虛空藏菩薩に問ふて言はく『善男子、汝已に此の出世間の聖道を修せるや』。虛空藏答へて言はく『已に修せり』と。寶德の言はく『云何が修したる』。虛空藏答へて言はく『淸淨道を得たるが如く、是の如くに修したり』。寶德問ふて言はく『云何が淸淨道と爲す』。虛空藏答へて言はく『善男子、我淨なるが故に道も淨なり』。寶德問ふて言はく『云何が我の淨と爲す』。虛空藏答へて言はく『世の淨なるが如し』と。寶德問ふて言はく『云何が世淨なる』。虛空藏答へて言はく『善男子、色の過去際淨なり。然る所以は、色の本際は來無きを以ての故なり。色の未來際も亦淨なり、然る所以は、色の未來際は去無きを以ての故なり。色の現在際も亦淨なり、然る所以は、色の現在は無住なるを以ての故なり。善男子、是を世の淨とは爲す。受・想・行・識の過去際淨なり、然る所以は、識の本際無來なるを以ての故なり。識の未來際も亦淨なり、然る所以は、識の未來際は無去なるを以ての故なり。識の現在際も亦淨なり、然る所以は識の

〔二四〕詶は酬に同じ、こたふるなり。

〔二五〕唐譯卷第六の首に當り、以下よく本經と並行す。

〔二六〕同に寶吉祥菩薩とす。

性の如きを知つて而も慧を行じ、受・想・行の無常を知つて慧を行じ、乃至識の涅槃性の如きを知つて慧を行じ、慧の平等を以ての故に識の平等を知り、識の平等を以ての故に慧の平等を知り、慧と識の平等を以ての故に願の平等を知り、願の平等を以ての故に慧と識の平等を知り、慧・識・願の平等を知るが故に菩提の平等なるを知り、菩提の平等を以ての故に慧・識・願の平等を知る、即ち一切法は菩提性に同じきを知る。善男子、是を出世間般若波羅蜜と爲し、是を菩薩の出世間波羅蜜道と爲し、悉く能く一切諸道を攝取す。當に知るべし、一切の諸道は皆中に入在するを。

『何の故に之を名けて出世間と爲すや。善男子、五受陰を名けて世間と爲す、菩薩は善く五陰を分別し、是の無常乃至涅槃性の如くなるを觀じ、已に此の道中に世間及び世間法の有ること無きを知り、此の道は是れ無漏、是れ出世間なるを知つて繫著する所無き、是を出世間と名く。善男子、是を菩薩道と名く。復次に道とは、所謂如實に一切諸法を求め、分別選擇して一切諸法を見ず、相續積聚して無二無別なる、是の故に道と名く。而も此の道は憎愛有ること無く、憎愛無きが故に名けて平等と爲し、餘の乘を思惟し觀察することを離るるが故に名けて廣大と爲し、諂を去離するが故に名けて端直と爲し、曲心を去離するが故に名けて無姦と爲し、諸蓋を斷除するが故に繫滯無しと名け、欲・瞋恚・害覺を去離するが故に塵垢無しと名け、色聲香味觸を受けざるが故に名けて安樂と爲し、諸の魔事を去離するが故に名けて淸涼と爲し、煩惱の衆賊を去離するが故に名けて無畏と爲し、能く涅槃に到るが故に名けて出要と爲し、靜定を成就する故に淸涼水と名け、慧の善解の故に名けて常明と爲し、善く慈を修する故に名けて涼樂と爲し、大悲を捨てざるが故に進無厭と名け、常に喜を行ずるが故に名けて悅豫と爲し、捨を成就するが故に無過失と名け、攝法に順ずる故に名けて大富と爲し、施食・波羅蜜力を成就する故に薩婆若の智辯を得、諸佛善く護持するが故に

と施の離を以ての故に、願も亦離なるを知り、願の離を以ての故に色も亦離なるを知る、色・施・願の離を以ての故に菩提も亦離なるを知り、菩提の離を以ての故に色・施・願の離なるを知り、而も一切法は菩提の性と同じきを知る。善男子、是を菩薩の出世間檀波羅蜜と爲す。

『受・想・行も、亦是の如し。識の無常を知らば應に布施を行ずべし、識の苦を知り識の無我を知り、識の鈍を知り識の無智を知り、識の幻の如きを知り、識の野馬の如くなるを知り、識の水中の月の如くなるを知り、識の夢の如くなるを知り、識の影の如くなるを知り、識の響の如くなるを知り、識の旋火輪の如くなるを知り、識の無我を知り、識の無衆生を知り、識の無命を知り、識の無人を知り、識の無主を知り、識の無養を知り、識の空の如くなるを知り、識の無相なるを知り、識の無願なるを知り、識の無作を知り、識の無生を知り、識の無起を知り、識の無出を知り、識の無形を知り、識の寂靜を知り、識の離を知り、識の無終を知り識の無成就を知り、識の虚空と等しきを知り、識の涅槃性の如きを知つて而も布施を行ず。菩薩是の如く布施を行ずる時、施の離を以ての故に識も離なるを知り、識の離を以ての故に施も亦離なるを知り、識と施の離を以ての故に願も亦離なるを知り、願の離を以ての故に識と施も亦離なるを知り、識・施・願の離を以ての故に菩提も亦離なるを知り、菩提の離を以ての故に識・施・願の離なるを知り、而も一切法は菩提性に同じきを知る。善男子、是を菩薩の出世間檀波羅蜜とは爲す。

『復次に善男子、菩薩は色の無常なるを知りて戒を護り、乃至色の涅槃性の如くなるを知つて戒を護る。受・想・行も亦是の如くなるを知る、識の無常を知つて戒を護り、乃至識の涅槃性の如くなるを知つて戒を護る。戒の離を以ての故に識も亦離なるを知り、戒の離を知るが故に乃至識も亦離なり、乃至一切法は菩提性に同じきを知る。善男子、是を菩薩の出世間尸羅波羅蜜と爲す。羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜も亦是の如し。色の無常を知つて而も悪を行じ、乃至識の涅槃

道を捨し、一切の邪道を捨し已つて眞實の正道に趣き、薩婆若に到る。何をか正道とは謂ふ。所謂善法を捨せざるが故に大欲を行じ、菩提道を退せざるが故に勤めて精進を修し、善根不失の故に不放逸を行じ、不動淳至にして所作を沒せず、必ず能く究竟して上法を仰攀し、功德の資糧を求めて滿足有ること無く、智慧の資糧を求めて終に廢捨せざる、是を菩薩の正道と爲す。

[一五]『復次に善男子、菩薩道とは、所謂四禪・四無量心・[一六]四空定・[一七]五神通・[一八]三福業・[一九]三學・[二〇]六應敬・六念・四攝法・四念處・四正勤・四神足・五根・五力・七覺分・八聖道分・三解脫門・知陰方便・知界方便・知入方便・知諦方便・知因緣方便、是を名けて道と爲す。菩薩此の道方便を成就するを得ば、皆能く隨順して六波羅蜜道に入る。然る所以は、菩薩の六波羅蜜道は一切の聲聞・辟支佛と共ならざるを以ての故に、此の道は一切諸佛皆稱歎する所、諸如來の口より出で、方便を成就す。菩薩能く一切法の實性を知らば、能く出世間六波羅蜜の聖道に住す。云何が住と爲すとならば善男子、若し菩薩有り、[二一]自然慧の方便を成就して菩提を求め、此の五受陰中に於て、實の如く覺せん爲の故に菩提を求めなば、是の菩薩は色の無常を知つて而も布施を行ぜん。色の苦を知り、色の無我を知り、色の鈍を知り、色の無智を知り、色の幻の如くなるを知り、色の水中の月の如くなるを知り、色の夢の如きを知り、色の影の如きを知り、色の響の如くなるを知り、色の[二二]旋火輪の如くなるを知り、色の無我なるを知り、色の無衆生なるを知り、色の無命なるを知り、色の無人なるを知り、色の無主なるを知り、色の無養なるを知り、色の空なるを知り、色の無相なるを知り、色の無願なるを知り、色の無作なるを知り、色の無生なるを知り、色の無起なるを知り、色の無出なるを知り、色の無形なるを知り、色の寂靜なるを知り、色の離なるを知り、色の無終なるを知り、色の無成なるを知り、色の虛空と等しきを知り、色の涅槃性の如くなるを知り、而も布施を行ぜん。菩薩是の如く施を行ずる時、施の離を以ての故に色も亦[二三]離なるを知り、色の離を以ての故に施も亦離なるを知る、色

【一五】この段の相當文は、唐譯卷第五の半に在り。
【一六】また四無色定ともいふ、空無邊處・識無邊處・無所有處・非想非々想處の四定なり。
【一七】天眼・天耳・他心・宿命・如意の五通をいふ。
【一八】施・平等・思惟の三福業。
【一九】戒・定・慧の三學。
【二〇】六和敬なり。
【二一】唐譯に依れば、此の段の初に、云何菩薩出世間道なる虛空藏の問に、佛は簡單に答へて後「世間者、所謂五陰。菩薩爲レ求二菩提一以二慧方便一知二色無常一」云云と說き進める。
【二二】火を旋轉して輪形をなすもの、輪形有に似て實ならざるをいふ。
【二三】離は雜染を離れて清淨なるをいふ、唐譯には「眞如」の語を用ふ。

業を以て輻と爲し、淨功德資糧を以て轂と爲し、堅固の淳至を以て畢竟［四］輨轄釘鍱と爲し、善く諸禪解脱三昧を以て［五］轅と爲し、四無量心を以て［六］善調と爲し、善知識を以て御者と爲し、時・非時を知るを發動と爲し、無常・苦・空・無我の音を以て［七］驅策と爲し、七覺の寶繩を以て［八］鞦紖と爲し、淨五根を以て索帶と爲し、弘普端直の大悲を以て［九］旒幢と爲し、四正勤を以て網と爲し、四念處を以て安詳と爲し、四神足を以て速進と爲し、勝五力を以て［一〇］鑒陣と爲し、八聖道を以て直進と爲し、一切衆生に於て障礙無き慧明をば以て［一一］軒と爲し、六波羅蜜に住する無きを以て薩婆若に迴向し、［一二］無礙の四諦を以て度して彼岸に至る。是を大乘と爲す。此の乘は諸佛より受くる所、聲聞・辟支佛の觀ずる所、一切菩薩の乘る所、釋・梵・［一三］護世の應に敬禮すべき所、一切衆生の應に供養すべき所、一切智者の應に讃歎すべき所、一切世間の應に歸趣すべき所にして、一切の怨憎も輕毀する能はず、一切の諸魔も破壞する能はず、一切の外道も測量する能はず、一切の世智も與に競ふ能はず。此の乘は殊勝にして能く過ぶ者無し、一切の［一四］賢聖の守護する所たり。此の乘は願に隨つて能く一切の佛界に至るが故に、此の乘は普く照らして能く縵網の光明を放つが故に。此の乘は大名稱有りて能く法門を出すが故に、此の乘は強志にして退還せざるが故に、此の乘は堅牢にして懈緩ならざるが故に、此の乘は正しく住して傾動せざるが故に、此の乘は衆事備具して能く一切の所願を滿すが故に。善男子、是を大乘の諸大誓莊嚴とは名く。菩薩は此の乘に乘じ、此の乘に乘じ已つて能く一地より一地に至る、是れ其の莊嚴なり。能く諸地の過患を捨つ、是れ其の莊嚴なり。能く諸の魔衆を捨つ、是れ其の莊嚴なり。能く衆生を化度す、是れ其の莊嚴なり。能く佛世界を淨むる、是れ其の莊嚴なり。能く菩薩の神變を現ずる、是れ其の莊嚴なり。能く生死の大飢饉を度す、是れ其の莊嚴なり。能く如來の行處に入る、是れ其の莊嚴なり。

「善男子、云何が菩薩は道を莊嚴する。善男子、菩薩は大誓莊嚴し及び大乘に乘じ、已に一切の邪

【四】輨はカリモ（車の轂をおほふかね）、轄はクサビ（軸の端にある鍵）、鍱はクギヌキなり。
【五】轅はナガエ、即ち車の前にある二條の長き柄。
【六】調はナツケル（柔伏）なり、車を引かしむる牛・馬をなづくるなり。
【七】策はムチウツなり。
【八】鞦はシリガイ（牛馬の尾より鞍へかけるもの）。紖はハナヅナ（牛の鼻につなぐ索）。麗は靷に作る、今宋等の三本に従ふ。
【九】旒はハタアシ（旗に垂れ下るもの）、幢はハタボコ。旒幢はハタアシのついた幢なり。
【一〇】鑒陣は敵陣を觀察するなり。
【一一】軒は一種の乘車なり。
【一二】礙、麗本に等となす、宋等の三本に礙とす、今之に従ふ。
【一三】帝釋梵天の外、四天王等をは護世諸天といふ、常に須彌に屬する四洲を守護するが故に名く。
【一四】未だ無漏智を發し、斷惑證理せず、凡夫の位に在るを賢といひ、已に無漏智を發して斷惑證理し、凡夫の位を捨てたるを聖といふ。

の種を斷ぜざるが故に。一切の所聞を受持して忘れざるが爲に大誓莊嚴す、陀羅尼を得るが故に。善く說法して一切衆生を悅可せん爲に大誓莊嚴す、辯才を得るが故に。無量の功德資糧を集めんが爲に大誓莊嚴す、相好を成就するが故に。一切の善知識を悅可せん爲に大誓莊嚴す、所行を堅固にするが故に。馳散の心を遮するが爲に大誓莊嚴す、諸禪解脫三昧を生ずるが故に。阿練若處に在りて身命を捨離するが爲に大誓莊嚴す、六通を得るが故に。大師子吼して畏懼する所無からんと欲するが爲に大誓莊嚴す、現前に無我法を得るが故に。一切世界に至らんと欲するが爲に大誓莊嚴す、一切の諸法は幻の如く夢の如く影の如くなるを知らんと欲するが故に。一切世界を普照嚴飾せんが爲に大誓莊嚴す、戒衆を淨めて成就力を受持するが故に。如來の十力を成就せんが爲に大誓莊嚴す、諸の波羅蜜を滿足するが故に。四無所畏を得んが爲に大誓莊嚴す、所說の如く行ずるが故に。盡く十八不共法を得んが爲に大誓莊嚴す、聞く所の菩薩地法の如くにして戲論せざる故に。善男子、是を諸菩薩の二十大誓莊嚴と爲す。此の莊嚴力を以ての故に能く大乘に乘ず。菩薩は此の自莊嚴力を以ての故に、三惡趣の因緣を斷ず、是を莊嚴と名く。具足して善く諸佛の爲に護持せらる、是を莊嚴と名く。至らんと欲する所に隨つて便ち往生するを得、是を莊嚴と名く。一切の胞胎を捨てて能く諸佛の前に化生す、是を莊嚴と名く。能く無諍の身口意の業を行ず、是を莊嚴と名く。不放逸の行に住して諸天世人の爲に恭敬せらる、是を莊嚴と名く。善く三脫門に通達して實際を證せず、是を莊嚴と名く。一切無我の法皆現在前して而も猶ほ大誓莊嚴を捨てざる、是を莊嚴と名く。是を菩薩大誓莊嚴を具足すと爲す。

『云何が云つて菩薩乘を莊嚴すとは爲す。善男子、乘とは謂はく無量也、邊岸無きが故に。普く一切に遍すること喩へば虛空の如し、廣大にして一切衆生を容受するが故に。聲聞・辟支佛と共ならず、是の故に大乘と名く。復次に乘とは、正しく四攝法に住するを以て輪[三]と爲し、眞淨の十善

【三】輪は車の外廓をなす輪、轂は、コシキと稱せらる、軸を通す部分。この輪と轂との間をつなぐヤを輻とす。

卷の第十七

虛空藏菩薩品　第八之四

爾の時虛空藏菩薩、佛に白して言さく『世尊、諸佛の行處は不可思議なり、菩薩の應に行ずべき所の法も亦復無量なり、是の故に此の行は少誓を以て莊嚴すべからず、少言を以て說くべからず、小乘道を以て成就するを得べからず。快い哉世尊、唯願はくは諸菩薩の大誓莊嚴及び道莊嚴を說きたまへ。菩薩は大誓莊嚴及び道莊嚴を以ての故に、能く大乘の行たる眞實最上の出世間道に乘じ、當に出世無上の大乘を得べきが爲に、一切自然の大智を成就し、未だ一切智を成ぜずと雖も、能く佛事を作して一切を利益すればなり』。佛虛空藏菩薩に告げて言はく『善男子、諦に聽き諦に聽け、善く之を思念せよ、吾當に汝の爲に分別して、諸菩薩の大誓莊嚴と乘莊嚴と道莊嚴とを解說すべし』。『唯然り世尊、願はくは樂うて聞かんと欲す』。

[一]佛の言はく『善男子、菩薩は二十の莊嚴法有り以て自ら莊嚴し、自ら莊嚴し已つて能く大乘に乘ず。何等をか二十と爲す。善男子、若し菩薩有り、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提心を發せば、一切衆生に於て最勝の大悲を生じ、利益衆生の心を生じ、利益衆生の心を生じ已らば、便ち能く無上の大誓を莊嚴す。何をか[二]大誓莊嚴と謂ふ。未だ度せざるを度せんが爲に大誓莊嚴す、大船舫に乘ずるが故に。未だ解せざるを解せんが爲に大誓莊嚴す、虛妄顚倒を脫するが故に。未だ安ぜざるを安ぜんが爲に大誓莊嚴す、無畏道に安止するが故に。未だ涅槃を得ざる者をして涅槃を得しめんが爲に大誓莊嚴す、五陰の重擔を捨する故に。常に勤めて衆生に給足せん爲に大誓莊嚴す、精進して懈怠ならざるが故に。無量の生死を捨せざらん爲に大誓莊嚴す、疲厭せざるが故に。一切諸佛を悅可せんが爲に大誓莊嚴す、供養恭敬を現前するが故に。一切佛法を受持する爲に大誓莊嚴す、三寶

【一】唐譯卷第五の末尾にこの相當文あり。

【二】同に名爲レ被ニ大甲冑一といふ。

分を略說すとは爲す。而も諸菩薩の行は無量無邊なり、諸佛の法藏は不可思議なり』。

爾の時虛空藏菩薩、是の法を說きたまへる時、萬六千の菩薩有つて柔順忍[74]を得、無量の三昧現在前せり。復八萬四千の衆生有つて阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。爾の時世尊、虛空藏菩薩を讃へて言はく『善哉善哉、善男子、快く是の諸三昧の法門を說き、善く如來の勝智を說きたり、汝自身に此の法を行ずることを證し、他より得ざるが如し』と。

爾の時生疑菩薩、合掌して虛空藏に白して言はく『希有なり大士[75]、乃ち能く是の如き不可思議功德を成就して、他より聞かず、而も能く如來勝智の行處に入りぬ。我も亦願樂して一切衆生をして、此の不可思議法の如來行處を得しめんと欲す』と。

爾の時に大德舍利弗、生疑菩薩に問ふて曰はく『善男子、誰か汝の爲に此の生疑の名をば作せるや』。生疑菩薩、舍利弗に答へて言はく『菩提心こそ我が爲に此の生疑の名を作せり。然る所以は若し菩提心を發さざれば、佛法中に於て終に疑を生ぜず。其れ阿耨多羅三藐三菩提心を發す有らば、其の人は一切の佛法に於て則ち疑惑を生ず。明了に一切の佛法を現知せんと欲するが爲の故なり。譬へば[76]刹利王の最大太子を灌頂して王相を成就せば、應に國主と作るべく、父の後に次いで應に王位を紹ぐべし、是の故に其の子每常に治國の法を諮問し「我れ當に云何が國事を監領すべき」といふが如し。大德舍利弗、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提心を發さば、如來の後に次で亦應に無上法王の尊位を紹繼すべく、亦常に一切智相應の法を思惟し諮問して「我等應當に云何が無上法王の法を持すべき」といはん。是の故に亦一切の佛法に於て每常に疑を生ぜん。大德舍利弗、當に知るべし、此の因緣を以て、菩提心に由るが故に、此の生疑の名をば立つるなり』と。生疑菩薩復舍利弗に語つて言はく『大德、我れ昔より來、値へる諸佛菩薩及び善知識を[77]憶せざるも、未だ曾て諸佛の妙法を問はずんばあらざりき、是の故に我れ眞に生疑と名くるなり』と。

大方等大集經卷第十六

【七四】寂靜の理に隨順して、諸法の平等を觀じ、深く忍可して更に違背すること無き位、四・五・六地の菩薩なり。

【七五】唐譯は、この次に、かの師子と、師子進との二王子の物語に入るも、前後の脈絡は晉譯の方よろしきが如し。

【七六】又刹帝利(Kṣatriya)、王族なり、四姓の第二位に位す。

【七七】憶は記憶するなり。

寶莊嚴と曰ふ、能く三寶の勝種を斷ぜざることを成就するを得。また三昧有り、名けて無比と曰ふ、能く智所作の業を成就す。また三昧有り、名けて虛空門と曰ふ、能く一切の障礙を離るるを得。また三昧有り、名けて智印と曰ふ、能く一切諸法を遍知するを得。また三昧有り、名けて見現在諸佛と曰ふ、能く諸如來の功德を成就するを得。また三昧有り名けて選擇寂靜如意と曰ふ、能く本際を離るることを成就するを得。また三昧有り、名けて分別一切法門と曰ふ、能く未來世に於て一相の法門を說くことを成就するを得。また三昧有り、名けて了知一切法平等性と曰ふ、能く一切の經書を解了することを成就するを得。また三昧有り、名けて集諸功德と曰ふ、能く一切の衆生を潤益するを得。また三昧有り、名けて遊戲神通と曰ふ、能く不思議解脫を成就するを得。また三昧有り、名けて自覺と曰ふ、能く如來祕密の藏に入る。また三昧有り、名けて首楞嚴と曰ふ、能く菩薩地中に於て乃至大涅槃を示す。また三昧有り、名けて遍至と曰ふ、能く在在に現生を成就するを得。また三昧有り、名けて灌頂王と曰ふ、能く菩薩の所行を成就するを得て餘無し。また三昧有り、名けて無勝と曰ふ、能く如來の十力を成就するを得。また三昧有り、名けて無盡と曰ふ、能く四無所畏を成就するを得。また三昧有り、名けて無等と曰ふ、能く佛不共の法を成就するを得。また三昧有り、名けて願王と曰ふ、能く諸の所聞の法を成就するを得、自利利[七二]他の功[七三]唐捐せず。また三昧有り、名けて善入無垢印と曰ふ、能く一切の佛法を現前覺了す。また三昧有り、名けて善知覺と曰ふ、能く薩婆若智を成就するを得て遺餘有ること無し。また三昧有り、名けて盡無邊と曰ひ、能く一切佛事を成就するを得て受行餘す無し。善男子、此を八萬四千の三昧門と謂ふ。此等を以て首と爲し、菩薩の道場に坐する時、便ち八萬四千の諸三昧門を得、一一の三昧は無量阿僧祇百千萬億の三昧を以て、以て眷屬と爲す。善男子、是の諸三昧は能く八萬四千種の衆生の、諸の所行の法を知り、能く八萬四千の法聚を顯現するを以てなり。善男子、是を諸菩薩の行及び諸佛の法藏の少

【七二】他、麗本に彼となす、宋等の三本他に作る、今之に從ふ。
【七三】唐はむなしきなり、捐はすつるなり。

て隨類と曰ひ、能く衆生の性に隨つて說法を爲すことを成就す。また三昧有り、名けて修一切諸身と曰ひ、能く法身を成就す。また三昧有り、名けて不眴と曰ひ、能く無礙の見を成就して諸如來を見るを得。また三昧有り、名けて無諍と曰ひ、能く一切の因緣を分別するを得。また三昧有り、名けて無垢輪と曰ひ、能く妙法輪を轉ずることを成就するを得。また三昧有り、名けて電光と曰ひ、能く諸法の因緣を覺することを得。また三昧有り、名けて善分別と曰ひ、能く諸界の盡く一界に同じきを知る。また三昧有り、名けて莊嚴王と曰ひ、能く相好を成就するを得。また三昧有り、名けて隨解王と曰ふ、能く一音を以て一切に報ず。また三昧有り、名けて不分別法界と曰ふ、能く一切三昧の一三昧に同じきを知る。また三昧有り、名けて堅固といふ、能く諸法の性に於て退せざるを得。また三昧有り、名けて不可壞と曰ふ、能く諸法の法性に同じきを知る。また三昧有り名けて無終と曰ふ、能く[七]本際と非際とを知る。また三昧有り、名けて無作と曰ふ、能く如如を成就して變易有ること無し。また三昧有り、名けて無動と曰ふ、能く諸法平等にして虛空の如くなるを知る。また三昧有り、名けて淨住と曰ひ、能く諸波羅蜜を成就するを得。また三昧有り、名けて善攝と曰ふ、能く四攝法を成就す。また三昧有り、名けて等行と曰ふ、能く四梵行を成就するを得。また三昧有り、名けて無礙觀と曰ふ、能く諸の助道の法を成就するを得。また三昧有り、名けて海印と曰ふ、能く諸佛の所說を總持するを得。また三昧有り、名けて空と曰ふ、能く一切の諸見を斷つ。また三昧有り、名けて無相と曰ふ、能く一切の諸覺を斷つ。また三昧有り、名けて無願と曰ふ、能く淨く一切の諸願を成就するを得。また三昧有り、名けて決了と曰ふ、能く無生法忍を成就するを得。また三昧有り、名けて不脫と曰ふ、能く所聞の法を失せざることを成就するを得。また三昧有り、名けて無礙と曰ふ、能く善說を以て衆生を悅可す。また三昧有り、名けて得豐と曰ふ、能く資手を成就するを得。また三昧有り、名けて法雲と曰ふ、能く一切の法門を雨らす。また三昧有り、名けて

【七】本際とは根本究竟の邊際即ち涅槃なり。

開示す。また三昧有り、名けて眞淨と曰ひ、能く一切の魔行に過ぐ。また三昧有り、名けて踊出と曰ひ、終に外道諸論の降伏する所とならず。また三昧有り、名けて捨離と曰ひ、能く一切諸煩惱の結を調伏す。また三昧有り、廻伏と名け、能く一切をして眞實の道に入らしむ。また三昧有り、名けて轉進と曰ひ、能く聲聞辟支佛地を離る。また三昧有り、名けて樂遊と曰ひ、能く生死を厭はず。また三昧有り、名けて趣向と曰ふ、能く一地より一地に至るが故に。また三昧有り、名けて怡懌と曰ふ、能く大衆を悅ばしむることを成就するが故に。また三昧有り、無礙光と名く、能く一切衆生に於て等心を成就す。また三昧有り、名けて知所作と曰ふ、能く一切の所作に順じて逆はざるが故に。また三昧有り、名けて師子相と曰ふ、能く大衆の無所畏を成就す。また三昧有り、名けて心勇と曰ひ、能く四魔を降伏す。また三昧有り、名けて蓮華莊嚴と曰ひ、能く世法に染せざることを成就す。また三昧有り、名けて光莊嚴と曰ひ、能く普く諸佛の世界を照す。また三昧有り、名けて淸涼と曰ふ、能く憎愛を斷離するが故に。また三昧有り、名けて幢相と曰ふ、能く一切佛法の光明を成就するが故に。また三昧有り、名けて炬王と曰ふ、能く大智慧光明を成就す。また三昧有り、名けて日光と曰ふ、能く無明闇冥を斷除することを成就す。また三昧有り、名けて集德と曰ふ、能く辯辯の無盡なることを成就す。また三昧有り、名けて那羅延と曰ふ、能く金剛身を成就す。また三昧有り、名けて堅固と曰ふ、能く不掉動心を成就す。また三昧有り、名けて彌樓幢と曰ふ、能く不見頂相を成就す。また三昧有り、名けて堅自在と曰ふ、能く本願を度することを成就す。また三昧有り、名けて金剛士と曰ふ、能く不退の諸通を成就す。また三昧有り、名けて金剛場と曰ふ、能く道場に昇ることを成就す。また三昧有り、名けて喩如金剛と曰ふ、善能く一切諸法を鑑徹す。また三昧有り、名けて行王と曰ふ、能く一切衆生の心行を觀ず。また三昧有り、名けて慧王と曰ふ、能く勝智を成就し、諸根の滿足せると未だ滿足せざる者とを知る。また三昧有り、名け

【七〇】彌樓は山の名、高山、光山など譯す、須彌山と同一なりといひ、或は別なりと云はる。

子、[六六]此の大地は水上に住し、此の水は地を持して疲惓有る無きが如く、諸の菩薩の心も亦大水の如く、大悲力を以ての故に、衆生を教化して疲惓有る無きこと亦復是の如くなり』。虚空藏復言はく『善男子、此の大水は風上に住し、此の風は水を持して疲惓有る無きが如く、諸の菩薩の心も亦大風の如く、大方便力を以ての故に、佛の世界を淨めて疲惓有る無きこと亦復是の如し』。虚空藏復言はく『善男子、喩へば大風は空上に住して依止する所無く、此の空は風を持して障礙する所無く、疲惓有ること無きが如く、諸菩薩の心も亦虚空の如し、般若波羅蜜力を以ての故に、一切の佛法を集めて懈廢疲惓有る無きこと、亦復是の如し。所以は何。菩薩は一切の法相を知る、所以に[六七]無生を成就し、作者無く受者無し、因緣合成の故に所作有るも、所作の諸法亦實有ること無し、本際空なるが故に、本際離なるが故に實に成就無し。自性空の故に無生無滅にして、一切諸法の性相は如なるを知る。是の故に法の疲厭を生ずべきと及び疲厭する者と有るを見ず。所以は何。菩薩は一切法の無二なるを知るが故なり。生死の性と涅槃と等しきを知り、涅槃の性と一切法性と等しきを知り、一切法性と無性と等しきを知るが故に、亦恃まず著せず、一切諸法の過去際・未來際は自性無きを知る。定力を以ての故に、誓願力の故に、定より起たずして而も能く一切の所作をば現ず』と。

[六八]爾の時生疑菩薩、虚空藏菩薩に問ふて言はく、『唯願はくは大士、諸菩薩三昧の行業を說きたまへ、何をか三昧と謂ひ、何をか三昧業を行ずる者と謂ふや』と。虚空藏菩薩、生疑菩薩に答へて言はく『善男子、八萬四千種の諸三昧門有り、此の諸三昧門は能く一切諸餘の三昧を總攝す、何等か是れ八萬四千の三昧門なる。善男子、[六九]菩薩に三昧有り、名けて不忘菩提心と曰ひ、能く不散亂の行を成就す。また三昧有り、名けて降伏と曰ひ、能淨淳至なり。また三昧有り、名けて不顯行と曰ひ、能く究竟して不退の所作を成就す。また三昧有り名けて不依と曰ひ、能く畢竟を增進成就す。また三昧有り、名けて無垢と曰ひ、能く自心を成就す。また三昧有り、名けて照耀と曰ひ、能く善法を

【六六】倶舍論等の說に依れば、この世界の最下に虚空輪位し、その上に風輪存し、その上に水輪在り、地輪この上に在りて、地上の諸物を支ふといふ。

【六七】麗本には無生の下に質の字有り、今宋等三本に從ふ。

【六八】虚空藏菩薩の、諸三昧を說くこと、唐譯卷第五の始に在るも、そは寶吉祥菩薩の虚空藏に問ふ所なり。

【六九】以下の三昧の名、唐譯のそれと合はず。

空藏菩薩は發心してより已來、未だ曾て菩提心を失はず、未だ曾て胎より產せず、常に諸佛に値うて法を聽き、衆僧を供養し、諸佛の所に於て正法を受持し、攝[六三]取を首と爲し、未だ曾て失念せず、能善く分別して遍行を成就し、初めて發心し已つて甚深難解なる菩薩の[六四]初地を得て能く諸施を行じ、大悲を成就して戲論無きを得、厭倦有ること無く、勤精進を發し、一切の諸論を學し、一切の世法を知り、慚愧を成就して堅固の念力を得たり。此の菩薩初地に住し、無量・阿僧祇・不可稱・不可量・不可思議・不可說・不可說の諸劫に於て、能淨淳至にして具足して檀波羅蜜を行じ、諸の衆生に於て常に大慈を行じ、攝法・一切波羅蜜及び諸の助道の法を勤修し、欲[六五]・進・不放逸等を成就して、皆檀波羅蜜に隨順したり。是の菩薩は初地に住し、常に勤めて諸佛に給侍・供養し、方便を勤求して衆生を敎化し、佛國土を淨めて初地に住したり。一切地・智慧光明に入るを得て而も初地に過ぎず、然る後乃ち無量の功德智慧・資糧を成就し、如來の力を得、不退の神通を持し已り、諸地の障礙を離れ、初地よりして菩薩の第二地に入り、住すること無量阿僧祇劫にして第二地を淨め、尸羅波羅蜜を修し、乃至十地まで、一一の衆生の爲に經る所の劫數も亦復是の如く、一一の地中に於て無量阿僧祇劫を過ぎて菩薩行を成就し、諸の衆生の爲に佛事を現作して、菩薩の所行を捨てざりき。善男子、菩薩の能く是の如き甚深不思議殊勝なる不散亂を行じ、淳至に進行を勤修すること、是の虛空藏菩薩所行の成就の如くなる者有ること少し』と。

爾の時生疑菩薩、虛空藏菩薩に問ふて言はく『希有なり、善男子、乃ち能く是の如く、弘誓の願を發したることや。此の大乘に於て久しく住せば生死に疲倦無きや』と。虛空藏答へて言はく『善男子、此の大地は諸の山河・石壁・樹木・叢林・一切の藥草・百穀苗稼及び諸の衆生を運載して疲倦有るや不や』と。答へて言はく『不らず、大士』。虛空藏の言はく『善男子、諸菩薩の心も亦大地の如く、淳至成就の故に、菩薩行を行じて疲倦有る無きこと、亦復是の如し』と。虛空藏復言はく『善男

【六三】取、麗本に法とす、今宋等三本に從ふ。
【六四】菩薩五十二位の中、十地の初位なり。
【六五】精進なり。

『我れ無上心を發して、諸の群生を請召し、救無き者に救を作し、冥世に大明を開けり。一法行の爲に非ず、一佛を供せん爲に非ず、一衆生の爲に非ず、願はくは度して餘無からしめんとするが故なり。生老病死の苦など、衆の惱に逼らるる者、一切憂懼する莫れ、我れ誓つて要ず當に度すべし。欲・瞋・癡・慢・覆（五九）は、道を失して諸惡を造る、正しく邪惡の業を斷ぜば、無畏城に導至す。三塗に墮せる衆生は、難處に衆苦を受く、志を强くして憂懼する莫れ、我れ生じて無畏を施さん。無明と癡に翳され、解脫の門を識らざるも、我れ爲に法炬を然し、明を得て涅槃に至らしめん。（六〇）四流の漂はす所と爲り、沈溺して邊を得ざるも、爲に勝法の船を造り、諸有の流を度らしめん。生死の飢饉に處りては、先づ（六一）白業を食ひ盡せ、我れ爲に導師と作り、當に安樂に至らしむべし』と。

佛生疑菩薩に告げて言はく『善男子、爾の時灌頂聖王、此の偈を說き已るに、彼の佛の世界、卽ち六種に震動し、光明遍く照りぬ。時に聖王、道心を發し已り、卽ち菩薩三昧の名けて不退菩提心と曰ふを得、此の三昧力を得たるを以ての故に、常に諸佛を見ること無礙なるを得、乃至夢中にも一切の煩惱、爲に患を作さず、是より已後、其の心嫉妬と共俱ならず、破戒と俱ならず、瞋恚と俱ならず、懈怠と俱ならず、散亂と俱ならず、其の心愚癡等と俱ならざりき。彼の灌頂聖王は、其の形壽を盡して常に世尊の左右に給侍し——聞法の爲の故に——又常に三萬六千子を敎化して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、亦復無量無邊の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたり。善男子、爾の時の衆天灌頂轉輪聖王とは、豈に異人ならんや、斯の觀を造す莫れ、卽ち今の虛空藏菩薩是なり、爾の時の彼の諸王子及び諸大衆の、敎へて阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたるは、我れ今此の會中に在るを見る大力精進大智慧の諸菩薩摩訶薩の聽法者是なり。（六二）

『善男子、虛空藏菩薩は發心より已來、是の如き無量の阿僧祇劫を經て菩薩道を行じたり。此の虛

【五八】　中食の後。

【五九】　名譽の墮ちんを恐れて、自ら造れる罪を覆ひかくす精神作用なり、小煩惱地法、及び隨煩惱の一に數へらる。

【六〇】　一に見流（三界の見惑）、二に欲流（欲界の一切諸惑。見と無明とを除く）、三に有流（上二界の一切諸惑。見と無明とを除く）、四に無明流（三界の無明）。この四法の爲に有情漂流して止まざるが故に流といふ。

【六一】　白、麗本に甘となす、今宋元明本に從ふ。白業は黑業に對す。善業をいふ。この句原文に食先白業盡と。

【六二】　以上、唐譯は半頁許に收む、次で半頁許ありて「諸法の性を說かば」ノ偈（三六一頁）ありて第四卷を終る。

の劫を經て、一劫の如しと謂へり。爾の時、衆天灌頂聖王は淨一切願威德勝王如來及び菩薩僧に請ひ、四十[五二]中劫の劫數長なるも短なるも、此の如き中劫に供養すること適意なりとし、餚饍飲食・衣服臥具、房舍臺觀、園林浴池、是の如き等の種種所須の物を以て供養したり。

『爾の時、衆天灌頂聖王は佛を供養せん爲の故に、一小世界を莊嚴し、以て妙堂と爲し、純ら琉璃寶を以て其の地を莊嚴し、周匝の垣墻は衆寶もて合成し、赤栴檀及び[五三]憂陀羅娑羅栴檀を以て柱と爲し、車渠寶を以て[五四]櫨栱と爲して此の堂を間錯し、是の如き等の莊嚴を以て合成し甚だ愛樂すべかりき。世尊中食の後、三昧より起ち、此の堂中に在つて諸の大衆の爲に妙法を講說したまへり。復一堂を莊嚴して四天下と等しからしめたり。如來及び菩薩・僧をして其の中に於て食せしめんと欲し、日日用ふる所の食は、珍寶の大山積の如きに直したり。善男子、爾の時、衆天灌頂轉輪聖王は、四十中劫に於て、常に一念を專にし、未だ曾て放逸ならず、餘事を作さず、常に一切の樂具を用つて、如來及び菩薩僧を供養したり。[五五]爾の所の時に於て作せる所の功德もて、亦發願し志求する所有らざりき。四十中劫を過ぎ、最後の日に於て、[五六]無價の[五七]三衣を以て如來諸菩薩僧に供養し、各一衣を施したり。爾の日に當り、世尊は[五八]中後に諸大衆の爲に廣く妙法を說きたり。時に衆天灌頂聖王は侍從に圍遶せられ、聽法の爲の故に佛所に往詣したり。

『爾の時世尊、彼の聖王の功德淳淑にして、堪任有用なるを知りたり。時に世尊及び衆天灌頂轉輪聖王等は、七日七夜のあひだ都て食想無し。師子座に處りて身傾動せず、大乘經――攝菩薩淨行不退轉輪方便と名くる――を說きたり。世尊、是の如き法を說けるは、盡く受持して忘失せざらしめんと欲したるが爲なり。灌頂聖王は七日七夜、心分散せず、佛より法を聞きて歡喜踊躍し、其の心悅豫して座より起ち、佛足を頂禮して右遶七匝し、遶ること七匝し已つて右膝著地し、合掌向佛して深心淳至たり、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、卽ち偈を說いて言はく、

中劫とし、八十中劫を大劫とするもの。一は一增一減を小劫とし二十小劫を中劫とし、四中劫を大劫とするなり。單に劫といへば、小劫を指す。今上に減の一劫といふが故に本經は一增又は一減を以て小劫とするの說を取るなるべし。

【五〇】現在の劫を賢劫といふ。

【五一】本文に經爾所劫、謂如一劫とあり。

【五二】前に註(四九)に示すが如く本經は八十中劫をは一大劫とするが故にその半に及ぶ。

【五三】娑は麗本に婆となすも、今宋等の三本に從ふ。憂陀羅は憂羅伽の寫誤か。探玄記二十に依れば憂羅伽娑羅栴檀(Uragasāracandana)具に地毘烏羅伽娑羅といひ、地毘は妙、烏羅伽は腹行、(龍蛇の類)娑羅は勝又は堅固といふ。この栴檀は堅固勝出にして龍宮に在るが故にこの名ありと。

【五四】俗にますがたと稱する、梁上の小柱ならん。

【五五】原文には於爾所時云云とあり。

【五六】價をつけ得ざるほど貴重なるをいふ。

【五七】僧の著るべき三種の衣、卽ち三種の袈裟なり、僧伽梨(Saṅghāṭi 大衣)、鬱多羅僧(Uttarāsaṅga 七條)、安陀會(Antarvāsaka 五條)なり。

ること無し、諸の珍寶多く、間錯して端嚴の樂むべきを成じ、諸の[四二]繒綵・幢幡・華蓋を懸けて莊嚴し、[四三]栴檀・[四四]沈水・衆の妙雜香を燒き、雜色の[四五]劫波育を以て其の上に張施し、衆寶妙華を以て其の地に布き、在在處處に寶華樹・果樹・衣樹・瓔珞樹・伎樂樹・寶器樹・香樹・燈樹・藥樹等を生じ、普く以て莊嚴し、界八道を以て平正分明にし、眞珠瓔珞の寶網もて莊嚴し、觀る者厭くこと無し、彼の世界中には日月の光明を假らず、諸の燈樹及び摩尼樹を以てし、而も照明を以て晝夜有ること無く、唯寶華の開合を以て時節有るを知りたり。

『彼の世中の衆生は、盲[四六]瞎・僂躄・痤・瘂跛蹇の形體無く、顏貌に醜惡・汚面・[四七]睞眼を具せず、是の如き等の醜惡の衆生有ること無く、一切の衆生皆三十二相を成就して其の身を莊嚴す。彼の世界中に乃ち三塗八難の諸惡名字無く、亦外道異學の音聲を聞かず。彼の世界の衆生皆阿耨多羅三藐三菩提を必定し、亦聲聞・辟支佛の名を聞かず。彼の佛は純ら諸の菩薩乘を說きたり。彼の世界中に女人及び胎產の者無く、一切の衆生は[四八]結加趺坐して自然に化生し、老病の名無くして彼の壽命を盡し、命終の後は餘の清淨佛土に生じ、或は本土に還生したり。善男子、彼の土には是の如き無量無邊不可思議の功德を成就したり。我れ若しは一劫、若しは[四九]減の一劫のあひだ、彼の功德を說かんも終に盡す能はず。

『善男子、爾の時、現無量諸佛刹土中に一轉輪聖王有り、名けて衆天灌頂と曰ひ、三千大千世界を典領し、諸佛の所に於て久しく德本を植え、利根慧猛にして威德成就したり。この灌頂聖王に三萬六千子有り、皆蓮華中に於て化生し、皆過去諸佛の所に於て久しく善根を植えたりき。

『爾の時、淨一切願威德勝王如來は、諸天・世人・大衆のために恭敬圍遶せられて、衆天灌頂聖王の住處に遊びたるに、諸の菩薩衆は無量無數にして算師及び算師弟子の能く算知する所に非ざりき。彼の佛の壽命は百千劫にして、劫數の長短は此の[五〇]賢劫の如くなりき。彼の世界の衆生は、[五一]爾の所

【四一】埠、元明二本に埠とす。今之に從ふ。土を高くつめるつかなり、阜はをかなり。
【四二】繒綵、あやぎぬなり。
【四三】梵に Candana 香木の名、赤白紫の諸種あり、能く病を治すといふ。此の木僅に芽を生ずれば、臭木伊蘭の林も遂にその惡臭を失ふに至ると云はる。
【四四】また沈香といふ。印度諸國の熱帶地に産し、その木心枝節堅く重くして、水に沈むが故にこの名ありと。
【四五】また劫貝ともいふ。樹の名なり。この樹の絮を以て作れる氈をも亦この名を以て呼ぶ。
【四六】瞎はめつかち、僂はせむし、躄はゐざり、痤は小腫なり、跛蹇共にびつこなり。
【四七】睞は正しからざるをいふ、睞眼はやぶにらみなるべし。
【四八】また金跏座ともいふ、左右の足背(趺)を、交結して左右の髀上に置くをいふ。佛の座法是なり。
【四九】劫に大中小あり、之に二あり、一は一增(人壽十歲より百年に一を增して八万四千歲に至る間)、又は一減(人壽八万四千歲より百年に一を減じて人壽十歲に至る間)を小劫とし、この一增一減を

幾時を經たりと爲す、唯願はくは之を說いて我等の疑を除きたまはんを』と。佛の生疑菩薩に告げて言ふらく『善男子、此の事久遠甚深にして知り難し。若し當に之を說くべくんば、諸の天・人をして皆疑惑を生じ佛語を信ぜざらしめ、不信を以ての故に、無量の罪を得ん』。生疑菩薩、復佛に白して言はく『世尊、唯願はくは之を說きたまへ、若し久しく善根を植うる者有らば、必ず當に信受すべし』と。佛の生疑菩薩に告げたまはく『善男子、汝已に慇懃に聞かんと欲す、豈に說かざるを得んや、諦に聽き諦に聽きて、善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に分別解說すべし。善根を堅固ならしめん爲に、久しく德本を植ゆる者は、喜悅を生ずべきが故に。善男子、喩へば一恒河沙の數に等しき諸恒河沙の、此の諸恒河沙の一沙を以て一佛土と爲し、[三九]爾の所の佛土を末として盡く微塵と爲して一處に聚著し、一長壽の人有り、此の塵聚の中に於て、百劫に乃ち一塵を取りて此の塵數を盡すが如し。虛空藏菩薩發心してより已來の劫數を知らんと欲するも、復此に過ぎ、算數の知る所に非ず。善男子、當に此を以て虛空藏發心の久近を比知すべし。

『善男子、乃往過去に恒河沙數に等しき諸恒河沙の、此の諸恒河沙の一沙を以て一佛土と爲し、爾の所の佛土を末として盡く微塵と爲したらん[數を]過ぎ、復是に過ぐる數百千萬劫に、爾の時佛有り、號して[四〇]淨一切願威德勝王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ひ、彼の世界を名けて現無量諸佛刹土と曰ひ、劫を衆寶莊嚴と名けたり。彼の世界を何が故に現無量諸佛刹土とは曰ふとならば、善男子、彼の刹土の眞淨を以ての故に、能く十方諸佛の刹土を現ずること、喩へば翳無き淨月の淸水に現ずるが如くなりき。善男子、是の因緣を以ての故に、十方無量阿僧祇の諸佛刹土、及び彼の諸佛幷に師子座、衆生の所作など皆彼の國に現じたり。是の故に彼の世界を名けて現無量刹土と爲したり。彼の世界は百億の三千大千世界と等しく、廣博嚴淨、豐樂安穩、天人熾盛たり、地の平かなること掌の如く、丘陵・[四一]埠阜・穢惡・不淨有

[三九] 本文に末爾所佛土盡爲微塵とあり。

[四〇] 唐譯に一切勝願寶威德王といふ。

て諸の功德を作す有り。一切の衆生是の如き等の樂を成就し、各是の言を作す『乃ち此の大士有りて能く世の樂を施す。此の虛空藏菩薩出世の故に、能く世間に甘露を施し、乃ち能く常に勤めて、一切衆生に樂を與へんが爲に疲倦する無し』と。

虛空藏菩薩、是の如き等の神變を現じ、一切衆生の性を悅可し、菩薩の神力を示現し、財施・法施を以て衆生を攝したるが故に、無量阿僧祇の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、無量の菩薩をして無生法忍を得しめ、復無量阿僧祇・不可說・不可說の諸菩薩をして勤精進を發さしめたるが故に、諸の三昧門・陀羅尼門を成就するを得、神通門に遊戲するを得しめたり。

爾の時生疑菩薩、是の念を作せり『此れ不可思議にして未曾有なり、虛空藏菩薩は、但娑婆世界に於て、種種の神足を示現す、亦他方の世界に於ても、種種の神足を現ずるや』と。爾の時虛空藏菩薩は、生疑菩薩の心所念を知り、卽ち身より光を放ち、此の光明力を以ての故に、普く十方無量無邊の諸佛世界を照らしたり。爾の時、生疑菩薩及び餘の菩薩は、皆虛空藏の、神變力を以て、十方無量無邊不可思議諸佛世界に於て、衆生を[三七]應化せること、亦此の娑婆世界の如く、等しくして異有る無く、一切の聲聞・辟支佛の爲す能はざる所なるを見たり。生疑菩薩は是の如き神變を見已り、疑網卽ち除き、合掌して虛空藏菩薩を禮し、是の言を作す『希有なり大士、乃ち能く此の無盡の藏を安じて虛空中に在り、普く雨らして無量の世界を充足し、而も猶ほ盡きず。大士、此の藏を安じて空中に在る、其れ已に久如たる有りや』。虛空藏の言はく『善男子、我れ阿耨多羅三藐三菩提心を發してより已來、常に此の藏を有ちて空中に在り』と。生疑菩薩又問ふらく『大士、阿耨多羅三藐三菩提心を發して已來幾時なる』虛空藏答へて言はく『世尊は當に知りたまふべし、汝之を[三八]問ふべし』と。

生疑菩薩卽ち佛に白して言はく『世尊、虛空藏菩薩の阿耨多羅三藐三菩提心を發してより已來、

【三七】佛、菩薩の、衆生を濟度せん爲、機に應じて形をかへて、化體を現ずるをいふ。

【三八】この一段、唐譯は前三六一頁の「諸の法性を說かば云云」の偈の前に置き、舍利弗と佛との問答とす。

こと無き、是を名けて空と爲す。佛空を說くと雖も、終に無說なり、空性は說くべからず、是の故に空と名く。幻化・夢・野馬・影・響の如し、諸佛の法を說くこと、皆悉く是の如し。衆生を導かんが爲に、是の如き喩を說く、眞淨の義は更に譬喩無し。諸法は無相なるも、相を以て說く、相及び無相は、法性に倶に無し。實相を相と爲すも、空は亦無相なり、此の相を體せば、是を菩薩と爲す。滯無く礙無く、戲無く動無く、始無く終無き、是を菩薩と爲す。衆生を離れず、衆生の數に非ず、衆生の性の如くなる、是を菩薩と爲す。喩へば幻師の、衆の幻人を殺すも、實には死者無きが如く、度する所も亦爾り。幻と衆生と、泥洹と佛法と、同一の性にて、性無く相無きを知る。此の大士は無漏の空藏を得、一切を充足して窮盡すべからず。昔植えし衆德の故に斯の藏を得、貯聚有らずして、乃ち能く是の如し。能く諸法の因緣生なるを知らば、其の藏無盡にして思議すべからず。救世の大仙は、四の無盡を說く、空及び道心と、衆生と佛の行となり。若し財是れ實ならば、則ち貯聚すべきも、實と無實とに非ず、是を以て無盡なり。[三三]究竟の空法は、已に無盡を盡し、盡と不盡と無し、是を無盡と謂ふ。此の門を知らば菩提に近き、此の門に住するが故に、速に菩提を成ず』[三四]と。

『虛空藏菩薩の神力を以ての故に、上空中に於て、是の如き等の妙法及び財を雨らし、三千大千世界の一切衆生をして、無量不可思議の快樂を得、所願具足し、患苦有るの衆生は藥の除愈を蒙り、孤窮の衆生は無量の珍寶を得、繫閉の衆生は開悟解脫を得、諸根の不具なる者は悉く具足するを得、應に刑戮を被るべき者には、空中に諸化人を雨らし、代つて之を受けしめ、親愛の久しく別れたるをば悉く歡會するを得しめ、憂[三五]箭を被る衆生は悉く憂無きを得、[三六]三塗に墮せる衆生は、光の身に觸るるを蒙むるに一切の苦を除き、身心快樂ならしめたり。

爾の時此の三千大千世界中の衆生、各各飲食遊戲し、五欲具足して共に相娛樂し、或は施を行じ

【三三】唐譯相當文に究竟滅盡法、盡法無所盡、無盡無不盡是故說無盡。
【三四】唐譯第四卷終。
【三五】箭、麗に煎とす、今宋等の三本に從ふ。
【三六】三塗は火塗(地獄)、血塗(畜生)、刀塗(餓鬼)の稱。三惡趣なり。

『諸の法性を說かば、虛空等の如し、今其の門を說かん、衆咸諦聽せよ。空の高無く、亦下有ること無きが如く、高下無きを以て、亦體性無し。空の生無く亦滅有ること無き如く、生滅無きを以て、性敗壞せず。空の增無く、亦減有ること無きが如く、增減無きを以て、諸法の相に同じ。空の明無く、亦闇有ること無きが如く、明闇無きを以て、心性亦爾り。日の空を照らし、亦喜有ること無く、照らさざるも憂へざるが如く、智者の學するも爾り。鉾箭を雨らすも、空を傷けざるが如く、行者の空を修する、亦傷くべからず。空水の潤して、喜悅有ること無きが如く、智者は利に稱ひて、亦喜悅無し。空の毀譽に、分別有ること無きが如く、智者の毀譽における、亦復是の如し。大地を動かすも、空の終に不動なるが如く、智者は依無く、法性を動ぜず。〔三二〕千の火災も、虛空を燒かざるが如く、煩惱を知れば、燒く所と爲らず。空の常住にして、敗壞有ること無きが如く、諸法も亦爾り、常住の法界なり。喩へば虛空の一切の色を受くるが如く、法界も亦爾り、一切の法を受く。空の色に非ず、相の見る可からざる如く、心性も是の如く、空に同じくして無相なり。虛空の假名にして形貌有ること無きが如く、心・意・識も亦然り、亦假名もて說けるなり。空の無邊にして、終に取るべからざるが如く、大人の智も然り、虛空と等し。鳥の空を行くや、足跡有ること無きが如く、菩提を行ずるも然り、行は見るべからず。身滅すれば過去は虛空等の如く、現在の諸陰は虛空の相に同じ。四大も亦然り、同じく虛空の如く、三災の後の如くにして、諸の異相無し。一切衆生は空を滿す能はず、凡夫も是の如く、五欲滿つること無し。若し聖智有りて、一切の法を知れば、彼は足りて求むる無く、婬の貪著を離る。空の廣大にして邊崖有ること無きが如く、佛法も亦爾り、邊際有ること無し。諸法の性是れ佛法なりと知れば、彼は物に依らず、亦物を捨せず。物と非物とを知りて實際に任せば、物と非物とに於て、二相有ること無し。聲を以て空を明すも、空性は聲に非ず、音聲有る

【三二】麗本に乾大炭とす、いま宋等の三本に從ふ。

たれば、是の因緣を以て常に虛空藏と名く。善男子、爾の時の王子吉意は、今の彌勒菩薩是なり。爾の時二萬の王子——彼の佛法中に於て出家したる——は、今虛空藏菩薩と來れる此の衆中の聽法者是なり。彼の佛法中に於て先に出家したる彼の王の內外眷屬及び王子所化の衆生は、今現に十方に在つて菩薩道を行ず。是の故に速辯菩薩、應に常に戒聚を淨め、本願を增長すべし。戒聚を淨め本願を增長するを以ての故に、欲に隨つて所作皆能く成辦せん』と。[二六]

[二七]爾の時、衆中に諸の菩薩有り、渴仰して虛空藏神變の力と、虛空藏の相貌云何とを見んと欲したり。爾の時世尊、衆生の心所念を知り、卽ち虛空藏菩薩に告げて言はく『善男子、汝の神變と虛空藏の相とを現ぜよ』と。爾の時虛空藏菩薩、卽ち稱一切衆生意三昧に入り、入り已つて此の三昧力を以ての故に、此の三千大千世界の妙寶莊嚴堂上の虛空中に於て、種種の妙物を雨らし、衆生の欲する所に隨つて、盡く之を給足す。所謂華を須たば華を雨らし、鬘を須ち香を須ち、末香を須ち塗香を須ち、繒蓋を須ち幢幡を須ち、種種の音樂を須ち、嚴身の具・瓔珞・衣服を須ち、餚饍・飲食を須ち、車乘・翼從を須ち、金・銀・琉璃・頗梨・車渠・馬瑙・眞珠・珊瑚を須たば、是の如き等の種種の珍寶を雨らし、意に隨つて之に與へ、法を須ち法を欲し法を樂ふ者有れば、虛空中に於て、樂聞する所に隨ひ、衆の法音を出して耳根を悅可す、所謂契經・音合偈經・受記經・偈經・結可經・因緣經・雙句經・本生經・勝處經・方等經・未曾有經・大敎勅法など、是の如き等の經を須たば、盡く出して之に應じ、譬喩を須つ者、那羅等の變音を須つ者、巧言語音を須つ者、種種の雜音を須つ者、甚深音を須つ者、方便の淺音を須つ者、是の如き等の音を須つ者には、盡く出して之に應じ、聲聞乘の度を須つ者には四諦の法音を出して之に應じ、緣覺乘の度を須つ者には甚深の十二因緣の法音を出して之に應じ、大乘の度を須つ者には六波羅蜜不退轉の法音を出して之に應じ、又空中に於て諸の妙偈を出して曰はく

【二六】 以上この物語は唐譯と殆んど全同と云ひ得。

【二七】 この一段、唐譯は、寶莊嚴、時王、醫王、摧衆趣、戒莊嚴、普遍光明などの諸菩薩の問によりて虛空藏菩薩の詳說する所たり。

【二八】 梵の吠瑠璃(Vaidūrya)の略、青色の寶石なり。

【二九】 梵の娑波致迦(Sphaṭika)の訛略なりといふ。此の方の水精に當る。

【三〇】 梵に牟娑羅揭婆(Musāragalva)、舊に車渠といふと。本草綱目によれば、車渠とは海中の大貝なりと。

【三一】 以下十二部經なり、宋等の三本は共に梵音を出す。卽ち修多羅(Sūtra)、祇夜(Geya)、授記(Vyākaraṇa)伽陀(Gāthā)、優陀那(Udāna)尼陀那(Nidāna)、阿波陀那(Avadāna)、闍陀伽(Jātaka)伊帝目多伽(Itivṛttaka)、毗佛略(Vaipulya)、阿浮陀達磨(Adbhuta-dharma)、優波提舍(Upadeśa)經の形式幷にその內容に依つて、一切の經を分類したるなり。修多羅と祇夜と伽陀とは前者に屬し、餘の九は後者に屬す。本文に記す中、譯例の他に見えざるもの二三あれども、大體は上に記せる梵音のそれと順次に相應するものゝ如し。

て正見を得しめよ。諸魔外道を降伏せんが爲の故に」と。爾の時師子進菩薩、卽時に入定し已り、是の如き等の相を現じて、三千大千世界をして六種に振動せしめ、上虛空中に於て種種の妙物――所謂諸の華香・末香・塗香[22]・繒蓋・幢幡――を雨らし、種種の天樂を作し、美饍[23]飮食・瓔珞・衣服・種種の珍寶など、皆空中より繽紛として下る。是の如き寶を雨らして、三千大千世界を滿足せるに、衆生は未だ曾て有らざるを得て大に喜悅したり。

『爾の時地神より諸天――上は阿迦膩吒天に至るまで、皆歡喜踊躍して、是の如き言を唱ふ「此の大菩薩を虛空藏と名くべし、然る所以は虛空中より能く無量の珍寶を雨らして一切を充足したればなり」と。爾の時世尊、其の言を印可して虛空藏と名けたり。是に於て功德莊嚴王は、師子進の是の如き無量の神變を作せるを見、心淨くして踊悅し、未曾有を得、憍慢心を捨して合掌向佛して、是の如き言を作す「希有なり世尊、菩薩の功德智慧は乃ち能く是の如く、自然に無量の珍寶を雨らし、一切を充足して終に窮盡なし。世尊、在家は施して盡する所幾も無し、夫れ出家は神通力を以て施すに崖際無し。在家は施するも彼の意に稱はず、施すと雖も猶ほ悋んで以て苦惱と爲し、出家は施すに能く彼の意に適ひ、亦慳悋せず、苦惱を生ぜず」と。

『爾の時功德莊嚴王、卽ち王位を捨てて子の吉意[24]に與へ、眞の信心を以て鬚髮を剃除し、佛法中に於て出家修道し、出家し已り、善法を增長せんが爲の故に常に精進を勸めたるに、出家して未だ久しく修せざるに、四禪四無量心及び五神通を得たり。時に吉意王は法を以て國を治化したれば怨む者無く、精進を廢せずして世尊に供養したり』と。

佛復速辯菩薩に告げたまはく『善男子、爾の時の功德莊嚴王は豈に異人ならんや、斯の觀を造す莫れ、卽ち拘留孫[25]如來是なり。爾の時の師子菩薩は則ち我が身是なり。爾の時の師子進菩薩は卽ち虛空藏菩薩是なり。善男子、虛空藏菩薩は、爾の時に當り、初め空中に於て無量の珍寶を雨らし

【二二】香を身又は手に塗りて、以て佛に供養するなり。繒布を以て作れる大蓋を繒蓋といふ。
【二三】饍は膳に同じ。

【二四】唐譯に勝慧とあり。

【二五】梵に Krakucchanda. 滅累、成就善妙など譯す。過去七佛の第四佛にして、現在(賢劫)の千佛の最首なり。賢劫の中、人壽六万歲の時に出世したりといふ。

屬皆歡喜し、七十六千億の衆と倶に、皆無上菩提の心を發し、皆言ひけらく「我れ已に道心を發す、誓つて一切の諸衆生を度せん、我等〔三〕妙行もて衆生の爲に、正覺を成じ已つて之を度脱せしめん」と。

『爾の時功德莊嚴王、佛より斯の如き等の偈を說けるを聞き、及び神變を見已り、復堅固なる菩提の心を增益し、佛足を頂禮して佛に白して言はく「唯願はくは、世尊及び菩薩弟子大衆、我が八萬四千歲の請願を受け、衣服・飲食・臥具・醫藥を以て、須つ所を給侍せしめたまはんを」と。

『爾の時、世尊及び諸の大衆は、王を憐愍せんが爲の故に即便ち請を受けたり。是に於て功德莊嚴王、佛の其の請を受けたまへるを知り已り、歡喜踊躍して頂もて佛足を禮し、遶り已つて便ち去る。時に王子師子と師子進、及び二萬の王子は世の榮位を捨て、佛法中に於て鬚髮を剃除し、出家修道し、勤行精進して樂うて善法を求めたり。師子及び師子進は出家して久しからざるに、五神通を得て堅固不退なり。彼の佛、此の二人の神通を得たるを知り、其の威神力を加へて、常に衆生の爲に妙法を演說せしめたり。彼の二比丘、即ち彼の三千大千世界に於て、國より國に至り、四天下より四天下に至り、佛事を施作し說法を爲せり。彼の二比丘は、是の如き因緣を以て無量阿僧祇の衆生を化度し、無上の大乘に於て堅固不退ならしめたり。

『爾の時功德莊嚴王は、八萬四千歲中に於て、諸樂を以て具に世尊及び大衆を供養し已り、一切群臣のために前後侍從せられ、聽法の爲の故に往いて佛所に至り、是の念を作す「我が諸子等は、鬚髮を剃除して出家修道し、常に供養を受けて自ら施を行ぜず、亦未だ人に過ぐるの法を得たるを見ず。寧ろ家に還り財を捨てて布施し、諸の功德を修すること、我が所種の善根の如くすべきや」と。

『爾の時、普光明王如來、即ち功德莊嚴王の心を知り、師子進菩薩に告げて言はく「善男子、汝の自在功德神力を現じ、大菩薩に變現して、此の大衆をして普く見聞するを得しめ、彼の邪心を迴し

〔三〕妙は、麗、宋、元、に渉とす、今明本に從ふ。

く諸の義趣を分別せば、是の故に能く胎形を受くることを捨し、清淨蓮華中に化生す。我等は上[一三]醫王佛より、此の普光明如來の、智慧無等にして思議す叵ざるを聞く、故に此に來至せり、法の爲の故なり。願はくは父王と共に佛所に到り、大法王を禮拜供養せん、諸佛世尊の甚だ値ひ難きこと、亦[一四]優曇波羅華の如し」と。王是の語を聞くや甚だ意に適ひ、時に會せる大衆皆歡喜し、百千萬種導かれて王に從ひ、俱供に發ち進んで佛所に向へり。到り已つて瓔珞及び雜華、塗香伎樂諸の供具もて、供養圍遶して七匝し已り、合掌敬禮して前に在つて立てり。爾の時師子と師子進は、兩足によつて天・人尊を頂禮し、口を以て足を鳴らして讃歎せるに、言辭妙巧にして法義に順じたり。[一五]「世尊は是れ舍たり・依止たり・護たり、世の盲冥の爲に大明を開き、衆の心行を體して彼岸に到り、信樂する所に隨つて能く悅可したまふ。今此の大王は王位を恃み、色・聲・香・味の法に貪著す、是の故に佛所に來至せず、佛を供養することを失して法を聞かず。快い哉、世尊、大悲を生じ、願はくは無上菩提の法を說き、此の大王をして道心を發し、堅固にして佛智より退せざらしめたまはんを」と。佛八十多羅樹「の高さ」に踊り虛空に處在つて王に告げて言はく、「人王、汝今至心に聽け、聞き已つて如法に奉行せよ。五欲の無常なること喩へば夢の如く、命は喩へば草木のごとく霜露の如し、王及び國邑は幻化の如し、

[一六]是の故に智者は足貪せず。欲を習行せば厭足無く、[一七]習欲は更に渴愛の心を增す、[一八]習猶ほ未だ足らざるがごとくにして命終す、唯聖智を得る者乃ち足るとす。汝當に善く己身を順觀すべし、諸陰は幻の如くにして堅固ならず、四大は其れ猶ほ毒蛇の如く、[一九]六情の無實なること空聚の如くなり。妻子珍寶及び王位など、命終の時に臨んで隨ふ者無し、唯戒及び施と不放逸とは、今世後世に伴侶と爲る、我が神足力の無畏にして、諸の相好を以て身を莊嚴し、[二〇]辭の弟子徒衆等に應ずるを觀ぜよ、是の故に王宜しく道心を發すべし」と。大王即時に法を聞き已り、妻子眷

【一三】唐譯には東方有レ佛名二醫王一といへり。

【一四】唐に優曇鉢華とす。梵に Udumbara 靈瑞、瑞應など譯す。芽出でて一千年、苔みて一千年。開きて一千年、卽ち三千年に一度開く花なりといふ。

【一五】この一句、唐譯相當文に「願爲二拔濟一爲二歸依、於二世盲瞑一作二燈燭、妙二達有情心意樂、隨二彼勝解一能開悟とあり。

【一六】唐譯相當文に誰有レ智者生二貪著一と。

【一七】以下麗本に渴愛更增心とし、宋等の三本は更渴愛心とす。いま後者に從ふ。唐譯も後者の如し。

【一八】唐譯に愚夫隨レ境無二休息一と。

【一九】唐譯に六處喩若二空村邑一とす。

【二〇】佛の辯才を具したまへるをいふ。

有り、人宮は地に在り天宮は虛空に處する、此を以て異と爲せり。是の普光明王如來の壽命は十六中劫にして、純ら菩薩を以て僧と爲し、六十那由他有り、皆神通を得て遊戲し、菩薩の行に於て悉く自在を得たり。

『爾の時、三千大千世界の中に處して一の四天下有り、名けて日明と曰へり。如來中に於て阿耨多羅三藐三菩提を成じ、三千大千世界に於て佛事を作せり。彼の日明の四天下中に、轉輪聖王有りて〔八〕功德莊嚴と名け、四天下に於て自在を得、七寶成就したり、是の大聖王、四天下中に於て七寶の臺――東西八由旬・南北四由旬なる――を起し、周匝に五百の園觀有り。是の功德莊嚴聖王に、三十三萬六千の宮人婇女有り、端正殊妙にして天の玉女の如く、四萬の童子有り、端正勇健にして、各半〔九〕那羅延力と等し。

『爾の時、功德莊嚴王は童子婇女及び諸の眷屬と倶に、出でて大樂莊嚴園に詣りて遊觀し、作樂歌舞して以て自ら娛樂したり。爾の時衆中に二大夫人有り、〔一〇〕一を德威と名け、二を德光と名けたり。本の坐處を離れて一樹下に詣り、諸行の無常なるを思惟す。是の思惟を作せる時に當り、各一子の膝上に化生する有り、端正殊妙にして第一微妙の色を成就し、相好嚴身にして觀る者厭くこと無く、身より大光を放つて普く園觀を照すに、上空中に於て諸天唱へて言はく「此の二童子、〔一一〕一は師子と名け、二は師子進と名けん、是より以來常に師子・師子進と名くべし」と。爾の時二子、適生して久しからずして、諸の妙偈を說いて功德莊嚴王を讚へて曰はく

〔一二〕『昔造れる善惡は敗亡せず、諸佛を供養せること亦失せず、純至に菩提心を捨せず、堅く所聞を持して智を忘れざれ。調伏自守して戒を失せず、忍辱軟和にして善く防護し、能く恩を報じて善業を造り、能く精進を勸めて道を失せざれ。善能く專心に諸根を定め、心能く分別して慧を思惟し、智を以て能く不濁業を造り、此の淨法を以て菩提を證せよ。煩惱の爲に染著せられず、善能

〔八〕唐譯に福報莊嚴とあり。

〔九〕Nârâyaṇa の音寫、人本生と譯す。天の力士にして其の力量は大象の七十倍なりと云はる。

〔一〇〕唐譯に一を吉祥威、一を吉祥光とす。

〔一一〕唐譯に師子、勇步といふ。

〔一二〕本經の偈文は、異譯のそれと合ふこと極めて稀なるに、この偈唐譯と殆んど全同なり。初句の終なる七の字、麗本忘に作る。今宋元明に從ふ。

卷の第十六

虛空藏菩薩品〔一〕 第八之三

〔二〕爾の時、會中に一菩薩の名けて〔三〕速辯と曰へる有り、卽ち座より起ちて偏袒右肩し、右膝著地・合掌向佛して佛に白して言はく『世尊、此の虛空藏菩薩は、何の因緣の故に虛空藏と名くるや』と。佛速辯菩薩に告げたまはく『善男子、譬へば大富長者は、諸の民衆多にして、無量の寶藏に財寶充滿し、能く布施を行じて心に慳悋無し。若し施を行ふ時、貧窮のもの往けば意の須つ所に隨つて、大寶藏を開き悉く能く給與せん。彼の諸衆生は皆適意を得、長者施し已つて心喜んで悔無きが如く、善男子、虛空藏菩薩も亦復是の如く、常に功德を行じ、方便力を成就して迴向するが故に、戒身善く清淨なるが故に、神足力を成就するを得るが故に、純至究竟にして善く清淨なるが故に、所願增益成就の故に、一切法の幻化の如くなるを知るが故に、如來の神足力を得るが故に、虛空中に於て衆生の須つ所に隨つて、若しは法施若しは財施を、盡く能く施與して皆歡喜せしむ。是を以ての故に、善男子、是の賢士は、此の方便智を以ての故に虛空藏と名く。

〔四〕復次に善男子、過去無量阿僧祇劫に、復無量阿僧祇劫——思議すべからず・稱すべからず・量るべからず・算數すべからざる——を過ぎて、爾の時佛有つて出世し、〔五〕普光明王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、世界を名けて〔六〕大雲清淨と曰ひ、劫を〔七〕虛空淨と名けたり。是の大雲清淨世界は、豐足熾盛・安穩快樂にして諸の天人多く、地の平かなること掌の如くにして、諸の沙礫・荊棘無く、寶繩の界道は雜寶もて莊嚴せられ、軟かなること天衣の如く、閻浮檀金の華、遍く其の地に布き、衆寶間錯せり。世界の衆生は上中下無く、人天の同等なること兜率天の如し。彼の世界には、村營・城邑・聚落有ること無く、是の諸天・人は各寶樓臺觀

〔一〕この卷は唐譯第四、第五に亙るものにして、兩者を比するに前後出沒あり。開題中の「各品概要」虛空藏品の條參照。
〔二〕唐譯、卷第四の前半。
〔三〕同に迅辯といひ、次の問答は虛空藏との間に行はれその說相は兩者異る。
〔四〕唐譯は、この物語をば、後の諸種の三昧(三七二頁參照)を說ける後に出し、寶吉祥菩薩に對する佛の說法とす。
〔五〕唐譯に無垢炎無量光王とあり。
〔六〕同に彌佉羅とす。
〔七〕同に功德光とす。

からず、道を得ば染汚無し』と。

此の諸法門を分別することを說ける時、七十二那由他の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三萬二千の菩薩無生法忍を得たり。時に大寶莊嚴堂は、六種に震動し、大光普く照らし、諸天は虛空中に於て百千種の伎樂を作し、種種の天華を雨らし、是の如きの言を說けり『此の諸衆生は如來印の爲に印せられて、如來法中に入り、此の法門を聞いて心に信解を得、受持利通して能く他の爲に說き、如法に修行す』と。佛に白して言はく『世尊、我等は一切、此の佛土に向ひ、深心もて供養恭敬禮拜す、如來・應供・正遍知の出世を以ての故に、此の方便の法門を說きたまへるを聞き、及び此の土の菩薩を見る』と。

爾の時、虛空藏菩薩、佛の解說を聞き已り、心淨く歡喜し、心淨歡喜し已つて、無價の寶網を以て佛を供養しまつるに、寶網中より大光明を放ちて、十方の諸佛國土を照らす。供養し已つて佛に白して言はく『世尊、未曾有なり、如來の無礙智は是の如く甚深にして解し難し、如來應供正遍知は聞く所の法門の如し、佛は無礙智を以て如實に解說したまへば、一切の大衆皆歡喜を得たり』と。

大方等大集經卷第十五

顚倒の想を斷つことを說いて、無量の衆生を敎化す。諸陰・界・入は、佛界に異ならざるを說き、虚空性の如くなるを知らば、則ち佛界に入る。言語諸文字は、猶ほ呼聲の響の如く、內に非ず外に非ざるを知らば、卽ち陀羅尼を得。受持讀誦して利し、進んで諸法を說くことを求め、我無く法想無くして、陀羅尼に安住す。諸佛の所說を持し、善く說いて衆心を悅ばしめ、諸の禪定を失せざる、是れ陀羅尼の力なり。文を持せず誦せず、諸法を集積せず、常に說法して無礙なること、龍の大雨を降らしむるが如し。住する無く障礙無くして、無量の契經を說き、衆生の想を生ぜず、慧者は是の辯を得。佛力を以て法を說き、自の威儀を莊嚴し、衆を悅ばしむるに所樂に隨ふ、是の辯は佛の所許なり。法の實性を知る者は、虚空と等しく、我・人・壽命無きを知る、是の如くして佛法を持す。衆生は涅槃に同じ、究竟して生・滅せず、是の不動の忍を得る、是を不放逸と爲す。諸陰は幻の如く、諸界は法性の如く、六入は空聚の如しと見れば、陰魔を離るるを得。使は浮雲の如く、究竟して和合無きを知り、法に於て妄想無ければ、則ち煩惱魔を離る。衆生は不生なり、生無ければ則ち死無く、諸法去來無きを知れば、是の如くして死魔を過ぐ。愛無く動無ければ、道を行じて道想無く、我と人無くして悲を行ぜば、則ち能く衆魔を降す。智・識の平等を知り、爲・無爲に住せず、衆心は幻の如しと知れば、心健にして能く壞する無けん。此と彼とに障礙無く、勝法の船を成就し、衆を渡して衆想無ければ、是を大船師と謂ふ。空にして我有ること無きを知り、生死の渴愛を淨め、將つて衆生を導渡する、是を大導師と謂ふ。善く進退の相を知り、法に隨つて依止し、方便もて涅槃を示すを、佛は善導師と說くなり。心と心の相續とを知り、二心共に俱ならざれば、是を心性を知ると名け、佛能く衆を護ると讃へたまふ。諸法の性淨にして、空のごとく、水中の月の如きを知らば、知る者煩惱を離る、是を淨衆生と謂ふ。一を知れば餘も亦然り、諸法に入れば夢の如し、虚空は取るべ

等しき者無く、能く毀損する無く、所作の諸業終に悔退せず、所作の諸業愚癡を[一三九]雜へず、所作の諸業皆能く觀知し、所作の諸業終に動轉せず、所作の諸業究竟して吉祥ならば、是の菩薩は、所作の業憍慢に非ず、所造の慧と所作の業とは愚癡の所造に非ざるを知る。是の如き所作の善業により、一切三昧の諸陀羅尼門は、悉く現在前して他より聞かず。菩薩若しは諸佛を見、若しは諸佛を見ざるも、終に助菩提道の諸善根を退轉せず、若し適意の善知識・不適意の善知識に遇ふも、菩提の法を退せず。此の菩薩は一切の障礙地を過ぎ、一切の諸魔結使を離れて三解脫を修し、般若波羅蜜力の故に、疾く佛道・自然道・一切智道・如來道を得。是を菩薩の威儀の行成就し、諸の闇冥を離れて勝光明を得、諸法中に於て自然智を得、速に一切智行を成就するを得とは爲す』と。

爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言はく、

『已に邊を離れて無礙に、慧の功德もて莊嚴し、彼れ諸の著相を離れて、無上道に迴向す。我慢と憍慢とを捨てて、慧者は智を莊嚴し、無障礙解脫もて、一切智を具足す。[一四〇]色に非ず種性に非ずして佛を念じ、功德に非ずして[一四一]常に法身を憶念す、是の念は佛の所許なり。[一四二]欲を離れて性寂靜に、相に非ず明闇に非ず、心無く意行無き、是の如きを念法と名く。聖は無爲無愛にして、諸の煩惱の染無く、解脫を以て稱を得るを、念僧の無礙と名く。已に一切の受を捨て、陰・界・入の行無く、諸の動念を解脫するを、究竟して捨を念ずと名く。無漏の戒に依らず、身口意を行ぜず、三有に生過せざるをば、無漏戒を念ずと名く。[一四三]天の如く淨無垢なるは、兜率灌頂天なり、自の業報を憶念して、當に天中の天と作るべし。世尊の正法を持し、諸の煩惱を捨離し、法と非法を解脫せば、是れ世尊の法を持するなり。佛の道相を得るが如く、法を受持すること亦然り、善く[一四四]眞際を思惟せば、法の攝持すべき無し。我の性淨なるが故に、諸法の性も亦淨なるが如く、衆生の相の如くなるを知つて、衆生を敎化す。衆生の增を見ず、亦復減をも見ず、

を賢といひ、既に無漏智を發して理を證し惑を斷じ、凡夫の理を捨てたるを聖といふ。善知識とは、善は我を益して善道に導くものをいひ、知識とは、其の心を知り形を識るの謂にして朋友の義なり。

【一三九】麗本に離とあり、宋元明本に雜とあり、今後に從ふ。

【一四〇】佛を念ずるに當り、心物動して、その色、相乃至種姓に著せざるをいふ。

【一四一】麗本に不と作し宋等三本常と作す。いま後者に依る。

【一四二】法體の湛然無相なるをいふ。

【一四三】唐譯ー當文に、淨居諸天體無垢、及住兜率紹法王とす。

【一四四】眞實の邊際、至極の義。空平等の眞性をいふ。

の精進を捨せず。是の菩薩自ら多聞を成就し、一切衆生に於て大悲心・無愛心・不望報心を生じ、乃至一切衆生に輕賤を生ぜずして説法を爲し、一日より乃至七日にして食想無く、乃至命終まで説法を捨せず、説法の善根を以て海印三昧に廻向し、所聞の法に隨つて受持讀誦[128]通利し、善く義趣を知つて文字に依らず、眞實に堅く持して終身捨せず。菩薩は大欲精進を發し、此の大欲精進力を以ての故に、久しからずして便ち海印三昧を得、此の三昧を得已り、即ち自然に無量阿僧祇百千萬の法門を得、無量阿僧祇百千萬億の[129]修多羅を得、他より聞かずして自然に能く一切諸佛の所説を説いて悉く能く受持し、能く一切衆生の心行を了す。善男子、喩へば閻浮提の一切衆生の身及び餘の外色の如き、是の如き等の色は海中に皆印像有り、是を以ての故に[130]大海印と名く。菩薩も亦復是の如く、大海印三昧を得已り、能く分別して一切衆生の心行を見、一切の法門に於て皆慧明を得。是を菩薩、海印三昧を得、一切衆生の心行の所趣を知るとは爲す。

『善男子、[131]云何が菩薩は諸塵界の無礙なるを知ることを得るとならば、若し菩薩、眼の空を以ての故に色も亦空なるを知り、色の離を以ての故に眼も亦離なるを知り、耳鼻舌身も亦是の如く、意の空の故に法も亦空なるを知り、法の離を以ての故に意も亦離なるを知る。菩薩は如實に空性離性を知り、内外の法に於て障礙有ること無く、[132]諸結の本性淨なるを知るが故に則ち使を起さず、一切法に於て所有著無し、諸法に著處・著法・著者を見ざるを以てなり。是を菩薩、能く諸の塵界の無礙なるを知るを得とは爲す。

[133]『善男子、[134]云何が菩薩は[135]威儀の行成就し、諸の闇冥を離れて勝光明を得、諸法中に於て[136]自然智を得、速に一切智の行を成就するを得とならば、若し菩薩、[137]所作を發起し正行を修習し、諸業盡く是れ如來所許の智者の所讃にして――所謂身口意の業――此の業を行ずるを以ての故に、諸佛及び餘の[138]賢聖善知識等を悦可し、所造の諸業は、能く譏嫌する無く、最勝無上にして與に

【一二八】その義に通じて無礙なること、利刄の如くなるをいふ。
【一二九】梵に(Sūtra)、契經と譯す。
【一三〇】有情一切の心色の類、乃至音聲、諸影像など、皆彼の菩薩心海中に現ずること、諸の色類の影像大海中に現ずるが如きをいふ。
【一三一】虛空藏所問の第二十五に答ふ、初句、唐譯に得㆓無染著心㆒如㆓虛空風㆒無㆑有㆓障礙㆒といふ。
【一三二】結も使も共に煩惱をいふ。心身を繫縛し苦果を結成すれば結といひ、衆生に隨逐し、衆生を驅使すれば使と名く。
【一三三】唐譯、卷第四。
【一三四】虛空藏所問の第二十六に答ふ。
【一三五】同に善知㆓軌儀㆒……不㆑隨㆓他緣㆒得㆓自然智㆒、速到㆓大乘一切智智㆒と。
【一三六】功用を借らずして、自然に生ずる佛の一切種智をいふ。
【一三七】身口意の三業を能作となすに對し、其の發動造作を所作といふ。
【一三八】外典に聖賢といふに同じ。善に和し惡を離るるも、未だ無漏智を起して理を證し惑を斷ぜず、凡夫の位に在る

一一の毛孔より無量の法門を出すを得、無量の法門を出す力を以ての故に、能く常に法施を以て衆生を利益し、慧と方便波羅蜜とを並べ修するを以ての故に[一一九]分身智を得、此の分身智力を以ての故に、能く諸趣中に於て[一二〇]在在に身を現じて群生を化度し、常に無相にして諸佛に敬侍するを以ての故に見・聞に厭く無きを得、此の無厭見聞の身を以ての故に、其れ衆生有つて見聞を得る者は、彼の諸衆生乃至大涅槃を作すの因と爲る、是を菩薩、功德資糧を莊嚴して衆生を利益すとは爲す。

『善男子、云何が菩薩、[一二一]世に無佛の時、能く佛事を作して衆生を化度するとならば、若し菩薩已に菩薩の十力を成就し、已に菩薩の四無畏中に於て自在を得、已に菩薩の十八不共法中に於て他より受けず、已に如來力・無所畏・不共法等を修し、已に[一二二]首楞嚴三昧に遊戲するを得、已に[一二三]四辯に於て智力の自在を得、已に諸佛の法に於て灌頂の正位を得ば、一切諸菩薩の行に於て佛の神力に次ぐを得。若し菩薩有つて是の如き等の法を成就せんに、若しは諸佛土の衆生、應に佛身を見て化を受くべきも、然も彼の土、世に佛ましまさぬ時、卽ち彼の國に於て入胎を現じ、初生を現ずる時、出家を現ずる時、道場に坐し轉法輪を現ずる時、壽命を捨して涅槃に[一二四]來入するを現ずる時、亦能く大涅槃を示現し、亦能く法の住する時節の久近を現ずるも、亦復菩薩の行法を捨せず、化する所を用つて以て滿足と爲さず。是を菩薩、世に無佛の時、能く佛事を作して群生を化度すとは爲す。

『善男子、[一二五]云何が菩薩は[一二六]海印三昧を得て[一二七]能く一切衆生の心行を知るとならば、若し菩薩、多聞なること海の如くならば、慧聚を成就して常に法を勸求す。菩薩は聞法の爲の故に、盡く能く珍寶庫藏を施與し、聞法の爲の故に盡く能く僕從・給使・妻子・眷屬に施與し、聞法の爲の故に家・飾好・嚴身の具を捨し、聞法の爲の故に謙下して給事し、聞法の爲の故に國土・榮位及び己が身命を捨つ。菩薩は是の如き等の無數の方便を以て、法門を勸求して所行を恃まず。菩薩は聞法の爲の故に、去つて一由旬乃至百由旬に至り、一の四句偈を聞きて受持讀誦し、廣く人の爲に說かんが爲に、是

【一一九】分身とは、諸佛の方便力を以て有緣の衆生を度せんが爲に、身を十方に分ちて成佛の相を現ずるなり。
【一二〇】在々處々の意。
【一二一】虛空藏所問の第二十三に答ふ。
【一二二】梵に(Śūraṃgama)、健相、一切事竟など譯す。佛所得の三昧の名なり。
【一二三】四種の辯才は智を以て體と爲すが故に。
【一二四】來、麗本宋と作す、今宋等の三本に從ふ。
【一二五】虛空藏所問の第二十四に答ふ。
【一二六】佛所得の三昧の名なり。大海中に一切の事物を印象する如く、湛然たる佛の智海には一切の法を印現するをいふ。
【一二七】唐譯に不レ染ニ一切有情心行一とす。

望する、是を魔業と爲し、大慈を捨離して無生を觀ずる、是を魔業と爲し、無爲法を證せんと欲する、是を魔業と爲し、有爲の功德を厭離する、是を魔業と爲し、衆生を愍まざる、是を魔業と爲し、[二〇]。

尊長に謙下ならざる、是を魔業と爲し、兩舌を習行する、是を魔業と爲し、[二一]諛諂多姦なる、是を魔業と爲し、己が淨行を顯はす、是を魔業と爲し、惡を作して恥ぢざる、是を魔業と爲し、法を流布せざる、是を魔業と爲し、少德を以て足れりと爲す、是を魔業と爲し、結使を遮せざる、是を魔業と爲し、心垢を捨せざる、是を魔業と爲し、沙門の垢を忍ぶ、是を魔業と爲す。善男子、若し一切不善の法を行ずることに親近し、一切善法を遠離するは盡く是れ魔業なり。善男子、是を諸の魔業と謂ふ。是の業を行ぜば菩提の道を障ふ。彼の諸菩薩は已に過ぎて捨離す、能く[二二]正受もて行ずるが故に。云何が正受の行なる、若し菩薩[二三]四法を成就せば能く正受もて行ず。何等か四と爲す、一に諸波羅蜜の法に於て懈退の行無し、二に欲・進及び不放逸を捨せず、三に正しく方便・大慈の法中に住し、四に甚深の無愛無樔窟の法門に入るなり。善男子、菩薩是の四法を成就し、正受もて行ずるが故に、能く諸の怨敵を破す、是を菩薩、能く諸怨を破し[二四]四魔を去離すとは爲す。

善男子、[二五]云何が菩薩は功德[二六]資糧を莊嚴して衆生を利益するとならば、若しは菩薩、善根を迴向して[二七]無等等に向し、若しは種ゆる所の善根有り、若しは布施、若しは愛語、若しは利益、若しは同事もて盡く以て一切衆生に施與し、戒衆を淨むるを以ての故に自在力を得、此の自在力を以ての故に、諸衆生の應に[二八]愛樂すべき所に隨つて之を化度し、功德を種えて厭く無きを以ての故に無盡の寶手を得、此の無盡の寶手を以て能く衆生に無量の富樂を施し、無邊の智慧資糧を求むるを以ての故に、無礙陀羅尼辯を得、此の無礙陀羅尼辯を用て能く一切諸佛の所說を總持し、能く妙法を說いて衆心を悅可し、善く身心を調するを以ての故に、諸通を退せず、此の不退の諸神力を用ての故に、能く無量の佛刹を過ぎ、無數の方便を以て多衆生を度し、常に法を勸求して疲倦無きを以ての故に、

【二〇】以下二句、唐譯に所謂好レ疑、不二善通達一如理作意、是爲二魔業一とす。
【二一】諛、諂ともにへつらふなり、此の節、以下唐譯異るもの多し。
【二二】梵に三昧(Samaya)、禪定の異名なり。
【二三】この四法、唐譯には、不レ忘二菩提心一故。勤修二六度一不放逸故。住二於善巧智一成二就有情一故。住二甚深理一護二持正法一故を擧ぐ。
【二四】麗本に敵と作し、宋等の三本魔と作す、今後に從ふ。
【二五】虛空藏所問の第二十二に答ふ。初句、唐譯に云何菩薩、積二集無量一福德資糧一、爲二諸有情一作二所依止一とす。この節唐譯と合はず。
【二六】資は資助、糧は糧食なり。人の遠きに行くや、糧食を以て己が身を資助するが如く、菩薩の果を證せんとするにも亦善根功德の糧を以て己が身を資助するをいふ。
【二七】梵に(Asamasama)、佛の尊號なり。佛道超絕して與に等しきもの無ければ無等といひ、唯佛と佛と等しければ等といふ。
【二八】愛は元明二本に從ふ、麗宋は受とす。

を知るが故に、[一〇二]一切法の夢想の如くなるを知るが故に、[一〇三]一切諸佛は威神を加ふるが故に。是を菩薩十二法を成就し、生無くして生を現じ、起無くして起を現じ、而も一切の生死を現じ、一切諸佛の大會に於て其の身を示現し、佛在す國に在つて皆現に生を受け、而も常に眞法身を動ぜずと爲す、是を菩薩、自在に生死を受くることを示現するを得とは爲す。

『善男子、[一〇四]云何が菩薩は諸の怨敵を破し四魔を去離するとならば、若し菩薩、翹勤修習して、五陰の幻の如くなるを觀ぜば、陰魔を離るるを得、諸法の性淨なるを觀ぜば、煩惱魔を離るるを得、一切法は緣より生じて性の成就せざるを觀ぜば、死魔を離るるを得、[一〇五]一切法は緣の莊嚴する所にして是れ無常敗壞の相なるを觀ぜば、天魔を離るるを得。菩薩は是の如く觀ずるが故に四魔を離るるを得、菩提に發趣して終に懈息せず、所有る障菩提の魔業をば、菩薩皆能く遠離す。何をか魔業といふ、所謂心を小乘に向くる、是を魔業と爲し、菩提心を護らざる、是を魔業と爲し、[一〇六]衆生に於て異想を生ずる、是を魔業と爲し、施を行じて報を望む、是を魔業と爲し、[一〇七]生を受けんが爲の故に戒を持する、是を魔業と爲し、[一〇八]色想有つて忍を行ずる、是を魔業と爲し、世事の爲に精進する、是を魔業と爲し、禪に於て著味の想を生ずる、是を魔業と爲し、慧に於て戲論を生ずる、是を魔業と爲し、生死を厭惓する、是を魔業と爲し、諸善根を作して迴向せざる、是を魔業と爲し、煩惱を厭惡する、是を魔業と爲し、罪を犯して覆藏する、是を魔業と爲し、菩薩を增嫉する、是を魔業と爲し、正法を誹謗する、是を魔業と爲し、正法を受けざる、是を魔業と爲し、報恩を知らざる、是を魔業と爲し、進んで諸波羅蜜を求めざる、是を魔業と爲し、法に敬順ならざる、是を魔業と爲し、法を悋惜する、是を魔業と爲し、利養の爲に說法する、是を魔業と爲し、方便を知らずして衆生を化する、是を魔業と爲し、四攝の法を捨する、是を魔業と爲し、毀禁の者を輕んずる、是を魔業と爲し、持戒の者を嫉む、是を魔業と爲し、二乘の行を學する、是を魔業と爲し、[一〇九]正位を悕

加持辯一と。

【九八】虛空藏所問の第二十に答ふ。

【九九】實我ありと執する見なり。唐譯に於二佛所許一見清淨とす。

【一〇〇】以下戒・定・慧の三に就ていふ。戒身とは戒の條々をいふ。唐譯は以下の三句を一句として、戒蘊清淨、從二三摩鉢底一起、於二智慧・方便一而雙運故とす。

【一〇一】唐譯に爲レ滿二本願一、於二生死中一、而受レ生故とあり。

【一〇二】同に知二一切法、不生滅一故とす。

【一〇三】同に以二佛世尊威神加持一、或現二生死一、而不レ染二生死一故と。

【一〇四】虛空藏所問第二十一に答ふ。

【一〇五】唐譯には、不レ退二菩提心一故、超二越天魔一と。

【一〇六】同に於二諸有情一簡別行レ施、是爲二魔業一と。

【一〇七】同に樂二求生處一而持二禁戒一とす。

【一〇八】同に爲レ求二色相一而修二忍辱一とす。

【一〇九】小乘の涅槃をいふ。以下の二句唐に無し。

四なる。善男子、若し菩薩、師長の敎に違逆せざるが故に、能く捷辯を得、諂曲ならざる故に能く疾辯を得、煩惱を捨離するが故に無礙辯を得、[九〇]無我の行の故に無滯辯を得、[九一]兩舌を離るるが故に巧說辯を得、因緣法の無際に入るが故に甚深辯を得、種種の施を行ずるが故に衆音具足辯を得、如來の塔廟を嚴飾するが故に善莊嚴辯を得、菩提心を捨せざるが故に無滅辯を得、善く戒聚を護るが故に無畏辯を得、種種の幢幡・華蓋・寶鈴を施すが故に妙偈讚辯を得、諸尊及び師長を恭敬・供養・給侍するが故に快說修多羅辯を得、昔無量の善根を植えて修習せるが故に善說譬喩本緣辯を得、惡趣の衆生を輕賤せざるが故に無壞勝辯を得、無量の寶藏を施すが故に分別句無盡辯を得、眞實に言說して麁獷無きが故に圓足辯を得、[九二]法を講說する時諍競無きが故に威德無違辯を得、[九三]德淳淨にして法律に順ずる行を以ての故に說法不唐捐辯を得、[九四]法を悋まず己が德を恃まざるが故に斷衆疑辯を得、[九五]求法の時に他を威逼せず恭敬心を生ずるが故に利應辯を得、常に己が過を省みて彼の缺を譏らざるが故に分別文字不錯謬辯を得、[九六]等しく衆生を潤ほして報を望まざるが故に悅可衆辯を得、[九七]大乘を受持し小乘を求めざるが故に問答方便辯を得、我見に著せず平等性に入るが故に以法降伏一切外道辯を得、是を二十四種の、諸辯を成就する因と名く。善能く彼の衆生の應に受くべき所に隨つて法を解說し、錯謬有ること無く、受くる所の法をも亦退失せず。是を菩薩、無障礙なる如來加持の辯を得とは爲す。

『善男子、[九八]云何が菩薩は自在に生死を受くることを示現すとならば、若し菩薩、十二法を成就せば自在に生死を受くることを示現するを得。何等か十二なる。眞の善知識に親近するが故に、[九九]我見を消除するが故に、[一〇〇]戒身を成就するが故に、善く定に入出することを知るが故に、智慧と方便とを並べ修するが故に、深く諸通に入つて遊戲することを善知する故に、如實に諸法の生無く起無きを觀知するが故に、[一〇一]本願の種を淨むるが故に、常に大慈大悲を捨せざるが故に、一切法の幻化の如き

迅疾辯とす。
【八二】唐譯に善詞辯とす。
【八三】この二、同に勝妙莊嚴辯、無沈沒辯とす。
【八四】以下三句は唐譯に、修多羅緣起本事辯。能摧伏他辯とす。
【八五】以下二句は同に說差別無盡句辯。顯現微妙辯とす。
【八六】以下二句の代りに、端嚴威德辯。說法無間辯、大衆莊嚴辯を置く。
【八七】唐はむなし、捐はすつるなり。
【八八】以下三句は同に、世出世法辯。不錯失辯。慈悲喜捨悅可衆心辯とす。
【八九】以下同に宿命通辯。佛所加持辯とす。
【九〇】唐譯に不好雜住故とす。
【九一】同に不離間語故とす。
【九二】唐譯に不㆘輕㆓毀尊敎㆒、及離㆗間他人㆖故とす。
【九三】同に於㆓自得法㆒住㆑持故とす。
【九四】同に於㆑法不㆓師奉㆒如㆑聞說故とす。
【九五】同に觀㆓於一切㆒、皆如㆓師長㆒、不㆑加㆓逼惱㆒、病者藥故、得㆓世出世法辯㆒と。
【九六】同に以㆓平等心㆒、觀㆓諸有情㆒、置㆓涅槃道㆒、不㆑著㆓一切利養恭敬、及名聞㆒故とす。
【九七】同に不㆑謗㆓大乘㆒、不㆑樂㆓小乘㆒、悲㆓愍有情㆒故、得㆓佛所

く解し、言辭辯説に滯礙有ること無く、不了義經に於て善能く進入し、[72]了義經に於て進んで微覺に入り、世諦に於て[73]分別智有り、[74]第一義諦に於て言説無きを知り、諸諦に於て分別智有り、四念處に於て不忘智有り、四正勤等に於て無壞智あり、四神足に於て遊戲智有り、諸根門に於て差別智有り、諸力中に於て無勝智を得、七覺分に於て一切法性を覺する如性智あり、八聖道に於て無退沒智あり、[75]定法中に於て善住心を得、慧法中に於て遍至智を得、[76]明解脱に於て隨順智を得、諸辯中に於て深入智を得、諸神通に於て生起智を得、諸波羅蜜に於て分別智を得、四攝法に於て方便智を得、[77]講法の處に於て不及智を授かり、諸經の義に於て無分別智を得、諸文字に於て無盡智を得、一切衆生に於て稱足智を得、[78]受くる所の解に隨つて説法智を得、一切文字に於て所因辯智を得、一切垢淨に於て如實覺智を得、[79]一切法に於て障翳無き明智を得る、是を陀羅尼と爲す。陀羅尼平等心を得れば、憎愛を去離して能く法雨を受くるに堪え、一切の結使熱惱を斷じ、諸の助道の法に順ず。是を陀羅尼菩薩と爲す。此の陀羅尼に住するが故に、常に行じて失無し、是を菩薩、陀羅尼を得て終に念を失せずとは爲す。

『善男子、[80]云何が菩薩は無障礙なる如來加持の辯を得るとならば、若し菩薩、善淨淳至にして、善く戒聚を護り、諸慢の根を拔き、彼・我の想を離るれば、諸佛世尊は、是の如き菩薩、是れ大法器たるを知つて正法を持せしむ。佛の神力及び自の善根力を以ての故に、[81]捷辯を得、疾辯を得、無礙辯を得、無滯辯を得、[82]巧說辯を得、甚深辯を得、衆音具足辯を得、[83]善莊嚴辯を得、無滅辯を得、無畏辯を得、妙偈讃辯を得、[84]快說修多羅辯を得、善說譬喩本緣辯を得、無壞勝辯を得、[85]分別句無盡辯を得、圓足辯を得、[86]威德無違辯を得、說法不[87]唐捐辯を得、斷衆疑辯を得、[88]利應辯を得、分別文字不錯謬辯を得、悅可衆辯を得、[89]問答方便辯を得、以法降伏一切外道辯を得て、已に是の如き等の二十四辯を成就す。此の諸辯は二十四種の因を修行するが故に、能く成就するを得るなり。何等か二十

喜足し、(四)惡を斷ずるを樂み善を修するを樂むことこれなり。

【七〇】麗本に順行といふも、宋等には行而となす、今之に從ふ。

【七一】この二句、唐譯に以レ捨覺悟、以レ慧照了とす。

【七二】究竟顯了の義を說示せる經典。然らざるを不了義經といふ。この兩句、唐譯に於ニ了義經一入ニ理趣智一、不了義經一入ニ理趣智一とす。

【七三】以下智の譯、唐譯多く異る。

【七四】世俗諦に對す、梵に(Paramārtha)、また眞諦、聖諦といふ、涅槃、眞如、實相など、深妙の眞理に名く。

【七五】この二句、禪定と智慧とに就きて云ふ。唐譯に、於ニ奢摩他一得ニ心住レ智、於ニ毘鉢舍那一得ニ法決擇智一とす。

【七六】唐譯に智解脫とす。

【七七】この句に代ふるに、唐譯は於ニ諸音聲一得ニ語路智一。於ニ決定法一得ニ決擇智一と。

【七八】唐譯相當文に於ニ求法者一得ニ稱根說法智一。於ニ佛所說一得ニ念總持智一の二句を入る。

【七九】唐譯次に於ニ諸業緣一得ニ悟果報智一を入る。

【八〇】虛空藏所問の第十九に答ふ。

【八一】この二、唐譯に利捷辯、

すべからず」と。菩薩是の如く一切法の平等界に至る、是を菩薩、自ら其の界を淨むること諸佛界の如しと爲す。

『善男子、[59]云何が菩薩は陀羅尼を得て終に念を失せざるとならば、[60]若し菩薩、已に成就を得ば、これ陀羅尼行なり、云何が陀羅尼行なる。善男子、陀羅尼行には三十二有り、何等か三十二なる、[61]得法を修し——陀羅尼の爲の故に、欲法を修し、尊法を修し、向法を修し、敬仰法を修し、樂法を修し、求法を修して厭くこと無く、多聞智慧の者に親近供養することを修し、[62]和上[63]阿闍梨の所に於て憍慢心無く尊重給侍することを修し、[64]如來の教誨に拒逆する所無きことを修し、說法人の所に於て世尊の想を生じ其の短を求めざることを修し、正法を受持して開示解說することを修し、所得の法を悋惜する所無きことを修し、悕望無くして法施を行ふことを修し、[65]智慧を求むるの根を栽うることを修し、所聞の法の如く善く順じて思惟することを修し、所聞の法を堅固に受持することを修し、梵行に於て休息有ること無きを修し、遠離の行・阿練若の行を樂むことを修し、心常に寂靜なることを修し、勤めて[66]諸念を行ずることを修し、順じて[67]六和敬を行ずることを修し、諸長宿に於て悼慢の行無きことを修し、一切衆生の中に於て無礙心を生ずることを修し、緣生の法に於て[68]隨順忍を得ることを修し、三脫門もて正しく心を觀じ驚怖無きことを修し、[69]四聖種もて[70]行じ驚疑せざることを修し、勤めて諸佛の正法を受持することを修し、衆生の爲に大慈を行ふことを修し、正法を受持して身命を惜まざることを修し、大智行もて憍慢を生ぜざることを修し、常に衆生を教化して厭惓無きことを修するなり。善男子、是を三十二種の修陀羅尼行とは爲す。

『菩薩修し已つて是の如き陀羅尼門を得、是の陀羅尼門を得るを以ての故に、能く一切諸佛の所說を總持す。陀羅尼を忘れず失せざるとは、所謂所聞の法の如くに忘れず失せず、念を以て念じ、[71]意を以て分別し、進を以て能く覺し、諸の文字に於て無邊の崖に入り、諸の言音に於て類に隨ふて善

【五九】虛空藏所問の第十八に答ふ。初句唐譯に云何菩薩、獲得陀羅尼、無忘法行。

【六〇】同に菩薩應於此陀羅尼修持作業。

【六一】以下七句の代りに同に求法故、愛樂法故、法苑樂故、隨法流故、隨順法故、尊上法故、を置く。

【六二】又和尚とも書く、梵に鄔波駄耶（Upādhyāya）親教師と譯す）。印度にては師を烏社と云へるが、轉訛して和尚の語となれりといふ。

【六三】梵に（Ācārya）、軌範師、正行など譯す。軌範となりて弟子の行爲を矯正する德僧の稱。

【六四】唐譯相當文に於教授者、隨順不逆故と。

【六五】この句唐に缺く。

【六六】唐譯に修習六隨念故とし、次に於六染法、常棄捨故を加ふ。

【六七】三業と同戒・同見・同行の六なり。卽ち禮拜等の身業と、讚詠等の口業と、信心等の意業と、戒法と、空等の見解と、修行とを同じくするをいふ。次句は唐譯に無し。

【六八】菩提の道に順じて無生の果に趣向する位。

【六九】衆聖を生ずる行法に四あり、（一）衣服、（二）飲食（三）臥具に於て、得る所に從つて

礙、大慈以て無惓、大悲以て普至なるを成就し、方便もて眞實の觀慧を成就するを得、無礙等の法皆悉く成就す。菩薩は一切衆生の垢有り濁有り、凡愚の麁獷拒逆不順なるを見る。是の故に菩薩は一切群生を敎化せんが爲の故に精進を廢せず、此の生死に無量の過患憂悲苦惱等の有るを見、來際の莊嚴を退せず、亦無量無邊阿僧祇諸佛の法を解し、集し難く持し難く滿し難き諸佛の法を成就せんが爲の故に、諸の善根を種えて能く如來の無量の法寶藏に入る。衆生の性無量なるが故に、法性無量なるが故に、虛空性無量なるが故なり。一切如來の法寶藏を受持せんが爲の故に、精進を捨てず、一切法の空・無相・無願、無作・無生・無起なるを聞き、[五五]觀行身證を解了分別し、未だ具足せざる佛法を成就するも、終に中道を實際に證せず、善く諸禪解脫三昧に入り、亦欲界を厭離せずして現に生を受け、已に陰・界・諸入を離れ、無形無色無行にして、衆生の性に隨ひ、隨意に種種の形色を示現して說法を爲し、菩薩輪を轉じて大涅槃を示す。亦菩薩の行を捨せず、是の如き不思議の法門に入り、一切法の性相無く不動・不壞・不散なるを知り、此の大乘に於て退轉せざること、金剛寶珠の能く餘寶を鑑すも、餘寶の能く此の珠を鑑す者無きが如し。諸の菩薩も亦復是の如し、能く聲聞・辟支佛乘を以て、無量無邊の衆生を度して涅槃に入らしめ、而も自ら[五六]滅度せず、亦究竟の大乘を退せず。是を菩薩、淳至堅固にして猶ほ金剛心の如く、不動に此の大乘に住すと爲す。

『善男子、[五七]云何が菩薩は自ら其の界を淨むること諸の佛界の如しとならば、若しは菩薩、一切法の界無く非界無く、一切處に至つて至無く不至無きを知り、若しは菩薩、法を見て[五八]六情を發し、皆是れ佛法なるを知り、亦凡夫法と佛法と異有るを見ずして、是の念を作す「此一切法は皆是れ佛法なり、佛法は一切處に至るが故に、一切諸法及び佛法とは但だ假の名字なり、亦是法に非ず非法に非ず、是の故に我等應に取著すべからず。自界淨なるを以ての故に諸佛界の淨を知り、此の法と平等と等し。眼界は是れ佛界、耳・鼻・舌・身・意・法の界も是れ佛界なり、我れ應に尊有り卑有るを分別

【五五】心に理を觀じ、理の如く身に之を行ふこと。

【五六】涅槃の譯、大患永く滅して四流を超度するの義なり。

【五七】虛空藏所問の第十七に答ふ。初句は唐譯に云何菩薩、於二自境界一清淨如二佛境界一と。

【五八】喜・怒・哀・樂・愛・惡の情をいふ。

べからず、能く非とする者無く能く[五〇]印を撥する者無し。如來印を得れば願行成就し、智水灌がる。菩薩は是の如き印の爲に印せらる。所謂究竟して無生無起の印、空印、無相印、無願印、離染印、寂滅印、涅槃印なり。菩薩の智行成就せば、如性を壞せず、法界を變ぜず、本際を離れず、諸法の中に於て上中下黑白等の差別を見ず。菩薩亦一切衆生の、此の印の爲に印せられるるを見るも、憶想分別無く、本の大誓願を捨せず。是を菩薩、如來印の爲に如如に印せられて、智の方便を分別せずとなす。

『善男子、[五一]云何が菩薩は法界性の門に入り、一切法の平等性を見るとならば、若し菩薩、諸の法界の、處として至らざる無く、來無く去無く、生無く滅無く、相無く起無く、戲無く行無きを見なば、菩薩是の如き思惟を作す「此の諸法は等しく皆法界に同じ、法界の如く是れ離欲界なり、塵垢界を離るるが故に。是れ無生界なり、作すべからざるが故に。是れ無滅界なり、滅盡無きが故に。是れ無來界なり、[五二]根門に入らざるが故に。是れ無去界なり、至る所無きが故に。是れ不可安界なり、形質無きが故に。是れ無樔窟界なり、依止無きが故に。是れ眞實界なり、三境分斷の故に。是の法界中には眼界無く、色界無く、眼識界無し。法界の如く一切法界も亦是の如し、是の故に一切法は法界に入ると名く。乃至意界・法界・意識界無し。法界の如く、一切法も亦是の如し。是の故に一切法は法界に入ると名く」と。是の菩薩は、一切法の法界に入るを知り、地界と法界との二無く別無く、水界・火界・風界も法界と二無く別無く、欲界も法界と亦平等にして二無く別無く、色界・無色界・有爲界・無爲界も法界と、亦平等にして無二無別なるを知る。是の如く心・境・界及び覺無きを知る、是を菩薩、法界性の門に入り、一切法平等の性を見るとは爲す。

『善男子、[五三]云何が菩薩は[五四]淳至堅固なること、喩へば金剛心の如く、不動に此の大乘に於て住するとならば、若し菩薩、直心を以て行ぜば、淳至を淨めて以て不退、畢竟不滅、進を勤めて以て無

【五〇】麗本に發印とするも、宋等の諸本に從つて撥とす。

【五一】虛空藏所問の第十五に答ふるなり　初句、唐譯に云何菩薩、入於法界甚深理趣、見一切法與諸法界、互相周遍、平等一性と。

【五二】眼等の六根は煩惱を漏出し、種々の妄塵を入るる門戸なれば根門といふ。唐譯には無來界無礙故といふ。

【五三】虛空藏所問の第十六に答ふ。

【五四】唐譯には意樂堅固、猶若金剛云云といひ、菩薩は十二種の法を成就して意樂堅固なるを說けり。

し、則ち第一義に入る。世諦を以ての故に假に諸法と名くるも、亦[四四]眞諦世諦に執著せず。是を菩薩の甚深法門――諸聲聞辟支佛の入る能はざる所――に入るとは爲す。

『善男子、[四五]云何が菩薩は十二因緣に於て善く勝智方便を得、二邊の諸見を離るるとならば、若し菩薩、一切緣生の法は他の所攝に屬し、因に屬し緣に屬し、和合に屬し所由に屬す。所謂諸法は皆境界の緣より生じ、各因る所有り依る所有り。諸法は各各相の分別すべき[四六]無し。譬へば外の諸藥草叢林及び諸の樹木等は、皆諸根無く無記にして知無く、[四七]諸の大に依るが故に便ち增長を得、各各相の分別無きが如く、內有の諸法も亦復是の如し。造業に依りて一切諸法を增長するも、我・人・衆生・壽命無く、亦作者・受者無し。諸法の生ずる時、能く生ずる者無く、滅する時能く滅する者無きを知り、菩薩是の念言を作す、「是の諸の緣生の法は各自性無く、自性無ければ他より生ずる能はず、所因も亦無性、所緣も亦無性なり。自の性無ければ他の性も無し。若し法にして自性・他性無ければ則ち無性なり。能生未生無ければ生ずべからず、生も亦不生なり、若しは未生も未生に非ず。不生ならば則ち究竟して生無く、能く生ずるもの無し。是の故に一切諸法は皆無生・無起なるも、但だ名字を以ての故に、假に因緣より生ずと名く、而も實には生無く、亦斷無く常無し。所以は何、若し法にして生の性有らば、則ち當に滅有るべし、則ち是れ斷見なり。若し滅無ければ卽ち常見有り、斷常の見を離るるが故に、當に知るべし、一切諸法は皆生有ること無し」と。是を菩薩、十二因緣に於て、善く勝智の方便を得、二邊の諸見を離るると爲す。

『善男子、[四八]云何が菩薩は如來印の爲に如如に印せられて、智の方便を分別せざるとならば、若し菩薩、甚深の法に於て、知見の力を現前するを得ば、一切の倚著を離れ、諸の戲論を過ぎ、終無く始無き無生法忍を得。如來は盡く諸菩薩成就する所の根を知り已り、如來印を以て之を印す。所謂[四九]三菩提を決定するの記を受くるなり。是の如來印は錯無く謬無く諸の障礙無く諍競無く沮壞す

【四四】迷情所見の世間の事相を世諦といひ、聖智所見の眞實の理性を眞諦といふ。
【四五】虛空藏所問第十三に答ふ。
【四六】麗本に九と爲すも今宋本に從ふ。
【四七】一切の色法（物質）は地水火風等の諸大によつて造作せらるるをいふ。
【四八】虛空藏所問の第十四に答ふるなり。初句、唐譯には云何菩薩、以如來印印於眞如、不間斷善巧智と。
【四九】梵に(Saṃbodhi)、正等覺と譯す。

く善く順じて行ずる時は、一法の、無因無縁にして生ずるを見ず。亦因緣に著せず、自ら善く順じて一切法に入る。我の無生無起なるが如く、一切法も無生無起なる、亦復是の如し。我の空なるが如く、一切法の空なること、亦復是の如し。我の離なるが如く、一切の離なる、亦復是の如し。一切法の、平等に入り・性の如く・作に非ず・不作に非ざるを知る、是を菩薩の善く順じて行を發し佛法を成就すとは爲すなり。

『善男子、[四〇]云何が菩薩、諸通を退せず、諸佛法に於て悉く自在を得となさば、若し菩薩、戒もて身を眞淨にし、心定んで不動にして、大智光明を得、已に福德智慧の資糧を成就し、已に諸波羅蜜の彼岸に到り、已に四攝を成就し、已に四梵行を修し、已に欲・進・念・慧・定を成就し、善く四神足を修するを以ての故に五神通を得。諸の菩薩は本業淨なるが故に、進を勸め捨を廢せざるが故に、常に行を散亂せざるが故に、善く結使を伏するが故に、聲聞・辟支佛の心を念ずることを離るるが故に、方便を受持するが故に、上地の諸法を[四一]攀緣するが故に、我無く依行無きが故に。是を以て菩薩は諸通を退せず、是の故に諸の菩薩は、究竟して諸法の無退を知り、諸法と法性と等しくして變異有ること無きこと、虛空の變無きが如くなるを知る。是を菩薩、諸通を退せず、諸の佛法に於て悉く自在を得とは爲す。

『善男子、[四二]云何が菩薩は甚深の法門――諸の聲聞・辟支佛の入る能はざる所――に入るとならば、若し菩薩、甚深の因緣法に入り、[四三]逆順の因緣法を知らば、善く出を知り離を知り、生を知り滅を知り、集を知り盡を知り、善く衆生を知る。何の因緣を以ての故に。垢を受けて垢を離れ、淨を捨して淨を得、乃至一法として垢有り・淨有るを見ず、一切法性の相清淨なるを知り、亦清淨の法相を得ず。我甚深なるを以ての故に一切法の甚深なるを知り、我の離を以ての故に一切法の離を知り、我無二なるを以ての故に一切法の無二なるを知り、眼と色と二倶に離するを以ての故に乃至意・法も亦離

【四〇】 虛空藏所問第十一に答ふ。

【四一】 心が外境の爲に轉ぜられて平靜を得る能はざるをいふ。

【四二】 虛空藏所問第十二に答ふ。

【四三】 十二因緣の法を觀ずるに、有漏業を因とし、愛取等を緣として、識等乃至老死の、生死の果を感ずる相を觀ずるを、順觀といひ、無漏の正慧を因とし、正行を緣として、涅槃の果を證する相を觀ずるを逆觀といふ。唐譯には、無明に緣つて行あり、行に緣つて識あり……生に緣つて老死ありと觀ずる緣生の理趣と、無明滅すれば行滅し、行滅すれば、識滅し、……生滅すれば老死滅する、緣滅の理趣とを擧ぐ。兩者その義一なり。

せしめ、妄想苦惱を脫せしむべし」と。諸衆生中に於て、亦衆生性を見ず、大悲を捨せずして衆生を敎化す。是れ菩薩、衆生の始めより以來清淨なるを分別し、衆生を敎化すとは爲す。

『善男子、[三七]云何が菩薩、[三八]善く發行に順じて佛法を成就するとならば、若し菩薩、甚深微妙にして、諸世間に於て最勝の佛法を聞かば、大欲精進を發し、我れ應に此の甚深微妙の、諸世間に於て最勝の佛法を成就すべしと。是の如く善く思惟して、是の何等の法は何の法と相應し、是の何等の法は何の法を知るやを分別し、菩薩は是の念言を作す「法と法と相應する有ること無く、法と法と相應せざる有ること無く、法は法を知る有ること無く、法は法を知らざる有ること無し。此の諸法の性は、鈍性無性の故に。是の一切法は因緣より生じ、定主有ること無し、而も能く隨意に莊嚴し、種種果報の相有り、諸法無性の故に。布施は是れ寶藏の大富の相を莊嚴す、布施は大富を得、因を離れざるが故に。布施は大富を知らず、大富は施を知る能はず。持戒は是れ生天の相を莊嚴す、持戒は天に生ずるを得、因を離れざるが故に。多聞は是れ智慧の相を莊嚴す、多聞は智慧を得、因を離れざるが故に。思惟は是れ斷結の相を莊嚴す、思惟は斷結を得、因を離れざるが故に。思惟は斷結を知る能はず、斷結は思惟を知る能はず。菩薩は是の如く諸法の無生を憶念して能く相を莊嚴す。是の故に布施し已り、[三九]薩婆若に迴向して檀波羅蜜を成就す、是の菩薩の檀波羅蜜を行ぜば、則ち能く佛法を具足す。持戒して薩婆若に迴向し、尸波羅蜜をば成就す。是の菩薩の尸波羅蜜を行ぜば、則ち能く佛法を具足す。羼提波羅蜜を修して薩婆若に迴向し、羼提波羅蜜をば成就す。是の菩薩の羼提波羅蜜を行ぜば、則ち能く佛法を具足す。毘梨耶を發して薩婆若に迴向し、毘梨耶波羅蜜をば成就す、是の菩薩の毘梨耶波羅蜜を行ぜば、則ち能く佛法を具足す。禪定に入つて薩婆若に迴向し、禪波羅蜜を成就す、是の菩薩の禪波羅蜜を行ぜば、則ち能く佛法を具足す。淨般若を薩婆若に迴向して、般若波羅蜜を成就す。是の菩薩の般若波羅蜜を行ぜば、則ち能く佛法を具足す。菩薩是の如

【三七】虚空藏の第十問に答ふ。
【三八】唐譯に云何菩薩、如理相應、修習佛法、如理者、名入緣生云云と。
【三九】唐譯相當文に一切智智とす。

說くに、義に依つて文に依らず、意を淨くして所聞の說法を成就し、乃至一句の文義をも失せず、能く辯門を淨め、善能く巧說して衆心を悅可し、諸佛の爲に歎ぜられ、亦能く諸魔外道を降伏し、及び三寶を供養し、乃至一法も法性に異るを見ず、本際を壞せず、如に動ぜず、如來所覺の法性を了す、一切の法性は如來所覺の如きを知るを以ての故に。乃至一法として佛法に入らざる者を見ず。所以は何、如來は一切の法性をば幻の如くにして成就無しと知るが故に、一切の法性は[三三]野馬の如くにして所取無きを知るが故に、一切の法性は鏡中の像の如くにして彼此にあらざるを知るが故に、一切の法性は夢の如くにして眞實にあらざるを知るが故に、一切の法性は響の如く緣起に從ふを知るが故に、一切の法性は虛空無實なるを知るが故に、一切の法性は無相・無分別なるを知るが故に、一切の法性は願無く發動なきを知るが故に。如來は如實に一切の法性の是の如き相を知り、菩薩は是の如く、一切法性の[三四]無性なるを知り、能く諸佛の法寶藏を持し、乃至一切は、念に非ず不念に非ずと、是を菩薩、諸佛の法寶藏を持すと爲す。

『善男子、[三五]云何が菩薩は、[三六]衆生の始より以來清淨なるを分別して衆生を敎化すとならば、若し菩薩、一切衆生を敎化せんが爲の故に、大慈大悲を修する時、是の如き思惟を作す「何等か是れ衆生なる」と。また是の念言を作す「此の諸衆生は但だ假名字のみ、顚倒虛假を謂つて衆生と爲す。一切衆生は本際淸淨、畢竟無生無起なり、但だ虛妄愚癡に因るが故に種種の業を造り、種種の業を造り已つて無量の憂悲苦惱を受く。喩へば人有つて夢中に他の物を劫盜し、王者の爲に捉へられて種種苦治し、夢に賊人と作り虛妄憶想して諸の苦惱を受け、是の念言を作す――我れ何の時にか當に此の苦惱を脫するを得べき――と。是の人夢中に、實に成就無く覺知する所無きが如し。一切凡夫及び一切諸法は、皆亦夢の如くにして覺知有ること無く、顚倒の爲に覆はれ、無量の妄想憂悲苦惱を受くること、亦復是の如し」と。菩薩是の念言を作す「是の諸衆生をして、我れ應に如實に諸法を覺知

【三三】陽焔をいふ。かげらふの謂。

【三四】性の字、麗宋元明は生に作る。今聖語藏本に依る。

【三五】虛空藏所問の第九に答ふ。

【三六】唐譯に云何菩薩善知有情本來清淨而成熟之と。

一一の行相門中に、八萬四千の諸根有るを知り、一一の根中に八萬四千種の差別の解有るを知り、盡く諸行・諸根・諸解・差別の相を知り、應に修習すべき所の相を知る。云何が差別相を知るとならば、此の諸行・諸根・諸解は、是れ貪欲の相なり、是れ瞋恚の相なり、是れ愚癡の相なり、是れ等分の相なり、是れ滅相なり、是れ增相なり、是れ住相なり、是れ達相なりとする、是を差別相を知ると名く。云何が應に修習すべき所の相を知るとならば、諸行・諸根・諸解の無常相、苦相、無我相、空相、寂滅相、離相、如實相、涅槃相、相の自ら空の相、相の自ら離の相を知るなり。若し能く是の如き等の諸行・諸根・諸解を知らば、如來成就の諸行無障礙智の如く、一切衆生の諸行・諸根・諸解の差別相を知る。菩薩[二八]亦次に如來智を知り、而も菩薩の所行を捨せず、衆生を敎化して疲惓有ること無し、是を善く行相を分別すとは名く。

[二九]『善男子、[三〇]云何が菩薩は諸佛の[三一]法寶藏を持するとならば、善男子、如來の藏は無盡にして亦無量、一切處に至り、一切衆生を悅可す。衆生の諸行・諸根・諸解の、無量阿僧祇・不可思議・不可稱・不可量なるが如く、諸佛の法寶藏も、無量阿僧祇・不可思議・不可稱・不可量なること、亦復是の如し。佛の法寶藏の文字は、假令一切衆生――阿難の如き等の――一劫乃至百劫なるも、受持讀誦し、能く[三二]通利除義せしむる能はじ。所以は何。如來の一切法寶藏は唯一義のみ有り、所謂離欲の義・寂滅の義・涅槃の義なり。若し菩薩、如來の法寶藏を聞き已り、力の受くる所に隨つて、受持・讀誦・通利せば、善く正觀に順じ受くる所の如くに行ぜん。菩薩は法藏の門に入つては、堅く思惟を持し、一切の相行に依らずして、則ち陀羅尼門・三昧門を得、陀羅尼門・三昧門を得已つて、能く一如來法寶藏の文字及び義を持し、若しは二・若しは三・若しは四・若しは五、若しは十・二十・三十・四十・五十、若しは百・若しは千・若しは百千、乃至は無量無邊阿僧祇・不可思議不可稱・不可量、量有ること無く諸量を過ぎたる、一切諸佛の法寶藏に於て心散亂せず、文字及び義を受持・讀誦・通利し、廣く人の爲に

【二八】原文に亦次如來智知とあり。
【二九】唐譯、卷第三。
【三〇】虛空藏所問の第八に答ふ。
【三一】法寶に無量の法財を含攝するが故に法寶藏といふ。以下の所說、唐譯やや異る。
【三二】善くその事に通じて無礙なること刄の如きをいふ。

未だ地獄・餓鬼・畜生の分を脫せず」と。是の故に彼の天處に於ても亦生ぜんと願ぜず、但だ是の念を作す、「我れ當に天中の天・如來・應供・正遍知となるべし」と。是の菩薩は諸天を念ずと雖も、欲界・色界・無色界天處に依らず、而も三界の衆生に於て大悲心を起す。是を菩薩、如を離れずして如來所許の天を念ずとは爲す。

[二四]『善男子、云何が菩薩、[二五]諸法平等を行じて涅槃の如くなるとならば、若し菩薩、諸法平等に入ること涅槃の如しと知らば、一切衆生の性は涅槃に同じと見、知り已つて涅槃に入らば、陰・界・諸入無し。是の如く菩薩、衆生の性は涅槃に同じきを見、諸の陰・界・入を過ぎて、影の如く夢の如しと見、生死有ること無くして生死を現ず。凡夫衆生は所因の結使もて煩惱業を造り、煩惱業を造り已つて無量の苦報を受く。菩薩は般若波羅蜜の力を以ての故に、善く結使を觀じ、斷じて生ぜざらしめ、亦彼の作業に因つて苦報を受けず、涅槃平等の處に至るを得。之を無爲と名け、一切算數の智道を過ぐ。本願を捨てざるが故に、大慈に遊戲し、已に慧方便の彼岸に到り、已に佛の神通力に入り、已に能善く諸想を分別することを知り、自ら已に度を得て未度の者を度し、自ら已に解を得て未解の者を解せしめ、自ら已に安を得て未安の者を安じ、自ら已に涅槃を得て未だ得ざる者をして得しめ、涅槃と生死とに於て二想有ること無し。是を菩薩の、諸法平等を行ずること涅槃の如しとは爲す。

『善男子、[二六]云何が菩薩、善く行相を分別すとならば、若し菩薩、精進を翹勤し、勝善法を求め、甚深の法門に於て心籌量に入り、清淨の通利もて慧明を分布し、大智明門を得、此の大智明門力を以ての故に、一切衆生の心行の趣く所を知り、總じて一一の衆生に八萬四千の諸行有り、皆能く了知すと說く。所謂貪欲の行に二萬一千、瞋恚の行に二萬一千、愚癡の行に二萬一千、[二七]等分の行に二萬一千、是を八萬四千の諸行と爲す。一一の衆生皆是の行有り、若し廣說せば則ち無量の行有り。

【二四】虛空藏所問の第六に答ふ。

【二五】唐譯に云何菩薩所レ行諸行等ニ於涅槃一云云と。

【二六】虛空藏所問第七に答ふ、唐譯に、云何菩薩善知ニ一切有情行相一といふ。以下の所說本經と大に異る。

【二七】貪、瞋、癡の三煩惱を等分に有する心の狀態なり。この四を根本の四病と名く、智度論五十九參照。

報の故なり。意に適ふ色・聲・香・味・觸を受け、天の五欲を以て遊戲娯樂し、天の衣・飲食の自ら恣に滿足し、一向に愛喜と適意の樂を受けんとなり。菩薩は是の念を作す、此の一切は興盛なるも皆當に衰滅すべし、是の諸天等も亦當に無常にして變異すべし、放逸に由るが故に善根を造らず、先に善業有らば今悉く當に盡すべし。此諸天等は天上に生ずと雖も、猶ほ未だ地獄・畜生・餓鬼の分を脫せずと。菩薩は是の念を作し已り、欲界天處に生ずることを悕望せず、唯兜率天宮を除く。兜率宮中に[一九]一生補處の菩薩有り、一切菩薩の行に於て彼岸に至り、一切の諸地・一切の神通・一切の諸定・一切の陀羅尼・一切の辯才・一切の菩薩事・一切の方便等を以て彼岸に度す。但だ是の如き功德を憶念し、此の天中に於て心に欣仰を生ず。若し天に生ぜんと欲せば、當に是の如き天中に生ぜんと願ずべし。菩薩は發心して言ふ、「我れ何の時にか當に是の如き天身を得べき」と。

『菩薩は復[二〇]色界の諸天を念ずらく「此等の天等は、諸禪・四無量心の果報に由るが故に、彼の天處に生ず、已に欲界の欲・恚を過ぎて一心に定に處り、喜を以て食と爲し、一向に第一の樂報を受くるを知る」と。菩薩是の如き念を作す「彼の色界の諸天は、少味を受くるが故に用て歡喜と爲し、無常有常の想、苦有樂の想、無我有我の想、無涅槃有涅槃の想あり。此の色界の諸天は亦無常變異有り、未だ地獄・餓鬼・畜生の分を脫せず」と。是の菩薩は色界の諸天處に生ぜんと願ぜず、唯淨居天を除く。卽ち彼に入涅槃すれば此の間に還らざればなり。[二一]菩薩は是の念を作す、「この清淨諸天は、已に[二二]五道の流轉生死を脫す」と。是の菩薩は是の如きを以ての故に、敬重の心を生ずるも、亦願樂して彼處に生ぜんことを求めず。

『菩薩復[二三]無色界の諸天を念ずるに、無色定の果報を受け、已に欲界・色界の心を過ぎ、定に處ること寂靜なり。菩薩是の念を作す「此の無色界の諸天は、佛を見・法を聞き・及び僧を供養すと雖も、此の諸天等は無色界を出づるの法を求むることを知らず。假令久しく住會するも當に變滅すべし、

【一九】一生を過ぐれば佛處を補ふべき等覺の位なり。梵に(Ekajātipratibuddha)彌勒菩薩をいふ。

【二〇】色界は欲界の上に在り、婬食の二欲を離れたる有情の住處にして、その禪定の淺深麁妙によつて四級に分ち四禪天と稱す。之に十六天乃至十八天を立つ。

【二一】第四禪に於て不還果を證せる聖者の生ずべき處なればなり。之に五地あり、(一)無煩天、(二)無熱天、(三)善現天、(四)善見天、(五)色究竟天なり。故に五淨居天ともいふ。

【二二】また五趣といふ、地獄、餓鬼・畜生、人間、天の五なり。

【二三】無色界には物質的のもの一も無く、唯心識を以て深妙なる禪定に住す。之に四天ありて、四空處天ともいふ、空無邊處、乃至非想非々想處なり。

なり、復次に身及び命を捨し、一切の邪道を捨する有り。復次に捨有つて一切法を取らざるなり。所以は何、取有らば則ち捨無し、若し不取ならば名けて究竟の捨と爲す、究竟の捨中には則ち求有ること無し、求無ければ則ち報を望まず、報を望まざるが故に、謂つて眞實に捨する者と爲す。若し菩薩、是の如き堅固の捨を行ぜば、捨に隨つて願を發す。若し捨する時及び願を發すの時、念ずらく、菩提及び佛法を見ずして專ら捨を念じ、過去の諸菩薩、道を行じたる時、云何が捨を行じたる、我れ今云何が捨を行ぜん、將た智者の爲に譏らるるに及ばざる無からんやと。卽ち能く一切を捨し、捨し已つて捨する所を分別すらく「誰か是れ捨し、何等の物をか捨し、誰か憶念を作す」と。是の如く分別し已り、都て得る所無く、捨する者、所施の物及び憶念する所を見ず。是をば菩薩、如を離れずして如來所許の捨を念ずと爲す。

『善男子、云何が菩薩は、如を離れずして如來所許の戒を念ずるとならば、若し菩薩、戒を持して解脫の處に至り、威儀の行成就し、乃至微戒を畏るること金剛の如く、恒に淨命を修し、善く戒を護持す。菩薩自ら戒を念じて身口を攝す、是れ無作の相にして謹愼奉行し、勝正命を修し、薩婆若心に於て終に捨を廢せず、純至不動にして亦終に大慈大悲を捨せず、破戒の衆生を攝取敎誨し、寧ろ身命を捨てて餘の乘を求めざる、是を名けて戒と爲す。菩薩は勝戒・不瑕缺戒・不荒穢戒・不求戒・不染戒・無濁戒・智者所歎の戒を念ず。菩薩は是の如き等の戒を念じて、持戒を恃まず、破戒を毀せず、己が德を稱へず、彼の過を譏らず、終に戒を捨せず、亦戒に依らず、亦戒に住せず。一切の諸恃著する所を捨すと雖も、而も色行を行ずる、是を菩薩、如を離れずして如來所許の、戒を念ずと爲す。

『善男子、云何が菩薩は、如を離れずして如來所許の、天を念ずるとならば、若し菩薩の天を念ずるは、所謂欲界の天、或は色界、或は無色界の天を念ずるなり。[一八]欲界の天を念じて戒を持するは果

【一八】欲界の天とは六欲天なり、四天王天、忉利天、須夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天なり。

許の念佛をなすとす。

『善男子、云何が菩薩は如を離れずして如來所許の念法をなすとならば、若し菩薩の法を念ずるは、所謂四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三脫門、四聖諦、甚深の十二因緣、六波羅蜜、菩薩應に學すべき所の藏、不退轉輪の淨三境なり、是を菩薩應に念ずべき所の法と爲す。云何が應に念ずべき、念捨・念欲、離念・滅念、無去無來念、無樔窟念、無自性念、出世間念、解達念、盡念・無生念、無取念、無漏念、無爲念、涅槃無自性、是の如き念を作す。諸法の中に於て、猶ほ法想有るがごとし、所以は何、有想を以ての故に則ち動念有り、動念有るが故に則ち顚倒に住し、顚倒に住すれば念法有ること無し。若し法・非法を念ずる二想を離るれば、一切法是れ無生なるを知り已つて、法想を斷ずるが故に無生忍を得、無所得を得、無所有なるが故に。善男子、是をば如を離れずして如來所許の念法をなすとす。

『善男子、云何が菩薩は、如を離れずして如來所許の念僧をなすとならば、僧とは謂はく[一五]四雙八輩なり。僧中或は是れ阿羅漢向・阿羅漢果、或は是れ阿那含向・阿那含果、或は是れ斯陀含向・斯陀含果、或は是れ須陀洹向・須陀洹果あり、是を聲聞僧と爲す。復次に僧有り、所謂[一六]不退轉の菩薩は決定忍を得、上聖の正位は已に諸相の恃著・戲論を離れ、次で如來の功德を得る無間なり。彼の菩薩は、是の如き等の大菩薩衆を念じ、應に是の良祐福田を供養讚歎し、合掌給侍・右遶禮敬すべし。是れ第一の僧にして聖衆の數に入るなり。是の僧は應に作すべき所の事を皆已に成辦す、是の菩薩は僧を念じ、菩薩僧に親近し、聲聞僧に親近せず。彼の菩薩は僧を憶念すと雖も、僧數を取らず、有數を取らず、僧は是れ無爲なるを知り、無行・無變異・無生・無滅を憶念し、是の如き憶念を作して、[一七]心行の境界を生ぜず。善男子、是を菩薩、如を離れずして如來所許の念僧をなすとす。

『善男子、云何が菩薩は、如を離れずして如來所許の捨を念ずとならば、所謂財を捨し法を捨する

【一五】次の四種の向と果を一雙とし、向果すべて八あれば四雙八輩といふ。四向四果ともいふ。向は果に向ふ因位に名く。阿羅漢（Arhat）は不生と譯す、色・無色界の一切の修惑を斷ずる位。阿那含（Anāgāmin）不來、不還と譯す、欲界九品の中、下三品を斷ずる位。斯陀含（Sakṛdāgāmin）一來と譯す、前の九品の中此の前品を斷ずる位、須陀洹（Slotāpanna）入流又は預流と譯す、見道十五心の間、三界の見惑を斷ずる位なり。

【一六】所修の功德善根增進して、更に過失し轉變せざるを不退轉又は不退といふ。

【一七】內心の外境に趣くを心行といふ。

【一四】一切智地に向け、如來の身に於て、鬘網の光明を放つを憶念す。菩薩は解を得るを以て如來身の一由旬・二由旬、三四五由旬乃至百由旬、若しは過百由旬に滿つるを觀ぜんことを悕望し、解を得るを以て道場に坐するを觀じ、或は轉法輪を見、或は種種の威儀を示し說法して衆生を調伏するを見、或は一佛世界に於て佛事を施作し、或は五佛世界、或は十・二十・三十・四十・五十、或は百佛世界に佛事を施作し、乃至百千無量世界に佛事を施作するを見んと悕望し、解を得て自ら見ること隨意に、若しは法を聽き、若しは諸佛世尊を供養給侍し、餘の威儀に於ては隨意自在なるを觀ぜんと悕望す。菩薩は是の如く如來の色身を觀じ已つて、佛の功德を憶念し、或は戒を觀じ、或は定を觀じ、或は慧を觀じ、或は解脫を觀じ、或は解脫智見を觀じ、或は無畏力を觀じ、或は佛不共の法を觀じ、或は菩薩の本行を觀じ、或は佛地を成就することを觀じ、普く如來の功德を成就せるを憶念し已り、如來の業を憶念すらく、何等か相貌なる、云何が業を造る、――身の造か、口の造か、意の造か、威儀の造か、可見か、不可見か、可說か、不可說か、何國の造たる、幾種身の造たる――是の如く種種の勝業を憶念して、不可思議の諸善根を成就し已つて、如來の法を觀ずらく、諸佛世尊は法身を以ての故に名けて如來と爲し、色身を以てせずと。彼の菩薩は、色は是れ如來なりと見ず、相は是れ如來なりと見ず、種性是れ如來なりと見ず、陰・界・諸入是れ如來なりと見ず、威儀是れ如來なりと見ず、過去・未來・現在世是れ如來なりと見ず、因是れ如來なりと見ず、緣是れ如來なりと見ず、所以是れ如來なりと見ず、和合是れ如來なりと見ず、有は是れ如來なりと見ず、無は是れ如來なりと見ず、成就是れ如來なりと見ず、敗壞是れ如來なりと見ず、彼有を如來なりと見ず、此有を如來なりと見ず、如來何所に在はすやを見ず、如來を見ず、如來を恃まず、如來を分別せず、如來を得ず。喩へば虛空に陰・界・入の名有ること無きも、衆生を利益せざるに非ざるが如く、諸佛世尊も、陰界入の名有ること無きも、亦衆生を利益せざるに非ず。善男子、是を菩薩、如を離れずして如來所

【一四】一切智とは佛智をいふ、故に一切智地とは佛地の意なり。

故に、願方便力を以ての故に。善男子、菩薩能く是の如く功德を行ずること虛空と等し。

『善男子、[六]云何が菩薩は智を行ずること、虛空と等しとならば、若し菩薩、善知識に從つて法を聞くことを得、善く順つて思惟し、作す所の諸行も終に放逸ならず、少しく境界の想を修し已つて無量の想を受け、無量の想を得已つて是の如き智の明を得、是の智の明を得已つて陰方便智を得、界方便智を得、入方便智を得、諦方便智を得、十二因緣方便智を得、衆生の垢を知り亦垢性を知り、衆生の淨を知り亦淨性を知る。所謂衆生は染心有るを[七]知り、如實に染心有り染心無きを知り、如實に染心無く恚心有るを知り、如實に恚心有り恚心無きを知り、如實に恚心無く癡心有るを知り、如實に癡心有り癡心無きを知り、如實に癡心無く諸煩惱心有るを知り、如實に諸煩惱心有り諸煩惱心無きを知り、如實に諸煩惱心無きを知る。[八]彼の菩薩は垢心有るを見ざるを卑と爲し、垢心無きを勝と爲す。所以は何、菩薩は不二の性淸淨法門の智に入るを以ての故に。法性の如く我性も亦爾り。我性の如く無我の性も亦爾り、無我の性の如く諸法も亦爾り、性淸淨の故に。若し一切諸法の性淸淨に入らば、則ち諸法の有垢有淨を求めず、亦諸法の文字相貌を見ず、不受不著の故に。亦諸法障礙の[九]蓋纒及び不障礙の蓋纒をも見ず。菩薩は無量の境界を思惟し、心識の二法を離る、之を名けて智と爲し名けて識と爲さず。喩へば虛空の心意識無きが如く、菩薩も亦復是の如く、心意識を離れ、諸法の性と虛空と等しきを知る。智の行無礙にして諸礙を過ぐるが故に。善男子、是を菩薩、智を行じて虛空と等しと爲す。

[一〇]『善男子、云何が菩薩は、[一一]如を離れずして如來所許の念佛を成就するとならば、菩薩若し[一二]阿練若處に在り、或は樹下に在り、或は曠野に在り、或は露處に在り、定力を得るを以ての故に、能く心を攝して諸緣に著せず、不散亂心を以て善く所念を攝し、行相を以て如來の、[一三]三十二相・八十隨形好を成就したまへるを觀じ、其の身を莊嚴するに一一の相貌を取り、己身を成就せんが爲の故に、心を

【六】虛空藏所問第四に答ふ。この項、唐譯と甚しく異る。

【七】知の字麗本に無し、宋元明に從つて加ふ。

【八】唐譯、相當文に不レ見レ有二貪瞋癡煩惱一者、爲二下劣心一、離二貪瞋癡煩惱一者爲二勝上心一と。

【九】蓋、纒ともに煩惱をいふ、五蓋十纒などの如し。

【一〇】虛空藏所問の第五に答へ、六念を說く。

【一一】唐譯に云何菩薩、佛所印可佛隨念と。以下六念を說く文唐譯大に異る。

【一二】Araṇyaka の音寫、遠離處、寂靜處、など譯す。人里遠く離れて、修行に適する處をいふ。比丘の住處なり。後世には寺院の總稱として用ひらる。

【一三】佛身に三十二の大人相あり、一々の相に幾多の好形あり、之を相好とす。好は相に隨逐する形容なれば隨形好といふ。

卷の第十五

虚空藏菩薩品　第八の二

〔一〕佛復虚空藏に告げて言はく『善男子、何をか菩薩、功徳を行じて虚空等と等しと謂ふとならば、〔二〕若し菩薩、佛の無量の法――廣大にして虚空の如き――を聞くが故に、薩婆若心を發して、彼是の念を作す「薩婆若の無量なるが如く、佛も無量にして、自在に無量を覺し、是の如き無量の中に於て、無量の欲・精進・不放逸の行を生じ、佛道の爲の故に、當に無量菩薩所行の法を行ずべし。所以は何、〔三〕諸佛の如きは無量の功徳もて身を莊嚴するが故に、我も亦其の身を莊嚴せんが爲に、應に無量の善根を成就すべし。諸佛の如きは無量の功徳もて、口を莊嚴し意を莊嚴し、道場を莊嚴し佛土を莊嚴するが故に、我も亦當に口・意・道場・佛土を莊嚴すべく、應に無量の善根を成就すべし。我れ當に無量の衆生を教化すべし、善根を成就せんが爲に。我れ無量の生死中に於て、善根を成就せんが爲の故に、厭倦を生ぜざりき。諸佛世尊は、無量の國土・無量の智慧・無量の神通有り、彼の諸衆生は、無量の行・無量の心・無量の諸根差別あり、生死中に於て無量の苦惱聚を受け、諸の煩惱を起す。我は無量の諸佛の法に入らんが爲に、無量の衆生の所行・諸根・生死などの苦惱聚を捨せんが爲の故に、無量の善根を成就せん」と。菩薩は是の如き正觀の心を以て、作す所の功徳と諸波羅蜜と相應し、四攝の法と相應し、四無量心と相應し、助菩提の法と相應し、〔五〕衆生の正法を受持し、諸佛世尊を恭敬供養し、及び菩薩所行と相應の法を淨むるを成就す。是の如き等の所作の無量の功徳は虚空と等し、衆生の性無量なるを以ての故に、佛の智慧無量なるが故に、法界無量の故に、所修も亦無量なること虚空の如し。衆生の性と佛の智慧と法界とは處として至らざるなく、一切衆生皆益を蒙るを得、菩薩所作の功徳も亦復是の如く、一切處に至つて衆生を利益す。依著無きを以ての

【一】唐譯、卷第二、後半に在り。虚空藏所問の第三に答ふ。

【二】以下唐譯には、一切法性猶如虚空、以菩提心、而爲種子、……積集善根、而皆迴向薩婆若海、由是獲得無量福德、皆如虚空。善男子、菩薩應當發如是心、虚空無量故、感招福聚、亦復無量云と。

【三】Sarvajña の音寫。一切〔種〕智と譯す。諸佛の究竟圓滿果位の智をいふ。薩婆若心とは、この智を求むる心なり。

【四】以下唐譯十を數へ、無量の身、語、心、行身、行相、福德禪定、大菩提場、無遮施會、恭敬無我、無間定心の諸莊嚴を擧ぐ。

【五】原文に成就衆生受持正法、恭敬供養諸佛世尊、及淨菩薩所行相應法と。

常に淨なること虛空の如く、無始にして無終なり、人の精進も爾り、始無く終成無し。機關の木人は、所作無分別なる如く、行者は二想無く、其の進は虛空の如し。

[一四九]『內心に止住して、外の境界を心に攝するを知り、自心彼心等しく、無心の禪に依止す。諸法の性は常にして空、無漏智を以て知り、陰界入に依らず、亦三界にも依らず。三界に依らず、界道の果に依らず、空の常に依無きが如く、修禪の者も爾り。空は愛・見・慢無し、修禪の者も亦爾り、空は退・壞・變無し、修禪の者も亦爾り。平等・寂の解脫ある智慧は界を緣ぜず、結無く禪等無し、是の故に禪は空の如し。我淨なれば衆生淨なり、智淨なれば識も亦淨なり、義淨なれば又字淨なり、法淨なれば界も淨なり。

[一五〇]『不善及び習を斷じ、大士は諸善を集む、有・無・緣生・無生を知り滅に著せず。善く文字を分別し、無常・苦の法を說き、業報を受くることを示現し、垢及び淨有りと言ふ。法性は常にして淨なるを知り、三世を籌量するに、空・無行にして行に非ず、慧の無行なること亦爾り。空は能く壞する無く、我・人・壽者無く、物に非ず無物に非ざるが如く、二邊の見を拔斷す。句の假なるを知れば染せず不變・眞實句なり、滿足・通達句なり、達義・慧等句なり、等・不動・牢句なり、金剛・度・淨句なり、明・盡・無盡句なり、無爲・虛空句なり、處・棵・識別句なり、降伏・體・智句なり、斷・集・滅・道句なり。覺・法・智慧句なり。響は聲に隨つて應ずるが如く、無盡辯も亦爾り、法を說くに所依無く、此の慧淨にして空の如し』と。[一五一]

大方等大集經卷第十四

【一四九】第五に禪定を說く。

【一五〇】第六に智慧を說く。

【一五一】唐譯卷第二終らず。

に非ず、[一四五]猗無く、受想の分別無く、亦行及び識無し、施時の心も亦然り。空は一切を益し、始終窮盡無きが如く、解法の施は無盡にして、一切衆を利益す。化人相施して、施する所の報を望まざるが如く、慧者の施も亦爾り、終に其の報を望まず。慧を以て結の習を斷じ、方便もて衆を捨せず、結及び衆を見ず、是の如き施は空の如し。

[一四六]『身は鏡像の如しと知り、聲は猶ほ響の如しと知り、心は幻化の如く、法性は虚空の如しと知る。勝菩提を捨せず、二乘を求めず、過去の諸佛に於て、常に敬ひ愼んで戒を護る。本願を捨せざるが故に、能く諸趣の中に於て、善く本願を成就し、意を攝して淨戒を護る。空の、悕望無く熱惱高下無く、濁無く變易無きが如く、戒を淨むる者亦爾り。空の一切を受け、水月は戒を持せざるが如く、戒を護る者も是の如し、淨戒は虚空の如し。

[一四七]『罵打瞋怒等をば、忍力の故に瞋らず、我及び彼の見無きは、二想を去離するを以てなり。內は純至善淨、外の行も亦清淨なり、純至の故に瞋無く、如法に順じて能く忍ぶ。諸見を離れて空を忍び、覺を捨して想を離る、願無く悕望無く、諸行の取る所を捨つ。愛無きこと虚空の如く、戯せず恨を懷かず、戯無く報を求めず、無漏の忍も爾り。忍無く罵者無く、彼の人聲は響の如し、是に非ず及び常無し、是の如き戯論無し。彼は愚、及び我れ智あり、無生にして生を示す、是の如く分別すと雖も、猶ほ無生忍を修す。娑羅の枝を斫るに、餘の枝は分別せざるが如く、身を斷つも分別無し、此の忍淨きこと空の如し。無所依を勤修し、佛を供して佛想無く、法を持して文に著せず、衆を度して衆の想無し。身を淨めて法身を淨め、口を淨めて言說無く、心を淨めて意行無く、諸波羅蜜を具す。助菩提の法を具し、土を淨むること虚空の如く、摠持を成就し、是の如き佛法を求む。

[一四八]『空は受けて惓む無きが故に、能く叢林を生じ、遍く至つて形色無きが如く、精進も亦空の如し。

【一四五】猗は倚なり、依なり。

【一四六】第二に持戒を說く。

【一四七】第三に忍辱を說く。

【一四八】第四に精進を說く。

義なり。無所得の故に、是れ平等句義なり、高無く下無きが故に。是れ牢固句義なり。壞すべからざるが故に。是れ不動句義なり、所依無きが故に。是れ金剛句義なり、[一三二]摧くべからざるが故に。是れ[一三三]已度句義なり、所作辦ずるが故に。是れ眞淨句義なり、本性淨なるが故に。是れ無闇句義なり、[一三四]明を待たざるが故に。是れ無二句義なり、[一三五]積聚せざるが故に。是れ盡句義なり、究竟して相を盡すが故に、是れ無盡句義なり。無爲の相の故に、是れ無爲句義なり。生滅を離るるが故に。是れ虛空句義なり、障礙無きが故に。[一三六]是れ無所有句義なり、眞清淨の故に。[一三七]是れ無處句義なり、行跡無きが故に。[一三八]是れ無樔窟句義なり、所猗無きが故に。是れ智句義なり、識と別無きが故に。[一三九]是れ無降伏句義なり、群匹無きが故に。是れ無體句義なり、形を受けざるが故に。是れ[一四〇]知見句義なり、苦生ぜざるが故に。是れ[一四一]斷句義なり、集に和合なきを知るが故に。是れ滅句義なり、究竟して無生の故に。是れ道句義なり、[一四二]二覺無きが故に。是れ覺句義なり、平等を覺するが故に。是れ法句義なり、究竟して不變なる故に。善男子、此の般若は他より得ず、自證知見して性の如く行ずるが故に。一切の文字句義は、其れ猶ほ響の如く、諸の言音に於て應に隨つて報ずるを知り、其の辯不斷にして、亦文字語言に執着せず。菩薩摩訶薩は、是の如く能く一切の言說中に於て善能く報答し、諸の音聲言說は響の如くなるを知り、不可得を解するが故に、執着を生ぜず亦戲論もせず。善男子、是を菩薩の、般若波羅蜜を行ずること、虛空と等しと爲す』と。爾の時世尊、重ねて此の義を明さんと欲して、偈を說いて言はく、[一四三]

[一四四]『著を離れて施を行じ、普く衆の性に及適し、終つて礙心無く、亦分別を生ぜず。我淨なるが故に施淨なり、施淨なるが故に願淨なり、願淨なるが故に菩提淨なり。道淨なるが故に一切淨なり。我と我所の想無く、愛及び諸見を離れ、彼我の相を捨除して、施心は虛空の如し。諸想を去離して施し、報を望むの心有ること無く、嫉妬の心結を捨して、施心虛空の如し。空は色

【一三二】同に能穿鑿故と。
【一三三】唐譯に是濟度句とす。
【一三四】同に明無所得故とす。
【一三五】同に無レ有ニ建立一故と。
【一三六】同に是空句と。
【一三七】虛空は無相なり、行くもその跡無きをいふ。唐譯に虛空道句とす。
【一三八】この句、同に是無所得句、自性無故とす。
【一三九】同に是無摧句、離ニ對治一故。
【一四〇】同に是遍知句とす。
【一四一】同に是集斷句、害ニ貪欲一故と。集とは四諦の一なり。
【一四二】同に二道とす。次の二句を、是佛陀句、能生ニ正覺一故。是達摩句、究竟離欲故とす。
【一四三】以下の偈は、上に注記せる如く、唐譯に在つては六度の一一說明の次に出せるも、本經には此處にまとめ擧げたるものなり。この散文(長行)は兩譯よく合致せるも、偈は殆んど別文の感有り。
【一四四】初に布施を說く。

ば、能く般若波羅蜜を淨む。何等を八と爲す、善男子、若し菩薩、精勤して一切不善の法を斷じ、斷見に著せざらんと欲すると、精勤して一切善法を生じ、常見に著せざらんと欲すると、[123]善く分別して一切字句を說き、一切有爲の法は皆緣より生ずるを知り、而も[122]無生忍の法に於て動せざると、[124]善能く一切の有爲・無常・苦の法を辨宣し、無我法界に於て寂靜不動なると、善能く諸の所作の業を分別して、一切法の業無く報無きを知ると、[125]善能く垢法と淨法とを分別して、一切法性の常と淨とを知ると、[126]善能く三世の諸法を籌量して、諸法の去・來・今無きを知ると、是を菩薩の、八法を成就し、能く般若波羅蜜を淨むと爲す。

[127]『善男子、喩へば虛空は行。無行に非ざる如く、菩薩は般若を行じて一切の行を離るる亦復是の如し。喩へば虛空は能く破壞する無きが如く、菩薩般若を行ぜば一切の諸魔も能く壞する者無きこと、亦復是の如し。喩へば虛空の性は常に寂靜なるが如く、菩薩の、般若を行じて寂靜を覺見すること、亦復是の如し。喩へば虛空の性は常に無我なるが如く、菩薩般若を行じて無我を了知すること、亦復是の如し。喩へば虛空の性は衆生に非ざるが如く、菩薩は般若を行じ、[128]一切衆生見を離るる亦復是の如し。喩へば虛空の性は命有ること無きが如く、菩薩は般若を行じ、一切の命見を離るる、亦復是の如し。喩へば虛空の性は人有ること無きが如く、菩薩は般若を行じ、一切の人見を離るる亦復是の如し。喩へば虛空の、物に非ず非物に非ず、名字すべからざるが如く、菩薩は般若を行じ、物・非物の見を離るる、亦復是の如し。

『善男子、[129]般若は是れ寂靜句義なり、微覺も無きが故に。是れ不作句義なり、自相淨なるが故に。[130]是れ無變句義なり、行相無きが故に。是れ眞實句義なり、發動せざるが故に。是れ不誑句義なり、異有ること無きが故に。是れ了達句義なり、一相に入るが故に。是れ通明句義なり、習氣を斷つが故に。是れ滿足句義なり、[131]欲求無きが故に。是れ通達句義なり、能く正見するが故に。是れ第一句

【一二二】無生無滅の理に安住して動かざるをいふ、或は初地乃至、七・八・九地の證となす。

【一二三】唐譯によれば、現二四無礙解一、而不レ著二於四辯一、

【一二四】同に善能決二擇四聖諦一、不レ見二無常苦無我寂靜一。……

【一二五】同に智常顯二說一切法句差別之相一。

【一二六】同に善得二一切淨法光明一、於二諸有情一說二於清淨及雜染法一とす、

【一二七】唐譯この一段を缺く。

【一二八】以下の三は八不正見中の、衆生見、壽命見、士夫見なり。實に衆生あり、壽命あり、士夫ありと執する見なり。

【一二九】唐譯相當文に般若是淸淨句、能摧二魔覺一故とし。次句を缺く。

【一三〇】以下の四句、の代りに唐譯には、是無分別句、無レ可二限齊一故。是如實句、性眞實故。是諦句、無二動搖一故。是聽慧識實句、無二虛誑一故。是句、解二諸縛一故とす。

【一三一】唐譯に、聖者功德故とす。

善く法性に入り、究竟して退せざること亦復是の如し。喩へば虚空の破壞すべからざるが如く、菩薩の禪を修して、[一一四]本際を壞せざること、亦復是の如し。喩へば虚空の變易有ること無きが如く、菩薩の禪を修して、不變如如たること、亦復是の如し。喩へば虚空の心に非ず、心を離るるが如く、菩薩の禪を修して心意識を離るる、亦復是の如し。

『善男子、菩薩は[一一五]平等心を以て禪を修し、不平等心に非ず。云何が心平等なる、若し心、高ならず下ならず、求無く非求無く、作無く非作無く、分別無く非分別無く、行無く非行無く、取無く捨無く、闇無く明無く、知無く念無く、非知無く非念無く、一にあらず異に非ず、二に非ず不二に非ず、動無く不動無く、去無く不去無く、修無く非修無く、心一切の境界を緣ぜざれば、是を平等心といふ。[一一六]菩薩の心平等なるを以ての故に、色を取らず、眼・色の二法を去離して禪を修す。心平なるを以ての故に、聲・香・味・觸法を取らず、意・法の二法を去離して禪を修す。善男子、喩へば虚空は火災起る時も焚燒する能はず、水災起る時も所漂とならざるが如く、菩薩は諸煩惱火の爲に焚燒せられず、諸禪解脫三昧の爲に漂はされず、生を受けて自ら定亂無く、亂心の衆生をして能く定を得しめ、自ら行じ已つて淨め、精進を捨せず、平等と等しく差別を示現し、而も平等及び不平等の二相を見ず、善能く遍く智慧の眞性を觀じ、其の心愛見の爲に覆はれず、諸行の中に於て無所著を行じて、虚空と等し。善男子、是を菩薩の、禪波羅蜜を行じて虚空と等しと爲す。[一一七]

『善男子、云何が菩薩は[一一八]般若波羅蜜を行ずること虚空と等しとならば、善男子、若し菩薩四法を成就せば、般若波羅蜜を行ずること虚空と等しからん。何等をか四と爲す、若し菩薩の、[一一九]我の淨を以ての故に、衆生亦淨なるを知ると、[一二〇]智淨なるを以ての故に識も亦淨なるを知ると、義淨なるを以ての故に文字亦淨なるを知ると、法界淨なるを以ての故に[一二一]一切法亦淨なるを知ると、是を菩薩は、四法を成就して般若波羅蜜を行じ、虚空と等しと爲す。善男子、若し菩薩摩訶薩は八法を成就せ

【一一四】根本究竟の邊際。眞如、涅槃をいふ。

【一一五】唐譯には「菩薩以二專注心一禪定清淨。」云何專注として次に揭ぐる所小異あり。

【一一六】同に「專二注心一、不三流二散於色一。」

【一一七】唐譯次に偈あり。

【一一八】Prajñā の音寫、智慧と譯す。實相を照了する智慧は、生死海を渡つて涅槃に至る船筏なれば般若波羅蜜といふ。

【一一九】唐譯には「由二虚空清淨一故」とす。

【一二〇】麗本に知となすも、宋等の三本並に唐譯に智となすを以て、今之に從ふ。

【一二一】唐譯には「入二我人有情壽者清淨一」とす。

『善男子、精進に〔一〇四〕二種有り、始發精進と終成精進となり、菩薩は始發精進を以て一切の善法を習成し、終成精進を以て一切法の自性を得べからざることを分別し、唯所集の善根もて、是の平等を見、所見の平等も亦平等に非ず。善男子、喩へば工匠の木人を刻作して身相備具し、所作の事業皆能く成辦するも、作・不作に於て二想を生ぜざるが如く、〔一〇五〕菩薩は本願を成就莊嚴せんが爲の故に、勤精進を發して一切業を修し、作と不作とに於て二想を生ぜず、二邊を去離すること亦復是の如し。善男子、是を菩薩の、毘梨耶波羅蜜を行ずること虛空と等しと爲すなり。〔一〇六〕

『善男子、云何が菩薩摩訶薩は〔一〇七〕禪波羅蜜を行ずること虛空と等しとならば、善男子、若し菩薩四法を成就せば、禪波羅蜜を行ずること虛空と等し。何等をか四と爲す、善男子、〔一〇八〕若し菩薩其の內心を專にし、亦內心を見ず、外界を〔一〇九〕緣ずる諸心を遮すると、亦外心の〔一一〇〕行處を見ざると、已心の平等を以ての故に、一切衆生の心平等なるを知ると、〔一一一〕亦二法に依ざる心及び平等の思惟もて、法界の定性は攝無く、亂無く、一切の法性は戲論有ること無きを知るとなり、是を菩薩四法を成就し、禪波羅蜜を行ずること虛空と等しと爲す。善男子、若し菩薩八法を成就せば、能く禪波羅蜜を淨む、何等を〔一一二〕八と爲す。善男子、若し菩薩の、諸陰に依らずして禪を修し、諸界に依らずして禪を修し、諸入に依らずして禪を修し、三界に依らずして禪を修し、現世に依らずして禪を修し、後世に依らずして禪を修し、道に依らずして禪を修し、果に依らずして禪を修する、是を菩薩八法を成就して、能く禪波羅蜜を淨むと爲す。〔一一三〕喩へば虛空の依著する所無きが如く、菩薩の禪を修するや、依止する所無きこと、亦復是の如し。喩へば虛空の戀著する所無きが如く、菩薩の禪を修するや、諸の染著を離ること、亦復是の如し。喩へば虛空の、諸見に著せざるが如く、菩薩の禪を修するや、諸見を捨離すること、亦復是の如し。喩へば虛空の諸慢有ること無きが如く、菩薩の禪を修するや、諸の憍慢を離るる、亦復是の如し、喩へば虛空の究竟して無滅なるが如く、菩薩の禪を修するや、

〔一〇四〕唐譯に云ふ加行と限齊との二種精進に當るか。文に曰、以二加行精進一策二身口意一、修習成二就一切善法一、無レ有二所住一、思惟無所得故。以二限齊精進一、應レ住二不出不入一、隨二順法界一、無レ所二去來一。

〔一〇五〕木彫の人形に、自發的の動靜あること無き謂なり。

〔一〇六〕唐譯次に偈あり。

〔一〇七〕禪那(Dhyāna)の略、思惟修、靜慮など譯す。禪と定は生死海を渡つて涅槃の岸に至る行法なるが故に禪波羅蜜(定度)といふ。

〔一〇八〕唐譯によれば、初二句は、安二心於內一、心無二所見一。制二心於外一、外心無二所得一とす。

〔一〇九〕心を外界と交渉づけるを緣とし、之をさへぎるを遮とす。

〔一一〇〕心と交涉をもつ外の境なり。

〔一一一〕二法に依らざる心とは內外に於て所見、所得無き心なり。唐譯に彼心及平等思惟、證二知皆如一幻化一と。

〔一一二〕唐譯には、蘊・處・界・現世・他世・欲・色・無色の八を擧ぐ。

〔一一三〕以下の喩、唐譯無し。

を發し、[九八]意は幻の如しと知つて分別する所無く、意に著せず。諸波羅蜜を具足せん爲の故に勤精進を發し、[九九]諸法は自性無く、因緣の所攝にして戲論すべからざるを知り。助菩提分の法を得んが爲の故に勤精進を發し、[一〇〇]一切法の眞實性を覺了せるが故に礙著する所無し。一切佛土を淨めん爲の故に勤精進を發し、諸の國土は虛空の如くなるを知るが故に淨むる所を恃まず。[一〇一]一切の陀羅尼を得んが爲の故に勤精進を發し、一切法は念無く非念無きを知るが故に二相を作さず。一切の佛法を成就せんが爲の故に勤精進を發し、諸法は一相平等に入るを知るが故に法性を壞せず。善男子*是を菩薩の、八法を成就して能く毘梨耶波羅蜜を淨むと爲す。善男子、[一〇二]喩へば虛空の疲惓有ること無きが如く、菩薩は無量劫に於て勤精進を發し、疲厭有ること無きこと亦復是の如し。喩へば虛空の悉く能く、一切の諸色を容受し、然も此の虛空に覆障有ること無きが如く、菩薩も一切衆生を容受し、勤精進を發して平等無礙なること、亦復是の如し。喩へば虛空の、能く一切の藥草叢林を生じ、然も此の虛空に住處有ること無きが如く、菩薩は一切衆生の諸善根を增益せんが爲の故に勤精進を發し、依著する所無く、住處有ること無きこと、亦復是の如し。喩へば虛空の、一切處に至りて然も去有ること無きが如く、菩薩は勤精進を發し、——一切法に至るが爲の故に——而も至無く不至無きこと亦復是の如し。[一〇三]喩へば虛空の、色に非ずして而も中に種種の色を見るが如く、菩薩は一乘の爲の故に勤精進を發し、純至を成就せんが爲の故に、諸乘の差別を示すこと、亦復是の如し。喩へば虛空の、本性清淨にして客塵の爲に汚されざるが如く、菩薩は勤精進を發し、本性清淨なるに、衆生の爲の故に現に生死を受くるも、塵累の爲に染せられざること亦復是の如し。喩へば虛空の性は是れ常法にして無常有ること無きが如く、菩薩は究竟して三寶を斷ぜざらんが爲の故に、勤精進を發すこと亦復是の如し。喩へば虛空の、無始無終不取不捨なるが如く、菩薩は勤精進を發し、無始無終不取不捨なること亦復是の如し。

【九八】同に得レ致三於レ定、知ニ心無所得一故とす。
【九九】唐譯に展轉修習、思惟無所得故とす。
【一〇〇】同に菩提性相、虛空無所得故と。
【一〇一】同に爲下成ニ就一切所聞一、悉皆能持上……、知下所聞法、猶如ニ響應一、究竟無所得上故と。
【一〇二】唐譯は玆に加行と限齊との二種の精進を加へ說く。
【一〇三】以下唐譯に相當文無し。

作さず、亦罵る者・罵を受くる者・罵らるる法を見ず、是の觀を作さず・是の戲論を作して言はず――彼空なれば我も亦空たりと、亦是の思惟――音聲は響の如し、何に由つて出づる――を作さず、亦復是の觀――我は是なり彼は非なり――を作さず、又復是の見――彼は無常なり我も亦無常なり――を作さず、亦復是の念――彼は愚なり我は智あり――を作さず、亦是の想――我等應に忍辱を行ずべし――を作さず。善男子、譬へば人有りて婆羅の枝を求め、婆羅の枝の爲の故に、利斧を齎持して婆羅林中に入り、一大樹下に至つて其の一枝を斫るに、餘枝は是の念――彼已に斫られたるも我等は斫られず――を作さず、其の斫られたる者も亦是の念――我れ已に斫らる、餘枝は斫られず――を作さず、二俱に無想にして憎愛を生ぜざるが如し。善男子、菩薩摩訶薩の、羼提波羅蜜を行ずる時、一切法性の、草木墻壁瓦石等の如くなるを觀じ、而も身體を割截することを示現して――衆生を敎化せんが爲の故に――憎無く愛無く憶想分別なし。善男子、是を菩薩の、羼提波羅蜜を行ずること虛空の如しと爲す。[九一]

『善男子、云何が菩薩摩訶薩は、[九二]毘梨耶波羅蜜を行ずること、虛空と等しきとならば、善男子、菩薩は四法を成就して、毘梨耶波羅蜜を行ずること虛空と等し。何等をか四と謂ふ、善男子、若し菩薩にして一切善法を勤求し、而も一切法の自性は不成就なるを知ると、一切最勝の[九三]供具を以て諸佛世尊に給侍供養し、[九四]然も如來及び供侍せらるる法を見ざると、善能く一切諸佛所說の妙法を受持し、[九五]亦文字の受持すべきを見ざると、亦能く無量の衆生を成就し、[九六]衆生の性は卽ち是れ泥洹にして、畢竟生無く起無きを見るとなり。善男子、是を菩薩四法を成就し、毘梨耶波羅蜜を行ずること虛空と等しと爲す。善男子、若し菩薩八法を成就せば、能く毘梨耶波羅蜜を淨む。何等か八と爲す。善男子、菩薩は身を淨めん爲の故に、勤精進を發し、身は影の如しと知りて身に著せず。口を淨めんが爲の故に、[九七]口語は響の如しと知りて口に著せず。意を淨めん爲の故に、勤精進

【九一】唐譯次に偈あり。
【九二】Vīrya の音寫、精進と譯す。樂うて善法を勤行せんと欲し、放逸ならざるをいふ。
【九三】供養の具なり。
【九四】唐譯に了知如來身平等故とす。
【九五】同に不見諸法所厭離故と。
【九六】同に知諸有情無所得故と。
【九七】唐譯に知語如響、性無所得故とす。

戒無きが如し、是を菩薩の尸波羅蜜を行ずること、虚空と等しと爲す。[八四]

『善男子、菩薩は四法を成就して、[八五]羼提波羅蜜を行ずること、虚空と等し。何等をか四と爲す。善男子、若し菩薩他の罵に報へず――[八六]無我の想を分別するを以ての故に。他の打に報へず――無我の想を以ての故に。他の瞋に報へず――[八七]有想を離るるを以ての故に。他の怨に報へず――二見を離るるを以ての故に、是を菩薩四法を成就し、羼提波羅蜜を行ずること、虚空と等しと謂ふ。善男子、菩薩は八法を成就して、能く羼提波羅蜜を淨む、何等をか八と爲す。善男子、菩薩は[八八]能く内を淨め純至ならしめて、羼提波羅蜜を修し、能く外を淨め悕望せずして、羼提波羅蜜を修し、上中下に於て畢竟じて障礙無くして、羼提波羅蜜を修し、法性に隨順して染著する所無くして、羼提波羅蜜を修し、一切の諸見を離れ空に應じて、羼提波羅蜜を修し、一切の諸覺を離れて無相に應じて、羼提波羅蜜を修し、一切の諸願を捨し無願に應じて、羼提波羅蜜を修し、一切の諸行を捨てて無行に應じて、羼提波羅蜜を修す、是をば菩薩摩訶薩、八法を成就し、能く羼提波羅蜜を淨むと謂ふ。善男子、喩へば虚空の無憎無愛なるが如く、菩薩は羼提波羅蜜を修して、憎無く愛無きこと亦復是の如し。喩へば虚空の[八九]變易有ること無きが如く、菩薩は畢竟して心に變易無し、羼提波羅蜜を修すること、亦復是の如し。善男子、喩へば虚空の虧損有ること無きが如く、菩薩は畢竟して羼提波羅蜜を修し、心に虧損無きこと、亦復是の如し。喩へば虚空の生無く起無きが如く、菩薩は羼提波羅蜜を修して、心に生起無きこと、亦復是の如し。喩へば虚空に戲論有ること無きが如く、菩薩は羼提波羅蜜を修して、心に戲論無きこと、亦復是の如し。喩へば虚空の恩の報を望まざるが如く、菩薩は羼提波羅蜜を修し、一切の衆生に於て果報を望まざること、亦復是の如し。喩へば虚空の[九〇]漏無く繫無きが如く、菩薩は羼提波羅蜜を修し、一切の漏を離れ、三界に繫せざること、亦復是の如し。善男子、菩薩の羼提波羅蜜を行ずるは、是の念――彼來つて我を罵るも我れ能く忍受したり――を

【八四】 唐譯次に偈あり。

【八五】 Kṣānti の音寫、忍辱と譯す。諸の侮辱惱害を受けて、心に恚恨無きをいふ。

【八六】 唐譯には知ニ語如ニ虚空一とし、次句を知身如虚空とす。

【八七】 同に知心如虚空とし、次に掉戲不報、知意如虚空とす。

【八八】 唐譯には、この八法を、於ニ諸有情一心無ニ限礙一、猶若ニ虚空一……。於ニ諸利益一、不レ生ニ貪著一、猶若……。於ニ諸有情一利益平等、猶若……。身心無壞、猶若……。離ニ諸惑結一、猶若……。離ニ所觀境一、猶若……。觀ニ諸法性一不生不滅、猶若……。於ニ色無色一、以レ慈遍緣、猶若虚空……とす。

【八九】 共に、かはることなり。

【九〇】 漏は煩惱なり、煩惱が身心に纏綿して自由ならざるを繫といふ。

を知るを得、一切處に至りて亦至るべき所無し。是の如き菩薩能く是の檀波羅蜜を行ず』と。此の法を說きたまへる時、萬六千の菩薩、諸法の相を見ること猶ほ虛空の如くにして、無生法忍を得たり。

[七九]佛の虛空藏菩薩に告げて言はく『善男子、菩薩は四法を成就し、[八〇]尸羅波羅蜜を行ずること虛空と等し。何等をか四と爲す。善男子、菩薩は身を鏡中の像の如しと知り、聲は響の如しと知り、心は幻の如しと知り、[八一]諸法の性は猶ほ虛空の如しと知る。是を菩薩四法を成就し、尸羅波羅蜜を行じて虛空と等しと爲す。善男子、菩薩は八法を成就して能く淨戒を護る。何等か八と爲す。善男子、若し菩薩の菩提心を忘れずして、能く戒を護り、聲聞・辟支佛地を求めずして能く戒を護り、戒を持し戒を限らずして能く戒を護り、[八二]諸戒を恃まずして能く戒を護り、本願を捨てずして能く戒を護り、一切生處に依らずして能く戒を護り、大願を成就して能く戒を護り、善く諸根を攝して煩惱を滅することを爲して能く戒を護る、是を菩薩八法を成就して能く戒を護ると爲す。善男子、喩へば虛空の諸怖望を離るるが如く、菩薩は求むる無き心を以て能く戒を護ること亦復是の如し。喩へば虛空の清淨なるが如く、菩薩の持戒清淨なること亦復是の如し。喩へば虛空の垢汚有ること無きが如く、菩薩の持戒無垢なること亦復是の如し。[八三]喩へば虛空の熱惱有ること無きが如く、菩薩の、戒を持して無惱なること亦復是の如し。喩へば虛空の高下有ること無きが如く、菩薩の戒を持して高無く下無きこと亦復是の如し。喩へば虛空の巢窟有ること無きが如く、菩薩の戒を持して所依無きこと亦復是の如し。喩へば虛空の生無く滅無く畢竟無變なるが如く、菩薩の、戒を持して生無く滅無く畢竟無變なること亦復是の如し。喩へば虛空の、悉く能く一切衆生を容受するが如く、菩薩の戒を持し、普く能く運載すること亦復是の如し、衆生を利益せんが爲に能く正戒を護るなり。善男子、水中の月には持戒・破戒無きが如く、菩薩も亦復是の如く、一切諸法を了知して、猶ほ月影の持戒・破

が爲に、甘露の法水を以て佛子の頂に灌ぎ法王の位を紹がしむるに喩ふ。之を灌頂といふ。唐譯には、得佛灌頂、成就一切平等佛法と。

【七九】 唐譯卷第二、虛空藏所聞の第二に答へ、戒以下の四度を說く。

【八〇】 尸羅（Sīla）の略、持戒と譯す。

【八一】 唐譯には慧如虛空とす。

【八二】 以下の句、唐譯に不捨一切學處、智慧清淨故。於一切處受生、願清淨故。於戒不緩任運無作、行清淨故。迴向菩提魔羅、心清淨故。心無熱惱、煩惱清淨故、大願圓滿、菩提清淨故とす。

【八三】 唐譯は、以下虛空の寂靜不亂、無有邊際、無有繫屬等を擧げて譬となし、本經と大に異る。

と爲す、[六五]我を離れて能く施し、我の爲を離れて施し、愛の結を離れて施し、無明の見を離れて施し、彼我菩提の相を離れて施し、種種の想を離れて施し、報を悕望することを離れて施し、慳嫉を離れて施し、其の心平等にして虚空の如くなる、是を菩薩八法を成就して能く檀波羅蜜を淨むと爲す。此の八法を離れたる、是を淨施と謂ふ。喩へば虚空の至らざる所無きが如く、菩薩の、慈心もて施を行ずる、亦復是の如し。喩へば虚空の色に非ず見るべからざるが如く、菩薩所行の諸施も色に依らざること、亦復是の如し。[六六]喩へば虚空の苦樂を受けざるが如く、菩薩所行の諸施は一切の受を離るる、亦復是の如し。喩へば[六七]虚空の[六八]想知有ること無きが如く、菩薩所行の諸施は諸の想の結を離るる、亦復是の如し。喩へば虚空是れ[六九]無爲の相なるが如く、菩薩所行の諸施は、無爲無作なること、亦復是の如し。喩へば虚空の虚假無相なるが如く、菩薩所行の諸施は識想に依らざる、亦復是の如し。喩へば[七〇]虚空の一切衆生を增益するが如く、菩薩所行の諸施は衆生を利益すること、亦復是の如し。喩へば虚空の窮盡すべからざるが如く、菩薩所行の諸施は、[七一]生死中に於て窮盡有る無きこと、亦復是の如し。善男子、喩へば[七二]化人、施を化人に給するに分別有ること無く、戲論する所無く、果報を求めざるが如く、菩薩も亦復是の如し、[七三]化人の相去るが如く、[七四]二邊を離れて諸施を行じ、分別し戲論し果報を悕望せず。善男子、菩薩は智慧を以て一切の、[七五]結使を捨て、[七六]方便智を以て一切衆生を捨てず。是を菩薩、檀波羅蜜を行ずること、虚空と等しと爲す」と。

爾の時會中に一菩薩有り、名けて燈手と曰へるが、座より起ち偏袒右肩・右膝着地し、合掌して佛に白して言さく『世尊、何等の菩薩か能く是の如き檀波羅蜜を行ずる』と。佛の言はく、『善男子、菩薩若し諸の世間を過ぎて出世間法を得なば、非色無體無行にして知見清淨、非闇非明にして一切諸相を離れ、無相智の際に至つて無盡の忍を成就し、如來の知見に近づき、菩薩[七七]決定の界分を紹ぎ、已に受記を得て不退轉印の爲に印せられ、已に[七八]灌頂の正位を得、已に善行もて衆生の行相

【六五】この八法、唐譯には我、我所、因、見、相、異相、不望果報、心平等如虚空の八種の淸淨施とす。
【六六】唐譯に譬如三虚空無レ有二受者一とす。
【六七】同に虚空無レ所二染著一、菩薩遠二離染著一行レ施云云とす。
【六八】麗本相智とす。宋等の三本想知とす、今、後者に從ふ。
【六九】爲作する所無きをいふ。
【七〇】唐譯には譬如虚空、遍諸佛刹とす。
【七一】同に菩薩不レ斷二三寶種一、迴向行レ施云云とす。
【七二】同に如三變化人施二變化者一云云とす。佛菩薩の人身に化せるを化人といふ。
【七三】同に皆如二幻化一、遠二離能所一、不レ希二果報一と。
【七四】施すると受くるとの二邊なり。
【七五】煩惱なり。
【七六】又權智ともいふ、實智に對す、方便の法に達する智なり。又方便を行ずる智なり。
【七七】菩薩の不退轉位なり。唐譯は住於菩薩尼夜摩位とす。
【七八】梵に Abhiṣecani. 印度の習、王子即位の時は、王種を斷ぜざらしめんが爲に、四大海の水を取つて、その頂に灌ぐ。佛教に於てもこの式に法り、佛種を斷ぜざらしむる

る、云何が菩薩は自ら其の境界を淨めて諸の佛界の如くなる、云何が菩薩は陀羅尼を得て[五九]先念せさる、云何が菩薩は無障礙の如來[六〇]加持の辯をば得る、云何が菩薩は自在を得て生死を受くることを示現する、云何が菩薩は諸怨敵を破し四魔を去離する、云何が菩薩は衆生を利益し[六一]功德を莊嚴する、云何が菩薩は世に無佛なる時能く佛事を作す、云何が菩薩は海印三昧を得、善能く衆生の心行を知るを得る、云何が菩薩は能く諸の塵界を知るを得ること無礙なる、云何が菩薩は威儀の行成就し、諸の闇冥を離れて勝光明を得、諸法の中に自然智を得、速に一切智の行を成就するを得る』と。[六二]

爾の時世尊、虛空藏菩薩に告げて言はく『善哉・善哉、善男子、汝善能く分別して如來に斯の如き妙義を問へり。汝曾て過去無量の諸佛を供養し、諸の善根を種え、心行平等にして喩へば虛空の如く、諸佛を禮敬して慧明の處に至り、勤精進を發して一切を度せんと欲したるが如く、諸佛も妙法もて一切衆生を捨てず、大慈悲もて彼岸に度し、及び諸の魔業を過ぎて世法を離れす、虛空と同量の心を以て、此の無上の大乘妙法を成就したり。虛空藏、汝の功德は邊際有ること無く校量すべきこと難し。汝曾て過去に於て恒河沙等の諸佛世尊の所に於て此の如き事を問ひ自ら亦能く說けり。是の故に虛空藏、汝今諦に聽き諦に聽け、善く之を思念せよ、吾當に汝の爲に分別解說すべし。問へる所の諸菩薩の事も復此れに過ぎ、能く無上の大乘・如來自然の智・一切種智を得ん』と。虛空藏菩薩の言はく『唯然り、快い哉、願はくは樂うて聞かんと欲す』と。

佛虛空藏に告げたまはく『善男子、菩薩は四法を成就し、[六三]檀波羅蜜を行ずること虛空と等し。何をか謂つて四と爲す。善男子、若し菩薩一切處に於て、障礙無く分別せず、檀波羅蜜を行ずるに[六四]我淨なるを以ての故に施も亦淨なり、施淨なるを以ての故に願亦淨なり、願淨なるを以ての故に菩提亦淨なり、菩提淨なるを以ての故に一切法亦淨なり、善男子、是を菩薩四法を成就し、檀波羅蜜を行ずること虛空と等しと爲す。善男子、若し菩薩八法を成就せば能く檀波羅蜜を淨む。何等をか八

【五九】唐譯に無忘法行とす。

【六〇】佛力を軟弱の衆生に加附して其の衆生を任持すること。梵に Adhiṣṭhāna.

【六一】無量の福德資糧を積集するなり。

【六二】以上二十六項の中、一・二は本巻に、三以下は全部第十五巻に解答す。

【六三】虛空藏所問の第一に答へて、檀波羅蜜を說くなり。檀那(Dāna)波羅蜜多(Pāramitā)の略。前者は布施と譯す。財又は法を人に施與するをいふ。後者は度又は到彼岸と譯す。生死海を渡りて涅槃の彼岸に至る行法をいふ。

【六四】この四法、唐譯には我淨なるが故に有情淨なり、有情淨なるを以て施淨なり、施淨なるを以て迴向淨なり、迴向淨なるを以て菩提淨なりとす。

く、勇健にして能く煩惱の怨を害ひ、[五三]已結を已に斷ちて彼の結をも斷ちたまふ、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。施を樂み、威儀もて心を調伏し、常に聞・進・戒・忍力に住し、禪定の諸通と勝慧明あり、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。空・無相・無願の法を樂み、而も現に形を受けて生死に處るも、無生・無終にして甘露に達したまふ、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。知見は甚深にして涯際無く、聲聞緣覺の及ばざる所、而も一切衆生の行を知りたまふ、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。善能く了達して正行を樂み、法と非法とに於て[五四]繫已に斷じ、常に正定に處りて心亂れたまはず、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。佛種を斷ぜざる諸の賢士は、能く正法及び僧を護り、多く三世諸佛の讃を聞く、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる』

爾の時虛空藏菩薩は、此の妙偈を以て功德光明王菩薩に答へ已り、佛に白して言はく『世尊、云何が、菩薩の[五五]檀波羅蜜を行ずること虛空と等しき。云何が尸波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行ずること虛空と等しきや、云何が功德を行ずること虛空と等しきや、云何が智を行ずること虛空と等しきや、云何が菩薩は[五六]如如を離れず、如來所許の念佛・念法・念僧・念施・念戒・念天をなすや、云何が菩薩は、[五七]諸法平等にして泥洹の如くなるを修行する、云何が菩薩は[五八]行相を分別する、云何が菩薩は諸佛法の寶藏を持し、如來所覺の法相の性に隨ひ、如實に諸法の性相を知り已つて不取不捨なる、云何が菩薩は衆生の始より已來清淨なるを分別して、衆生を敎化するや、云何が菩薩は善く發行に順じて佛法を成就するや、云何が菩薩は諸通を退せず、諸佛の法に於て悉く自在を得るや、云何が菩薩は甚深の法門――諸の聲聞・辟支佛の入る能はざる所――に入るや、云何が菩薩は十二因緣に於て善く勝智方便を得、二邊の諸見を離るるや、云何が菩薩は如來印の爲に如如に印せられ、智と方便とを分別せざるや、云何が菩薩は法界の性門に入り一切法の平等性を見るや、云何が菩薩は淳至堅固にして猶ほ金剛の如く、此の大乘心に住して不動な

【五三】己が煩惱の纒を斷じて他の纒をも斷つなり。

【五四】取著無きをいふ。

【五五】布施波羅蜜なり。次の五は、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の五波羅蜜なり。

【五六】眞如の謂。

【五七】唐譯に云何菩薩、修二業諸行一、等二於涅槃一とす。

【五八】一切有情の行相を分別するなり。

世尊は大力なり、佛の十力を成就したまへるが故に。世尊は無畏なり、[四六]四無畏を成就したまへるが故に。世尊は無勝なり、十八不共法を成就したまへるが故に。世尊は大慈の行もて一切の衆生を救ひたまふ、心無礙なるが故に。世尊は大悲の行もて無我を知見したまふ、一切衆生の苦を抜きたまふが故に。[四七]世尊は大喜もて禪定解脱三昧を行じたまふ、彼岸に到りたまへるが故に。世尊は大捨の行もて一切の憎愛を斷ちたまふ、心虚空の如くなるが故に。世尊は平等を得たまふ、諸佛の法を覺了して無礙なるが故に。世尊は憎愛の心無く畢竟清淨なり、毀譽に不動なるが故に。世尊は悕望無し、智慧滿足し、[四八]利養讃歎に於て欲求無きが故に。世尊は一切知もて一切佛の行處を見たまふ、彼岸に到りたまへるが故なり。我は世尊の、是の如き等の無量無邊の功德成就有すを知見す、是の故に我は法門中に於て少しく問ひまつる所有らんと欲す、』と。

虚空藏菩薩是の語を作し已るに、爾の時世尊、虚空藏菩薩に告げて言はく『善男子、我れ當に汝の問ふを聽すべし、汝の問はんと欲するところに隨つて汝の所問を恣にせよ、我れ當に汝の所問に隨つて爾の心を[四九]悅可すべし』と。

爾の時、[五〇]功德光明王菩薩は虚空藏に問ふて言はく『善男子、汝誰の爲の故に如來に問ひまつらんと欲するや』。即時に虚空藏菩薩、偈を以て功德光明王菩薩に報へて言はく、

[五一]『一切等心の諸衆生をば、平等に能く彼岸に至り、垢悲無き心中に遊戲せしめたまふ、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。能く正見に到りて垢穢無く、已に猶豫無くして彼の疑を斷じ、自ら了達を得て衆生を利したまふ、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。我と無我とを知りて與に等しき無く、衆の爲に發心して衆に著せず、能く衆生の我見を計するを脱せしめたまふ、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。能く威儀を護つて所行を愼み、其の心清淨にして虚空の如く、堅固不動なること須彌の如し、我れ是等の爲に世尊に問ひまつる。[五二]進心無涯にして慧の等しき無

【四六】唐譯は以下十力四無畏、十八不共などを數へ擧げず。

【四七】この句、宋元明に從ふ、麗本には、行於禪解脱定入定到彼岸故とす。

【四八】財利を貪りて自己を肥さんとすること。

【四九】歡喜せしむるをいふ。

【五〇】唐譯に功德王光明とす。次の句に、汝誰の爲にとあるも、唐譯相當文に、何の爲の故にといふ。

【五一】この四句、同に普心等二於諸有情一、妙心等住二於彼岸一、悟心無心入二妙理一、是故我問二於世尊一と。

【五二】精進心の無邊なるをいふ。

く、一切群生の色も亦爾り。諸法は色及び色相を離る、能く此の色を離るれば則ち離を得、諸の妙喩を作して以て佛を讃するに、見に執して讃せば是れ其の毀なり、佛德は空の如くにして差別無く、限量する所無きが即ち讃佛なり。[四二]故に淨尊の、他を淨め、緣無く心無く微心に入りたまへるを禮しまつる。[四三]佛の功德の如く世尊は知りたまふ、如如の功德をば我れ今禮しまつる。能く衆生無我を知る者と、諸法の際は欲を離るるを知る者と、法身を見る者とは則ち佛を見まつる、即ち爲に十方佛を供養しまつる』と。

虛空藏菩薩は此の偈を說き已るに、即時に妙寶莊嚴堂及び虛空中の諸寶臺は六種に震動し、一切大衆は心淨く悅豫し、踊躍歡喜して未曾有なりと歎じ、[四四]皆虛空藏菩薩に言はく『善能く此の妙偈を說きたり、若し善男子・善女人有つて能く此の法を行じ、乃至夢中に法有るを見ざれば、漸を以て皆當に師子吼を得べきこと、虛空藏菩薩の如くならん』と。

爾の時虛空藏菩薩、斯の如き妙偈を以て如來を讃し已り、佛に白して言さく『世尊、少しく問ひまつる所あらんと欲す、唯願はくは聽許したまへ。若し問ふを聽したまはば、爾らば乃ち敢えて問ひまつらん。所以は何、世尊は無量の知見有して能く衆生の諸根の、淳熟と未淳熟の者と有るを知りたまふ。世尊は明達なり、諸の闇冥を去りたまふが故に。世尊は義を了したまふ、善く說いて諸句義を分別したまふが故に。世尊は時を知りたまふ、限を過ぎたまはざるが故に。世尊の所說は謬らず、說の如くにして錯はざるが故に。世尊は時を知りたまふ、諸衆生の行に隨つて說法したまふが故に。世尊は善く遊戲したまふ、諸神足に通達したまふが故に。世尊は善く觀じたまふ、衆生の心行を體したまふが故に。世尊は最も染無し、諸法中に於て自在を得たまふが故に。世尊は自悟したまへり、諸法を覺了したまふが故に。世尊は[四五]正しく邪趣の衆生を御したまふ、敎へて正に入らしめたまふが故に。世尊は是れ大醫王なり、能く無始世界の衆病をして永く斷ぜしめたまふが故に。

【四二】この句、唐譯相當文に敬下禮能覺二諸有情一、無礙無心至中無得上とす。
【四三】同に唯有二諸佛一能讃レ佛とす。
【四四】唐譯によれば、この句は「空中に聲を出して言はく釋迦牟尼世尊の、無數劫中に積集したまへる法をば、虛空藏菩薩よく妙偈を以て稱讃したり。夢中に於ても未だ曾て聞かず、況んや見るを得んをや。若し善男子等有りて信解修行せば、當に云云」と云へり。
【四五】唐譯に世尊導師者、於諸道中示二正路一故と。

の世尊の身を示現し、諸の言語を斷つて音響無く、諸の言說を離れて[三二]戲論無し。是の如きを知ると雖も而も現に無性を說き、衆生をして[三三]悅豫せしめ、[三四]衆の心・非心に此の心を得しめ、能く非心は幻化の性なるを知る。能く衆生の心行の性を知り、而も能く彼我の心に住せず、威儀を示現して衆生を濟ひたまふ、善逝の身には作と不作と無し。佛は衆生の所樂に隨つて知り、即ち能く是の如き形を示現したまふ、世尊は法に於て我を計せず、憶想を生じて法に著したまはず。能く何の法を以て受敎すべきやを知り、而も所悟に隨ひ時に應じ說きたまふ、大衆は渴仰して世尊を瞻まつる、世の希有にして最も無比とする所たり。世尊は無心にして示現に於て、然も能く諸大衆をして悅ばしめたまふ、此等の諸法は緣より生じ、虛無寂寞にして眞實に非ず。世尊能く是の如きの法を知りて、清涼[三五]泥洹道に至るを得、二邊を去離して中に著せず、虛・非眞にして自性無きを知りたまへり。此等の諸法は作者無し、善く業報は斷・常に非ず、法に衆生・命及び人無く、寂靜不名にして虛空の如しと說きたまふ。如實に衆生無きを分別し、而も安く多衆を[三六]甘露に至らしむ、昔多劫に行じて[三七]不思議なり、[三八]進を求むる勢力は菩提に勝れたまふ。爲す所の妙行は今已に成じ、[三九]至無至義にして無餘を覺し、一切諸法の上中下は、悉く平等にして常に異無きを知りたまふ。智者の所知は不著を知るなり、是の故に[四〇]世尊は定んで不亂なり、陰・入・諸界は幻化の如く、三界は皆水中の月の如くなり。衆生虛僞の性は夢の如し、智を以て分別して是の法を說きたまふ、世人は假に稱して得道と名くるも、實には得・無得の相有ること無し。道の無得なるが如く輪も無轉なり、輪の無轉なるが如く度者も無し、故に能く衆を四流に度し、自ら度し彼の顚倒に繫るを度す。善能く苦惱の者を安慰し、自ら滅し彼を滅して[四一]無爲に至らしむ、衆生は生無く涅槃無し、衆生はもと淨にして不可得なり。道及び衆生は猶ほ幻の如し、自ら此際を覺し多衆を覺せしむ、虛空中に色を見ざるが如

【三二】謬れる義論のこと、愛論・見論などをいふ。
【三三】豫は安也、樂なり、悅なり。
【三四】唐譯相當文に於二諸有情一心平等、知二心如レ幻無一レ自性一、悉知二心行無思慮一、平等究竟心爲レ心といふ。
【三五】また泥曰、涅槃をいふ。
【三六】涅槃を甘露に喩へたるなり。
【三七】思議しがたき謂なり。
【三八】唐譯相當文に精進求二於無上道一といふ。
【三九】同に到二無行處一覺二涅槃一、妙覺二諸法性無一レ殊とあり。
【四〇】佛は常に定にあらざる心無し。
【四一】涅槃の謂なり。

訶曼陀羅華[二八]・波利質多羅華・摩訶波利質多羅華[二九]・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華[三〇]・盧遮那華・摩訶盧遮那華などの水陸の諸華、大さ車輪の如く、百葉千葉百千葉にして、皆光明香氣を出して普く妙香を薫じ、意に適ひて開敷鮮淨、雜色光耀にして眼の樂見する所たり。是の如き等の種種無量の妙華を雨らして妙寶堂中を滿たすこと高さ一多羅樹。諸の天樂を作すに其の音皆無量百千法門の聲――檀波羅蜜と相應の聲、尸羅・羼提・毘梨耶・禪那・般若波羅蜜と相應の聲、四無量と相應の聲、四攝法と相應の聲、助道法と相應の聲、三脫門と相應の聲、四聖諦と相應の聲、十二因緣と相應の聲――を出せり。

爾の時、虛空藏菩薩は、世尊を供養し佛足を頂禮し、遶ること七匝し已り、一面に在つて立ち、佛に白して言はく『世尊、彼の一寶莊嚴如來・應正遍知は問を致すこと無量なり、「少病少惱にして起居輕利に、安樂に行じたまふや不や」と。彼の一寶莊嚴如來は又言はく「十二億の菩薩有り、虛空藏菩薩と俱に往いて、彼の娑婆世界に至らん、願はくは世尊、如是如是の法を說き、諸菩薩をして自然智を得しめ、亦大法の光明を成就し已りて、還此に來至せしめたまはんを。」所以は何とならは、世尊は昔よりこのかた、曾て此に化したまへるを以て、善男子等は菩提心を發したればなり』と。

爾の時、虛空藏菩薩は世尊の頂上に當り、[三一]大寶蓋を化作す、廣さ十千由旬にて、靑琉璃を以て軒と爲し、眞珊瑚寶を子と爲し、琉璃及び閻浮檀金を以て升垂と爲し、雜妙眞珠の縵網と瓔珞の寶鈴と和鳴せり。其の蓋の光明は普く十方を照し、諸の妙華と互に相綺錯せり。爾の時、虛空藏菩薩は如來の不思議の功德に於て、深く敬重を生じ、合掌向佛して偈を以て讚じて言はく、

『法義智慧最勝の尊は、本淨にして垢無く所著無し、喩へば虛空の染汚無きが如し、我れ不動聖の足下に禮しまつる。行はともに等しき無く涯底無し、法もて嚴じたる身を現じて最も殊勝なり、佛の眞法身は虛空の如し、普く大悲を生じて濟度したまふ。人中の師子は能く、百福莊嚴

【二八】梵に Pāricitra 具に波利耶怛羅拘陀羅といひ、忉利天上の樹名。香遍樹、天樹王など譯す。
【二九】梵に Mañjūṣaka 赤團華、柔軟華など譯す。
【三〇】また盧那ともいふ、梵に Rocana. 譯して眼華といふと。
【三一】この大寶蓋の一段、唐譯に無し。

捨を莊嚴し、諸定に遊戲して神通を莊嚴し、無盡の寶手を以て功德を莊嚴し、諸衆生の心行を分別して智を莊嚴し、衆生に善法を敎へて覺を莊嚴し、慧の明淨を得て慧明を莊嚴し、[二〇]義・法・辭・應を得て諸辯を莊嚴し、魔外道を壞して諸無畏を莊嚴し、佛の無量の功德を得て自ら莊嚴し、[二一]常に諸毛孔の說法を以て法を莊嚴し、諸佛の法明を見て自の明を莊嚴し、能く諸佛國を照して光明を莊嚴し、[二二]不錯謬を說いて所記を莊嚴し、神通もて樂說する所に隨つて敎授を莊嚴し、神通もて四神足の彼岸に到つて變化を莊嚴し、神通もて佛の密處に入つて諸如來の護持を莊嚴し、自ら正智を悟つて法の自在を莊嚴し、如說に行じて能く壞する者無きは一切善法を莊嚴して堅固なればなり。彼の虛空藏菩薩は、是の如き等の無量の功德を成就し、十二億の菩薩摩訶薩と俱に、意を發して此の娑婆世界に來詣して我を見、禮拜供養・恭敬・圍遶せんと欲し、亦此の[二三]大普集經に、少法門の分を分別せんが爲の故に、又此の十方の諸來會菩薩に大法明を生ぜんが爲の故に、又開大乘の法を增益せんが爲の故に、又如來の法を受持せんが爲の故に、又無量衆生の善根出生の爲の故に、又善法を以て諸魔外道を調伏せんが爲の故に、又菩薩の師子遊戲神通を示現せんが爲の故に、彼の虛空藏菩薩、此に來至せんと欲するなり、是れ其の瑞應たり』と。

爾の時世尊、此の事を說き已りたまふ、即時に虛空藏菩薩は、十二億の菩薩摩訶薩に恭敬圍遶せられて、一寶莊嚴佛の所に詣り、佛に白して言はく『世尊、我れ[二四]娑婆世界に詣り、釋迦牟尼佛を見て、禮拜供養せんと欲す』と。彼の佛報へて言はく『往かんと欲せば意に隨つて、宜しく是れ時なるを知るべし』と。即ち一寶莊嚴如來の足下に頂禮し已り、右遶七匝して、佛の[二五]遊戲無作の神足を承け、彼の大莊嚴國土に於て、忽然として現ぜず、一念の頃を以て諸菩薩衆と共に、此の娑婆世界の寶莊嚴堂の妙寶臺上に來至したり。

爾の時、虛空藏菩薩は妙華香を雨らして世尊及び此の大寶集經を供養したり、[二六]所謂[二七]曼陀羅華・摩

【二〇】四無礙辯なり。

【二一】唐譯相當文に以レ法莊二嚴於衆一毛孔演レ法如レ響故とす。

【二二】佛、菩薩の八辯の一なり。所說に錯謬無きをいふ。次の所記とは記別（豫言）する所をいふ。唐譯相當文に以二記心一莊嚴、無二錯謬一故とあり。

【二三】唐譯に大集會微妙法門とす。

【二四】又娑訶 Saha 忍土と譯す。

【二五】唐譯に遊戲無行とす。

【二六】以下の諸華、唐譯相當文には月華、大月華、妙光勝華…照觸十方菩薩などを擧ぐ。參照すべし。

【二七】梵に Mandārava 圓華、小白團華、悅意華、天妙華など譯す。

り。二相を離るるが故に、一切法は無二門なり。別異を捨するが故に、一切法は無別異門なり。一相に入るが故に、一切法は一相門なり。自相淨なるが故に、一切法は自相淨門なり。三世を過ぐるが故に、一切法は過三世門なり。平等を離れざるが故に、一切法は不離平等門なり。相・非相を幻化するが故に、一切法は幻化相門なり。體不實の故に、一切法は無體門なり。作相無きが故に、一切法は無作門なり。身心遠離の故に、一切法は遠離門なり。相・無相を離るるが故に、一切法は無相門なり。相不動の故に、一切法は不動相門なり。依處無きが故に、一切法は無依處門なり。無際に住するが故に、一切法は無際門なり。巣窟無きが故に、一切法は無巣窟門なり。我無く我所無きが故に、一切法は無我・無我所門なり。主無きが故に、一切法は無主門。性は無我の故に、一切法は無我門なり。內淸淨の故に。舍利弗、彼の一寶莊嚴如來は、諸菩薩の爲に是の如き虛空印法門を廣說す。彼の如來、是の法を說く時、無量阿僧祇の諸菩薩は、諸法の性と虛空と等しきを解知し、諸法中に於て無生忍を得たり。

『舍利弗、彼の大莊嚴刹土の一寶莊嚴佛の所に、一菩薩摩訶薩有つて虛空藏と名く、大莊嚴を以て自ら莊嚴し、諸の不思議の願に於て最も殊勝たり、一切功德中の威德・無礙の知見を得たり。不可思議の菩薩功德を以て自ら莊嚴し、諸の相好を以て其の身を莊嚴し、[一九]善說法を以て度すべき所に隨つて其の口を莊嚴し、定を退かずして其の心を莊嚴し、諸の總持を以て其の念を莊嚴し、諸の微細法に入つて其の意を莊嚴し、法性を順觀して進を莊嚴し、堅固の誓を以て淳至を莊嚴し、必成辦を以て所作を莊嚴し、一地より一地に至るを以て畢竟を莊嚴し、諸の所有を捨して施を莊嚴し、淨心善語を以て戒を莊嚴し、諸衆生の心に於て礙有ること無くして忍辱を莊嚴し、衆事備足して精進を莊嚴し、定に入り神通に遊戲して禪を莊嚴し、善く煩惱の習を知つて般若を莊嚴し、衆生を救護せんが爲に慈を莊嚴し、不捨衆生に住して悲を莊嚴し、心に猶豫無くして喜を莊嚴し、憎愛を離れて

【一九】唐譯には辯才を以てといひ、次句をば、勝定を以て心を莊嚴すといふ。

千大千世界を照らして、諸菩薩の光明に映じて明顯ならざらしむ。爾の時大衆は歡喜踊躍し心情悅豫して未曾有なりと歎じ、合掌して佛に向ひ是の如き言を作せり『今や如來、必ず大法を說かんとて此の瑞應を現じたまへるなり』と。

爾の時舍利弗、佛の威神を承けて寶臺より起ち、更に衣服を整へ、偏袒右肩・右膝著地し、合掌して佛に向ひ、佛に白して言さく『世尊、是れ何の瑞相なる、是の如き等の、勝喜悅を生じ大神變を現じたまへる有るは。世尊、此の諸大衆は皆疑惑を生じたり、願はくは如來、何の因・何の緣にて此の未曾有の事を現じたるやを說きたまはんことを』と。

爾の時佛、舍利弗に告げたまはく『東方に此を去ること八佛世界の微塵數等の佛土を過ぎて世界有り、大莊嚴と名く。彼の國に佛有つて一寶莊嚴如來應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と號し、今現在說法したまふ。何の因緣を以てか世界を大莊嚴と名くとならば、若し彼の世界莊嚴の事を廣說せば、一劫なるも盡きず、是の故に彼の土を大莊嚴と名く。何の因緣の故に、彼の佛を名けて一寶莊嚴と爲すとならば、舍利弗、彼の如來は一寶に因つて說法すればなり、[一七]所謂無上大乘の法なり、是の故に彼の佛を一寶莊嚴と名く。彼の佛は諸の菩薩衆と各師子座に昇り、空中の高さ八十億多羅樹に踊在し、諸菩薩の爲に[一八]虛空印法門を說きたまふ。何をか虛空印法門と謂ふ、一切法は虛空を以て門と爲すが如く、住處無きが故に、一切法は無住處門なり。形相無きが故に、一切法は無形相門なり。諸の行處を過ぐるが故に、一切法は無行處門なり。內外淨なるが故に、一切法は淨門なり。性は無染の故に、一切法は無染門なり。自性寂靜の故に、一切法は寂靜門なり。心意識もと無なるが故に、一切法は本無門なり。物・非物を離るるが故に、一切法は無物門なり。敎相無きが故に、一切法は無敎門なり。形段無きが故に、一切法は無形段門なり、因緣の境界を離るるが故に、一切法は無因緣境界門なり。寂滅の相の故に、一切法は寂滅門な

mitvaśavartin)ありこの上に色界の十八天あり、初は梵天より、頂は色究竟天 Akaniṣṭha に及ぶ。

【一七】唐譯に常說下唯以二大菩提心一而爲中其寶上と。

【一八】唐譯に虛空清淨法印といひ、三十二を數へたり。その次第と項目とに於て本經と出入あり。

つて差別を說くの門に入り、堅く法を分別して諸の魔界を壞し善く思惟に順ずるの門に入り、諸結及見を斷ずる無礙智慧の門に入り、無等の願方便智門に入り、諸佛等智門に入り、諸法滯礙無く如實に分別するの門に入り、變異無き平等の法門に入り、甚深の十二因緣の門に入り、功德智慧もて佛の身口意を莊嚴し、思進念慧を堅固にする無盡の門に入り、四聖諦の門に入り――聲聞を調伏せんが爲の故に、身心の行を遠離するの門に入り――辟支佛を調伏せんが爲の故に、一切智の記を授くる門に入り――菩薩を調伏せんが爲の故に、諸法自在門に入る――佛の功德を顯はさんが爲の故に。所謂開示・解說・顯現して解せしめ、敎讀・施設・次序・開張・分別して、正說に隨順し易からしめたまへり。

爾の時世尊、是の如く善く[一二]大法の方便を分別したまへる時、此の三千大千世界に於ける一切の諸色像――若しは[一三]鐵圍山・大鐵圍山・須彌山王及び諸の黑山・[一四]四天下及び閻浮提の聚落城邑舍宅、大海江河泉源[一五]陂池、藥草樹木及び諸の叢林、諸龍夜叉乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の宮殿・地神の宮殿、虛空中の諸神の宮殿、[一六]四天王天・三十三天、夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天及び梵天の宮殿、上は阿迦膩吒天の宮殿に至る一切の大地、及び欲界の色身の衆生など、悉く皆隱蔽して眼の見ざる所たり。喩へば劫盡きて火災起るの後、大地焦盡し大水未だ出でざらんに、爾の時に當つて乃ち一色の眼と對を作すもの無きが如し。爾の時、三千大千世界は亦復是の如く、亦少しの色も無かりき。是れ欲・色界の所攝たり、唯妙寶莊嚴堂中所見の色像を除く。

爾の時、妙寶莊嚴堂中の虛空の中に、依著する所無くして、自然に無量百千那由他の寶臺を成じ、微妙の莊嚴は世の樂見する所たり。喩へば大妙莊嚴世界の、一寶莊嚴佛土の菩薩所住の寶臺の如くなり、此の諸寶臺も亦復是の如し。諸大衆の寶臺中に坐するを見るに、妙寶莊嚴堂內に於て、自然踊出せる淨妙眞金の師子座は、高さ十千由旬なり。此の師子座より妙淨の光明を出し、遍く此の三

【一二】 唐譯に大集會甚深の法といふ。
【一三】 同に蘇迷盧山、輪圍山、大輪圍山、瞻部洲等とす。鐵圍山は梵に Cakravāḍa といふ。古代印度の宇宙說によれば須彌山を中心として外に七山八海あり、第八海は鹹海にして瞻部等の四洲此に在り、此の鹹海を圍繞するを鐵圍山といふ。これ等を以て一小世界を成す。この小世界の千を以て一大千世界といひ、之を圍るを大鐵圍山といふ。須彌山はこれが中山たるを以て山王とす。
【一四】 かの第八鹹海中の東西南北(須彌を中心として)に四大洲あり、その南なるを閻浮提(Jambudvīpa)といひ、吾人の住む世界なりと云はる。
【一五】 陂は池なり。
【一六】 須彌の半腹に由犍陀羅(Yugaṃdhara)と名くる一山あり、頂に四峯あり、持國(東)、增長(南)、廣目(西)、多聞(北)の四天王各その一に居る、之を四王天といひ、六欲天の第一たり。梵に Catur-mahārāja Kāyikā といふ。六欲天はこの上に忉利天(また三十三天といふ、須彌山頂に在り、梵に Trāyastriṃśa といふ)以下の四天(卽ち夜摩 Yāma, 兜率 Tuṣita, 化樂 Nirmāṇarati, 他化 Paranir-

卷の第十四

虚空藏品[一]　第八之一

所問品　第一

[二]爾の時[三]婆伽婆は、[四]如來行處妙寶莊嚴堂上に遊び、如來の威神大功德もて莊嚴し、衆相具足したまへり、[五]もと佛地を行ずるに因つて報を得たまへるなり。菩薩の宮宅は無量の讃に稱へり、如來神力の建立する所たり、無礙智の行處に入り、[六]勝喜悅を生じ、思念進智もて分別巧說し、衆德具足して來世まで歎ぜらる。世尊は正覺もて善く法輪を轉じ、善能く無量の衆生を調順し、諸法の中に於て皆自在を得しめ、諸衆生心の趣向する所を知り、[七]善能く一切諸根を分別し、彼岸に善く、結の習を斷じ、永く盡して餘無く、所施の佛事は自然に成辦して、大比丘衆六百萬人と倶なりき。其の心調柔にして結習已に斷じ、皆是れ如來法王の子たり、甚深の法を行じ、善能く[八]無所有の法を解了し、殊妙端正にして威儀具足せり。是の大福田は、正しく如來の教へたまふ所の法中に住したり。復大菩薩僧と倶に、一切の諸行を度し、菩薩の所行を捨せず、無我忍を得、諸の衆生に於て大悲を捨せず、諸の世間に過ぎ、世法に順じて衆生を勸化し、亦善能く如來の行地に入り、又復菩薩の行地を離れざりき。其の名を[九]普明菩薩摩訶薩、無礙明菩薩、於一切法自在王菩薩、無礙行處菩薩、分別辯覺菩薩、淨無量網明燈王菩薩、不染行處菩薩、壞魔界放光明菩薩と曰ひ、是の如き等の不可計阿僧祇・不可思・不可稱・不可量・無齊限・不可說の菩薩摩訶薩と倶なりき。

[一〇]爾の時世尊、諸菩薩に[一一]出要の行――無礙法門莊嚴菩薩道と名くる――を說き、佛法の諸力無畏を成就し、諸法の自在を知るを得て、陀羅尼印門に入り、諸辯を分別するの門に入り、大神通の門に入り、不退轉の輪諸乘平等を說くの門に入り、一相法界無分別の門に入り、衆生の根の所解に隨

【一】唐不空譯、大集大虚空藏菩薩所問經、八卷。
【二】同卷第一。
【三】Bhagavat の寫、また薄伽梵とも寫し、世尊と譯す。
【四】唐譯に如來境界寶莊嚴道場とす。
【五】同に大行等流之所成就とあり。
【六】以下の三句は同相當文に能生廣大善巧念慧、入無所有智所行處、盡未來世、稱讃無量殊勝功德とあり。
【七】この二句、唐譯に善知一切諸根彼岸、善斷一切煩惱結習とあり。
【八】唐譯には無相の法といへり。其の心調柔以下、この比丘衆に就て云へるなり。
【九】以下唐譯に電天、戰勝、遍照、勇健、摧疑、奮迅、觀察眼、常舒手の諸菩薩を擧げ、皆諸の佛刹より來集せる諸菩薩なりとす。
【一〇】この一段唐譯に無し。
【一一】生死を出離するの要道。

無きを知ると雖も、方便を以ての故に忍辱を修集し、修無く遠離有ること無きを知ると雖も、方便を以ての故に精進を勤修し、諸法の本性寂靜なるを知ると雖も、方便を以ての故に禪定を修行し、生死涅槃有ること無きを知ると雖も、方便を以ての故に智慧を修集し、諸法の本性は自ら滅なりと知ると雖も、方便を以ての故に、涅槃即ち是れ般若なりと說く。夫れ般若は聲・名・字無く、宣說すべからず、見聞すべからず、心無く識無く、取せず捨せず、我・我所に非ず、處所・形質・規矩有るに非ず、高からず下ならず、色に非ず見に非ず、對に非ず作に非ず覺に非ず想に非ず、住處有ること無く、去・來・現在に非ず、色・聲・香・味・觸・法に非ず、明に非ず闇に非ず、是の虛空に非ず、內に非ず外に非ず作に非ず有に非ず、肥に非ず瘦に非ず增に非ず滅に非ず、本性淸淨にして貪恚癡に非ず、亦狂亂に非ず、邊際有ること無く稱量すべからざる、是を般若波羅蜜の不可宣說と名く』と。

是の法を說きたまへる時、魔王波旬、繫に於て脫を得、心に歡喜を生じて即ち是の言を作す『我れ今不可說の法を聞いて解脫を得たるが如く、若し善男子善女人有つて是の法を聞かば、亦當に我の如く顚倒の中に於て解脫を得、一切の衆魔は其の便を得ざるべし』と。爾の時會中の萬二千の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。

是の時阿難、佛に白して言はく『世尊、是の如き正法をば何等と名字し、云何が奉持せん』と。佛の阿難に告げたまはく『是の經を名けて方等大集と爲し、亦復名けて不可說法と爲し、亦復入一切佛法斷一切佛所有名字と名けん。若し人有つて能く是の如き等の法を頂戴受持せば、即ち能く阿耨多羅三藐三菩提を獲得せん』と。爾の時、空中に多く伎樂香華を設け、不可說菩薩を供養したり。是の時、三千大千世界は六種に震動したり。

大方等大集經卷第十三

は是れ生、一法は是れ滅なりと見ず、精進を修して法界を壞せず、衆生を度せんが爲に莊嚴を修し、空・無我に於て錯亂を生ぜず、一切の佛法を具足せんと欲するが爲に莊嚴を行じ、佛法は卽ち是れ無法なりと說くを聞き、是の事の中に於て恐怖を生ぜず、清淨に如來の世界を莊嚴し、復莊嚴すと雖も之を觀ずること空の如く、亦法輪を轉ずることを莊嚴せず、――何を以ての故にとならば、一切の法性は不可說の故なり、是を毘梨耶波羅蜜の不可宣說と名く。善男子、若し菩薩有つて禪波羅蜜を修し、修し已つて過去の心性を見ず、本性を淨め已つて住處を見ず、亦復貪恚癡の心、上中下の心を見ず、及び貪・恚無く、愚癡と慧心とをも亦分別せず、――何を以ての故に、貪・恚・癡の性の如く、無貪恚癡も亦復是の如くなればなり、是の如く觀じ已つて亦禪定に入り、亦能く平等を平等と作さず、亦能く不平等の法を以て平等と作さず、亦能く陰・界・諸入、善惡淨穢、有漏無漏、世間・出世間、生死・涅槃・對治等の法を了知する、是を禪波羅蜜の不可宣說とは名く。

『善男子、云何が名けて不可宣說の般若波羅蜜と爲す。若し慧の行無くんば我と我所、衆生・壽命・士夫も、常・斷・有無等の見も、欲界・色界・無色界も無けん、是を無行と名け、諍訟有ること無く去無く來無き、是を則ち名けて慧行に隨ふと爲し、無明の闇及び惡邪見を離る。是の如きの法を觀ぜば卽ち眞實の觀なり。善男子ハ火災起る時は一切燒盡して、因緣有ること無し、唯虛空を除く。菩薩の是の不可宣說般若波羅蜜を行ずる時も、亦復是の如く、因緣有ること無し。一切法の本性盡く滅するを見ては、方便を以ての故に諸衆生の爲に涅槃なりと宣說す。亦衆生の名字有ること無きを知り、方便を以ての故に名字を宣說し、慧力を以ての故に過去未來を知つて出滅を說く。復身・心有ること無きを了知すと雖も、方便を以ての故に身心を說き、諸法の宣說すべからざるを知ると雖も、衆生の爲の故に方便して說き、施及び受者無きを知ると雖も、方便を以ての故に施を說き受を說き、諸法の本性情淨なるを知ると雖も、方便を以ての故に禁戒有りと說き、諸法もと瞋性

す、宣說すべからず』。波旬の言はく『云何が名けて發菩提心と爲すや』。不可說の言はく『貪の性を了知せば則ち發心と名く。若し復瞋・癡・慳・妬・陰・入・諸界と無明・行・識・名色・六入乃至生・老死の大苦を了知せば是を發心と名く』と。

波旬の言はく『一切諸法は何等の性有るや』。『波旬、一切諸法は無出を是れ性とす』。波旬の言はく『云何が無出なる』。『夫れ無出とは、卽ち魔迹無きなり。魔迹とは卽ち是れ我と我所となり、我と我所とを離るれば、是を無出と名く。因緣・行・想・聚・取を覺觀し、想非想・生滅・善惡・有漏無漏・有爲無爲・世及び出世を說くは、卽ち是れ魔迹なり。若し是の如き無ければ、卽ち是れ無出なり』と。是の法を說ける時、八千の菩薩は無生忍を得、虛空の中に是の如きの聲を出せり『善哉・善哉、波旬。是の法を說ける時、八千の菩薩は無生忍を得たり』と。波旬の言はく『善男子、菩薩は何等の法を具足するが故に無生忍を得るや』と。空中の聲の言はく『六波羅蜜を修集具足して無生忍を得』と。

爾の時不可說菩薩、佛に白して言はく『世尊、唯願はくは如來、諸菩薩の爲に不可說を說きたまはんことを』と。佛の言はく『善男子、若し菩薩有つて、檀波羅蜜を行ぜん時は、身を幻の如しと觀じ、受を夢の如しと觀じ、菩提は猶ほ虛空の如しと觀じ、施を行ずるの時、一法をも見ざる、是を檀波羅蜜の不可宣說と名く。若し菩薩有り、戒と戒地、毀戒及び地を觀じ、諸の衆生は我性有ること無しと觀じ、法性を觀ぜば、是を戒を持して戒を破毀せずと名く。戒を具足し已れば三眼を發さす――一に持戒眼、二に破戒眼、三に菩薩眼なり。復戒を持すと雖も一法をも求めず、菩提の去・來・現在を見ざる、是を尸波羅蜜の不可宣說とは名く。善男子、若し菩薩有り、諸の衆生の不生不出なるを觀じて忍を修し、菩提と衆生と諸法とは皆悉く空寂なりと觀じ、衆生空の中に瞋・喜の心無く、亦復一法の怨想を覺せずして忍を修し、亦復一法を遠離することを覺せずして忍を修する、是を羼提波羅蜜の不可宣說と名く。善男子、若し菩薩有つて勤行精進し、都て身・口・意等有りて一法

二十に如法に住し、二十一に護法の爲の故に身命を惜まず、二十二に總持を成就し、二十三に念心を具足し、二十四に能く深法を說き、二十五に智慧を具足し、二十六に諸力を具足し、二十七に菩提を願じ、二十八に衆生を捨せず、二十九に慈悲喜捨の心を修集し、三十に生死に遊んで心に悔を生ぜず、三十一に受身の爲の故に福德を莊嚴し、淨願を發さん爲に智慧を莊嚴し、三十二に一切法の宣說すべからざるを知る、是を三十二と名く。菩薩若し能く是の法を增長せば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。善男子、譬へば秋夜の初月增長せば亦明かに亦淨きが如く、衆生の未だ菩提の心を發さざるも、是の如き三十二法を具足せば、亦復是の如くなり。善男子、菩薩若し能く是の如き三十二法を具足して妙色相を得ば、常に天・人の爲に供養せられ、能く一切を捨して果報を求めず、大誓願を發して三世を淨め、持戒完淨にして漏さず破らず、忍辱を修して從つて善を聞くを得、無生法忍もて善法を莊嚴し、身心寂靜にして善根に貪せず、終に諸禪を修集愛味せず、亦衆生を緣ずるの[五五]慈を修集せず、唯法緣・無緣の慈を修し、大悲を修集して他の所作を作し、恩を知り恩を報じて衆生を捨せず、樂んで正法を聽き、聞の如くに說き、法を演說する時食想有ること無く、能く自他を調して貪恚の心を離れ、四攝の法を以て衆生を攝取し、福智二種の莊嚴と、毘婆舍那及び舍摩他を修行し、念心を具足して諸の威儀を淨め、四無礙智を成就獲得し、身口意の業は智慧に從ひ、其の心堅固にして退轉有ること無く、常に能く一切衆生を利益せん。波旬、諸の衆生の佛法に入らんが爲の故に、示すに文字音聲演說有るも、第一義中には都て是の如き文字聲說無し、是を則ち名けて一切法性と爲す。一切法性の性は不可說なり』と。

波旬の言はく『善男子、若し一切の法は不可說ならば、菩薩は云何ぞ大誓願を發して菩提に向へるや』。不可說の言はく『波旬、譬へば虛空の如きは其の性無邊なるも、是の中に寧ろ井池を作すべきや不や』。『しからず、善男子』。『波旬、若し一切の法性は不可說なる無くんば、終に證すべから

【五五】衆生を緣じて起す慈悲は、凡夫及び有學の二乘の小悲なり、法緣の慈悲は、五陰を緣じて起す慈悲にして無學の二乘及び地前の菩薩の中悲なり、無緣の慈は空理を緣じて起す慈悲にして地上の菩薩の大悲なり。

子、一切の衆生は幾の法をか成就して、能く無上菩提心を發すや』。『波旬、衆生は十六種の法を成就して、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發すなり。何等か[五四]十六なる、所謂常に上心を修して諸根を瑩磨し、諸善を勤修して功德を莊嚴し、至心に戒を持して悔厭を生ぜず、大悲を修集して衆生を憐愍し、佛世尊の大慈悲を有るを信じ、諸の衆生の爲に諸苦を受行し、能く衆生所有の苦惱を壞し、諸根を調伏して正念を具足し、心に所畏無く諸有を求めず、佛智を樂求して二乘を樂まず、樂を受けて慢無く、苦を受けて悔無く、智慧を恭敬して憍慢を破壞し、恩を知り恩を報じて、身力を具足し、正法を護持して三寶を斷ぜざる、是を十六と名く。善男子、若し衆生有つて是の如きの法を具せば、當に知るべし、是の人能く阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし』と。波旬の言はく『善男子、衆生若し是の如き等の法を具して、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發さば、我れ今實に是の如き等の法無し、云何ぞ能く無上道心を發さん』。不可說の言はく『波旬、譬へば樹を種ゆるは華と果實との爲なるが如く、初に未だ有らずと雖も、當に知るべし、其の後に必ず得んこと疑ふべからず。衆生若し菩提心に向ふの行を爲さんに亦復是の如し、未だ現に有らずと雖も、漸漸に當に是の十六法を得べし』。波旬の言はく『善い哉善い哉、善男子、汝の所說の如し』と。是の法を說ける時、天と人衆との三萬三千は、阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。

波旬の言はく『善男子、云何が名けて菩提心に向ふの行と爲す』と。『善男子、三十二法有つて菩提心に向ひ、增長を得しむ。何等か三十二とならば、一に至心、二に定心、三に淨心、四に欲心、五に不放逸心、六に善法を修集し、七に無上菩提を莊嚴趣向し、八に能く四攝を以て衆生を攝取し、九に樂んで方便を行じ、十に衆生を調伏し、十一に能く衆生を熟せしめ、十二に能く因緣を知り、十三に勤行精進し、十四に善友に親近し、十五に信心を具足し、十六に信心を具足するが故に便ち歡喜を生じ、十七に師長・和上・有德の人を供養恭敬し、十八に能く病苦を瞻、十九に能く善思惟し、

【五四】十六種の區分明ならず。

を遠離して精進を勤め、善法を修せんが爲に休息せず、若し能く演說して精進を勤めなば、精進に因るが故に受記を得ん。一切の諸法は本性淨なり、平等にして差無きこと虛空の如し、若し能く是の平等を演說せば、三昧に因るが故に受記を得ん。若し能く法の不可說を知り、說く時に怖畏を生ぜず、能く方便を以て衆生を化せば、是の智に因るが故に受記を得ん』と。

爾の時魔王、四種の兵――車兵・馬兵・象兵・步兵を將つて佛所に來至し、魔は自ら身を化して比丘の像を作し、不可說菩薩に語つて言はく『善男子、魔王波旬は今四兵を將つて佛所に來至す、汝今何等の方便をか設けんと欲する』と。不可說の言はく『彼若し來らば我當に其をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむべし』と。比丘の言はく『善男子、彼の魔波旬は都て善心無し、云何ぞ能く菩提心を發さしむる』。不可說の言はく『我れ當に調伏して善心を得しめ、善心を得已らば、是の因緣を以て阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむべし。云何が調伏するとならば、我れ當に彼の[五三]他化自在王に往くべし、其の境界にては、彼れ當に我れに屬すべし、既に我れに屬し已れば、我當に隨意に之を調伏すべし』と。

爾の時波旬、是の語を聞き已つて心に怖畏を生じ、卽ち退還せんと欲するも、得る能はずして、復是の念を作す、『我れ今既に縛せられず又解を得ず、亦復神通力を作す能はず』と。時に魔卽ち空中の聲を聞くに曰はく『是れ不可說の神通の力なり』と。魔王波旬、卽時に便ち前んで不可說に向ひ、禮拜懺悔して是の言を作せり『我れ今一切の魔業を捨離す』と。不可說の言はく『波旬、誰か汝を繫縛する』。波旬答へて言はく『善男子、我れ今繫も放も無きに行く能はず』。不可說の言はく『善男子、汝今繫せられず放たれずして行く能はざるが如く、一切の衆生も亦復是の如く、繫無く放無きに行く能はず。何を以ての故に、無明・愛等の顚倒繫縛して解脫を得ればなり。波旬、汝今若し繫縛を壞せんと欲せば、應當に速に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし』と。波旬答へて言はく『善男

[五三] 梵に(Paranirmitava-śarti-deva)、欲界六天の最高。此處に魔の宮殿あり正法に害をなす天魔在りとせらる。

能はず、心は次第の心を見る能はず、一切の諸心は縁より生ず、是の故に次第の心は不斷なり。若し能く是の如きの心は、猶ほ虛空及び幻相の如しと知見せば、是の人は卽ち心の自在を得、亦能く次第の心を了知せん。猶ほ幻師所作の幻の如く、無量世の[五一]業師も亦爾り、心の如く衆生も亦復然り、若し知れば卽ち心の自在を得。若し能く是の如き忍を得る有らば、猶し幻法の因緣無きが如くなり、若し是の如く知つて貪を生ぜず、因緣に由らざれば、解脫を得ん。一切衆生の諸の心性は、如來說いて三世の攝と爲したまふ、猶ほ幻物の眞性無きが如く、衆生の心も亦復然り。心能く諸衆生を了知し、衆生亦能く心を了す、心は色に非ざれば見るべからず、心の如く衆生も亦復然り。衆生の性の如く、一切法の無爲の性は說くべからず、如來は眞の法性を學得したまふ、是の故に名けて無礙智と爲す。一切の凡夫は知見せず、無量の生死中に流轉し、無明に覆はれて實に迷ひ、如爾及び法界を知らざるなり。法界の性は虛空の如く、一切の世間は說く能はざるに、如來は大慈悲を修集して、無字法中に演說したまふ。猶ほ世間の[五二]六種味は、各各自ら覺知する能はざるが如く、衆生は陰・入・界を說くと雖も、而も其の性相を了する能はず。衆生の智慧は不生滅なること、猶ほ虛空及び幻の如し、一切の顚倒を遠離するが故に、是を則ち名けて淨智慧と爲す。如來は一切法の、受無く作無くして草木の如くなるを覺了したまふ、若し能く是の如き法を觀察せば、是の人卽ち無生忍を得るなり。若し無量の諸菩薩有り、是の如き忍辱を獲得せば、是の人卽ち無量の佛の爲に、其の無上菩提の記を授けられん。若し能く內外の物を放捨し、乃至身命を惜まず、能く一切の諸衆生を調せば、是の人卽ち佛の爲に記を授けらる。若し能く諸の衆生を淸淨にし、已に淸淨にし已つて慢を生ぜず、諸の衆生悉く淸淨なりと說かば、是の因緣を以て受記を得ん。若し諸法の念念に滅するを知り、衆生の爲の故に忍辱を修し、復能く衆生に忍を演說せば、是の忍に因るが故に受記を得ん。惡法

【五一】上に幻師といへるに對して、業報の爲に、無量世に流轉するを業師といふ。

【五二】苦・酸・甘・辛・鹹・淡の六種の味なり。

「若し能く是の色陰の分、及び不可說無二の相を觀ずれば、是の人卽ち平等智を獲んこと、猶ほ先佛の所得の如くなるべし。若し受・想・行・識の陰も、亦復是の如く二有ること無しと觀じ、能く諦に不可說を了知せば、卽ち受記を得んこと先佛の如くなるべし。若し能く入・界等、及び一切の法は二相無しと觀ぜば、聲無く字無く節有ること無し、是の故に諸法は不可說なり。不可說の分と三世の分とは、卽ち是れ一分にして差別無く、實性眞相は悉く平等なり、是の如く觀ずるを義菩薩と名く。貪欲瞋恚及び愚癡と、空・無相・願とは悉く平等にして、生死と涅槃も差別無く、佛・法・僧寶も亦二無きなり。一切法の義は不可說なり、生滅有ること無くして虛空の如し、作無く受無きこと火性の如く、緣より生じ非緣にして滅す。滅し已れば去來の處を知らず、一切の諸法も亦是の如し、諸法は皆因緣より生ず、因緣斷ずるが故に名けて滅と爲すなり。若し法は不生にして不滅ならば、亦復不常にして不斷なり、卽ち是れ甚深の十二緣にして、更に緣よりして出生せず。本生あること無くして今生じ、本出有ること無くして今出でたり、造作有ること無く受者も無し、諸の因及び果報有ること無し。亦復有に非ず無に非ず、彼此の二種の相有るに非ず、亦內に在らず外に在るにあらざる、卽ち是れ甚深の十二因緣なり。是の法は本無くして今有り、已に有の法にして復無に還る、若し是れ有法ならば三世の攝なり、當に知るべし、性相は前に說くが如くなり。若し是れ內法ならば外の中には無く、外法の性ならば內の中に無し、一切の諸法も亦復是の如し、是を第一眞空の義と名く。一切衆生の心の本性は、清淨無穢にして虛空の如し、凡夫は心性を知らざるが故に、客煩惱の所染なりと說けり。若し諸の煩惱は能く心を汚し、終に淨むべからざること垢穢の如くならば、諸の客煩惱の障覆ふが故に、說いて凡夫の心は不淨なりと言ふ。如し其の心性本淨ならば、一切衆生は應に解脫すべきなり、客煩惱の障を以て覆ふが故に、是の故に解脫を得ざるなり。心は[五〇]次第の心を生ずる

【五〇】心の相續するをいふ。

三菩提を成ぜん』。

不可說菩薩、佛に白して言はく『世尊、何等の分を以てか受記を得たる。若し過去の分もて受記を得たらんには是の義然らず、何を以ての故に、是れ滅の法なるが故に。若し未來の分もて受記を得たらんには、是れ亦然らず、何を以ての故に、未生なるを以ての故に。若し現在の分もて受記を得たらんには、是れ亦然らず、何を以ての故に、不可說の故に。若し是の三分にして受記無ければ、云何ぞ說いて菩薩記を受くとは言ふ』。佛の言はく『善男子、若し菩薩摩訶薩有り、不可說を信じ不可說を知り不可說を說き、不可說に於て怖畏を生ぜず、不可說と及び色との二法の、差別有ること無く、受・想・行・識、眼乃至意、佛・法・僧寶、生死・解脫、法界などの不可說なる亦復是の如くなるを知れば、是を菩薩忍辱分を得、無出分を得、無取分を得、無汚分を得、無有分を得、無作分を得と名く。是の如き等の分を具足成就せば、一切の法に於て二相・二心・二意・二分・二緣を生ぜず。若し菩薩有つて能く是の如く觀ぜば、是を不去・不來・不住と名く。不住なるを以ての故に所作無く、所作無きが故に願求する所無く、願求無きが故に斷ならず常ならず。若し斷常無ければ卽ち是れ中道、中道は卽ち是れ十二因緣なり。十二因緣は作無く求無し、是の義を以ての故に、名けて甚深と爲す、作者有ることなく受者有ること無し、是の義を以ての故に復甚深と名く。不生にして生じ不出にして出づ、是の義を以ての故に復甚深と名く。譬へば熾火の、因緣より生じて、作者有ること無く受者有ること無し、是の火滅し已れば去處有ること無く、來處有ること無きが如く、一切の諸法も亦復是の如く、作者有ること無く受者有ること無し。善男子、若し菩薩有つて能く是の如く知らば、當に知るべし、是の人は則ち受記を得ん』と。

爾の時、世尊の是の法を說きたまへる時、八千の菩薩は無生法忍を得、是の忍を得已つて虛空に上昇すること七多羅樹にして、合掌恭敬して偈を說いて言はく、

『善男子、有とは所謂法界なり』。『大德、汝の意は復邪正有りと謂ふにや』。『しからず、善男子、邪正の衆は是れ顚倒なり』。『大德、汝は法に不生と生と有りと謂ふにや』。『しからず、善男子、若し是れ不生ならば、畢竟不生なり』。『大德、汝の意は、不生の法に分別有りと謂ふにや』。『しからず、善男子』。『大德、如し其れしからずんば、何の故に說いて一切の衆生は如來に非ずと言ふや。若し是の如くならば、誰か是れ衆生、誰か是れ如來なる』。『善男子、我れ已に先に是の如きの義を解したるも、智慧を顯はさんが爲の故に是の問を作せるなり。善男子、若し汝の意に說く所を解せざる有らば、是の諸衆生は當に地獄に墮すべし。何を以ての故に、誹謗を生ぜるを以ての故に』。

不可說菩薩の言はく『大德、是の如きの法は、人能く誹る無く、人能く受くる無けん。何を以ての故に、若し誹・受する有らば、當に知るべし、是の人は亦當に是の如き等の法を獲得すべし。大德、大力士には、弱劣の人疑を生ずる能はざる如く、我が法も亦爾り。若し無量の佛邊に於て善根を植えざる有らば、終に疑ふ能はず、受持する能はじ』。『善男子、我の解する如くんば、汝所說の義は、人有つて是の如きの法語を信順せば、無量の劫に、檀波羅蜜・尸波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜を行ずるに勝るとなり』。

爾の時世尊は舍利弗を讚へて言はく『善い哉・善い哉、汝所說の如く、若し是の如きの語を信解する有らば、當に知るべし、是の人は已に無量阿僧祇劫に於て、是の如き六波羅蜜を行じたるなり。若し是の語を信ずる能はざる者有らば、則ち佛の記莂を受くるを得て阿耨多羅三藐三菩提を成ずる能はじ。若し能く信ぜば、則ち記を受け、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ん。舍利弗、我れ往昔を念ずるに、無量劫中に六波羅蜜を修したるも、是の如き語を信ずる能はざりしが故に記を受くるを得ず、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜざりしに、其の後信じて卽ち受記を得、阿耨多羅三藐三菩提を成じたり。是の故に當に知るべし、若し人有りて能く是の語を信解せば、卽ち受記を得、阿耨多羅三藐

『大德、鏡中の像の如きは、其れ誰か中に在つて像の現ずる有るや』。『善男子、中に在る者無きも、直に淸淨の四大の因緣を以ての故に像の現ずる有り』。『大德、化も亦是の如し、法性淨なるが故に能く是の說をば作す』と。『善男子、若し爾らば一切衆生は何の故に是の如く宣說する能はざる』。『大德、鏡の背後は倶にして鏡を離れざるに、像は何ぞ現ぜざる』。『善男子、鏡背の四大は淸淨ならざるが故に』。『大德、衆生も亦爾り、法界の性を淸淨ならしむる能はざれば宣說する能はじ』。『善男子、汝の先後の語義相應せず。何を以ての故に、汝は常に說いて言ふ「一切法界の性は自ら淸淨なり」と。今云何ぞ法界は不淨なりと說くや』。『大德、若し爾らずんば、汝云何がして[四八]阿濕比丘に因つて[四九]法眼淨を得たる』。『善男子、我は但其の開導に因つて客煩惱を除滅したるが故に、法眼淨と名くるのみ、實には所得無きなり』。善男子、人有つて「我は虛空を得たり」と言はんも、是の義然らず。何を以ての故に、虛空の性は常に自ら淸淨なり、若し常に淸淨ならば云何が得べけん。客雲覆ふが故に衆生は見ず、客雲を除くが故に之を名けて見とは爲す。法界の性も亦復是の如し。是の故に我も實は法眼を得ざるなり。善男子、汝今云何ぞ是の如き等の不相應の說を爲して、法界の性は或は淨・不淨と言ふや』。不可說菩薩の言はく『大德、汝の所說及び我の所說は、皆是れ諸佛如來の境界、是れ我等の知見する所に非ざるなり』。舍利弗の言はく『善男子、若し是の說は是れ佛の境界にして我の所知に非ずと言はば、云何ぞ復法界の性は分別有ること無しと言ふ。若し分別有らば、當に知るべし。法界は卽ち無量有りと』。不可說の言はく『大德、法界の性は一實にして無量に非ず』。舍利弗の言はく『善男子、若し其れ法界の性は是れ一ならば、云何ぞ說いて「是れ佛の境界にして我の所知に非ず」と言ふ。若し法界一ならば何の因緣を以て一切衆生を如來と名けざる』。『大德、汝は衆生の如來と異相有るを分別せんと欲するや』。『善男子、汝の先に說けるが如く、我は衆生と如來と別異の想有らしむるを欲せず』。『大德、汝の意は定んで有は無生なりと謂ふにや』。

【四八】阿濕縛伐多(Aśvajit)の略、馬勝と譯す。佛の血族にして舍利弗の師なり。
【四九】明に四眞諦を見るをいふ、小乘にては初果に四眞諦の理を見るをいひ、大乘は初地に無生法忍を得るをいふ。

如來は無上の涅槃に入りたまひ、我も亦是の如く涅槃に入る』と。

天子の言はく『比丘、汝は今將た魔の所造にして、而も自ら如來に等しと說くに非ずや』。比丘の言はく『天子、若し人有りて[四四]「我と佛と異る」と言はば、當に知るべし、是の人卽ち魔の弟子なり。若し說いて「我の平等を以て法の平等を觀じ、法平等なるが故に衆生平等なり、衆生平等なれば如來も平等なり」と言ふ有らば、是の如きの人は卽ち眞實に能く魔界を過ぐるを知るなり』と。

時に化比丘、是の語を說ける時、五百の比丘は[四五]漏盡きて解脫し、八千の菩薩は[四六]忍辱を成就し、卽ち香華を以て比丘を供養したり。

舍利弗の言はく『諸の善男子は、何の故に是の化比丘を供養するや』と。諸菩薩の言はく『大德、誰か是の化を作せる』。『諸善男子、汝今知らざるや、是れ不可說の化する所たるを』。諸菩薩の言はく『大德、譬へば如來の、復如來に化したまふが如し。人有つて供養せば、誰をか供養すと爲す』。『諸善男子、是の人は卽ち是れ如來を供養しまつるなり』。『大德、若し是の化比丘を供養する有らば、卽ち是れ不可說菩薩を供養するなり』。舍利弗の言はく『善男子、是の不可說菩薩摩訶薩は、設何をもつて供養するも、之を供養するに任す』。『大德、若し智人有つて聲行有ること無く、字無く色無く名無く作無く、宣說する所無く、自無く他無く、法と非法と無く、淨無く穢無ければ、是の如き供養は乃ち供養に任す』と。

時に化比丘、舍利弗に語つて言はく『大德、汝の意は將た「我は今汝に異る」と謂ふ無きや』と。舍利弗の言はく『しからず、比丘。何を以ての故に、如來常に一切の諸法は皆悉く幻の如しと說きたまふ。[四七]如來の說きたまふ如く我亦信ず』。『大德、若し人有つて能く如來を供養せば、卽ち是れ化を供養すると異る無きなり』と。

時に舍利弗、不可說菩薩に語つて言はく『善男子、誰か是の化に入りて今是の說を作せる』と。

【四四】本文に我異佛異とあり。

【四五】漏盡とは煩惱を斷盡せるなり。

【四六】生法の二忍を成就せるなり、生忍は有情より蒙る諸の凌辱を忍ぶをいひ、法忍は寒熱老病等の非情よりする禍害を忍ぶなり。

【四七】本文に如來如說、我亦如信とあり、如の字、語勢を强むる助辭なるべし。

切法不可說ならば、衆生は云何が言說を得る』と。不可說の言はく『善男子、汝寧ろ知るや、響に言說有るや不やを』と。勝意の言はく『善男子、響は皆因緣に從つて有り』。『善男子、是の響の因は定んで內に在りと爲すや、定んで外に在りと爲すや』。天子の言はく『善男子、是の如きの因は定んで內に在らず定んで外に在らず』と。『天子、一切衆生は强いて二の想を作して所說有りとするも、諸法の性は實に不可說なり』。天子の言はく『善男子、若し不可說ならば、云何がして如來は八萬四千の法聚を宣說して、諸の聲聞をして受持讀誦せしめたまへるや』。『天子、如來世尊は實に所說無し、所說無きは卽ち是れ如來なり。天子、汝は何等をか如來と爲すやを知るや、將た色受想行識は是れ如來なりと謂はざるや、將た佛は是れ去・來・現在、有爲・無爲・陰界諸入・三界の所攝にして、是れ因・是れ果・是れ和合、或は想・非想、亦想・非想、非想・非非想と說かざるや』。『不ず、善男子』。『天子、若し是の如き等は如來に非ずんば、云何が說くべき、若し說くべからずんば、云何が如來と言はん。世尊は八萬四千の法聚を演說したまふも、是の故に八萬四千の法聚は實に不可說なり、聲聞受くるも亦不可說なり。不可說は卽ち是れ正義、義若し無說ならば卽ち是れ眞實、若し可說ならば則ち不定と爲す。若し不可說ならば則ち證すべしと爲し、若し可說ならば證を爲すべからず。何を以ての故に、顚倒を以ての故に』と。

爾の時、勝意天子は佛に白して言さく『世尊、是の不可說菩薩の所說は、誰か當に之を信ずべき』と。爾の時、不可說菩薩は、神通力を以て化して比丘と作り、是の如きの言を作す『我れ今深く是の不可說菩薩の所說を信ず。何を以ての故に、我は如來の如く亦法界の如し、如來の諸陰は宣說すべからず、我が陰も亦爾り、宣說すべからず。如來の界・入は宣說すべからず、我が界・入も亦說くべからず。如來の菩提も我が菩提も亦爾り、等しくして無差別なり。如來は諸の衆生界を了知したまひ、我も亦諸の衆生界を了知す。如來は無上の法輪を轉じたまひ、我も亦是の如く法輪をば轉ず。

と。

無畏菩薩の言はく『寶女、如來世尊も亦是の如き法の供養を受けたまふ』と。『善男子、如來は法の供養を受けたまふと雖も、法界の性の如く分別したまはず』。『寶女、云何が名けて法界を分別すと爲すや』。『善男子、若し「法異れば法の供養も異り、施を受くる者異れば施者亦異る」と言はば、是れ則ち名けて法界を分別すと爲す。若し法及び供養の受者と施者とを分別せざれば、是れ則ち法界を分別すと名けじ』と。無畏菩薩の言はく『寶女、如し其れ法界は無分別ならば、云何ぞ說いて、法界を分別し・分別せずと言ふや』。寶女の言はく『善男子、法界の性は無分別なりと雖も、諸の衆生は心顚倒するが故に分別を生ず。善男子、器有るが故に名けて完なり破せりと爲すが如く、若し作業有りて取する所有らば、則ち名けて破と爲し、名けて分別すと爲す。善男子、器は壞すと雖も器中の虛空は終に壞すべからざるが如く、法界の性も亦復是の如し』と。

爾の時世尊、寶女を讃へて言はく『善い哉・善い哉、若し人有つて能く是の法を成就せば、是の如きの人は三千大千世界の人天の供養を受くるに堪えん』と。佛是を說き已りたまふに、大衆諸人は各各身の[四三]烏多羅僧を脫ぎて寶女に奉上したり。

爾の時、不可說菩薩摩訶薩、佛に白して言はく『世尊、凡そ說くべきは卽ち是れ世間、說くべからざるは卽ち是れ出世、宣說すべきは卽ち是れ愛心、說くべからざるは卽ち是れ離愛、宣說すべきは是れ世間の行、說くべからざるは是れ出世の行なり。世尊、出世の義は造作する所無きなり、所作無ければ卽ち諍訟無く、諍訟無ければ卽ち沙門法なり、沙門法は卽ち出世法、出世法は卽ち罪過無く、罪過無ければ卽ち是れ不取・不生・不滅、不生不滅は卽ち是れ出世、出世の法は宣說すべからず・顯示すべからず、是の義を以ての故に、一切諸法は宣說すべからず』と。

爾の時、會中に一天子有り、名けて勝意と曰ふが、不可說菩薩に語つて言はく『善男子、若し一

〔四三〕 Uttarāsaṅga の音寫、上衣と譯す。三衣の一、横に割截の條七あれば七條袈裟ともいふ。二八五頁註參照。

神通を得んが爲に正法を護持する、善友に親近し善心もて思惟する、魔業を遠離して如法に住する、無生滅の微妙の智慧を得る——なり。善男子、若し是の如きの法を行ずる能はざる有らば、當に知るべし、是の人は恩を報ずるを得じ、亦復如來の恩を知る能はじと。善男子、二種の人有りて必ず死するも治せず、畢竟恩を知り恩を報ずる能はず。一は聲聞、二は緣覺なり。善男子、譬へば人有りて深坑に墜墮せんに、是の人は自利利他する能はざる如く、聲聞緣覺も亦復是の如し、解脫の坑に墮ちて自利及び利他する能はざるなり』と。

爾の時無畏菩薩、卽ち己身所著の上衣を脫ぎ、以て寶女說法の恩に報ひたるに、爾の時寶女、之を受くることを肯ぜざりき。無畏菩薩の言はく『我れ法の爲の故にす、唯願はくは之を受けよ』と。『善男子、法は貪を離る、是の故に應に說法すべからず。而も法を受くる者は取無し、是の故に應に供養の物を取るべからず。法は無貪なり、是の故に應に供養の物に貪すべからず。法は我及び我所無し、是の故に應に我所の物を以て供養を爲すべからず。法は淸淨なり、是の故に應に不淨物を以て供養を爲すべからず。法に身心無し、身心の行は供養に非ざるなり。法は心・意・識に非ず、心意識は供養に非ざるなり。法は牽挽無し、牽挽有るは供養に非ざるなり。法は有無に非ず、是の故に有法は供養に非ざるなり。法は諸有に非ず、是の故に有想は供養に非ざるなり。法は覺觀に非ず、覺觀有るは供養に非ざるなり。法は增減無し。增減有るは供養に非ざるなり。法は高下無し、高下有らば供養に非ざるなり。法は說くべからず、聽聞すべからず、名字有ること無く、一切の聲を捨じ聖道を遠離す、是の故に衣を以て供養すべからず。法は境界無し、眼の境界[乃]至、意の境界に非ず、屋宅有ること無し、是の故に應に衣を以て供養すべからず。法は卽ち是れ十二因緣なり、常に非ず斷に非ず、是の故に應に衣を以て供養すべからず、法は障礙無く顚ならず倒ならず、量度すべからず、我・衆生・壽命・士夫無く、不生不滅不出無爲なり、是の故に應に衣を以て供養すべからず』

得たり、調伏を以ての故に未來には當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』と。是の時寶女、復佛に白して言はく『世尊、菩薩摩訶薩は實に調伏無し。若し調伏せば卽ち是れ大悲なり、悲は能く[四〇]非是の人を調伏す。聲聞の人は則ち調伏を須つ、何を以ての故に、大悲無きが故に。世尊、菴羅果[四一]の、樹上にて熟せば、其の時甘美にして人の貪嗜する所たるも、若し[四二]臭を生ぜば其の味則ち苦くして、人の薄賤する所たるが如く、如來の智慧も亦復是の如く大悲より生ず、是の故に自ら調して他に由らざるなり』。

無畏菩薩は寶女に語つて言はく『汝も亦能く是の不可說菩薩の恩に報ずるや不や』。寶女の言はく『善男子、我れ若し恩を知れば何ぞ報ぜざるを得ん。若し衆生有つて菩提道を修行する能はずんば、是の如きの人は則ち報ずる能はじ』と。『寶女、云何が名けて菩提道を修すると爲すや』。寶女の言はく『善男子、三十二業を菩提行と名く。何等か三十二にして終に菩提の心を退失せざる――聲聞辟支佛の心に貪せざる、至心に修行して諂曲有ること無き、凡そ所修の行に障礙有ること無き、衆生の爲に行じて心に厭悔無き、生死に行くと雖も貪恚の心を離るる、諸の衆生に於て其の心平等なる、悉く能く敎化して之を調伏する、四攝の法を以て之を攝取する、衆の爲に樂んで大慈心を修するを得る、苦の衆生の爲に大悲を修行する、如說に行じて精進堅固なる、終に一切衆生を欺誑せざる、所修の莊嚴を助菩提と爲す、一切世間の樂を求めざる、心世間の利養に貪著せざる、身の爲の故に衆惡を造作せざる、壽命に貪せず他の過を見ざる、其の心調伏して三種の戒を淨むる、相好の業を莊嚴修集する、常に出家を念じて徃にし善業に報ずる、常に寂靜を樂み多聞にして厭く無き、智慧もて能く自身・他身を利する、凡そ所說の法に食想有ること無き、能く一切を捨てて果報を求めざる、戒聚を淨めて憍慢を生ぜざる、終に自ら所有の功德を讃せざる、他人の爲の故に忍辱を勤修する、淨土の爲の故に勤行精進する、方便を知らんが爲に一切智を求むる、永く一切煩惱の習氣を斷ずる、

[四〇] 本文に悲能調伏非是人也とあり。非是の人とは菩薩等に非ざる(聲聞等)を指すなるべし。

[四一] Āmra の音寫、樹の名、その果林檎の如しといふ、西域記によれば、兩種有り、小は生青熟黃、大は始終青色なりと。

[四二] 臭は腐臭なり、くさるをいふ。

學ぶに、一は則ち工巧にして多く利益を得、一は則ち疎拙にして利を護ること幾も無きが如く、如來聲聞の法界も亦爾り。大德、[三八]一疉の華は差別有ること無きに、巧法便の故に上價の衣を得、拙方便の故に下價の衣を得るが如く、法界の一性も亦復是の如し。如來は乃ち智慧の方便と大慈大悲業の因緣とを以ての故に、大寂靜の無價の智慧を得、聲聞の人は下の智慧を得て清淨ならず。大德、大海中には羅睺羅阿修羅王有り、亦其の餘の衆生の類有るも、唯阿修羅王のみ能く其の底を得て餘は則ち得ざるが如く、法界も亦爾り。如來は則ち畢竟の智慧を得、聲聞は得ず。大德、譬へば大地の、千葉の華及び七葉の華を生じ、諸天世人は千葉華を見て悉く歡喜を生ずるが如く、如來と聲聞の法界も亦爾なり。諸天世人は佛を見まつつて歡喜し、心に愛樂を生ずるも、聲聞にはしかあらざるなり。大德、是の義を以ての故に、如來の智慧は無量無邊にして、聲聞の智慧は有量有邊なり、而も法界の性は實に差別無きなり』と。

無畏菩薩は寶女に語つて言はく『是の不可說菩薩摩訶薩は、定んで是れ汝の師にて、能く妙法を以て汝を調伏したるならん』と。寶女は答へて言はく、『善男子、不可說菩薩は調伏する所無し、何を以ての故にとならば、是の如き菩薩は、自他及び此彼を見ざればなり。如し其れ爾らば[三九]何を以てか調伏せん。善男子、若し一切の魔界及び自の境界を覺せざる有らば、是の如きの人は則ち調伏せん。復次に善男子、若し能く一切の諸法を知見し、我及び我所有るを見ざれば、是の如きの人則ち能く調伏せん。復次に善男子、若し能く自ら苦行を勤修し、他の修を勸めず、善行を修し已り、心に高を生ぜざる有らば、是の如きの人、則ち能く調伏せん。復次に善男子、諸菩薩の如きは、衆生の爲の故に、大生死に在つて卽ち解脫を得るも涅槃に行かず、是の如きの人は則ち能く調伏せん。是を第一實義の調伏と名く』と。

爾の時世尊、無畏菩薩に告げて言はく『善男子、是の寶女は眞實に彼の不可說菩薩に從つて調伏を

【三八】名義集七に「劫波育、正しくは迦波羅と言ふ、樹の華名なり、以て布と爲すべし、高昌には氎といふ」とあり。疉華とは是をいふなるべし。

【三九】麗本は何所調伏とし、三本は以何調伏とす、今後者に從ふ。

しく快樂を受く、而も須彌山は實に差別無きが如く、法界も亦爾り。復差無しと雖も、如來は之に處つて無量の樂を受けたまひ、聲聞之に處つて有量の樂を受く。大德、轉輪王の、千子有りと雖も皆尊位を稱紹するを得ざるが如く、聲聞の人も亦是の如し、智慧有りと雖も名けて佛と爲さず。大德、然燈の器は、金なれば則黃光、銅なれば則ち赤光なり、色は異りと雖も燈には差別なし。法界も亦爾り、諸佛之を然せば智光無邊なり、聲聞之を然せば智光有邊なり、而も法界の性は實に差別無し。大德、轉輪王の城邑に入る時、一切悉く知るも、薄福の人の城邑に入る時は、乃至親厚も猶ほ覺知せざるが如く、如來世尊の法界に入りたまふ時も亦復是の如くなり、一切の天人皆悉く覺知し、一切の[三六]外道異學を障覆すること、諸の聲聞辟支佛等に勝る。聲聞の人の法界に入る時は、聲聞猶尙ほ覺せず知らず、況んや復餘人をや。大德、譬へば山間に師子有つて吼ゆるに、瞿枳羅鳥・迦陵頻伽・孔雀等の聲、人聲・牛聲・驢聲・馬聲など、響は聲に隨つて發る、而も是の響は實に差別無し、聲に隨つて發るが故に、響は則ち不同なるが如し。如來と聲聞の三解脫門も亦復是の如し、如來は能く一切の魔衆を壞し、能く一切外道の邪見に勝れ、能く一切衆生の心念を知り、能く衆生の種種の行を知り、能く聲聞辟支佛等を調し、能く諸佛如來の音聲を出したまふに、聲聞の人は法界を同じうすと雖も、則ち同じく是の如き等の事を作す能はず。大德、譬へば甘蔗の、其の味一なりと雖も、白石蜜を[三七]出せば福德人の爲、黑石蜜を出せば薄福德人の爲なるが如く、法界も亦爾り。菩薩摩訶薩は則ち大智甘露の味を得て、聲聞辟支佛の味を雜へず、聲聞は唯有邊智の味を得るのみ。大德、譬へば三千大千世界に多く大海有り、無量無邊の衆生を利することを爲し、亦小河有つて少しく衆生を利するが如く、法界も亦爾り。大德、日月星宿は倶に虛空に遊ぶも、星宿の明は日月に及ばざるも、是の虛空の性は實に差別無きが如く、法界も亦爾り。如來聲聞は倶に遊止すと雖も、智慧の光明は實に同等ならず、而も法界の性亦差別無し。大德、譬へば二人同じく一業を

【三六】佛法を內道として、佛法以外の諸教學を外道といふ。異端の義にも用ふ。異學も同義なり。

【三七】出、麗本與に作る、今宋等三本に從ふ。

れ佛なり。何を以ての故に、信とは卽ち是れ貪欲瞋恚なり。如來は貪欲瞋恚有ること無し、是の故に信無し。若し信無ければ卽ち是れ證無し。法兄、空・無相・願は眞實に證無し、是の故に如來も亦證有ること無し。法兄、法界の實性は無作無爲なり、虛空等の法も眞實に證無し、是の故に如來も亦證有ること無し』と。無畏菩薩の言はく『寶女、何を以て證と爲すや』。寶女の言はく『法兄、若し無量の佛法を見ざる有らば、是の如きの人、以て證を爲すべし』。無畏菩薩の言はく『寶女、此の舍利弗・目犍連等は是れ證信するや不や』。寶女の言はく『法兄、是の如く是の如く、是れ證し是れ信ず。何を以ての故に、聲聞人の戒は則ち邊際有り、如來の戒は邊際有ること無ければなり。定・慧・解脫・解脫知見も亦復是の如し』と。

爾の時舍利弗、寶女に語つて言はく『寶女、聲聞も亦三解脫門有り、如來も亦三解脫門有り、汝今何の故に聲聞人を以て證信と爲し、如來を以てせざる』と。寶女の言はく『大德、阿耨達池[三五]の如く、八味の水有りて閻浮提に雨らし、雨らし已つて一切の草木叢林は悉く增長を得。是の雨水の如きは差別有るや不や』。舍利弗の言はく『しからず、寶女』『大德、阿耨達池の水本一味なるに、德人之を用ふれば則ち種種微妙の甘味有り、薄德の人用ふれば其の味則ち一にして麁惡不善なるが如し。大德、如來と聲聞の三解脫も亦復是の如くなり、是の故に如來と聲聞の人とは則ち差別有り、而も法界の性は實に差別無きなり』と。

爾の時世尊、寶女を讚へて言はく『善い哉善い哉、寶女、善能く是の義を分別宣說したり』と。

寶女の是の法を說ける時、天と人の三萬二千は阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。

寶女復舍利弗に語つて言はく『大德、譬へば大海の、其の水一味にして多く諸寶有り、亦水精も下價の珠も有るが如く、法界も亦爾り、復平等なりと雖も、諸佛之を學んで無價の寶を得たまひ、聲聞之を學んで下價の寶を得。大德、須彌山上に諸天人有つて多く快樂を受け、或は復天有つて少

【三五】梵に(Anavatapta)、無熱と譯す、贍部洲の中心、香山の南、大雪山の北に在り、この池より恒河等の四大河を出す。中に八功德水をたゝふ。八地の菩薩願力を以て化して龍王となり、中に潛宅せり、贍部洲に給すといふ。八功德とは甘・冷・輭・輕・淸淨・不臭・飮時不損喉・飮已不損腸なり。

して常に魔界に行き、人・壽命・士夫に貪著し、因果無く業行の緣無しと說き、其の心放逸にして樂んで惡行を爲し、頭陀を捨離して樂んで世法を行じ、自ら己身を讃して他身を毀呰し、身・命・色等の五法を貪り、睡眠を樂み、喜んで世法を聞いて時節を知らず、惡友に親近して四攝の法を修行する能はずば、法兄、是の如き等の人は、佛の出を知らず佛の出を信ぜず』と。

無畏菩薩の言はく『寶女、汝今已に是の如き惡法を遠離するを得たるや不や。』寶女言はく『法兄、我れ已に是の如き惡法を遠離したり。云何が遠離して不貪[三四]際の如くなる、云何が不貪は猶ほ貪際の如くなる、云何が貪際は眞實際の如くなる、云何が實際は我見際の如くなる、云何が我見は過去際の如くなる、云何が過去は無明際の如くなる、云何が無明は貪愛際の如くなる、云何が無明と貪愛等の際は猶ほ智慧解脫等の際の如くなる、云何が智慧解脫等の際は猶ほ幻際の如くなる』と。無畏菩薩の言はく『寶女、幻は心に非ず意に非ず、智慧解脫こそ即ち是れ心意なり』。『法兄、一切衆生の心意智慧と及び解脫とは悉く皆幻の如くなり』。

無畏菩薩の言はく『寶女、不可說菩薩所說の如きは、汝能く信ずるや不や』。寶女の言はく『法兄、不可說とは終に說く所無きなり、如し共れ說かば不可說に非ず、若し不可說にして說く所有らば、云何が不可說と名くるを得んや、即ち應に是れ說なるべし。不可說なるを以て實に所說無し、是の故に名けて不可說と爲す。若し不可說ならば實に所說無く、我れ今何の所聞をか爲さん、若し所聞無ければ何ぞ所信あらんや』と。無畏菩薩の言はく『寶女是れ不可說にして實には所說有り、今證知有り、所謂大衆なり。一切の大衆は皆悉く聞くを得たり。是れ不可說の宣說する所なり』。寶女の言はく『法兄、此の大衆中に、若し「我れ不可說の所說を聞けり」と言ふ者有らば、即ち是れ虛妄なり。何を以ての故に、是の不可說は實に說く所無ければなり、云何ぞ大衆は聞けりと言はん』。無畏菩薩の言はく『寶女、汝今佛語を信ずるや不や』。『法兄、若し世間に無信の人有らば、即ち是

[三四] 際、麗本節に作る、今宋元明三本に從ふ。以下同じ。

は爲す。佛の智慧は能く勝る者無し、是の義を以ての故に名けて[29]如來と爲す。了了に善不善の法を知見するを[30]薩婆若と名け、眞實語の故に[31]天人師と名け、諸法を出でざれば轉法輪と名け、轉無く說無きが故に轉說と名け、無入の入なれば名けて法入と爲し、無門の門なれば名けて法門と爲し、無作の作なれば名けて法作と爲し、無禪の禪なれば名けて正禪と爲し、無脫の脫なれば正解脫と名く。一切の法性は繫無く縛無し、若し是れ滅したる法は即ち是れ過去、即ち是れ不生なり。是を佛の出と名く、無出の出を即ち佛の出と名く、若し菩薩有りて能く是の學を作さば、是を名けて諸佛如來を誑かずとなす』と。

爾の時世尊は、不可說菩薩摩訶薩を讃へて言はく『善い哉・善い哉、善男子、善能く如來の出世を分別したり、若し能く是の如き佛の出を信ずる有らば、是の人は一法の微相をも覺せじ、若し覺せざれば、乃ち能く如來の出世を了知す。何を以ての故に、無出の出ぞ即ち是れ佛の出にして、作無きなり、作無ければ受無く、受無ければ漏無く、漏無ければ諍無く見無く、入無く轉無く、生無く滅無く、菩提有ること無く、諂無く誑無く、心意識無く、眼無く二無く、眼の行乃至意の行有ること無く、說無く敎無し、是を佛の出と名くればなり』と。

爾の時、無畏菩薩は佛に白して言さく『世尊、佛所說の如く、如來の出世と及びせざるとは說くべきも、所說の佛の出は誰か當に之を信ずべき』。爾の時寶女、無畏に語つて言はく『法兄、如來の出世は思議すべからず、莊嚴すべきこと難し、證得すべきこと難し。若し人懈怠にして心眞正ならずば、虛僞・諂曲・憍慢・喜瞋・嫉妬・慳貪にして恩義を知らず恩を受けて報ぜず、三戒不淨にして三界に貪著し、[32]三垢に汚され、三寶を敬せず、三脫を修せず、麁獷の惡口もて無義を樂說し、慚愧を知らず、利養の爲の故に外に細行を現じ、自誑誑他して供養を貪り、諸根調はず、樂んで聲聞・辟支佛乘を求め、心眞實ならずして、寡聞愚癡に、念無く[33]妄を喜び方便を知らず、慈悲喜捨の心を修せず

【二七】稾は枯なり。
【二八】尋はしきぐさ、むしろなり。
【二九】梵に(Tathāgata)多陀阿伽陀、如實の道に乘じて來り、正覺を成じたるをいふ。
【三〇】Sarvajña、一切智と譯す。一切の法を了知する佛智をいふ。
【三一】梵に(Śāstṛ)舍多と寫す。天と人との敎師たり。佛十號の一。
【三二】貪・瞋・癡の三毒をいふ。
【三三】妄、麗元明本、忘に作る、今宋本に從ふ。

ず、不得の中に於て得の想を作さず、不證の中に於て證の想を作さず、生死及び涅槃に於て作無く受無きを知り、諸の煩惱に根本有ること無く、生無く長無きを知り、[一八]戒戒・心戒・慧戒に隨ひ、煩惱を遠離し衆生を捨せずして、檀波羅蜜を淨め、[一九]無戒を戒として尸波羅蜜を淨め、無人を人とし、我有ること無くして、羼提波羅蜜を淨め、無作を作として毘梨耶波羅蜜を淨め、[二〇]無靜を靜として禪波羅蜜を淨め、無行を行として般若波羅蜜を淨め、無盡無生にして忍辱を獲得し、[二一]無記の心を得て記莂を受け、正位に入らず亦退轉もせず、一生じて兜率陀天に生ぜず、天より下らずして母胎に處し、一切法に於て心所住無く、亦自ら我れ已に生老病死を過ぎたりと說かず、行くこと七歩せず、亦自ら我は是れ世間無上の尊なりと言はず、中宮婇女の娛樂に處らず、世間技藝の事を習はず、老人を示現せるは身に貪するを壞せんが爲なり、病苦を示現せるは壽に貪するを壞せんが爲なり、死相を示現せるは貪欲及び我と我所とを壞せん爲なり、沙門を示現せるは、衆生をして釋・梵・人・天の身を求めずして、勤めて出世無上の法を求めしめんが爲なり、宮城を踰出しては、三界の繫縛を出離せんことを示現し、及び悲果を示し、前後顧視して瞋と愛との無きことを示し、三十二相もて其の身を莊嚴せるは、衆生に良祐の福田なるを示さんが爲なり、[二二]周羅を剃除して瓔珞を棄捨し、馬――[二三]揵陟を遣はし、[二四]闡陀を放ち還らしめては、一切の煩惱を遠離することを示現し、現に髭髮を剃つて一切法に貪著せざることを示し、[二五]袈裟を受著しては衆生を調することを示し、[二六]鬱陀伽・阿羅邏の邊に從ひ、諮問して法を受けては、自高の心を破壞することを示現し、六年苦行せるは外道を壞せんが爲なり、現に飲食を受けては世法に隨ふことを示し、現に[二七]槀草を受けては知足を示し、[二八]草蓐の上に坐しては憍慢を壞することを示し、諸天龍神の讚歎戴仰は、功德莊嚴の果報を示現し、魔怨を降伏しては勇猛力を示し、右手の地を指すは往の福力を示し、大地の震動は報恩を示すが故なり、無上菩提の道を獲得しては一切法相を了知せるを示現す、諸法の等しきを觀ずる、之を名けて佛と

【一八】戒・定・慧の三學をいふ。
【一九】原文に無戒於戒とあり、以下の句皆同様なり。すべて、此等を更に否定して、著する所なきを言へるなり。
【二〇】原文に無淨於淨とあり、宋等三本淨を靜に作る。今後者に從ふ。
【二一】事物の性體の、善とも惡とも記すべからず、善果を感ずとも惡果を感ずとも記すべからざるを無記といふ。三性の一なり。
【二二】周羅髮の略、得度して剃髮する時、親敎の和尙が最後に剃り落す髮といふ、胎髮、寶髻髮などといふ。修行の人が除き難き最後の煩惱に喩ふ。周羅は梵の(Hina)なり。
【二三】Kaṇṭhaka の音寫、悉達太子の王宮を出走せる時乘りし馬の名。
【二四】Chaṇḍaka の音寫、また車匿とす。悉達太子出城の時、揵陟を御したる馭者なり。
【二五】Kaṣāya の音寫、不正、濁、染など譯す。比丘の衣は、青黃赤白黑の五色を避けて、他の雜色を用ふれば、色に從つて、三衣を呼んで袈裟といふ。
【二六】具に Udraka-Rāmaputra 及び Ārāḍakālāma といふ。佛出城の後、先づ就て學びたる、當時の苦行者なり。

爲す。何を以ての故に、如來は一切諸法を覺了して無分別の故に。若し「我れ根・力・覺・道を具す」と言はば、是亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、如來世尊は性無爲なるが故に。若し說いて「我異れば道異る」と言ふ有らば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、身卽ち是れ道なるが故に。若し「無明は有愛に異る」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、無明と愛とは卽ち是れ智慧、卽ち解脫の故に。若し「三毒は三解脫門に異る」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、空・無相・願は卽ち是れ貪欲・瞋恚・癡なるが故に。若し「[一三]四倒は[一四]四果に異る」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、四倒は卽ち是れ四道果なるが故に。若し「[一五]八邪は八正に異る」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、八邪を壞せんが爲に八正を修するが故に。若し衆生の[一六]九居の止處は[一七]九次第に異る」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、無二の性の故に。若し說いて「十善は無學の十善に異る」と言ふ有らば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、一切諸法は修學無きが故に。善男子、菩薩若し是の如き等の法を學すれば、是を名けて諸佛如來を誑くと爲すなり。

『善男子、一切の衆生と一衆生とは無二無別なり。何を以ての故に、性は無我の故に、一衆生と一切諸法とは無二無別なりと言ふ。若し一法と一切法界と無二無別なりと言はば、一佛世界と一切法界とも無二無別なり。一佛界と一切佛界と無二無別なりと言ひ、一福田と一切福田と無二無別なりと言はば、一切の福田及び虛空は無二無別なり。一切の聖人の煩惱を遠離したると、一切の凡夫とは無二無別なり、本性清淨なればなり。一の衆生心と一切の衆生心とは無二無別なり、本性清淨なればなり。一界と一切界、一入と一切入、一衆生行と一切衆生行とも無二無別なり。

『若し諸法は乃至一念も暫住する有ること無しと言ひ、衆惡を造らず・善法に著せず・憍慢を生ぜ

【一三】　四顚倒の略。無常・苦・無我・不淨を、過つて常・樂・我・淨なりと思ふをいふ。
【一四】　預流・一來・不還・阿羅漢の四果なり。
【一五】　八正道の反對をいふ。
【一六】　九有情居なり、三界五趣の中に於て、有情の樂んで住する處に就て九の有情居を立つ、七識住と有頂天と無想天となり。
【一七】　九次第定の略、四禪・四無色・及び滅受想の九種の禪定をいふ。禪定を修して智慧深きもの、次第にこの九定に入り間雜なく相續する故に次第定といふ。

の故に菩薩は如來を誑かざるなり』」と。

爾の時、會中に一菩薩の無所畏と名くる有り、不可說菩薩に問ひて言はく『善男子、菩薩摩訶薩の、云何が學するをば、如來を誑くと名くるや。』不可說菩薩の言はく『善男子、若し菩薩有つて自ら是の言を作す「我は是れ戒を持し、彼は是れ戒を破す」と。是の如き菩薩をば如來を誑くと名く。「我は是れ施者、彼は是れ慳貪、我は是れ忍を修し彼は瞋恚す、我は是れ精進し彼は是れ懈怠なり、我は是れ定者、彼は是れ亂者、我は是れ智慧あり、彼は是れ愚癡なり、我は是れ知足少欲の人、寂靜を樂み、養ひ易く滿し易し、乞食〔一〇〕糞衣して唯〔一一〕三衣を畜へ、衆中に處せず、多聞〔一二〕淨語して所言柔軟なり、衆生樂んで受具し智慧を念ず、諸の威儀及び口業を淨くし、四攝法――慈悲喜捨を具し、眞語實語もて如說に住し、魔の境界を知り、知り已つて遠離し、常に能く六波羅蜜を修學し、能善く說法して諸衆生の爲に大誓願を發し、能く衆生を化して放逸ならしめず」と。若し是の如く自ら己身を讃し他を毀呰することを作さば、是を菩薩は如來を誑くと名くるなり。

『復次に善男子、菩薩若し「我れ能く是の如き等の法を觀察し、遠離して滅を修す」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、諸佛は出世するも及び出世せざるも、法性は常住なり、常住なるを以ての故に一切の法界は知見すべからず、遠離すべからず、滅を修すべからざればなり。菩薩若し我及び我所を說かば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、二相無きが故に。若し說いて「我れ已に證を得たり・我れ能く遠離す」と言ふ有らば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、性淸淨の故に。若し「我れ四念處有り」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、如來は一切諸法を覺了したまひて念有ること無きが故に。若し「我れ四正勤有り」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと爲す。何を以ての故に、如來は一切諸法を覺了したまひて、本性離の故に。若し「我れ四如意分有り」と言はば、是れ亦名けて如來を誑くと

〔一〇〕 糞掃衣の略、また衲衣ともいふ、印度にては火燒牛嚼・死人衣・月水衣等の衣を野に棄つ。之を浣洗縫濯して外に着す。これ糞を拭ひし穢物に同じければ糞掃衣といふ。之を著くるは、貪著を離れんが爲なり。

〔一一〕 僧伽梨(Saṃghāṭī)、大衆集合して授戒。說戒等の叢議を爲す時に用ふ。欝多羅僧(Uttarāsaṅgha)次の安陀會の上に着するもの。安陀會(Antarvāsa)、體に襯して着するもの。この三を三衣といふ、何れも數多の方形なる小片を縫ひ綴つて作れるものなり。

〔一二〕 淨は麗、宋元に諍とし、明本淨と爲す、今後者に從ふ。

法に三種の相有り、所謂無出と無滅と無住となり、是の義を以ての故に名けて無爲と爲す。無爲は卽ち聖、聖を無怨と名く、如來は一切の怨を遠離するが故に、故に聖と名く。怨とは所謂無明なり、如來は永く一切の無明を離る、是の故に一切怨讎の爲に侵害せられず。凡夫の人は無明を具するが故に、是の故に常に怨讎の爲に害せらる。如來世尊は能く怨界及び智慧界を觀じ、煩惱界及び寂靜界を知り、生死界及び涅槃界を知り、衆生界及び法界を知り、魔界及び佛界を了知し、色界及び眼界、耳界と聲界、鼻界と香界、舌界と味界、身界と觸界、意界と法界を了知したまふ。無明界及び智慧界は皆悉く平等なれば卽ち是れ佛界は不可說界なり、生死と涅槃の二界平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なり、名色界と知名色界とは皆悉く平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なるを知りたまふ。六入界と六神通界とは皆悉く平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なり、觸界と滅界とは皆悉く平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なり、受界と滅界とは皆悉く平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なり、愛界と滅界とは皆悉く平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なり、取界と滅界とは悉く平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なり、有界と滅界とは皆悉く平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なり、生界と滅界とは皆悉く平等なれば、卽ち是れ佛界は不可說界なり、老・病・死界と滅界とは皆悉く平等なれば卽ち是れ平等佛界は不可說界なるを知りたまふ。

『世尊、菩薩若し能く是の如き等の觀を作せば、卽ち一切諸界に入るを得。菩薩若し是の如き等の界に入れば、貪有る者を見て瞋恚を生ぜず、貪を斷ずる者を見るも亦愛を生ぜず、瞋有る者を見るも瞋心を生ぜず、瞋を斷ずる者を見るも愛心を生ぜず、癡有る者を見るも恚心を生ぜず、癡を斷ずる者を見るも愛心を生ぜず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、是の如き等の三種の界中に於て了了に知るが故なり、是の如く菩薩は三乘を了知す。世尊、菩薩若し是の學を作さんと欲せば如來を誑かず、何を以ての故に、諸の如來所覺の法を知ればなり。而も是の菩薩は學に隨順するが故に、是

て無上菩提道を修行せん時、護るところの[七]十善法も亦不可說なり。若し十善を以て諸の衆生を勸むるに、所勸の衆生も亦不可說なり、[八]慈悲喜捨の心を修集すること亦不可說なり、何を以ての故に、慈心を修集して衆生無きを觀じ、悲心を修集して作無く受無く、喜心を修集して憍慢の醉を離れ、捨心を修集して二相を遠離すればなり。世尊、若し菩薩有つて是の如く四無量心を修集せば、卽ち是れ清淨の梵行を修し、梵道に住するなり。是の梵方便は一切の梵に勝り、常に[九]諸梵の爲に供養せらる。何を以ての故に、一切の諸梵行に勝出するが故に、衆生因緣の慈を修せざるが故に、諸法因緣の悲を修せざるが故に、二相因緣の喜を修せざるが故に、內外因緣の捨を修せざるが故に、一切世間の行を遠離するが故に、世間の諸梵行を捨棄するが故に、是の故に常に一切諸梵の爲に供養せらる。

『世尊、是の因緣を以て、菩薩の戒は宣說すべからず、菩薩の戒は終に自ら誑かず亦佛を誑かず。何を以ての故に、自は卽ち無性、無性は卽ち無、無は卽ち無出、無出は卽ち是れ因緣有ること無く、無因緣は卽ち是れ無字、無字は卽ち是れ言說すべからざればなり。若し菩薩有つて能く是の如く學すれば卽ち自ら誑かざるなり。

『云何が名けて不誑と爲すとならば、諸佛如來は、一切諸法の法に非ず非法に非ざるを覺了したまふ、若し法に非ず非法に非ざれば卽ち是れ平等なり、是の如き平等は宣說すべからず、若し菩薩有つて是の如き學を作さば、是を諸佛如來を誑かずと名く。復次に自とは卽ち是れ我無く我所有ること無く、亦我無く我所有ること無きを知るなり。若し能く是の如く修集して學せば、亦是れ我無く我所有ること無けん。若し能く是の如く思惟して觀ぜば、卽ち自ら誑かず。又如來は能く如に隨ふ、如に隨へば卽ち衆生に隨ひ、衆生に隨へば卽ち是れ一切諸法に隨順す、一切法に隨へば卽ち是れ出でず滅せず住せず、若し法は不出不滅不住ならば卽ち是れ無爲なり。是の故に說いて言ふ、無爲の

【七】十惡に對す、不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見なり。

【八】四無量心なり、四等・四梵行などいふ、慈は能く樂を與ふる心、悲は能く苦を拔く心、喜は人の離苦得樂を見て慶喜を生ずるなり、捨は上の三心を捨して心に存着せざるなり、又怨親平等にして共に捨つるなり。

【九】梵天の謂なり。

德を具する無く、諸相を遠離す。世尊、若し是の如き義を菩提と名けなば、即ち無變句なり、即ち無覺句なり、即ち無貪句なり、即ち無諍句なり、即ち堅固句なり、即ち不壞句なり、即ち不動句なり、即ち不作句なり、即ち無身句なり、即ち無生句なり、即ち無智句なり、即ち平等句なり、即ち無二句なり、即ち是れ實句・有句・眞句・第一義句・無分別句・一味句・一事句・一乘句・無盡句・三世平等句・分別三世句・空句・無相句・無願句・無行句・寂靜句・性句・如句・無生句・無出句・盡句・無屋宅句・法句・實性句・自身性句・無身句・無作句・無想句・無諍句・無斷句・無常句・十二因緣句・可觀句・定句・上句・勝句・無罪咎句・無上句・畢竟句・淨句・無頂句・無勝句・無等句・無依句・念句・無相似句・勝一切世間句・無句句・一切句の所依句なり。是の如き菩提は、靑に非ず黃に非ず赤に非ず白に非ず、色に非ず非色に非ず、長に非ず短に非ず圓に非ず方に非ず、規矩有ること無く、三界の攝に非ず、道に非ず畢竟に非ず、行に非ず到に非ず、處所有るに非ず、取に非ず捨に非ず、諸の煩惱を離れて愁畏有ること無く、一切の喜を斷じて眞無く化無く、一切の入を離れて我と我所と無く、衆生・壽命・士夫有ること無く、無量無邊不可思議にして、分界有ること無くして猶ほ虛空の如く、其の性は畢竟宣說すべからず、是の如き無量の法を成就したるを乃ち菩提とは名くるなり』と。

是の法を說ける時、三千大千世界の大地六種に震動し、一切の諸天は大に供養の香華伎樂を設け、各是の言を作す『善い哉・善い哉、善男子、快く是の說を成せり』と。爾の時會中に八萬四千の菩薩有つて、無盡器陀羅尼一切法自在三昧無礙解脫法門を得たり。若し人有り能く是の如く信ぜば、是の人も亦當に是の法利を得べし。

爾の時、不可說菩薩、復佛に白して言はく『世尊、菩薩の戒は宣說すべからず、何を以ての故に、身の本性不可說の故に、是の故に身戒は宣說すべからず。口の本性も不可說なり、是の故に口戒は宣說すべからず。意の本性も亦不可說なり、是の故に意戒は宣說すべからず。世尊、若し菩薩有り

爲に分別解說すべし』と。

爾の時、不可說菩薩、既に許可を蒙つて卽ち定意[五]に入り、定意に入り已つて悉く大衆をして大寶臺に處らしめ、虛空中に上つて華香を散じ種種の伎樂もて以て供養し、復是の聲を出せり『是の不可說菩薩摩訶薩は、今是の中に於て大事を問はんと欲す』と。

爾の時、不可說菩薩摩訶薩は佛に白して言はく『世尊、諸佛の菩提は淸淨寂靜、大淨にして垢無く闇無く大光あり、眞實如爾にして其の性平等に、微妙甚深にして覺觀有ること無く、諸垢を遠離して宣說すべからず。字無く句無く音聲有ること無く、廣大無量にして邊際有ること無く、一切の邊を離れて不增不減に、前まず却かず住止有ること無く、峻[六]無く平無く有無く無無く、堅固にして壞無く、我と我所と無く、取無く捨無く廣無く狹無く、法無く衆生無く、盡と畢竟の盡と無く、空性を空せず、處に非ず非處に非ず、心に非ず作に非ず生に非ず滅に非ず、地水火風の如く、邊際有ること無く度量すべからず、平等遍有にして障礙有ること無きこと猶ほ虛空の如く、眼識界に非ず乃至意識界にも非ず、一切の有を斷ち譬喩すべからず、——一切の喩を離る、一切佛の眞實知の如くなるが故に。是れ如ならざるに非ず、何を以ての故に、一切の衆生皆悉く得るが故に。如に異るに非ず、何を以ての故に、一切の衆生悉く平等なるが故に。其の性是れ有なり、何を以ての故に、是れ實性の故に。其の性是れ實なり、何を以ての故に、去來現在の節有ること無きが故に。作無く受無く色無く心無く、想無く受無くして一切の受を斷じ、想無くして想を斷じ、行無くして行を斷じ、識無くして識を斷じ、陰・入・界無くして陰入界を斷じ、初中後無くして諸の魔業を離れ、流布有ること無く漏無く、攝に非ず、行に非ず訟に非ず、諍無く罪無く、常に自性に住して分別有ること無く、生無く能生無く、滅無く能滅無く、根本有ること無く上無く下無く、屋宅有ること無く方無く圓無く、智に非ず慧に非ず亦慧行にも非ず、諦の所攝に非ず生死の攝に非ず、對治有ること無く功

【五】定心といふに同じ、禪行を修して亂意を遠離すること。

【六】峻は高なり、嶮なり。

巻の第十三

不可說菩薩品　第七

爾の時世尊、故に欲色二界中間の大寶坊中に在はし、諸大衆のために圍遶せられて說法したまへり。是の時會中に一菩薩有りて不可說と名けたり、座より起つて更に衣服を整へ、[一]偏袒右肩し、前んで佛足を禮し、[二]長跪合掌して偈を說いて言はく、

『無礙の智慧と無礙の行とは、虛空の性の如くにして不可說なり、三世に平等にして覺觀無し、我れ今無上尊を敬禮したてまつる。[三]無相を觀じて寂靜を樂み、諸根を調伏して相を遠離し、諸法の性は二有ること無きを了したまふ、我れ人中の師子王を禮しまつる。衆生の性及び法性を觀ずるに、是の如きの二性差別無し、心を等しく諸の衆生を觀ず、今我れ永に一切の性を斷ず。得る所の菩提は[四]無所得なり、菩提性の如く色も亦爾り、無相の莊嚴は相を莊嚴す、我れ今無上尊を敬禮しまつる。一切の法界は覺觀無し、凡夫之を觀じて有相の行とするも、法界の性は破壞せず、佛は眞實に知りたまふ、故に我れ禮す。如來の身業は不可說なり、口意等の業も亦是の如くなり、一切の法性及び衆生をば、無上の勝尊は了了に知りたまふ。如來は眞實地に住し、演說すべき所聲字無きに、衆生樂聞して大利を得、是の故に如來は思議し難し。所說の諸法は相貌無く、衆生を調伏して諸有を斷じ、善く衆生と法性と空なるを說きたまふ、是の故に我れ大丈夫を禮しまつる。』

爾の時不可說菩薩、偈もて佛を讚し已り、佛に白して言はく『世尊、此の會の菩薩は、各各皆已に諮請し竟れるに當り、我れ今是の大集經中に於て、復少しく問ひまつらんと欲す。唯願はくは如來哀を垂れて聽許したまへ』。佛の言はく『善哉善哉、善男子、疑に隨つて問を致せ。吾當に汝の

【一】右の片袖を脫ぎて右肩をあらはすこと、これ自ら進んでその使役に服し勞に從ふ意を表するなり、印度の禮法なり。

【二】兩膝を地に着けて敬禮するなり、これ又禮法なり、主として比丘尼の禮儀なるも比丘また之をなせり。

【三】眞理の衆相を絕し、涅槃の十相を離るゝを無相といふ。

【四】無相の眞理を體して心中執着する所無く、分別するところ無きを無所得といふ。空慧、無分別智をいふ。

の法を說ける時、師子將軍及び諸の眷屬は柔順忍を得たり。

爾の時世尊、阿難に告げて言はく『阿難、汝當に是の如き經典を受持し讀誦し書寫すべし、何を以ての故に、是の經典中には、一切の法相を分別演說し、亦無量無邊の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむればなり。阿難、若し能く無量の佛所に於て諸の善本を植うる有らば、是の人乃ち能く是の經を信受し、持して讀誦し、寫して廣く義を分別せん。是の經を受くれば三事有り、一に定んで阿耨多羅三藐三菩提心を發し、二に不退の心を得、三に能く正法を護らん』と。

爾の時大衆、是の語を聞き已り、七那由他の菩薩有つて、卽ち座より起ち佛に白して言はく『世尊、我等能く如來の滅後に於て是の經を受持し、讀誦書寫すべし』と。無言菩薩の言はく『世尊、如來世尊は何等の法を得て、是等をして受持守護せしめたまふや』。『善男子、若し能く是の持法の人を護らば、卽ち是れ法を護るなり。所謂文字を書寫し讀誦し解說するなり。文字は說くべきも法は說くべからず。善男子、二種の人有つて能く法を守護す、一に如法に住し、二に是の文字を誦するものなり。若し文字無ければ法は不可說なり』と。

爾の時、一切の大衆及び師子將軍所將の眷屬と諸天世人とは、是の法を聞き已り、心大に歡喜し信受奉行したり。[八二]

大方等大集經卷第十二

無言菩薩品第六

【八二】 晉譯無言童子經卷下終。

莊嚴す、何等か四十なる。[七九]所謂、佛を信じて疑はざる、法界を動ぜざる、聖衆を供養する、善友に親近する、諸の菩薩に於て醫王の想を作す、諸の衆生に於て其の心平等なる、諸師和上を供養・恭敬する、父母徳有れば、順つて語を受くる、法を護り法を求むる、至心に法を聽く、既に受持し已つて人の爲に廣説する、護法の人を供養恭敬する、他の爲に説法する、食の想を生ぜざる、憍慢を破壞する、恩を知り恩を報ずる、常に善思惟する、如法に住する、能く施し難きを施す、至心に戒を護る、精進して一切の善法を勤修する、功徳莊嚴を具足成就する、心に嫉妬無くして諸の衆生を護る、煩惱を防制する、其の心及び他の心を調伏する、諸の衆生を調して能く煩惱を斷ずる、寂靜を知足する、淨梵行を修する、聖種を斷ぜざる、世法に汚れざる、説法の人を供養恭敬する、世間に隨順する、懈怠を遠離する、放逸有ること無き、[八〇]下乘を求めざる、菩提の心初より動轉せざる、生死に處在して心厭悔せざる、一切不善の法を遠離する、一切の純善の妙法を具足して梵行を莊嚴する、是を四十と名く』と。

爾の時、師子將軍の言はく『汝當に時時に其の身を示現すべし、我等をして無上菩提の心を退せざらしめんが爲に』と。無言菩薩の言はく『尊者、十法を具足せば常に諸佛菩薩に親近するを得。何等か[八一]十と爲す、所謂自ら己が樂を捨てて以て衆生に施し、忍辱を修集して無力の者を護り、常に衆生に勸めて善法を修集せしめ、一切を化導して菩提に趣向せしめ、諸衆生先づ阿耨多羅三藐三菩提を得よ、我れは當に其の所説を聽いて受持擁護せんを供養し、然る後我れ當に無上道を成ずべきを願ひ、實の法性を知つて身命を惜まず、護法の爲の故に深法界を聞いて恐怖を生ぜず、菩提無ければ得る有る者無きを觀じ、己、平等なれば一切衆生も亦復平等なるを觀じ、衆生等しきを以て法を觀ずること亦等しく、法の平等を以て虚空の等しきを觀じ、生死の苦を觀じて亦捨離せず、生死の過を見て心に悔恨無き――是の如き諸善法を具足せば、常に諸佛菩薩に親近するを得ん』。是

【七九】晉譯も四十事を數へながらその一(第二十七)を缺く。本經亦然るが如し。兩者出入あり。

【八〇】晉譯相當文に不レ樂二小乘一とす。

【八一】この十法の區分、本經も晉譯も明瞭ならず。

金剛齊菩薩の言はく『世尊、菩薩摩訶薩は、幾の法を具足して能く是の如き金剛三昧を得るや』佛の言はく『善男子、菩薩摩訶薩は四法を具足して、則ち能く是の如き三昧を獲得す。何等をか四と爲す。一に至心に菩提を念じ、二に作す所の善法畢竟す、[七五]三に至心に善法を莊嚴して菩提に向はんと願ふ、四に能く十二因緣を觀ず、是を名けて四と爲す。復四法有り、一に神通を成就し、二に[七六]三脫門を修し、三に持戒精進し、常に法界を觀じて、一切の法は根本有ること無く、覺觀有ること無く、宣說すべからざるを知る、四に義を知り、時を知り、實を知り、一切法は皆悉く平等なるを知るなり、是を名けて四と爲す。復四法有り、一に大悲心に從つて大智慧を求め、[七七]二に善方便に從つて三十七助菩提の法を求め、三に大悲心に從つて、諸衆生の一切平等なるを觀じ、四に捨心に從つて四眞諦を觀ずるなり。復四法有り、所謂身口意の業と、及び[七八]菩提心との、沮壞すべからざること、悉く金剛の如きなり。善男子、菩薩摩訶薩は、是の如き等の法を具足成就して、則ち能く金剛三昧を獲得するなり』と。是の法を說きたまへる時、六萬億の菩薩は一切悉く金剛三昧を得たり。

爾の時無言は、其の父の師子將軍に啓白すらく『佛の出世間は卽ち是れ無量の功德を具足す、大功德聚は卽ち是れ如來なり。佛の出世したまへる時、無量の衆生は大利益を得、大利益とは卽ち是れ涅槃なり。夫れ涅槃は常にして變易せず。尊者、何の故に阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる』と。其の父答へて言はく『吾れ初生の時、已に阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。爾の時、亦無量の諸天有り、來つて勸むらく「汝の如くにして異る無かれ」と。是の如き事は、唯佛のみ證知したまふ』と。師子將軍將ゆる所の眷屬――五百人に滿てる――悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。

爾の時無言菩薩、其の眷屬を讃ふらく『善い哉善い哉、善能く菩提の心を莊嚴したり』と。諸眷屬の言はく『云何が名けて菩提の心を莊嚴すと爲すや』。無言菩薩の言はく『四十事有つて菩提心を

【七五】晉譯は三に十二因緣を觀ずることを擧げ、四には聖慧備悉、無レ所ニ缺漏一とす。
【七六】空・無相・無願の三解脫門なり。三、四の說相晉譯やゝ異る。
【七七】晉譯は第二に奉行般若波羅蜜及六度無極を擧げ、本經の第三・四を合說す。
【七八】晉譯には志性秉毅、不レ可ニ毀壞一を擧ぐ。

一切諸法の義は宣說すべからず、一切法の義は身口意等の說く能はざる所たり。何を以ての故に、業無く作無く、色貌有ること無く、口業有ること無く、覺觀有ること無くして、猶し響相の如し、佛の化したまふところの如くなるが故なり。善男子、諸佛菩薩の凡そ言說する所は皆世語に逆ふ。是の故に、一切の諸佛菩薩は不可思議なり、諸佛菩薩所有の智慧も、不可思議にして窮盡すべからず、法界を動ぜざるなり』と。

爾の時、一切の菩薩摩訶薩は、同聲に無言菩薩を讃歎すらく『善哉善哉、能善く是の如きの法門を分別し、我等輩をして大利益を得、幷に是の如き無量の諸大菩薩を覲見するを得せしめたり』と。金剛齊は無言菩薩に語つて言はく『善男子、我れ汝と倶に金剛堅根世界に還り、慧憍如來を覲見供養せんと欲す』と。無言菩薩の言はく『善男子、金剛堅根世界とは、即ち是れ此の間の娑婆世界にして、慧憍佛とは即ち是れ釋迦牟尼如來なり。我れ何を用て彼の佛の世界に往かんや』と。金剛齊の言はく『善男子、此の佛の世界の地は金剛に非ず、云何ぞ即ち彼の世界なりとは言ふ』。無言菩薩の言はく『善男子、汝の神通能く無量の金剛の山を壞し、直に過ぎて礙無けん。汝今試に此の土の微塵を壞せ。如し其れ壞せば、然る後乃ち知らん、汝金剛と名くるを』と。

爾の時無言は、即便ち金剛三昧に入り、悉く此の土の一切の山林草木微塵を變じて皆金剛と爲しぬ。時に金剛齊、其の神通を盡すも、乃至一微塵をも破する能はざりき。

時に金剛齊、佛に白して言はく『世尊、我の神力は能く一切[七四]世界の金剛及び諸の山壁を壞したるに、何の因緣を以て今此の土に於て、乃至是の一微塵をも壞する能はざる。是れ如來神通の力とやせん、是れ無言の道德力とやせん』。佛の言はく『善男子、是れ無言菩薩の金剛三昧に入りて、三昧力の故に此の三千大千世界の一切所有をして、悉く金剛と爲したればなり。若し復無量の世界をして金剛と爲らしめんと欲せば、其の力亦能ふなり』と。

【七四】晉譯には我者前時、發心之頃、通過鐵圍大鐵圍山、云云とす。

名けて二と爲す。若し二有らば卽ち是れ可說なり、若し二無ければ卽ち不可說なり。不可說とは卽ち是れ識無く心無く意無きなり、是の義を以ての故に宣說すべからざるなり。夫れ可說とは卽ち是れ二法なり、不可說とは卽ち是れ無二なり』。『善男子、誰か是の二を作せる』。『善男子、夫れ無二なれば二と作すべからず、二は亦無二と作すべからず。若し堅牢なれば脆と作すべからず、脆は亦堅固と作すべからず。生死の法は無二と作さず、涅槃の法は二と作すを得ず。正見の性は邪見と作さず、邪見の性は正見と作さざるなり』」。

金剛齋菩薩は佛に白して言はく『世尊、無言菩薩の凡そ解說する所は、是の如き慧燈三昧を得たるに似たり』。佛の言はく『善哉善哉、善男子、汝「無言は慧燈三昧を得ず」と謂ふや』と。

爾の時、金剛堅根世界なる慧幡如來の諸菩薩等、無言菩薩に語つて言はく『善男子、汝何の地に住して能く是の答を作すや』と。無言菩薩の言はく『善男子、佛所說の如く、菩薩摩訶薩、若し戒[七三]地に住せば能く是の如く答ふ』と。『善男子、善哉善哉、唯願はくは是の如き戒地を解說せんことを』。『善男子、若し身の住・心の住・意の住・內の住・外の住・及び內外の住無ければ卽ち是れ戒に住するなり。善男子、若し相無く命無く作無く行無ければ、卽ち是れ戒に住するなり。若し菩薩有つて是の如き戒に住せば、卽ち是れ無住なり。若し無住なれば終に念――我れ能く聲を出して演說する所有り――を生ぜず。善男子、汝問ふ所――何の地に住在るや――の如きに、能く是の如く答ふるは、我れ法性實相の法界に住して是の如く答ふるなり。若し是の如く法の眞實を知らば、則ち覺觀無し、若し覺觀無くんば云何が說有らん』。諸菩薩の言はく『善男子、是の如く說く時、何の所說をか爲す』。『善男子、是の如く說く時、卽ち二法を說く、一に滅盡、二に不出なり。一に過去、二に未來なり。現在は不住の故に不可說なり。善男子、過去の法は相を作すべからず、未來現在も亦復是の如し。若し人の、三世の法に於て相を作す有らしめば、卽ち是れ顚倒なり。是の故に

【七三】晉譯戒とす。

音を解し、其の所言に隨つて說法するなり』。『善男子、汝能く是の如く隨順說法すること久しとなすや近きや』。『善男子、我れ覺[七一]觀を除滅してより已來能く是の說を作す』。『善男子、何の因緣の故に是の如き說を作すや』。『善男子、[七二]若し覺觀無くんば聲は云何して出づる。是の因緣を以て是の如き說を作す』。『善男子、夫れ聲の出づる、身より出づと爲すや心より出づるや』。『善男子、夫れ音聲は身心に在らず、何を以ての故に、身は草木の如く、心は幻化の如し。衆の因緣の故に聲有つて出づ。若し緣より出づれば、卽ち是れ無常。若し無常ならば卽ち是れ定無し、無常無定ならば卽ち是れ空無なり。夫れ音聲は猶ほ虛空の如くにして、覩見すべからず宣說すべからざること虛空の如し、一切の諸法も亦復是の如くなり。若し聲無くんば、聲所了の法も亦復是れ無し。是の聲は空なるが故に一切の法も空なり、聲は寂靜なるが故に諸法も寂靜なり、聲は不可見なれば一切の諸法も亦不可見なり、聲は不出生なれば一切の諸法も亦不出生なり、若し不出生なれば卽ち去來無く、若し去來無ければ卽ち是れ甚深の十二因緣なり、甚深の因緣は作無く屬無し、若し作と屬と無ければ卽ち生・出無し、生無く出なければ卽ち是れ句無し、若し無句なれば卽ち是れ眼色及び識乃至法識を生ぜず、生・老・病死等の苦と、日月の光明・親怨の想有ること無く、一切の行を斷じて覩見すべきこと難く、不近不遠ならん』。

金剛齊の言はく『善男子、是の如き等の說は是れ何等の說なる』。『善男子、是の如きは卽ち是れ畢竟不出なり』。『善男子、何等をか名けて畢竟不出とは爲す』。『善勇子、近からず遠からざる、是れ畢竟不出なり』。『善男子、何等をか名けて不近不遠と爲す』。『善男子、卽ち是れ虛空なり、若し諸法は虛空の如しと見なば、是を平等と名く』。『善男子、何の義を以ての故に、一切法は虛空の如しと名くるや』。『善男子、過去の法は終竟有ること無く、未來現在も亦終竟無し、三世無終なる、卽ち是れ實相、卽ち是れ無二なり。二とは所謂眼と色・耳と聲・鼻と香・舌と味・身と觸・心と法、是を

【七一】晉譯には心念を失してよりこのかたとす。
【七二】同に心無所念、口則無言と。

一切悉く皆不可思議なり。何を以ての故に、是の六萬億の諸菩薩等、悉く身內に住して障礙無きが故に』と。

金剛齊菩薩は諸の大衆を觀て是の如き言を作す。『諸の大衆、汝等は如來の身の、虛空の如くなるを知らざるや。是れ無邊身なり、無障礙身なり、廣身なり、法身なり、無相貌身なり、無量身なり。諸の善男子、如來若し一切の物を內にせんと欲し――所謂國土城邑・村屯聚落・山河樹木を身中に置くも、亦障礙無し、是の故に如來は不可思議なり。善男子、[六八]十方世界の無量淨土より無量の菩薩、如來に來詣し、大集經を聽きて妙色を成就し、[六九]二十八大人の相を具するも、如來亦其の身內に內置したまふ。何を以ての故に、此の土の衆生と梵・釋の諸王、若し其れ見ん者愧耻を生ずるが故に、是の故に、一人も見るを得しめず』と。爾の時、世尊の功德力の故に、及び金剛齊菩薩の力の故に、悉く大衆をして、是の如き等の六萬億の菩薩の、悉く如來の一毛孔より出で、出で已つて佛を禮し、右遶七匝して却いて一面に坐するを見せしめたり。

爾の時、金剛齊菩薩、佛に白して言はく『世尊、何の因緣の故に無言菩薩は無言と名くるや』と。佛の言はく『善男子、汝自ら無言菩薩に諮り問へ。自ら當に之に答ふべし』。金剛齊菩薩卽ち無言菩薩に問ふらく『善男子、何の因緣の故に無言と字するや』と。無言菩薩默然として住す。二問ひ三問へるに亦復是の如くなりき。金剛齊の言はく『善男子、何の故に答へざる』と。無言菩薩の言はく『我れ言辭を求むるも都て不可得なり、是の故に默然として宣說する所無し』。『善男子、若し言辭を求むるも不可得ならば、云何ぞ是れ不可得の言有る』。『善男子、[七〇]我れ一切の佛語世語に答ふ、云何が名けて佛語に答ふと爲すとならば、善男子、我れ念力を以て一切諸佛の所說を受持して、忘れず失せず、然も都て音聲字句を見ざるも、流布の爲の故に之を宣說し、亦衆生の爲に是の聲字及び文句を壞して法を宣說するなり。云何が名けて世語に答ふと爲すとならば、諸衆生の種種の言

【六八】以下、この節、晉譯その說相を異にす。曰はく、「諸無央數……諸佛國土衆菩薩等……逓觀世尊微妙光明、相好清淨……咸皆發來、欲見聖尊、咨受經典」云云と云ふ。

【六九】二十八大人相として二十八種を數へたるものなるべし。恐らく三十二相を數ふるに至るまでに、二十八相を數へし時代ありしならん。勝天王般若、四にも皆悉具足二十八相莊嚴其身の句あれども二十八をば說かず。晉譯は前註の如く、相好とのみ云ひ、而もそは如來に就て云へり。

【七〇】この句、晉譯には、「吾悉法劫諸佛所說、亦復劫於衆生所語」とす。

爾の時舍利弗、卽ち金剛齋に問ひて言はく『善男子、汝の言へる六萬億の菩薩は何處に住在するや』、金剛齋の言はく『如來說きたまふらく、汝は智慧第一なりと。當に聖智を以て是の菩薩所住の處を觀ずべし』と。

時に舍利弗、卽ち聖智を以て之を觀ずれども見ずして、金剛齋に語るらく『善男子、我れ聖智を盡すも見ず』と。『大德、汝の同學[六四]阿尼樓陀は[六五]天眼第一なり、當に之が何處に在住するやを觀ぜしむべし』と。爾の時阿尼樓陀、天眼を以て三千大千世界を觀ずれども見る能はずして、舍利弗に語るらく『我れ天眼を以てするも都て見る能はず』と。金剛齋菩薩の言はく『大德、汝の同學若し見る能はずんば、天眼と名けずして應に[六六]肉眼と名くべし』と。舍利弗の言はく『善男子、汝の天眼とは其の義云何』。『大德、我れ天眼もて、汝諸聲聞の見ざる所の色をば、我能く之を見るなり』。舍利弗の言はく『善男子、何等の色法をか、我見る能はずして汝見るを得るや』。『大德、汝今金剛堅根世界、慧憍如來及び菩薩を見ることを得るや不や』。『不らず、善男子、我れ唯名を聞くのみにし見るを得る能はず』。『大德、是の如きの佛土・如來・菩薩及び諸の衆生をば、我の天眼は悉く能く見るを得、是を菩薩の清淨天眼とは名く。是の如き天眼は、一切の聲聞・辟支佛等の有つこと無き所たり』と。

是の法を說ける時、聲聞を求むる六萬の衆生は本志を捨離し、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、各是の言を作す『願はくは我れ無礙の[六七]佛眼を獲得して、聲聞・辟支佛等の障礙の眼を用ひざらん』と。

爾の時、金剛齋菩薩、卽ち三昧に入り、佛の神通及び己が力を以ての故に、一切の衆をして悉く六萬億の諸菩薩等、佛身の內に在りて蓮華臺に坐し、至心專念に佛の所說を聽き、然も如來の身に逼觸せず、如來の身も無增無減にして障礙有ること無きを見せしむ。時に諸の大衆、是の事を見已り、供養・禮敬して如來の事不可思議なるを歡喜讚歎し、復是の言を作す『如來の身は智慧三昧にして、

【六四】 Aniruddha の音寫、晉譯に阿那律とす。無滅、如意など譯す、佛十大弟子の一、佛の從弟にして迦毘羅城の釋氏たり。

【六五】 色界の人天所有の眼、色界四大所造の淸淨の眼根を以て、麁細遠近の一切の諸色、又は衆生の未來に於ける生死の相を前知するものなり。人中禪定を修して之を得べし。

【六六】 肉身所有の眼なり。

【六七】 佛陀の眼をいふ、諸法實相を照了する眼なり、又五眼の中の前四(肉・天・法・慧)は佛陀の身中に具備せらる、之を佛眼といふ。

養を供けたり、若し是の三昧の名字を聞く有らば、即ち能く大利益事を獲得し、無上菩提の心を失はじ』。佛の言はく、『善い哉・善い哉、善男子、汝所說の如く、若し衆生有らんに、已に無量無邊の佛所に於て諸の善本を植え、善友に親近して、然る後乃ち是の三昧を聞くを得ん』と。

爾の時世尊、是の法を說きたまへる時、其の齋中に一菩薩を出し、身は眞金色にして、三十二相八十種好あつて大光明を放ち、佛の光明を除いて餘に及ぶ者無かりき。是の時菩薩、佛足を敬禮して右遶七匝し、長跪合掌して佛に白して言はく『世尊、[六一]慧憍如來は意を致すこと無量、世尊の起居輕利にして、身に病患無く、大衆安きや不やを問訊せしむ、我れ今此の界に六萬億の諸菩薩等有り、[六二]往いて大集妙典を聽受せんと欲し、幷に無言菩薩及び十方の諸來菩薩を覲見せんと欲し、幷に復慧燈三昧を聞かんと欲す。善い哉善い哉、釋迦牟尼、幸に爲に開示して、諸の往く者をして悉く慧燈三昧を得て此の土に還來せしめたまへ』と。

時に舍利弗の言はく『世尊、慧憍如來は何の方面に住し、此を去ること遠きや近きや、世界を何と名くるや、而して是の菩薩は復何等と名け、是の六萬億の諸菩薩等は何處に在住するや』と。『舍利弗、其の佛の世界は此を去る東方一恒河沙に等しき恒河沙の世界を過ぎて世界あり、名けて[六三]金剛堅根と曰ひ、佛を慧憍と號す。舍利弗、何の因緣の故に世界を名けて金剛堅根と爲すとならば、舍利弗、彼の佛の世界の地悉く金剛なり、其の佛の願力の故に是の如きを致す。其の佛の身體と衆生菩薩の身とは悉く金剛なり、是の故に世界は是の如き名を得たるなり。此の菩薩は金剛齋と名く、是の人能く一念の頃に於て、一切の金剛諸山を破壞し、直に無量諸佛の世界に至り、諸佛の齋中に示現して出づ、佛の神力及び已が願力を以てなり、是の故に名けて金剛齋と爲す。舍利弗、汝向に問ふ所の、是の如き菩薩は何處に住するやは、汝今當に彼の金剛齋に問ふべし、自ら當に汝に答ふべし』と。

【六一】晉譯に執慧曜如來とあり。

【六二】同に來二詣此會一、聽レ說二經典一と。

【六三】晉譯に住二於堅固金剛之根一とあり。

を說いて漸進し、其をして悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、不退の地に住して八萬四千の法聚に通達せしめ、衆生の疑網心を壞せんが爲の故には、種種に開示し分別し解說し、一事を解說するに無量劫に於ても窮盡すべからず。是の如き無量の事を作すと雖も、而も是の三昧は亦增減無きなり。『善男子、譬へば一燈の力、能く種種の諸色を顯示するが如く、慧燈三昧も亦復是の如く、一心の中に於て能く無量諸佛の世界の種種の色を示し、而も是の三昧に傾動有ること無し。是の故に四念處の中には[五一]法念を頂と爲し、四正勤の中、未生善法は能く善法を生ずる、之を名けて頂と爲し、四如意の中、身心の寂靜なる、之を名けて頂と爲し、五根五力の中、慧根と慧力を名けて頂と爲し、七覺分の中、[五二]擇法を頂と爲し、八正道の中、正見を頂と爲し、一切外道所有のうち、舍摩他・毘婆舍那を名けて頂と爲し、四眞諦の中、滅諦を頂と爲し、四依の中、義に依るを頂と爲し、四無礙智にては義無礙智、之を名けて頂と爲し、六神通の中には[五三]漏盡を頂と爲し、[五四]四無量心にては悲心を頂と爲し、修梵行の中には智慧を頂と爲し、諸波羅蜜の中には般若を頂と爲し、一切の方便にては[五五]知衆生心、之を名けて頂と爲し、一切の[五六]諸力にては處非處力、之を名けて頂と爲し、諸無畏の中[五七]初を名けて頂と爲し、不共法中には[五八]無礙を頂と爲し、三十二相にては無見頂相、之を名けて頂と爲し、八十種好にては不空說法、之を名けて頂と爲し、莊嚴口の中には[五九]解一切語、之を名けて頂と爲し、莊嚴心の中には[六〇]破慢を頂と爲し、一切法の中には智慧を頂と爲す。是を慧燈三昧と名く』と。

是の經を說きたまへる時、蓮華菩薩及び萬の菩薩は是の三昧を得、三千大千世界の大地は六種に震動し、一切の大衆は妙華香・種種の伎樂を以て佛を供養し尊重讚嘆したり。

時に會の菩薩各是の言を作す、『世尊、我等昔よりこのかた未だ曾て是の三昧の名字を聞かず、況んや其の廣說分別を聞くを得るをや。我れ今皆是の如き三昧を得たり、是の故に恩に報じて此の供

【五一】法念住、卽ち法は無我なりと觀ずるなり。頂は晋譯に源とす。

【五二】擇法覺分、卽ち智慧を以て法の眞僞を簡擇するなり。

【五三】漏盡智證通、卽ち諸漏（一切の煩惱）を斷盡するに無礙なるもの。

【五四】以下の二句、晋譯には修梵行者、興于大哀、四等心源、一切普念、思法之源とす。

【五五】晋譯に應衆生心とす。

【五六】晋譯に十種力とす。佛十力中の處非處智力なり。

【五七】四無畏の第一、一切智無所畏なるべし。晋譯に無所畏者、曉了平等、佛道之源と。

【五八】同に而於三世無所礙源と。

【五九】同に頒宣經法、無侵損源。

【六〇】同に行三昧定、而不移源。

智、無想三昧智、寶幢三昧智、一切法門三昧智、一切法器三昧智、無邊光三昧智、福德三昧智、無住三昧智、樂見三昧智、善見三昧智、無盡器三昧智、畢竟盡智、一切智、無動智、那羅延三昧智、一切見智、是の如き等の六萬の三昧門の智なり。我往昔に燃燈佛を見、即ち是の如き諸の三昧門を得たり。是の如き諸の三昧門は、一切悉く是れ慧燈三昧の攝持する所たり。

『善男子、譬へば日出でて能く四事を爲すが如し――一に大光明有り、二に闇冥を除滅し、三に種種の色を示し、四に諸衆生をして事業を造すを得しむるなり。菩薩摩訶薩の是の三昧に住する、亦復是の如くにして、能く四事を爲す――一に一切煩惱の闇冥を破壞し、二に大慧光を出し、三に諸の衆生に種種の諸行を示し、四に衆生に道と非道等を開示すればなり。善男子、譬へば[四九]淨寶の珠は之を高幢に置くに、其の明遍く四由延の所を照らし、諸の衆生に須つ所の物を施して、而も其の珠の體相は增減有ること無きが如く、慧燈三昧も亦復是の如くなり。是の三昧に住する菩薩摩訶薩は、永く一切煩惱の習氣を斷じ、戒を淨め定を淨め慧を淨め身心を淨め、方便を淨くし陀羅尼を淨め、大悲を修集して大光明を放ち、遍く無量諸佛の世界を照し、衆生の意に隨つて事業を作すなり、菩薩是の如き諸事を作すと雖も、而も其の相性に增減有ること無し。

『善男子、譬へば虛空の、佛土を容受して障礙有ること無く、亦一切の[五〇]雨滯、風火水災を障礙せず、一切の衆生無量無邊なるが如し。善男子、慧燈三昧も亦復是の如し、是の三昧に住する諸の菩薩等は、諸の衆生の爲に一切の法を說くに障礙有ること無く、方便もて一切衆生を敎化し、力に因る者の爲には方便を演說し、其をして解脫し調伏し成熟せしめ、邪定の者の爲には方便演說して邪定を壞せしめ、善子無き者には善子を種せしめ、無法の器は法器と作らしめ、法器の爲には分別して阿耨多羅三藐三菩提を演說し、聲聞を求むる人には方便說法して、其をして四沙門果を獲得せしめ、緣覺を求むる人には方便敎誨して、其をして辟支佛道を獲得せしめ、復方便の爲には法

【四九】晉譯に八角大如意珠とす。高幢に置くとは、幢首に置くの意なり。

【五〇】晉譯に執二持衆水一、一切諸火劫燒之時、一切衆生、無二進退處一と。

し明月の如く、善法を增長すること猶し初月の如く、一味甘甜[四四]なること月の一味なるが如く、一切の法を觀ずること水中の月の如く、淸淨無垢なること月の翳[四五]無きが如く、共に語言し易くして諸根具足し、一切の法に於て猶し橋梁の如く、能く衆生をして四駃水[四六]を度らしめ、諸の衆生の爲に佛事を營作し、其の心初より菩薩界を動ぜず。是の如きの義を以ての故に菩薩と名く』と。

爾の時蓮華菩薩、佛に白して言はく『無言菩薩は是の如き說を作す、當に知るべし久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を得、無上法寶の輪を轉ずべし。若し能く信じて是の如き無言菩薩所說の法を受持する有らば、亦復當に是の如き功德を得べし』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、善男子、汝の說く所の如し、無言菩薩は[四七]慧燈三昧を得たり、是の故に若し無量劫に於て一句の義を說かんと欲するも窮盡すべからず』と。蓮華菩薩の言はく『世尊、唯願はくは如來、矜を垂れて哀愍したまへ、衆生の諸善法を增長するが故に、無上の大集經を莊嚴するが故に、少しく大衆の爲に是の如き慧燈三昧を開示したまへ、若し智慧の菩薩有らんに、聞き已つて亦當に是の如き三昧を獲得すべく、得已つて亦當に疾く阿耨多羅三藐三菩提を得べし』と。

佛の言はく『善男子、至心に諦聽せよ、吾當に汝の爲に少しく分別して說くべし。慧燈と言ふは卽ち是れ智燈なり、智燈は卽ち是れ闇を破す、闇無ければ卽ち疑を破す、疑を破せば卽ち是れ慧燈なり。慧燈とは卽ち是れ諸法二無きの相なり。善男子、[四八]了了智、不疑智、不失智、不挽智、不隨智、無闇智、聖智、猛利智、捷疾智、分別智、廣大智、純一智、種種智、過去智、未來智、現在智、三世平等智、三界智、三解脫門智、三慧智、三寶智、三乘智、三眼智、三垢智、三滓智、三聚聞、心意識、智陰入界智、因緣和合智、見畢竟智、如法界智、自相智、第一義智、方便智、一切聲語智、一切字智、無礙智、不壞智、能說法智、知下中上根智、無作無受智、一切呪智、一切醫智、一切世事智、莊嚴陀羅尼智、日月三昧智、入三昧智、聖智、聖三昧智、金剛三昧智、無諍三昧智、心等三昧智、壞魔三昧智、日光三昧

【四四】甘甜ともにうまく、あまきなり。
【四五】翳はかげ、くもりなり。
【四六】駃ははやきをいふ。四駃水は、普通にいふ四流を指すなるべし。一に見流（三界の見惑）、二に欲流（欲界の見惑にして見と無明とを除く）、三に有流（色・無色界の諸惑、これまた見と無明とを除く）、四に無明流（三界の無明）。有情は此の四者の爲に漂流して息まず。晉譯には駃を使（又は駛）に作り、縮刷また駛に作る。
【四七】晉譯に慧明三昧とす。
【四八】以下晉譯は義を說いて、智を一一羅列せず。

の爲に而も歸依と作り、能く未滅を滅し、能く煩惱を調し、煩惱を脫せずして生死の過を觀じ、亦諸有を求め、空三昧を修して衆生を捨せず、無想を修集して菩提の想を捨せず、無願を修集して深く諸有を樂み、佛法を樂むと雖も貪に於て貪無く、有爲の法は諸の罪咎多きを知り、而も其の內心に有爲を捨せず、諸闇を離れて大明を得ずと雖も、大智慧を得て以て器[三八]鉀と爲し、深く惠施を樂んで瓔珞を嚴施し、佛の世界を淨めて淨戒を具足し、誓願を具足し、忍辱を具足し、能く一切不忍の衆生を調し、勤修精進して無壞身を求め、能く欲界の樂の、[三九]下身を受くるを壞し、諸有を受くと雖も其の心悔ひず、善く方便を知つて常に自ら調伏して菩提を求め、諸の衆生の爲に慈心を修集し、衆苦を壞せん爲に悲心を修集し、不調を調せん爲に喜心を修集し、[四〇]畢竟の捨に非ざるものには捨心を修集し、通達して了了に甚深の義を解し、諸の聲聞緣覺の境界に非ず、義と法と了義經の智とに依りて、世法に依らず、亦衆生の爲に依止と作り、諸の衆生の爲に身口を莊嚴し、如說に作して心を莊嚴し、諸の衆生の爲に神通を莊嚴し、衆生を利益すること猶ほ大地の如く、能く一切を淨むること猶ほ大水の如く、諸の煩惱を燒くこと猶ほ熾火の如く、法に於て無礙なること猶ほ猛風の如く、法に於て平等なること猶ほ虛空の如く、陀羅尼を得て一切の聞を持し、樂說無礙にして衆をして聞くを喜ばしむ。[四一]至心に佛を念ずるは淨心の爲の故なり、[四二]能く大法を施すは段食の施の故なり、正命自活して威儀清淨に、無諍三昧を修して深く寂靜を樂み、樂んで衆生を調して世語を說くを離れ、世を樂む者を見ては呵責教誨し、七種の財を具して其の心柔軟に、樂んで惠施を行じ堅固にして退かず、眷屬不壞にして善友に親近し、恩を知り恩を報じて過去業を觀じ、衆生の意に隨つて能く疑心を壞し、生死の諸過咎多きを觀察し、所作至心にして一切語を解し、大乘を修集して三乘を疑はず、衆生樂見して問に隨つて答へ、無礙智を得て諸佛に念ぜられ、[四三]時節語して多語せず、光明清涼にして猶し秋月の如く、善法の具足すること猶し滿月の如く、衆生の樂見すること猶

【三八】鉀は鎧なり。

【三九】諸有に流轉して諸種の身を受くるなり、宋元明三本に有身とす。晉譯はこゝに禪定を說き、次に智慧を擧ぐ。

【四〇】晉譯相當文に、常爲ニ無依一、令レ護ニ諸根一、行ニ於護觀一、永不ニ寂滅一、修ニ於觀一也とあり。捨とは菩薩が一切衆生に對して憎愛の心無きをいふ。

【四一】晉譯はこの二句の相當文に、而爲ニ諸佛之所ニ建立一、能自修レ心則令ニ清淨一、順ニ于法界一、曉ニ了四食一と云へり。四食は段食・觸食・思食・識食をいふ。

【四二】本文に能大法施段食施故とし、縮刷に食を衣に作る。段食は四食の一、梵に(Piṇḍa)また、摶食、團食とす。香味觸を體とする、吾人常用の食物なり。

【四三】晉譯相當文に、所レ語隨レ時、未ニ曾失レ節と。

法を知るなり。若し是の如くならば、涅槃を得る者に等しく、卽ち是れ聖句にして涅槃に入るなり。是の故に如來は經中に說きたまふらく「自ら調伏せずして能く他を調伏し、自ら解脫せずして能く他を解脫せしめ、自ら寂靜ならずして能く他を寂靜ならしめ、自ら涅槃せずして能く他を涅槃せしむること、是の處有ること無し。若しは自ら調伏して他を調伏せしめ、若しは自ら解脫して他をして解脫せしめ、若しは自ら寂靜にして他を寂靜ならしめ、若しは自ら涅槃して他を涅槃せしむること、斯れ是の處有り」と。

『善男子、菩薩摩訶薩の菩提道を修し、一切衆生の所行を解了し、諸法の相及び法界に於て分別を生ぜず、一切の善法を修行するの時、亦諸魔の徒衆有ることを見ず、佛法を求むと雖も求むる者を見ず、衆生を調すと雖も我と人とを見ず、諸の法を行ずと雖も煩惱に汚されず、世法に順ずと雖も世法に染せず、五陰の擔を負ふも亦住處無く、諸界を遠離して法界に動ぜず、解脫の法門を修して善法を退せず、明に三界を見て煩惱に雜らず、檀波羅蜜を行じて憍慢を生ぜず、乃至般若波羅蜜も亦復是の如く、一切の行に隨つて實は一切諸行を行ぜず。若し能く是の如き等の行を行ぜば、當に知るべし、卽ち是れ菩提道を行じ、菩提道及び菩提行に於て分別を生ぜず。若し是の如き菩提道の行を行ぜば、諸法の中に於て我有るを見ず、貪無く瞋無く親無く怨無く障礙有ること無し。若し障礙無ければ卽ち行を爲す無し。若し行を爲す無ければ卽ち是れ眞實の大菩薩なり』と。

蓮華菩薩の言はく『善男子、何の因緣の故に名けて菩薩とは爲す』。『善男子、能く衆生の覺せざる所を覺するが故に菩薩と名け、能く無明睡眠の衆生を悟らしむるが故に菩薩と名け、菩提に隨順するの法を演說するが故に菩薩と名け、能く衆生をして深く寂靜を樂ましむる、是を菩薩と名け、佛語を增長し、正法の幢を竪て、聖衆を護念し、菩提心に於て動轉有ること無く、聲聞辟支佛心に住せず、終に至誠の心を捨離せず、畢竟じて能く未度を度し未解を解せしめんと發願し、依無き者

は無生忍地を得、四萬二千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。

[三五]是の時、會中に一菩薩有り名けて[三六]蓮華と曰へるが、無言菩薩に語つて言はく『善男子、汝向に佛に問ひ、佛卽ち汝の爲に分別解說したまへり。汝心に喜ぶや』。無言菩薩の言はく『善男子、我れ亦問もせず、一法をも聽かず、云何が喜を生ぜん』。蓮華菩薩の言はく『善男子、汝は佛所に於て法を聽かざりしや』。無言菩薩の言はく『諸佛如來は都て所說無し、我れ云何が聽かん。何を以ての故に、我は法器に非ざるが故に』。蓮華菩薩の言はく『汝今若し是れ法器に非ずんば、是れ何等の器なる』。無言菩薩の言はく『善男子、我が身は今尙法器に非ず、況んや復餘の器をや』。蓮華菩薩の言はく『汝若し是れ眞の法器に非ずんば、云何が當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき』と。無言菩薩の言はく『善男子、阿耨多羅三藐三菩提は亦是れ器に非ず。善男子、若し佛法を離れて菩提有らば、當に知るべし器有らん。一切の佛法は卽ち是れ菩提、菩提は卽ち是れ佛法なり。善男子、是の故に我れ若し煩惱を遠離せば、佛法を見ず、菩提を見ず、煩惱と菩提及び佛法は差別有ること無し。若し煩惱中に菩提を見なば卽ち是れ如見、若し煩惱を離れて菩提を見れば、是を倒見と名く』と

蓮華菩薩の言はく『善男子、云何が倒見と名くる』。『我・壽命・士夫・[三七]摩納を見、是を離れて外に別に貪欲瞋恚愚癡有りとする、是を倒見と名く。一切の法性及び菩提の性は差別有ること無く、作無く受無し、我性・衆生・壽命・士夫・摩納は、卽ち是れ貪欲・瞋恚・愚癡なり、是の如き等の法は、卽ち是れ菩提なりとする、是を如見と名く。卽ち四大の中及び四大の造に菩提を求めて餘處に求めざるなり。云何が求と名くとならば、求むる時、一切の諸物を見ざるなり、見ざれば卽ち是れ處なく、處無ければ卽ち是れ住無し、住無きは卽ち是れ一切諸法の性なり。一切諸法若し性無ければ卽ち是れ實相なり、實相は常に非ず斷に非ずして畢竟節と名く。若し能く是の如き等の節を見る有らば、當に知るべし、是の人流れず散せず、不流不散は卽ち無生滅、卽ち是れ涅槃、卽ち是れ實に一切諸

【三五】晉譯、卷下。
【三六】晉譯に蓮華淨といふ。
【三七】梵に摩納婆迦(Mānavaka)、勝我と譯す、一類の外道、人身中に勝妙の我體有りと執す、その義を指して摩納婆といふ。

し精進を修して不增不減なれば、是を慧力と名く。復次に善男子、若し寂靜を樂んで世事を說くことを離れなば、是を信力と名け、若し空寂に住して四禪及び[三四]八解脫を獲得せば、是を進力と名け、若し諸禪に於て退失有ること無ければ、是を念力と名け、若し諸禪の無常・苦・無我を觀ぜば、是を慧力と名く。復次に善男子、若し一切の諸波羅蜜と三十七助菩提の法とを聞き、信じて疑を生ぜざれば是を信力と名け、聞き已つて轉た衆生の爲に演說せば、是を進力と名け、心に善く思惟する、是を念力と名け、如法に住する、是を慧力と名く。復次に善男子、諸衆生の爲に慈心を修集する、是を信力と名け、衆生を憐愍し、其をして苦を離れしむる、是を進力と名け、法を觀察し已つて心に大喜を得る、是を念力と名け、怨親中に於て其の心平等にして大捨を修集する、是を慧力と名く。復次に善男子、是の身は無量衆惡の成就する所にして、凡夫を誑惑すること猶ほ幻相の如しと觀察する、是を信力と名け、死苦を受くる時、專心に佛法僧寶に繫念して身命を惜まざる、是を進力と名け、亦諸の惡心・聲聞心・辟支佛心・貪心・瞋心・癡心・妬心・慳心・毀戒心を生ぜざる、是を念力と名け、若し法界を觀じ法界を分別して、無礙智を觀じ、亦過去未來現在を知らば、是を慧力と名く。復次に善男子、喜は信に名け、不退轉は名けて精進と爲し、不狂亂は名けて念力と爲し、了了に知るを名けて慧力と爲す。復次に善男子、信力を以ての故に能く所作有り、進力を以ての故に事畢竟するを得、念力を以ての故に漏失する所無く、慧力を以ての故に能く如法に說く。復次に善男子、疑網を觀ずるが故に名けて信力と爲し、疑を遠離するが故に是を進力と名け、更に疑を生せざる、是を念力と名け、說いて能く疑を壞する、是を慧力と名く。復次に善男子、佛法を信ずる、是を信力と名け、菩提の爲の故に之を修行する、是を進力と名け、順忍を得るが故に、是を念力と名け、無生忍を得るが故に、是を慧力と名く。善男子、信根と信力と差別有ること無く、進根と進力と、念根と念力と、慧根と慧力とも、亦復是の如くなり』。是の法を說きたまへる時、百千の菩薩

【三四】また八背捨ともいふ。(一)內有色想、觀外色解脫、(內に身想の貪有り、之を除かん爲に外の不淨等の色を觀じて貪を起さゞらしむる)と、(二)內無色想、觀外色解脫、(內に色想の貪無けれども更に堅牢ならしむる爲に外の不淨等の色を觀じて貪を起さゞらしむる)と、(三)淨解脫身作證具足住、四(淨色を觀じて貪を起さゞらしむるを淨解脫といひ、この淨解脫を身中に證得して定に住する)と、(四)空無邊處解脫、(五)識無邊處解脫、(六)無所有處解脫、(七)非想非々想處解脫、(以上の四は各々その下地の貪を棄捨するが故に解脫と名く)、(八)滅受想定解脫身作證具足(滅盡定のこと、これ亦第四禪に依つて前の非想非々想處卽ち一切の所緣を棄捨するが故に解脫と名く)。

名け、既に信を生じ已つて諸惡を作さざる、是を進力と名け、過去の善業、現世に猶ほ增すを是れ念力と名け、若し諸法は因有り果有るを知らば、是を慧力と名く。復次に善男子、若し心法の不可說なるを信ぜば、是を信力と名け、若し此の信に因つて能く心を調伏せば、是を進力と名け、若し能く至心なれば、是を念力と名け、法は幻の如しと觀ぜば、是を慧力と名く。復次に善男子、若し法の空なるを見ば、是を信力と名け、若し邪見を斷たば、是を進力と名け、若し內外悉く空寂なるを見て怖畏を生ぜざれば、是を念力と名け、若し能く第一義の空を觀見せば、是を慧力と名く。復次に善男子、若し能く無相と無願を觀見せば、是を信力と名け、他の爲に無相と無願を演說せば、是を進力と名け、至心に無相と無願を觀察せば、是を念力と名け、是の法の宣說すべからざるを了知せば、是を慧力と名く。復次に善男子、能く一切に施して果報を求めざる、是を信力と名け、施し已つて悔まず、亦休息せず、常に行じて絕たざる、是を進力と名け、施する時、至心に菩提を念じて發願回向する、是を念力と名け、財物・受者・施者及び果報を觀ぜざる、是を慧力と名く。復次に善男子、若し清淨の禁戒を受持して果報を求めざれば、是を信力と名け、煩惱を生じ禁戒を毀壞せざる、是を進力と名け、是の如き淨戒を至心に護持して菩提に向はんことを願ふ、是を念力と名け、身口意は水中の月・響・幻・炎の如しと觀ずる、是を慧力と名く。復次に善男子、若し忍辱の法を修行して其の果を求めざる有らば、是を信力と名け、若し打罵有るも能く之を忍受せば、是を進力と名け、忍辱の爲の故に慈悲及び不放逸を修集して菩提に向はんことを願はゞ、是を念力と名け、身口意は都て忍ぶ所無しと觀ぜば、是を慧力と名く。復次に善男子、若し勤精進を了知するが故に阿耨多羅三藐三菩提を得る有つて、懈怠の得に非ざれば、是を信力と名け、若し能く一切の衆生を調伏し、正法を護持し聽受し供養し、能く衆生の爲に趨走給使し、能く佛土を淨むれば、是を進力と名け、能く衆生をして懈怠を遠離し、勤修精進して菩提に向はんと願へば、是を念力と名け、若

德、是の如く是の如し、一切諸法は實に言語無きなり』。

『善男子、若し如來成就の功德を言はんに、是の如き言中に[三〇]何等の罪をか得る』。『大德、若し是の如く說かば、當に知るべし、[三一]是の人大過咎有り。何を以ての故に、如來の功德は決定ならざるが故に。所以は何ん。福無く罪無きが故に如來と名く、若し如來は功德有りと觀ぜば、是を名けて欲と爲す。夫れ欲有らば卽ち是れ大欲なり、欲有つて大欲ならば卽ち是れ過咎あればなり』。『善男子、云何が過咎無しと名くるを得るや』。『大德、[三二]第五大の如く、第七情の如く、十九界の如く、無出無入無生無滅にして、造作有ること無く心意識無ければ乃ち過無しと名く。若し知見有つて證修を遠離せば、是を罪過と名け、若し諸の界有れば是を罪過と名く、若し諸の界無ければ是を無過と名くるなり』と。

爾の時佛、無言菩薩を讚へて言はく『善い哉・善い哉、善男子、汝所說の如きは卽ち是れ善說なり』と。是の法を說ける時、萬二千の菩薩は無生法忍を得たり。無言菩薩、佛に白して言はく『世尊、佛の所說の如くんば、菩薩摩訶薩に四種の力有り、所謂[三三]信力・進力・念力・慧力なり。唯願はくは如來、廣く分別して說きたまはんことを。云何が名けて菩薩の四力と爲す』。

佛の言はく『至心に諦聽せよ、吾亦當に說くべし。若し菩薩有り、佛の正法に於て深信順解して疑心を作さざれば是を信力と名け、若し精進を勤めて佛法を求め、不休不息にして疑悔を生ぜざれば、是を進力と名け、若し菩薩有つて善法を求め、得已りて菩提心を念ずることを失せず、作す所の善根を菩提に願向する、是を念力と名け、若し菩薩有り內に自ら思惟して他の語に隨はず、法性を了知せば、是を慧力と名く。復次に善男子、若し信心有つて聖人に親近せば、是を信力と名け、若し能く是の如き聖人を供養せば、是を進力と名け、至心に聖人の言を聽受する、是を念力と名け、聖法を聞き已つて如法に住する、是を慧力と名く。復次に善男子、業果を信ずるは是を信力と

【三〇】同によれば其の所說は、豈に短乏に墮せんやと。

【三一】同に而無二所說一不レ墮二短乏一、何以故、如來至眞、不レ與二名德一云云と。

【三二】四大、六根（情）、十八界等に對し、無法を喩へて、第五大、第六情、第十九界などゝ稱す。

【三三】晉譯には信・精進・意・智の四力を擧ぐ。

ち是れ不變、不變なれば卽ち[二六]駃無く闇無し、無駃無闇なれば卽ち覺觀無し、覺觀無ければ卽ち是れ世無し、世無ければ卽ち是れ器無し、器無ければ卽ち是れ貪無し、貪無ければ卽ち是れ性淨なり、性淨なれば煩惱に合せず、煩惱に合せざれば卽ち顚倒せず、顚倒せざれば卽ち是れ平等なり、平等なれば卽ち是れ眞實なり、眞實なれば不生不滅なり、不生不滅なれば因緣に從ふと名く、因緣に從へば卽ち去來せず、去來せざれば卽ち境界無し、境界無ければ卽ち是れ句無し、句無ければ卽ち是れ狂せず、狂せざれば卽ち是れ聞無し、聞無ければ卽ち是れ作無し、作無ければ卽ち是れ住無し、住無ければ卽ち是れ字無し、字無ければ卽ち是れ相無し、相無ければ卽ち是れ心意識の句を過ぐ、心意識を過ぐれば卽ち是れ寂靜なり、寂靜なれば卽ち是れ熱無し、熱無ければ卽ち是れ瞋無し、瞋無ければ卽ち畢竟す、畢竟すれば卽ち是れ有無し、有無ければ卽ち是れ涅槃なり、是を名けて法と爲す。大德、卽ち是れ正法なり。卽ち是れ說法なり、卽ち是れ聞法なり、卽ち是れ正見なり。『大德、夫れ正見は身を見ず、身に[二七]病行を行じ、見を見ず、貪著を生ぜず、不覺不觀なり、是を佛法・聖見・正見と名く。復次に大德、無明と愛と解脫とは等しくして差別有る無きを觀ぜば、是を正見と名く。是の如く見已つて不著不取なる、是を聖見と名く。復次に大德、貪・恚・癡と空・無相・願との平等無二なるを觀じて、相を見ず無相の相を見るをば、是を聖見と名け、一二等の一切の法を觀ぜざるを聖正見と名く。復次に大德、若し能く我と衆生と等きを觀じ、衆生等しきが故に如來平等なり、如來等しきが故に佛法平等なり、佛法等しきが故に聖衆平等なり、聖衆等しきが故に大慈平等なり、慈平等なるが故に虛空平等にして以て不住に住す、是の如き平等を聖正の見と名く。大德、[二八]一切法の如く聲も亦是の如し、聲の如きは卽ち是れ聖見なり、卽ち是れ正見なり。大德、聖正の見は亦生も出も無し、若し生も出も無ければ誰に從つて法を聽かん』と。

舍利弗の言はく、『我れ仁所說の義を解するが如くんば、[二九]一切の諸法は語言有ること無けん』。『大

【二六】駃は速疾なり。縮刷に駛とす、義同じ。無駃無闇の義明ならず、晉譯には前の句に不變とあるを無所作に作り、つゞいて已無二所作一、則激二駛水一、已游二駛水一則無所得云云と云ひ、以下本文と出入あり。

【二七】菩薩の大悲を以て衆生の罪業（卽ち病）を治する大行をいふ、治病の行なるが故に病行とす。晉譯には、其正見者、等二於己身一、以レ等二己身一則離二合會一、以レ離二合會一、於二諸平等一、不レ見二平等一、觀二諸所見一、若レ無二所思一とあり。

【二八】晉譯にいふ、如法像類、聽者亦爾、正見若茲と。

【二九】晉譯によれば有レ所二講說一、皆墮二短乏一と。

すべからず、如如不動にして三世に平等なり、我と我所無く、衆生壽命士夫有ること無く、無字無聲にして宣說すべからず、不知不見なり。一切の法中に知足の心を得れば、諸相を遠離し、一切の喜覺觀・屋宅を斷じ、乃至佛を讃するも佛相を生ぜず。若し定に入る時、是の如き等の甚深の法界を觀ずるを、善思惟と名け、定より起ち已つて諸の衆生の爲に、是の如き等の甚深の法界を宣說するをば、是を正見とは名く』と。是の法を說きたまへる時、十千の菩薩は是の正見を得たり。

爾の時舍利弗、無言菩薩に語つて言はく『善男子、誰に從つて法を聞きて正見を得るや』。無言菩薩の言はく『大德、[二五]若し去・來・現在に菩提心を得ざる者有らば、我れ彼に從つて聞き正見を得ん。三世等しく、一切の法等しきを觀じ、一切の法に於て覺觀を生ぜずんば、其の心有爲・無爲に住せず、一切衆生の相を遠離す。而も衆生の爲に諸の苦行を修し、亦復二種の相を遠離す。一に衆生相、二に心相なり。二節を遠離して實の法性を知る、實の法性は有無くして有有り。一切諸佛の深法に通達するも、憍慢を生じて自ら「我知る」と言はず。大德、我れ是の人より正法を聽受せん。是の人亦一字をも宣說せず、亦一切をして而も之を樂聞せしむ。法の眞實は宣說すべからざるを知るも、衆生の爲の故に之を宣說す。世間を出づるも世を汚れたりと爲さず、畢竟修集するも能く修と不修とを知る有ること無し。我れ是の人より正法を聞受せん。法性に住し衆生の性に於て分別を生ぜず、衆生の性と法性と空性とは皆悉く平等なりと觀ぜば、我れ是の如き人の邊に於て法を聞かん。是の人菩提樹下に坐せず、起たず行かず眠らず臥せず睡らず寤めずして菩提を得、菩提を得已つて終に相言つて菩提を得たりと作さず、一切の衆生も亦彼の菩提を獲得したるを知らず、無得にして乃ち得たるが故に得の相無し。大德、夫れ正法は光明有ること無し、光明無ければ即ち處所無し、處所無ければ即ち是れ無身、無身なれば即ち是れ無畏、無畏なれば即ち是れ不出、不出なれば即ち是れ不生、不生なれば即ち是れ不滅、不滅なれば即ち是れ不著、不著なれば即ち是れ不動、不動なれば即

【二五】晉譯にいふ不下從二過去心一得中於道上、亦不二當來一、亦不二現在一、平等三世等二一切法一……吾從二於彼一而聽二聞法一と。

定聚を說くは謂はく四如意、無所畏を說くは謂はく諸根處、無能壞を說くは謂はく諸力處、離煩惱を說くは謂はく七覺分、眞知の法を說くは謂はく八正道なり、是の善思惟は斷・常に著せず。是の如き道を以て菩提に願向する、是を正見と名く。四諦の法を聽くは、是を聞聲と名け、苦を知り集を離れ滅を證し道を修するは、是れ善思惟、是の如き法の不生不滅を見る、是を正見と名く。三解脫を聽く、是を聞聲と名け、空三昧を信じ無相に畏れず、無願を疑はざるは、是れ善思惟、是の如き法を以て菩提に願向するを名けて正見と爲す。空三昧を修して心を調し見を明にし、無相を修集して爲に覺觀を除き、無願を修集して爲に諸有を求むる、是を正見と名く。發心の法を聽くは是を聞聲と名け、菩提道を修するは是れ善思惟、其の心退かざる、是を正見と名く。善知識を得る、是を聞聲と名け、供養親近するを善思惟と名け、其の教誨を受くる、是を正見と名く。法界を聽くは[二三]是を聞聲と名け、法界を觀ずるは是れ善思惟、如法に住する、是を正見と名く。佛世尊を見るを名けて聞聲と爲し、諸の菩薩を念ずるを善思惟と名け、畢竟道を得るは、是を正見と名く。初めて八萬四千の法聚を聽くは是を聞聲と名け、[二四]諸衆生の是の如き行處を觀ずるは是を思惟と名け、八萬四千の諸根を調伏するは、是を正見と名く。

『善男子、何の因緣に隨つて能く善法を生ずるを是れ聞聲と名け、聞き已つて諸の善因緣を離れざるを善思惟と名け、是の如き法を以て菩提に願向するを是れ正見と名くるや。善男子、是の如き二法——謂はく善思惟と及び正見とは——差別有ること無し。何を以ての故に、一切の諸法は平等無二なればなり。是の善思惟もて能く平等を觀ずる、是れ正見の故なり。增減無きは卽ち是れ正見、取捨無きは卽ち是れ正見、作と作者と無きは卽ち是れ正見、覺觀無きは卽ち是れ正見、念と念處無きは卽ち是れ正見、作無く思無きは卽ち是れ正見、一無く二無きは卽ち是れ正見なり、一門一味一乘一行にして其の性は是れ一、諸の煩惱憍慢等の結無く、無聞無說無垢無淨なり。法界の性は分別

く一切の善法を生じ無所畏を得しめ、又この五根增長して五障を治し能く壞する者無きは五力。また擇法・精進・喜・輕安・念・定・行捨の七覺分によりて、思惑を離れ。正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八正道によつて、偏邪を離れ、涅槃に至る。以上により三十七品を成ず。

【二三】晉譯には之を如來の數法の義に解す、次句亦然り。

【二四】同には八萬四千の諸佛の行を曉了するを思惟とし、八萬四千の衆生の、各根を異にする者に說法するを正見とす。

へ。云何が[一四]聲を聞くと及び善く思惟するとは正見を生ずるや』佛の言はく『善男子、至心に諦聽せよ、吾當に汝の爲に分別解說すべし。善男子、[一五]菩提心の爲に法を聽くは卽ち是れ聞聲なり、至心に菩提の心を憶念するは是れ善思惟なり。菩提心を觀ずる、是を正見と名く。復次に善男子、菩提道の爲に法を聽くは、是を聞聲と名け、道を遠離せざる、是れ善思惟、如法に住する、是を正見と名く。心を調伏する爲に法を聽くは是を聞聲を名け、惡心を遠離する、是れ善思惟、善心を獲得する、是を正見と名く。善法を嚴せんが爲に法を聽くは、是を聞聲と名け、莊嚴を修集する、是れ善思惟、菩提に願向する、是を正見と名く。善法を聽かん爲なるは、是を聞聲と名け、善法を增長するを善思惟と名け、菩提に願向する、是を正見と名く。惠施を聞かん爲なる、是を聞聲と名け、能く一切を捨つる、是れ善思惟、果報を求めざる、是を正見と名く。[一六]戒衆を聽かん爲なるは、是を聞聲と名け、至心に戒を護るを善思惟と名け、菩提に願向する、是を正見と名く。法忍を聽かん爲なる、是を聞聲と名け、打罵に報ひざる、是れ善思惟、菩提に願向する、是を正見と名く。精進を聽かん爲なるは、是を聞聲と名け、懈怠を破壞する、是れ善思惟、菩提に願向する、是を正見と名く。三昧を聽かん爲なるは、是を聞聲と名け、[一七]能く身心を淨くするは是れ善思惟、菩提に願向する、是を正見と名く。[一八]智衆を聽かん爲なるは是を聞聲と名け、聞き已つて[一九]正觀するは、是れ善思惟、菩提に願向する是を正見と名く。四攝の法を聽くは是を聞聲と名け、衆生を攝取するは是れ善思惟、是の攝法の取無く作無く空無所有なるを知る、是を正見と名く。五通の法を聽くは是を聞聲と名け、身心の輕きを得るを善思惟と名け、菩提に願向する、是を正見と名く。[二〇]四無礙を聽くは、是を聞聲と名け、無礙を修集するは是れ善思惟、菩提に願向する、是を正見と名く。[二一]四依法を聽くは是を聞聲と名け、四依を勤修するを善思惟と名け、菩提に願向する、是を正見と名く。[二二]三十七品を聽くは是を聲聞と名く、若し四念を演說するを聞けば則ち是れ念處、捨離を說くは謂はく四正勤處、

【一四】晉譯には承他音聲とす。
【一五】晉譯によれば菩薩有り、衆生を敎化して佛道に入らしむるを「他音を承く」となし、其の人の心をして壞亂せざらしむるを思惟とす。
【一六】これ以前は晉譯と出入あり、よく合せず、
【一七】晉譯には心所爲事、而不可得、觀ニ察本心一とす。
【一八】同に智慧の身・根・華・實とす。
【一九】同に如ニ所聞法一、觀ニ察本末之所ニ歸趣一とす。
【二〇】法・義・辭・樂說の四無礙辯なり、晉譯に四分別辯とす。
【二一】依レ法不レ依レ人。依ニ了義經一不レ依ニ不了義經一。依レ義不レ依レ語。依レ智不レ依レ識の四種をいふ。晉譯相當文缺く。
【二二】三十七助道品なり。身は不淨なり、受は苦なり、心は無常なり、法は無我なりと觀ずるは四念處。已生の惡を斷除し、未生の惡を生ぜざらしめ、未生の善を生ぜしめ、已生の善を增長せしめん爲に精進するは四正勤。この二種によつて智慧精進を增すも定力少なければ、次で、四種の定を修し定慧均等ならしめ所願を得るが故に如意といふ。欲・精進・心・思惟の四あり。次に信・進・念・定・慧の五根はよ

大德、夫れ覺觀中には字無く聲無し、覺觀を離れて亦聲も字も無し、覺觀の體は卽ち覺觀に非ず、【二】我の文字を作すも亦覺觀にあらず。我れ覺觀に因つて大功德有り。若し能く是の如き深法を觀ぜば、是れ則ち名けて十二因緣と爲す。若し緣より生ぜば卽ち是れ空寂にして、則ち定相無し。若し是の如き眞實の知有らば、卽ち是れ眞實に法性を知るなり。大德、諸法は悉く因緣に從つて和合し、而も和合の中、實に作者・生者・出者無きなり。是の故に諸法は主無く音無く聲無く心無く、覺觀有ること無く覺觀無きに非ざるなり。何を以ての故に、顚倒の因緣によつて出と滅と有ればなり。是の故に若し問者・聽者・解說者有るも、合せず散せずして一相無相なり。大德、夫れ難を問ふは卽ち是れ大悲有り、我は大悲有り、是の故に佛に問ひまつる。是の如き問は卽ち是れ悲の問にして口の問に非ざるなり。夫れ口の問は是れ聲聞の問なり、聲聞は聲に著するが故に聲聞と名く。菩薩は普く悲するが故に口の問無きなり』。

舍利弗の言はく『善男子、若し一切の法性にして、【三】定無ければ、一切衆生の性も亦定無し、若し定無ければ菩薩誰の爲にか悲心を修する』。『大德、若し諸の衆生にして定性有らば、一切の菩薩は終に悲を修せじ、一切の衆生は實に衆生に非ざるに、顚倒を以ての故に衆生の想を作す、是の故に菩薩は悲心を修集す、顚倒を壞し無我を宣說せんが爲なり。大德、菩薩摩訶薩は有を壞せん爲に而も正法を說かず、我・壽命・士夫を壞せんが爲に慈悲を修し正法を宣說せず、眞實の深法界を知らんが爲の故に法を宣說す。眞法界は卽ち空三昧・無相・無願なり』。舍利弗の言はく『善い哉・善い哉、善男子、我れ亦是の如く眞實に了知す、所以に相問ふて汝の智を試みるのみ。佛法を增長せしめんが爲の故に問ひ、衆生利益せんと欲するが爲の故に問へるなり』。

爾の時無言菩薩、佛に白して言はく『世尊、經中に說くが如く、二の因緣有つて能く正見を生ぜず、所謂聲を聞くと善く思惟するとなり。唯願はくは哀愍して諸の菩薩の爲に廣く之を宣說したま

【二】原文に我作文字、亦不覺觀とあり。

【三】定性なり、卽ち以て執着すべき一定の性質をいふ。

く、中間も亦復住處無く、一切の法性住處無ければ、卽ち是れ無上の大智慧なり。文字有ること無く行有ること無く、相貌有ること無く性有ること無く、取捨等の二相有ること無き、是を無上の大智者と名く。若し一切の波羅蜜は、其の性平等にして虛空の如しと觀ぜば、是れ卽ち名けて無平等と爲す、能く一切法の平等を觀ずればなり。若し能く一切法を平等とし、亦能く衆生等を觀じて、悉く能く等しく一切の佛と觀ぜば、所得の智慧は無平等なり。若し諸の菩薩の智有る者、能く是の如き無等の法を觀ぜば、卽ち無上菩提の果を得んこと、猶し先佛の所得の如くならん』と。

無言菩薩是の偈を說ける時、萬二千那由他の衆生は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、六萬の菩薩は無生忍を得たり。

時に華臺中の諸の菩薩等、悉く座より起ち、頭面もて佛を禮し、妙蓮華を以て無言菩薩を恭敬供養し、口に是の言を宣せり『我は是れ恩を知る、我れ今恩を報ぜん』と。時に舍利弗の言はく『世尊、是の如き菩薩は何の因緣の故にか是の如き言を發したる――我は是れ恩を知る、我れ今恩を報ぜん――と』。佛の言はく『舍利弗、是の如き菩薩は皆悉く無言菩薩に因つて菩提心を發したり。是の故に說いて言ふ「我は是れ恩を知る、我れ今恩を報ぜん」と。今復無言菩薩に因つて是の如き大集經典を聽受し、幷に來つて我を供養するを覩見すればなり』と。

爾の時無言菩薩、佛に白して言はく『世尊、我れ疑ふ所有り、今啓請せんと欲す。唯願はくは如來、哀愍聽許したまへ』と。佛の言はく『善男子、意に隨つて問を致せ、當に汝の爲に說かん』。時に舍利弗、無言菩薩に語るらく『仁者、若し言語無くんば云何が問ふを得る』。『大德、一切の諸法は皆悉く言無く字無く說無し、何を以ての故に、[10]一切衆生の性無言なるが故なり。[11]覺觀を以ての故に聲の出づる有り、若し覺觀無ければ云何が聲有らん、云何が說くべけん、云何が字有らん。

【一〇】この句、晉譯に一切衆生皆悉自然、無二諸言教、及衆想念一とす。
【一一】この二句、同によれば、心の所念に因つて、口に言辭を說く。若し所思無ければ、則ち所言無しと。

も、色身と常に共に行ず、一切の文字皆無漏なるに、衆生名を立てて忍辱と名く。若し能く身口意を調する有らば、即ち是れ無上の忍辱なり、若し能く忍辱を忍ぶ者有らば、是れ亦即ち是れ無上の忍なり。若し衆生有つて其の身を砕き、節節壊して末となりて胡麻の如くなるも、身を觀ずる猶ほ乾ける草木の如くならば、是れ則ち之を名けて身の忍と爲す。若し悪口罵詈を聞かん時、其の心不動にして如法に住し、音聲は虚空の如しと觀察せば、即ち是れ無上の口忍なり。若し能く煩惱の因に通達し、一切の諸煩惱を遠離せば、是れ則ち之を名けて心忍と爲す、一切煩惱の爲に汚されず。忍は即ち是れ菩提の性なるが如く、身口意の業も亦是の如し、若し能く是を迴して菩提に向へば、是を則ち名けて菩提を得と爲す。若し衆生有つて精進を勤め、上中下等及び麁細など、無量劫に於て之を修集するも、獲得する所無く畢竟する無し。若し精進を獲得せざれば、是の故に菩提を無得と名く、若し能く一切法を得ずんば、即ち是れ無上の勤精進なり。若し是の如き精進有らば、不增不減なること虚空の如くなり、是の如きは即ち是れ大菩薩にして、勤行精進して所畏無し。

『一切の諸禪は聚有ること無く、造作有ること無く至處無し、若し一切法は即ち是れ眞の禪波羅蜜なりと思惟する有らば、一切の諸悪色を遠離せん、悪身悪口も亦復然り、能く一切の諸煩惱を焦せば、即ち是れ眞の禪波羅蜜なり。若し能く心の眞實性を觀ぜば、一切法の中に亦見ず、若し能く心無く心を遠離せば、即ち是れ眞の禪波羅蜜なり。若し能く心及び菩提を觀ぜば、即ち是れ無上眞實の見なり、若し是の如き眞實の見有らば、菩提を獲得すること難しと爲さず。若しは能く文字無きことと、一切諸法の生滅無きこととを知見し、若しは是の如き觀見を作すをば、是れ即ち名けて大智慧と爲す。復口に智慧を説くと雖も、智慧は亦口聲に住せず、若し口聲は實に無聲なるを知らば、即ち是れ智慧の眞性なり。若し法に此彼の住有ること無

は菩提の如く、一切の善法亦是の如し、一切の語言は語言無く、語無き中に於て能く語を說くなり。若し妙音聲を惠施する有らば、惠施の主及び財物、是の如き等の施は卽ち菩提なり、一切は皆悉く不可說なり。若し是の布施にして口に說くべくんば、菩提の體も亦應に說くべし、菩提の性は虛空の如く、一切の音聲も亦是の如くなり。若し心有つて能く眞實に知り、知り已つて亦能く聲を宣說し、隨つて是の聲〔八〕何の處に滅するやを知らば、卽是れ菩提の眞實相なり。若し能く身口意の業を遠けんに、一切の煩惱も亦復爾り、卽ち是れ一切の波羅蜜にして、如來所說の實の法性たり。惠施は菩提の中に在らず、菩提は惠施中に非らず、是の如きの二法は卽ち音聲のみ、亦所住無く至處無きなり。若し能く是の如き等を知る有らば、卽ち是れ眞實の大菩薩なり、若し施時に於て慢を生ぜざれば、卽ち是れ無上の大施主たり。禁戒を護持するは卽ち是れ聲にして、形色有ること無く至處も無く、諸法の不生及び不滅なる、卽ち是れ無上持戒の相なり。是の如き禁戒は能く作す無く、亦復身口意の業も無し、若し出滅せず造作せざれば、云何が是の禁戒を說くべけん。流布の爲の故に音聲を出すを、衆生名を立てて禁戒とは名く、諸の禁戒の如く聲も亦爾り、是の如き二法は俱に無漏なり。口の所說は戒の爲の故なり、而も種種の諸莊嚴を說けども、音聲のみにして實には諸の莊嚴無し、眞實に之を知れば所有無きなり。身業口業及び心業は、能く此の戒を迴して菩提に向はしむ、禁戒の音聲及び菩提、是の如き二法は虛空の如くなり。若し能く是の如き知を作す有らば、是の人卽ち戒を行じ處を行じ、卽ち能く戒の彼岸に到るを得ん、彼處は甚深にして見ることを得難し。

〔九〕忍を說くは音聲にして卽ち是れ空なり、空の性は處無く造作無し、忍辱と空との是の二法は、差別有ること無きこと虛空の如くなり。忍辱の聲は色の作に非ず、覩見すべからず、處所も無し、若し平等心を修集する有らば、卽ち是れ忍の眞實相なり。忍辱は復念念に滅すと雖も、而

〔八〕麗本に而となし、宋元明に何となす、今後者に從ふ。

〔九〕晉譯、無言童子の說話あつて次にこの偈文を出す。

まふ故に、諸の相好を以て色を莊嚴したまふは、實に色相無きも衆に說く爲なり、是の故に如來は難思議なり。如來の正法は文字無し、文字を離れ已つて聲有ること無し、文字有ること無ければ說くべき無く、甚深寂靜にして覺有ること無し。佛の先に菩薩樹に在まし、覺りたまへる所の諸法の如きも亦是の如し、此の法は字無く音聲無く、亦造作無く說くべき無し。是の如く諸法は相貌無く、亦一切の相を遠離するを以ての故に、一切の諸法若し相無ければ、如來は云何がして演說したまへる。如來は大慈悲を具足したまふ、是の故に憐愍して利益を爲し、說法すべからざるを而も演說し、亦眞實の不可說なるを知りたまふ。如來は不可說を了知し、亦音聲の性空寂なるを知り、眞實に一切の義を了知したまふ、是の故に佛を眞實覺と名く。所說の法を世諦と名け、如來は眞實に之を覺知したまふ、世諦は不出にして性有ること無く、造作すべからず期有ること無し。眞實には色の相貌有ること無きも、衆の爲の故に種種の色を示し、法の無法なるを知りたまふ無上尊は、衆生の爲の故に演說したまふ。我れ初生の時天語を受けたり、是の故に默然として所說無きも、至心に法を念じ法を思惟したり、是の故に色と聲とを見さず。若し深法界に入るを得ば、爾の時は則ち色聲等無し、若し能く心業を遠離せば、卽ち口業を遠離するを得ん。言說有ること無きは卽ち是れ語、復言說すと雖も亦語無し、語は亦作に非ず亦說にも非ず、言語の本性は寂靜なるが故に。

『[七]我れ今至心に菩提を念じ、亦復至心に其の道を修す、我れ今是の無上の語を說く、亦當に定んで眞實の道を得べし。我れ心に菩提道を得ずんば、口及び口行も亦得ざらん、無上菩提は卽ち是れ空にして、其の性本來常に寂靜なり。菩提性の如く聲も亦爾り、法性を見ず取らざるが故に、我が聲は是の如く見るべからず、所求の菩提も亦是の如し。菩提の爲の故に修行有るも、是の行亦所至の處無し、是の行は是の如く至處無し、是の故に菩提の處は非處なり。六波羅蜜

【七】晋譯は、次に、無言童子の諸衆會に對する說話ありて後、この偈文あり。

の童兒を輕んずべからず。何を以ての故に、此の人卽ち是れ大菩薩なり、已に無量無邊の佛所に於て諸の善根を種え、菩提の道に於て退轉せず。是の兒生れる時、多く諸天有り、來つて之に誡勅すらく「善い哉、童子、當に正法を念じ正法を思惟すべし、世間の事を宣說するを得る無かれ、常に當に出世の義を頌宣すべし、常に當に口を守り言を愼み語を少くし、世事に於て諸の覺觀を起す莫れ、當に義に依りて、文字に依る莫るべし」と。舍利弗、是の如く童子は天の敎誨に從ふ、是の故に語無く默然思惟して[六]四禪を獲得したり。舍利弗、無言菩薩は是の如き身を示して、則ち能く無量の衆生を調伏す、是の故に默然として宣說する所無きなり。舍利弗、我れ今是の大集經典を說かば、無言菩薩は當に此の中に於て、能く無量の衆生を大利益すべし」と。

時に無言菩薩、已が願力と神通道力とを以て、諸天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽と、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷とをして、各自ら其の右手の中に大蓮華の、猶ほ車輪の如くにして、色香具足し、微妙第一にして人の樂見する所たり、一一の華臺に一菩薩有つて結跏趺坐し、三十二相八十種好もて其の身を莊嚴せる有るを見せしめたり。爾の時無言菩薩、是の如き等の大神通を現し已り、低頭合掌して是の如き言を作せり。『南無佛陀、南無佛陀』と。諸の蓮花臺中の一切の菩薩も、亦復是の如く同じく是の言を作す『南無佛陀、南無佛陀』と。是の言を發し已るに、十恒河沙等の世界の大地六種に震動し、虛空の諸天は妙香華と種種の伎樂とを以て佛を供養したり。爾の時無言、佛の神力と已が願力とを以て、諸の菩薩のために踊つて虛空の高さ七多羅樹なるに至り、正しく佛に向ひ偈を說いて言はく、

『如來は無色なるに色を示現し、亦復色に於て染著無し、若し衆生有つて佛法に入るも、云何が當に眞實の色を知るべき。色聚の中に如來有すに非ず、亦色を離れて如來有すにも非ず、如來は已に諸の色聚を離れたまふも、衆生を哀愍したまふ故に色を示すなり。如來は衆生を哀愍した

【六】四禪定の略、また四靜慮ともいふ。初、二、三、四の四禪定を修し色界の四禪天に生ず。初禪は八觸十功德あるを特色とし、二禪以上は之無し。四禪總體より云へば、十八支を以て分別す、初には覺・觀・喜・樂・一心の五支あり、二禪には內淨・喜・樂・一心の四支、三禪には捨・念・慧・樂・一心の五支あり。四禪には不苦不樂・捨・念・一心の四支あり。此の四は階梯をなすものにして、初禪の覺・觀を呵棄して、第二禪を、二禪の喜・受を呵棄して第三禪を、三禪の樂を呵棄して第四禪を得るなり。

巻の第十二

[一]無言菩薩品　第六

[二]爾の時世尊、故に欲・色二界中間の大寶坊中に在し、諸の大衆のために圍遶せられて説法したまふ。時に王舍城の師子將軍家に一子を産めり。其の生時に當り、虚空の中に多く諸天有りて是の如き言を作す『童子、當應に法を念じ法を思惟すべし。凡そ發する所の言は世事を説く莫かれ、常に當に出世の法を頒宣すべし。常に當に口を守り言を愼みて語を少くすべし。世事に於て諸の覺觀を起す莫れ。當に義に依つて文字に依る莫れ』と。爾の時童子、是の語を聞き已り、復[三]涕泣せず、嬰兒の相無く、乃至七日色貌和悦なり。人を見ては歡喜し、目未だ曾て眴かざりき。

是の時人有りて其の父母に語るらく『是の兒不祥なり、應に畜養すべからず、何を以ての故に、[四]瘖にして無聲なるが故に』。父母答へて言はく『是の兒復瘖にして聲を出ださずと雖も、然も其の身根具足して缺くる無し。當に知るべし、是の兒必ず福徳有るべし。是れ不祥薄福の人には非ず』と。因つて字を立てんが爲に、字を無言と曰へり。

時に無言童子、漸漸に長大して[五]八歳の兒の如く、所遊の方面には人の樂見する所なり。説法有り法輪を轉ずる處に隨ひ、樂んで往いて聽受するも、口に宣ぶる所無し。

爾の時無言童子、佛の神力を以て其の父母眷屬宗親のために寶坊の處に往き、到り已つて佛を見、心に歡喜を生じ、禮敬供養右遶三匝し、合掌して立ち、幷に十方の諸來菩薩を見て大喜心を生じたり。

爾の時舍利弗、佛に白して言はく『世尊、師子將軍所生の子は、身根具足して而も語る能はざるは、是れ何の惡業因緣の致す所なるや』。佛舍利弗に告げたまはく『汝今應に是の如き語を作して是

【一】西晋法護譯、無言童子經。
【二】晋譯巻上に、一時佛遊ニ羅閲祇耆闍崛山中一とす。
【三】晋譯によれば未だ曾て啼泣もせず、聲をも出さざりき。
【四】瘖。おしなり。
【五】晋譯によれば至于八歳とす。

貢上供養したり。

爾の時蓮華菩薩、佛に白して言はく『世尊、若し人有つて能く信順受持し、讀誦書寫して其の義を解說し、是の如き經を供養恭敬せば、幾所の福を得るや。』爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく『若し三千大千世界に滿つる七寶をば、十方の佛に奉施するも、如かず、是の經典を信順し、受持讀誦の福彼より多からんには。四法所成の諸の功德をば、佛は無量無邊の數なりと說く、菩提心を發して常に法施し、如法に住して悲を修集せよ。佛四法を說くこと無邊量なるに、智者聞き已つて怖畏せず、虛空の性ぞ衆生界なる、如來の正智は菩提心なり』。

是の如き等の法寶聚を說きたまふ時、十方所來の諸菩薩等、妙香花と種種の伎樂とを以て、佛を供養し尊重讚歎して是の如き言を作す『世尊、若し人有り、能く是の如き等の經を受持讀誦書寫解說せば、所得の功德は稱量すべからず、十方の諸佛說くも盡す能はず、何を以ての故に、世尊、衆生若し是の如き等の經を聞けば、阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる者有ること無し。是の故に此の經を大寶聚と名く[八五]』と。爾の時、一切の大衆人天、一切の聲聞及び阿難等、諸迦樓羅・乾闥婆等及び世間人など、經を聞きて歡喜し、信受奉行したり。[八六]

大方等大集經卷第十一

【八五】今此正法、是大法眼、是妙法印、是勝法幢、決擇諸法、分別諸法。

【八六】宋譯（卷第十八）終。

謬說せざるが爲の故に。八[八一]に其の授記を謬らざるを施すなり。世尊、我等も亦能く廣く是の法を宣す』と。

『善男子、我れ涅槃の後は是の如き等の天、當に正法を護るべし』と。海慧菩薩の言はく『世尊、如來正覺涅槃の後、若し信ずる者有らば、應に此の法を以て其の人に付囑し久住を得しむべし』と。

爾の時世尊、眉間の[八二]白毫より大光明を放ち、遍く三千大千世界を照し、如來の化身其の中に充滿し、三十二相・八十種好を具足莊嚴せること、數三千大千世界の、一切卉木の莖節枝葉の如くなり[八三]。是の諸の化佛同じく是の言を作す『十方諸佛と釋迦如來とは、同じく正法の久しく世に住せんことを願ふ。何を以ての故に、一切の惡魔眷屬有りと雖も、是の如き等の法を破壞する能はじ、大地は壞すべく、大海は[八四]焦すべく、須彌山王も碎きて塵の如くすべく、衆生の諸の心は合すべく、是の一の虛空は盡すべく、四大は轉ずべきも、諸佛の誓願は變易すべからず』と。

爾の時世尊、卽ち阿難に告げたまはく『汝當に是の如き等の經を受持して、讀誦廣說すべし』と。海慧菩薩の言はく『世尊、今此の會中に多く無量の諸大菩薩有るに、如來何に緣つて顧みて阿難に命じ、之を受持せしめたまへる』と。時に諸の大衆咸疑心有り――海慧と阿難と誰か念心多き――と。爾の時世尊、衆會の疑を知りて大迦葉に告げたまはく『三千大千世界の衆生の數多しと爲すや不や』。『甚だ多し世尊』。『迦葉、假使是の如き無量の衆生、悉く人身を得、常に如來に問ふも、如來の所說は窮盡すべからず、障礙有ること無し。善男子、天の雨を降らして障礙有ること無く、一切の衆流大海に歸集し、而も是の大海は無增無減なるが如し。海慧菩薩の受持すべき所の十方の佛法も亦復是の如くなり。迦葉、假使三千大千世界の所有衆生、總持を具足すること、阿難の如く等しきも、海慧の受持する所の法に比せんと欲すれば、百分千分百千萬分するも、その一に及ばず』と。是の語を說きたまへる時、百千の衆生阿耨多羅三藐三菩提心を發し、妙華香を以て海慧菩薩に

【八一】本文に施其不謬授記とあり。宋譯には加護得出離門、令其依法修證とす。

【八二】佛の眉間に白色の毫相あり、右に旋て宛轉す、之を放てば光ありと。宋譯には衆色の光を放つとあり。

【八三】宋譯によれば、三千大千世界中の、一切の藥草樹林砂石の類、その光觸を蒙つて、皆悉く如來の形像を變成すと。

【八四】宋譯には枯涸とす。

時に魔波旬佛に白して言はく『世尊、若し佛弟子の、能く是の如き神呪を讀誦して其の身清淨なる有らば、我れ當に擁護して魔業を作さざらしむべし。我れ海慧の神通力を以ての故に魔業を捨て、國土城邑村落の、是の法を說く處有るに隨つて、我れ當に化身して親しく往いて聽受すべし』と。佛の言はく『善哉善哉、波旬、汝若し能く是の如き心を得なば則ち魔業を壞し、亦當に是の如き等の法を獲得すべし。

『善男子、復當に至心に梵天の呪を聽くべし、所謂

『迷多伽隸　迦樓那伽隸　無經多迦隸　憂比叉伽隸　佛陀伽隸　曇摩伽隸　僧伽伽隸　蘇羯多毘闍耶　摩訶毘檀尼　毘獸提目爾　尼波隸陀耶　烏闍跋坻　烏闍嚴彌　捺檀尼　曇摩波坻吒跋尼　薩遮坻優波跋坻毘獸坻　莎折多優波舍彌　烏盧迦耶梵摩　毘盧迦耶梵摩

『若し具足して是の如き梵天の呪を受持せんと欲せば、當に梵行を行じ清淨に戒を持し、是の呪を讀誦して梵天を請召し、「梵天汝來つて是の如き大衆を擁護せよ」といひ、其をして至心に正法を樂聽し、三寶を念じ・正法輪を轉じ・法城を護持せしむべし。若し法師有つて能く諸根を調し。至心に身口意等を淨護し、戒・忍・精進・多聞を勤修し、菩提心を發し・四無量を修し、法座に昇つて是の如きの呪を誦せんに、是の呪を誦し已らば、梵天王等諸の眷屬と悉く來つて是の講法の所に集會せん』と。

爾の時梵王、佛に白して言はく『世尊、若し法師有つて是の呪を讀誦せんに、我れ初禪に在るも是の呪を聞き已らば、當に定の樂を捨てて其の所に往き、當に八法を施すべし。何等か八と爲す、一に念を施す、聞く所を持するが故に。二に慧を施す、深法を思惟するが故に。三に解を施す、深義を分別するが故に。四に樂說無礙を施す、疑心を壞せん爲の故に。(八〇) 五に辭無礙を施す、一切衆生の語を解せん爲の故に。六に無所畏を施す、衆の勝る無きが爲の故に。七に法の光明を施す。

【八〇】 宋譯には、五者加二護記說一、令二彼一切語言聲聞者皆喜一とし、次を六者加二護化度之法一、令三彼超二勝一切衆會一とす。

ば、即ち眷屬と法師の所に至り、擁護侍衞せん。若し是の法師[七七]所須の資生をば、我れ當に方便もて、其をして之を得、病苦を遠離して身に安樂を受けしめん。』

[七八]爾の時世尊、海慧菩薩に告げたまはく『善男子、汝今至心に帝釋の呪を聽け、所謂

『闍耶　闍耶末坻　阿跋坻　跋坻　摩拘隷　斯陀跋坻　輸泥　羶帝羯隷　檀提曇摩尼　多迦隷
叉耶叉耶目佉　阿跋帶那　涅伽帶那　莎坻　莎坻散提

『來れ[七九]憍尸迦、阿修羅は壞し諸天則ち勝てり、諸天勝ちたるが故に、佛法增長す。憍尸迦、安樂を受けんと欲せば當に正法を護るべしと。善男子、是を釋の呪と名く。善男子、若し法師有つて說法せんと欲する時、當に先づ洗浴して身を淨潔ならしめ、妙香華を持ち正東にして禮し、一心に十方諸佛を憶念し、慈心を普く一切衆生に及ぼし、然る後乃ち師子の法座に昇り、是の如き呪を誦して是の言を作せ「憍尸迦來れ、四天王來れ、諸の大衆の爲に障礙を除却し煩惱を消滅せよ」と。爾の時帝釋及び四天王、法師を念ずるが故に即便共に來る。是の故に大衆樂んで說法を聞くなり。

『善男子、汝今復十方の諸魔及び眷屬の呪を聽け、所謂
奢咩　奢摩跋坻　奢摩密帶　阿浮隷　摩羅欻坻　萅嚹隷　婆羅綈　迦由犁　坻祁跋坻　阿盧迦
尼　比舍荼尼　尼末坻　阿跋持　區區隷　伽羅薩尼　憂目企　奢蜜坻　波羅目企　槃檀那涅伽
熈坻　奢摩絁

『是の如き呪は、力能く一切の論師・一切の魔衆を繋縛す、是を佛印と名く、魔眷屬の怨を破壞すべからず。善男子、若し法師有り、是の如き等の呪を受持讀誦して師子座に昇り、諸佛を專念して慈を衆生に及ぼし、自ら己身に於て醫師の想を生じ、所說の法に於て良藥の想を生じ、聽法者に於て疾苦の想を生じ、如來所に於て善友の想を生じ、正法中に於て常恒の想を生じ、若し能く是の如くにして正法を說く時、其の處の四邊各一由旬には魔到る能はざるなり』

【七七】必要とする生活資料なり。

【七八】宋譯、卷第十八。

【七九】Kauśika の音寫、帝釋の姓なり。雜阿含四十によれば、釋提桓因(即ち帝釋)もと人たりし時、族姓を憍尸と云ひしによるとし、智度論五十六によれば、昔摩訶陀に婆羅門あり、名は摩訶、姓を憍尸迦とす。福德大智慧有り、知友三十三人、共に福德を修す。命終の後皆須彌山頂第二の天上に生れ、摩訶婆羅門は天主となり三十二人は輔臣たり。故に三十三天と名け又はその本姓によつて憍尸迦ともいふと。

波旬の言はく『舍利弗、我れ已に之を見、及び彼の土の清淨菩薩所住の處を見たり。』[七五]舍利弗の言はく『汝彼の土に於て魔業を作せるや不や』。『大德、我れ彼の土に至り、至心に無上菩提を勤求したり、何に緣つて復魔業を造作するを得ん。若し至心に菩提を求むる有る時、魔業を見ば、是の人則ち勤修精進を得ん』と。

此の界の大衆、爾波旬の還つて此に來至したるを見、六萬の衆生と十千の魔衆、同じく共に阿耨多羅三藐三菩提心を發して是の言を作す『願はくは我等輩の受くる所の身形も、彼の菩薩の身形の如くにして異る無からんを』と。

海慧菩薩の言はく『世尊、阿耨多羅三藐三菩提の爲には、多くの怨敵有り、善い哉世尊、護法の爲の故に神通を建立し、通力を以ての故に、是の經の、當に久しく世に住するを得べけんを』と。佛の言はく『善男子、我れ今所立の善願神通は、諸の衆生の爲に善根を種ゆるなり』と。

爾の時世尊、四天王に告げたまはく『汝等當に知るべし、若し我が弟子の、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、是の如き等の經を受持し讀誦し書寫し廣說せば、汝等四王當に深く護り助けて、欲樂の爲に放逸を作すなからしむべし。吾今出世して、放逸を壞し正法を護らんが爲の故に、呪を說いて曰ふ、所謂、

『[七六]三咩　三摩三咩　沫頓禰　婆羅跋堤陀禰　陀那跋堤　投彌陀那跋堤　阿婆散提　阿摩隷　毘摩隷　闍毘羅提　迦羅提　迦羅那　阿梨　阿羅跋堤　阿隷婆散提　涅伽旦尼　阿跋堤沫提　摩呼沫提　摩羅夷提　毘首提　毘首提跋堤　尼薩隷　莫窂泥

『善男子、是を四天王呪と名く。若し法師の、是の經を受持する有らば、當に是の呪を誦し、誦し已つて慈を修し、十方を緣念し、至心に四天王等を念ずべし。爾の時四王、當に其の夢を示し、或は自ら往きて護るべし』と。時に四天王、佛に白して言はく『世尊、我等四王、是の呪を聞き已ら

【七五】次の問答は宋譯に、舍利子言……不ㇾ應ㇾ復作ㇾ諸魔事業ㇾ。魔言、不也、尊者、若有ㇾ善住ㇾ深固心ㇾ者、諸菩薩衆乃能施ㇾ作諸魔事業ㇾ云云。

【七六】以下の四呪は宋譯と大に異る、對照しがたし。

く『我等願はくは樂うて彼の佛釋迦牟尼及び衆の菩薩を見んと欲す』と。彼の佛卽ち諸菩薩に告げて言はく『且く待つこと須臾なれ、自ら當に此の寶坊中に見るを得べし』と。諸菩薩等、復佛に白して言はく『世尊、我等は魔王波旬が、彼の世界に於て何の所作をか爲せるやを見んと欲す』と。
　爾の時世尊、此・彼界の衆生心を觀じ已り、海慧菩薩に告げて言はく『善男子、汝今當に此の佛の世界を以て彼の菩薩に示すべし』と。爾の時、海慧菩薩、卽ち十指より大光明を放つに、其の光卽ち十二恒河沙等の諸佛の世界を過ぎて、遍く彼の土を照すに、此の間の大衆悉く彼の土の佛及び菩薩と、魔王波旬の師子座に處りて大集經を說くを見たり。時に諸の菩薩、卽ち座より起ち、彼の如來に向ひ頭面もて敬禮し、種種の華を散じて以て供養せるに、散ずる所の諸華、彼の佛の上に當り變じて華臺と成る。彼の諸菩薩、是の華臺を見て卽ち佛に白して言はく『世尊、是の如き華臺は何處より來れる』と。佛の言はく『善男子、娑婆世界の諸の菩薩衆所散の供養たり。』諸菩薩の言はく『世尊、云何が我をして彼の土――娑婆世界を見るを得しむる。』佛の言はく『善男子、汝等今當に是の光を敬禮し、至心に念持せば、自ら當に彼の佛の世界を見るを得べし』と。
　時に彼の菩薩、佛所言の如く、光明を敬禮し至心に念持せるに、卽ち此娑婆世界を見るを得、見已つて卽ち起ち、釋迦牟尼佛を禮し、諸の香華を以て遙に之を供養したり。又三千大千世界の、淨水澄滿せること猶ほ大海の如く、彼に所散の華、此の世界の大寶坊中に至り、如來の上に當つて變じて寶蓋と成りぬ。
　時に魔波旬、彼の佛に白して言はく『世尊、我れ當に云何がして彼の世界に還るべき。』佛の言はく『善男子、若し還らんと欲せば應當に至心に海慧を念ずべし』と。時に魔波旬、至心に海慧菩薩を念じ、念じ已つて卽ち此の世界に還るを得たり。
　時に舍利弗、魔波旬を見て卽ち是の言を作す、『波旬、汝は彼の佛の世界を見るを得たるや不や』

じ、佛に白して言はく『世尊、唯願はくは大慈もて少しく救護を見したまへ。』佛言はく『波旬、我れ此の事に於て自在を得ず、汝當に海慧菩薩に歸向し求哀懺悔すべし』と。

時に魔波旬、卽ち海慧に向ひ、合掌して言はく『善男子、我れ今日より敢えて復是の如き魔業を作さじ、唯願はくは仁者、我が懺悔を聽したまへ』。海慧菩薩の言はく『我れ汝の所に於て都て瞋心無し、菩薩の法は常に應に一切衆生を忍辱すべきなり。波旬、汝彼に往き彼の佛を禮覲すべし、汝の身は當に無量の利益を得べし』と。

爾の時菩薩卽ち右手を以て[七一]其の頂上を摩し、是の如き言を作せり『若し諸の菩薩、諸法の中に於て貪悋無ければ、我が神通を以て、汝をして必ず彼の佛の世界に至らしめん』と。言ひ已るに波旬卽ち彼の土に至り、旣に彼の土に至つて佛を見、敬禮して一面に却住したり。[七二]彼の諸菩薩、佛に白して言はく『世尊、何等の國土にか是の如き等の不淨の人有つて此に來至したる』と。佛の言はく『善男子、西方十二恒河沙等の諸佛の世界を過ぎて彼に世界有り、名けて[七三]娑婆と曰ひ、佛を釋迦牟尼と號し、數量を過ぎたる諸菩薩等の爲に[七四]大集經を說きたまふ。彼に菩薩有り、名けて海慧と曰ふが、魔業を說ける時、是の魔四種の兵衆を莊嚴して會所に來至したるを、海慧菩薩は神通力を以て移して此に來至せしめたるなり。』

彼の世界中の諸の菩薩等、波旬に語つて言はく『善男子、汝今宜しく阿耨多羅三藐三菩提心を發し、魔業を遠離すべし、我れ當に汝と共に同學と爲らん』と。時に魔波旬、是の語を聞き已り、卽ち阿耨多羅三藐三菩提心を發しぬ。

時に諸の菩薩卽ち波旬を請じて師子座に昇らしめ、波旬に問ふて言はく『彼の如來、諸の大衆の爲に大集經を說きたまへるを承けたらんには、斯れ何の事か有る、唯仁之を說け』と。時に魔波旬、海慧菩薩の神通力を以ての故に、所聞を宣說して乃至一句一字を失せず。彼の諸菩薩卽ち佛に白さ

【七一】魔の頂なり。
【七二】宋譯には、有二一菩薩一名二降伏魔一と。
【七三】Sahā の音寫、忍土と譯す。
【七四】宋譯に、廣大宣二說大集會正法一とす。

業を壞すと名く。(8)一切の法性は是れ平等なりと觀じ、三乘を說くと雖も大乘を捨てざる、是を菩薩能く魔業を壞すと名く。(9)[六五]若し心・意・識等に貪著せず、亦能く一切の因緣を遠離し、諸の衆生をして解脫を得しめんが爲の故に法莊嚴を修し、諸行を過ぐと雖も終に菩薩の所行を捨離せざる、是を菩薩能く魔業を壞すと名くるなり』と。

[六六]是の法を說きたまへる時、天魔[六七]波旬、[六八]四兵を莊嚴して寶坊に來趣したること、先に菩提樹に趣向したる時の如くなりき。如來見已つて海慧に告げて言はく『汝は魔業を說き我は壞魔を說く、是の因緣を以て魔王波旬は四兵を莊嚴して此に來至す、何の計を設け以て之を當禦せんと欲するや。』海慧菩薩の言はく『世尊、我れ今魔王波旬及び其の眷屬を持つて[六九]莊嚴國に置き、我が身は當に魔所住の處に住すべし』と。

爾の時舍利弗の言はく『善男子、莊嚴世界は此を去ること遠きや近きや、佛を何等と號しまつるや』『舍利弗、此の東方十二恒河沙等の世界を過ぎて世界在り、其の土に佛有して[七〇]破疑淨光と號し今現に世に在して諸の菩薩の爲に淨菩薩行を說きたまふ。彼の國の三千大千世界に一億の魔有り、一一の魔王に十千億人の兵眷屬有り。其の佛初めて菩提樹に坐したまへる時、是の如きの諸魔悉く共に莊嚴して菩薩の所に至りぬ。爾の時菩薩、先づ諸の魔の爲に正典を講宣し、其をして不退轉地に住するを得しめ、然る後乃ち阿耨多羅三藐三菩提を成じ、正法輪を轉じたまへり。彼の佛世尊は、其の大弟子及び侍使の者も亦悉く是れ魔たり。是の如き等の魔、悉く能く衆生を敎化調伏したり。是の故に我れ今魔波旬を取つて彼の土に安置せん、其の行ずる所の魔業を壞し、如來の無上正法を莊嚴せんと欲するが爲なり。』

時に魔波旬、是の語を聞き已つて心に恐怖を生じ、四望顧視して退處を求めんと欲するも、四方障礙して意に從ふを得ず。復身を滅せんと欲したるも亦得る能はず、方計立たずして倍復懅を生

【六五】 宋譯の第十破魔業とは若菩薩心意識、雖レ無レ所ニ依著一、而常不レ忘ニ失大菩提心一。雖レ斷ニ諸發起一、然不レ捨ニ離解ニ脫一切衆生之心一。雖レ超ニ越諸行一、而亦成ニ辦菩提勝行一とす。

【六六】 宋譯、卷第十七

【六七】 波旬は Pāpīyas or Pāpīman の轉訛なり、慧琳音義、八、に依れば、もと波卑椽とせるも、略して波旬(ケン)とせるを、旬と誤りしなりと。

【六八】 四種の兵、卽ち象兵、馬兵、車兵、歩兵なり。

【六九】 宋譯は魔衆を他方の諸樂莊嚴世界中に置くことをのみ述べ、自ら魔所住の處に住すことを云はず。

【七〇】 宋譯に摧魔如來とあり。

深きが故に一切の諸流悉く共に之に歸するが如し。菩薩の慢を壞する、亦復是の如く、漸漸に一切の善法を増長す。菩薩若し憍慢を壞せざれば是を魔業と名く。

(13)世尊、譬へば人有り、高原陸地に瞻波樹[六二]を種うるに、水の常に行く處は復坻塘[六三]を作すも、地既に高燥なれば又水を得ず、漸漸に枯黄して増長する能はざるが如し。菩薩摩訶薩亦復是の如し、憍慢増すが故に善友に親しまず、正法を聞かず、聞くと雖も復失ふなり。復次に世尊、菩薩摩訶薩は身色具足し端正自在にして、眷屬と福德の莊嚴有ること多きも、未だ智慧の莊嚴を具足する能はず、是の因緣を以て憍慢を生じ、憍慢を以ての故に、若し菩薩の、智莊嚴を具し正法を思惟するも、身體羸瘠する有らんに、見已つて輕慢し供養する能はず。是の因緣を以て復憍慢・無明・放逸を増して魔業を調せず、是の如きの菩薩は色の爲に慢を生ず、是を魔業と名くるなり。

爾の時世尊、海慧菩薩に告げて言はく『善い哉・善い哉、善男子、善能く魔業を分別宣說したり。善男子、至心に諦聽せよ、吾今當に魔業を壞するの道を說くべし。善男子、(1)一切の諸法は其の性空寂なり、若し諸法の其性空なるを知り已らば、亦一切衆生の皆空をも知らん。既に空を知り已つて慈心を修し自身を調伏する、是を菩薩魔業を破すとは名く。(2)若し諸法の性是れ無相なりと觀じ、衆生の爲に慈心を修集せば、是を菩薩魔業を破壞すと名く。(3)若し諸法の性是れ無願なりと觀じ、諸の衆生の爲に至心に有を求め、既に有を求め已り、隨つて調伏する、是を菩薩能く魔業を壞すと名く。(4)一切の法性は是れ無貪、衆生の性も亦復無貪なりと觀じ、貪を調伏せん爲に之を攝取せば、是を菩薩能く魔業を壞すと名く。(5)若し諸法の性是れ無恚、衆生の性も亦復無恚なりと觀じ、恚を調伏せんが爲に之を攝取せば、是を菩薩能く魔業を壞すと名く。(6)若し[六四]諸法の性是れ無癡、衆生の性も亦復無癡なりと觀じ、癡を調伏せんが爲に之を攝取せば、是を菩薩能く魔業を壞すと名く。(7)諸法の性は無生無滅なりと觀じ、生滅を壞するが故に正法を宣說せば、是を菩薩能く魔

【六二】Campaka の音寫、金色花樹と譯す。其の花香氣あり、遠く薰ずといふ。

【六三】坻は小さき洲、塘はつゝみなり。

【六四】以下宋譯は十種破魔法門の中の第七、八、九、十、として揭ぐ。註六十一參照。

して之を調伏せず、衆生の上中下の根を知らざる、是を魔業と名くるなり。
「(7)復次に世尊、菩薩若し空閑の寂靜を樂み、寂靜を樂み已つて寂靜の樂を受け、法を聽き・法を說き・疑を問ふを樂まず、寂靜を以ての故に煩惱起らず、不起を以ての故に知想を知らず・離想を離れず・證想を證せず・修想を修せず・實義を得ざる、是を魔業と名く。(8)復次に世尊、菩薩若しは多聞と好語・樂語・微妙の語・軟語・喜語を修集する有り、若しは衣食・臥具・利養の爲に法を演說し、若しは信解有つて能く至心に聽くも說くことを爲さざる有り、若しは放逸にして供養を致す者有らば便ち爲に之を說き、說を爲すべき者には說を爲さず、說くべからざる者には反つて爲に之を說く、是を魔業と名く。(9)復次に世尊、若し菩薩有り、說法の時深義を祕藏せんに、諸天・人の他心智を得る有り、これを知り已つて悅ばず、卽ち是の念を作す「我れ如來眞正の法の爲に來り、世間淺近の語の爲に來らず、是の人如來の正法を毀たんと欲するも增長する能はじ。若し人の佛の正法を毀つ者有らば、我れ見聞するを樂まず」とて、其の所說をば卽便捨てて去る、是を魔業と名く。(10)復次に世尊、若し菩薩有り、惡知識に於て善友の想を作さんに、惡知識は四攝を以て衆生を攝取せず、多聞を修せず、衆生を化せず、出の法を說かずして樂んで世語を說き、法を知らず、時を知らず、義を知らず、是を魔業と名く。(11)復次に世尊、惡知識は聲聞・緣覺・菩薩・佛の法を開示・分別・解說する能はず、衆生を化して慈悲を修し・八難を遠離し・施と戒とを修行せしめず、柔輭語もて語り、平等に親近し忍を敎ふるに無力にて、說いて「佛道甚だ得難しと爲す、無量世中に勤苦して乃ち獲」と云ふ、是を惡友と名け、名けて魔業と爲す。(12)復次に世尊、菩薩若し憍慢の心有り、憍慢を以ての故に佛・法・衆僧・師長・和上・父母・長宿・同學・同師を供養する能はず、若し已に勝るを見るも親近して法を聽き・疑を問ふ能はず、是の故に聞くと雖も聞き已れば便ち失ふ。己に下る者を見ては親近愛念す。是の故に惡法は漸漸に增長す、惡法增すが故に善法を遠離す。世尊、譬へば大海の漸漸に

法に住すと名く』と。

海慧菩薩の言はく『世尊、若し惡知識に親近する有らば如法の住に非ず、聖法を修せざるは如法の住に非ず。若し惡友に近づけば則ち魔業を行じ魔處に墮す。世尊、若し一切の魔業と諸の魔の行處と諸の惡法を離れんと欲せば、當に善友に近づくべきなり』と。

佛の言はく『善男子。汝今眞に魔の業行を知るや不や』と。『已に知る、世尊』。『善男子、汝今當に無量の菩薩大衆の爲に說くべし』と。『世尊、夫れ魔業は卽ち是れ眼と色となり、若し人色を見れば貪著の心を生ずる、卽ち是れ魔業なり。乃至意と法とも亦復是の如し、(1)復次に世尊、菩薩の檀波羅蜜を修行する時、不愛の物を持用て惠施し、所愛の財貨は貪悋して捨せず、愛すれば則ち施し恚れば與へず、受者及び財物を分別す、若し是の如き二を分別する有らば是を魔業と名く。(2)復次に世尊、菩薩の尸波羅蜜を修行する時、禁戒を護持して持戒の者に近づくも、己身を讃歎して破戒を毀呰する、是を魔業と名く。(3)復次に世尊、菩薩の忍波羅蜜を修行する時、大力の者に於て能く忍辱を生じ、少力の者に於て忍を生ずる能はず、大力の者を見ては輭語もて謙下し、小力の者を見ては麁語もて輕蔑する、是を魔業と名く。(4)復次に世尊、菩薩の進波羅蜜を修行する時、聲聞乘を說き緣覺乘を說き菩薩乘を說き、菩提を修するの時、聲聞・辟支佛乘を輕慢して口に宣說せず、世行を樂みて三寶を供養恭敬するを樂まず――所謂華香幡蓋伎樂をば尊重讃歎し、多聞を求めず、多聞の者を見ては親近する能はざる、是を魔業と名く。[六二] (5)復次に世尊、菩薩の禪波羅蜜を修行するの時、禪定を獲得するも一切の衆生を調伏する能はず、心に悔厭を生じ禪樂に貪著し、說法者を呵して講論を樂まず、寂靜を讃歎して禪味に貪著し、二界の愛と無色の身とを呵毀し、壽命極長なるも諸佛を見ず、正法を聞かずして善友を遠離し、方便の受と捨とを知らずして捨のみを修する、是を魔業と名く。(6)復次に世尊、菩薩の般若波羅蜜を修行する時、因果を知るも、四攝を以て衆生を攝取

【六二】宋譯は此の節に十二の魔事を說くことを明示しつゝも、以下梵本脫落の爲に補ひ得ざるを付言して、直に第六破魔法門に及び、その中間を缺く。卽ち下二四二頁の第六までを脫す。

[五一]淨進菩薩の言はく『世尊、若し念言を作して「我れ當に法を得べし」といひ、是の得法の爲に勤行精進するも、是の如き精進は是れ不精進なり。若し能く諸法の不定を觀察し、是の不定を以て精進を勤修するを如法に住すと名く』と。

[五二]過三惡道菩薩の言はく『世尊、一切諸法は作無く變無く覺無く觀無し。覺觀無きをば名けて心性と爲す、若し衆生の心性本淨なるを見れば如法の住と名く』と。

[五三]不可思惟菩薩の言はく『世尊、諸衆生の一切の心性は心想を作さざるを見るを、不可思惟にして而も思惟すと名く。若し能く是の不思惟の中に於て思惟せば如法に住すと名く』と。

[五四]樂寂菩薩の言はく『世尊、若し菩薩有り、諸の心界を淨むれば、是れ則ち能く一切の諸漏を離る。若し能く一切の漏を遠離せば是を正行と名け、若し正行ならば如法の住と名く』と。

[五五]商主菩薩の言はく『世尊、菩薩若し清淨の善法有り、福德莊嚴・智慧莊嚴の二莊嚴の、平等無二を觀じ、行德等しきを以て智慧の等しきを觀じ、智慧等しきを以て功德等しきを觀じ、差別無ければ如法の住と名く』と。

[五六]維摩詰(ゆいまきつ)菩薩の言はく『世尊、二を觀ぜざるを如法に住すと名く。若し法界に於て[五七]不壞不別なるを如法に住すと名く』と。

[五八]依義菩薩の言はく『世尊、若し菩薩有り、正義に依つて字に依らず、正義の爲の故に八萬四千の法聚を受持・讀誦・廣說して、失無く動無ければ如法に住すと名く』と。

[五九]淨意菩薩の言はく『世尊、若し菩薩有り、菩提心を發し、至心に是の菩提心を擁護し、菩提を修する時諸の法性を知る。夫れ法性は處に非ず非處に非ざるを如法に住すと名く』と。

[六〇]畢竟淨意菩薩の言はく『世尊、若し菩薩有り、垢穢を遠離すること垢を浣去(くわんこ)するが如くにして、能く煩惱をして其の心を汙さざらしむるを畢竟淨と名け、其の心淨まり已つて菩提の行に隨ふを如

【五一】宋譯に勤精進とあり。

【五二】宋譯に滅惡趣とあり、若有₂種類₁分₂別所行₁、何名₂修行₁云云と。

【五三】宋譯に善思而思とあり。

【五四】宋譯に寂意菩薩とあり。

【五五】宋譯に導師とあり。

【五六】宋譯に嬉戲王とあり。

【五七】同に即無₂有₂少法若離若合₁云云と。

【五八】宋譯に善思義とあり。

【五九】宋譯に清淨意とあり。

【六〇】宋譯に畢竟無垢思惟とあり。

[四四]燃燈菩薩の言はく『世尊、貪心有ること無きをば如法に住すと名く。云何が貪心なる、謂はく、法の中に於て損する有り益する有るなり。若し貪心無ければ名けて如法に住すと名く』と。

[四五]日子菩薩の言はく『世尊、若し菩薩有りて著する所有らば是を名けて動と爲す、若し法の中に於て心に所著無ければ是を無動と名く 若し動有ること無ければ名けて如法に住すと名く』と。

[四六]勇健菩薩の言はく『世尊、一切の世間は皆心の行に隨ふ、若し心行を知れば名けて如法の住と名く』と。

[四七]樂見菩薩の言はく『世尊、佛所說の如く受に因つて苦を受く、若し能く諸の受を受けざれば則ち斷なり、若し能く諸取を取らざれば則ち斷なり、取を受けずと雖も衆生を捨てざるを如法に住すと名く』と。

香像王菩薩の言はく『世尊、一切の衆生は悉く重擔有り、所謂五陰なり、若し能く五陰の眞實を知り、陰の見を壞せんが爲に重擔を棄捐する有らば、諸法に於ても亦擔の想無きを、如法に住すと名く』と。

持世菩薩の言はく『世尊、若し世間を行ぜば如法の住に非ず、若し正しく莊嚴するを如法の住と名く。正しく莊嚴するとは、一切の法等しく虛空の如しと見るなり』と。

[四八]堅意菩薩の言はく『世尊、若し菩薩有り、生に生ぜず滅に滅せず、亦復生滅の性を見ざるを如法に住すと名く』と。

[四九]光明遍照高貴德王菩薩の言はく『若し能く眞實の涅槃を知見し、法は是れ滅及び無生滅、一切衆生悉く佛性有りと見、菩提に趣くが爲に莊嚴を修するを如法の住と名く』と。

[五〇]光無礙菩薩の言はく『世尊、若し行處有れば卽ち是れ魔業にして如法の住に非ず、若し行處無ければ則ち魔業を壞す、若し魔業を壞せば如法の住とは名く』と。

【四四】宋譯に高炬王とし、その言を無二所樂一是爲二修行一無二所厭一是爲二修行一云云とす。
【四五】宋譯に日藏といふ。
【四六】宋譯に勇猛心といふ。
【四七】宋譯に樂見といふ。
【四八】宋譯に堅固意とあり。
【四九】宋譯に吉祥峯王といふ。
【五〇】宋譯に無礙光とし、若有二所行之跡一是爲二魔業一云云と。

の善法を修集せば是を菩薩如說に作すと名く。

『善男子、能く莊嚴せば名けて如說と爲し、能く畢竟せば名けて如作と爲し、能く發心せば名けて如說と爲し、果證を得ば名けて如作と爲し、能く心を淨めば名けて如說と爲し、能く至心ならば名けて如作と爲し、能く發心せば名けて如說と爲し、不退心ならば名けて如作と爲し、至心に聽法せば名けて如說と爲し、聞き已つて如住ならば名けて如作と爲し、能く口を淨むるを名けて如說と爲し、能く身を淨むれば名けて如作と爲し、初めて戒を受くれば名けて如說と爲し、至心に護持せば名けて如作と爲し、菩提心を發せば名けて如說と爲し、菩薩道を行ぜば是を如作と名け、忍地に住するを得ば名けて如說と爲し、不退地に住するを名けて如作と爲し、一生の身を得るを名けて如說と爲し、後邊身を得るを名けて如作と爲し、菩提樹に趣くを名けて如說と爲し、菩提の果を得るを名けて如作と爲す。善男子、是を菩薩如法に說き如說に作すとは名くるなり。』是の法を說きたまふ時、五百の菩薩無生忍地に住したり。

爾の時、會中に一菩薩有り、名けて[四一]蓮華と曰へるが、佛に白して言はく『世尊、佛所說の如き如說如作は不可思議なり、佛所住の如きは卽ち是れ如說、卽ち是れ如作なり。』『善男子、汝是の事を能く了知せるや不や』『已に知る、世尊、若し正法是れ眞實なりと知らば如法に住すと名くるなり』と。

山王菩薩の言はく[四二]『世尊、無所住の法をば如法の住と名く。何を以ての故に、一切の法を見るに覺有ること無きが故に。覺無きを以ての故に一法を見ざる、之を名けて覺と爲す。若し一法無ければ云何が住する有らん。若し是の如く見なば如法に住すと名く』と。

[四三]福德王菩薩の言はく『世尊、若し心に隨はば如法の住に非ず、若し菩薩有り、意は幻の如しと觀ぜば名けて無住と爲す。若し住する無ければ如法に住すと名く』と。

【四一】宋に蓮花莊嚴とし、說相やゝ異る。

【四二】宋譯に無レ所レ修、是修行……若有レ所レ修、而非二修行一、此卽是爲二正修行一とす。

【四三】宋譯には功德光照王といひ、その言を心若隨流、乃識有レ所レ轉、何名二修行一云云と。

「我れ能く飛行して虛空に遊び、已に汝の界を過ぎて心に畏無し、若し必ず是の二子を護らんとならば、我が爲の故に應に是の身を捨つべし」と。

『師子王の言はく

「我れ今是の二子を護らんが爲に、身を捨てて惜まざること枯草の如し、若し我れ身を護つて妄語せば、云何ぞ如說に行ずと稱するを得んや」

『是の偈を說き已り、卽ち高處に至つて其の身を捨てんと欲したり。爾の時鷲王、復偈を說いて言はく

「若し他の爲の故に身命を捨てなば、是の人卽ち無上の樂を受けん、我れ今汝に獼猴子を施す、願はくは大法王、自害する莫かれ」と。

『善男子、この時の師子王は卽ち我が身是なり、雄獼猴は卽ち迦葉是なり、雌獼猴は[三七]善護比丘尼是なり、二獼猴子は卽ち今の阿難と[三八]羅睺羅是なり、この時の[三九]鷲王は卽ち舍利弗是なり。善男子、菩薩は是の依止を護らんが爲には身命を惜まざるなり。

『善男子、云何が名けて如說に作すとはなす。菩薩若し「我れ當に惠施すべし」と言ひて卽便大施せば、是を菩薩[四〇]如說に作すと名く。菩薩若し「我れ能く戒を持せん」と言ひ、卽ち一切を化し已が護戒に同じからしめば、是を菩薩如說に作すと名く。菩薩若し「我れ忍辱を修せん」と言ひ、卽ち衆生を化して同じく忍辱を修せしめば、是を菩薩如說に作すとは名く。菩薩若し「我れ精進を勤め佛法の爲にせん」と言ひ、卽ち衆生を化して同じく精進を修し、佛法の爲にせしむれば、是を菩薩如說に作すと名く。菩薩若し「我れ禪定を修せん」と言ひ、卽ち衆生を化し、亂心を除去して禪定を修集する、是を菩薩如說に作すと名く。菩薩若し「我れ智慧を修せんと言ひ、如法に分別せば是を菩薩如說に作すと名く。善男子、菩薩若し「我れ當に一切の惡法を壞破すべし」と言ひ、卽便一切

【三七】宋譯は賢護苾芻尼とす。
【三八】Rāhula の音寫、佛の嫡子なり、十五歲にして舍利弗を和上として沙彌となり、遂に阿羅漢果を證す、佛十大弟子中、密行第一とせらる。
【三九】宋譯は鷲王者、善愛苾芻是とす。
【四〇】宋譯に能行といふ。

の具を設けず、賓客既に至れば方に云ふ、「未だ辨ぜず」と。是に於て賓客各是の言を作す、「昨王の請を受けたるに家に食を設けず、今赴くに王の信復得る處無し」とて、呵責・愁恚・怨歎・啼泣するが如し。善男子、菩薩摩訶薩の諸衆生を請じ、許すに法食を以てするも、多聞・持戒・精進を求めず、三十七助道の法を修せずんば、衆生呵責し人天涕泣せん。善男子、菩薩摩訶薩若し能く作す如くに應じて作す如く說かば、應に一切衆生を欺誑すべからず。

『復次に善男子、復衆生有りて、菩薩の我が爲に說法せんことを請求せんに、菩薩許して言はく「當に汝の爲に說いて放逸を許すべし」と。衆生既に菩薩の放逸なるを見、即便勸喩せん、既に勸喩し已り、方に說法を爲さんに、說く時或は甚深の義を問ふも、放逸を以ての故に答ふる能はず、答ふる能はざるが故に心に慚愧を生じ、身心を護り、衆生を誑きて便ち捨離せん。善男子、菩薩若し如說に住せんと欲せば、身心を惜むこと無く、以て衆生を護るべし。

『善男子、過去世に[三五]一師子王有つて深山の窟に住し、常に是の念を作す「我は是れ一切獸中の王たり、力能く一切の諸獸を視護す」と。時に彼の山中に二獼猴有り、[三六]共に二子を生ず、時に獼猴、師子王に向つて是の如き言を作す「王若し能く一切の獸を護らば、我が今の二子、以て相委付せん。我れ餘に行きて飲食を求覓せんと欲す」と。時に師子王。即便許可す。是に彼の獼猴、其の二子を留め、彼の獸王に付して即ち捨てて行けり。是の時山中に一鷲王有つて利見と名けたり。師子王眠りしかば、即便獼猴の二子を搏取し、嶮に處して住す。時に王寤め已つて即ち鷲王に向ひ、偈を說いて言はく、

「我れ今大鷲王に啓請す、唯願はくは至心に我が語を受けよ、幸に見ん、爲に故に之を放捨して、信を失し慚耻を生ぜしむる莫からんを」と。

『鷲王偈を說き師子王に報ずらく

【三五】宋譯によれば不壞身と名く。
【三六】同に雄雌共居後生二子と。

已り、轉じて以て一切の男女眷屬臣民を敎化す。時に彼の國中に九萬九千億の衆生有り、悉く共に出家したり。

『善男子、淨聲比丘旣に出家し已り、復佛に白して言はく「世尊、我れ今云何が出家と名くるを得る」。佛の言はく「比丘、汝を淨聲と名く、當に自界を淨むべし。自界旣に淨なれば、則ち比丘と名け、則ち出家と名く」と。爾の時比丘、佛說を聞き已り、心に寂靜を樂みて是の思惟を作す――界は卽ち眼もて觀ず、眼若し空なれば卽是れ淨界、夫れ淨界は卽ち是れ佛土なり。耳・鼻・舌・身も亦復是の如し。意は卽ち界、若し意の空を觀ぜば卽ち是れ淨界、夫れ淨界は卽ち是れ佛土、卽ち是れ一界、卽ち是れ空界、卽ち衆生界、卽ち無相界、卽ち無願界、卽ち無作界、卽ち無爲界なり――と。善男子、淨聲比丘は是の如く觀じ已り、卽時に身の輕と心の輕とを獲得し、身心輕し已つて無量の神通を得、神通を得已つて[三二]樂說無礙陀羅尼門を得たり。善男子、汝知れ、爾の時の淨聲比丘は豈異人ならんや、卽ち汝の身是なり、男女眷屬は卽ち汝將來せる所の菩薩聽法の衆是なり』是の[三三]伊帝曰多伽を說ける時、萬八千人は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、八千の衆生は無生忍を得たり。

[三四]『善男子、若し阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲する有らば、當に如法に說き如法に住すべし。云何が名けて、如法に說き如法に住すと爲すとならば、善男子、若し人有りて、「我當に作佛して諸の衆生を請じ、許すに法味を以てすべし」と言ひ、請じ已つて微妙の經典を受持讀誦分別解說する能はず、淸淨の禁戒を護持する能はず、勤めて精進を修するも知足を修せず、善法中に於て知足を得る少き、是を欺誑と名く、これ如法に說かず、如說に住せざるなり。若し人有つて、「我當に作佛して諸の衆生を請じ、許すに法味を以てすべし」と言ひ、請じ已つて受持・讀誦・演說し、禁戒を護持し、勤めて精進を修し、少欲知足にして多く善法を得、足の想を生ぜざる、是を不誑と名く、これ法の如くに說き、說の如くに住するなり。善男子、譬へば國王の多く賓客を請じ、請じ已つて供賓

【三二】宋譯に「得レ入ニ總攝一切言義陀羅尼門一」とす。

【三三】Itivṛtaka の音寫、本事と譯す。佛弟子の過去世の因緣を說ける經文なり。

【三四】宋譯、卷第十六。佛の海慧菩薩に對する說法の續きなり。

らしむる爲なり。是を名けて四と爲す。大王、復四法有り、甚深の法を聞きて心に怖畏せず。何等か四と爲す、一に善友に親近し、二に善友爲に甚深の佛法を說き、[二八]三に善能思惟し　四に如法に住するなり。是を名けて四と爲す。大王、復四法有りて菩薩の名を得。何等を四と爲す、一に波羅蜜を求め、二に諸の衆生の爲に悲心を修集し、三に佛法を樂求し、四に衆生を化する時、心に厭悔せざるなり。是を名けて四と爲す」と。

『善男子、時に淨聲王、彼の如來より是の法を聞き已り、及び諸の眷屬、一切皆無生法忍を得、其の國土を捨て、佛法中に於て出家修道したり。

『爾の時世尊、彼の王に告げて言はく「大王、汝今出家せるは卽ち是れ佛に報ぜるなり、若し能く是の如く信を生じて捨離せば、[二九]是を大報と名け、是を功德と名け、利益する所多し。大王、菩薩出家せば[三〇]二十四の利益の事有り、何等をか二十四と爲す、一に世事を捨てて大自在を得、二に煩惱を捨てて解脫を獲得す、三に身には染衣を服して無染の道を得、四に四事を具足して四聖種を得、五に[三一]頭陀を樂みて一切の大欲・惡欲を遠離す、六に戒聚を捨せずして人天の樂を受く、七に菩提を捨せずして佛法を獲得す、八に常に寂靜を樂んで世の談語を離る、九に法に著せざるが故に大淨心を得、十に禪支を具足す、禪定を得るが故に、十一に多聞を求む、智慧を得るが故に、十二に憍慢を破壞す、智慧を得るが故に、十三に邪見を破除す、正見を得るが故に、十四に覺觀を生ぜず、眞實に諸の法界を知るが爲の故に、十五に等しく衆生を觀ず、大慈を得るが故に、十六に諸の衆生を化して心に疲倦無し、大悲を得るが故に、十七に身命を惜まず、護法の爲の故に、十八に其の心を寂靜にす、神通を得んが爲の故に、十九に如來を念ず、佛を見んが爲の故に、二十に善思惟を修す、十二緣の深智慧を得んが爲の故に、二十一に順忍を得、二十二に無生忍を得、二十三に一切の功德を信じ、二十四に佛の智慧を得、是を二十四と名く」と。善男子、爾の時聖王、是の法を聞き

【二八】次の三と四とは、宋譯に、於二如是等甚深經典一乃至多百由旬、亦往聽受、決二擇其義一と、如二所聞法一記レ慧推求、但依二於義一不レ依二於文一とす。

【二九】宋譯に有二大威力一、得二大稱讚一と。

【三〇】宋譯、二十を數ふ。本經の十四、十五、二十、二十一、二十四を缺き、第十三に、少求少事故得二決擇聖法大利一を加ふ。

【三一】Dhūta の音寫、抖擻、洮汰など譯す。衣食住の貪をはらふ行法、修行と同義なり。

右遶恭敬し、長跪合掌して佛に白して言はく「世尊、云何が菩薩、大乘を修行して他語に隨はざる。云何が菩薩、畢竟に生得する。云何が菩薩、無所住を得、云何が菩薩、無動慧を得、云何が菩薩、清淨慧を得、云何が菩薩の力、能く遠見し、云何が菩薩、諸根猛利なる、云何が菩薩、佛土を具足し、云何が菩薩、不放逸を行じ、云何が菩薩、深甚の法を聞きて心に怖畏せざる、云何が菩薩、菩薩と名くるを得るや」と。

『佛の言はく「大王、四事の法有り、大乘を修行して他の語に隨はず。何等か四と爲す。一に聖行を具足して世界より出で、二に智慧を具足して諸の法性を觀じ、三に諸の神通を具し、四に[21]淨精進を修して爲に衆生を化するなり。大王、菩薩は是の如き四法を具足して、大乘を修行し、他の語に隨はざるなり。復四法有り[22]畢竟に生得す。何等をか四と爲す、一に善法を知つて、爲に心に調伏し、二に已が樂を貪らず、三に諸衆生の爲に慈悲を修集し、四に常に大乘を樂むなり。是を名けて四と爲す。大王、復四法有りて、[23]無所住を得。何等をか四と爲す。一に心を淨め、二に莊嚴を淨め、三に虚誑を離れ、四に堅慧を修して、爲に福德を具するなり。是を四法と名く。大王、復四法有りて淨智慧を得。何等か四と爲す、一に淨眼、二に四攝の法を以て衆生を攝取し、三に淨身の三十二相・八十種好、四に淨佛と淨法界を觀ずるなり。是を名て四と爲す。大王、復四法有り、能く[24]遠見するを得て諸根猛利なり。何等をか四と爲す。一に菩提樹を念じて菩提心を捨せず、二に佛の智慧を念じて亦智に著せず、三に[25]法身を念じて空・無相・無願を修集し、四に佛の涅槃を念じ、生死中に於て心に厭悔無きなり。是を名けて四と爲す。大王、復四法有り、[26]佛土を具足し不放逸を行ず。何等か四と爲す。一に帝釋の身を受くるは、諸天を化して不放逸ならしむる爲なり、二に梵天の身を受くるは、諸梵を化して不放逸ならしむる爲なり、三に轉輪王身を受くるは、衆生を化して不放逸ならしむる爲なり、[27]四に大臣・長者の身を受けて珍寶を具足するは、衆生を化して不放逸な

【二一】宋譯はむしろ之を第二に攝し、第四として「智隨ニ知法一故、於ニ一切法一起ニ決擇相一」とす。

【二二】宋譯によれば、此の四法を具足せば最勝道に趣向して我相を生ぜずとし、その第四をば、單に得廣大信解とす。

【二三】宋譯に得ニ善住ニ無動無不動慧一とし、四法に出入あり。次の四法も亦然り。

【二四】宋譯に得ニ久遠觀ニ察根本不斷一と。

【二五】宋譯に善ニ觀レ轉妙法輪一、隨ニ所聞法一皆能爲說、不ニ懈倦一故とす。

【二六】同に於ニ六塵境界一、雖ニ復增長一而無ニ放逸一と。

【二七】宋譯相當文には現作ニ魔王一化ニ諸魔衆一云云とす。

つて親見し、其の所に至り已り、種種の華を以て之を供養したるに、華空中に處する高さ[一三]七多羅樹なりき。かれ佛道を成じ已つて大光明を放ち、遍く十方を照すに、十方世界に多く諸天有り、佛の光を見已つて各是の言を作す「無邊光佛は眞實に出世したまひぬ」と。彼の佛の世界の莊嚴麗飾なること、彼の[一四]他化自在天宮の如くなりき。彼の劫の初時に十千年を過ぎ、佛有つて出世し、號して光味と曰へり。是の故に此劫を名けて光味と曰ふなり。

『善男子、光味劫中に十四億の諸佛如來有つて世に出現し、其の佛の世界に九萬六千の小國有り、一一の國土縱廣八萬四千由旬、一一の國に八萬四千の城有りて、其の城の縱廣滿一由旬、一一の城中に居止する人民八萬四千なり。彼の土には是の如き等の事を具足し、其の土は純ら四寶を以て校飾せらる、所謂金・銀・琉璃・[一五]頗梨なり。飲食多饒にして乏少する所無く、其の土の人民我・我所無きこと、猶し北方[一六]欝單越土の如くなりき。其の佛の壽命十中劫を滿し、聲聞大衆は九萬六千億、菩薩大衆は萬二千億なり。土に[一七]二城有りて一を樂と名け、二を淨と名け、其の佛世尊、淨城に生れて樂城に住したり。

『其の土に王有り、名けて[一八]淨聲と曰へり。七寶具足して三千大千世界を統領し、後宮の婇女三萬六千、姿顏端嚴、天の如くにして別無かりき。十萬の子有りて雄猛勇健、悉く皆半[一九]那羅延力を具し、各各二十八相を成就し、一切皆阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。また八萬の女有り、清淨無穢にして形容[二〇]瓌異、天の如くにして差無く、一切亦阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。

『其の王、爾の時、二劫を經る中、如來及び聲聞・菩薩大衆を供養し、如來の爲の故に寶坊の、滿五由旬なるを造作す。是の寶坊中に復寶樓有つて其の數十萬なり、僧を供養せんが爲なりき。

『爾の時聖王、其の眷屬と、一切皆清淨梵行を修す。時に佛、無量の衆生を大乘法に教化し、復無數を聲聞乘に化したり。爾の時、其の王、佛を供養し已り、諸の眷屬と共に佛所に至り、頭面禮足、

【一三】多羅(Tāla)樹は棕櫚の如く、極高のものは高さ七八十尺なりと云はる。宋譯には此の句を高七人量とす。

【一四】また他化天ともいふ、欲界六天の第六なれば、また第六天ともいふ。梵にParanirmitavaśavartinа.欲界の主たり。

【一五】梵にSphaṭika宋譯に頗胝迦寶とす。此方の水精に當る。

【一六】梵にUttarakuruとす須彌四洲の中、北方の大洲なり、慧苑音義によれば、鬱怛羅は上、又は勝、句嚧は所作の義。彼の洲の人は所作の事に於て、みな我所無きこと、餘の三洲に勝るが故なりとす。

【一七】二城は宋譯に善清淨と樂生とす。

【一八】宋譯に、有ニ轉輪聖王一、名ニ善淨境界一といふ。

【一九】Nārāyaṇaの音寫、天の力士にして、其の力量は大象の七十倍と稱せらる。

【二〇】瑰は珍奇なり。

しと見なば是を名けて慧と爲し、若し空・無相・無願を修集し、諸の善根を以て願じ、及び衆生に菩提を迴向せば、是を方便とは名く。復次に善男子、諸衆生の下・中・上の根を知らば、是を名けて慧と爲し、知り已つて意に隨ひ、爲に說法せば、是を方便と名く。淨智慧の故に諸有に行くと雖も心に染著無く、淨方便の故に二乘を修すと雖も其の果を證せず。善男子、若し能く一切煩惱の爲に染汚せられずば、是を名けて慧と爲し、能く衆生を調して悉く阿耨多羅三藐三菩提に趣向せしむれば、是を方便と名く。

『菩薩は發願して、悉く衆生をして無盡の財・無盡の福德を得、善根を增長せしめ、諸の學無學、聲聞・緣覺・一切の菩薩に、意に隨つて法を得るしむを淨方便と名け、若し能く一切の佛法を受持し、廣く分別して說き、無窮盡に說き、無障礙に說き、不空にして說き、樂むところに隨つて說くをば、是を淨慧と名く。菩薩摩訶薩は生生の處に無上菩提の心を失はざる、是を淨慧と名け、生生の處に作す所の善法の願、衆生に及ぶを淨方便と名く。淨慧の因緣により、菩提心の住する無く根無きを知り、淨方便の故に諸の衆生を化して菩提に趣かしむるなり。』

『世尊、菩薩摩訶薩は若し是の如き二淨を具せば、所作の諸業は菩提に非ざる無し。何を以ての故に、一切の法中に悉く闇障有るや、』『闇障を壞するが故に即ち是れ菩提なり。是の故に菩薩は常に菩提を遠離せざるなり。菩薩若し是の如きの念言――我れ菩提を離れん――を作さば、當に知るべし、是の人菩提を得じ。若し「我れ今菩提を有たん」と念ぜば、是の人の菩提は淨と不淨と有らん。若し能く是の如く諸法を觀ぜば即ち菩提を得、即ち是れ淨智方便なり。』

『[九]善男子、過去無量阿僧祇劫に、佛有りて出世し、[一〇]無邊光如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、土をば[一一]不眴と名け、劫を光味と名けたり。爾の時世尊、初めて道場の菩提樹下に坐し、未だ成佛せざる時、十方世界の[一二]一生補處と不退との菩薩、悉く來

【九】宋譯、卷第十五。
【一〇】同に無邊光照とす。
【一一】宋譯に善變化といふ。
【一二】前佛已に滅したる後、其の處前佛に嗣ぎて成佛し、其の處を補ふを補處といふ。而かも一生を隔てゝ成佛すれば一生補處といふ。

嚴を修集し、樂んで諸有に在りて三寶を供養し、樂んで衆生の爲に供使に趨走し、貪を生ずる處に於て貪心を起さず、正法を護持し、樂んで惠施を行じ、淨戒を具足し、忍辱を莊嚴し、勤めて精進を行じ、禪支を莊嚴し、智慧を修集し、多聞にして清淨梵行を厭くこと無く、大神通・三十七品を修するなり。

『善男子、菩薩摩訶薩は是の如き法を行じ、煩惱の染汚する所と爲らず、三界に著せず。菩薩摩訶薩は善方便を行ずる功德力の故に、三界に行くと雖も身心汚れず。善男子、譬へば長者の唯一子有りて心に甚だ愛念せるが、其の遊戲に誤つて圊厠に墮つ。時に母見已つて不淨を惡穢す、父後に之を見て其の母を呵責し、即便ち厠に入り之を牽いて出でしめ、出し已つて淨洗し、愛の因緣の故に其の臭穢を忘れたるが如し。善男子、長者の父母とは聲聞・緣覺・菩薩に喩へ、厠とは三界に喩へ、子は衆生に喩へ、母の拔く能はざるをば聲聞・緣覺に喩へ、父の能く拔濟せるをば諸の菩薩に喩へ、愛の因緣者とは大悲に喩へたるなり。

『菩薩摩訶薩は善方便を具して、三界に入るも三界の染汚する所と爲らず。是の故に道に二種有り、一は聲聞、二は菩薩なり。聲聞道は三界を厭ひ、菩薩道は三界を厭はず。菩薩は空・無相願を修集し、諸有に行くと雖も有に墮せず。既に有に墮せず、復證を取らず。三界に行くとは是れ方便に名け、證を取らずとは是れ智慧に名く。

『善男子、菩薩摩訶薩は一切の法を觀ずるに二相有ること無し。若し法の等しきを觀ぜば衆生も亦等し。是の如く等しければ涅槃も亦等し、是を智慧と名く。若し能く是の如く等しく衆生を觀ぜば涅槃を證せず、是を方便と名く。清淨の惠施は是を名けて慧と爲し、發願迴向は是れ方便と名くるなり』と。

『世尊、云何が名けて清淨の智慧、清淨の方便とは爲す』。『善男子、菩薩若し我・衆生・壽命・士夫無

【八】かはやなり、宋譯には磯井とし、母の助け出す能はざるを、深不可測……無能爲計入其井中、云々とす。

の人は福德中に於て心に厭足無きが故なり。金剛の鎧とは空・無相・願に喩へ、大猛火とは諸行の法に喩へたり。菩薩摩訶薩は一切法の空・無相・願を觀じ、而も能く沙門道の果を證せざるなり。』

『世尊、菩薩摩訶薩、是の事を具足するは不可思議なり。是の三昧を修して證を取らず、生死に行くも火の燒く所と爲らず。菩薩摩訶薩、方便を成就して一切の定に入るも、亦定の誑惑する所と爲らず。方便を具するが故に。諸行を行ずと雖も心に染著無く、邪見の爲には沙門果を說くと雖も亦自ら沙門道の果を證せず』と。

佛の言はく『善い哉善い哉、實に汝の說の如し。善男子、三の染汁を盛るに一器を以てするが如し、所謂[六]羅差・鬱金・青黛は三種の物を染む、所謂[七]毼・氎及び憍奢耶衣なり。毼は礬を以て浸せば則ち青色と成り、氎は淨浣するが故に黃色を成じ、憍奢耶衣は先づ灰を以て浸せば則ち赤色と成る。是の如き三物は、同一器に[入ると]雖も受色各異る。善男子、三乘の人も亦復是の如くなり。器とは空・無相願に喩へ、三種の色とは聲聞・緣覺・菩薩に喩へ、衣に隨つて色を受くとは三種の菩提に喩ふるなり。空・無相願も亦念を生ぜず、是の如き果を與へ是の果を與へず。善男子、毼とは聲聞に喩へ、氎とは緣覺に喩へ、憍奢耶衣とは菩薩乘に喩ふるなり。菩薩摩訶薩は一切法を見ること、聾の如く盲の如くにして衆生有ること無し。是の如く見る時は心染著無く、悔退有ること無し、是の時心中眞實に了知すらく「我れ衆生に於て利益有るに非ず、利益無きに非ざるも、亦衆生の爲に大悲を修集す」と。善男子、譬へば微妙なる淨琉璃寶の、復泥に在りて百年を經歷すと雖も、其の性常に淨くして出で已れば本の如くなるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、心相の本性清淨にして、客塵煩惱に障汚さるるも、而も客煩惱は實に清淨の心を汚す能はざること、猶ほ珠の泥に在りて泥の爲に汚されざるがごときを了知す。菩薩摩訶薩は是の如き念を作す「若し我が心性にして煩惱に汚さるれば、我れ當に云何がして能く衆生を化すべき」と。是の故に菩薩は常に樂んで福德莊

【六】宋譯には青色、赤色、黃金色を擧ぐ。羅差は玄應音義によれば、勒叉(Lākṣā)とすべし、紫色をいふと。

【七】毼は軟かき毛織物、氎は劫波育より作れる布なるべし。憍奢耶(Kauśeya)は、野蠶より取れる糸にて作れる絹衣、宋譯に上妙天衣とす。宋譯によれば、この後二衣の染色異る、即ち一者毼衣染二其青色一、二者氎衣、染二其赤色一、三者無價上妙天衣、染二黃金色一と。

り、佛の法と諸佛の三昧とを得んが爲なり。菩薩是の如き法に貪せずと雖も、而も能く自在に是の如きの法を得。何を以ての故に、誓願力の故に。

『善男子、譬へば陶師の泥、輪に在る時は物名を得ざるも、既に器を成し已れば名は物に隨つて立する如し。菩薩の善法も亦復是の如くなり、未だ願を發さざる時は則ち波羅蜜の名を得る能はず、是の故に菩薩の一切善法は、要ず當に發願すべきなり。善男子、譬へば金師の金、未だ器を成さざれば亦名を得ず、其の成じ已るに及び瓔珞の名を得るが如し。菩薩の善法も亦復是の如し、未だ發願せざる時は則ち波羅蜜の名を得る能はず。善男子、譬へば比丘の滅定に入らんと欲するに先ちて誓願を立て、我れ今定に入る、若し[四]揵椎鳴らば乃ち當に起つて出づべしと。而も是の定中には揵椎の音無きに、願力を以ての故に、揵椎を鳴らす時則便ち出定するが如し。善男子、菩薩摩訶薩亦復是の如し、衆生を憐愍するが故に是の如き願を作し、諸の未だ度せざる者を、我れ當に之を度し、諸の未だ脱せざる者を、我當に之を脱せしむべしと。菩提を修する時、深三昧に入り、悲力を以ての故に諸の衆生を念じ、聲聞・辟支佛乘を證せず。是の故に菩薩は復三十七品を修集すと雖も果をば得ず。

『[五]善男子、菩薩の所行は不可思議なり、深定に入ると雖も亦沙門道の果を證得せず。善男子、譬へば二人猛火を過ぎんと欲し、其の一人は金剛の鎧を著けんに卽ち能く之を過ぎ、其の一人は身に乾草を被んに火の爲に焚かれんが如し。何を以ての故に、草は則ち燒き易く、金は則ち堅きが故なり。菩薩摩訶薩も亦復是の如し、衆生を憐愍して菩提を專念し、甚深無量の三昧を莊嚴し、三昧力を以ての故に能く聲聞・緣覺の正位を過ぎて果證を取らず、定より起つて正覺道の如來の三昧を得。乾草を被るとは聲聞に喩ふ。聲聞の人は生死を厭悔し、諸の衆生に於て慈悲の心無し。是の故に聲聞・緣覺の正位を過ぐる能はじ。何を以ての故に、二乘の人は福德中に於て知足の想を生じ、菩薩

【四】梵に Ghaṇṭā 磬、打木など譯す。打つて聲を作すべきものゝ稱、事の定刻を報ずる具。

【五】宋譯、巻第十四。

卷の第十一

海慧菩薩品　第五之四

爾の時海慧菩薩、佛に白して言はく『菩薩摩訶薩、若し是の如き等の見を具足する有らば、何等の願を發すや』佛の言はく『善男子、是の如きの人は[一]本の如く發願す。菩薩摩訶薩は、若しは心定に在るも若しは定に在らざるも、衆生の爲の故に本の如く發願す。善男子、譬へば人の、甘蔗・稻田を有ち、一頃を具備して其の地平正ならば、漑灌せんと欲する時、其の水口を開き、之を縱にして去らしめんに、更に功を施さざるも、自然に週遍するが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、若しは定の中に在り、心を繫けて思惟し、若しは定に在らず思惟せざる時も、衆生の爲の故に本の如く發願し、所作の善根、悉く皆衆生と之を共にし、共にし已つて無上の佛法に迴向せんことを願ふ。菩薩心淨なれば戒・忍・定・慧も亦復淸淨にして、佛法及び諸の衆生は平等無二なるを觀ず。是の願有りと雖も初に心有ること無し。是の故に菩薩は復心無しと雖も、諸の衆生に於て、誓願の力未だ常に及ばずんばあらず、所有の善根を悉く之と共にし、共にし已つて無上の菩提に迴向す。善男子、[二]娑羅樹の、人有りて根を[三]斫伐せんに、既に斷ち已れば斫るに隨つて倒るるが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、三昧を修集して常に菩提に向ふなり。假使人有り、唱へて「是の樹をば斫る處に墮せしむる莫れ」と言はんも、是の樹の猶ほ故に斫る處に隨つて倒れんがごとし。菩薩摩訶薩も亦復是の如し、所修の善法をば無上菩提に向はざらしめんと欲するも、則ち是の處無し。何を以ての故に、法性として爾るが故なり。菩薩摩訶薩所修の善法は、唯三寶の種性を斷ぜざるが爲なり、佛土を淨めん爲なり、身を三十二相・八十種好もて莊嚴せんが爲なり、口を莊嚴して、說法の時、衆生を樂聞せしめんが爲なり、心を莊嚴して諸の衆生平等無二なるを觀ぜんが爲な

【一】宋譯に此位菩薩以二本願力一故、善作二勝業一とす。

【二】Sālaの音寫、印度に產する落葉の喬木にして高さ百餘尺に達す、餘の樹木の上に超出するが故に高遠と名く。

【三】斫は擊つて切るなり。

ことを爲したまふや、世に出でたまはざるや』。『善男子、菩薩の初めて菩提心を發す時、眞實に是の如き等の法を知らず、是の故に我れ爲に之を宣說す。善男子、菩薩に四種有り、一に初めて菩提の心を發すと、二に菩提の道を修行すると、三に堅固にして菩提を退せざると、四に一生して當に佛處を補ふべきとなり。發心の菩薩は佛の色相を見、見已つて卽ち菩提の心を發す。修行の菩薩は、佛の一切善法を具足せるを見、見已つて卽ち菩提の心を發す。不退の菩薩は、如來の身及び一切の法皆悉く平等なるを見、一生の菩薩は如來所有の功德及び一切の法を見ざるなり。何を以ての故に、所得の慧眼了了にして淨きが故に、二見を斷ぜるが故に、淨智慧の故に。若し淨と不淨を見ず、非淨と非不淨を見ざれば、是の人卽ち能く明に如來を見ん。善男子、我れ昔是の如くにして[一〇六]然燈佛を見、見已つて卽ち無生法忍を得、亦能く了了に得と無得とを知りたり。得已つて卽時に虛空に上昇すること高さ七多羅樹、空に處して住し已り、了了に一切の法界を知るを得、了了に知り已つて心住する所無く、住する所無くして六萬の三昧門を得たり。時に然燈佛、卽ち我れに記を授けたまはく[一〇七]「摩納、汝は來世に於て當に佛と作るを得、釋迦如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號すべし」と。我れ爾の時に於て、都て是の授記の音聲を聞かず、亦佛の想及び授記の想無かりき。我れ爾の時に於て三種の淨慧ありき、我想を見ざると、佛の想及び授記の想を見ざるとなり。復三淨有りき、我を見ざると衆生及び正法を見ざるとなり。復三淨有りき、[一〇八]名を見ざると、色を見ざると、因を見ざるとなり。復三淨有りき、[一〇九]一切の陰悉く法陰に入るを見、一切の界悉く法界に入るを見、一切の入悉く法入に入るを見たるなり。復三淨有りき、過去の已盡と、未來の不生と、現在の不住となり。復三淨有りき、身を水月の如しと觀じ、聲を不可說と觀じ、心を不可見と觀じたるなり。復三淨有りき、空と無想・願となり。若し是の如く見れば卽ち是れ眞實に授記を見たるなり。善男子、若し菩薩有りて是の如き見を作さば、是を實の見と名づくるなり』[一一〇]と。

大方等大集經卷第十

海慧菩薩品第五之三

【一〇六】梵に提和竭羅(Dīpaṃkara)、錠光とも譯す。釋迦如來の因行中、第二阿僧祇劫の滿時に、此の佛の出世に遇ひ、五華の蓮を以て佛に供養し、髮を泥に布きて佛をして踏ましめ、以て未來成佛の記莂を受けしなり。

【一〇七】摩納婆迦(Māṇavaka)の略、儒童無少など譯す。年少の淨行者をいふ。

【一〇八】宋譯には名執と色相の執と所緣の執と無きをいふ。

【一〇九】同に五蘊と法蘊との平等、十八界と法界との平等、十二處觀の空聚の如きとを擧ぐ。

【一一〇】宋譯は卷第十三、尚ほ續く。

實に無色なり、衆を愍むが故に色無きに色を示したまふ、我れ人中の師子王を禮しまつる。一切の福田は一田に入り、而も是の一田は增減無し、法界を動ぜず轉移せず、是の故に我れ人象王を禮しまつる。諸の衆生の心は幻の如く、諸法菩提も亦復然りと觀じ、一切の法は皆平等なりと知りたまふ、是の故に我れ平等を禮しまつる。諸の法界を觀ずるに悉く平等なり、故に諸法に一二無く、有に非ず無に非ざる、是れ解脫なりと說きたまふ、是の故に我れ斷二見を禮しまつる。日月は地に墜落すと說くべし、猛風は索もて繫縛しうと說くべし、須彌は口もて吹動しうと說くべきも、佛に二語有りと說くべからず。實語・眞語及び淨語したまひ、身心清淨にして虛空の如く、世法の染せざること蓮華の如し、是の故に我れ無上尊を禮しまつる。若し能く是の如き德を讃ふる有らば、即ち是の如きの功德を獲ん、我れ是の如き諸の功德の爲に、是の如き功德聚を敬禮しまつるなり』と。

時に諸の菩薩、旣に讃歎し已り、佛に白して言はく『世尊、夫れ大寶とは所謂佛なり、佛の出世は即ち是れ樂の出なり、佛の出世は即ち是れ信の出なり、佛の出世は即ち是れ念の出なり、佛の出世は即ち是れ智の出なり、佛の出世は即ち是れ施・戒・忍・精進・禪定・慧の出なり、佛の出世は即ち是れ慈の出、悲・喜・捨の出なり、佛の出世は即ち是れ十二因緣の法・義・智の出なり、佛の出世は即ち是れ念處・正勤・如意・根・力・覺・道の一切善法の出なり』と。

爾の時衆中に一菩薩の、名けて[一〇五]慧聚と曰ふ有り、佛に白して言はく『世尊、生・老・病・死の世に出づるは即ち是れ佛の出なり、無明・愛の出は即ち是れ佛の出なり、貪・恚・癡の出は即ち是れ佛の出、一切の疑網・煩惱の出は即ち是れ佛の出なり。何を以ての故に、若し是の如き等の法、世に出でざれば、佛は何の緣を以て世に出現したまはん』と。佛の言はく『善い哉善い哉、善男子、實に所言の如くなり』と。

爾の時海慧菩薩の言はく『世尊、若し是の如き等の法を見ざる有らば、爾の時如來は世に出づる

【一〇五】宋譯に慧積とす。

名く。一衆生の心に一切衆生の心を攝取するを金剛句と名け、一衆生の心と一切衆生の心と悉く皆平等なるを金剛句と名け、一切佛と一佛と悉く平等なるを金剛句と名け、一福田と一切福田との無盡に平等なる金剛句と名け、一切諸法の虚空等の如くなるを金剛句と名け、一切諸法の等同一味なるを金剛句と名け、一切諸法及び佛法は平等無二なるを金剛句と名け、金剛三昧は能く一切の諸魔惡業を壞するを金剛句と名け、如來の妙音は諸の惡聲を壞するを金剛句と名け、生滅無しと觀ずれば生老死を過ぐるを金剛句と名く。善男子、是の如き等の法を金剛句と名け、堅牢句と名け、不壞句と名け、不破句と名け、平等句と名け、爲實句と名け、無二句、不退轉句、大寂靜句、無能作過句、不增不滅句、無有有句、無有法句、眞句、有句、不謗佛句、依法句、供僧句、如爾句、分別三世句、勇健句、梵句、慈句、心句、虚空句、菩提句、不低句、法相句、無相句、心意識無住句、波旬句、破魔句、無上句、無勝句、廣句、行已境界句、入佛境界句、無覺觀句、於法界所不分別句、無句句と名く。善男子、若し菩薩有り、能く是の如き等の句義を解せば、必ず當に菩提樹下に於て金剛師子法座の上に坐すべし』と。

是の法を說きたまへる時、八千の菩薩は法門陀羅尼に入るを得、亦一切衆生の平等三昧を獲たり。爾の時、十方の諸來菩薩は、妙香華・種種の伎樂を以て佛を供養し、偈を說いて讃へて曰はく、『我れ今無上尊を敬禮す、能く一切衆生の聲を知り、相と無相とは實に一相なるを說き、而も妙相三十二を得たまへり。若し衆生の一一の心有らんに、平等に諸の衆生の心を攝し、行と無行とは實に一行なるを說きたまふ、是の故に我れ無上尊を禮しまつる。如來は眞實に因果を知りたまふ、故に衆生の爲に業報を說き、眞如法界は有・無に非ずと、是の故に我れ無上尊を讃へまつる。一切の衆生は覺觀無し、其の心本淨にして貪有る無きに、因緣に從ふが故に貪欲を生ず、是の故に我れ眞智の因を禮しまつる。我れ佛身の種種の色を見まつるも、而も如來の身は

とす。

【九六】 宋譯に無取門とす。以下二者ことなる。

【九七】 毘那耶(Vinaya)の首字なり。

【九八】 光(Ātapa)、明(Āloka)の首字より取る。

【九九】 五眼は肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼なり。

【一〇〇】 宋譯は一切法住虚空印所印とす。

【一〇一】 同に一切法眞如印所印、前後際如實故とあり。

【一〇二】 宋譯に一切諸法三世平等印所印とす。

【一〇三】 以下、宋譯、卷第十三。

【一〇四】 恩田、福田に違逆する五種の暴惡なる罪。五無間業ともいふ。普通は殺父殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血を數ふ。

滅無き印なり、一切の法等しく虚空の如くなる印なり、一切諸法の[九九]五眼道の印なり、[一〇〇]一切法虚空の如くなる印なり、一切諸法分別有ること無くして虚空の如くなる印なり、一切諸法法界に入る印なり、一切法の如なる印なり、[一〇一]一切諸法の去・來・現在無き如の印なり、一切諸法の本性淨なる印なり、一切法の空なる印なり、一切法の無相の印なり、一切法の無願の印なり、一切法の處無く非處無き印なり、一切法の苦なる印なり、一切法の無我なる印なり、一切法の寂靜なる印なり、一切法の性過咎無き印なり、一切諸法を第一義の攝取する印なり、一切諸法の、法性の如く住する印なり、一切諸法の畢竟解脫の印なり、一切諸法時無きの印なり、一切諸法の[一〇二]三世を過ぐる印なり、一切諸法の味同一の印なり、一切諸法の性無礙の印なり、一切諸法の性無生の印なり、一切諸法の性無諍の印なり、一切諸法の性覺觀無き印なり、一切の諸法は色に非ず可見ならざる印なり、一切の諸法の屋宅無き印なり、一切の諸法對治無き印なり、一切の諸法の業果無き印なり、一切の諸法の作無く受無き印なり、一切の諸法の出滅無き印なり。善男子、是を法句と名く。是の如き法句は卽ち是れ過去・未來・現在の諸佛の菩提なり。是の如き法印句は八萬四千の法聚を攝取す。善男子、若し能く是の如き法聚を觀ぜば、卽ち能く無生法忍を獲得す。善男子、若し未だ善根を種えざるの人有りて、是の法を聞き已らば、卽ち之を種えて魔業を壞せん。善男子、若し是の如く觀ぜば卽ち能く無盡の器陀羅尼を獲得す。是の如き等の法は悉く八萬四千の三昧と八萬四千の衆生の行性を攝取す。是を法句と名くるなり。

[一〇三]『金剛句とは其の身不壞なること猶ほ金剛の如きなり。何を以ての故に、法性は不壞なるが故に。智慧の性能く無明を破す、是の故に智慧を金剛句と名く。[一〇四]五逆罪は一切の善を壞す、是の故に五逆を金剛句と名く。不淨の觀は能く貪欲を壞す、是の故に不淨を金剛句と名く。慈心の觀は能く瞋恚を壞す、是の故に慈心を金剛句と名く。十二緣を觀ぜば能く愚癡を壞す、是の故に觀緣を金剛句と

滅老死義とす。

【八三】法界(Dharma)より釋せるなり。宋譯には馱字門とす。

【八四】宋譯に設字門とす。Śa-mata の首部。

【八五】虚空(Kha)の字より釋す。

【八六】盡(Kṣaya)の字より釋す。

【八七】宋譯に倪野字門、表示一切法智無著義とす。

【八八】處(Sthāna)より釋す、宋譯に他字門とす。

【八九】陰(Skandha)の首綴より釋せるか。宋譯に塞迦字門とす。

【九〇】Dha字なり。宋譯は姹字門とす。般若經所說四十二字門の最終の字なり。智度論四十八に曰、茶字門、入ニ諸法邊竟處一故、不終不生、過レ茶無ニ字可一レ說。

【九一】身(Kāya)の字に依る。宋譯には身寂靜門とす。

【九二】至は Citta (質多又は指多と寫す)の訛略か。

【九三】清淨(Upavasatha)の首字より解す、宋譯には、是と次とに、止息門、深固門を擧ぐるも、說相ことなる。

【九四】蛇は陀の寫誤か、名義集五に陀摩は善とあり。

【九五】住(Sthāna)の初綴より取れるか。宋譯に住實性門

せば、一切の法中に門戸を作さん。所謂[七三]阿字は一切の法門なり、阿とは無を言ふ、一切の諸法皆悉く無常なり。波は亦一切の法門、[七四]波とは卽ち第一義なり。那は亦一切の法門、[七五]那とは諸法無礙なり。陀は亦一切の法門、[七六]陀とは性能く一切の法性を調伏するなり。沙は亦一切の法門、[七七]沙とは一切の諸法を遠離するなり。多は亦一切の法門、[七八]多とは一切の法は如なるをいふ。迦は亦一切の法門、[七九]迦とは一切の諸法作無く受無きなり。娑は亦一切の法門、[八〇]娑とは一切の諸法分別有ること無きなり。伽は亦一切の法門、[八一]伽とは如來の正法甚深にして底無きなり。闍は亦一切の法門、[八二]闍とは生相を遠離するなり。曇は亦一切の法門、[八三]曇とは法界の中に於て分別を生ぜざるなり。奢は亦一切の法門、[八四]奢とは奢摩他を具して八正道を得るなり。佉は亦一切の法門、[八五]佉とは一切の諸法猶し虚空の如きなり。叉は亦一切の法門、[八六]叉とは一切の法盡くるなり。[八七]若は亦一切の法門、若とは諸法の無礙なるなり。陁は亦一切の法門、[八八]陁とは一切の法是れ處・非處なるなり。蠱は亦一切の法門、[八九]蠱とは五陰を觀じ已つて大利益を得るなり。荼は亦一切の法門、[九〇]荼とは一切の諸法、畢竟有ること無きなり。迦は亦一切の法門、[九一]迦とは身寂靜の故に大利益を得るなり、至は亦一切の法門、[九二]至とは心寂靜の故に一切の惡を離るるなり。優は亦一切の法門、[九三]優とは清淨の禁戒を受持擁護するなり。蛇は亦一切の法門、[九四]蛇とは善思惟なり。替は亦一切の法門、[九五]替とは一切法に住するなり。修は亦一切の法門、[九六]修とは一切諸法の性是れ解脱なるなり。毘は亦一切の法門、[九七]毘とは一切の諸法悉く是れ毘尼なるなり。毘尼とは已身を調伏するなり。時は亦一切の法門、時とは一切諸法の性は不染汚なるなり。阿は亦一切の法門、[九八]阿とは一切諸法の性是れ光明なるなり、婆は亦一切の法門、婆とは八正道を修するなり。婆は亦一切の法門、婆とは一切の諸法內に非ず外に非ざるなり。善男子、是を門句と名け、能く念心を淨め、能く其の心を淨めて、衆生の根を知るなり。

『法句とは一切諸法解脱の印なり、一切諸法無二の印なり、一切諸法常斷無き印なり、一切諸法增

【七三】　阿(a)字は五十字門又は悉曇十二母韻の一。この字元と爲りて一切の梵字を生じ、この音源となつて一切の梵音を生ず。宋譯には、阿字門、表示一切法無生義とす。

【七四】　波羅末陀(Paramārtha)の首字なり、宋譯に波字門、表示一切法勝義諦。

【七五】　na は否定の接頭詞なり。宋譯には那字門、表示一切法了知名色義とす。之は名色(Nāmarūpa)の首綴より取れる釋ならん。

【七六】　宋譯は捺に作る。調伏(Dama)より取れる釋なり。

【七七】　遠離(Samlekha)より取れる釋ならん。宋譯に娑字門、表示一切法出過諸著義とす。

【七八】　眞如(Tathatā)より取れる釋なり。

【七九】　業作(Kārya)より取れる釋なり。宋譯には迦字門、表示一切法了達業報義とす。

【八〇】　宋譯に、又娑字門、表示一切法平等無差別義とす。平等(Samatā)より釋せるか。

【八一】　甚深(Gambhira)より釋す。宋譯には誐字門、表示一切法最極甚深、難徹源底義とす。

【八二】　生(Jāti)より釋す。宋譯には惹字門、表示一切法超

を壞す、是の故に大乘は思議し難し。色を得・力を得て大自在なること、梵・釋・轉輪聖王の身のごとし、若し此の大乘に乘ずる有らば、是の人は三界の樂を受けん。施し已つて終に悔心を生ぜず、所重の物に悋著せず、身を捨て自ら施して慈悲を修す、是の故に大乘は思議し難し。持戒精進して梵行を樂み、能く神力を以て日月を障へ、身の善果報に貪著せず、是の如き乘を修して衆生を調す。法を說くに受と不受の者と有るも、是に於て瞋愛の心を生ぜず、身心に大精進を勤修するは、得難き大乘を得んが爲なり。能く無上の大法王たるを得、亦難忍の忍辱を得、無量の劫中に苦惱を受くるは、大乘を得て一切に勝れんが爲なり。勤めて多くの衆生を利益することを作し、身口意の業悉く柔軟に、慈悲及び神通を修集するは、大乘の大利益に住せんが爲なり。法界の生・住・滅を了知せば、我無く諍無くして諸根を調せん、若し能く大乘に安住せば、即ち安樂を受けんこと先佛の如けん。念・心及び精進と、四如意足・大神力を具足し、正法及び眞義に依止するは、皆樂んで大乘に住するに由る。無上の無所畏を具足し、能く獅子吼する無上尊の、微妙の相好もて自ら莊嚴するは、皆樂んで大乘に住するに由る。[七一]三種の神通を具足せば、衆生を調伏敎化し、其の心寂靜にして憍慢無し、若し大乘を行ずれば忍辱を得ん。梵音聲の微妙なるを具足せば、一切の衆生甚だ聞くを樂む、若し樂んで大乘を修集せば、是の人善く衆生の語を解せん。作す所の諸業淨土たり、久しからずして當に無邊の身を得べし、若し至心に是の法を聽く有らば、當に無邊無上の樂を受くべし。能く虛空に遊んで邊際を盡し、能く大海の水幾渧なるを知るも、大乘の德を演說する能はず、是の故に是の乘は思議し難し』と。

爾の時世尊、復海慧菩薩に告げたまはく『善男子、若し是の如き等の經を受持せんと欲し、自ら其の深心を寂靜ならしめんと欲せば、應當に門句[七二]・法句・金剛句を受持すべし。至心に門・句を觀察

【七一】宿命明(自他身の宿世の生死の相を知る)と、天眼明(自他身の未來世の生死の相を知る)と、漏盡明(現在の苦相を知りて一切の煩惱を斷ずる)との智をいふ。この三は普通に三明と稱せられ、六通の中にも數へらるゝを以て、三種の神通といへるならん、宋譯には諸佛有三種 最勝大神通」と云へり。

【七二】宋譯に印句とす。

能く一切下劣の乘に勝りて、衆生を大乘に調伏せん。若し至心に經を受讀する有らば、寂靜の戒・忍辱を具足し、智慧を具足して魔業を壞し、衆生を憐愍して道樹に趣かしむ。慈悲を莊嚴して四禪に乘じ、智慧の利刀もて魔衆を摧き、道樹の下に十二緣を觀じ、起ち已つて衆を愍み大乘を說く。十方の衆生は大乘に乘ずるに、乘に增減無きこと虛空の如くなり、大乘の神通は思議す叵ず、是の故に如來之を修集す。念處に安住して正勤を嚴じ、如意を足と爲し根を勢力とし、八正路に遊んで覺の寶を採る、是の故に如來は道樹に趣く。其の心寂靜にして煩惱を離れ、諸の闇を壞破して智光を獲、是の故に梵天及び帝釋は、如來を敬禮して大乘に乘ず。六度・六神通を具足し 善方便を具して三昧を修し、能く諸の魔及び邪見を壞す、是の故に如來は大乘に乘ず。若し諸の善根を具足し、及び不善根を成就する有りて、信有れば則ち煩惱を破するを得、是の故に大乘は思議し難し。所有一切の世間法、及び無上の出世法、若しは有學法無學法は、一切大乘の中に攝在す。若し衆生の惡道を行じ、邪見の惡知識に親近する有らんに、是の輩を憐愍して方便を修せしめ、調伏の爲の故に大乘を說く。下劣は大乘を樂まず、心迮りては人の結を壞する能はず、常に自の樂を求めて餘人を捨て、大乘を說くを聞きて恐怖を生ず。若し智者有つて力勢を具せんに、衆生を憐愍して利益を作し、大乘を聞くを說きては心に歡喜し、衆の苦惱を壞して心に悔ひず。若し衆生の行と、一切衆生の諸の界根とを了知せんと欲せば、菩薩一念に能く通達す、是の故に大乘は思議し難し。身に寂靜を得ば相莊嚴し、口に寂靜を得ば衆樂聞し、心に寂靜を得ば神通を具す、是の如きは皆大乘に趣くに因る。若し人有つて能く大乘を行ぜば、是れ則ち三寶の種を斷ぜず、能く衆生の爲に利益を作し、貧窮諸苦惱を破壞す。能く十方の諸世界に到り、現に無量の佛世尊を見る。是の如く大乘に趣向すれば、是の人即ち無量の福を得、一切世間に能く勝る無し、無上の大乘に趣向せば、大力を具足して魔衆

作す『善哉・善哉、世尊、今日如來は大師子吼し、衆生を憐愍して大乘の門を開きたまへり。世尊、若し衆生有つて是の法中に於て少分を得ば、即ち三惡道の苦を斷除するを得、漸漸に當に無量の法寶を得べし。譬へば人有り、村邑の外に於て大寶聚を見、見已つて憐愍し、即ち還つて村に入り衆人に告げ語るらく「誰か貧を斷ぜんと欲すれば、當に我と倶なるべし」、是の人說く時、或は信ずる者、或は信ぜざる者有り、其の中の信ずる者、即ち與に相隨ひ倶に寶所に至り、意に隨つて採取し、即ち貧苦を破せんが如し。而も是の寶聚亦增減無く、亦是の人の取るを聽し彼の人を聽さず、是の人の貧を破し彼の人を破せず、是の持ち去るを聽し彼の持つを聽さずと言念せざるが如く、如來世尊も亦復是の如く、無量世に於て是の如き無上の法寶を勤求し、求め已つて見るを得、大憐愍を生じ、大梵音を以て諸の衆生に語りたまはく「若し生死貧窮を壞せんと欲する有らば、當に至心に聽くべし、諸の衆生有つて薄福不信なれば、則ち生死貧窮を壞する能はじ」と。其の中の信ずる者、智力の任するに隨ひ、聲聞乘・辟支佛乘・菩薩の大乘を取る、是の大寶聚は亦增減無けん。若し此の寶聚の中に至る有つて、乃至一寶をも取る能はずんば、是の人常に三惡道中に住せん、若し能く一字一句を取り乃至一念受持する者有らば、是の人能く生死貧窮を壞せん。何ぞ況んや是の[七〇]大乘經典の一品二品を取り、及び其の具足して聽受・讀誦し、人の爲に解說せんをや』と。

爾の時世尊、諸の天人を讚したまはく『善哉・善哉、諸天子、若し是の如き經典を受持する有らば、是の人則ち一切の善法を具足し、如來無上の佛智を頂戴せん、是れ大智聚にして、能く大に無量の衆生を利益せん』と。爾の時世尊、偈を以て頌して曰はく、

『諸乘の中に大乘最たり、猶し虛空の無邊際なるが如し、一切生死の有を遠離し、菩提の樹に趣くに障礙無し。若し能く其の心意を清淨ならしめ、所有を一切に惠施し、至心に清淨の戒を受持せば、菩提の樹に趣くに障礙無けん。諸の衆生に於て心平等に、常に煩惱の諸罪過を觀ぜば、

【七〇】宋譯には何況有下能於二此廣大集會正法一少略一品信奉受持上云云とす。

り。復四法有り、一に信心を修せず、二に衆生の罪過を觀察する能はず、三に惡知識の過を觀ぜず、疑心の罪過を觀ぜざるなり。復四法有り、一に內を觀ぜず、二に外を觀ぜず、三に無慚、四に無愧なり。復四法有り、一に恩を知らず、二に恩を報ぜず、三に恩に背き、四に邪見を樂むなり。復四法有り、一に聖人を誹謗し、二に將て世人を護り、三に福田を信ぜず、四に法施を呵毀するなり。復四法有り、一に身業を淨めず、二に口業を護らず、三に意業を捨てず、四に大乘を厭悔するなり。復四法有り、一に和合を破せんが爲に兩舌を作し、二に師和上に於て瞋恚の語を出し、三に利益を壞せんが爲に無義の語を作し、四に人・天を欺誑し、妄語を生ずるなり。復四法有り、一に戒の因を護らず、二に禪定の因を亂し、三に後世を信ぜず、四に樂んで世事に著するなり。復四法有り、一に麁獷、二に憍慢、三に樂んで[六六]世事を說き、四には常に睡眠を樂むなり。復四法有り、一に菩薩の名を假りて供養を受け、二に病苦の人を瞻視する能はず、三に[六七]善子を種えず、四に菩提に向はざるなり。復四法有り、一に自ら輕んじ、二に法を輕んじ、三に福を輕んじ、四に數聲聞辟支佛乘を念ずるなり。復四法有り、一に身を貪り、二に心を貪り、三に命を貪り、四に戒を貪るなり。復四法有り、一に房舍を貪り、二に[六八]檀越を貪り、三に邪見を貪り、四に破戒を貪るなり。復四法有り、一に多く作し、二に多く語り、三に多く受け、四に多く視るなり。復四法有り、一に我見、二に邪見、三に斷見、四に常見なり。復四法有り、一に作さず、二に作し已つて轉じ、三に心悔ひ、四に樂まざるなり。復四法有り、一に道地に向はず、二に禪定を修せず、三に智慧を退失し、四に方便を樂まざるなり。復四法有り、一に法を障礙し、二に善業を障礙し、三に煩惱の障礙、四に魔業の障礙なり。善男子、是の如き等の法を、大乘を障ふと名くるなり』。

[六九]是の法を說きたまへる時、四萬四千の人天、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、二萬八千の菩薩、無生法忍を得、三千大千世界の大地、六種に震動し、虛空中の無量の天人、異口同音に是の如き言を

【六六】事、麗本に間とあり、今宋元明に從ふ。
【六七】善の種子なり。
【六八】梵に陀那鉢底(Dānapa-ti)、施主と譯す。
【六九】宋譯、卷第十二。

なり。復四法有り、一に善知識に於て惡友の想を生じ、二に惡知識に於て善友の想を生じ、三には非法に法の想を、四に法に非法の想を[生ずるなり]。復四法有り、一に惠施を樂まず、二に施し已つて悔を生じ、三に施し已つて過を觀、四に菩提の心を念ぜざるなり。復四法有り、一に欲の爲に施し、二に瞋の爲に施し、三に癡の爲に施し、四に怖畏の爲に施するなり。復[六二]四法有り、一に名字の爲に施し、二に本の爲に施し、三に善友の爲に施し、四に勝の爲の故に施するなり。復[六三]四法有り、一に至心に施せず、二に自手施せず、三に不現見の施、四に輕慢の施なり。復四法有り、一に[六四]下物の施、二に少物の施、三に不至心の施、四に輕慢の施なり。復四法有り、一に毒の施、二に刀の施、三に不淨の施、四に無利益の施なり。復四法有り、一に持戒の者を見ては瞋恚の心を生じ、二に毀禁の者を見ては愛念の心を生じ、三に惡友の語に隨ひ、四に施と戒を念ぜざるなり。復四法有り、一に非法に利を求め、二に如法に財を得るも人と共にせず、三に他の供養を斷じ、四に心知足せざるなり。復四法有り、一に利養を貪るが爲の故に威儀を攝持し、二に利養の爲の故に下聲に語り、三に其の心諂曲に、四に邪命自活するなり。復四法有り、一に同學の所に於て瞋恚の心を生じ、二に同乘の者に於て瞋恚の心を生じ、三に魔業を知らず、四に樂んで他の過を說くなり。復四法有り、一に憍慢にして正法を聽かず、二に法師を恭敬する能はず、三に父母・師長・善友を禮拜する能はず、四に意惡業に隨ふなり、復四法有り、一に他の功德を覆ひ、二に廣く他の過を說き、三に憍慢を增長し、四に瞋恚堅固なり。復四法有り、一に懈怠、二に善語を聽聞するを樂まず、三に順語に隨はず、四に非法に住するなり。復[六五]四法有り、一に不調、二に不淨、三に不藏、四に不忍なり。復四法有り、一に無上の善法を聞受するを喜ばず、二に樂んで城邑・聚落・村屯に在り、三に禁戒を毀破し樂んで供養を受け、四に根門を調伏する能はざるなり。復四法有り、一に衆生を攝取する能はず、二に衆生を調伏する能はず、三に正法を護持する能はず、四に樂んで法師の過罪を說くな

【六二】宋譯によれば名稱と美譽と、善聲と讚歎とを求むるが爲に施するなり。
【六三】同に以世俗情義故施、有所爲事故施、不顯明施、不自手施を擧ぐ。
【六四】宋譯によれば、下物は麁物なり、少物は貴重ならざるものを指す。
【六五】宋譯によれば、この四は、調伏せざると、寂靜ならざると、隱密ならざると、柔善ならざるとなり。

二に大施、三に畢竟施なり。復三法有り、一に護法、二に[53]護持法者、三に護持大乘なり。復三法有り、一に[54]生死を行じ、二に其の罪過を觀じ、三に知り已つて遠離するなり。復三法有り、一には至心に法を聽きて五蓋を破除し、二には常に寂靜を樂み、三には如法に住するなり。復三法有り、

[55]一に義に依り、二に法に依り、三に智に依るなり。復三法有り、一に多聞を求め已つて寂靜を樂み、二に寂靜を樂み已つて善法を思惟し、三に善く思惟し已つて法の平等を知るなり。復三法有り、一に聞者に親近し、二に多聞に諮問し、三に善人を護るなり。復三法有り、一に貪心無くして人の爲に說法し、二に聽法の者を見るに慈心もて之を視、三に一心に菩提を觀ずるなり。復三法有り、一に諸の衆生を視るに其の心平等なり、[56]二に心の平等を觀じ、三に佛の平等を觀ずるなり。復三法有り、一に過去已に盡き、二に未來合せず、三に現在住まらざるなり。復三法有り、一に苦と無常を觀、二に諸法無我、三に涅槃寂靜なり。復三法有り、一に聞き已つて堅く持し、二に三昧を堅持し、三に智慧を堅持するなり。復三法有り、一に犯し已つて覆はず、二に先の所犯を悔ひ、三に至心に戒を護るなり。復三法有り、[57]一に疑心を破壞し、二に悔心を破壞し、三に障礙心を破るなり。復三法有り、一に善欲、二に世事を談るを離れ、三に寂靜を樂むなり。復三法有り、[58]一に甚深の法を忍び、二に甚深の義を說き、三に種種の義を解するなり。復三法有り、[59]一に聲忍を具足し、二に思惟の忍を具し、三に順忍を具するなり。復三法有り、[60]一に智慧方便、二に大慈、三に精進堅牢なり。善男子、菩薩は是の如き等の法を具足し、能く大乘を利益するなり。

『善男子、復四法有つて大乘を障礙す。何等か四と爲す。[61]一に應に聽くべからざるを聽き、二に菩薩の法藏を聽受するを欲せず、三に諸の魔業を行じ、四に正法を誹謗するなり。復四法有り、一に貪欲、二に瞋恚、三に愚癡、四に法を求むることを樂まざるなり。復四法有り、一に他の利を得るを嫉み、二に財に於て慳貪に、三に法師を謗くを樂み、四に親近して善知識に見ゆるを樂まざる

【五三】 麗本に正法となすも宋・元・明三本は法者とす。今後者に從ふ、宋譯にも護持諸說法師とす。

【五四】 宋譯には不ㇾ令㆓生死相續㆒とあり。

【五五】 宋譯には所聞は義に依り、觀察は智に依り、解脫は法に依るとす。

【五六】 宋譯によれば無種種性故、諸法平等と。

【五七】 同に、惡作と隨眠と疑惑とを遠離することを擧ぐ。

【五八】 同譯によれば、(一)深法忍に住し、(二)種種の法を說き、(三)一切處に通達の辨才を得るを擧ぐ。

【五九】 同に圓滿所聞成忍と思所成忍而不流散と獲得無生法忍とを列ぶ。

【六〇】 同譯によれば、(一)方便と慧と和合して諸の道行を修し、(二)大慈と大悲と和合して衆生を成熟せしめ、(三)精進と不放逸と和合して正法を護持するなり。

【六一】 同譯には惡聞を擧げ、外道の文籍を尋求することをいへり。

き已つて能く持し、二に能く廣く文字句義を分別し、三に罪の過を觀察するなり。復三法有り、一に七財を具足し、二に能く大法を施し、三に能く衆生に施すなり。復三法有り、[四四]一に實義、二に眞義、三に不誑義なり。復三法有り、一に自ら知り、二に他を知り、三に時を知るなり、復三法有り、一に五陰と[四五]法陰の平等、二に諸界と[四六]法界の平等、三に諸入と法入との平等なり。復三法有り、一に空を修し、二に無相、三に無願なり。復三法有り、一に因果を謗らず、[四七]二に方便生の法は皆因緣に從ひ、三に和合の因緣もて名字を得るなり。復三法有り、一に佛の不可思議を信じ、二に法を信じて誹謗を生ぜず、三に僧の良祐福田なるを信ずるなり。復三法有り、一に貪欲を遠離し、二に瞋恚を遠離し、三に愚癡を遠離するなり。復三法有り、一に世諦、二に第一義諦、三には二諦に著せざるなり。復三法有り、一に煩惱を遠離し、二に憍慢を遠離し、三に福田の所に於て禮拜供養するなり。復三法有り、一に欲界に染ぜず、二には色界に著せず、三に無色界に於て憍慢を生ぜざるなり。復三法有り、一に供養をも喜ばず、二に毀辱に恚らず、三に世の八法を離るるなり。復三法有り、一に諸根を藏覆し、二に[四八]諸根を解了し、三に諸根を寂靜にするなり。復三法有り、[四九]一に善地に趣向し、二に善地の障を離れ、三に善地の德を觀ずるなり。復三法有り、[五〇]一に至心、二に淨心、三に淨莊嚴なり。復三法有り。[五一]一に學戒戒、二に學心戒、三に學慧戒なり。復三法有り、一に樂を受けて貪逸を生ぜず、二に苦を受けて惱恚を生ぜず、三に不苦不樂にして捨を修集するなり。復三法有り、一に因を轉ず、造作せざるが故に、二に煩惱を轉ず、相を觀ぜざるが故に、三に三世を轉ず、願求無きが故に。復三法有り、一に眼空、二に色寂靜、三に受に住處無きなり。復三法有り、一に戒を藏し、二に定を護り、三に慧を觀ずるなり。復三法有り、一に憶持して法を念じ、二に思惟して法を觀じ、三には如法に住するなり。復三法有り、一に音聲の因緣による聲聞の解脫、二に十二因緣による緣覺の解脫、三に六度の因緣による菩薩の解脫なり。復三法有り、[五二]一に施、

【四四】　同に誠諦・眞實・如常を擧ぐ。

【四五】　また法聚。法藏に同じ。諸種の法門藴積するを法藴と名く。

【四六】　梵に達磨䭾都(Dharma-dhātu)、法性、實相など云ふに同じ。

【四七】　宋譯に、二者善能長₂養諸緣₁、三者和合互相涉入とす。

【四八】　宋譯に善解諸結と善調其心とを擧ぐ。

【四九】　同に、一者建₂立地位功德₁、二者能離₂地位過失₁、三者於₂地地中₁善能勝進とす。

【五〇】　同に、一者內心起₂勝上智₁、二者深心起₂差別智₁、三者方便起₂安立智₁とす。

【五一】　戒・定・慧の三學をいふなり。宋譯に一者定淸淨已、得₂增上戒學₁、二者慧圓滿已、得₂增上心學₁、三者解脫圓滿已、得₂增長慧學₁とあり。三學共に增長の力あればなり。

【五二】　宋譯によれば、一切の珍寶を捨つる捨と、妻子眷屬を捨つる大施と、身分頭目手足を捨つる極捨となり。

有り、一に煩惱を捨せず、二に修善の莊嚴を捨せざるなり。復二法有り、一に處と非處とを知り、二に諸の善根を以て菩提に回向するなり。復二法有り、一に菩提心は猶ほ幻相の如しと觀じ、二に無上菩提の莊嚴を修向するなり。復二法有り、一に諸の衆生及び菩提は等しくして差別無しと觀じ、二に諸の衆生菩提に因緣して解脱を得と知るなり。復二法有り、一に法の無生を知り、二に善法の爲の故に莊嚴を修するなり。復二法有り、一に不可說の法をば而も能く宣說し、二に一切の衆生は悉く同一乘なり。

『復三法有り、一に初めて菩提の心を發し、二に善友に親近して心に悔を生ぜず、三に大悲心を修集して退轉せざるなり、復三法有り、一に慳悋を破壞し、二に一切に惠施し、三に菩提を攝取するなり。復三法有り、一に淨戒を具足し、二に毀禁を調伏し、三に菩提に回向するなり。復三法有り、一に心瞋恨せず、二に瞋恚の者を調し、三に菩提に迴向するなり。復三法有り、一に生死中に於て心に悔退無く、二に甘樂して他所作の事業を營み、三に菩提に迴向するなり。復三法有り、一に三昧の定を得、二に憍慢を生ぜず、三に菩提に迴向するなり。復三法有り、一に多聞を求め、二に得已つて憍慢を生ぜず、三に菩提に迴向するなり。復三法有り、[40]一に生緣、二に法緣、三に無緣なり。復三法有り、[41]一に自悲、二に悲他、三に自他を離るるの悲なり。復三法有り、一に自利の爲に智慧を修集し、二に是の智慧を以て衆生を轉化し、三に自利利他するなり。復三法有り、一は過去已に盡きたるを知り、二に未來は生無きを知り、現在の住まる無きを知るなり。復三法有り、[42]一に正定の者の爲に慈心を修集し、邪定の者の爲に悲心を修集し、三に不定の者の爲に解脱を修集するなり。復三法有り、一に身を淨め、二に口を淨め、三に意を淨むるなり。復三法有り、一に不淨觀を修するは貪欲を壞せんが爲なり、二に慈を修するは瞋恚を壞せんが爲なり。三に十二因緣を觀ずるは無明を壞せんが爲なり。復三法有り、[43]一に安、二に樂、三に知足なり。復三法有り、一に聞

【四〇】 三種の慈悲なり、宋譯に、緣衆生慈・緣法之慈・無緣之慈とす。十方の衆生を見ること、親子兄妹の如く、之を緣じて常に樂を與へ苦を拔かんとする心を緣衆生の慈悲とす。これ凡夫又は有學の、未だ煩惱を斷ぜざる人の起す所たり。次に既に煩惱を斷じて法空に達せる三乘の聖人が、衆生の法空を知らずして苦を拔き樂を得せんとするを憫みて、其の意に隨つて苦を拔き樂を與ふるを法緣の慈悲とは云ふ。第三の無緣の慈は三二參照。

【四一】 宋譯に、一者自所レ作故、起二於悲心一、二者爲二他作一故、起二於悲心一、三者離二二邊一故、起二大悲心一とあり。

【四二】宋譯によれば、正定の衆生には方便慈を、不定の衆生には解脱慈を、邪定の衆生には大救度慈を起すなり。

【四三】 宋譯には利益・歡喜・淸涼を擧ぐ。

り。復二法有り、一に出家に入り、二には既に出家し已つて心に愛樂を生ずるなり。復二法有り、一に[三三]身念を修し、二に念處有ること無きなり。復二法有り、一に受處を念じ、二に[三四]念處有ること無きなり。復二法有り、一に心處を念じ、二に[三五]念處有ること無きなり。復二法有り、一に法處を念じ、二に[三六]念處有ること無きなり。復二法有り、一に不善の法を遠離し、二に能く善法を生ずるものに親近するなり。復二法有り、已生の惡法を遠離し、二に已生の善法を護持するなり。復二法有り、一に未生の善法をして生を得しめ、二に增廣せしめんが爲に之を擁護するなり。復二法有り、一に大神通を獲、二に得已つて衆生を敎化するなり。復二法有り、一に法界に安住し、二に遍く諸佛の世界を見るなり。復二法有り、一に信心不動、二に不信の者を化して己が信に同じからしむるなり。復二法有り、一に心を淨め、二に狂亂の人を敎化するなり。復二法有り、一に精進を勤め、二に懈怠を化するなり。復二法有り、一に無礙の智慧を具足し、二に彼の無明の衆生を化するなり。復二法有り、一に界を觀じ、二に緣を觀ずるなり。復二法有り、一に智の莊嚴を求め、二に其の心悔ひざるなり。復二法有り、一に諸の煩惱を觀じ、二に煩惱より出で已つて解脫を了知するなり。復二法有り、[三七]一に一切法の解脫、二に煩惱もて三界に合せざるなり。

[三八]復二法有り、一に菩提を莊嚴し、二に菩提を修學するなり。復二法有り、一に[三九]盡智、二に無生智なり。復二法有り、一に聖道の方便を觀じ、二に生死の方便を觀ずるなり。復二法有り、一に畢竟道、二に退轉道を知るなり。復二法有り、一には如法に住し、二に諸法の中に於て著見を生ぜざるなり。復二法有り、一に緣に從つて生滅し、二に緣に從つて解脫するなり。復二法有り、一に魔業を知り、二に知り已つて離るるなり。復二法有り、一に恚に於て忍を生じ、二に忍に於て愛を生ずるなり。復二法有り、一に菩提の爲の故に莊嚴し、二に莊嚴を修すと雖も心に貪著無きなり。復二法

【三三】以下の四對は四念處觀を擧ぐ。初の二句は宋譯に、一者常作身念處觀、二者身住清淨とす。念處とは智（即ち念）を以て境（即ち處）を觀察するをいふ。

【三四】宋譯相當文に、二者於苦樂等受而無領納とす。

【三五】宋に心住清淨とす。

【三六】同に二者常起決擇法智とす。

【三七】宋譯に、一者一切法不和合、本離煩惱故。二者於三界和合、爲斷一切衆生諸煩惱故とす。

【三八】宋譯、卷第十一。

【三九】煩惱を斷盡し了れる時に生ずる自信の知なり、即ち一切の煩惱を斷盡すれば、我已に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修せりと知るを盡知(Kṣayajñāna)と云ふ。この知と斷と證と修との事終れば、更に知斷修證の事なきを無生といふ。即ち我れ已に苦を知る、更に復知るべからず、我れ已に集を斷ず、更に復斷ずべからず、我已に滅を證る、更に復證すべからず。我已に道を修す、更に復修すべからずと知る智慧をば無生智(Anutpādajñāna)といふ。

し、二には至心に淨を修するなり。復二法有り、一に恩を知り、二に恩を念ずるなり。復二法有り、一に一切の過を說き、二に而も之を遠離するなり。復二法有り、一に自ら聖行を修し、二に他を化して行ぜしむるなり。復二法有り、一に善法を願求し、二には心に厭足無きなり。復二法有り、一に惡法を遠離し、二には善法に親近するなり。復二法有り、一に佛の說法を請ひ、二には至心に聽受するなり。復二法有り、一に一切法の不生不滅を知り、二に字句の義を說くなり。復二法有り、[二二]一に衆生無きを知り、二に已が善根を以て衆生と共にするなり。復二法有り、一に諸相を遠離し、二に深く三十二相を求むるなり。復二法有り、一に空を觀じ、二に將て衆生を護るなり。復二法有り、[二三]一に無願を修集し、二に衆生に及ぶを願ふ。復二法有り、一に一切の善を修し、二に諸衆生の同じく善根を修せんことを願ずるなり。復二法有り、[二三]一に智慧無礙、二に諸有の身を受くるなり。復二法有り、[二四]一に不動、二に不悔なり。復二法有り、一に慚、二に愧なり。復二法有り。一に寂靜を樂み、二に[二五]靜法を求むるなり。復二法有り、一に無諍三昧を修集し、二に[二六]衆生無きを觀ずるなり。復二法有り、一に少欲、二に知足なり。復二法有り、一に他の罪を覆藏し、二に已が過を顯露にするなり。復二法有り、[二七]一に十二因緣を觀じ、二に深く信ずるなり。復二法有り、一に無我、二に無衆生なり。復二法有り、一に自の煩惱を防ぎ、二に他の煩惱を壞するなり。復二法有り、一に作無く受無きを觀じ、二に樂んで善法を修するなり。復二法有り、一に生死の過を觀じ、二に生死を斷ぜざるなり。復二法有り、一に[二八]自ら生死を樂み、二に諸の衆生を化して生死を度せしむるなり。復二法有り、一に波羅蜜を求め、二に求め已つて[二九]處無きなり。復二法有り、一は[三〇]智を求め、二に他を化して已が智に同ぜしむるなり。復二法有り、一に供養を求めず、二に[三一]供養の爲の故に諸の業を造作するなり。復二法有り、一に恩有る處に於て常に之に報ひんと欲し、二に恩と無恩とに於て等しく之に報ずるなり。復二法有り、一に不放逸を修し、二に[三二]無緣の慈を修するな

【二一】宋に善解迴向とす。
【二二】宋譯に一者慧起悉無所樂、二者方便而有所樂とあり。
【二三】宋譯に一者修習無願、二者積集所生之智とあり。
【二四】宋譯に無著無動を擧ぐ。次には無慢愛樂を揭ぐ。
【二五】宋譯に領納寂靜功德とす。
【二六】同に自度復度一切衆生と。
【二七】宋に安定伺察を擧ぐ。
【二八】宋譯相當文には出離輪廻とす。
【二九】同に如所說住とす。
【三〇】同に得現量智とす。
【三一】同に勤求正法とす。
【三二】諸佛の慈悲なり、諸佛は有爲無爲性の中に住せず、諸過、現、未の中に住せず、諸緣の顚倒虛妄なるを知るが故に所緣なきも、衆生は諸法の實相を知らず、取捨分別するを以て、佛は心に衆生を緣ずることなくして、自然に一切衆生に拔苦與樂の益を受けしむるをいふ。

功徳を藏せざるなり。復二法有り、一には身を淨め、二には[一一]三不善根を遠離するなり。復二法有り、一に身は猶ほ草木の如しと觀じ、二に心を淨めんが爲の故に善法を修行するなり。復二法有り、一に口を淨め、二に[一二]四過を遠離するなり。復二法有り、一に一切法は悉く不可說なりと觀じ、二に聲は響の如しと觀ずるなり。復二法有り、一に淨心、二に無明・嫉妬・邪見を遠離するなり。復二法有り、一に內淨、二に[一三]外に行處無きなり。復二法有り、一に慈を修し、二に怨親の想を遠離するなり。復二法有り、一に衆生は猶ほ虛空の如しと觀じ、二に慈を修するなり。復二法有り、一に悲心を捨てず、二に善を求めて悔ひざるなり。復二法有り、一に能く不調を調し、二に調するの時悔ひざるなり。復二法有り、一に法を持し、二に持法の者を護るなり。復二法有り、一に法を樂み、二に法を護るなり。復二法有り、一に人の善を稱揚し、二に樂んで他の過を藏す。復二法有り、一に貪を離れ、二に瞋を離るるなり。復二法有り、一に衆生を捨てず、二に捨を修するなり。復二法有り、[一四]一に佛を念じ、二に無念處を知るなり。復二法有り、一に[一五]身を觀じ、二に三十二相を求むるなり。復二法有り、一に法を念じ、二に諸の衆生を化して法の中に住せしむるなり。復二法有り、一に無貪處を觀じ、二に貪者の所に於て悲心を生ずるなり。復二法有り、一に菩薩僧を念じ、二に[一六]無退の僧に依る。復二法有り、一に無僧を觀じ、二に[一七]四沙門果を擁護するなり。復二法有り、一に戒を念じ、二に菩提心の宣說すべからざるを知るなり。復二法有り、一に戒の無作を觀じ、二に毀禁の者を護るなり。復二法有り、一に施を念じ、二に施し已つて悔無きなり。復二法有り、一に煩惱を遠離し、二に煩惱を離るるが故に正法を演說す。復二法有り、一に天を念じ、二に寂靜を樂むなり。復二法有り、一に[一八]念心を具足し、二に亂心を擁護するなり。復二法有り、一に功徳もて莊嚴し、二に智慧もて莊嚴するなり。復二法有り、一に[一九]造作無きを觀じ、二に樂んで善法を修するなり。復二法有り、一に[二〇]縛無く、二に縛の解脫なり。復二法有り、一に誑心を遠離

【一一】貪・瞋・癡の三毒を又三不善根といふ。
【一二】妄語・兩舌・惡口・綺語を口の四過といふ。
【一三】宋譯に二者外無所行とす。
【一四】宋譯に、一者修二念佛觀一、二者住二於無念一而起二念心一とす。無念とは妄念無きをいふ。
【一五】同譯に、一者觀二於法身一とす。
【一六】不退轉の菩薩衆をいふ。
【一七】同譯には一者觀二察無爲一とす。
【一八】同譯には一者住二正念慧一とし、次句を散亂心者、令レ住二念處一とす。
【一九】同に善修二無加行智一とす。
【二〇】同に超二越諸著一とす。

は諸の衆生悉く我有ること無しと觀ずるなり。復二法有り、[六]一は菩提の心を捨てず、二は法の平等を觀ずるなり。復二法有り、一は善根を淨め、二は作無く淨無きなり。復二法有り、一は善法の爲の故に莊嚴を修し、[七]二は畢竟するなり。復二法有り、一は自身の畢竟、二は衆生の畢竟なり。復二法有り、一に內淨、二に外淨なり。復二法有り、一に罪を作さず、二に作し已つて悔ゆるなり。復二法有り、一に能く布施し、二に報を求めざるなり。復二法有り、一には平等に施し、二には能く迴向するなり。復二法有り、一に持戒、二に善果を求めざるなり。復二法有り、自ら譽めず、二に他を毀せざるなり。復二法有り、一に忍辱、二に軟語なり。復二法有り、一には貪に於て貪せず、二に瞋に於て瞋らざるなり。復二法有り、一には善法の爲に勤めて精進を修す、二に懈怠を輕んぜざるなり。復二法有り、一に身寂靜、二に心寂靜なり。復二法有り、一に禪支を求め、二に心を調伏するなり。復二法有り、一に樂んで禪定に在り、二に欲界を厭はざるなり。復二法有り、一に法を求め、二に法を樂むなり。復二法有り、一に樂んで法を觀じ、二に法を欲するなり。復二法有り、一には樂んで善友を求め、二には恭敬供養するなり。復二法有り、一には至心に聽き、二には至心に受くるなり。復二法有り、一には數諮問し、二には如法に住するなり。復二法有り、一には法を知り、二には義を知るなり。復二法有り、一には聞き已つて厭くこと無く、二には知り已つて厭く無きなり。復二法有り、一に善を修し、二に惡を離るるなり。復二法有り、一に正法を樂說し、二に受法の者に於て憐愍の心を生ずるなり。復二法有り、一に法に於て慳悋の心無く、二に說く時に食想有ること無きなり。復二法有り、一には至心に聽き、二には至心に受くるなり。復二法有り、一に五蓋を離れ、二に七覺を修するなり。復二法有り、一には喜、二には樂なり。復二法有り、[八]一に知り已り、二に時を知るなり。復二法有り、一に果法を信じ、二に善業を作すなり。復二法有り、[九]一に聖性を斷たず、二に實語するなり。復二法有り、一には說の如くに住し、二には[一〇]如來の

【六】宋譯に一者心無二厭離一、二者所修方便而不二虛假一とし、次に一者內心淸淨而爲二根本一、二者無レ作無二不作一、故修二諸福行一を擧げ、次に一者勤二修善根方便一、二者所修方便而令二畢竟一とす。
【七】同に一者無二戲論一故、而修二方便一、二者所修方便住二畢竟一故、其心寂靜とあり。
【八】宋譯相當文に一者知レ法知レ量、二者知二自境界一とす。
【九】同に一者出二誠實言一、二者不レ誑二聖人一とす。
【一〇】同に二者不レ壞二佛眼一とす。

切を知り已つて貪の想を生ぜず。復一法有り、未だ學ばざるを學び已つて心に悔を生ぜず。復一法有り、既に學び知り已つて心輕慢ならず。復一法有り、罵辱に遇ひ已つて心に瞋を生ぜず。復一法有り、供養・罵辱にも其の心無二なり、復一法有り、正法を説くを聞き稱讃して善哉といふ。復一法有つて信心不退なり。復一法有り、菩提道の爲に莊嚴を求む。復一法有り、供養を受け已つて常に己心を淨くす、施主をして大利益を得しめんが爲なり。復一法有つて七財を具足す。復一法有り、能く衆生の貧窮困苦を破す。復一法有り、善方便を以て衆生を調伏す。復一法有り、四攝の法を以て衆生を攝取す。復一法有り、衆生と共に諍訟せず。復一法有り、法を聞くの時、法師の所に於て其の短を求めず。復一法有り、未だ無上沙門の果證を得ざるも心に悔を生ぜず。復一法有り、常に世間に行くも、[五]八法の爲に染汚せられず。復一法有つて常に己が過を觀ず。復一法有り、罪を擧ぐる者に於て瞋恚を生ぜず。復一法有り、世間の法を見て其の心に捨を生ず。復一法有り、善友を誑かず。復一法有り、先づ其の心を淨くし、他を教へて淨ならしむ。復一法有り、利養の爲に淨戒を受持せず。復一法有り、善法を增さんが爲に寂靜を修集す。復一法有り、功德を淨めんが爲に莊嚴を修す。復一法有り、智慧を淨めんが爲に莊嚴を修す。復一法有り、無想三昧の方便を修集す。復一法有りて法の如くに忍ぶ。復一法有つて三解脱を修す。復一法有つて處・非處を知る。復一法有りて舍摩他を修す、毘婆舍那を莊嚴せんと欲するが爲なり。復一法有つて解脱を知る。復一法有つて三世の等しきを觀ず。復一法有り、謂はく一切法界を分別せず。復一法有り、一切の法性は不生不滅なり。菩薩摩訶薩は是の百法を觀ず、是の如きを名けて大乘を攝取すと爲す』。

爾の時世尊、復海慧菩薩に告げて言はく『善男子、二法有つて大乘を利益す。一は樂んで佛法を念じ、二は樂んで聲聞を離る。復二法有り、一は解脱を擁護し、二は能く法を演説す。復二法有り、一は菩提心を求め、二は衆生を調伏す。復二法有り、一は菩提心は猶ほ幻相の如しと觀じ、二

[五] また八風ともいふ、利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂は、世間の樂む所と憎む所とにして、能く人心を煽動染汚す。

一法有り、一切の財に於て貪惜の想無し。復一法有り、自ら戒を持し已つて能く毀禁を化す。復一法有り、自ら忍を修し已り、能く衆生を化して瞋心を離れしむ。復一法有り、少利益を得るも、大恩の想を生ず。復一法有り、少しく恩分を得るも大報の想を生ず。復一法有り、自ら淨戒を持して毀禁を輕んぜず。復一法有りて憍慢を破す。復一法有つて至心に聽法の人を求覓す。復一法有りて惡知識を離る。復一法有りて至心に善を修す。復一法有つて他の意に隨はず。復一法有つて諸根を調伏す。復一法有り、法師に於て心に如來の如き想あり。復一法有り、身命を惜まずして正法を護持す。復一法有り、世法を行じて沾汚を爲さず。復一法有り、身命を惜まずして正法を求む。復一法有り、衆生を調伏し苦を受けて恨まず。復一法有り、[三]如來の現在若しは涅槃後に塔像等を供養して二有ること無し。復一法有り、衆生請はざるに樂んで善友と爲る。復一法あり、好物中に於て心に貪著無し。復一法有り、樂んで出家を念ず、復一法有り、樂んで人の善を稱す。復一法有り、樂んで菩提の法を莊嚴することを求む。復一法有り、同師同學に於て心に嫉妬無し。復一法有り、衆生を教化し菩提心を發さしめて心に悔退無し。復一法有つて他の過を覆藏す。復一法有つて一切語を求む。復一法有りて一切の作を求む。復一法有り、所謂實語なり。復一法有り、發言の後要ず其の事を終ふ。復一法有り、善法の所に於て心に厭足無し。復一法有り、所得の物に隨つて悉く人と共にす。復一法有つて善く魔界を知る。復一法有り、憍慢を破壞して眞實の知を修す。復一法有つて心に寂靜を樂む。復一法有つて我と我所とを離る。復一法有つて自ら讃歎せず。復一法有り、俗に隨つて行ず。復一法有り、正命を修し已つて寂靜を樂む。復一法有り、淨戒を持し已つて善法を思惟す。復一法有り、多聞を修し已つて憍慢を生ぜず。復一法有り、[四]善行を修し已つて卽ち初地に住す。復一法有り、空三昧を修して法性を觀ず。復一法有り、供養を得已つて其の心高からず。復一法有り、樂んで世を說く者と與に同止せず。復一法有り、如法の物を得ては同學と共にす。復一法有り、眞實の方便なり。復一法有り、一

【三】宋譯相當文に「於二現在世及已涅槃諸佛如來一、承事供養、而無二厭足一」とあり。

【四】同譯相當文に「如レ理正修二瑜伽行一地。」とあり。

卷の第十

海慧菩薩品　第五之三

[一]爾の時海慧菩薩、佛に白して言はく『世尊、是の大乘經は能く多く無量の衆生を利益す、何を以ての故に、一切の衆生は大乘に因るが故に、人・天の樂及び涅槃の樂を得ればなり。夫れ大乘は何の法を攝取し、何の法を利益し、何の法を得がたく、何の法を障礙し、何の因縁の故に名けて大乘と爲すや』。

佛の言はく『善男子、一法有つて大乘を攝取す、所謂初めて菩提の心を發し、已に發心し已つて不放逸を修するなり。復一法有りて明に業果を信ずるなり。復一法有つて十二縁を觀ずるなり。復一法有り、諸の衆生に於て其の心平等にして、樂んで大慈を修するなり。復一法有り、謂はく菩提の心を退失せざるなり。復一法有り、所謂佛を念ずるなり。復一法有り、如法に住し已つて正法を念ずるなり。復一法有り、不退の心を以て衆僧を念ずるなり。復一法有り、道心を失せずして淨戒を念ずるなり。復一法有り、煩惱を遠離して心に捨を念ずるなり。復一法有り、無量の寂靜の身を得んと欲して專ら天を念ずるなり。復一法有り、念じて一切衆生を安隱ならしめんと欲す。復一法有り、勸めて精進を行ずるなり。復一法有り、衆生をして悉く解脱を得、解脱を得已つて喜樂を受けしめんと欲するなり。復一法有り、樂んで正法を求むるなり。復一法有り、貪心を遠離して衆の爲に法を說くなり。復一法有り、法を聽く者に於て愛念の心を生ずるなり。復一法有り、法を說く者に於て樂んで供養をなすなり。復一法有り、正法の中に於て藥樹の想を生ずるなり。復一法有り、[二]自己の身に於て大醫の想を生ずるなり。復一法有り、至心專念して正法を護持するなり。復一法有り、三寶を紹隆して斷絶せしめざるなり。復一法有つて懈怠を遠離す。復一法有り、所謂知足なり。復

【一】宋譯、卷第十。この卷の前半、法數を羅列するところは、本文の理解に資する所ありと覺しきもの丶み、同譯と對照し、一一の相異及び出入に就ては煩を避けて略したり。

【二】宋譯に已說法者如醫王想とあり。

りき、無所得の故に便ち中より起ちたり』と。文殊師利の言はく『如來は眞實に道場菩提樹に坐したまへるや、何の故に而も坐より起ちぬと言ひたまふや。世尊、如來若し菩提樹下に坐したまへば、如來世尊は則ち[一五〇]二相有り、一は如來、二は菩提なり。如來世尊は已に二相を離れたまふ』と。佛の言はく『善男子、菩提と衆生と一切法性と等しくして差別無く一味一性なり、如來は菩提樹下に坐して是の如きの法を見たり、是の故に名けて菩提を逮得すと爲す。我れ都て菩提を離れて外に別に一法の有るを見ず、一切法は皆悉く平等なりと見、而も是の平等は數に入らず、是の故に平等を名けて[一五一]無礙と爲す。是の因緣を以て如來を名けて一切無礙と爲す。善男子、若し能く是の如く如來を見なば、是の人卽ち如來の解脫を得、解脫を得已つて則ち能く是の如く眞實に知見せん』と。

是の法を說きたまへる時、海慧菩薩所將の眷屬諸菩薩等、歡喜踊躍して各是の言を作せり『我等今大利益を得、現に釋迦牟尼如來を見、及び文殊師利菩薩を見まつる。世尊、是の經典所住の世界に隨つて、當に知るべし、其の土は大利益を得んことを。若し是の經典を供養する有り、及び受持・讀誦・書寫して其の義を廣說する有らば、亦利益を得ん』と。爾の時世尊、諸の菩薩に告げて言はく『汝今何等の利益を得たるを知るや。』諸菩薩の言はく『世尊、我等當に是の如きの義を以て文殊に諮問せん』とて、諸菩薩の言はく『文殊師利、云何が名けて大利益を得と爲すや』。文殊師利の言はく『十利益有り、何等をか十と爲す。(1)佛世に出でたまふを見、(2)已つて信を生じ、(3)既に信を生じ已つて正法を聽受し、(4)正法を聞き已つて永く疑心を壞し、(5)疑心を壞し已つて[一五三]清淨命を得、(6)清淨命を得已つて[一五四]利の爲に說法せず、[一五五](7)彼法を聞き已つて菩提心を發し、(8)既に發心し已つて堅固不退となり、(9)心不退となり已つて如法に住し、(10)如法に住し已つて無生忍を得。諸善男子、是を十利の不可思議と名く』と。是の法を說きたまへる時、三萬六千の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三千大千世界の大地六種に震動して、金色の光を出しぬ。

大方等大集經卷九

【一五〇】宋譯に二對礙とす。

【一五一】宋譯に彼平等法、是故如來說名ニ無爲一、如來得ニ是無爲一超ニ越一切有爲法一と。

【一五二】次の十種の利益は、宋譯に依つて之を分てり。

【一五三】宋譯には於中出家といふ。

【一五四】同に淨命自資とす。

【一五五】同に七者淨命資故、能善說法とし、本經の第七を第八とし、本經の第十を缺く。

と。持炬菩薩の言はく『世尊、闇を破らずば法を護る能はず、我れ今闇を破せるが故に能く法を護る』と。[138]電光菩薩の言はく『世尊、若し他の心に隨はば法を護る能はじ、我れ自意に隨ふ故に能く法を護る』と。[139]遍藏菩薩の言はく『世尊、諸根を調せざれば法を護る能はじ、我れ今調伏したるが故に能く法を護る』と。淨光菩薩の言はく『世尊、若し種種諸法の相を作さば法を護る能はじ、我れ今法に於て種種の相無きが故に能く法を護る』と。[140]增行菩薩の言はく『世尊、心狂亂せば法を護る能はじ、我れ三昧を修するが故に能く法を護る　と。[141]商主菩薩の言はく『世尊、道を知らざれば法を護る能はじ、我れ今了知するが故に能く法を護る』と。[142]善念菩薩の言はく『世尊、疑心有るは法を護る能はじ、我れ已に疑を斷ぜるが故に能く法を護る』と。[143]善見菩薩の言はく『世尊、如法に住せざれば法を護る能はじ、我れ如法に住するが故に能く法を護る』と。[134]慧光菩薩の言はく『世尊、愚癡の人は法を護る能はじ、我れ今智を修せるが故に能く法を護る』と。[145]平等菩薩の言はく『世尊、怨親の相を取らば、法を護る能はじ、我今平等の故に能く法を護る』と。[146]法行菩薩の言はく『世尊、衆生の諸根境界を知らざれば法を護る能はじ、我れ今之を知るが故に能く法を護る』と。[147]神通王菩薩の言はく『世尊、我と我所とを見なば法を護る能はじ、我れ今見ざるが故に能く法を護る』と。[148]師子吼菩薩の言はく『世尊、佛性を知らざれば法を護る能はじ、我れ今之を知るが故に能く法を護る』と。彌勒菩薩の言はく『世尊、若し菩提に遠ざかれば法を護る能はじ、我れ今已に近づけるが故に能く法を護る』と。[149]功德聚菩薩の言はく『世尊、若し無量の功德聚無くんば法を護る能はじ、我れ今已に有るが故能く法を護る』と。文殊師利の言はく『世尊、是の如き等の語は悉く是れ謬語なり、何を以ての故に、如來世尊は道場菩提樹下に坐して一法をも得たまはず、汝云何が我れ當に護法すべしと言ふや。世尊、我れ諸法に於て不取不捨なり、衆生の爲の故に悲心を修集して護らず捨てず』と。

爾の時佛、文殊師利を讃へて言はく『善哉善哉、善男子、如來昔菩提樹下に坐して實に所得無か

【一三八】宋譯に電天といひ、法中若起二比量智一者、斯卽不レ能三護二持正法一、我已證二得現量之智一、於二諸法中一、不レ起二他信一とす。
【一三九】宋譯に普密といふ。
【一四〇】宋譯に最勝步といふ。
【一四一】宋譯に導師といふ。
【一四二】宋譯に善慧といひ、疑心とあるを猶豫心とす。
【一四三】宋譯に普照といふ。
【一四四】宋譯、無礙慧といふ。
【一四五】次の菩薩を、同譯には明觀と無礙慧とし、所說共にやゝ異る。
【一四六】宋譯、行淨慧といふ。
【一四七】宋譯、莊嚴土といふ。
【一四八】宋譯、師子幢といふ。
【一四九】宋譯に功德光王といふ。

於て求めず取らざる、是を護法と名く」と。

『善男子、爾の時彼の佛、是の法を說きたまふ時、三萬二千の菩薩は無生法忍を得たり』と。

[一三一]海慧菩薩の言はく、『世尊、我れ佛所說の義を解する如くならば、[一三二]法及び非法、是を名けて法と爲す。何を以ての故に、若し法と非法とを分別する有らば、是の人をば正法を護持すと名けず。若し法相を作せば、是を非法と名くればなり。世尊、若し能く了達して一切の法は是れ無法なりと見れば、是を第一眞實の義と名く。世尊、若し法無く非法も無ければ即ち是れ[一三三]無數なり、若し無數ならば即ち是れ實性、實性は名けて虛空と爲す。虛空の性は無邊無節なり、法性も亦爾り。法性と實性とは差別有ること無し、何を以ての故に、無邊無際の故に。若し菩薩有りて是の如き等を見れば即ち眞實の見なり。世尊、我れ一法をも見ず、見ざるを以ての故に增有るを見ず減有るを見ず。世尊、我是の如くに見るも、將た如來の說を誹謗せざるや、是れ實の見なるや不や』。『善男子、是の如きの見は如來を謗せず、是れ眞實の見なり』。是の法を說きたまへる時、海慧菩薩及び萬の天人無生忍を得たり。[一三四]『善男子、汝知れ、爾の時の海慧菩薩とは異人ならんや、即ち我が身是なり、是の故に我れ無量世中に於て求めたる所の正法を今以て汝に付す』と。

爾の時衆中に六萬億の諸菩薩等有り、同じく共に聲を發して佛に白して言はく『世尊、我等當に共に正法を擁護して受持廣說すべし』と。佛の言はく『善男子、汝今云何が如法に住して正法を護持するや』。[一三五]山王菩薩即ち是の言を作さく『世尊、身命を惜む者は法を護る能はじ、我れ命を惜まずして如法に住せん。故に能く法を護る』と。[一三六]功德山王菩薩の言はく『世尊、利に貪する有らば法を護る能はじ、我れ今利に貪する無きが故に能く法を護る』と。[一三七]寶幢菩薩の言はく『世尊、法と非法との二相有るを見ば法を護る能はじ、我れ二相無き故に、能く法を護る』と。福德藏菩薩の言はく『世尊煩惱を具する者も法を護る能はず、我れ智力有つて已に之を遠離するが故に、能く法を護る』

【一三一】以下宋譯は尙ほ法語（即ち本經の法慧）菩薩の言として、前文に續かしむ。

【一三二】この句、宋譯に即一切法無法、若無法即有法、とあり。以下も說相やゝ異る。

【一三三】以下、宋譯に無二法可一レ數、……住二實際一、……即是無際。何以故、虛空際諸法實際云云とす。

【一三四】宋譯は是を功德光王（本經の功德寶光）菩薩に對する佛の說法とす。從て次に海慧菩薩とあるも宋譯は法語菩薩とす。

【一三五】宋譯に山自在王といふ。

【一三六】宋譯に吉祥寶王といふ。

【一三七】宋譯によれば、二相を離るることを說けるは大幢にして、煩惱を遠離することを說けるは勝密菩薩たり。

『善男子、過去無量阿僧祇劫に佛有し、號して[一二一]大知聲力如來、應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ひ、國を淨光と名け、劫を[一二二]高顯と名けたり。其の土純ら是れ青琉璃寶たり、諸の菩薩衆は一切無量の勢力を成就し神通を具足し智慧無礙にして、一切の菩薩悉く[一二三]天身を受け至心に聽法し、出家と在家の差別有ること無かりき。爾の時世尊、護法の爲の故に諸の大衆のために正法を頒宣したまひぬ。彼の時會中に一菩薩有り名けて[一二四]法慧と曰へり。佛に白して言はく「世尊、何等か是れ法にして而も擁護と言ふや」。佛の言はく、「善男子、夫れ[一二五]六入は樂んで境界を求む、若し能く遮止する、是を護法と名く。善男子、[一二六]眼識の色に於ける、是を非法と名け、若し能く遠離せば、是を護法と名く。乃至意識の法に於けるも亦復是の如し。善男子、若し[一二七]眼の空なるを見、見已つて色を觀ぜず識に著せざれば、是を名けて法と爲す。若し能く眞實に是の如きの法を知れば、是を護法と名く。乃至若し意の空なるを見、見已つて法を觀ぜず、識に著せざれば、是を名けて法と爲し、若し能く眞實に是の如き法を知れば、是を護法と名く。善男子、若し[一二八]法能く法を生じ、是の法中に於て求めず取らず、心貪著せざれば、是を護法と名く。若し法能く邪見を生ずる見る有るも、是の見の中に於て不求・不取、心貪著せざれば、是を護法と名く。[一二九]若し無明有つて心を淨むる能はざるも、是の垢中に於て求めず取らず、心貪著せざれば、是を護法と名く。

『善男子、若し[一三〇]一法有り、之を求取したる後、人に施す能はざれば、是の法は非法にして亦比尼に非ず、若し能く施せば即ち是れ正法、即ち是れ比尼なり。若し取無く求無く施無き有らば、即ち是れ正法、即ち是れ比尼なり。夫れ求取は即ち是れ非道、若し施せざれば即ち是れ非法即ち比尼に非ず、若し能く施せば即ち是れ正法、即ち是れ比尼なり。不取・不求・不施なれば即ち是れ不出・不生・不滅なり。若し出生滅に非ずんば云何が施すべけん。施すべからざるをば即ち名けて法と爲し、乃ち比尼と名く。何を以ての故に、未だ煩惱を生じて因緣を障ふることを作さざるが故に、是の故に無盡なり。無盡とは即ち無出、無出は名けて法と爲し、名けて比尼と爲す。是の如きの法に

【一二一】宋譯に大智力聲如來とす。
【一二二】同に喜上といふ。
【一二三】同に悉以二天子之狀一とす。
【一二四】同に法語とす。
【一二五】眼・耳・鼻・舌・身・意の六をいふ。
【一二六】眼の物(即ち色)を見るはたらきを眼識といふ。この句、宋譯に眼根・色境・眼識、此三非レ法非二非法一故とす。
【一二七】宋譯に若能了二知眼色空一已、即眼及色無レ所二分別一、眼識無住、此即正法とす。耳・鼻・舌・身・意に就ても亦同じ。
【一二八】宋譯に若有レ法、於二諸法中一而可レ轉者、彼法即無二所護一。無二所取一、如レ是解者、此即是爲二護持正法一とす。
【一二九】宋譯相當文に、以二其無智癡障一故、心不二清白一、若彼無智癡障、無所護無所取云云とす。
【一三〇】以下宋譯相當文に若法有レ集有レ散、即非レ法非レ律、…。何等法集散、謂有爲道諸法集散、…。何無レ集無レ散、…若無レ取即無レ生、由レ無レ生即無レ集亦無レ散、…。即是法是律。何者是法是律、謂自性不生、諸煩惱等、不レ令二生起一、此即名爲二法是律一、…即不生不滅者即是無盡云云とあり。

るは、是の人皆正法を護るに由る。常に諸佛・善知識に遇ひ、常に無上眞實の道を聞き、速に無量の陀羅尼を得るは、是の人皆正法を護るに由る。身口意の戒清淨なるを得、大神通を具して諸國に遊び、菩提を退せずして六度を具するは、是の人皆正法を護るに由る。世界の微塵は說き盡すべからず、護法の功德も量るべからず、不可宣說の智を得んと欲せば、應當に心を堅くして正法を護るべし』と。

爾の時、衆中に一菩薩有りて功德寶光と名く。卽ち坐より起ち、頭面敬禮し、長跪合掌し、前んで佛に白して言はく『世尊、如來は是の大經典中に於て、說いて言はく、佛法は宣說すべからずと。若し說くべからずんば云何が護るべけん』佛の言はく『善哉善哉、善男子、是の如く是の如し、如來の正法は實に不可說なり、如來の覺知も說法すべからず、是の如き正法は不可說なりと雖も而も字句[二八]有り、字句を以ての故に宣說するを得べし。是の如き字句を受持讀誦書寫解說する、是を護法と名く。復護法有り、受持・讀誦・書寫・解說する者有るを見て、恭敬・供養・親近・禮拜・尊重・讃歎し、師想を生じて擁護し、衣服・飮食・臥具・湯藥・房舍・燈燭を供給し、其の所說を聞きては稱讃して善哉といひ、其の種姓と所住の宅舍を護り、亦復其の侍使の等を護り、惡を聞いては隱蔽し、善を聞いては稱揚す。善男子、若し能く是の持法の者を擁護せば、是の人卽ち能く佛法僧を護るなり。復次に善男子、若し能く空・無相・願を修する有らば、是の人卽ち是れ正法を護持するなり。復次に善男子、方等經[二九]を誹謗する者有るを見れば、與に同止せず、言語談論して其の罪を調伏せば、是の人卽ち是れ正法を護持するなり。復次に善男子、若し人有つて能く悲心を修集し、飮食の想無くして衆生を憐愍し、正法を宣說する、是を護法と名く。復次に善男子、身命を惜まず、是の如き等の經を受持・讀誦・書寫・解說する、是を護法と名く。復次に善男子、若し法の一字一句を聽く有ること[三〇]、一由旬乃至七步を往き、または入出の息の頃なる、是を護法と名く。

【二八】世俗の文字・言語なり。

【二九】方は方等の義、横に十方にあまねきをいひ、等は平等にして、竪に凡聖を該ぬるをいふ。卽ち普遍平等の眞如實相の妙理を方等といひ、これを說き示す經典をば方等經といふ。宋譯相當文に此の句を缺く。

【三〇】宋譯には若有ㇾ人能爲ㇾ聽法因緣一、或爲ㇾ說法因緣一、乃至行ㇾ於一步一。或一出入息間、能專注者、此卽是爲ㇾ護持正法一とす。

無量世界の所有[一二]諸佛を見るを得、見已つて卽ち上妙の七寶を以て是の世界を滿たし、持用て諸佛世尊に奉獻せば、是の人の福德寧ろ多とすべきや不や』『甚だ多し、世尊、是の如き[一三]功德は喩を以て說き難し。善男子、人有つて正法を擁護し、憐愍の爲の故に、是の經を受持・讀誦・解說せんに如かず。何を以ての故に、法施の施は食施に勝る。夫れ[一三]食施は卽ち是れ世の施、法施の施は是れ出世の施なればなり。善男子、若し人能く佛の正法を護らば卽ち[一四]四の爲に攝せらる。何等か四と爲す。一は佛の攝と爲し、二は天の攝と爲し、三は福の攝と爲し、四は智の攝と爲す。佛の衆生を攝するに復四事有り、一は常に諸佛に親近するを得、二は諸の魔も其の便を得ず、三は無盡の陀羅尼を獲得し、四は不退轉地に住するを得しむ。天の衆生を攝する亦四事有り、一は說法の處をば諸天淸淨にし、二は說法の時、衆樂んで受聽し、三は終に他の因緣の爲に害せられず、四は[一五]不信の者を信ぜしむるなり。福の衆生を攝する亦四事有り、一に身を莊嚴するに三十二相・八十種好あり、二に口を莊嚴して、凡そ演說する所をば衆生樂聞す、三に[一六]佛土を莊嚴し、四に種姓を莊嚴す、所謂釋梵轉輪聖王なり。智もて衆生を攝する亦四事有り、一は衆生の根を知つて意の如く說法し、二は衆生の病苦を知り病に隨つて施藥し、三は大神通を得て諸の佛土に遊び、四は了了に法界に通達するなり。善男子、若し是の如き功德を獲得せんと欲せば、應當に心を勤めて正法を護持すべし』と。

[一七]爾の時世尊、卽ち頌を說いて曰はく

『若し能く法を護り憐愍を生ぜんには、是の經を受持し及び廣說せよ、我れ千分中の一分を說くこと、猶ほ大海より一渧を取るが如し。恩を知り恩を報じ如來を念ぜば、是の人は法藏を信付せられ、無量の十方佛を供養すべし、是の如くにして則ち能く佛法を護らん。無量國の珍寶を施すと雖も、如かず、至心に一偈を誦せんには。法施は最妙にして食施に勝る、是の故に智者は應に法を護るべし。十方の諸佛、天・龍神に功德・智慧もて攝取せられ、諸の相好を莊嚴修行す

【一二】宋譯に得二佛眼照明一とす。
【一三】宋譯に福聚とす。
【一三】宋譯には財施とす。
【一四】宋譯に得二四種攝受一とす。
【一五】宋譯に由二天威神一能令下一切無レ不二淸淨一悉得中淨心上とす。
【一六】宋譯に國土莊嚴、謂諸所二施作一悉能顯示とし、次の第四をば、所生莊嚴、謂在所生處、或爲梵王帝釋……等とす。
【一七】宋譯、卷第九。

ば則ち怖畏を生じ、身命を惜まざれば怖畏する所無し。障礙有らば則ち怖畏を生じ、障礙無ければ怖畏する所無し。我と我所に著せば則ち怖畏を生じ、我と我所とを斷ぜば怖畏する所無し。』『善男子、菩薩摩訶薩は何の力有るが故に深き佛法を聞きて怖畏を生ぜざる』。『梵天、八種の力有りて、深き佛法を聞くも怖畏をば生ぜず。何等をか八と爲す。一に信力、二に善友力、三に多聞力、[一〇五]四に善根力、五に善思惟力、六に破憍慢力、七に大慈悲力、八に如法住力なり。梵天、菩薩は是の如き八力を具足すれば、深法を說くを聞くも、怖畏を生ぜざるなり。』

爾の時世尊、海慧菩薩を讃へて言はく『善哉善哉、善男子、善能く菩薩の諸力を宣說したり、實に汝の言の如し、菩薩是の如き諸力を具足して、深き佛法を聞くも怖畏を生ぜず。善男子、[一〇六]一切の言說は之を名けて聲と爲す、菩提の性、亦說くべからず見るべからず、說見すべからざるを第一義と名く。如來は了了に是の如き宣說すべからざるを知見し、衆生を愍むが故に、爲に菩提を宣說す。心に非ず亦[一〇七]心數に非ず、何ぞ況んや聲字をや。善男子、如來は諸の衆生を憐愍するが故に甚深の法を覺し、甚深の法を覺し已つて、[一〇八]知無く覺無く心・心數無く聲無く字無く宣說すべからざるも、衆生の爲の故に、說くに文字音聲の次第有り。善男子、譬へば虛空は是れ色法に非ざれば覩見すべからず。[一〇九]對に非ず作に非ず。善男子、人有つて善く畫を畫き、空に像――若しは男・若しは女・若しは象・若しは馬――を作すが如し。是の如きの人、思議すべきや不や』、『不らず世尊』、『善男子、是れ尙ほ信ずべし、如來世尊は說くべからざるを知り、而も能く演說せんこと、是の事甚だ難し。復此の不可說の法を說くと雖も、然も眞實の知性は說くべからず。善男子、若し是の法を聞いて驚かず怖れざれば、當に知るべし、是の人久しく無量の諸如來の所に於て諸の善根を種えたるなり。善男子、是の如き經典は不可思議なり、若し人有つて能く受持・讀誦・書寫・解說せば、是の人則ち能く一切諸佛の法藏を受持し、[一一〇]一切衆生を攝取して解脫せしめん。善男子、若し菩薩有つて了了に

【一〇五】四以下宋譯に、福行出生承事之力、深因作意出生勢力、大慈出生大悲之力、安定出生善思惟力、無作信出生忍力を擧ぐ。

【一〇六】宋譯に諸說法聲、皆是分別、若於菩提勝義諦中即不能說とす。

【一〇七】また心所といふ、心法にしてその數多ければ心數と云ふ。

【一〇八】宋譯に於無文字、無語言、無記說、無詮表法中、爲他衆生……假以文字建立宣說とす。

【一〇九】宋譯に非對礙故無表了とす。

【一一〇】宋譯に能持一切衆生諸善法分とあり。

不滅の義とは卽ち[一〇四]無處の義、無處の義とは卽ち是れ法性、法性とは卽ち是れ佛法なり。是を學法と名け阿羅漢法と名け緣覺法と名け、名けて佛法と爲す。是の如き佛法及び餘の諸法は亦住處無く不出不滅なり、色と形質の方圓脩短無く、相貌有ること無く、明無く闇無く、一切諸法等しくして差別無し。佛法を求むとは、謂はく佛と佛法と一切の法となり。菩薩摩訶薩は道場の菩提樹下に坐し、乃ち能く了了眞實に知見す。何を以ての故に、諸佛の正法は住處無きが故に、一切の諸法亦住處無し。佛法は不可得なり、一切の諸法亦不可得なればなり。佛法は平等なり、一切の諸法亦復平等なればなり。若し因緣無ければ種性無く、若し種性無ければ卽ち出滅無し、若し出滅無ければ卽ち眞實と名け、眞實に知らば卽ち是れ實性なり。過去未來現在の諸法は卽ち是れ佛法なり、何を以ての故に、三世に通達して障礙無きが故に。障礙無きは卽ち是れ佛智、佛智は卽ち是れ十八不共の法なり、不共の法は一切法を攝す。是の故に諸法は卽ち是れ佛法にして、諸法と佛法と無二無別なり』と。

梵天の言はく『善男子、汝今了了に佛法を見るや不や』。『梵天、佛法は色に非ず、覩見すべからず、汝云何が了了に見ると言ふや、一切の諸法は悉く見るべからず。夫れ了了とは卽ち是れ佛法の二相有ること無きをいふ。』梵天の言はく『善男子、如來は何の故に「佛は一切諸法を知見す」と說くや』。『梵天、如來の佛法若し定相有らば、說いて了了に知見すと言ふを得べし』。『善男子、佛法は無きや』。『梵天、法若し定無ければ有と說くべからず、無と說くべからず。若し有無の相を說くべからずんば、云何が了了に知見すと言ふを得んや』。『善男子、如來は云何が佛法を說くや』『梵天、虛空を說くが如し、虛空の性たる實に定相無し、佛法も亦爾り』『善男子、佛法は是の如く不可思議なり、菩薩初めて菩提心を發す時、是の如きの法を聞き、驚かず怖れざるは不可思議なり、正覺の性も亦不可思議なり』『梵天、佛の所說は乃ち能く是の菩提の心を發さしむ、是の故に之を聞くも怖畏を生ぜず。梵天、若し著有らば則ち怖畏を生じ、若し著せざれば怖畏を生ぜず。身命を惜ま

るは是れ初發、貪恚を除去するは是を作と名け、十二緣を觀ずるは善思惟、癡と有愛を離るるは如法の住なり。若し能く一切の相を遠離せば、所有諸障礙を破壞し、十力四無畏を具足し、能く功德勤精進を說かん。如來是の精進法を說きたまふに、十千の衆生は無生を悟り、五千の菩薩は法忍を得、無量の人天は菩提を發したり。堅固莊嚴は我が身是なり、精進は諸の菩薩に超過せり、若し上眞の道を獲得せんと欲せば、當に精進を修すること先佛の如くなるべし』と。

爾の時、〔一〇〇〕修悲梵天、海慧菩薩に語つて言はく、『言ふ所の佛法とは、佛法は云何が佛法と名くるや。』海慧菩薩の言はく『梵天、佛法とは一切法に名け、一切法は名けて佛法と爲す、佛の法性の如きは卽ち一切の法性、一切法性の如きは卽ち佛の法性、佛の法性と一切の法性と差別有ること無し。一切法寂靜なれば佛法も亦寂靜なり、一切法空なれば佛法も亦空なり。梵天、一切法とは卽ち十二因緣、菩提とは亦十二因緣なり。』梵天の言はく『善男子、夫れ佛法は將て三界の法に過ぎざるや。』『梵天、三界と佛の法性と差別無し。三界平等なれば佛法も平等にして二相有ること無し。善男子、譬へば虛空の增減有ること無きが如く、佛法も爾り。〔一〇一〕無增無減にして性是れ空なるが故に上無く下無し。梵天、若し善男子、佛法を見んと欲せば、當に是の觀を作すべし。

『復次に梵天、夫れ佛法は〔一〇二〕處に非ず・非處に非ず、生に非ず・滅に非ず、青・黃・赤・白・班駁〔一〇三〕・琉璃虛空界の色に非ず、色と無色とを離れ、形質の方圓脩短有るに非ず、相無く無相の相にして、縛無く解無し、是の如きの相無きを名けて佛法と爲す。相無く句無く文字有ること無く、清淨寂靜なり、空の義・無相の義・無聚の義・畢竟無出の義・覺知の義にして宣說すべからず、觀るべからず。見るべからざるを寂靜の義と名く。寂靜の義とは卽ち是れ空の義なり、空の義とは卽ち無聚の義、無聚の義とは卽ち眞實の義、眞實の義とは卽ち是れ畢竟不出の義、畢竟不出の義とは卽ち不滅の義、

【一〇〇】宋譯に大悲思惟大梵天といふ。

【一〇一】宋譯に應二如レ是知一、然於二所知方便一、不レ應二取著一。

【一〇二】宋譯に佛法無二方分一無二處所一と。

【一〇三】班駁ともにまだらなり、色の不純なるをいふ。

【一〇四】宋譯相當文に無住處義とす。以下同には偈を以て重ねて述ぶ。

て文字無きは如法の住なり。悪友を遠離するは是れ初發、善知識に親しむは是を作と名け、聞き已つて聞の如くなるは善思惟、法を遠離せざるは如法の住なり。佛法の出家は是れ初發、怨親を除捨するは是を作と名け、善法を修集するは善思惟、他の意に隨はざるは如法に住するなり。[九六]少欲知足を發[九七]心と名け、寂靜を樂むは善思惟、寂靜に住し已つて[九八]無諍を說き、亦自ら修集するは如法の住なり。戒に從つて學ぶは是れ初發、[九九]漏戒を行ぜざるは是を作と名け、無戒の戒は善思惟、智慧戒に從ふは如法の住なり。世事を說かざるは是れ初發、常に寂靜を樂むは是を作と名け、養ひ易く滿たし易きは是れ善思惟、無常を觀察するは如法の住なり。樂んで施戒を修するは是れ初發、忍辱・精進は是を作と名け、禪と智慧を修するは善思惟、智の方便を修するは如法の住なり。施を行じて攝取するは是れ初發、軟語もて攝取するは是を作と名け、衆生を利益するは善思惟、自利利他するは如法の住なり。慈悲を修集するを發作と名け、三世を別たざるは善思惟、諸の衆生の爲に身心を淨めて、喜・捨を修集するは如法の住なり。正法を獲得するは是れ初發、淸淨の福田は是を作と名け、自身を莊嚴するは善思惟、衆生を調伏するは如法の住なり。陰魔を破壞するは是れ初發、煩惱魔を離るるは是を作と名け、能く死魔を壞するは善思惟、魔の怨敵を摧くは如法の住なり。身念を修集するは是れ初發、受念を修集するは是を作と名け、念心を修集するは善思惟、法念を修集するは如法の住なり。了了に苦を知るは是れ初發、集を遠離するは是を作と名け、滅の眞實を證するは善思惟、正道を修するは如法の住なり。信根を修するは是れ初發、諸力を修集するは是を作と名け、念三昧を修するは善思惟、智慧を修するは如法の住なり。身心寂靜なるは是れ初發、邪見を遠離するは是を作と名け、名色を觀ずるは善思惟、精進して悔ひざるは如法の住なり。我と我所と無きは是れ初發、無縛無解なるは是を作と名け、無去無來なるは善思惟、法性不動なるは如法の住なり。憍慢を遠離す

【九六】少欲は求めて取らざるをいひ、知足は少を得て悔恨せざるをいふ。
【九七】心、麗本作となす。今三本に從ふ。
【九八】空理に安住して物と諍ふこと無きなり。
【九九】破戒に同じ、戒律を漏失して守持せざるをいふ。

出家衆と無量の人天とは菩提を發したり。爾の時彼の佛精進を讃し、唯堅固菩薩の爲に説かく「若し能く發心し勤めて善を修せんには、繫心思惟して如法に住せよ」と。爾の時世尊我が爲の故に、分別して是の四句を廣說したまひけり、菩提心を發すと、如法に行ずると、思惟して忍を得ると、如法に住するとなり。若し正法を求むれば初發と名け、如法に說くを名けて作と爲し、義を受けて謬らざるは善思惟、忍を修集するは如法の住なり。若し勤めて施を行ずる、是れ初發なり、受者を求覓するを名けて作と爲し、明に無常を見るは善思惟、二相を觀ぜざるは如法の住なり。如法に財を求むるは是れ初發、淸淨に活命する是を作と名け、慳心を破壞するは善思惟、憍慢を求めざるは如法の住なり。惡戒を遠離する是れ初發、戒を護つて漏さざる是を作と名け、毀戒を調伏するは善思惟、戒淨にして慢無きは如法の住なり。惡口を遠離するは是れ初發、其の身寂靜なる是を作と名け、其の意寂靜なるは善思惟、諸法の寂靜なる如法の住なり。害心を遠離するは是れ初發、忍辱を修集するは是を作と名け、將て自他を護るは善思惟、忍んで慢を生ぜざるは如法の住なり。誘ふて瞋を喩すは是れ初發、惡人を遠離する是を作と名け、內外寂靜なるは善思惟、我心に著せざるは如法の住なり。懈怠を遠離するは是れ初發、精進を勤修する是を作と名け、眞實を知るは善思惟、道を修集するは如法の住なり。始めて善法を求むるは是れ初發、求め已つて畢竟するは是を作と名け、念心受持するは善思惟、法を失せざるは如法の住なり。禪支を求むる是れ初發、三昧を修集する是を作と名け、相似の慢無きは善思惟、過失有ること無きは如法の住なり。慧を念ずるの心は是れ初發、法門を獲得する是を作と名け、正法を擁護するは善思惟、勇健精進なるは如法の住なり。正しく因緣を念ずるは是れ初發、善方便を修するは是を作と名け、內法を觀ずるは善思惟、解脫を得已るは如法の住なり。始めて文字を求むるは是れ初發、通達解了するは是を作と名け、不可說を知るは善思惟、了し

れば卽ち是れ精進、若し害せざれば卽ち是れ精進、若し悔を生ぜざれば卽ち是れ精進、若し求めざれば卽ち是れ精進、若し滅せざれば卽ち是れ精進、若し作さざれば卽ち是れ精進、若し增減無ければ卽ち是れ精進、無上無下なれば卽ち是れ精進、不捨不著なれば卽ち是れ精進、不縛不解なれば卽ち是れ精進、不去不來なれば卽ち是れ精進、不生不滅なれば卽ち是れ精進、放逸有るに非ず・不放逸に非ざれば卽ち是れ精進、作と作者と無ければ卽ち是れ精進、闇無く明無ければ卽ち是れ精進、見に非ず不見に非ざれば卽ち是れ精進なり」と。善男子、彼の佛是の精進の法を說きたまふ時、無量の菩薩は無生忍を得たりき。善男子、今此の會中の五千の菩薩も亦是の如き無生忍の法を得、七千の人天は阿耨多羅三藐三菩提心を發さん。

[92]『善男子、爾の時堅固莊嚴菩薩是の法を聞き已り、是の如き無量の法を得んが爲の故に、勤めて精進を修して[93]下忍を獲得し、求法の爲の故に坐せず臥せず乃至命終し、旣に捨身し已つて[94]梵世に生ずるを得、梵天身を受けて無量世に佛を供養して正法を聽受し、彼の劫中に於て周遍して八萬四千の諸佛如來を供養し、正法を聽受して勤行精進したり。善男子、汝知れ、爾の時の堅固莊嚴は豈に異人ならんや、卽ち我が身是なり、我れ久しく是の精進を具足せるが故に、彌勒等の諸大菩薩を超えて先づ正覺を成じたり。是の故に我れ言ふ、「誰なりとも精進する有らば、當に知るべし、是の人卽ち菩提有らん」と。善男子、我れ勤精進して猶尙阿耨多羅三藐三菩提を得難かりき。況んや懈怠なるをや。若し菩薩有つて能く精進せば、此の人則ち能く自利利他せん』と。

[95]爾の時世尊卽ち頌を說いて曰はく

『我れ過去無量世を念ずるに、花聚劫中の精進佛の善見世界に、水彌滿して八萬四千の花を出生したり。其の國猶し兜率天の如く、飮食豐饒にして女身無く、父母に由らずして悉く化生し、亦二道無くして純ら一乘なりき。十方世界の諸菩薩、善見國の安樂を受くるを觀じ、三萬二千の

【九二】宋譯と出入あり、同譯によれば彼の菩薩、精進勤求すること倶胝歲を經て、彼に滅し、また彼の如來の前に化生し、重ねて大集會正法を宣說したまふを聽き、その間八萬四千の佛に親近したりといふ。

【九三】四善根中の忍法位に上中下あり、最初の位を下忍といふ、具さに十六行相を修する位なり。

【九四】色界の諸天を總じて梵世といふ、淫欲を離れたる梵天の住處なればなり。

【九五】宋譯、卷第八。

戒の如くに學び、作は戒に於て漏さず、觀は意の如く戒を學び、如法の住は慧の如く戒を學ぶ。又復發は檀波羅蜜・尸波羅蜜、作は羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜、觀は禪波羅蜜・般若波羅蜜、如法の住は智波羅蜜・方便波羅蜜なり。又復發は施を行じて攝取し、作は軟語もて攝取し、觀は他を利して攝取し、如法の住は同利もて攝取するなり。又復發は所謂大慈、作は所謂大悲、觀は所謂大喜、如法の住は所謂大捨なり。八八又復發は正法を護持し、作は福田を淨め、觀は相好を莊嚴し、如法の住は衆生を調伏するなり。又復發は實に陰魔を知り、作は煩惱魔を離れ、觀は死魔を壞し、如法の住は天魔を摧伏するなり。又復發は身念處を謂ひ、作は受念處を謂ひ、觀は心念處を謂ひ、如法の住は法念處を謂ふ。又復發は了了に苦を知り、作は集を遠離し、觀は眞實の滅を證し、如法の住は道を修することを謂ふ。又復發は所謂信根、作は謂はく精進根、觀は所謂念根、如法の住は所謂慧根なり。又復發は七覺分を謂ひ、作は八正道を謂ひ、觀は舍摩他を謂ひ、如法の住は毘婆舍那なり。善男子、八九一切の行の如きは皆名けて發と爲し、一切の善を修するを悉く名けて作と爲し、一切の淨心を名けて觀と爲し、一切の業を知るを如法住と名く」と。

九〇『善男子、彼の佛復堅固莊嚴に告げたまはく「善男子、勤精進は其の心を寂靜にす、心若し寂靜ならば卽ち是れ精進なり、若し貪身を壞すれば卽ち是れ精進、若し身意を知らば卽ち是れ精進なり、九一我と我所とを斷ずれば卽ち是れ精進、諸の繫縛を斷ずれば卽ち是れ精進、煩惱障盡くれば卽ち是れ精進、若し能く一切の障礙を遠離せば卽ち是れ精進、若し能く十種の憍慢を除却せば卽ち是れ精進、能く貪恚を壞せば卽ち是れ精進、若し能く無明・有愛を遠離せば卽ち是れ精進、若し不放逸にして善法を修せば卽ち是れ精進、若し能く眞實に內外の入を觀ぜば卽ち是れ精進、若し眞實に陰・界・諸入を知れば卽ち是れ精進、心寂靜なれば卽ち是れ精進、疑心を破壞せば卽ち是れ精進、若し三世に於て分別せざれば卽ち是れ精進、若し法界を觀じて動轉せざれば卽ち是れ精進、若し漏さざ

偈文參照。

【八七】宋譯に修㆓增上戒學㆒、所修無雜、修㆓增上心學㆒、修㆓增長慧學㆒とす。次の一段、宋之を缺く。

【八八】宋譯に刹土淸淨、相好圓滿、護㆓持正法㆒、救㆓度衆生㆒を擧ぐ。

【八九】宋譯には發㆓起諸行㆒、表㆓示潔白之行㆒、心得㆓輕安㆒、不㆑轉㆓境界相智㆒を擧ぐ。

【九〇】この節、宋譯とやゝ出入あり。

【九一】宋譯は是までに身心輕安と知能名色とを擧ぐるのみ。

を聞くことを求め、作は聞き已つて能く說き、觀は善く[七六]義を思惟し、如法の住は說の如くに住するなり。又復發は慳心を調伏し、作は能く一切に施し、觀は衆生の爲に迴向菩提を施し、如法の住は施の果を求めざるなり。又復發は[七七]受人を求覓し、作は來り求むるを見て慈愍の心を生じ、觀は財の無常を觀じ、如法の住は果報を求めざるなり。又復發は如法に財を求め、作は[七八]淨命を求め、觀は[七九]不堅の物に於て堅法を修し、如法の住は一切の捨時に憍慢を生ぜざるなり。又復發は諸の惡戒を離れ、作は至心に諸の淨禁戒を受持し、觀は至心に毀禁の人を調伏し、如法の住は淨く禁戒を持して憍慢を生ぜざるなり。又復發は[八〇]口業を淨め、作は身業を淨め、觀は意業を淨め、如法の住は善法を修集するなり。又復發は瞋心を遠離し、作は忍辱を修集し、觀は將て自他を護り、如法の住は忍辱を修し已つて憍慢を生ぜざるなり。[八一]又復發は常に樂んで邪見の衆生を教化し、作は能く衆生瞋恚の心を壞し、觀は內外を見ず、如法の住は一切煩惱の諸結を遠離するなり。又復發は懈怠を遠離し、作は勤めて精進を修し、觀は一切懈怠の衆生を調伏し、如法の住は諸の衆生を勸めて精進を修せしむるなり。又復發は名けて[八二]善慈と爲し、作は所作已に竟り、觀は餘乘を求めず、如法の住は無上善提の心を失はざるなり。[八三]又復發は禪支を莊嚴し、作は三昧を莊嚴し、觀は終に相似我慢を生ぜず、如法の住は衆生行惡の心を破壞するなり。又復發は念心を莊嚴し、作は諸有を莊嚴し、觀は其の意堅固に、如法の住は勇健にして怯無きなり。又復發は如法の因と名け、作は方便の如しと名け、觀は名けて門戶を爲し、如法の住は名けて解脫と爲す。[八四]又復發は名字を求むるを謂ひ、作は文字を持し、觀は字の不可說、如法の住は文字を遠離するなり。又復[八五]發は惡知識を離れ、作は善友に近し、觀は善友の所に於て至心に法を聽き、如法の住は解義を謬らざるなり。又復發は捨家を樂み、作は怨親を遠離し、觀は善法を求め、如法の住は[八六]他意に隨はざるなり。又復發は所謂小欲、作は所謂知足、觀は養ひ易く滿たし易く、如法の住は善く時の宜しきを知るなり。[八七]又復發は

【七六】宋譯に深固作意とし、次を起聖正見とす。
【七七】宋譯に振大捨聲と。次の慈愍の心をば、起善知識想とし。修の果報を求めざるをば、施已不悔とす。
【七八】邪命を離れ、淸淨に活命するをいふ。宋譯は淨命自資とす。
【七九】身命を忘れ財寶を棄てて道を修せば無極の身、無窮の命、無盡の財を得、この三は天地焚くるも、燒けず盡きざれば堅法といふ。之に對して前の三は卽ち不堅の物なり。宋譯はただ行眞實施となす。
【八〇】宋譯は之を身業に配し、次を語業に配す。
【八一】この一段宋譯やゝ異る。
【八二】宋譯に積集善法とし、次をば成辨善法、終を不壞諸業とす。
【八三】この段宋に無し。次の二段、宋譯は、念・行・慧住と、理教・門・出離道とを擧ぐ。
【八四】この段、宋譯は積集文字、文義總持、若文若義皆悉不著と覺了諸法悉不可說とを擧ぐ。
【八五】宋譯は親近善友、遠離惡友、於善惡友起心平等、如所言說隨能憶持を擧ぐ。
【八六】宋譯に得現量智とす。
【八七】に又一段を加へ、少欲、知足、獲得妙樂、知所應量を擧ぐ。下

爾の時世尊、復海慧菩薩に告げて言はく『善男子、菩薩摩訶薩は勤行精進して、易く阿耨多羅三藐三菩提を得。誰にても勤行精進を修行する有らば、當に知るべし、是の人卽ち菩提有らん。誰にても精進有らば是の人卽ち檀波羅蜜・尸波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を具し、能く自ら利益し亦他を利せん。』

『善男子、過去無量劫に佛・世尊有し[六七]、勤精進如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、國を善見と名け、劫を[六八]華聚と名けたり。爾の時世界に大水彌滿し、其の水に八萬四千の上妙蓮華を出生し、一一の縱廣十由旬を滿たし、無量億の金色光明有り、其の香微妙なりき。[六九]阿迦膩吒の諸天、見已つて多く安樂を受け、是の如き言を作せり「此の世間中多く蓮華有り、當に知るべし、亦當に多く佛出でたまふこと有るべし」と。是の故に此の劫を華聚と名けたり。是の時彼の國は[七〇]寂靜無聲なりき。寂靜を以ての故に無量世界の諸の菩薩等、常に樂んで觀察し、觀察を以ての故に各各皆[七一]喜行三昧を得たり、是の故に彼の世を名けて善見と曰へり。其の國に多く七寶の林樹・樓閣殿舍有り、衆生の安樂なること[七二]兜率天の如く、飮食多饒にして神通を獲易く、女身有ること無く、一切化生し、亦[七三]二道無く皆大乘を修したり。

『爾の時彼の佛に三萬六千の出家菩薩有りて、皆悉く不退轉の心を獲得し、無量の人天、初めて菩提を發し堅固不退なりき。彼の佛世尊は常に樂んで勤精進の行を宣說したり。時に大衆中に一菩薩有り、[七四]堅固莊嚴と名く。座より起ち前んで佛足を禮し、長跪合掌して是の如きの言を作せり「世尊、云何が菩薩は勤行精進するや。」佛の言はく「善男子、勤行精進に凡そ四法有り、何等か[七五]四と爲す。一に發心、二に作心、三に觀心、四に如法に住するなり。是の如き四法は卽ち是れ佛法を具足する因緣なり。何を以ての故に、善男子、發は卽ち是れ善法を生ずるの因、作は名けて善法を增すの因と爲し、觀は名けて衆生を利するの因と爲し、如法の住は入一切佛法の因緣と名く。又復發は正法

【六七】宋譯に勇猛精進如來とす。
【六八】宋譯に花積とす。
【六九】梵に(Akanistha)、色究竟と譯す、色界十八天中の最上天なり。宋譯に淨居天となす。五淨居天(色界第四禪に不還果を證したる聖者の生るべき處)の第五は卽ち色究竟天なり。
【七〇】宋譯に最勝淸淨となす。
【七一】宋譯に喜相三摩地となす。
【七二】梵に(Tusita)、欲界の天にして、夜摩天と樂變化天との間に在り。この天處內外に分れ內院は彌勒の淨土、外院は諸天の欲樂處なり。欲界の六天中、下の三は欲情に沈み、上二天は浮逸多きも、この天のみは沈にあらず浮にあらず、五欲樂に於て喜足の心を生ずといふ。
【七三】聲聞緣覺の二道なり、次に說く大乘に對す、宋譯に無有餘乘とす。
【七四】宋譯に堅固鎧といふ。
【七五】宋譯に、發起・勸作・伺察・修行をあぐ。

寶中に三寶を出さず、三寶は要ず菩薩寶より出づ。舍利弗、譬へば太子を名けて王と爲さざるも、王と名けざるに非ざる如く、菩薩摩訶薩亦復是の如く、名けて佛と爲すに非ず、佛と名けざるに非ず。舍利弗、譬へば[六五]小寶も亦輕んずべからざる如し。何を以ての故に、是の如き小寶も能く大事を作し、利益する所多ければなり。菩薩も亦爾り、初發心の時亦輕んずべからず。舍利弗、我れ今諸菩薩摩訶薩の爲に是の如き喩を說けり。若し菩薩有りて是の諸喩を聞かば卽ち安樂を得ん』と。

爾の時世尊[六六]卽ち頌を說いて曰はく

『若し佛道を證得せんと欲せば、應當に疑網の心を除滅すべし、勤めて無上の信心を修せば、卽ち能く菩提を獲得せん。若し淨印三昧を修せん者、諸法は皆夢の如しと宣說し、無量世中に其の心を淨めば、卽ち能く正覺の道を證するを得ん。佛所得の道は身業に非ず、亦口意の二業等にも非ず、無爲眞實の性亦爾り、是の故に喩を以て說くべからず。佛道は無對にして見るべからず、眼識の界に非ずして虛空の如く、是れ一切諸情の根に非ず、又諸根の境界に非ず。相に非ず陰に非ず入・界に非ず、是れ心・意・受・想識に非ず、知に非ず・知の境界に非ず、是の故に佛境は知るべからず。諸佛の大悲は難思議なり、無量無邊にして障礙無く、字無く・聲無く・不可說なり、是の故に能く佛界を知る無し。若し衆生有つて無量世に、善友に親近して正法を聽かんに、聞き已つて卽ち大福德を得、常に妙樂を受くること先佛の如くならん。一切の諸魔も短るを得ず、諸根調伏して樂處に行けば、能く方便を以て四魔を壞し、如法に任せば佛界に行かん。若し是の如き菩提の道を行ぜば、卽ち菩提を得て人の爲に說き、能く衆生を生死海に渡し、能く一切の大邪見を破し、卽ち無上の相好等を得、十力四無畏を成就し、能く衆生煩惱の行を知り、能く一切諸有の道を壞せん。若し菩薩有り勤めて精進せば、卽ち能く諸の煩惱を破壞す、火の能く乾ける草木を焚く如く、菩提の心も能く煩惱を燒く』と。

中、亦復如レ是、不レ能三出二生佛法僧寶一と。

【六五】宋譯にはこの前に何他の二例を出し、この小寶をば、江湖中所出となす。次に尚ほ別の四喩を加ふ。

【六六】この偈宋譯とよく合はず。

毒を破するが如く、菩薩の智慧も亦復是の如く、小智慧藥も能く無量の大煩惱の毒を壞せん。舍利弗、譬へば天、一味の水を降らすも、地の差別に隨つて種種の味を得るが如く、菩薩摩訶薩の一解脫智も亦復是の如く、衆生の根に隨つて說くこと種種に異る。舍利弗、[五六]閻浮樹の下に金泥有り、是の金泥中に種種の寶有るが如く、菩薩摩訶薩初發の菩提金泥心中に、亦復聲聞辟支佛の寶有り。舍利弗、餘の小王は一切悉く轉輪聖王に屬するが如く、一切の人天亦復是の如く悉く來つて初心の菩薩に歸屬す。舍利弗、薄福の人は寶雨に遇はざるが如く、若し無量の佛所に於て諸善根を種うる能はずんば、則ち菩提の心を發す能はざらん。舍利弗、甘蔗子無くんば則ち種種の[五七]石蜜の諸味無けん。若し菩提心無くんば亦種種の三寶の諸味無けん。

『[五八]舍利弗、[五九]耆婆醫王は常に是の言を作すが如し、「天下の所有は是れ藥に非ざる無し」と。菩薩も亦爾り、一切の法は菩提に非ざる無しと說く。舍利弗、[六〇]阿修羅王は其の勢力を盡すも、日月の道を遮障する能はざるが如く、一切の魔衆亦復是の如く、其の勢力を盡すも、勤行菩薩の菩提道を修するを遮障する能はざらん。舍利弗、色界天の宮殿屋宅は空に依つて住する如く、勤行の菩薩所得の菩提も亦復是の如く[六一]空に依つて住す。舍利弗、譬へば虛空は悉く能く一切萬物を容受し、而も是の虛空は初のごとくにして增減無きが如く、無量の佛法も亦復是の如く、菩薩發心して推求する有りと雖も、而も是の佛法亦增減無し。舍利弗、譬へば人有り力に任せて[六二]空に遊ぶに、虛空の性無增無減なるが如く、菩薩も亦爾り、其の信力に任せて佛智を行ずるに、是の佛智亦無增無滅なり。舍利弗、譬へば陶師の未だ器を成さざる時は器の名を得ざるが如く、菩薩の善法亦復是の如く、未だ發心せざる時は亦[六三]名くるを得ず。舍利弗、人已に轉輪聖王を見なば、則ち諸餘の小王を見ることを求めざるが如く、菩薩も亦爾り、若し已に菩提の心を發起せば、則ち更に聲聞・緣覺の心を發さず。舍利弗、餘處の中に衆寶を出さず、衆寶は要ず大海中に出づるが如し。舍利弗、[六四]聲聞

【五六】梵に(Jambu)、樹の名なり。この樹の下に河(Nada―檀又は那提と音寫せらる)あり、この河中より金を出す、是を閻浮檀金と稱す。宋譯にいふ、又如閻浮檀金、出現世間・映蔽一切餘珍寶云々と。
【五七】甘蔗の汁を精製して作れる、所謂氷砂糖なり。
【五八】宋譯、卷第七。
【五九】梵に(Jīvaka)、また耆域、王舍城の良醫たり、德叉尸羅國に醫を學びて歸り、頻婆娑羅王、釋尊等の病を療し、深く佛教を信じ、阿闍世王を勸めて歸佛せしめたるを以て有名なり。
【六〇】宋譯には羅睺阿修羅となす。阿修羅が帝釋と戰ふ時、この羅睺阿修羅は手を以て日月を執り其の光を障蔽すと稱せらる。蓋し阿修羅は美女ありて好食なし、諸天は好食あるも美女なし、故に互に相憎嫉して恒に戰鬪をなすといふ。
【六一】宋譯に猶如虛空、平等無礙と。
【六二】宋譯に擧レ箭射レ空、終不レ能レ至ニ虛空邊際ニとし、從て次の佛智無增無減を、於ニ佛法中ニ而生ニ信解ニとなす。
【六三】宋譯に卽不レ能レ得ニ波羅蜜名ニと。
【六四】宋譯に譬如牛跡水中而不レ能ニ出生ニ一切珍寶、聲聞戒

り中に在つて呪術力を以て網を破り出づるを得、意に隨つて去るが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、衆生の中に入り[五〇]智の呪力を以て煩惱の網を壞せんこと隨意自在なり、未だ阿耨多羅三藐三菩提を證得せずと雖も、而も能く衆生の所行に通達す』と。

爾の時舍利弗、佛に白して言はく『世尊、菩薩摩訶薩の初めて無上菩提心を發すの時、諸衆生の是の如き行有るを聞くも、驚かず怖れず。是の事實に難くして思議すべからず。』佛の白はく『舍利弗意に於て云何。師子の子の如し、復初めて產れ、師子の吼ゆるを聞くと雖も、怖畏有るや不や』。『不也世尊。』『菩薩摩訶薩初めて菩提心を發す時、衆生の行を聞くこと亦復是の如くなり。舍利弗、意に於て云何。火勢少なりと雖も乾ける薪を畏るるや不や』『不也、世尊。』『菩薩摩訶薩初めて無上菩提心を發し已り、智慧の火を得ること亦復是の如し。舍利弗、如來は今非喩を以て喩と爲す。舍利弗、譬へば猛火と諸の乾ける薪と、[五一]期を結ぶ七日にして當に大戰闘すべきが如し。爾の時一切の乾ける樹・草木・種種の枝葉悉く共に聚合して須彌山の如くならん。爾の時猛火に一親友有り、語つて言はく「汝今何の故に、自ら莊嚴して多く援助を求めざるや。彼の薪の衆多し、汝は唯一のみ、何ぞ能く之に當らん」。時に火答へて言はく「彼の怨多しと雖も我が力能く敵して伴黨を須ひじ」と。舍利弗、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、諸の煩惱悉く共に和合して其の勢熾盛なりと雖も、菩薩の智慧力は能く消伏せん。舍利弗、菩薩摩訶薩は二種の力有り、一は煩惱力、二は智慧力なり。[五二]菩薩若し煩惱力無くんば、則ち共に諸の衆生と行ずる能はず、亦衆生の行處を知る能はずして、亦當に聲聞緣覺を證すべし。是の故に菩薩は煩惱力を以て遍く諸有に遊び怖畏を生ぜず、是を菩薩方便を行ずと名く。舍利弗、[五三]小毒蛇の伴侶を須ひざるが如く、初發心者も亦是の如し。舍利弗、譬へば螢火の[五四]無量千萬億數有りと雖も、日の光明を障蔽する能はざる如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し、煩惱無量無數なりと雖も、菩薩の智光を障蔽する能はじ。舍利弗、[五五]阿伽陀一丸の藥も能く大

[五〇] 宋譯に即能以二般若波羅蜜多明呪之力一といふ。

[五一] 宋譯に要期盡劫而共闘戰、至二第七日一當レ起二戰事一、云云といふ。

[五二] 宋譯に若或菩薩、取レ證離二煩惱法一、捨二煩惱一者、彼即速墮二聲聞緣覺之地一。といふ。

[五三] 宋譯に又如下毒蛇、凡所レ傷嚙、而無中伴助上といふ。

[五四] 宋譯に又如四螢火、下三レ能レ勝二彼百千日輪廣大光明一とす。

[五五] また阿揭陀(Agnda)、普去、無病など譯す。宋譯は除毒の藥といへり。

の、他心智に因つて調伏を得、神通に因つて調伏を得るに非ざる有り。

『善男子、諸の衆生、[四四]精進を勤修して遲く解脫を得る有り、少しく精進して速に解脫を得る有り、精進を勸めて速に解脫を得る有り、少しく精進して遲く解脫を得る有り。』[四五]因によつて解脫し緣によつて解脫するに非ざる有り、緣によつて解脫し因によつて解脫するに非ざる有り、[四六]因・緣によつて解脫すると、因緣によつて解脫するに非ざると有り。』諸の衆生、內法を觀じて解脫を得、外を觀ずるに非ざる有り、外を觀じて解脫を得、內を觀ずるに非ざる有り、內外を觀じて解脫を得る有り、內外を觀ぜずして解脫を得る有り。』諸の衆生、樂行に因るが故に解脫を得、苦行に因るに非ざる有り、苦行に因つて解脫を得、樂行に因るに非ざる有り、或は苦樂に因つて解脫を得、或は苦行樂行に因らずして解脫を得る有り。

『諸の衆生、讚美に因るが故に調伏を得、[四七]呵責に因るに非ざる有り、或は呵責に因つて調伏を得、讚美に因るに非ず、或は讚毀に因つて調伏を得、或は因らずして調伏を得る有り。』諸の衆生、逆の說法に因つて調伏を得、順說に因らざる有り、或は順に因つて調伏を得、逆に因らざる有り、或は逆・順に因つて調伏を得、或は逆順の說法に因るに非ずして調伏を得る有り』諸の衆生、略說を聞くに因つて調伏を得、廣に因るに非ざる有り、或は廣に因つて調伏を得、略に因るに非ざる有り、廣・略に因つて調伏を得る有り、或は廣・略の說法に因らずして調伏を得る有り。[四八]諸の衆生、四眞諦に因つて調伏を得る有り、念處に因つて調伏を得る有り、正勤に因つて調伏を得る有り、或は如意に因つて調伏を得、或は五根に因つて調伏を得、或は五力に因つて調伏を得、或は七覺に因つて調伏を得、或は八道に因つて調伏を得。

『善男子、衆生の行は不可思議なり、衆生の心亦不可思議なり、衆生の調伏不可思議なり、所入の法門も不可思議なり、衆生の境界も不可思議なり。菩薩摩訶薩は是の如き不可思議智を獲得し、然る後乃ち一切衆生所行の行不可思議なるを知る。善男子、譬へば[四九]羅網の多く諸の結有るも、人有

【四四】宋譯に又有二衆生一、利根勤行、鈍根解脫、有二鈍根勤行、利根解脫一云云と。

【四五】本文に有因解脫、非緣解脫とあり、宋譯は由レ因得二解脫一而不レ由レ緣云云となす。

【四六】宋譯は分つて、有三亦由レ因亦由レ緣故、而得二解脫一、有二不レ由レ因、不レ由レ緣故、而解脫一となす。

【四七】呵は責るなり、叱るなり。

【四八】この一段、これ以前は宋譯と合せず。

【四九】寶珠を連綴して網となし、以て莊嚴の具となせるもの。

現在は住らざればなり。若し三世に於て著想を作さざれば不顚倒と名け菩薩行と名く。一切衆生の諸行を了知し、知り已つて了了に業及び果を說く。亦貪行瞋行癡行を知り、衆生有り、貪欲を行じて瞋を[37]莊嚴し、瞋恚を行じて貪を莊嚴し、愚癡を行じて貪を莊嚴し、貪欲を行じて癡を莊嚴し、瞋恚を行じて癡を莊嚴し、愚癡を行じて瞋を莊嚴するを知らん。[38]

『善男子、諸の衆生の色に於て貪を生じ、聲に於て瞋を生ずる有り、復衆生の聲に於て貪を生じ、色に於て恚を生ずる有り、復衆生の香に於て貪を生じ、味に於て恚を生ずる有り、復衆生の味に於て貪を生じ、香に於て恚を生ずる有り、復衆生の觸に於て貪を生じ法に於て恚を生ずる有り、復衆生の、法に於て貪を生じ觸に於て恚を生ずる有り。[39]復衆生の貪欲[40]羸劣なるも瞋恚の猛健なる有り、復衆生の、貪欲猛健にして瞋恚羸劣なる有り、復貪は羸にして癡の健なる、癡は羸にして貪の健なる、瞋は羸にして癡の健なる、癡は羸にして瞋の健なる有り。或は衆生の、色の爲に調伏せらるるも聲香味觸法等の爲にせられざる有り、聲の爲に調伏せらるるも色香味觸法等の爲にせられざる有り、香の爲に調伏せらるるも色聲味觸法等の爲にせられざる有り、味の爲に調伏せらるるも色聲香觸法等の爲にせられざる有り、觸の爲に調伏せらるるも色聲香味法等の爲にせられざる有り、法の爲に調伏せらるるも色聲香味觸の爲にせらるるに非ざる有るが故に。[41]復衆生の、心寂靜の故に調伏を得、身寂靜にして調伏を得るに非ざる有り、或は衆生の、身寂靜の故に調伏を得、心寂靜して調伏を得るに非ざる有り。」或は衆生の、無常を說くを聞きて調伏を得、苦・不淨・無我に[42]因つて調伏を得るに非ざる有り、或は衆生の、苦を說くを聞くが故に調伏を得、無常不淨無我に因つて調伏を得るに非ざる有り、或は衆生の、不淨を說くを聞きて調伏を得、無常苦無我等に因つて調伏を得るに非ざる有り、或は衆生の、無我を說くを聞いて調伏を得、無常苦不淨等に因つて調伏を得るに非ざる有り。復衆生の、[43]身の神通を見て調伏を得、他心智にて調伏を得るに非ざる有り、或は衆生

て、我とは五蘊中、妄計して我我所有りとし、衆生とは妄計して五蘊和合して生ずとし、われ一壽命とは、妄計して、われ一期の果報を受く、この果報は即ち長又は短なる壽命なりとし、士夫とは、妄計してわれ人中に生れて餘趣に異れりとする、顚倒の見なり。

【三七】宋譯に貪意中行レ瞋とあり、以下同じ。

【三八】この次に宋譯尙加ふる所有り。

【三九】この一段と次の一段とは宋異やゝ異る。

【四〇】羸は弱なり。

【四一】宋譯に因二心離一故、而得二調伏一不レ因二身離一。云云といふ。

【四二】宋譯相當文に寂靜となす。

【四三】身の神通は、宋譯に、說法神變とし、次の他心智を、教誡神變とし、更に神境神變に因つて調伏を得るものを擧ぐ。

て禪定を修集すれば煩惱魔を壞し、入處に著せずして禪定を修集すれば能く死魔を壞し、所有諸善を菩提に廻向せば能く天魔を壞せん。復次に善男子、若し菩薩有り、陰[三〇]の方便なるを知らば能く陰魔を壞し、界の方便なるを知らば煩惱魔を壞し、入の方便なるを知らば死魔を壞し、[三一]是の如き等の種種の方便を以て菩提に廻向せば能く天魔を壞せん。復次に善男子、若し菩薩有つて一切法皆是れ空相なりと觀ぜば能く陰魔を壞し、一切法悉く是れ無相なりと觀ぜば煩惱魔を壞し、一切法悉く是れ無願なりと觀ぜば能く死魔を壞し、是の三法を具して菩提に廻向せば能く天魔を壞せん。復次に善男子、若し菩薩有りて[三二]身と身處とを觀じて、不覺不著ならば能く陰魔を壞し、受と受處とを觀じて不覺不著ならば煩惱魔を壞し、心と心處とを觀じて不覺不著ならば死魔を壞し、法と法處とを觀じて不覺不著ならば、能く天魔を壞し、是の如き觀を作して終に菩提の心を失はざれば、是の人則ち能く四魔を壞破せん。

『善男子、[三三]若し我に著せば則ち魔事を增す。菩薩摩訶薩[三四]亦我有るを知り我無きを知る。若し法有るも我有るに非ず我無きに非ず、是の如くなれば則ち一法の增減無し。一切の衆生は無明に覆はる、是の故に菩薩は、爲に無上の[三五]大乘を莊嚴せんと欲す。我の爲の故に莊嚴を發すに非ず。莊嚴を發し已つて是の思惟を作す。誰か法を莊嚴して堅固不壞ならしむる、我れ當に莊嚴すべし、我れ亦[三六]我衆生・壽命・士夫を壞せんが爲に莊嚴を行ずるに非ず、衆生の我に著すると、邪に衆生・壽命・士夫等の見に惑ふとを破せんが爲に莊嚴を行ず、衆生は顚倒して是の五陰を常・樂・我・淨なりと見る、我れ當に爲に是の如きを無常・苦・空・無我なりと說くべし、衆生をして眞の智を得しめんが爲に。若し衆生有つて心に願求有らば、當に知るべし、是の人卽ち名けて著すと爲す。若し願求せざれば則ち著有ることなし。若し著せざれば是の人諍かず、若し諍かざれば眞實の智を得、過去・未來・現在を知り、過去未來現在に著せじ。何を以ての故に、過去は已に盡き未來は未だ至らず、

望、に作り、次句の有貪の爲を若我見無依止に作る。

【二六】 本文に不見我忍我修於忍とあり。忍我の義解し難し。宋譯に於我無所得、修行忍辱とありて意明瞭なり。

【二七】 宋譯に於生死中、未嘗懈倦、成熟衆生、攝受正法といふ。

【二八】 宋譯に或無依止といふ。

【二九】 十八界なり、次の入とは十二入なり。入は涉入の義、六根と六境と互に涉入して六識を生ずれば入といふ。

【三〇】 宋譯には能以正慧、善知諸蘊といふ。

【三一】 宋譯に雖善知緣生、而於實際亦不取證といふ。

【三二】 身と身のはたらき場所とをいふ。「身と身處とを觀じ……陰魔を壞し」は、宋譯に隨觀身中身念處而修、亦不與身俱起於尋求、能破蘊魔といふ。以下の三も同樣なり。

【三三】 宋譯には此如是等諸有魔業、皆由我爲根本といへり。

【三四】 宋譯には若或菩薩、於根本我而不起者、卽於我無我、是中亦無少法可起、如是卽以現量智知といへり。

【三五】 宋譯には被大乘鎧といふ。

【三六】 是を四見といふ。此の相は衆生の虛妄顚倒の想にし

ば、爾の時則ち能く魔衆を壞破して、一切境界の因緣を求めざらん。善男子、四種の魔有り、一に陰魔[一八]、二に煩惱魔[一九]、三に死魔[二〇]、四に天魔[二一]なり。善男子、若し能く法は幻相の如しと觀ぜば、是の人則ち能く陰魔を破壞せん。若し諸法悉く是れ空相と見れば、是の人則ち能く煩惱魔を壞せん。若し諸法不生不滅なりと見れば、是の人則ち能く死魔を破壞せん。[二二]若し憍慢を除けば則ち天魔を壞せん。復次に善男子、若し苦を知れば能く陰魔を壞し、若し集を遠離せば、煩惱魔を破し、若し滅を證すれば則ち死魔を壞し、若し道を修せば則ち天魔を壞せん。復次に善男子、若し一切有爲の法は苦なりと見れば則ち陰魔を壞し、諸法は眞實に無常なりと見れば煩惱魔を壞せん、若し諸法は眞實に無我なりと見れば、能く死魔を壞し、若し諸法は寂靜の涅槃なりと見ば能く天魔を壞せん。復次に善男子、菩薩若し能く身に於て貪無く、[二三]身を捨てて施するの時、菩提を迴向せば能く陰魔を壞せん、施するの時、慳貪の心を遠離せば煩惱魔を壞せん、若し財物は一切無常なりと觀ぜば能く死魔を壞せん、衆生の爲の故に悲を修して布施せば能く天魔を壞せん。

『復[二四]次に善男子、若し菩薩有りて[二五]我見の爲に淨戒を受持せざれば能く陰魔を壞せん、有貪の爲に淨戒を受持せざれば煩惱魔を壞せん、若し生死の過失を遠離せんが爲に淨戒を受持せば、能く死魔を壞せん、若し能く心に毀禁の者をして、悉く淨戒を持せしめん[との念]を生じて、淨戒を受持せば、則ち天魔を壞せん。復次に善男子、若し菩薩有りて[二六]我を見ず、我を忍び、忍を修すれば則ち陰魔を壞し、衆生を見ずして忍を修する有らば煩惱魔を壞し、生死を見ざれば則ち死魔を壞し、菩提を見ざれば則ち天魔を壞せん。復次に善男子、若し菩薩有り勤めて精進を修し、其の身寂靜なれば則ち陰魔を壞し、勤行精進して其の心寂靜なれば煩惱魔を壞し、勤行精進して法の無生を觀ぜば能く死魔を壞し、勤行精進して[二七]衆生を調せんが爲に生死を轉ぜしめば則ち天魔を壞せん。復次に善男子、若し菩薩有り、[二八]五陰の爲にあらずして禪定を修集すれば能く陰魔を壞し、[二九]界處に著せずし

あつて此即名爲レ得ニ大寂默一にて結べり。

【一七】能く衆生を度して生死海より出でしむるを以て船師といひ、衆生に無量の正道を開示するが故に導師といひ、正法の財を無量に所持するが故に商主といひ、顚倒の障礙を轉じて解脫せしむるを呪師に喩へ、衆生の煩惱の病を療するが故に醫師といふ。

【一八】陰魔は、また五衆魔ともいふ、五蘊和合の身は、心の平和を擾亂すること多きが故に魔といふ。

【一九】煩惱魔とは、貪等の煩惱はよく身心を惱害するが故に名く。

【二〇】次に死は能く人の命根を斷つが故に名く。

【二一】天魔は、また他化自在天子魔、自在天魔ともいふ、欲界第六天（他化自在天）の魔王は能く人の善事を害すれば魔と名く。

【二二】宋譯は俱時依ニ止一切意法一趣ニ向滅道一能降ニ大魔一

【二三】宋譯には大菩提心を妄失せざるによつて陰魔を、身命を惜まず一切智を迴向するによつて煩惱魔を伏すとなす。

【二四】宋譯、卷第六。

【二五】實我ありと執する謬見を我見とす。我見の爲を、宋譯には離レ生ニ諸趣一無レ所ニ希

は子より果を得ればなり。善男子、[九]一切の有爲の識を種子と爲すも、此の三昧は種子有ること無し。何を以ての故に、而も此の三昧は眼識の識るところに非ず、乃至意識の識るところに非ず、作に非ず、色に非ず、受に非ず想に非ず、行に非ず識に非ず。一切法普く皆平等なりと觀ずる、是を[一〇]三藐三佛陀と名く。善男子、異相の故に名けて生死と爲すに非ず、異相の故に名けて涅槃と爲すに非ず。善男子、生死の相に隨つて卽ち涅槃の相あり、何を以ての故に、一切諸法の本性は淨なるが故に。本性の性は名けて[一一]無性と爲す、夫れ無性は[一二]相・性無きに名く。若し性相無ければ卽ち是れ無作なり。是の如く無作は卽ち是れ法性にして文字有ること無し。若し文字無ければ卽ち名けて如と爲す。前の如く中・後も亦爾り、是を三世と名く。夫れ三世は卽ち名けて空と爲し、空は卽ち[一三]無作なり。是の如く無作ならば何ぞ作者あらん、是の故に[一四]無作を名けて空と爲す。若し作・作者無ければ、當に知るべし、法無し。若し法無ければ求無く願無し。若し願求無ければ則ち身口意の業無く、身口意の業無きを卽ち[一五]無礙と名く、無礙は名けて不出と爲し、不出なれば不滅不住なり、不滅不住は卽ち無爲の相なり、無爲の相は是を不住と名く。不住とは、一切所作の業無く、意は色に住せず・乃至意は行に住せざるを謂ふ。若し是の四處に[一六]意の住する無ければ是を無住と名く。若し無住なれば則ち相似我慢を生ぜず、若し是の如き相似我慢無ければ則ち增長無く、若し增長無ければ則ち因有ること無し。若し因有ること無ければ則ち覺觀無し、若し覺觀無ければ是を默然と名く。善男子、是の如き等の法は其の義甚深なり、若し能く信ずれば卽ち解脫を得、永く顚倒煩惱の障礙を離れ、卽ち能く過去・未來・現在諸佛の所有法藏を受持せん。是れ[一七]大船師なり、導師なり商主なり、呪師なり醫師なり。則ち能く三世の諸佛を供養せん。是を佛子と名く。魔業を過ぎて諸の魔衆を破し、久しからずして當に淨印三昧を得、能く大に堅牢の船舫を莊嚴し、衆生を生死海より濟度すべし』と。『世尊、云何が菩薩能く一切諸魔の伴黨を壞するや』。佛の言はく『菩薩若し能く諸法を求めざれ

【九】宋譯は識種子是有爲、無表種子是無爲とす。有爲(Saṃskṛta)は無爲に對す。因緣によつて生じたる諸現象なり。一切有漏無漏の有爲法を生ずる、阿賴耶(Ālaya)識中の功能を種子といふ。轉じて阿賴耶識を種子識といふ。

【一〇】梵に(Samyaksaṃbuddha)、正徧知、正等覺など譯す。佛が正しく諸法の眞理に通達したまふをいふ。

【一一】本經に無性・無相性・無作・法性とあるも、宋譯相當文には、無相・無行相・無可表了・無所了知を擧ぐ。

【一二】麗宋二本に性相とあるも、元・明兩本は無相性と爲す。今此に從ふ。

【一三】宋譯には無作を說いて、現前に身語心の諸行の造作する無きを謂ふと云へり。

【一四】宋譯に若無二現前行一、彼卽無爲。若其無爲、卽無生無滅、亦無二處所一云云と。

【一五】無礙を宋譯に無爲とし、次の無爲をば同に無處所とし、次の不住を同に無處となし、次の意をば同に識に作る。

【一六】宋譯に若識無所住、卽是正智。と云ひ、以下本文に相似我慢とあるを智無領納とし、增長を增長意樂、因を無諍論、覺觀を動亂とし、尙ほ說く所

卷の第九

海慧菩薩品　第五之二

[一]『善男子、菩薩摩訶薩若し淨印三昧を獲得せんと欲せば、應當に[二]菩提を淨むることを修集し、一切滓濁の心を遠離すべし。善男子、若し諸法の性淨なるを見る能はずんば、則ち渇愛・煩惱の爲に汚さるるなり。一切の諸法は思惟すべからず、作にあらず行にあらず、清淨寂靜にして、塵垢有ること無く亦過失無く、畢竟清淨にして解脫性の如し。法界は不壞にして分別有ること無く、實性と法性とは差別有ること無し、一切諸法は空・無相・願にして、解脫性の如く無礙平等なり。一切の諸法亦復是の如し、若し能く是の如く正しく觀察せば、是を無濁と名く。善男子、菩薩若し能く諸の衆生の爲に、是の如き法を說かば、是を無滓と名く。善男子、若し菩薩有り心に滓濁無くんば、是の人則ち淨印三昧を得ん』と。

海慧菩薩の言はく『世尊、是の如き三昧は其の義甚深なり、[三]不可說の故に。覩見すべからず、[四]數法を斷ぜるが故に。解了すべきこと難し、[五]不可見の故に。[六]是れ大智慧なり、諸法を攝するが故に。一切の菩薩皆悉く平等にして、垢無く滓無く諸の障礙無く、住處有ること無く、微妙にして明し難く喩說すべからず。其の性堅固なること猶ほ金剛の如く、生ぜず滅せず破せず壞せず繫せず縛せず。是れ大光明なり、闇を遠離するが故に。不可思議無垢清淨なり、貪を遠離するが故に。諍訟有ること無し、慈を修集するが故に。不覺不觀なり、去來を離るるが故に。一切平等なり、虛空の如くなるが故に。世尊、何の因緣を觀じて是の三昧を得るや』。

佛の言はく『善男子、[七]譬へば人有つて虛空に遊ばんと欲する如く、大自莊嚴の菩薩も亦爾り。是の定を得んと欲せば、當に大莊嚴もて、平等に一切諸法を莊嚴すべし、何を以ての故に、[八]世間の法

【一】宋譯、卷第五つゞき。
【二】宋譯は無濁亂心と、無滓穢心とを擧ぐ。
【三】宋譯は、不得涯底故とし、之を佛の言とす。以下本經に、云云の故にとして海意の言とせるも、宋譯は皆佛の言となす。
【四】宋譯に佛言、離二法故とす。
【五】同に佛言、無我・我所故とあり。
【六】以下宋譯は、上と同じく海慧一句を述ぶれば、佛亦一句を述べたまふ如くに次第し、本經と出沒あり。
【七】この一段、宋譯に譬如有レ人、欲下與二虛空一而共戰敵上。時彼虛空、乃被乙甲冑甲。菩薩亦復如レ是、欲レ得三自說二淨印三摩地一者、應當下被二於諸法平等甲冑一莊嚴上。と。
【八】宋譯には隨レ有レ所レ滅、卽有レ所レ起とあり。

する有らば、即ち智に從ふ微妙の聲を得、凡そ演說する所をば衆樂んで聞き、聞く者皆善芽を生ずることを得。六十四の惡口を遠離せば、是の人則ち能く甘露を說き、能く無爲の大乘を說き、亦善く衆生の語を解するを得ん。能く貪欲・恚・癡の語を離るれば、甚深の眞實義を演說せんに、其の聲遍く十方界に聞え、衆の爲に宣說し實のごとく解說せん。呵毀打害あるも瞋諍せず、心常に憐愍して柔軟語をなし、衆の爲に說く可らざるを演說し、說き已つて其の心に慢を生ぜざらん。若し能く是の如き業を清淨ならしめば、是の人口の諸惡を遠離せん、如來所說の口の淨業は、衆生をして廣長舌ならしめん爲なり。若し善意の業を修する有らんに、是の人一念に諸心を知り、常に禪定に在つて威儀を示し、諸の魔業を壞するも心高からざらん。受けざると能く受くるとは衆生の爲なり、眞實を了知して滅を證せず、一切の衆魔は心を知らず、聲聞・緣覺亦復然り。害心を自他に生ぜず、能く甚深の諸法界を觀ず、若し是の淨印定を得んと欲せば、常に當に十法を修集すべし。清淨に佛の境界を莊嚴し、善法及び六度を淨め、功德及び身相を具足し、無礙を得、陀羅尼を說き、如法に住して其の心を淨め、念心を失はずして無我を說き、一切の障を離れて慧無礙に、其の意失無く功德を具し、助菩提を修して放逸無く、諸衆生の爲に菩提を說き、無量の世界に身礙無く、正法を演說して衆生を化するなり。八種の不共法を具足せば、無上の大利益を獲得し、金剛を地と爲し樹種種あり、悉く菩薩の菩提に坐するを見る。若し是の如き德を具足せんと欲せば、常に淨印三昧定を修すべし、如來是の定を修集したるが故に、功德の議[九四]すべからざるを獲得したり』と。

【九四】思議すべからざるをいふ。

三昧を得已つて[87]八不共法を得。何等をか八と爲す。所得の世界は金剛を地と爲し、一樹の上に種種の枝葉・種種の華果あり、一切の衆生煩惱を起さず、地獄餓鬼畜生の類は悉く菩薩の菩提樹に坐するを見、見已つて卽ち微妙の快樂を得、金光遍く無量の世界を照らし、一切の大地六種に振動するも、[88]一の衆生として燒害有る者無く、一念の智もて一切の法を知る、是を名けて八と爲す』と。

[89]爾の時世尊卽ち頌を說いて曰はく、

『若し諸法は虚空の如しと知り、本性不生滅なるを淨めば、卽ち能く如來印を淨め、亦定の根本に住するを得ん。供養を得と雖も心喜ばず、呵責罵辱せらるるも心瞋らず、慈悲心を修集して平等なれば、是を則ち名けて淨印定と爲す。一切の諸憍慢を遠離し、離し已つて其の心自ら高からず、能く煩惱の諸結縛を呵する、是を則ち名けて淨印定と爲す。其の身永く諸の惡業を離れ、妙相三十二を莊嚴し、諸根を具足淸淨にし、亦復憍慢の結を生ぜず。下色醜陋の者、貧窮[90]斯下有るを見るも心に輕んぜず、菩提の爲の故に[91]淨法を說く、是を則ち名けて淨印定と爲す。身の眞實性を觀察し、衆生の身に貪するの想を壞す、是の故に上法身を獲得し、一切の雜食身を遠離す。常に禪定に在つて[92]法喜を食し、衆生の爲の故に[93]揣食を受け、甘露の上味は法命を增す、是を則ち名けて淨印定と爲す。聖行を愛樂して佛戒を持し、貪欲・恚・癡等を遠離す、菩薩先づ自ら其の身を調し、然る後復衆生の爲に說く。神通もて遍く諸十方に遊び、衆生を調せん爲に法を演說す、彼の色像の如く其の身を示し、其の意趣に隨つて爲に說法す。身より無量の金色光を出し、遍く十方の諸世界を照らし、能く衆生煩惱の熱を壞し、菩提心の功德を增長す。若し三惡に苦む衆生有るも、遇ひ已るに悉く無上の樂を得、皆惡道の苦を遠離するを得、信心成就して善業を修す。如來所說の身の淨業は、衆生をして淨佛身たらしむる爲なり、若し能く是の如き業を修する有らば、淨身を獲得せんこと先佛の如くなり。若し惡口業を遠離

【八七】宋譯には八種不共大神通相となす。
【八八】宋譯は、この項を前の第六中に併說し、第七は全く異るものを擧ぐ。
【八九】宋譯、卷第五。
【九〇】斯は賤なり。
【九一】麗、宋、元本に淨說法とす、明本說淨法に作る、今是に從ふ。
【九二】この句、宋譯相當文に、不レ受二分段身一、離レ染とし、續いて常受二定中禪悅食一、不レ以二段食一益二威光一、順レ世受レ食非二力資一、法命滋養成二甘露一とす。
【九三】また段食となす。肉菜等の有形の食物。

所を說き、衆生の心に隨つて實と不實とを說き、衆の樂聞することを說き、一切聲を說き、一切語を說き、衆生の根を淨むることを說き、衆生をして煩惱を離れしむることを說き、佛語を說き、甘露を說いて其の聲遍く十方の世界に聞え、衆生をして永く苦惱を離れしむることを說き、深義を說き、衆生を調することを說き、惡を造作せざることを說く。是を菩薩の口業は智*に隨ふと名くるなり。

『云何が菩薩の意業は智に隨ふとならば、一心の中に住して能く一切衆生の心を知り、常に禪定に在つて諸の威儀を現じ、一切衆の魔・聲聞・緣覺も、悉く[八三]心所緣の處を知る能はず、終に心に自ら毀害し、方便もて他を害せんと欲することを生ぜず、[八四]一切法を了して通達無礙なり。是の如き心を得ば、不受なるも能く受け亦滅を證せず、是を菩薩の意業は智に隨ふと名くるなり。是を淨印三昧の根本と名く。

『是の如き[八五]根本に復十種有り、一に淨初發心、二に淨菩提道、三に淨六波羅蜜、四に淨乾慧の故に三昧を修す、五に淨相、六に淨好、七に淨陀羅尼、八に淨如法住、九に淨於無失、十に淨三十七助道の法なり、是を名けて十と爲す。

『善男子、淨印三昧は[八六]三十法を具す、一に內淨、二に外淨、三に心淨、四に憍慢淨、五に身淨、六に眼淨、七に一切衆生無衆生淨、八に一切法本性淨、九に一切法同一味淨、十に空・無相・願淨、十一に解脫法門淨、十二に一切諸法入法界淨、十三に一切諸法入一性淨、十四に信心無壞淨、十五に無障礙淨、十六に一切解脫淨、十七に無爲淨、十八に觀十二因緣淨、十九に十力四無所畏淨、二十に無勝淨、二十一に一切法智淨、二十二に過去業淨、二十三に慈悲淨、二十四に不捨衆生淨、二十五に破諸魔業淨、二十六に離內貪淨、二十七に離諸習氣淨、二十八に一念知一切法淨、二十九に不失念心淨、三十に具足莊嚴淨なり。菩薩は是の如き等の法を具足するを淨印三昧と名く。是の

※智、大正本は知に作る。今縮刷本に依る。

【八三】 菩薩が、一切の聲聞等の心に入り、之を知ることを、魔等は知るを得ざるをいふ。

【八四】 宋譯の相當文に、於二一切法中一、起レ智了知、由二彼心意無表了一故、即無レ所二了知一。不受而受、未レ具二佛法一、亦不レ滅レ受、而爲二取證一。

【八五】 宋譯に有二十種法一、此三摩池名爲二自說一と。而して十種の中、三に顯示潔白之行、四に相好圓滿之行、五に得辯才之行、六に念定不散亂智、七に菩提分法智、八に表示奢摩他毘鉢舍那智、九に十地次第之智、十に大菩提場莊嚴之智を舉げたり。

【八六】 宋譯は二十法を數ふ。參照せよ。

に安住す。云何が名けて三昧の根本と爲すとならば、諸の衆生の爲に大慈悲を修し、供養を得と雖も其の心高からず、[七六]瞋恚もて毀辱せらるるも心亦下らず。心高まらざるが故に則ち能く不憍の法性と不憍の名字とを生じ、亦相似の我慢を生ぜず、身口意の業は智慧より生ず。是の故に一切の作す所の諸業は智に隨はざるに非ず。

『云何が菩薩の身業は智に隨ふとならば、所得の身形は殊勝微妙にして、衆生見る者卽ち調伏を得。身の四威儀もて亦能く調伏して、諸の身の過・身の曲・身の滓を離れて、其の身清淨にして相好もて莊嚴し、諸根具足して缺減有ること無きも、此の身を恃んで憍慢を生ぜず、下色を見るも心に亦輕んぜず、自ら其の身に於て貪著を生ぜず、身・法界及び身業を觀じ、是の[七七]身を知り已つて[七八]法身を念じ食身を求めず、[七九]定を以て食と爲し、衆生を調せん爲に現に其の施を受けて、常に[八〇]聖行を修す、所謂貪欲・瞋恚・愚癡の爲に非ずして清淨の戒を受持し、正法を擁護す。菩薩摩訶薩は是の如き隨智の身業を具足し、大神力・無所畏力を得、是の力を以ての故に、諸の佛土に於て普く其の身を示す。此の如き世界に示す所の色身は、餘の諸の世界にも亦復是の如く、大光明を放ちて遍く十方無量の世界を照し、其の光柔軟にして、衆生遇はば煩惱の熱を離れ、煩惱を離れ已つて大快樂を受く。是を菩薩の身業は智に隨ふと名く。

『云何が菩薩の口業は智に隨ふとならば、所謂六十四種惡口の業を遠離す——[八一]麁語・濁語・非時語・妄語・漏語・大語・高語・輕語・破語・不了語、散語・低語・仰語・錯語・惡語・畏語・吃語・諍語・諂語・調語・誑語・惱語・法語・邪語・罪語・啞語・入語・燒語・地獄語・虛語、慢語・輕語・不愛語・說罪咎語・失語・別離語・利惡語・兩舌語・無義語・無護語・喜語・狂語・殺語・害語・繫語、閑語・縛語・打語・歌語・非法語、自讃歎語・說他過語・謗三寶語、是を六十四と名く。[八二]善男子、菩薩摩訶薩は是の如き惡口等の事を遠離す。凡そ所說有れば實を說き、眞を說き、解脫を說き、如實を說き、諦に隨つて說き、衆生を利する

【七五】宋譯に得二善覺了智一、得二決定慧一。

【七六】宋認には若不恭敬とあり。

【七七】麗本に色とあるも宋元明三本身となす。今之に從ふ。

【七八】宋譯相當文に卽得二法身一、不レ受二分段身一。何名二法身一、謂以二禪悅一而爲二飮食一、非二分段食一とあり。

【七九】定を以て食と爲すとは、宋譯に所謂禪悅食なり。卽ち禪法を以て、その心神を資し、禪定の樂を得て諸根を增長せしめ、慧命を資益すること、かの世間の食が、能く諸根を養ひ、命を資持するに等しければ、食と名くるなり。

【八〇】宋譯に、何名二聖行一、所謂無貪無瞋無癡、離二諸煩惱一、隨レ所二施設一、密二護於戒一といふ。

【八一】以下本經に擧ぐる所は五十三種に過ぎず、宋譯は六十四を出す、可見。

【八二】麗本夾註に曰、丹本云はく、十一を缺く、訪ぬべき本無しと。

第の生有ること無く、其の性本來常に寂靜にして、能作有る無きこと虚空の如し。一切諸法の相を觀ぜざるも、了了に性有ること無きを覺知し、色は沫の如く、受は泡の如し、想は熱焰の如く、行は芭蕉の如しと觀ず。心は幻の如く〔六六〕四大は空なりと觀じ、入は猶ほ聾盲の者の如しと觀じ、〔六七〕又心・意には內外無く、心に住處無く界無二なりと觀ず。諸法の色と色相とに著せず、是の知有りと雖も憍慢無く、〔六八〕一切の法は皆平等にして一味・一乘・一道源なりと觀ず。能く是の如き眞實の義を知り、了了に能く法界を觀じ、〔六九〕音聲有ること無きに聲を觀じ、心意有ること無きに能く心を觀じ、文字有ること無きに文字を觀ず、是れ能く眞實に法界を知るなり。一切法の義は說くべからず、聲及び文字亦復然り、〔七〇〕眞實に苦・集・滅・道を知り、具足して心を四念處に繫け、諸の法界に於て分別無くんば、其の心能く大自在を得。一切の諸煩惱を遠離せんには、四正勤を修し精進を行ず、無礙の大自在を得んが爲には、勤めて心に四如意を修集す。一切の法に於て貪著せざるは、是の如きに於て信根を修するが爲なり。常に樂んで大寂靜に住す、是の故に精進根を修集す。心に念慮無くして眞實を知る、是の故に念根を修集す、悉く能く諸の心想を調伏す、是の故に定根を修集す。〔七一〕能く法界を觀察せんが爲に、是の故に慧根を修集す。〔七二〕諸の法界を了知せんと欲するが爲に、是の故に七覺分を修集す。諸法に一二の數を觀ぜず、是の故に八正道を修集す。〔七三〕意の如く能く財物を以て施し、亦能く意の如く戒を受持す、又能く內外を清淨にする、是を則ち名けて大神通と名く。〔七四〕一切の諸法は本性淨なり、是の故に慈悲を修集す、一切の喜と諸煩惱とを斷ず、是の故に喜心を修集す。一切の諸法は本性淨なり、去來現在も亦復然り、若し諸法の生滅無きを觀ぜば、是の人卽ち眞實の知を得ん』。

爾の時世尊、復海慧菩薩に告げて言はく『菩薩是の淨大淨を得已らば、其の心眞實にして欺誑有ること無く、諸の衆生に於て平等無二にして、〔七五〕眞實智・畢竟大智の淨印三昧を得、淨印三昧の根本

無爲と云はんが如し。

【六二】宋譯に相卽是生、無相是滅とす。

【六三】宋譯に眞如無動、實際不變。

【六四】宋譯相當文に、此卽名爲下具二決擇智一菩薩摩訶薩上と。

【六五】宋譯、卷第四。

【六六】池水火風をいふ。宋譯には所有四界性無動、與二彼虛空界一等とす。

【六七】宋譯には、應レ知心法不レ在レ內、亦彼於レ外有所得。意法無我亦復然、是中諸識皆無住。

【六八】宋譯には法本一味無二異性一、一道一乘皆同等とす。

【六九】宋譯に、觀二聲非聲一能覺二了世間所有一切聲一、前際後際二俱斷。若文若義離二善解一、於レ中了二知無二法一と。

【七〇】宋譯には諸法不生、是苦智。諸法平等是集智。諸法盡義、是滅智。諸法無爲、是道智。

【七一】宋譯相當文に、超二越諸法戲論一門とあり。

【七二】宋譯この次に五力を說く。

【七三】宋譯は次に四法印と六度とを列擧す。

【七四】宋譯はこゝに慈・悲・喜の三を分ち揭ぐ。衆生本來淸淨心、了二知此一說名爲レ慈、與二虛空一等名爲レ悲、淸淨適悅是爲レ喜と。

菩薩は是の如き法を觀察し已り、次第に[五八]一切法自在陀羅尼を得。善男子、譬へば日月の、往來照明の心を作さざる如く、諸衆生の福德力を以ての故に、自ら往返を行じて諸の闇冥を壞す。善男子、菩薩摩訶薩若し能く是の如き等の法を觀了せば、亦復是の如く是の念を作さず、「我當に無量の衆生を利益し、衆生をして大に利益を得しむべし」と。

『善男子、若し菩薩摩訶薩、[五九]能く是の觀を作せば是を禪波羅蜜・般若波羅蜜と名く、何を以ての故に、[六〇]定に入れば乃ち能く是の如き觀を作し、心を亂せば能く定ならざるは、即ち是れ禪波羅蜜、觀は即ち是れ般若波羅蜜なり。是の如くなれば乃ち能く眞實を觀じ、了了に一切の法相を見る。云何が一切法相を見ると名くる。一切法相は無相の相に名く、無相と言ふは即ち是れ[六一]無作、即ち此の無作、之を名けて相と爲す。若し能く永に是の如き無相を斷ずれば、即ち無相の相なり。又[六二]無相とは無生の相に名け、無相の相とは無滅の相に名く。無生無滅は無相無相相と名く。若し無生・無滅を見れば、作無く・一無く・二無く・瞋無く・諍無く有無し。[六三]爾の不動不轉の如く法性を知る、是を眞性と名け、是を法性と名け、是を實性と名く。善男子、菩薩摩訶薩若し眞實に是の如き等の法を知れば[六四]非住の住と名くるなり』と。是の法を說きたまへる時、十二那由他の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、萬六千の天は無生忍を得たり。

[六五]爾の時世尊即ち頌を說いて曰はく、

『能く一切諸法の相を破するは、清淨無上の菩提心なり、若し能く是の如く觀察せば、即ち一切法に著せざるを得。明に甚深の諸法界を見、亦涅槃を怖畏せず、是の不畏の因緣を以ての故に、則ち能く佛法を增長す。明に因及び果報を信じ、十二因緣も亦是の如く、二邊の常と斷との見を遠離し、意に隨つて種種に正法を說く。常・無常に於て心著せず、又能く中道を演說し、一切の法は是れ空性、衆生有ること無く壽命無しと知る。一切諸法は空・無相なり、亦復次

譯の說相やゝ異る。即ち一切分別無分別中、離諸遍計、是正見。一切音聲、平等悟入、是正惟。離身心法、是正語。一切諸作、悉得輕安、名正業。無高無下、是正命。若善不善隨施設已、平等而住、是正勤。於心所緣、平等悟入、是正念。寂靜安住、妙舍摩他、是正定。

【五五】この句、宋譯の相當文には、於見非見、而悉清淨、無所生義、是無常義。本來不生義、是止息義是寂滅義。無所行義、是無我義。

【五六】以下宋譯には、隨知盡法、是忍辱義。於一切法能善決擇、是精進義。止息內心、是禪定義。如實了知諸法無相、是勝慧義。

【五七】宋譯には、一切諸法、先際以來、三輪清淨、是空義。後際清淨、是離義。現在清淨是無我義と、

【五八】宋譯に即於諸法自在理中、乃能現證とす。

【五九】宋譯には、若具決擇智菩薩、應於定波羅蜜及慧波羅蜜中、如理伺察とす。

【六〇】宋譯曰、住等引(Samāhita)心菩薩、不修觀法、修觀行菩薩、不住等引心。若復修觀行者、彼即有慧、由有慧故、能善觀察。以下も同じく二者一致し難し。

【六一】因緣の造作なきこと、

く、一味・一乘・一道・一源なりと觀じ、一切の聲には聲相有ること無く、一切の音聲は次第して合せず、一切の諸法は宣說すべからざるを觀じ、[四八]苦の相を了知し、集に我所無く、滅に於て增無く、道を知りて畢竟す。[四九]障礙無き故に身念處を觀ず、去來の受を知り、心の出滅を念じ、法界を知りて界と非界とを觀ず。故に[五〇]正勤を修して自在を得んと欲す。[五一]故に如意を修して諸の煩惱を離るるを名けて信根と爲し、寂靜を樂むを名けて精進根と爲し、有念に非ざるが故に名けて念根と爲し、思惟に非ざるが故に名けて定根と爲し、一切を遠離するを名けて慧根と爲す。[五二]他に隨はざるが故に名けて信力と爲し、障礙無きが故に精進力と名け、不退轉の故に名けて念力と爲し、心に自在を得るが故に名けて定力と爲し、善惡を觀ぜざるを名けて慧力と爲す。[五三]不放逸の故に念覺分と名け、諸法に入るが故に擇法覺分と名け、如法の行の故に進覺分と名け、惡を遠離するが故に喜覺分と名け、身心寂靜なるを除覺分と名け、實の三昧を知るを定覺分と名け、一二を觀ぜざるを捨覺分と名く。[五四]諸見を遠離するを名けて正見と爲し、諸の覺觀を離るるを正思惟と名け、諸の聲性を知るを名けて正語と爲し、身口意に於て貪著を生ぜざるを名けて正業と爲し、嫉妬心を離るるを名けて正命と爲し、不增不減を正精進と名け、善不善に於て貪著を生ぜざる、是を正念と名け、諸の心界を觀ずる、是を正定と名く。[五五]實相の性は其の性寂靜なり、畢竟の義とは無常・苦・無我に名け、假に清淨の大淨と名く。能く心を調すれば之を名けて施と爲し、身心清淨なる、之を名けて戒と爲し、[五六]諸法の無常なる、之を名けて忍と爲し、勤めて是の智を修するを名けて精進と爲し、內外清淨なるを名けて三昧と爲し、眞實を觀ずるが故に名けて智慧と爲す。諸の衆生の心性は本淨なるを知る、是を名けて慈と爲し、一切は等しく虛空の如しと觀ずる、是を名けて悲と爲し、一切の喜を斷ずるを名けて喜心と爲し、一切の行を遠ざくるを名けて捨心と爲す。[五七]一切諸法は未來世に淨、過去には種種、現在には無我なり。善男子、若し能く眞實に是の如き等の法を觀察了知せば、是を名けて穿菩提心寶と爲す。

【四八】宋譯によれば無我の義は是れ苦の智。畢竟の義は是れ集の智。不和合の義は是れ滅の智。有爲無爲の平等に悟入するは是れ道の智なりとあり。

【四九】宋譯に前後際を離るる、是れ身念處。生滅無住なる、是れ受念處。所緣無きを觀ずる、是れ心念處。法界と非法界との平等の義は是れ法念處なりとして、明に四念住を數ふ。

【五〇】宋譯に心自在義、是四正斷。

【五一】以下宋譯は離ニ諸障礙一是四神足。出生義是信根、無念義是精進根、無作意是念根、超ニ滅戲論一是定根、無ニ他信一是慧根として四如意足（又は四神足）と、次の五根とを分ち擧ぐ。

【五二】以下五力を云ふ。宋譯には所緣無障礙、是信力。通ニ達諸力一是精進力。心止息住、是念力。無所動轉、是定力。於レ念隨レ念、是慧力とす。

【五三】以下七菩提分をあぐ。宋譯には於一切法平等相應、是念覺分。不出不入、是擇法覺分。無ニ我所一是精進覺分。身心善住、是喜覺分。平等覺悟、是輕安覺分。離ニ二法一是定覺分。遠ニ離諸見一是捨覺分とす。

【五四】これ八正道分なり。宋

菩提心を退失せず。身の無常及び無我と、四大の性は四蛇の如きとを觀じ、至心に是の如き身を放捨せば、能く智慧の無上道を得ん。諸有に流轉して諸苦を受くるは、身の眞實を觀ずる能はざるを以てなり、菩薩は能く身の眞實を觀ず、是の故に永く諸の苦惱を離る。惡を行ずるの時は妨礙無く、善法を修行するに留難多きは、諸佛世尊證知を爲す、是の故に我れ種種の苦を受く。我れ今能く是の如き等の身口意の業の無量の苦を忍ぶ、是の因緣を以て菩提心堅牢にして畢竟動かすべからず。身を捨つれば六波羅蜜を具し、身に於て貪無ければ檀を具足す、彼の惡人に於て慈心を生ぜば、是の故に尸羅を具足す。身を割るも能く忍んで瞋を生ぜずば、是の因緣を以て羼提を具す、苦を受くる時心動轉せずば、是の故に毘梨耶を具足す。念心を失せず寂靜を樂めば、是の故に禪那を具足す、身に我無く我所無きを觀ぜば、爾の時般若を具足す。若し我れ能く是の莊嚴を作さば、久しからずして定んで無上道を得ん、若し我れ惡口業を忍ばずんば、云何が能く衆の煩惱を壞せん。若し我れ身口意を調伏せば、則ち能く衆の苦逼を忍受し、能く一切の諸魔衆を壞せん、衆邪有りと雖も我動ぜじ。若し六波羅蜜*、如來の十力四無畏を具し、無上無價の寶を獲得せんと欲せば、當に身口意を調伏すること學ぶべし』と。

『善男子、云何が名けて[四二]穿菩提心と爲すとならば、菩薩既に菩提心を發し已り、終に相似我慢を生ぜず、菩提心に著せず、菩提心に貪せず、菩提心を愛せず、菩提心を觀ぜず、是の如くして則ち能く心を寂靜ならしめ、深法界を觀じ、諸佛の法を觀ず。深法界とは、謂はく十二因緣は二邊を遠離し、一切の諸法は性として自ら我無く、我の性と一切法の性とは空にして[四三]生有ること無しと觀じ、[四四]空三昧・無相・無願に住し、諸行の法は造作する所無しと知り、色は沫の如く受は水泡の如し、想は[四五]熱焰の如く・行は芭蕉の如く・識は則ち幻の如しと觀じ、[四六]界は作無く動搖有ること無く、入は[四七]聾盲の如く、心は暫くも住する無く、憍慢の結は都て生處無く、諸法無二にして分別有ること無

※六、麗本は足に作る、今三本に依る。

【四二】宋譯に云何是謂菩薩於其所發一切智心穿亦不壞と。

【四三】麗本は主となすも宋本は生となし、宋譯また諸法本來生、無所生、とすれば、今之に從ふ。

【四四】宋譯は信順無相無願無求とす。

【四五】宋譯に陽焔とす。

【四六】十八界なり。

【四七】宋譯に諸入互相生とす。

『云何が[三九]押心なる、魔衆を畏れて菩提心を退せず、一切衆の邪異見を畏れて菩提心を退せず、地獄・餓鬼・畜生の種種の諸苦を畏れ菩提心を退せず。若し[四〇]佛像の、來つて是の言を作す――汝亦菩提心を發す能はず、菩提の道は甚だ得難しと爲す、如かじ早く聲聞乘の法を修し、速に涅槃を證して大安樂を受けんには――を見るも、菩薩爾の時是の語を聞き已り、卽ち自ら菩提の道の難と易とを思惟し、「我れ終に退せじ、定んで當に菩提樹下に到り金剛床に坐すべし。我れ昔已に一切の衆生に請はれ、當に法を以て之に施與すべきを許したり。我れ今、未だ與へず、云何が欺誑せん、我れ當に一切の佛心に隨順し、是の如き押心の事を堪忍して、諸佛・人・天の大衆及び已身を誑かじ」と。是を押心と名く』と。

爾の時世尊、卽ち頌を說いて言はく、

『菩提の道に向つて心壞せず、大慈大悲も亦復然り、又三寶の種を斷絕せず、無量に莊嚴するを菩提と爲す。佛の十力・四無畏・三十二相・八十好の爲に、無量世中に財施を捨て、亦種種の大苦惱を受く。三寶の諸の功德を得んが爲に、正法を受持して廣說し、衆生を生死海に度せんが爲に、是の故に種種の苦を堪受す。十方世界の惡衆生、刀杖を執持して我が身に逼るも、心終に動じて菩提を失せざるは、一切の衆生を憐愍するが故なり。無量の劫中に苦惱を受けて、自利及び利他する能はざりしも、今我此の忍もて大利益をえ、亦能く佛の無量の德を得たり。佛の功德の爲に、其の身を碎くこと、猶ほ胡麻の如くなるも心悔ひず、心亦無上道を退せず、多く諸苦を受くるは菩提の爲なり。行住坐臥に菩提を念じ、其の心寂靜にして煩惱を離る、若し瞋を衆生に起さんと欲すれば、先づ當に已及び煩惱を怨むべし。[四一]三惡道中に諸の苦を受け、諸衆生の爲に佛道を得んとして、人・天の上快樂を求めず、甘樂じて衆の爲に諸苦を受く。人中に於て受くる所の苦のごときは、地獄の百千一にも及ばず、三惡の無量の苦を受くと雖も、亦

【三九】宋譯相當文に云何是爲菩薩堪任摧壓於心と。
【四〇】魔が佛の形像に變じ來つて嬈亂するなり。
【四一】地獄・餓鬼・畜生の三趣をいふ。

す、爾の時精進波羅蜜を具足す。若し他瞋つて打つも其の心不動にして正念を失はず、其の意清淨なり、爾の時禪波羅蜜を具足す。身は無常・苦・空・無我にして猶ほ草木瓦石等の類の如しと觀ず、爾の時般若波羅蜜を具足す。是の如き六波羅蜜を具足し已らば押すも壞せず、是を押身とは名く。

『云何が押口なる、一切の惡言罵辱を忍び、若しは實なるも不實なるも但已身煩惱の諸結を責めて終に他を怨まず、諸の衆生の爲に慈悲を修集す。菩薩摩訶薩是の如く修集し、惡罵を忍ぶ時、即ち忍波羅蜜を具足するを得。菩薩摩訶薩、罵辱に遇ふ時は卽ち是の念を作す、「是の人世に住するは慳貪の因緣により、惡友に親近して是の惡心を得たり、我れ慳貪を破し惠施を修集して、善友に親近せしめん、是の故に我能く是の瞋恚を捨つ」と。爾の時檀波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩、罵辱に遇ふ時、是の念を作して言ふ、「是の人、戒を破し業の果を信ぜず、是の故に我を罵る、我れ戒を受持し業報を信ず、是の故に忍を修して菩提を念じ、正法を護持して將つて衆生に順ふ」と、爾の時尸波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩、罵辱に遇ふ時、是の思惟を作す、「是の人懈怠にして善法を修せず、是の故に我を罵る、我勸めて精進し、善法を修集して瞋心を捨離し、善法の所に於て心に厭足無し、我れ今要ず當に大方便を設け、先づ是の人をして菩提樹に坐せしめ、然る後我れ當に菩提の果を取るべし」と。爾の時精進波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩罵辱に遇ふ時、復是の念を作す、「是の人、念を失し狂亂放逸にして煩惱に汚さる、我れ今一切の煩惱を破壞し、是の如き等の諸惡衆生の爲に菩提心を發さん。若し諸の衆生悉く淸淨ならば、我れ復何に緣つて菩提心を發さん」と。是の故に專心に菩提心を緣念して怱務せず、爾の時禪波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩罵辱に遇ふ時、復是の念を作す、是の人我・我所と衆生・壽命・士夫とに著す。我れ法界に依る、法界の中に誰か罵り誰か受けん、我れ亦一法の是の罵と及び罵者とを見ず」と。爾の是般若波羅蜜を具足す。若し能く至心に五波羅蜜を受持修行せば、爾の時忍波羅蜜を具足す、是を押口と名く。

生を調せんが爲に勤めて精進を加ふべし。若し罵辱・瞋恚の打擲に遇はんも、默然として之を受け、終に報を加へず、應に是の念を作すべし「夫れ大乘は世と共に諍ふ。何を以ての故に、一切の衆生は生死の流に順ひ、大乘の法は生死の流に逆ふ、一切の衆生は各各諍訟するも、大乘の法は鬪諍を破壞す、一切の衆生は瞋恚熾盛なるも、大乘の法は瞋恚を除滅す、一切の衆生は各各虛誑なるも、大乘の法は質直無虛なればなり」と。十方の世界に若し衆生有り、諸の刀杖を以て菩薩を隨逐し、而も是の言を作す「誰か此の菩提心を發す者有らば、我當に段段に其の身を支解して胡麻許の如くせん」と。菩薩此を聞くも終に菩提の心を退轉せず、亦慈・悲・喜・捨、惠施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を放捨せじ。何を以ての故に、菩薩思惟すらく「我れ無量無邊の世中に於て、大地獄・畜生・餓鬼・人・天等の身を受け、惡法を受行して自利と及び他人を利する能はざりき」と。若しは「我或は無量世中に於て、彼の惡人の爲に刀杖もて隨逐せられ節節支解せられんも、我れ終に菩提心及び諸の衆生を捨てじ。何を以ての故に、若し我れ是の如き世中の苦を忍受する能はずんば、何ぞ能く地獄の諸苦に堪忍せん、善法を行ずるの時は、多く惡法有り、來つて障礙を作せばなり。我れ若し忍ばざれば、云何が能く種種の善法を作さん。一切の衆生は我に惡事を施すも、我要ず當に善法を以て之に施すべし。衆生我に刀杖の罵辱を施さば、我れ無上の大忍を以て之に施さん」と。菩薩摩訶薩若し能く是の如く思惟して觀ぜば、當に久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

〔三七〕『是の如く觀じ已らば能く〔三八〕三押を忍ぶ、謂はく身口意なり。云何が押身なる。若し菩薩の身支解せられん時、爾の時法に依り將つて惡人に順じ、六波羅蜜を具足す。云何が菩薩の身、支解せられて而も六波羅蜜を具足するを得る。菩薩若し身體を支解せらるるも身命を惜まず、爾の時檀波羅蜜を具足す。彼の惡人に於て慈心を修集す、爾の時尸波羅蜜を具足す。瞋らず罵らず、惡事を以て還往いて之に加へず、爾の時忍波羅蜜を具足す。諸の衆生の爲に勤行精進し、終に菩提の心を捨離せ

【三七】宋譯、卷第三。
【三八】宋譯に堪二任摧壓一有二其三種一とす。

如く、常に出家を樂みて菩提を修す、是の故に菩提心は最勝なり。寂靜を貪樂して身心を淨め、法行を修行して四諦を觀じ、實語・法語・眞義語をなす、是の故に菩提心は最勝なり。說法する所に隨つて安住し、勤めて精進を修して魔業を壞し、所修の法に於て懈怠無し、是の故に菩提心は最勝なり。善友・佛・菩薩に親近し、能く衆生を生死海より度し、能く一切の六境界を淨む、是の故に菩提心は最勝なり。障礙を遠離して五蓋を除き、諸根清淨にして憍慢無く、貪欲・瞋恚・癡を對治す、是の故に菩提心は最勝なり。善思惟を觀じて念心を具し、助菩提を修して神通を得、生死を畏れず涅槃を樂ふ、是の故に菩提心は最勝なり。凡そ說法する所は食の爲ならず、諸法の中に於て心に悋無く、善法を修行して報を求めず、是の故に菩提心は最勝なり。餘の乘を以て衆生を攝せず、所說をば衆樂んで受持し、其の心量無く邊有ること無し、是の故に菩提心は最勝なり。內外清淨にして過咎無く、生死を畏れず菩提を修し、菩提を修する時心悔ひず、是の故に菩提心は最勝なり。衆生界と淨國土とを知り、菩提を莊嚴して自らの爲にせず、迷惑の衆生に正道を示す、是の故に菩提心は最勝なり。善く法界の眞實性は無分別智も說くべからざるを知り、能く衆生怖畏の想を破す、是の故に菩提心は最勝なり。若し能く是の如き法を具足せば、是れ能く淨くして菩提心を發し、世法の汚す所とならず、煩惱魔業も亦復然り。若し能く菩提心を發す有らば、是れ則ち能く一切の乘に勝れ、能く一切衆生の心を淨め、亦能く無上道を演說せん。

『善男子、[三六]云何が名けて菩提の心は抑すも壞せずと爲す。抑すとは名けて大悲と爲す。一切の衆生を緣じ、三寶の種を紹ぎて斷絕せしめず、佛法の爲の故に善根を莊嚴し、三十二相八十種好もて世界を嚴淨し、正法を護るが爲に身命を惜まざるなり。善男子、諸の惡衆生の爲に打觸・惱亂・嬈害せらるるも、悉く當に之を忍ぶべし。亦應に一切衆生を捨てず、心に悔を生ぜず・愁へず・惱まず、衆

【三六】宋譯に、云何是爲下菩薩於二其所發一切智心寶一、堪中任摧壓上。又復何謂二摧壓行相一と。

し、戒を持して精進し、善友に親近して諸根を淨め、〔三五〕眼・耳・鼻・舌・身・心無礙に、十二の緣を觀じて爲に無明を壞し、一切障礙の法を遠離し、法を施して悋無く、六波羅蜜を具足成就し、餘の乘を求めず、內外清淨にして生死の過を觀じ、菩提の道に於て心悔退せず、衆生を大乘中に教化するなり。善男子、菩薩は是の如き等の法を具足し、不淨の意を淨め、阿耨多羅三藐三菩提心を發す、是を寶珠と名く』。

爾の時世尊卽ち頌を說きて曰はく、

『若し大慈心を修集し、十善法を具足成滿する有らば、是の人定んで彌勒佛を見ん、故に菩提心は思議し難し。大悲を修集するは衆生の爲なり、亦常に大乘に教化するは、煩惱を除き捨心を修するが爲なり、故に菩提心は思議し難し。念と智慧とを具足修集し、及び能く自心を調伏し、能く知足及び少欲を修す、是の故に菩提心は最勝なり。一切の諸惡法を遠離して、其の心柔軟に、衆生に於て一切の諸善法を增長す、是の故に菩提心は最勝なり。師・和上を恭敬供養し、聖種の性を紹繼增長して、一切の諸憍慢を遠離す、是の故に菩提心は最勝なり。其の心質直にして欺誑せず、常に寂靜を樂んで衆生を化し、憍慢を除去して他を輕ぜず、是の故に菩提心は最勝なり。正法を護持して能く說を聽き、諸の衆生を化して煩惱を離れ、至心に無上乘を專念す、是の故に菩提心は最勝なり。三寶を供養して四諦を信じ、諸惡を遠離して善法を修して衆生を瞋らず恚まず、是の故に菩提心は最勝なり。客煩惱起れば慚愧を生じ、卽ち十方の佛に向つて懺悔し、善法を修集して諸根を調す、是の故に菩提心は最勝なり。身口意を淨めて業果を知り、恩を知り恩を念じて酬報を知り、十二の緣を信じて威儀を淨む、是の故に菩提心は最勝なり。舍摩他を具して智慧を修し、持戒を具足して菩提を樂み、大苦惱を受くるも心動ぜず、是の故に菩提心は最勝なり。其の心平等なること四大の如く、諸の衆生を見ること虛空の

ずれば、欲界の生を潤ほす惑無きを以て再び欲界に還らざるが故に名く。

【三二】梵に(Arhat)、無色界第四地の第九品の惑を斷ずれば三界に受生すべき因緣盡きたる位をいふ。

【三三】梵に(Pratyekabuddha)、緣覺と譯す。

【三四】宋譯によれば、心は、高下繫著なき故に風の如く、高下の諸對礙を離るが故に地の如く、內意清淨の故に水の如く、妙異相無きが故に火の如く、無垢の故に風の如しと。

【三五】宋譯によれば、此等の六根清淨なるが故に無礙の光・聲・香・味・觸・法を得と。

と。唯願はくは如來是の三昧を說き、諸の菩薩をして普く皆聞くを得しめたまへ、聞き已らば皆當に莊嚴修行して阿耨多羅三藐三菩提を爲すべきが故に』。

佛言はく『善男子、至心に諦聽せよ、吾今當に說くべし。善男子、菩薩初めて菩提心を發し已り、善法を修集し多聞思惟し、法界を觀察して初心を淨め、初心既に淨まらば咸諸佛菩薩の爲に敬念せられ、卽便淨印三昧を得。善男子、[二三]淨寶珠は九種の寶を離る、何等か九と爲す、一に金性、二に銀性、[二四]三に琉璃性、四に頗梨性、五に馬瑙性、六に蓮華性、七に車璖性、八に功德寶性、九に珊瑚性なり、是を名けて九と爲す。是の九性を離るるを淨寶珠と爲す。其の價無量、轉輪聖王の受用する所にして、是の珠の光明は餘光も及ばず。善男子、菩薩摩訶薩の菩提心を發す亦復是の如く、九種の性を離れて淨印三昧を得、何等か九と爲す、一に[二五]凡夫性、二に[二六]信行性、三に[二七]法行性、四に[二八]八忍性、五に[二九]須陀洹性、六に[三〇]斯陀含性、七に[三一]阿那含性、八に[三二]阿羅漢性、九に[三三]辟支佛性なり。是の九性を離れて佛の種性に入り淨印三昧を得。其の淨を以ての故に一切の聲聞緣覺に勝れ、一切の衆生に光明を施す。善男子、淨寶珠は磨・穿・押に耐ゆ、是の故に此の珠を無瑕玼と名く。

『善男子、淨印三昧も亦復是の如くなり。善男子、云何が淨印三昧とならば、三戒を修集し十善法を具し、慈悲を修行して衆生を憐愍し、他の事業を見ては親しく往いて營理し、一切を愛念して捨を修し意淨く、常に衆生を念ずるに四攝の法を以てし、一切を攝取して專ら六念を念じ、諸根を調伏して少欲知足に、聖種を斷ぜず、諸の闘訟を息め、憍慢を壞し、諸の師・和上・耆舊・長宿を恭敬供養し、他を輕んぜず、法を求め法を護り、惡法を遠離し、佛法僧に於て信心して懷無く、心常に一切の善法を緣念し、己身を讃せずして常に他の德を稱し、恩を知り恩を報じて諸の威儀を淨くし、忍辱を具し舍摩他を求め陀羅尼を修し、心は等しく[三四]風地水火空の如く、常に出家を樂み寂靜を修集

【二三】宋譯には淸淨大摩尼寶とす。
【二四】以下宋譯に、胝迦性・吠瑠璃性・馬瑙性・珊瑚性・赤珠性・雞薩梨寶性・吉祥藏寶性をあぐ。
【二五】梵に(Pṛthagjana)、異生ともいふ。
【二六】梵に(Śraddhānusāri)、宋譯に隨信行性とす。先の凡夫の位に於て、他人の言敎を信じ、之に隨つて修行したる鈍根の人なり。
【二七】梵に(Dharmānusāri)、宋譯に隨法行とす。先の凡夫の位に於て、自ら知力を以て敎法に隨つて修行したる利根の人なり、以上の二は見道の聖者也。
【二八】宋譯に無相行寶性をあぐ。
【二九】梵に(Srotaāpanna)、預流と譯す。預は入、流は聖道。卽ち聖道に入るを預流とす。
【三〇】梵に(Sakṛdāgāmin)、一來と譯す、欲界前六品の惑を斷じ、下品の惑を餘し(上中下に各亦上中下あり)、其の勢力は欲界の一生を潤ほすのみ。彼天上に往き一度人間に歸つて餘の惑を斷じ涅槃に入るが故に一來といふ。
【三一】梵に(Anāgāmin)、不還と譯す。欲界九品の惑を斷

こと無し、菩提を成ぜざれば衆生を捨つ、菩提の爲の故に淨戒を持せば、是の人能く無上尊を禮せん。若し諸法猶ほ焰の如く、衆生は平等にして虚空の如しと觀じ、心を淨めて諸の心想を作さずば、是の人能く無上尊を禮せん。諸の衆生の爲に大苦を受け、菩提の爲の故に忍辱を修し、一切の法は水月の如しと觀ぜば、是の人能く正覺を禮せん。衆生の命・士夫無しと觀じ、亦衆生の爲に菩提を修し、法は念々に滅盡の相ありと觀ぜば、是の人能く無上尊を禮せん。地獄の苦を受くるも心退せず、勤めて精進を加へて道を修集し、諸法は空なりと聞くも心怖れざる、是の人能く無上尊を禮せん。一切の境界は罣礙無く、猶ほ空中に手を動かす者の如し、亦三世の相平等なりと觀ぜば、是の人能く無上尊を禮せん。若し魔も其の心を知る能はずば、是の人能く大神通を得ん、若し說法の字義無盡ならば、是の人能く無上尊を禮せん。若し能く遍く諸の佛音を聞き、聞き已つて受持し廣く宣說し、三寶差別の相を見ざれば、是の人能く無上尊を禮せん。如來は六波羅蜜を具したまふ、去來有ること無きこと虚空の如く、了了に諸の衆生界を知りたまふ、是の故に我れ無上尊を禮したてまつる。如來は大功德を成就したまひ、終に似の我慢をも生ぜず、我れ今佛の色像を敬禮しまつる、是の身は世間も作す能はざるなり。佛光は一切の光に勝り、其の音の殊妙なること亦最上なり、一切の衆生は頂を見まつらず、是の故に我れ一切勝を禮しまつる。如來は諸衆生の解を知り、解に隨つて爲に法を演說し、能く煩惱の對治を知りたまふ、是の故に我れ世尊を禮しまつる』と。

〔三〕爾の時海慧菩薩、偈もて佛を讃へ已り、空より下つて佛に白して言はく『世尊、我れ今此に於て少しく諸問しまつらんと欲す、唯願はくは如來、哀愍して聽許したまへ』と。佛の言はく『善哉善哉、善男子、意に隨つて問を致せ、吾當に汝の爲に分別解說すべし』と。海慧菩薩世尊に言はく『我先に聞く、淨印三昧有り、若し菩薩有つて是の三昧に住せば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得ん

【三】宋譯、卷第二。

其の身の色像光明煒燁たり、唯如來を除きて餘の及ぶ者無し』と。爾の時梵天、見已つて卽ち恭敬の心を生じ、頭面もて禮を作し是の如きの言を作す『[一五]若し是の如き[一六]正士を見るを得ば大利益を得。我、今之に遇ひて、亦復是の如くなり。世尊、是の如き正法は當に久しかるべきや、近く住するや』。佛言はく『善男子、是の如き正法は如來の壽の如し、我れ涅槃の後は是の諸菩薩亦是の法を護らん。何を以ての故に、[一七]此の經は卽ち是れ過去未來現在の佛印なればなり』と。

爾の時海慧菩薩、踊つて空中に在り、高さ七多羅樹に、己身を示現し、智慧の力を以て、大衆をして信心を生ぜしめんが爲の故に、此の經を莊嚴せんための故に、偈を說いて言はく、

『下方に[一八]土有りて塵數を過ぎ、佛有りて海智神通尊といふ、常に衆生の爲に法を演說す、我れ聞いて能く受け人の爲に說く。我れ今此の大衆中に來り、[一九]十力尊を供養恭敬したてまつる、來る所の眷屬諸菩薩の、法中の細疑心を破せん爲なり。我れ今最無勝を敬禮したてまつり、法の如くにして上供養を作すは、上菩提を莊嚴し、衆生を無上道に敎化せんと欲するが爲なり。若し諸色は相有ること無しと觀じ、亦能く三種の[二〇]受を斷離し、若しは相貌及び種姓無くんば、是の人能く無上尊を禮せん。若し我と我所とに貪著せず、亦復中道を修集し、一切法は虛空の如しと觀ぜば、是の人能く無上尊を禮せん。若し諸の境界に貪著せず、亦能く寂靜にして內に入り、諸の法界に於て著を生ぜざれば、是の人能く無上尊を禮せん。若し如來の眞の法身を見、能く無上の大法幢を竪て、一切の法は幻の相の如しと見なば、是の人能く無上尊を禮せん。若し施無く受者無しと見なば、作無く受無きこと亦是の如し、若し正見及び邪見無くんば、是の人能く無上尊を禮せん。亦定んで菩提中にも在らず、又決定して生死にも在らずして、一切諸煩惱を遠離せば、是の人能く如來を禮せん。若し至心に善法を修し、身口意の三業等を淨め、亦能く諸根を調伏する有らば、是の人能く無上尊を禮せん。若し諸法を[二一]忍すれば我有る

【一五】宋譯はこの問を、我於今日聞ニ此菩薩大士名字ー、得レ見ニ菩薩如是色相ー、深自欣慶快得ニ善利ー、と、此大集會正法當住爲ニ久如ー邪とを明に分てり。

【一六】菩薩をいふ。菩薩は迷執邪見を離脫して正理を見る人なるが故なり。

【一七】宋譯は所有過去未來現在世中、諸佛菩提、從ニ此中ー出とす。

【一八】佛刹の謂、佛國なり。

【一九】十力具足の尊、卽ち佛なり。

【二〇】宋譯には領納とす。三種は、苦・樂・不苦不樂なり。次句の種性、宋譯には種姓とす。

【二一】忍は認の義。

彼も亦是の如し、汝今日及び諸大衆、我を覩見する如く、海慧菩薩も我を見ること亦爾なり』。『世尊、菩薩摩訶薩所有の神通は不可思議なり、極遠無量の世界に住し、而も是の如き無礙の天眼・無障の耳通有らんとは。世尊、誰か是の不思議の事を聞く有らば、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發さざるべき、唯下劣不肖の人を除くのみ』と。

爾の時海慧菩薩、無量の神通力を具足し、一念の中に於て、彼の國に在つて滅し、忽然として此の大寶坊中に現じて卽ち三昧に入り、此の大衆をして悉く遙に、彼の佛世界の所有人民、城邑・聚落・屋舍・殿堂、山林・樹木・飛鳥走獸を見、及び彼の佛、諸の大衆の與に圍遶せられて法を說きたまへるを見るを得しめ、是の事を現じ已つて卽ち三昧より安詳として起ち、前んで佛足を禮し右遶三匝して、其の世界の所有香花・種種の伎樂を以て佛に供養し、是の如きの言を作さく『下方世界の[一一]海智神通如來は、問を致すこと無量、如來の身・命及び大衆、悉く安隱なるや不や』と。卻いて一面の寶蓮花上に坐せり。

時に梵王有り名けて[一二]修悲と曰ふが、是の思惟を作す、何の因緣の故に是の大水有り、此の三千大千世界を滿たして而も水災に非ざる。我今當に往いて世尊に問ひまつるべしと。卽ち六萬八千の梵と共に如來の所に詣り、頭面敬禮、右遶三匝、長跪合掌して佛に白して言はく『世尊、何の因緣の故に此の中の三千大千世界に、七寶蓮花の莊嚴遍滿し、無量の菩薩各各次第して寶花上に坐し、三千世界に大水盈滿するや』。佛梵天に言はく『善男子、此は是海慧菩薩摩訶薩神通の力なり』。梵天世尊に言さく『如來[一三]所說の大集妙典は猶ほ未だ訖らざるや』。[一四]佛梵天に言はく『如來所有の樂說無礙は窮盡すべからず。梵天、佛は無量菩薩大衆の與に法界を觀察し法界を講論して法樂微妙なること亦盡すべからず』と。梵天世尊に言さく『如來所言の海慧菩薩とは其れ誰か是なる』。佛梵天に言はく『汝今見ざるや、寶蓮花に坐し、其の花縱廣十由旬に滿ち、諸の菩薩の爲に恭敬讚歎せらるるを。

【一一】 麗本に海慧といふも、宋元明三本倶に海智とす。今是に從ふ。

【一二】 宋譯に大悲思惟とあり。

【一三】 宋譯に、大集會中所有正法今尙說邪とあり。

【一四】 梵天に對する佛の言は、宋譯によれば、所有如來智慧辯才及威神力、不レ應ニ限量一。汝或見ニ於如來默然一、勿レ謂ニ無說一、而我常爲ニ十方世界所來菩薩一、廣大宣ニ說決定正法一と。

卷の第八

一海慧菩薩品　第五之一

二爾の時世尊、故に三欲・色二界中間の大寶坊中に在はし、諸の大衆のために圍繞せられて說法したまへり。是の時三千大千世界は大水盈滿して猶し大海の如くなり、又劫盡きて四水災起る時の如し。然も諸世界の國邑村落、城郭舍宅山林樹木は、上色界に至るまで嬈害せらるゝ無く悉く皆故の如くなり、而も諸の大衆皆是の水を見たり。爾の時水中に五無量の分陀利花を出生す、靑琉璃の莖に眞金を葉と爲し、功德寶を臺とし帝釋寶を鬚とす。周匝して多く無量の花有り、縱廣十里、寶坊の中に在りて高さ一多羅樹なり。爾の時大衆、各各自ら此の花上に在り。其の花爾の時大光明を出し、遍く十方無量の世界を照しぬ。爾の時大衆、心に歡喜を生ずらく、我等今必ず當に殊勝の妙法を聞くことを得べしと。

爾の時、六彌勒菩薩卽ち坐より起ち、前んで佛足を禮し右遶三匝し、蓮華上に於て長跪合掌して佛に白して言く『世尊、何の因緣の故に是の如く三千大千世界、中に大水を滿たして猶ほ大海の如く、又劫盡きて水災起る時の如くなる。復無量の分陀利花を出し、大光是の如く遍く十方無量の世界を照すや』。佛彌勒に言はく『下方三千大千世界の微塵等の國を過ぎて、一世界有り七寶莊嚴と名く、其の土に佛有し、八海智神通如來・應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號す。彼に菩薩有り名けて九海慧と曰ふ、此の大寶坊中に來至せんと欲し、無數の菩薩と倶に共に已に一切の數想を斷ち、來つて是の一〇大集經典を聽かんと欲す』と。

時に舍利弗、佛に白して言さく『世尊、彼の佛の世界は此を去ること甚だ遠し、海慧彼に在りて、頗し此の佛の所說を聞くを得るや不や』と。佛言はく『舍利弗、汝今我が前に於て聞く所の如く、

【一】宋惟淨譯、海意菩薩所問淨印法門經。

【二】同、卷第一。

【三】宋譯には、住二於如來神通境界大寶莊嚴最勝道場大菩薩宮中一とあり。

【四】壞劫の時に大雨車軸の如くに降り、地下の水輪湧き出でて、色界二禪天以下の世界を壞滅す。この水災は七の火災起つて後、一度起るを以て、八大劫に一水災あるなり。

【五】宋譯には百千廣大蓮華…瑠璃爲レ莖、帝青爲レ枝、閻浮檀金而爲二其葉一、吉祥藏寶以爲二其鬚一、馬瑙爲レ臺と。臺は花のうてな、鬚は蘂なり。

【六】梵に(Maitreya)、慈氏と譯す、後世の佛教にては將來佛とせらるゝこと普通なるも、佛時代に於て、舍利弗、目連等と同じく一の佛弟子として存したる事は經典の示す所たり。將來佛としての彌勒の思想成立せる後は、之と無關係なる佛弟子彌勒をも菩薩の名を以て呼ぶに至れるならんか。

【七】宋譯に無量功德寶無垢殊妙莊嚴とあり。

【八】同に海勝持慧遊戲出高神通如來といふ。

【九】同に海意といふ。

【一〇】同に於二我所說法中一而有二所聞一と。

く問に隨つて答ふるなり。若し菩薩有つて是の三昧を得ば、一切世界の人・天・魔・梵も其の樂說無礙なるを障ゆる能はざるなり』と。

爾の時帝釋、佛に白して言はく『世尊、若し人有りて無量の世中に功德を具足せば、乃ち能く不眴菩薩を見、其の所說を聞くを得ん。世尊、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有りて、是の經を受持して讀誦書寫し、人の爲に解說し、及び法を聞かば、悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發さん、當に知るべし、是の輩は一切皆當に不眴菩薩の如く師子吼を作すべし。世尊、我當に是の如き等の人を擁護すべし』と。佛の言はく『善哉善哉、[四六]憍尸迦、汝今至心に正法を護持せよ』と。爾の時梵王、復佛に白して言はく『世尊、我當に樂んで捨定三昧を修すべし、禪定の樂を捨て、來つて佛の法及び法を說く者を護り、病苦を離れ令めん。何の國土にも說法有る處に隨つて、我當に彼に至つて至心に聽受せん。若し國土有りて此の經を信受し三寶を供養せば、我亦當に爲に惡相を除滅し、其の土境をして淸淨[四七]安怙に、正法もて治化せしむべし』。佛言はく『善い哉・哉い哉、梵王、汝は眞に法を護る。若し人有り能く是の如く法を護らば、當に知るべし、是の人は終に三寶の寶を遠離せざるべし』と。爾の時四天王、復佛に白して言はく『世尊、我れ亦能く是の如き法を受持・讀誦・書寫・解說する者を護らん』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、善男子、若し法を知らば、是の人乃ち能く是の法を擁護せん、汝我所に於て法を聞くを得已り、即ち[四八]法眼を獲て諸の惡道を斷ぜり。若し復至心に正法を護持せば、久しからずして當に一切諸有を斷ずべし』と。

爾の時世尊、阿難に告げて言はく『汝當に是の如きの經典を受持し、[四九]四部衆の爲に其の義を廣說すべし』と。阿難佛に白して言はく『世尊、我れ能く是の如き經典を受持し、佛所說の如く、等しくして異有る無く、廣く四衆の爲に宣釋分別せん』と。爾の時人・天・阿修羅・乾闥婆・一切の大衆、經を聞きて歡喜讚歎すらく、『善い哉』と。

大方等大集經卷第七

【四六】梵に(Kauśika)、帝釋の姓なり。

【四七】怙は靜なり。

【四八】分明に衆生の差別の法を觀察するを法眼といふ。

【四九】また四部、四衆ともいふ、四部弟子の謂、卽ち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷なり。

我と我所と有り、若し我と我所無ければ則ち業果無し、若し是の如く觀ぜば名けて正業と爲す。若[四二]し壽命の爲に邪命を行ずるも、邪命を遠離するが故に正命と名く。若し是等の我・我所無きを觀ぜば、衆生・壽命・士夫有ること無し、如し其れ無ならば何の故に名けて正命と爲すを得んや。眼識に於て色は染著を生ぜず、眼識の性空なり、識の性空なるを以ての故に眼と色も亦空なり。若し眼と色と識と空ならば意・識・法に至るも亦復是の如し。若し是の如く觀ぜば是を正命と名く。[四三]顚倒有ること無く、諸の精進を斷つを正精進と名け、精進の法無し、精進無しとは精進を具足成就する有ること無く、精進もて利益を爲す者有ること無きなり。若し能く是の如き等の法を觀察せば是を正精進と名く。[四四]若し能く等しく一切の諸法は、平等にして空の如しと念ぜば、一切の諸法も亦復是の如し、一切法の如く陰・入・界等も亦復是の如し。若し能く是の如き等の法を觀ぜば、是を正念と名く。[四五]一切の法は皆悉く平等にして我と我所無しと觀ず、若し能く是の如く平等に觀ぜば、是を正定と名く。大德、若し能く是の如く一切の法性は平等なりと觀ずるを八正道と名け、是を梵行と名く。數を以ての故に八正道と名くるに非ず、非八の正道を名けて梵行と爲す。世道に非ざるが故に名けて梵行と爲し、心に著せざるが故に名けて梵行と爲し、二相に非ざるが故に名けて梵行と爲し、無作の相の故に名けて梵行と爲す。若し諸法は住處有ること無しと見れば乃ち梵行と名く』と。

爾の時不眴菩薩、諸大衆の爲に是の如き等の梵行の法を說くに、五百の比丘諸煩惱を離れて阿羅漢果を得たり。須菩提の言はく『善い哉、善い哉、善男子、快く是の法を說けり、離煩惱の阿羅漢の大の如く、其の宣說する所は、等しくして異有ること無し』と。『大德、我れ今亦是煩惱を遠離し、亦是阿羅漢なり、我れ亦聲聞緣覺の煩惱諸法を遠離し、我れ如法に住するが故に阿羅漢と名く』と。

爾の時須菩提、佛に白して言はく『世尊、是の不眴菩薩は、樂說無礙不可思議辯才利智あり、問に隨つて答へぬ』と。佛須菩提に言はく『不眴菩薩は一切法自在三昧を得たり、是を以ての故に能

【四二】同第五、正命に就て說く。

【四三】同第六、正精進に就て云ふ。

【四四】同第七、正念に就て說く。

【四五】同第八、正定に就て云ふ。

多羅三藐三菩提心を發し、虛空の中の諸天・龍・神・乾闥婆等、諸の華香を雨らして以用つて不眴菩薩を供養し、是の言を作さく『我等今日此の菩薩大利益を得たるを見たり』と。

爾の時須菩提、不眴菩薩に語つて言はく『善男子、汝久しく淸淨の梵行を修したるや。』不眴菩薩の言はく『大德、夫れ梵行は是れ過去未來現在に非ず、若し過去未來現在に非ざれば卽ち是れ無作なり、若し無作ならば卽ち名けて行と爲す、是の如き行は名けて無生と爲し、名けて無諍と爲す。言說及び威儀有ること無し。大德、眼の行に非ざるが故に名けて梵行と爲す、耳鼻舌身意の行に非ざるが故に名けて梵行と爲す、色聲香味觸法の行に非ざるが故に名けて梵行と爲す、亦色受想行識の行に非ざるが故に名けて梵行と爲す、相に非ず、緣に非ず、見に非ず、聞に非ず、知に非ず、覺に非ず。大德、是の如き等の法は去・來・住無く、牽無く、挽無く、數量有ること無く、上無く下無し、是を梵行と名く』と。

須菩提の言はく『善男子、夫れ梵行は八正道に名く』。不眴菩薩の言はく『大德、云何が八正道を名けて梵行と爲すとならば、[三八]若し正見を以て梵行と爲さば、諸法を見ざるを名けて正見と爲し、等しく諸法を見るを名けて正見と爲す。不見の見を乃ち正見と名く。若し見ざれば云何が名けて正見と爲すを得ん、若し正見無くんば、云何が名けて梵行と爲すを得んや。[三九]思惟有ること無きを正思惟と名く。夫れ思惟せば名けて顚倒と爲す、若し顚倒せば云何が正思惟と言ふを得んや。[四〇]一切の音聲は皆悉く平等なり、若しは善・若しは惡・若しは一・若しは二、若しは過去・若しは未來・若しは現在、若しは一切の字・若しは一切の聲、是を名けて響と爲す、若し是れ響ならば、云何が言つて正語と爲すを得ん。聲平等ならば、一切の行法は皆悉く無常、是れ苦・無我・涅槃寂靜なり、若し能く等しく一切諸法は、涅槃の相の如しと觀じ、及び演說せば是を正語と名く。[四一]身無ければ身業無く、口無ければ口業無く、意無ければ意業無し。何を以ての故に、*業處無きが故に。若し業處有らば則ち

【三八】八正道の第一、正見に就て云ふ。
【三九】同第二、正思惟に就て云ふ。
【四〇】同第三、正語に就て云ふ。
【四一】同第四、正業に就て云ふ。
※業のはたらく場所をいふ。

三昧を得。何等か八と爲す、一に淨心、二に至心、三に施心、四に離煩惱心、五に六界を觀じ、六に忍を修し、七に勤精進し、八に定を修して身心寂靜なる、是を八法と名く。八莊嚴とは、一に捨、二に戒、三に功德、四に智、五に舍摩他、六に毘婆舍那、七に發菩提心、八に一切佛法を莊嚴する、是を八莊嚴と名く。八發心とは、一に衆生・壽命・士夫有ること無く、一切諸法亦復是の如しと發心す、二に一切諸法は無常・苦・無我なりと發心す、三に一切諸法は空・無相・願なりと發心す、四に未來の法は住處有ること無しと發心す、五に現在の法は住處有ること無しと發心す、六に一切の諸法は業果報無しと發心す、七に一切の諸法作者有ること無く、受者有ること無しと發心す、八に一切の諸法は繫屬有ること無しと發心するなり。菩薩是の如き等の法を具足せば是の三昧を得ん」と。比丘聞き已つて進修する久しからずして、卽ち是の如き一切法自在三昧を得、三昧を得已つて卽ち光明を放ち、遍く三千大千世界を照しぬ。

『爾の時比丘、卽ち佛所に往き、頭面もて禮を作し右遶三匝して、虛空の一多羅樹に上昇し、結加趺坐して一千年を滿たし、不動不搖にして[三七]法喜を食と爲し、*此の智――樂說無礙を獲得し、三萬六千億の衆生をして不退心を得しめ、無量の衆生を三乘に安住せしめたり。爾の時法語比丘、千年を過ぎ已り、座より起ちて是の如き言を作せり「如來世尊は、勤精進の故に阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり、懈怠に非ざるなり」。「善男子、汝無量無邊の世中に於て無量無邊の功德を成就したり、故に能く速に是の如き神通を得たり、善男子、汝已に七萬六千億の佛所に往き、諸の善根を種え梵行を淨修したり、是の故に此の過去の善根に因つて、是の如き現在の善果を獲得したり」と』。

佛須菩提に告げたまはく『汝知れ、爾の時の法語比丘――三昧を得たる――は、豈に異人ならんや、卽ち是れ今の不眴菩薩にして是の如き無量の功德を成就したるなり』と。

爾の時世尊、須菩提の爲に、是の菩薩の往にし因緣を說きたまへる時、三萬二千の衆生は、阿耨

【三七】法を聞いて歡喜し、善根を增長し、以て慧命を資益することを、世の食の如くなるをいふ。
※此、麗本は比に作る、今三本に從ふ。

復八の精進有り、菩薩具せば能く法を宣說して諸衆生を化せん。一に法を求めて勤行精進し、二に法を持して勤行精進し、三に法を觀じて勤行精進し、四に法を說いて勤行精進し、五に法を護つて勤行精進し、六に法師を供養して勤行精進し、七に受法の者を護つて勤行精進し、八に如法に住して勤行精進す。是を名けて八と爲す。復八法有り、菩薩具足せば能く衆生を化す、何等をか八と爲す、一に慈等を修じて衆生を觀ずるが故に、二に悲を修して衆生を調伏するが故に、三に法を觀じて無上の法を得るが故に、四に智を觀じて憍慢を破するが故に、五に諸衆生を護つて安樂を施すが故に、六に善く思惟して諸の煩惱を壞するが故に、七に助道の法を修して菩提を莊嚴する故に、八に法を護つて六度を具足する故なり」と。須菩提、菩薩摩訶薩若し能く是の如き等の法を具せば、則ち能く一切衆生を教化せん』と。

『爾の時、比丘是の法を聞き已り、十千年に於て繫心思惟し、勤行精進せるは菩提の法を得んが爲なりき。精進を以ての故に、即ち無盡の器陀羅尼を得、善く一切衆生の言語を解し、語に隨つて說を爲せり。是の持を得已つて復無盡の辨才有り。是の如き陀羅尼を成就し已り、城國村邑聚落に周遍して無量の衆を三乘道に化し、其の父母・兄弟・眷屬宗族の爲に說法し、悉く隨順法忍を獲得せしめたり。

『須菩提、爾の時比丘、復佛所に往き、頭面敬禮右遶三匝し、却いて一面に住し佛に白して言く、「世尊、佛先に說きたまへるが如くに我れ已に證得し、佛神力の故に聖智慧を得たり。世尊、頗し三昧有り、菩薩修し已つて心退轉せず、善法を增長するありや」。佛言はく、「比丘、三昧有り一切法自在と名く、菩薩修し已らば其の心退せず、亦無量の善法を增長することを得」と。爾の時比丘、三昧の名を聞き、即ち佛に白して言はく「世尊、菩薩は云何が行じ、云何が修し、云何が學して、而も能く是の如き三昧を獲得するや」と。「比丘、八法・八莊嚴・八發心有り、菩薩具し已れば是の

り。爾の時世尊、八萬四千の大菩薩衆と、三萬二千の聲聞の大衆とともなりき、爾の時世に轉輪聖王有り、名けて廣持と曰ひ、號して法士と曰ふ、七寶——輪寶・象寶・馬寶・女寶・珠寶・兵寶・主藏の臣を成就し、千子具足して四天下に王たり。治むるに正法を以てし刀杖を加へず、衆生を憐愍し教ふるに十善を以てしたれば、一切の衆生も亦樂んで之を受けたり。爾の時千子悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發しぬ。爾の時聖王、如來菩薩聲聞一切の大衆に、衣服・飲食・臥具・湯藥・房舍・資生を供養し、萬歳を得已つて阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無上道の爲に三十七助道の法を修したり。

『爾の時彼の佛、壽命八萬四千歳を滿足して王に一子有り、名けて法語と曰ふ。彼の佛の法に於て信心して出家し、勤行精進して清淨に戒を持せり、無上菩提道を得んが爲の故なり。爾の時法語比丘、二萬年中に睡眠有ること無く、[三四]彈指の頃の如きも貪心・瞋心・癡心・不善の覺觀を生ぜず、父母・宗親・眷屬・飲食・衣服・房舍・臥具・資生の物を念ぜず、亦晝夜の相を覺知せず、二萬年中常に念佛を修したり。須菩提、法語比丘は勤精進の故に、[三五]四禪・四無量心・[三六]四無色定を獲得し、二萬年を過ぎ已つて佛所に往詣し、頭面もて禮敬し、右遶三匝し、却いて一面に住し、佛に白して言はく「世尊、我れ阿耨多羅三藐三菩提心を發したるは、一切衆生に安樂を施さんが爲なり、一切衆生を調伏せんと欲したるが爲なり、唯願はくは世尊、哀愍して示導したまへ。云何が我れをして諸衆生を化し、正法を宣說せしむるや」。佛比丘に言はく「八の陀羅尼門有り、若し成就せば無礙語を得、則ち能く諸衆生の爲に說法せん。何等か八なる、一に佛を念じて法身を知るが故に、二に法を念じて淨法を知るが故に、三に僧を念じて無礙を知るが故に、四に眞實に思惟して惡覺觀を破するが故に、五に字の不可說を知るが故に、六に舍摩他を修するは、諸法の同一味を知るが爲の故に、七に毘婆舍那を修するは、諸法の本性淨なるを知るが爲の故に、八に方便智を修するは、忍を得んが爲の故なり。比丘、是の如き八陀羅尼門を具せば、則ち能く正法を宣說し諸衆生を化するに堪任せん。比丘、

【三四】僅かの時間をいふ、二十念を瞬といひ、二十瞬を彈指と爲すと。

【三五】四禪定の略、この四種を修して色界の四禪天に生ず。此の四禪は、因に在ては惑網を超へ、果に在ては色界に生ず。初禪・二禪・三禪・四禪の四なり。

【三六】また四空定といふ、無色界に於ける四種の禪定なり、空無邊處定・識無邊處定・無所有處定・非想非非想處定なり。

の法を具せざるが故に。是を菩薩心に自在を得と名く。復次に善男子、若し菩薩有り、平等智を以て法界——種種の世間・種種の衆生・種種の說法・種種の方便——を觀ぜば、是を菩薩心に自在を得と名くるなり。復次に善男子、若し菩薩有り、[三三]長壽天に生じ未だ天壽を盡さざるに、其の身亦短命の中に生ずるは、諸の衆生を調伏せんと欲するが爲の故なる、是を菩薩心に自在を得と名くるなり。復次に善男子、若し菩薩有つて快樂を具足し、是の樂を捨て已り、諸の衆生の爲に大苦惱を受くるは、衆生を護るが故、菩提を獲るが故なる、是を菩薩心に自在を獲と名く。復次に善男子、若し菩薩有り、聲聞・辟支佛の行に同じくして、而も心に菩提の道を護念し、亦菩提微妙の行を修し、諸の聲聞・緣覺の人の爲に、意に隨つて說法し而も亦證せざる、是を菩薩心に自在を得と名くるなり。復次に善男子、若し菩薩有り、八萬四千の法門を解し、亦煩惱の行處に通達し、衆生の諸煩惱を斷ぜんが爲の故に、中に處して說法し、亦諸の煩惱の爲に汚されざる、是を菩薩心に自在を得と名く。復次に善男子、若し菩薩有つて神通を具足し、若し衆生有つて盲聾跛躄ならんに、菩薩摩訶薩自ら其の身を變じ、亦其の像に同じ而も說法を爲す、是を菩薩心に自在を得と名く。復次に善男子、若し菩薩有つて智慧を具足し、外典に通達し、善く邪論を解し、而も其の內心に邪見を爲さず、諸の衆生を調伏せんと欲するが爲の故に其の道を修集する、是を菩薩心に自在を得と名く。善男子、菩薩是の如き等の事を具足するを心の自在と名け、亦一切法自在三昧を得とも名く』と。

須菩提の言はく『世尊、不眴菩薩是の三昧を得て久しと爲すや近きや』と。佛の言はく『過去無量阿僧祇劫に、爾の時佛有し自在王如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、世界を淨と名け、劫も亦淨と名けたり。其の佛の國土は地平かなること掌の如く、金銀琉璃頗梨もて莊嚴し、常に幡蓋有り、兜率天の如く飲食多饒なりき。爾の時衆生、所有貪欲・瞋恚・愚癡の智勢有ること無く、多く利智有つて能く佛語を解し、一切悉く無上の大乘を樂みた

【三三】梵に(Dirghāyuso de-vāḥ)、色界第四禪天の無想天をいふ、一生の壽命長きが故に名く。

に常生にして外緣を須たざるべし、若し外の境界の性能生ならば、亦應に常生にして內を假らざるべし、若し倶に生ならば則ち二相有るも、二相の法性は眞實無し、是の如き等を通達了知するを無生忍と名く。若し是の如き眞の智慧を得ば、是を菩薩無生忍を得たりと名く。復次に大德、若し菩薩有りて二種莊嚴の功德と智慧とを具足成就し、是の二事の平等無二なるを觀ぜば、是の如く知ると雖も、我れ知ると言はず、亦此の知に於て貪著を生ぜず、是を無生忍と名く。復次に大德、菩薩摩訶薩は身意の寂靜もて法の寂靜を觀じ、法の寂靜もて菩提の靜を觀じ、菩提の靜もて忍の寂靜を觀じ、亦他に隨はず、內外に著せざる、是を菩薩の無生法忍と名くるなり。

爾の時世尊、不眴菩薩を讃して言はく『善哉、善哉、善男子、汝演說する所の無生法忍は、即ち是れ眞實にして、先佛の說の如くなり。復次に善男子、菩薩若し心の自在を得ば、即ち諸法自在三昧を得。云何が名けて心の自在と爲す。善男子、若し菩薩有つて貪愛を遠離し、帝釋身或は轉輪王身を得て、無量の諸衆生等の爲に〔三二〕五欲の樂を說くと雖も、而も其の內心は實に貪著せざる、是を菩薩心に自在を得と名く。復次に善男子、若し菩薩有つて三昧を修集し、四無量心もて諸有を求むる時、有心を以てせず、智慧心を以てし、欲界に生ずと雖も欲心に因らず、其の心常に三寶を遠離せず、諸波羅蜜を莊嚴修集し、四攝法を以て衆生を攝取し衆生を調伏し、三十七助道の法を修する、是を菩薩心に自在を得と名くるなり。復次に善男子、若し菩薩有つて空・無相・願を修し、自ら空・無相・願を證せず、亦衆生の爲に是の如き等の法を說き、聲聞・辟支佛等を調せんが爲に、無生正定の聚に入りて說法を爲し、彼既に聞き已つて即ち解脫を得るも、自ら之を證せず、亦衆生をして菩提を捨てざらしむる、是を菩薩心に自在を得と名く。復次に善男子、若し菩薩有つて、聲聞・辟支佛を調せんが爲の故に、生滅無き正定の聚に入り、亦〔三三〕滅定を得。又能く一切三昧出入の行相に通達し、是の如きを得て自在に通達すと雖も、亦滅盡三昧を證せず。何を以ての故に、未だ佛

【三二】色・聲・香・味・觸の五境は人の欲を引き起すが故に欲といふ、又、財欲・色欲・飲食欲・名欲・睡眠欲の五をもいふ。

【三三】滅盡定(Nirodhasamāpatti)の略、滅受想定ともいふ。六識の心心所を滅盡して起らしめざる禪定なり、次に說く滅盡三昧といふも亦是なり。

るなり。大德、解脫を得たる者は煩惱を具すと爲すや煩惱を具せずとなすや』。『善男子、我亦具にあらず不具に非ず』。『大德、若し仁具にあらず不具に非ずば、何の所得を爲すを解脫と言ふや』。須菩提の言はく『善男子、若し法界をして縛繫有らしめば、我則ち解脫せり。而も法界の性は縛解の相無く、相に非ず、非相に非ず、種種相に非ず、一相に非ず多相に非ず。法界の相の如く解脫も亦爾なり』と。須菩提是の法を說ける時、八千の比丘は[二九]阿羅漢果を得たりき。

須菩提、不眴菩薩に語つて言はく『善男子、佛所說の如く、若し能く是の如き等の法を具足して是の三昧を得ば、汝今是の三昧を具足するや不や』。不眴菩薩の言はく『大德、一切の諸法は根・住有ること無し、若し法無根ならば卽ち是れ無住なり、夫れ無住ならば名けて無作と爲す、若し無作ならば云何が住すべけん』。須菩提の言はく『若し無住ならば何が故に如來常に是の言を作す「是の如きの法に住せば無生忍を得」と』。不眴菩薩の言はく『大德、所住なきを亦名けて住と爲す、是の故に如來亦說きたまはく「貪に住して解脫を得」と。而も智慧の性は貪を壞する能はざるも解脫に住す。若し菩薩有りて能く是の如き不住の住を知らば、是を無生智慧と名く。是の無生智慧の中に住し已らば、則ち能く[三〇]無生法忍を獲得するなり。復次に大德、若し菩薩有り、凡夫を離れずして能く聖法を知り、凡夫心を以て聖法を觀察し、聖法性を以て忍を觀察し、忍性もて忍を觀じ、復是の忍を以て一切法を觀ずる、是の如き等を知るを無生忍と名くるなり』。

『復次に大德、若し菩薩有りて二種の界――一に衆生界・二に法界――を觀ずるに、法界の性を以て衆生の性を觀じ、衆生の性を以て法界の性を觀ぜん。若し法界を離るれば衆生界無く、法界と衆生界とは無生無滅なり、若し能く是の如く通達して知るをば無生智と名く。無生智とは則ち無生忍なり。復次に大德、菩薩摩訶薩は、十二因緣より法を生じ、六境界より、六因緣の若しは善不善を作すを知る。是の善不善は卽ち生滅無し、何を以ての故に、境界の性は法を生ずる能はざればなり。六入も亦爾なり法を生ずる能はず、何を以ての故に、無生の性の故に、如し其れ六入能く法を生ぜば、則ち應

【二九】聲聞四果の一、三界の見思の煩惱を斷盡し、盡智無生智を得て無學の位に住し、世の供養を受くるに堪えたる聖者をいふ。

【三〇】無生の法理に安住して心を動かさざるをいふ。以下の忍も亦この安忍を意味す。

有り、菩薩具足せば是の三昧を得。何等か九と爲す、一に念心を失せず、二に甚深の義を解し、三に魔業を破壞し、四に佛の三昧を具し、五に身口意を淨め、六に方便を具足し、七に威儀純善なる、八に勤行精進して六波羅蜜を具し、九に聲聞・辟支佛道を遠離するなり。復十法有りて菩薩具足せば是の三昧を得。何等か十と爲す。一に佛智を具足し、二に法界無分別智を具足し、三に眞實性に於て動轉有ること無く、四に三世平等の智慧を具足し、五に衆生心平等智を具足し、六に諸根の上中下を知るの智を具足し、七に四無礙智を具足し、八に三解脫門を具足し、九に諸法同一味智を具足し、十に諸法無生滅智を具足するなり』と。是の法を說きたまへる時、三萬二千の菩薩摩訶薩は是の三昧を得たり。

爾の時須菩提、不眴菩薩に語つて言はく『是の大衆中の三萬二千の諸菩薩等、皆悉く是の如き三昧を獲得したり。汝も今得たるや。』不眴菩薩の言はく『大德、乃至一法の得可き有ること無きを名けて三昧と爲す。我れ云何が得ん。凡そ得と言ふは卽ち是れ顚倒なり。夫れ顚倒は卽ち我・我所なり。菩薩若し我と我所とに著せば、則ち是の如き三昧を得る能はず』と。須菩提の言はく、『菩薩摩訶薩は何の處にか住して是の三昧を得るや』。不眴菩薩の言はく『須菩提所住の法の如くにして解脫を得ば、我れ是の如き住に是の三昧を得ん』。須菩提の言はく『我れ實に一切法中に住せずして解脫を得たり』。『大德、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、諸法に住せずして是の三昧を得るなり』。須菩提の言はく『善男子、菩薩摩訶薩は將た空・無相・願に住せずして三昧を得るや』不眴菩薩の言はく『空・無相・願は住するを得可きや』『しからず、善男子』。『大德、是の故に空・無相・願所住の處に是の三昧を得るなり。善男子、是の如き三昧は何處にか住在する』。不眴菩薩言はく、『一切法眞實性の住の如し、是の三昧に住する者亦是の如し、一切諸法眞實性に住するを聖解脫と名く、聖解脫とは無所住に名く、無住の住とは一切法に住するなり、一切の諸法は煩惱に住せず、解脫に住せざ

ば是の人則ち菩提に於て障礙し、菩提道に非ず。若し諸法に於て貪著を生ぜば、菩提道を去り則ち大遠と爲す。若し貪著せざれば、則ち隣近と爲す。復二法有りて、菩薩具足せば則ち能く是の如き三昧を獲得す。一は菩提方便の爲に奢摩他を修集し、二は善法方便の爲に毘婆舍那を修集するなり。復三法有りて、菩薩具足せば是の三昧を得。何等を三と爲す、一に衆生を捨せずして空三昧を修す、二に法を捨せずして無相三昧を修す、三に諸有を求めて無願三昧を修するなり』と。

爾の時世尊卽ち頌を說いて曰はく、

『衆生を調伏するに空を修集し、法を護持するが故に無相を修し、諸有を捨せずして無願を修せば、是の人則ち是の三昧を得ん』。

『復次に善男子、復四法有つて菩薩具足せば、則ち能く是の如き三昧を獲得す。何等か四と爲す、一に四諦の方便を具足し、二に四無量心を具足し、三に四無礙智を具足し、四に四攝の法を具足するなり。復五法有り、菩薩具足せば是の三昧を得、何等か五と爲す、一に五神通を具足し、二に五根を具足し、三に五力を具足し、四に眞智を具足して五陰を觀じ、五に五眼を具足するなり。復六法有り、菩薩具足せば是の三昧を得。何等か六と爲す、一に六波羅蜜を具足し、二に六念を具足し、三に智慧を具足して六入を觀じ、四に具足して六道を遠離し、五に六通を具足し、六に[二四]六和敬法を具足するなり。復七法有り、菩薩具足せば是の三昧を得。何等か七と爲す、一に無貪にして煩惱を遠離し、二に衆生の所に於て瞋恚有ること無く、三に諸法の中に於て疑心有ること無く、四に無礙智を具して五蓋有ること無く、五に十二因緣を觀じて疑網有ること無く、六に無上の智慧を成就し、七に無上の三昧を成就するなり。復八法有り、菩薩具足せば是の三昧を得。何等か八と爲す、一に八正道分を修集し、二に[二五]八邪道を離れ、三に[二六]八難を遠離し、四に[二七]八大人覺を具足し、五に[二八]八解脫を具し、六に八勝處を具し、七に菩提を專念し、八に煩惱の習を斷ずるなり。復九法

【二四】比丘の修すべき六種の行、(一)同戒和敬(他人と同じく戒品を持ちて和同愛敬すること)、(二)同見和敬(同じく實相の正見に住して和同愛敬すること)、(三)同行和敬(同じく正行を修して和同愛敬すること)、(四)身慈和敬(五)口慈和敬、(六)意慈和敬(この三は身口意に大慈を行ひて和同愛敬すること)。

【二五】八正道に反するを八邪道とす。

【二六】地獄、餓鬼、畜生、長壽天、北倶盧洲に在ると、不具に生るると、世智、辯聰なると、佛前佛後に生るるとの八は、佛を見ず正法を聞くを得ざるが故八難とす。

【二七】大人(菩薩・聲聞・緣覺等)の起す八種の思念なり。少欲覺・知足覺・寂靜覺・正念覺・正定覺・精進覺・正慧覺・無戲論覺なり。

【二八】八種の解脫觀、是によりて無漏の智慧を起し、三界の惑を斷じ羅漢果をさとるが故に解脫といふ。また八背捨ともいふ。この八解脫を修して後、觀心純熟して自在に淨不淨の境を觀ずるを八勝處といふ。所緣の境を制伏して、心は境處に勝るが故に勝處といふ。

き、是を諸法自在定と名く。問ふ有るも瞋無く輕慢無く、常に憐愍を修して二相無く、能く自ら諸の過失を淨除する、是を諸法自在定と名く。七種の無上財を具足し、壽命・無上命を成就し、十力・四無畏を具足する、是を諸法自在定と名く。常に法を樂聞して善く思惟し、善く思惟し已つて如法に住し、如法に住し已つて衆の爲に說く、是を諸法自在定と名く。菩提と上種性とを忘れず、三寶を供養して化身を得、大衆を勸化して菩提を具せしむる、是を諸法自在定と名く。其の目清淨にして諸佛を見、梵音聲を得て邊有ること無く、其の音十方の界に遍滿する、是を諸法自在定と名く。財寶の惠施盡る有ること無く、智慧の演說窮竭する無く、父母・師・和上を供養する、是を諸法自在定と名く。宿命智を成就具足し、無上菩提の心を失せず、六波羅蜜に厭足無き、是を諸法自在定と名く。衆生を利益せんと欲するが爲の故に、菩薩藏及び摩夷を受け、樂んで衆生の爲に廣く分別する、是を諸法自在定と名く。一切の惡思惟を遠離し、了了に十方の界を覩見し、一心に能く無量の心を知る、是を諸法自在定と名く。一心に三世の事を了知し、無量の諸神通を修集し、(三三)後邊身を得て智無礙なる、是を諸法自在定と名く。衆生を憐愍して大悲を修し、諸根を觀察して意に隨つて說き、一切の佛法に自在を得る、是を諸法自在定と名く。若し是の如き事を聞くを得る有り、至心に受持して信順を生ぜば、卽ち能く無上道を獲得せんこと、亦往世の諸世尊の如くなるべし』。

爾の時不眴菩薩、佛に白して言はく『世尊、菩薩摩訶薩は何の法を成就して是の如き一切諸法自在三昧を獲得するや』。佛の言はく『善男子、菩薩摩訶薩は一法を具足して則ち能く是の如き三昧を獲得す。所謂一切の諸法に著せざるなり。復一法有つて戒に著せず、何を以ての故に、若し戒に著せざれば則ち能く一切の善法に著せず、戒を具足する故に則ち能く一切の佛法を成就し、大利益・無上の大道を得。是の故に我言ふ、「戒は是れ一切善法の根本、戒を大燈と名く」と。若し戒に著せ

【三三】最後身の菩薩を謂ふなるべし。卽ち生死界中の最後の身を受け、未だ成佛せざる以前をいふ。

離を修して安樂を得んと欲し、常に樂んで五神通を修集する、是を諸法自在定と名く、所說の正法は衆樂んで聞く、其の義盡し難きこと大海の如く、眞實に法性を了知する、是を諸法自在定と名く　佛身を觀察すること諸法の如く、佛性と法性と差別無く、護法の心退轉無き、是を諸法自在定と名く。身口意の業は寂靜を得、戒・定を具足して心無爲に、一切煩惱の習を遠離する、是を諸法自在定と名く。能く無上の眞解脫を證し、亦能く實知見を獲得し、定慧を修集して邊有ること無き、是を諸法自在定と名く。不淨の物は以て施さず、一切不淨の戒を受けず、三十二相を具足して成ずる、是を諸法自在定と名く。種種の諸惠施を修行し、是の故に八十好を獲得し、佛法中に於て自在を得る、是を諸法自在定と名く。四念處を修集具足し、正勤もて能く諸の煩惱を壞し、衆生を調せんが爲に如意を修する、是を諸法自在定と名く。佛法に入らん爲に信根を修し、魔衆を壞せん爲に五力を修し、諸法を知るが爲に七覺を修する、是を諸法自在定と名く。八正道を修して邪徑を破し、衆生に無上の樂を施し、心に憍慢と[三]一師の想と無き、是を諸法自在定と名く。若し自在定を修集するを得ば、是の人則ち能く煩惱を離れ、諸佛菩薩等に親近し、樂んで少欲知足の行を修す。これ無上聖人の數に在るが爲にして、衆生を以ての故に大悲を修し、飲食の爲に法を演說するにあらざる、是を諸法自在定と名く。法の爲に身命を惜まず、正法を護持して財を悋まず、常に樂んで二種の施を修行する、是を諸法自在定と名く。常に衆生を勸めて法を聽かしめ、其の未だ解せざる如きも、心に輕んぜず、勝他の爲に戒を護持せざる、是を諸法自在定と名く。無量世中に聞く所の法をば、至心に受持して他の爲に說き、無上法師として大名稱あり、時節と戒・非戒とを觀ぜず、演說して休まず亦息はず、時節を失せず意に隨つて說き、說く所は諸法を幻相の如しとする、是を諸法自在定と名く。所言をば眞實に甘樂して聞き、聞き已つて說の如くに安住し、其の心貪無く嫉妬無

【三】前に「復一切の事業に通達すと雖も、中に於て獨師の想を生ぜず」と云へるに當る。卽ち我れ獨り師たる資格ありとする慢心をいふ。

故なり、上族・好種姓を得んが爲の故なり、佛・法・比丘僧を見んが爲の故なり、堅固なる不退の心を得んが爲の故なり、聖行を行じ[二〇]聖數に入らんが爲の故なり、無盡の大財寶を得んが爲の故なり、無邊の大功德を得んが爲の故なり、清淨の梵音聲を得んが爲の故なり、佛の功德を具足するを得んが爲の故なり、菩薩の法を具足するを得んが爲の故なり、菩薩の法藏及び[二一]摩夷を受持・讀誦・書寫するを得んと欲するが爲の故なり。是の如き等の法を受持して廣く宣說せんと欲するが爲の故なり。善男子、菩薩摩訶薩、一切法自在三昧を獲得せば、一切事に於て能く敎ふる者無きなり』と。

爾の時世尊卽ち頌を說いて言はく、

『其の心に佛・法・僧を敬信し、亦復明に四眞諦を信じ、若し智慧の無罣礙なるを得ば、是を諸法自在定と名く。能く苦の第一諦を知り、亦能く集の因を遠離し、第三の眞の滅諦を證獲し、無上の聖道諦を修集す。大念心を具足成就し、眞實に陰の虛空の如くなるを觀じ、其の身の威儀大寂靜なる、是を諸法自在定と名く。能く六入の性と相とは空なりと觀じ、亦能く諸根を調柔し、能く衆生の疑網心を壞する、是を諸法自在定と名く。能く空・無相・願を修集し、一切の諸憍慢を破壞し、行ずる所の諸行に黑闇無き、是を諸法自在定と名く。斷見及び我見を遠離し、身口意の業をして寂靜ならしめ、其の心有無の法に著せざる、是を諸法自在定と名く。說く所は正義にして顚倒無く、一切の衆生心を調伏し、旣に說法し已つて憍慢無き、是を諸法自在定と名く。一切の諸善根を修集し、煩惱の爲に汚されず、其の心熱無く亦濁無き、是を諸法自在定と名く。他の爲に喜んで菩提を求めず、亦虛誑に善法を修せず、十方の諸佛其の心を觀じたまふ、是を諸法自在定と名く。常に樂んで惠施し戒を護持し、憐愍の心の故に諸惡を忍び、精進し修定し及び智慧ある、是を諸法自在定と名く。諸の衆生の爲に慈心を修し、亦怨親を分別する想無く、樂んで衆生に無上の樂を施す、是を諸法自在定と名く。衆生を菩提に調伏し、捨

【二〇】聖者の數に入るなり。

【二一】また摩怛理迦(Mātṛkā)本母、行母など譯す。論藏の謂なり。論藏は一切の義理を生ずる母なるが故にこの名あり。

修しては諸の煩惱を捨て、[一三]念戒を修しては常に佛戒を念じ、[一四]念天を修しては後邊身を念じ、身・口・意を淨めて他人に隨はず、戒・定・智慧を清淨に施し已りて、能く三十二相を具足するを得、種種の物を施して八十種好を具足成就し、出世の智慧を莊嚴せんと欲するが爲に四念處を具し、一切の煩惱を遠離せんと欲するが爲の故に四正勤を具し、其の心をして自在を得しめんが爲の故に四如意を具し、諸の魔怨を壞破せんと欲するが爲の故に信根を修集し、一切の法を顚倒せざるが爲の故に精進根を修し、勸めて諸の罪過を憶念せしむるが故に念根を修集し、諸衆生の心を清淨ならしむる爲の故に定根を修集し、一切の諸法に於て頂たるが爲の故に慧根を修集し、無壞の爲の故に五力を修集し、眞實に一切法を知るが爲の故に七覺分を修し、眞實に道と非道とを知るが爲の故に八正道を修し、寂靜を樂み・少欲知足にして惡友を遠離し、復一切の事業に通達すと雖も、終に中に於て獨師の想を生ぜず、[一五]諸の煩惱に於て心貪著せず、衆生を瞋らず諸見を疑はず、我と[一六]我所とに於て心著を生ぜず、常に衆生を度せんと欲するの心を修し、師・和上・父母・善友に於て恩を念ずるの心を生じ、常に往昔の恩に報答せんことを思ひ、[一七]禁を毀つ者を見ては譏刺を生ぜず、[一八]重擔を捨棄するは眞に陰を觀ずるが故なり、不競・不諍にして護法・持戒し、持戒及び護法の者を攝取し、法を聽き法を念じ法を供養し、正法の中に於て心に疑網無く、凡そ演說する所は飮食の爲ならず、至心に演說し、說時を輕んぜず、亦自ら高ならず、善芽を出さんが爲に聞く所を失はず、病の須つ所を瞻て供給・走使し、法師を供養して其の短を說かず、種姓・戒と非戒とを觀ぜず、常に樂んで法を聞き、至心にして忘れず、時節を失せずして常に法師を請ひ、道化を敷揚し、講說する所有るも、憍慢を生ぜず、聞き已つて義を解して亦自ら大ならず、他人の所有過失を觀ぜず。[一九]聽法すべき所は知足の爲の故なり、三寶の種を斷絕せざらんが爲の故なり、無礙の宿命智を得んが爲の故なり、眞實に法性を見るを得んが爲の故なり、無上菩提心を發さんが爲の故なり、如來の眞實の法を護らんが爲の

【一三】戒行は大勢力あり、よく衆生の惡不善の法を除く、我れよく精進護持せんと念ずるなり。

【一四】天は欲界の六天、色、無色界の諸天なり、往昔善根を修するによつて彼の天に生る、我れ亦是の如き功德を具して彼の天に生れんと念ずるなり。この念天に就ては大・小乘に於てその解異にす。涅槃經十八、智度論二十二參照。

【一五】憍慢無きなり。

【一六】我（が）の所有物、即ち我に附屬し我によりて執着せらるゝ事物。卽ち個人的主觀の對象となるもの。

【一七】禁戒の略、卽ち戒律なり。

【一八】衆生は煩惱を以て重擔とす。

【一九】原文に所可聽法、爲知足故云と。

衆生の善根を熟し、風の如く能く戒・聞・慧等に於て障礙する所無く、慈悲を修集すること猶ほ虛空の如く、慧眼無量なること猶ほ帝釋の如く、心自在を得ること自在天の如く、正法もて世を化すること轉輪王の如く、大福德を聚むること須彌山の如く、善に於て厭くこと無く、衆の珍寶を聚むること猶ほ大海の如く、十二因緣の深義を思惟する亦復是の如く、畏懼する所無きこと師子王の如く、善法の財を具すること猶ほ商主の如く、一切の依正たること大醫王の如く、能く光明を作すこと猶ほ庭燎の如く、闇を破ること日の如く、清涼なること月の如く、煩惱に汚されざること蓮華の如く、一切諸佛の妙法を具足すること猶ほ滿月の如くなるや』と。

佛の言はく『善い哉・善い哉、善男子、能く此の義を以て如來に諮啓せり、至心に諦聽せよ、吾當に汝の爲に分別解說すべし。善男子、三昧有りて一切法自在と名く、菩薩是の三昧を修集せば、則ち能く是の如き等の事を獲得し、亦無量無邊の福德を得、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成じ、成佛の時世界の所有一切は具足すべし。善男子、一切法自在三昧とは、所謂佛・法・僧、苦・集・滅・道、陰・入・界等、空・無相・願、出生滅沒の十二因緣、內外の因果、業及び果報を信じ、開塞觀に於て一切法は幻の如く化の如く焰の如く響の如く、水中の月・龜毛・兎角・空中の花・石女の子の如く、影衣を著け・夢に白象に乘るが如く、若しは有・若しは無及び有無と、非有・非無・非常・非斷、非生・非滅、非內・非外、非見・非斷なりと信じ、是の如き等を信ぜば、則ち能く佛・菩薩の大事を信じて自ら輕んぜざるなり。菩薩の事業、復廣大なりと雖も、我れ亦能く知りて心に自在を得たり、能く大惠施しては禁戒を護持し、外事を妨げず、衆生を憐愍しては常に忍辱を修し、不退の爲の故に勤行精進し、衆生をして煩惱を離れしむるが爲の故に智慧を修集し、一切分別の想を壞せんが爲の故に三昧を修集し、妙音聲を得て一切を樂聞せしめ、[九]念佛を修しては諸如來の平等無二なるを觀じ、[一〇]念法を修しては一切法の同一性相なるを觀じ、[一一]念僧を修しては一切僧の退轉有ること無きを觀じ、[一二]念捨を

【八】うまず女なり。龜毛、兎角と共にすべて無法に喩ふ。

【九】佛は十號具足し、大慈悲大光明有り、神通無量にして衆生の苦を拔濟す、我れよく佛と同じからんと念ずる也。

【一〇】如來所說の法は大功德なり、衆生の大妙藥なり、我れ能く之を證して衆生に施與せんと念ずるなり。

【一一】僧は如來の弟子、無漏法を得、或定慧を具足し、世間の良福田なり、我れ僧行を修せんと念ずるなり。

【一二】捨は施なり、施は大功德ありて、よく衆生の、慳貪の病を除く、我れよく善施を以て衆生を攝取せんと念ずるなり。

へ、諸衆生の爲に大集を說きたまふ、故に我[三]師子王に歸依しまつる。樂んで天と人とに諸の安樂を施したまひ、衆生の喜び見ること滿月の如し、力勢ある破魔衆を具足したまふ、我今[四]大藥樹に歸依しまつる。善根を成就して甘露を施し、能く衆生をして生死海を度せしめたまふ、我今無上尊――妙相三十二を具足したまへる――に歸依しまつる。世尊の莊嚴は此の大衆において、猶ほ須彌の四域に顯るるが如くなり、名稱無礙にして十方に遍ねし、人中の象王に我敬禮しまつる。如來の智慧は虛空の如く、三世に通達して障礙無く、衆生の根に隨つて說法したまふ、我今自在を敬禮しまつる。無量劫を過ぎて精進を勤め、同業の諸菩薩に超勝したまひ、所得の佛の法は先佛の如くなり、我今一切覺を敬禮しまつる。十方の諸佛は悉く、精進殊勝にして無邊量なるを讃歎したまひ、無量の衆生聞くを得已つて、悉く皆同じく菩提心を發す。正法の中に於て厭足無く、兼て以て諸衆生を勸化し、能く淸淨法の性を說きたまふ、我今[五]大法王に稽首しまつる』と。

爾の時不眴菩薩、偈もて佛を讃し已り、佛に白して言はく『世尊、我等此の大集經中に於て少しく問を發さんと欲す。唯願はくは如來哀を垂れて聽許したまへ』。佛の言はく『善哉善哉、善男子、意に隨つて問を發せ。吾當に汝の爲に分別宣說して、汝等の疑網の心を除却すべし』と。不眴菩薩既に聽許を蒙り、心大に歡喜して佛に白して言はく『世尊、菩薩摩訶薩は何の三昧を修してか速に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得、大念心・大智・大意を得、慚愧勇健にして、施を修し戒を敎へ、忍辱の鎧を被、精進の[六]幢を建て、神通に遊戲して慈悲を莊嚴し、深く法を樂み喜んで[七]捨山に登陟し、能く說き能く答へて魔怨を摧伏し、諸の邪見を壞して諸佛を離れざる。菩薩の善友は常に化身を得、念心を失せず、深く大乘を信じ、樂んで衆生に無上の智光を施し、世法の爲に染汚せられざること四大に同じく、地の如く能く一切衆生を利益し、水の如く能く一切の垢穢を洗ひ、火の如く能く

【三】佛をいふ。佛は人中の最第一なること獸中の師子の如くなるによる。
【四】佛は衆生煩惱の病を治すること藥樹の如くなるが故に云ふ。
【五】梵に(Dharmasvāmi)。
【六】はたほこ、竿頭に龍頭を付して、たれぎぬをつるせるもの、梵に(Dvaja)。
【七】捨(Upekṣā)を行ずるなり。

卷の第七

不眴菩薩品　第四

爾の時世尊、故に欲・色二界中間の大寶坊中に存し、諸の大衆のために圍遶せられて說法したまへり。爾の時衆中に金色の光有り、其の光明淨にして遍く三千大千世界を照し、悉く一切の日月・四天・釋・梵の光明を蔽ひ、照し已つて卽ち滅す。一切の大衆は如來の目未だ曾て眴かざるを瞻覩す。爾の時に當り、寂念にして無聲、亦聲欬[一]・出入の氣息も無し。

爾の時大德須菩提、佛に白して言さく『世尊、今何の因緣にて是の光明有り、一切の大衆は如來の目未だ曾て眴かざるを瞻覩するや』。爾の時佛、須菩提に告げて言はく『東方無量の世界を過ぎて、彼に菩薩有り名けて不眴と曰ふ、萬の菩薩と俱に共に發ち來り、如來の微妙方等大集經典を聽かんと欲す、是れ其の光明なり』と。所言未だ訖らざるに、不眴菩薩已に佛所に至り、大寶坊中に種種の香花伎樂を齎持して佛を供養し、頭面もて足を禮し、恭敬して右遶し、却いて一面の寶蓮華上に坐せり。

爾の時須菩提、復佛に白して言はく『世尊、不眴菩薩來る所の世界は、此を去ること遠きや近きや、國土を何が名け、佛號は何等なる』。佛の言はく『須菩提、東方此を去る七萬二千の恒河沙等の諸佛の世界をすぎ、土有つて不眴と名け、佛を普賢如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號す。不眴菩薩は彼より來る』と。

爾の時不眴菩薩摩訶薩、長跪合掌して偈を說きて佛を讃ふらく、

『如來世尊は衆の寶聚なり、一切の波羅蜜を具足したまふ、無上の法師、天中の天[二]なり、衆生の爲の故に我敬禮したてまつる。寂靜なる戒・定は動かすべからず、無上の智慧もて諸根を調

【一】欬はしはぶきなり。

【二】佛をいふ。佛は諸天中の最勝天なりとす。梵に(Devātideva)。

忍を得、一切の諸天は諸の花香と種種の伎樂とを以て、佛を供養し尊重讃歎して、是の如きの言を作す『若し是の如き等の經を聞くを得る有らば、當に知るべし、是の人定んで阿耨多羅三藐三菩提を得ん』と。

〔二七〕爾の時、梵天・釋天・四天王天など佛に白して言はく、『世尊、如來は今是の如き無限量の義、了了の義、煩惱を壞するの義を說きて、諸の魔業を摧き、諸の邪見を破し、能く一切無上の正法を持したまふ。我等も亦能く受持・讀誦・書寫・解說せん。若し佛弟子の、能く之を受持・讀誦・書寫・廣說する者有らば、我等亦當に爲に衞護を作すべし。若し惡魔有りて、是の人の爲に嬈害の事を作さんと欲せんに、我當に遮止して成就せざらしむべし』と。佛の言はく『善哉・善哉、善男子、汝爾の時に於て、若し能く我が諸弟子を護らば、卽ち是れ我の正法を護持するなり。是の如くに護らば法則ち久しく住せん』と。

爾の時世尊、阿難に告げたまはく、『阿難、汝當に是の如き經典を受持・擁護して演說すべし。若し菩薩の、無量劫に樂うて惠施を修する有り、復菩薩の、是の經を受持し、讀誦書寫して人の爲に廣說し、大慈悲を修し、兼ねて此の義を以て人を勸めて學ばしむる有らんに、其の人得る所の福は彼よりも多からん。亦能く速に疾く大乘を獲得せん』と。阿難佛に白して言はく『世尊、是の經を何が名け、云何が奉持せん』と。佛言はく『阿難、是の經を名けて〔二八〕眞實法義・毘尼法便・成就發心無量寶聚・無量陀羅尼・十力・四無畏不共法聚・菩薩摩訶薩不退轉印・廣說大乘・寶女所問と名く。是の如き等の名を、汝當に奉持すべし』と。爾の時、阿難及び諸の人天、經を聞いて歡喜し、信受奉行せり』〔二九〕。

大方等大集經卷第六

【二七】晉譯、囑累品、第十三。

【二八】晉譯に、斯之經法、名曰眞諦曉了義律達門之品、當持。又名無量之德、發意所說當持。如來十力四無所畏十八不共諸佛之法、分別諸明、菩薩應時遵修法行、說不退轉輪印講演大乘、當奉持之、聚會之品寶如所聞。當奉持之。

【二九】晉譯終。

障礙の事亦復是の如し。亦涅槃の功德の無量なる如く、障礙の事亦復無量なり、生死の過の無量無邊なるが如く、即ち是の大乘の障礙もしかり。寶女、若し人有りて能く是の如き無量の惡法を遠離せば、當に知るべし、是の人即ち大乘を得ん。寶女、若し菩薩有りて能く淨心を得ば、是の人即ち能く大乘を獲得せん』と。

『世尊、衆生は云何して速に無上の大乘を成就するを得る』。『寶女、三十二事あり、衆生修集せば能く速に之を得ん。何等か[一一]三十二なる。一に衆生請はざるに而も往いて親附す、二に他の福德を見て妬心を生ぜず、三に至心に無量の善根を修集す、四に他の事業を營むも愁惱を生ぜず、五に至心に身口意業の淨を濁さず、六に利養の爲に[一二]四威儀を改めず、七に如說に住す、八に諸の衆生に於て其の心清淨なり、九に終に菩提の心を放捨せず、十に檀波羅蜜を清淨に莊嚴す、十一に尸波羅蜜を清淨ならしむ、[一三]毀禁を憐愍するが故に、十二に忍波羅蜜を淨む、身命を惜まざるが故に、十三に精進波羅蜜を淨む、十力無畏を得るが故に、十四に禪波羅蜜を淨む、煩惱を遠離するが故に、十五に般若波羅蜜を淨む、煩惱の習を除くが故に、十六に勇健定を修す[一四]諸の魔業を壞するが故に、十七に至心に諸衆生を度脫せしむるが故に、十八に四攝を修するが故に、十九に心平等の故に、二十に[一五]一切の諸衆生を捨せざるが故に、二十一に恩を知りて報ずるが故に、二十二に正法を護持するが故に、二十三に助道の法を修し休息せざるが故に、二十四に諸の善法に於て厭足する無きが故に、二十五に憍慢を破するが故に、二十六に三寶を供養するが故に、二十七に一切法に於て*謗を生ぜざるが故に、二十八に善く十二の深因緣を解するが故に、二十九に七財を具するが故に、三十に一切法に於て自在を得るが故に[一六]三十一に六神通を修するが故に、三十二に定・慧を修集するが故に。是を三十二――衆生修集して疾く菩提を得る――と名く』と。

是の法を說きたまふ時、七萬二千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、萬二千の菩薩は無生法

【一一】以下の三十二の中、一、三、五、八、九―十五、二十二―二十五、二十七―三十一は晋譯と合す。

【一二】行・住・坐・臥に心を調へ戒を失はざるをいふ。

【一三】禁戒(戒律)を犯すなり。

【一四】晋譯に、清淨心者、降㆓伏一切衆魔㆒之故、といふもの之に當らん。

【一五】晋譯に習㆓諸四恩㆒不㆑捨㆓衆生㆒故といふもの之に當るか。※謗、麗本は諍に作る、今三本に依る。

【一六】晋譯に德慧成就、不㆑失㆑通故とあり。

明を斷ず。能く衆生をして多聞を獲得せしめ、安樂を作さんが爲に一切の苦を斷ち、能く善業と佛智・無礙智・無上智・平等智・一切智を作さしむ。是を大乘と名く』と。是の法を說きたまへる時、萬二千の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、已に發心し已つて復是の言を作せり『若し衆生有りて能く是の如き大乘心を發せば、卽ち無量の善法利益を得ん』と。

爾の時寶女、佛に白して言はく『世尊、何の障礙の故に、衆生をして疾く大乘を得しめざる』と。佛寶女に告げたまはく『三十二事有り、是の因緣を以て爲に障礙を作す。[一〇五]何等か三十二なる、一に聲聞乘を樂ひ、二に緣覺乘を樂ひ、三に[一〇六]釋身を樂ふが故に、四に[一〇七]梵身を樂ふが故に、五に樂ふて世の樂の爲に禁戒を受持す、六に樂ふて一善を修す、七に常に嫉妬を懷く、八に多財に貪著して慳悋なり、九に衆生を勸化して善法を修せしむるを樂まず、十に心憍慢の故に、十一に菩提心を求めざるが故に、十二に菩提心を畏るるが故に、十三に一法の中に於て著心を生ずるが故に、十四に善く思惟せざるが故に、十五に師長・[一〇八]和上・善知識に親近する能はざるが故に、十六に餘部を誹謗するが故に、十七に身・口・意の業を淨むる能はざるが故に、十八に無上法を護持する能はざるが故に、十九に少しの法味を得るも悋んで說かざるが故に、二十に少しく法義を解して大慢を生ずるが故に、二十一は[一〇九]四攝を遠離するが故に、二十二に同師同學を恭敬する能はざるが故に、二十三は樂うて六波羅蜜を念ぜざるが故に、二十四に[一一〇]三聚を遠離するが故に、二十五に願を發さざるが故に、二十六に善根少きが故に、二十七に義を倒解するが故に、二十八に三寶を歎ぜざる故に、二十九に大乘菩提の事を誹謗するが故に、三十に自ら義を解せずして他の說を誹るが故に、三十一に諸の魔事を覺了知せざるが故に、三十二に生死を樂むが故に。是を三十二事――大乘を障礙し衆生をして疾く大乘を得しめざる――と名く。

『寶女、是の如き障礙は其の事無量なり、我れ今但略說するのみ。大乘所有の功德は無量にして、

【一〇五】この三十二の約半數は晉譯と合せず。一―六、八、九、十、十五、十七、十八、二十六、二十九―三十二は兩者相合す。

【一〇六】帝釋（須彌山の頂上、忉利天の主）の天に生れんとするなり。

【一〇七】大梵天（色界初禪天の主にして娑婆世界を領す）の世界に生れんことをねがふなり。

【一〇八】梵の Upādhyāya（親教師と譯す）の訛音なりと云はる。

【一〇九】布施・愛語・利行・同事の四を以て衆生を攝招し、度脫せしむるをいふ。

【一一〇】我と法とを三種に分けるもの、(一)有爲聚（因緣の離合によりて生滅するもの）、(二)無爲聚（不生不滅のもの）、(三)非二聚（前の二に配當し得ざる）もの。

爾の時寶女、佛に白して言はく『世尊、何の故に大乘と名くる』と。佛言はく『其の乘廣大なるが故に大乘と名く、諸の衆生に於て罣礙する無きが故に[一〇三]大乘と名け、是れ一切智・善根の根本なるが故に大乘と名け、煩惱の諸結黑闇有ること無きが故に大乘と名け、所有光明處として遍からざる無きが故に大乘と名け、其の邊に周遍して眼目有るが故に、故に大乘と名け、本性常に淨にして、初より沾汙無きが故に大乘と名け、諸煩惱の一切習氣を斷ずるが故に大乘と名く。禁戒を護持するが故に清淨と名け、定を修集するが故に名けて安住と爲し、智慧を修するが故に名けて無漏と爲し、解脱を修するが故に無繫縛と名け、一切法の、等しくして無二なるを示すが故に解脱智と名け、十力を攝するが故に無能動と名け、四無畏を具するが故に無怖懼と名け、十八不共法を攝取するが故に名けて無礙と爲し、大慈を修集するが故に平等と名け、一切の諸魔衆を破壞するが故に名けて最勝と爲し、煩惱魔を摧くが故に寂靜と名け、陰魔を壞するが故に不可數と名け、死魔を破するが故に名けて常住と爲し、檀那波羅蜜を具足するが故に名けて富足と爲し、尸羅波羅蜜を具足するが故に名けて無熱と爲し、羼提波羅蜜を具足するが故に名けて無怨と爲し、精進波羅蜜を具足するが故に名けて無動と爲し、禪那波羅蜜を具足するが故に無漏無轉と名け、般若波羅蜜を具足するが故に勝一切世間出世間と名け、方便波羅蜜を具足するが故に名けて攝取と爲し、一切の諸乘は諸有を斷ずるが故に無有と名け、八道に因つて得る有るが故に名けて安と爲し、定慧の翼を具して往く所礙無く、諸根を調するが故に大神通と名く。正勤を修するが故に、能く一切の諸佛世界を見、念處を修するが故に、惡法を遠離して善法に親近し、七覺分を修して一切諸煩惱の結を遠離し、無爲無漏無勝無上なり。[一〇四]無能見頂は能く知る者無く、遮障有ること無し、聽聞有ること無く、入出の處無し。大衆の大堂には一味不作なり、數量を作さずして平等無二なり。大名稱を得ては十方無礙、一切人天の恭敬する所たり。無量無邊の功德を成就し、永く一切の慳・悋・破戒・害心・懈怠・亂心・無

【一〇三】以下、本經に大乘と名くるをば、晉譯は一々別名を以て呼ぶ、(例へば離垢乘、普照乘、等善住乘、清淨乘などの如し)、以下亦同じ。

【一〇四】無見頂相なり。

悉く示現す、諸の衆生を教化せんと欲するが爲なり、卽ち是れ菩薩の不退印なり。惠施の心は虛空の如く、無量劫中に盡すべからず、無量の諸功德を成就する、卽ち是れ菩薩の不退印なり。淨戒を修集するを佛戒と爲す、佛戒を獲得すれば虛空の如し、是の如き無上戒を成就するは、卽ち是れ菩薩の不退印なり。一切衆生の所有戒、及び【一〇〇】學戒無學戒など、是の如き無量の戒有りと雖も、不退に及ばざること十六の一なり。若し最上の無生忍を得ば、成就無量にして邊有ること無し、若し是の如き無生忍を得ば、過去佛の所得の如し。衆生の爲の故に善く莊嚴し、無量世の中に休息せず、常に勤めて精進の行を修集する、卽ち是れ菩薩の不退印なり。常に樂んで諸禪定を修集し、亦衆生の爲に法を宣說し、復諸威儀を示現すと雖も、而も其の內心は定を離れず。無上の正知見を具足し、一切煩惱の習を遠離す、若し不退の心を成就する有らば、則ち能く佛の境界に近づく。三種の神通を具足し、及び如來の善方便を具す、若し不退の心を成就する有らば、是の人正覺の印を得んと欲す。一切の衆生は、是の人の心行及び境界を知る能はざるも、諸の衆生の爲に無量に行ず、卽ち是れ菩薩の不退印なり。其れ實に未だ無上道を得ざるも、而も能く如來身の生・及び成道・轉法輪を示現し、衆に處して大涅槃を示現す。未だ菩薩の不退印を捨てざるに、亦能く如來の印を獲得す、猶ほ虛空の邊有ること無きが如く、所得の佛印も亦是の如くならん』と。

是の偈を說ける時、三千大千の佛世界、六種に震動し、五千の菩薩不退の印を得たり。

爾の時世尊、寶女を讃じて言はく、『善い哉、善い哉、快く菩薩の不退轉の印を說きたり』と。

【一〇一】爾の時、【一〇二】須菩提、佛に白して言はく『世尊、寶女は定んで不退轉印を得たり、是の故に能く是の如き宣說をなす』と。佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、汝の所說の如し。寶女は久しく已に不退印を得、忍辱成就して已に大乘甚深の邊底を盡したり』と。

【一〇〇】學無學の持する戒。眞理を探究して妄惑を斷ずる位を學といひ、之を斷じ盡して學すべき無き位を無學とす。大小乘によりて其の次位を異にす。

【一〇一】晉譯、大乘品第十二。

【一〇二】梵に(Subhūti)、佛十大弟子の一、善吉と譯す。解空第一と稱せらる。

の不退印と名く。貪欲・瞋恚・愚癡等の一切衆生の諸煩惱は、顚倒の因緣より生ずと知る、是を菩薩の不退印と名く。生死の法及び涅槃、無上の正道及び菩提をば、是の法無差別なりと觀察する、是を菩薩の不退印と名く。五陰は菩提の如し、菩提の性の如く[九六]入・界も然るを知り、是の諸法二有ること無しと觀ずる、是を菩薩の不退印と名く。[九七]地水火風及び造色は、之を觀ずるに猶ほ虛空等の如し、是の如くして卽ち眞實の印を得ること、亦十方諸佛の印の如し。眼界等の如く菩提も然り、是の二平等にして差別無し、自ら能く受持して他の爲に說く、是を菩薩の不退印と名く。諸の衆生所有の心は、能く一切心の因緣と爲り、是の如き因緣の障礙無きを知る、是を菩薩の不退印と名く。能く遍く諸衆生所有の諸根の上中下を觀察し、能く生死を觀じて[九八]彼岸を盡す、是を菩薩の不退印と名く。所有字・義・句は無盡なり、無量劫に於て演說すると能く、破壞し障礙を作す無き、是を菩薩の不退印と名く。虛空の邊際は尙ほ盡すべく、世間の猛風は繫縛すべし、菩薩所有の不退心は、一切世間も轉ずる能はじ。無量の陀羅尼を成就し、諸法の中に於て念を失はず、次第に諸法の義を演說し、佛口より出づるが如くにして異有ること無し。十方世界の佛世尊は、衆生を度せんが爲に說くこと無量なるを、悉く能く受持して深義を解す、是を菩薩の不退印と名く。無量劫中に聞く所の法を、猶ほ現に聞くが如くに演說す、無量世に陀羅尼を學び、是の如き無盡の印を獲得す。是の如き持及び無上の眞智慧を成就具足す、若し菩薩の不退印を得れば、則ち能く是の如き法を宣說す。若し一切諸法の空なるを觀じ、亦親近せず遠離せず、若し不退心を成就する有らば、當に知るべし、是の人空印有りと。一切諸法虛空の印とは、其の性本來生滅無きなり、若し能く是の法界を了知せば、是を菩薩の不退印と名く。諸法は皆因緣に從つて有り、衆緣を離れて法界無し、若し能く是の如くなるを了知せば、當に知るべし、是れ不退の印有るを。所有威儀・諸の色聲は、能く一念に[九九]於て

【九〇】晉譯に云ふ、願說二菩薩所行之法一、と。
【九一】晉譯に思惟經典と。
【九二】以下、六根無くんば、その對境と、之が認識と無きをいふ。初節、晉譯にいふ、其行法者、謂無レ有レ眼、亦無二眼行一、無二色想行一。
【九三】晉譯に無二　細滑行一、不レ想二細滑一と。以下說相やゝ異る。
【九四】晉譯、不退轉品第十一。
【九五】梵に(Pāpīyān)、魔王名。常に惡意を懷き、惡法を成就し、僧を擾し、人の慧命を斷つと云はる。
【九六】十二入なり。六根六境の十二處をいふ。界とは之に六識を加へたる十八界なり。
【九七】この四大に依つてあらゆる物質は成立すと。
【九八】凡夫が煩惱の繫縛せられて生死海に漂ふを此岸といひ、覺者の能くこの生死海を超えて涅槃の岸に達するを到彼岸といふ。
【九九】於、大正本に空に作る。縮刷は於となす。今後者に依る。

識無く見無く聞無く知無く識無く、身業口業意業有ること無く、法に非ず非法に非ず、一に非ず二に非ず、去・來・現在に非ず、垢に非ず淨に非ず聚に非ず散に非ず、我・衆生・壽命・士夫に非ず、常に非ず斷に非ず、我に非ず我所に非ず、始に非ず終に非ざる、是を法行と名け、是を我法と名け、是を住處と名け、是を法性と名け、是を法處と名け、是を空處非處と名け、畢竟處と名く。不動不住にして相貌有ること無く、無出無滅にして所修の行無く、無取無捨無受無施なり、若し能く是の如き等の法を知見する、是を眞知と名け、是を實知と名け、是を法知と名く。而も涅槃に於て動轉する所無き、是を菩薩眞實の法行とは名く』と。是の法を說きたまへる時、八千の菩提忍辱を成就したり。

九四 爾の時寶女、復種種の珍寶雜物を以て、佛を供養して是の言を作す『世尊、若し菩薩有りて是の法行を行ずれば、即ち是れ一切の佛行を修行し　即ち授記を得、菩提樹に坐し、阿耨多羅三藐三菩提を成就せん』

爾の時舍利弗、寶女に語つて言はく『汝菩薩の不退印を知るや』。爾の時寶女、即ち偈を說いて言はく、

『諸の衆生界及び法界を、若し能く平等に無異なりと觀じ、一一の數を分別することを生ぜざる、是を菩薩の不退印と名く。過去未來及び現在の、十方世界の諸世尊は、皆悉く平等に法界を觀ず、是を菩薩の不退印と名く。有爲界は皆無常、有漏無漏も亦是の如しと觀じ、一切の法は本性淨なるを知る、是を菩薩の不退印と名く。生死を觀ずるに量有ること無く、其の數を稱計して知るべからず、若し能く一念に通達して知る、是を菩薩の不退印と名く。一切世間と諸法界及び出世の諸聖法とを、若し平等にして悉く眞實なりと知る、是を菩薩の不退印と名く。若し能く諸の佛界、及び諸の魔 九五 波旬界を了知し、是の二は無差別なりと通達する、是を菩薩

【八一】 皮膚細膩にして滑澤、塵水を受けず。梵に(Sūkṣma-cchavi)。

【八二】 身に光明を放つて四面を照らす。晋に身形紫磨金色と。梵に(Suvarṇavarṇa)。

【八三】 梵に(Ekaikaromapradakṣiṇāvarta)。

【八四】 晋譯に如來之毛上向右旋と。梵に(Ūrdvaṃ garoma)。

【八五】 晋譯に如來頭髮紺青相と。

【八六】 晋譯に如來之身平正方圓無有阿曲。梵に(Nyagrodha parimaṇḍala)。尼拘陀また尼拘類といふ、無節と譯す。

【八七】 三十二相(また大人相、大丈夫相)は經論に依りて一定せず、本經の如きも三十四相を擧げたり。その中、第十五相、第三十四の相の如きは、三十二相を說く他の經典中に多く見ざる所たり。飜譯名義集は第十四と第十五、並に第二十七と第二十八を合して各一とし、漢譯經典には第十七——第二十の數へ方區々たり。大體よりすれば、本經の所說は涅槃經二十九、優婆夷淨行經下のそれに近きが如し。

【八八】 晋譯によれば以下は諸天の詞なり。即ち天於虛空、百千之衆、而雨二天華一……擧レ聲歎曰、其有二衆人一とあり。

【八九】 晋譯、法行品第十。

[八九]寶女復言はく『世尊、佛は不可思議なり、法・僧も亦爾り、不可思議なり。是の經を聞信するも亦不可思議なり。若し信ずる者有らば、是の人定んで阿耨多羅三藐三菩提を得るや。世尊、[九〇]云何がして菩薩法行を修行するや』。

『寶女、菩薩摩訶薩は親舊を捨せず、恩を知り恩を報じ一切を憐愍す。歸依する者有らば終に棄捨せず、至心に菩提の道を念じ、忍辱を修して施し難きを能く施し、衆生を攝取して慈心もて戒を護り、[九一]善義を思惟し正法を護持し、法を樂み法を念じ法を持し、靜を樂んで獨空閑に處し、心に悔退無く、善く衆生の身口意を淨むるを護り、四無量の爲に大莊嚴を發し、常に衆生を菩提道に勸む。凡そ講論する所、先づ大乘を讃じ、先に人を許して後悔心を生ぜず、其の行を淸淨にして少欲を知足し、不慳不妬にして聖種を斷ぜず、心に諍訟無く因果を了知し、信・聞・戒・施・慚・愧・智慧あり、善友に親近し師長の敎に隨ひ、心に憍慢無く、長老・有德を恭敬禮拜し、貪・恚・癡・我及び我所を離れ、常に佛・法・僧・施・戒・天を念じ、供養を得るの時其の心高まらず、常に勤めて六波羅蜜・空・無相・願の諸方便を修行し、我の常・衆生の壽命・士夫の相を見ず、四念處乃至を八正道分を修する、是を菩薩法行を修行すと名くるなり。

『又法行とは[九二]眼無くんば色無く色想の行無く耳無くんば聲無く聲想の行無く、鼻無くんば香無く香想の行無く、舌無くんば味無く味想の行無く、身無くんば觸無く[九三]觸想の行無く、意無くんば法無く法想の行無きなり。また「法行とは」非色の行・非色・非非色の行なり、非色の苦行・非色非非色の苦行なり、非色の我行・非色非非色の我行なり、非色の空行・非色非非色の空行なり、非色の無相行、非色の無願行、非色の無行行、非色の性行、非色の實行、非色の寂行、非色の生行、非色の出行、非色の因緣行、非色の聚行なり、是を法行と名く。受・想・行識も亦復是の如し。

『寶女、若し是の如き陰入界の行無きを、是れ法行と名く。去無く來無く住處有ること無く、心意

【六九】兩頰の肉隆起して圓滿師子王の如し。梵に(Simhahanu)、晋譯に如來師子步と。

【七〇】常人に三十六齒あり、佛に四十齒ありと。梵に(Catvārimśaddanta)。

【七一】晋譯に如來齒牙無有間疎と。梵に(Aviraladanta)。

【七二】梵に(Samadanta)。

【七三】梵に(Suśukladanta)、晋譯に同樣の理由を擧げて、淸白美好髮眉大人相といへり。

【七四】舌廣く長くして面を覆ひ髮際に至る、梵に(Prabhūtatanujiva)。

【七五】常に味中の上味を得て身中千支の節脈は能く之を引く。梵に(Rasarasāgratā)、晋譯に如來疊々大人相と。

【七六】音聲和雅にして遠近聞かざるなし、梵に(Brahmasvara)、晋譯に梵聲哀鸞之音とす。

【七七】晋譯に如來瞳子紺青色と。梵に(Abhinīlanetra)。

【七八】また牛王眼睫相ともいふ、眼睫は牛王の如く紺青齊整にして、雜亂せず、梵に(Gopakṣmā)。

【七九】眉間に白毫あり、淸淨柔軟にして光明を放つ、梵に(Ūrṇākeśa)。

【八〇】頂上に肉の隆起あり、人天菩薩も見る能はず。梵に(Uṣṇīṣaśiraskatā)。

得、諍訟を和合せしめたるが故に[七一]齒密相を得、珍寶の施の故に[七二]齒齊相を得、身口意の淨きが故に[七三]二牙白相を得、口の四過を護れるが故に[七四]廣長舌相を得、無量の功德を成就せるが故に[七五]味得中上味相を得、衆生の中に於て常に柔軟語せるが故に[七六]梵音相を得、慈心を修集せるが故に[七七]紺色目相を得、至心に無上菩提を求めたるが故に[七八]牛王睫相を得、他人の所有功德を讃歎せるが故に[七九]白毫相を得、父母師長和上を恭敬せるが故に[八〇]肉髻相を得、樂んで深法を說けるが故に[八一]身柔軟相を得、敷具を施せるが故に[八二]金光相を得、世間の事を棄說するを遠離せるが故に[八三]一一孔一毛生相を得、樂んで善友師長の教勅を受けたるが故に[八四]身毛上靡相を得、惡事を以て衆生に加へざりしが故に[八五]髮色金精相を得、常に衆生に勸めて三昧を修せしめたるが故に[八六]身圓滿如尼拘陀相を得、生生の處に佛像を作せるが故に、那羅延力相を得たるなり。寶女、菩薩摩訶薩は是の如き無量の功德を成就して是の如き[八七]三十二相を獲得するなり。』

寶女復言はく『世尊、菩薩摩訶薩は不可思議なり、快い哉如來、善く佛の法を說きたまへることや』『爾の時世尊、寶女を讚して言はく『善哉善哉、汝の所說の如し、一切衆生是の義を聞かば、即ち無量の功德を具足するを得、聞き已つて信ぜば、亦無量の功德を成就するを得ん』と。是の法を說きたまへる時、十方無量無邊の世界六種に震動し、無量の衆生菩提心を發し、五千の菩薩無生忍を得たり。虛空の諸天は種種の花を雨らし、衆の伎樂を鼓して以て佛を供養すらく[八八]『若し衆生有りて已に無量無邊の佛所に於て衆の德本を植えんに、乃ち是の如來十力・四無所畏・不共の法・三十二相を聞くを得、是の人聞き已つて能く深信を生じ、信じ已つて能く大衆の中に於て師子吼を作し、是の如きの法を說かん。何を以ての故に、下劣の人能く是の如き正法を聞くを得じ。たとひ聞くを得るも未だ必ず信を得じ。上人——戒を持し智慧具足せる——乃ち能く聞くことを得、聞き已つて敬信し、信じ已つて久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』と。

して畫に似たり。梵に(Jāla-randdhahastapāda)。

【五九】梵に(Mṛdutaruṇaha-stapādatala)。

【六〇】晉譯に七合充滿とす。七處とは兩手兩足、兩肩と項となり。この七圓滿端正なるをいふ。梵に(Saptotsada)。

【六一】晉譯に如來之膝平正無ㇾ節、腨腸如ㇾ鹿。腨は股肉なり。梵に(Aiṇeyajaṅgha)。

【六二】晉譯に其陰馬藏。陰相藏して顯れざること馬陰の如し。梵に(Kośagatavastiguhya)。

【六三】晉譯に頰車充滿猶如師子。身體の威儀嚴肅なること師子王の如し。梵に(Siṃhapūrvārdhakāya)。

【六四】晉譯に、常於胸前自然卍字と。缺骨とは胸骨なるべし、乳房の上の骨を缺盆といふが故に。梵に(Citāntarāṃsa)。

【六五】晉譯に如來肢體、具足成就。

【六六】晉譯に如來手臂長出ㇾ於膝。俯せず仰がず平立する時は手膝を過ぐ。梵に Sthitānavanatapralambabāhuta)。

【六七】晉譯に如來身淨、而無ㇾ瑕疵。

【六八】晉譯に如來腦戶充滿弘備大人相者、乃往古世其有病者、若干種藥瞻視療故。

と名く、何を以ての故に一一の節中に[五〇]那羅延力有るが故に。說事の虛ならざるを不共の法と名く、何を以ての故に、諸根を知るが故に。一切の師と爲るを不共の法と名く、何を以ての故に、一切に通達せるが故に。壽命の無盡なるを不共の法と名く、何を以ての故に、法身を得たるが故に。親近する者有らば大利益を得るを不共の法と名く、何を以ての故に、一切の諸善法を成就せるが故に。所得の智慧、能く濁す者無きを不共の法と名く、何を以ての故に、三世を知るの智性清淨なるが故に。身より衆を出だす者[五一]五逆罪を得るを不共の法と名く、何を以ての故に、一切の諸善根を成就せるが故に。煩惱の[五二]習盡くるを不共の法と名く、何を以ての故に、一切煩惱の因を了知せるが故に。一切の法を知るを不共の法と名く、何を以ての故に、一切法を覺せるが故に。寶女、是を如來の不共の法と名くるなり』。

[五三]爾の時寶女、復佛に白して言はく『世尊、如來所得の三十二相は、是れ何の業因の成就する所なるや』。佛寶女に告げたまはく『如來は無量の功德を成就す、是の故に三十二の相を成ずるを得たり。我れ今是の無量事中に於て、當に略して之を說くべし。如來は至心に淨戒を獲持して、[五四]足下平相を得、種種惠施の業を修行したるが故に[五五]千輻輪相を得、一切の諸衆生を欺かざりしが故に[五六]足跟傭相を得、正法を護れるが故に[五七]指纖長相を得、他の衆を壞せざりしが故に[五八]網縵相を得、妙服を奉施したるが故に[五九]手足軟相を得、淨飲食の施の故に[六〇]七處滿相を得、喜んで佛の法を聞けるが故に[六一]鹿王腨相を得、他の過を覆藏せるが故に[六二]陰藏相を得、善法を修したるが故に[六三]上身如師子相を得、常に善法を以て衆生を化せるが故に[六四]缺骨平滿相を得、怖畏を救護せるが故に[六五]臂肘傭相を得、他の事業を見ては樂んで佐助せるが故に[六六]手摩膝相を得、常に十善を修せるが故に[六七]清淨身相を得、常に病に藥を施したるが故に、所食の物、喉に至つて悉く現ずるの[六八]相を得、常に莊嚴を發し善法を修したるが故に[六九]師子頰相を得、諸の衆生に於て其の心平等なるが故に、[七〇]四十齒相を

【五〇】梵に(Nārāyaṇa)、堅固力士と譯す。天の力士にして、その力量は大象の七十倍なりと稱せらる。
【五一】また五無間業ともいふ。父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、僧の和合を破し、佛身より血を出す(小乘)の五、或は(一)塔を壞ち經藏を燒き三寶の財物を盜むと、(二)三乘の法を謗りて聖敎に非ずと云ふと、(三)一切の出家人を罵り驅使すると、(四)父母を殺し、佛身より血を出し、和合僧を破し、阿羅漢を殺すと、(五)因果を否定して常に十不善業をなす(大乘)の五なり。
【五二】習氣なり。熏習せられたる氣分をいふ。
【五三】晉譯、寶女所問經卷第四、三十二相品第九。
【五四】晉譯に足安平立とす。立つ時あしうら遍く地に接す。梵に(Supratiṣṭhitapāda)。
【五五】晉譯に如來手足而有ニ法輪一とす。梵に(Cakrāṅkitahastapādatala)。佛の手掌足下に輻輪の文(あや)あるをいふ。
【五六】跟はかがとなり。かがとの圓滿具足するをいふ梵に(Āyatapādapārṣṇi)。
【五七】梵に(Dīrghāṅguli)、指のながく圓きをいふ。
【五八】手足の指間に縵網交合

如し。[四五]寶女、是を十八不共の法と名く。

[四六]「如來復不共の法有り、謂はく[四七]無見頂、何を以ての故に、無邊の身の故に。[四八]能く勝る者無きを不共の法と名く、何を以ての故に、一切事を具せるが故に。見る者惱を除くを不共の法と名く、何を以ての故に、身は藥樹の如くなるが故に。衆のうちにあつて怯無きを不共の法と名く、何を以ての故に、一切淸淨なるが故に。衆のうちに處つて怯無きを不共の法と名く、何を以ての故に、四無畏の故に。衆生の心を知るを不共の法と名く、何を以ての故に、意に隨つて說法するが故に。徒衆の寂靜なるを不共の法と名く、何を以ての故に、師の敎に隨ふが故に。出言の淸淨なるを不共の法と名く、何を以ての故に、無義語を說かざるが故に。凡そ宣說する所、聞く者歡喜するを不共の法と名く、何を以ての故に、怨親の想を離るるが故に。[四九]說法の聲、衆を齊しくして聞くを不共の法と名く、何を以ての故に、餘は利益する無きが故に。各各佛を見るに正しく已が前に在り、瞻對するの時、目未だ曾て眴かざるを不共の法と名く、何を以ての故に、身不可思議の故に。佛の所說を聞くに、要ず善芽を生ずるを不共の法と名く、何を以ての故に、無量の諸功德を成就せるが故に。見る者厭く無きを不共の法と名く、何を以ての故に、一切法を覺するが故に。身を擧げて𢌞顧すること、象王の視るが如くなるを不共の法と名く、何を以ての故に、威儀淸淨なるが故に。大師子吼するを不共の法と名く、何を以ての故に、大力を具足するが故に。威儀純善なるを不共の法と名く、何を以ての故に、所有身業は智に隨つて行ずるが故に。口業の純善なるを不共の法と名く、何を以ての故に、所有口業は智に隨つて行ずるが故に。一切の眼目を不共の法と名く、何を以ての故に、所有意業は智に隨つて行ずるが故に。衆生の樂聞するを不共の法と名く、何を以ての故に。語微妙なるが故に。上供養を受くるを不共の法と名く、何を以ての故に、無上の福田なるが故に。無盡の功德を不共の法と名く、何を以ての故に、果報を求めざるが故に。能く壞する者無きを不共の法

【四五】第十八、智慧知現在世無礙無障（Pratyutpanne 'dhvany asaṅgam apratihatam jñānadarśanam pravartati）。

【四六】晋譯には、此十八品、便得ニ一切不共諸佛之法一、何謂ニ不共諸佛之法一といひて以下の諸法を擧ぐ。

【四七】如來の頂相を能く見得る者無きをいふ。

【四八】如來の一切諸形に超殊したまへるといふ。

【四九】晋譯に如來音聲普聞ニ衆會一不ニ溢在レ外一。

有ること無く、若し佛事の不可思議なるを聞くも驚怖を生ぜず。未來世界の衆生悉く當に調伏すべきを信じ、如來の十方世界に遊びて往返無礙なるを信じ、能く一切衆生の語言を解し、其の種種に隨つて說法を爲さん。一切三世の智慧無礙にして、未來の一切法界・一切諸乘を了知し、諸衆生の業果神通を知り、他心智を知り、是の如き等に於て心信じて疑無く、亦衆生を化して己が信に同ぜしむ。是の因緣を以て、菩提を得るの時、名けて如來と爲す。未來世を知りて智慧無礙なり。悲定を修するに因つて師子吼總持方便を得、是の持力を以て、能く未來の諸佛世尊の壽命・種姓を知り、亦未來の菩薩聲聞辟支佛等、一切衆生の業果神通を知り、亦未來の所有諸劫の、佛出づる有る者・佛出づる無き者、及び其の名字の淨と不淨、若しは廣・若しは狹・若しは麁・若しは細・若しは微塵等・若しは倒・若しは順を知り、是の如き等に於て悉く了知を得ること、掌中の菴摩羅果を觀るが如くならん。[四四]

(18)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、現在世の諸佛の智慧を信じ、善く身口意の業に疑網有ること無く、若し佛事の不可思議を聞くも驚かず怖れず、現在の佛世界の衆生悉く調伏を得るを信じ、如來身の十方界に遊び往返無礙なるを信じ、能く一切衆生の言語を解し、其の種種に隨つて說法を爲し、一切三世の智慧無礙にして、現在の一切法界一切諸乘を了知し、諸衆生の業果神通を知り、他心智を知り、是の如き等に於て心信じて疑はず、亦衆生を化して己が信に同ぜしむ。是の因緣を以て、菩提を得るの時、名けて如來と爲し、現在世を知りて智慧無礙なり。淨定を修せるに因つて金剛總持方便を獲得し、是の持力を以て、能く現在の諸佛世尊の壽命・種姓を知り、亦現在の菩薩聲聞辟支佛等、一切衆生の業果神通を知り、亦現在の所有諸劫の、佛の出づる有る者・佛出づる無き者、及び其の名字と淨・不淨と、若しは廣・若しは狹・若しは麁・若しは細・若しは微塵等・若しは倒・若しは順を知り、是の如き等に於て悉く能く了知すること、掌中の菴摩羅果を觀るが

【四四】第十七、智慧見未來世無礙無障（Anāgate 'dhvany asaṅgam apratihataṃ jñānadarśanaṃ pravartate）。

(15)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、一切の意業は智慧に隨つて行じ、衆生を欺かず、妬せず、害せず、邪見を作さずして正見を修し、大慈悲を起して諸の衆生に於て其の心平等なり、終に菩提の心を忘失せず、智慧を具足して憍慢を捐除す。是の因緣を以て、菩提を得るの時、名けて如來と爲し、一切の意業は智慧に隨つて行じ、無垢の總持方便を獲得し、是の持力を以て、一心の中に住して能く一切衆生の諸心を知り、衆生の心悉く皆平等にして幻化の相の如くなるも、本性清淨なるを觀じ、諸の衆生の身業平等にして皆水月の如くなるを觀じ、諸の衆生悉く己身に在り、己身亦衆生の身中に在ること、猶ほ影現の如しと見、能く衆生をして悉く佛身と作らしめ、亦己身をして衆生身と作らしめ、一切の能く動轉する者有ること無し。[四一]

(16)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、過去世の諸佛の智慧を信じ、善く身口意の業に疑網有ること無し。若し佛事の不可思議を聞くも、驚かず怖れず。過去佛世界の衆生已に調伏を得たるを信じ、如來身の十方界に遊び往返無礙なるを信じ、能く一切衆生の言語を解し、其の種種に隨つて說法を爲す。一切三世の智慧無礙にして、過去の一切法界・一切諸乘を了知し、諸衆生の業果・神通を知り、他心智を知る。是の如き等に於て心信じて疑無く、亦衆生を化して己が信に同ぜしむ。是の因緣を以て、菩提を得るの時、名けて如來と爲し、過去世を知りて智慧無礙なり。往[四二]勇健三昧を修習せるに因つて健行總持方便を獲得し、是の持力を以て、能く過去諸佛世尊の壽命種姓を知り、亦過去の菩薩聲聞辟支佛等、一切衆生の業果、神通を知り、亦過去の所有諸劫の、佛出づる有る者・佛出づる無き者、及び其の名と淨・不淨と、若しは廣・若しは狹・若しは麁・若しは細・若し微塵等・若しは倒・若しは順なるを知り、是の如き等に於て悉く了知するを得ること、掌中の菴摩羅果を觀るが如くなり。[四三]

(17)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、未來世の諸佛の智慧を信じ、善く身口意の業に疑網

【四一】 第十五、一切意業隨智慧行(Sarvamanaskarma j-j.)。

【四二】 晋譯に「善修ニ於勇猛三昧之定一、分ニ別曉ニ了威曜總持一」とす。

【四三】 第十六、智慧知過去世、無礙無障(Atite 'dhvany asaṅgam apratihatam jñānadarśanam pravartate)。

ず、一切法は緣より生じ緣に從つて滅するを知り、一切法は我・衆生・壽命・士夫無きを知り、彼此及び中間を見ず。何を以ての故に、若し彼此無くんば云何ぞ中有らん。是の故に菩薩、是の如く說法す。是の因緣を以て、菩提を得るの時、解脫智を成じて無增無減なり。亦無邊の總持方便を得、持を得るを以ての故に、法界に依つて虛空界を觀じ、是處非處を說き、漏盡力・四無所畏・大慈大悲に至り、甚深祕密の藏を宣說し、兼ねて是の法を以て衆生を化す。是を二乘と之を共にせずと名く。身口意の業※は神通を具足す。[三七]

(13)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、一切の身業は智慧に隨つて行じ、衆生を欺いて妨礙を作さず、不貪不慳にして害心有ること無く、梵行清淨にして精進を勤修し、助道の法を集めて身命を惜まず、諸の衆生の爲に大慈悲を起す。是の因緣を以て、菩提を得るの時、名けて如來と爲す。一切の身業は智慧に隨つて行じ、一切光總持方便を得、是の持力を以て、能く種種方便の身を作す、所謂天身・龍身・阿修羅身・迦樓羅身・乾闥婆身・緊那羅身・摩睺羅伽身・梵身・釋身・四天王身・剎[三八]利身・婆羅門身・毘舍身・首陀身・比丘比丘尼・優婆塞・優婆夷身なり。是の如き種種の身を示現し已り、諸大衆の爲に意に隨つて說法す。說法既に竟れば卽ち滅して現ぜず、一切の衆をして所在を知らしめず。或は身滅し已つて故に說法す。一切衆生の六情瞻對して厭足無く、若し見ざる時は心常に緣念す。[三九]

(14)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、一切の口業は智慧に隨つて行じ、衆生を欺いて妄語・兩舌・惡口・無義語をなさず、常安隱語・法語・毘尼語・不熱語・佛語・義語・喜聞語・樂見語をなす。是の因緣を以て菩提を得るの時、名けて如來と爲す。一切の口業は智慧に隨つて行じ、三※分の總持方便を獲得す、是の持力を以て、善く一切衆生の語言を解し、諸衆生所有の業を說く。佛所出の言は是れ眞實語・十二因緣語・隨解脫語・不貪語・寂靜語・因緣語なり。[四〇]

※業、麗本は等に作る、今三本に從ふ。

【三七】第十二、解脫知見無減、(飜譯名義大集にこの梵語を缺く)。

【三八】剎利(Kṣatriya)は士族、婆羅門(Brāhmaṇa)は僧族、毘舍(Vaiśya)は農工商族、首陀(Śūdra)は奴隸族。卽ち四姓と稱せられ、印度の四ヶ階級なり。

【三九】第十三、一切身業隨智慧行(Sarvakāyakarma jñānapūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti)。

※晋譯に得二達三品一、曉二了總持一とあり。三品、三分とは、慧・智・德なり。

【四〇】第十四、一切口業、隨智慧行(Sarvavākkarma j-j.)。

屬の智を知り、無貪心を知り、無瞋心を知り、無癡心を知り、無愛心を知り、無垢心を知り、無諍心を知り、〔三四〕無食心を知り、〔三五〕無貪心を知り、無上心を知り、無礙心を知り、無記心を知り、善心を知り、不善心を知り、惡心を知り、淨心を知り、不淨心・大心・小心、狹心と廣心、遍知心と不遍知心、貪心と捨心、持戒心と破戒心、忍心と不忍心、懈怠心と精進心、定心と亂心、癡心と慧心、凡心と聖心、〔三六〕正定聚心と邪定聚心と不定聚心、聲聞心と緣覺心と菩薩心、苦諦心と集諦心と滅諦心と道諦心を知る。是の如きを知ると雖も而も證を取らず、衆生を調せんが爲に常に正法を說く――謂はく四眞諦と・十二因緣もて斷見及び我見を遠離し、因緣の果は緣より生じて我・衆生・命等に因るに非ざるを說き、*無明の因は行を緣じ、行の因は識を緣じ、識の因は名色を緣じ、名色の因は六處を緣じ、六處の因は觸を緣じ、觸の因は受を緣じ、受の因は取を緣じ、取の因は愛を緣じ、愛の因は有を緣じ、有の因は生を緣じ、生の因は老死憂悲苦聚を緣ず。無明滅するが故に行滅し、行滅するが故に識滅し、識滅するが故に名色滅し、名色滅するが故に六處滅し、六處滅するが故に觸滅し、觸滅するが故に受滅し、受滅するが故に取滅し、取滅するが故に愛滅し、愛滅するが故に有滅し、有滅するが故に生老死憂悲苦惱滅して大苦聚滅す。是の觀を作し已つて復是の念を作す。是の如き等の法は實に我の作・衆生・壽命・士夫等の作に非ず、常に非ず斷に非ず、若しくは衆生士夫等の作に非ずと。是を名けて空と爲す。如し其れ空ならば即ち是れ我・衆生・壽命・士夫無く、常無く斷無し、若し常・斷無くんば無生無滅なり、生滅無ならば三世に攝せず、三世不攝なるを即ち名けて無と爲す。如し其れ無ならば算數すべからず、算數無きが故に即ち第一義なり、第一義は即ち是れ如來語なり、如來語は即ち鬪諍無し、鬪諍無きをば沙門法と名く、沙門法は即ち是れ虛空なり。若し能く是の如き等の法を了知するを眞實知と名く。若し觀じて諸の惡因緣を思惟せば、則ち無明を生じて大苦聚に至り、惡思惟滅すれば則ち無明滅し乃至大苦聚も滅す。是の觀を作し已り、常見に著せず斷見に著せ

〔三四〕晉譯に離二冀養一心とあるもの之に當るべし。

〔三五〕晉譯に離二貪他一心とあり。

〔三六〕晉譯に趣二邪見一心、趣二正見一心とあるもの之に當るが如し。

※この十二支の中、六入以下を、晉譯には、習更、痛痒、恩愛、所受、所有とす。

すと雖も、如かず一たび菩提の事を聞きて心に歡喜を生じ、正法の所に於て樂聞樂說し、常に諸佛諸天の爲に念ぜられんには。念力を以ての故に世間の所有經典書論に悉く能く通達す。是の因緣を以て、菩提を得るの時、佛の智慧を成じて增なく減無し、是の如き等の智を名けて無礙と爲す――衆生心の善不善無記・有漏無漏・世間出世間・垢法淨法・生死涅槃・一切の法門・一切菩提の事・一切の菩提道・一切世界・一切劫の一切微塵の去來現在を知り、是の如き等の事に於て通達無礙にして說時無盡なり。是の因緣を以て、如來能く一法の中に於て無量の法を說く。[三一]

(11)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行するの時、在家して五欲を求受するを樂まず、空閑に處して出家法を修するを樂み、深義及び三脫門を修するを樂む。是の修力を以て無礙の法門・無罣礙の智を得、魔の境界を過ぎて莊嚴具足し、煩惱及び諸惡見を遠離し、甚深の義を說いて衆の疑心を破し、一切の諸惡覺觀を除去し、欲界と色・無色界とを破し、貪の衆生の爲には正法を演說して貪心を離れしめ、瞋を喜ぶ者の爲には慈心を演說して瞋恚を離しめ、愚癡の者の爲には十二因緣を說きて無明を離れしめ、慳貪の者の爲には檀波羅蜜を說き、破戒の者の爲には尸波羅蜜を說き、瞋恚の者の爲には羼提波羅蜜を說き、懈怠の者の爲には毘梨耶波羅蜜を說き、亂心の者の爲には禪波羅蜜を說き、無智の者の爲には般若波羅蜜を說き、凡夫人の爲には四眞諦を說き、顚倒の者の爲には無常・無淨・無樂・無我を說き、結縛の者の爲には三十七助菩提法を說く。菩薩は是の如き等の法を具足す、是の因緣を以て、菩提を得るの時、解脫を成就して增無く減無し。是の如き解脫は能く動かす者無く、畢竟清淨・畢竟解脫にして一切の聲聞辟支佛乘を能く知り能く見、亦清淨の總持方便を得、持力を以ての故に能く解脫を說き、一切法に於て大自在を得。[三二]

(12)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、智慧を恭敬して智の勢力を得、智の光明を得、眷

【三一】第十、慧無減（Nāsti prajñāyā hāni)。

【三二】第十一、解脫無減（Nāsti vimukter hāni)。

如來の欲を成じて增無く減無く、[25]金剛幢の總持方便を得、大自在を得て、云何が說くべきを知り、何事を說くべきを知り、何の時に說くべきを知り、何の處に說くべきを知り、何の衆生の爲なるを知る。[26]

(8)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、常に勤めて精進し、諸の善法に於て厭足を知らず。和上・善友を恭敬供養し、亦常に親近して正法を樂聽し、聞に隨つて持す。是の如き精進は衆生を調せんが爲なり、無量の諸佛を供養せんと欲するが爲なり、無量無邊の衆生をして無上道を得しめ、是の如き精進を獲得して法門に入らしめんが爲なり。是の因緣を以て、佛の法と總持方便とを聞くを得、是の故に菩薩の菩提を得るの時、是の如き精進を成就して減無く、精進を以ての故に神通を具足す。[27]

(9)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、念心を具足して[28]四念處を修し、內外身の[29]無常・苦・無我を觀ず、[30]受・心・法の念も亦復是の如し。空・無相・無願の三昧を修して、如來の身と爲り、身念處を觀じて解脫を證せず。是の因緣を以て、菩提を得るの時、如來の念心を成就して減無く、知心の通を得て、諸衆生の根界を知り、業煩惱行習の心處と、善根惡根果報の生滅と、諸有の次第、諸佛世界の諸乘の大衆と、菩薩の諸行もて記莂を受くるを得ると、父母・親族・師長・和上とを解し、是の如き等を知りて心に念を失せず。[31]

(10)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、常に智慧・利慧・疾慧・無邊慧・甚深慧・解慧・淨慧・不動慧・無礙慧・無勝慧・了知聲聞緣覺乘慧・無上慧・不知足慧を修し、是の如き等の慧を具足して、慧を求め・法を求め・法を持し・法を說き・法を甘樂す。法を樂むを以ての故に、內外の物に於て貪著を生ぜず、師・和上に於て能く衆苦を忍び、所須の物を以て奉獻貢上し、一字一句の義の爲に能く十方世界の珍寶を以て法主に奉施し、一偈の因緣もて身命を捨つ。無量恒河沙等の劫に於て布施を修行

【二五】晉譯に金剛總持自㆓在於法㆒とす。

【二六】第七、欲無減(Nāsti chandasyahāni)。

【二七】第八、精進無減(Nāsti vīryasya hāni)。

【二八】身・受・心・法の四に付て不淨・苦・無常・無我を觀ずるをいふ。

【二九】晉譯は非常・苦・空・非身の四を擧ぐ。

【三〇】晉譯は痛痒とす。

【三一】第九、念無減(Nāsti smṛterhāni)。

答ふ。[二〇]

(4)『復次に寳女、菩薩の菩提道を修行する時、常に一切衆生の心を護り、衆生のために亂心の因・諸苦惱の因を作さず、諸衆生の善法を行ずるを見る時は遮せず亂さず、善く諸法の悉く幻の如くなる相を知り、諸の衆生に於て其の心平等に、諸の法界同じく一味なるを知る。是の因緣を以て、菩提を得るの時、其の心常に定にあり、*無邊聞の總持方便を聞を得、是の持を得已り心常に定に在りて佛事を作す。[二一]

(5)『復次に寳女、菩薩の菩提道を修行する時、想顚倒せず心顚倒せず、不倒を以ての故に、無我の中に於て、我想・衆生・命・人・士夫・男女、憍慢・煩惱、常・斷・有・無、善・惡・淨・垢、有漏・無漏、世間・出世間、生死涅槃等の想を作さず。一切の衆生は顚倒有るが故に、是の如き想有り。若し顚倒無くんば則ち是の想無く、中道を行ぜん。是の因緣を以て、菩提を得るの時、一想を成就して二想有ること無し。是の定を修するが故に、*無盡器の總持方便を得。是の持力を以て、心常に無想三昧を修集し、衆生を憐愍して大悲を修集し、說法して止まざるなり。[二二]

(6)『復次に寳女、菩薩の菩提道を修行する時、捨心を修集して苦樂を捨て、不苦不樂、不喜不愁、不愛不瞋なり。是の因緣を以て、利衰毀譽して心二有ること無く、常に無常・苦・無我等を觀じ、亦衆生を化して是の如き捨を修せしむ。是の因緣を以て、[二三]菩提を得る時を名けて大捨と爲す。是の捨を得已り、大海印總持方便を得。是の持力を以て、人・天・阿修羅・乾闥婆・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・釋天・梵天の恭敬供養を得と雖も、以て欣と爲さず、邪見惡人の輕慢・罵辱するも、以て慼と爲さず、其の心平等にして地水火風の如く、上らず下らず動ぜず濁らずして大慈悲を修す。[二四]

(7)『復次に寳女、菩薩の菩提道を修行する時、至心に菩提甚深の法と種種の善根とを求めて聲聞乘を求めず、大悲を修集す。是の如き等の心退轉有ること無し。是の因緣を以て、菩提を得るの時、

【二〇】第三、念無失(Nāsti muṣitasmṛtitā)。※晉譯に普門總持とす。

【二一】第四、無不定心(Nāsty asamāhitacitta)。※晉譯に曉無盡藏總持之門といふ。

【二二】第五、無異想(Nāsti nānātvasaṃjñā)。

【二三】以下、晉譯に究竟具足逮成佛道、名曰無礙……善修三昧、名離三觀、曉了有數海印總持也とあり。

【二四】第六、無不知已捨(Nāsty apratisaṃkhyāyopekṣā)。

の如き遮法を行ぜず隨はず、亦稱讃せず、以て人にも敎へず、遮道を知り已つて之を遠離す。是の因緣を以て、菩提を得るの時[一四]二無畏を成ず。復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、常に淨道を修し常に淨法を說き、莊嚴を修治して淨法を得るが故に、是の如き莊嚴は亦自ら修治し亦衆生にも敎ふ、是の因緣を以ての故に、菩提を得るの時[一五]三無畏を成ず。復次に寶女、菩薩の菩提道を修する時、終に憍慢の心を起さず、終に自ら我知・我見を說き、功德を覆藏し・罪過を顯露にせず。是の因緣を以て、菩提を得るの時[一六]四無畏を成ずるなり。』

(1)[一七]『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、道を失へる衆生には示すに道を以てし、道路の瓦石惡刺を除去し、津途の嶮絕には橋梁を施作し、闇冥の處には爲に燈明を設け、犯罪の者を見ては能く調伏せしめ、能く衆生の所有疑悔を除き、非犯の者に於ては强て犯を言はず、衆生の疑法の心を除壞し、法の光明を施し說法を勸請せしむ。說法の者を見ては善い哉と稱讃し、恭敬尊重して輕心を生ぜず。一切衆生の言音を解せんと欲し、不正の語をも心に之を輕せず。是の因緣を以て、菩提を得るの時[一八]初の無失を成ず。

(2)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、實語・法語・義語・時語・調伏語・不錯語・離諸惡語・聖人の語を以てす。若し法を聞き已れば、轉じて他の爲に說き、自利及び利他の爲の故に、說時を輕んぜず、諍訟を生ぜず、佛・法・僧を信じ、亦衆生をして佛・法・僧を信ぜしめ、諸法界の宣說すべからざるを觀ず。是の因緣を以て、菩提を得るの時、一切の語を知り、*無量門の總持方便を得。是の故に其の身の一切の相好・一一の毛孔より、悉く如來微妙の音聲を出だす。[一九]

(3)『復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、常に六念を修し、亦修生を化して六念を修せしむ。是の因緣を以て、菩提を得るの時、念心を失はず、*亦法證總持方便を得て、無量の衆生、無量劫に深義を思惟して、一時に來り問ふも、如來は思惟の力を假らず、而も能く一時に、各問に隨つて

四業に至る四を參照せよ。

【一三】 一切智無所畏(Sarva-dharmābhisaṃbodhi-vaiśāradya)。

【一四】 說障道無所畏(Anantarāyikadharmānanyathātva-niścitavyākaraṇa-v.)。

【一五】 說盡苦道無所畏(Sarva-saṃpadadhigamāya nairyāṇikapratipattathātva-v.)。

【一六】 漏盡無所畏(Sarvāsrava-kṣayajñāna-j.)。

【一七】 晉譯、寶女所問經卷第三、十八不共法品第八。以下、佛のみの有したまふ(故に不共といふ)德の十八種を說く。十八不共佛法ともいふ。大品般若五、大智度論、二十六等の說亦同じ。倶舍論二十七等には別種の十八不共法を擧ぐ。これ、小乘の所說なりとせらる。本經、卷第三の第十五業以下第三十二業を參照せよ。

【一八】 第一、諸佛身無失(Nāsti tathāgatasya skhalitaṃ)。※晉譯に分ニ別曉ニ了無量之行總持之門一とす。

【一九】 第二、口無失(Nāsti ravitam)。※晉譯に法錠(又は定)總持といふ。

[四]衆生の根を了し、知り已つて說法す、是の力を以ての故に、菩提を得るの時第三力を成ず。(4)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、衆生界を觀じ、觀じ已つて界に隨ひ而も爲に說法す。[五]界を觀ずるを以ての故に、菩提を得るの時第四力を成ず。(5)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、衆生の上中下の根を觀じ、觀じ已つて解に隨ひ而も爲に說法す。[六]知解を以ての故に、菩提を得るの時第五力を成ず。(6)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、至處道、若しくは有爲道、若しくは無爲道、若しは聲聞道、若しは緣覺道、若しは菩薩道を觀ず、[七]道を觀ずるを以ての故に、菩提を得るの時第六力を成ず。(7)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、恭敬尊重して[八]諸の禪定を修し、衆生を調せんが爲に而も法要を說く。修集を以ての故に、菩提を修るの時第七力を成ず。(8)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、過去の善根に於て誹謗を生ぜず、[九]念心を成就して放逸を作さず、不放逸の故に菩提を得るの時第八力を成ず。(9)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、未學の者を見て輕心を生ぜず、自ら已に學し已つて憍慢を生ぜず、能く衆生に智慧の光明を施す、[一〇]明を施するを以ての故に、菩提を得るの時第九力を成ず。(10)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行するの時、諸の衆生に敎へて漏の法を遠離して增長せしめず、解脫を讚歎して無漏道を修せしめ、亦衆生の爲に無漏道を說く。[一一]無漏を修するを以ての故に、菩提を得るの時第十力を成ず。寶女、菩薩是の如き十力を修集して能く如來十種の力を具するなり。』

[一二]寶女復言はく『世尊、菩薩摩訶薩は何の法を修行して四無畏及び十八法を得るや。』佛寶女に告げたまはく『菩薩の菩提道を修行する時、得る所の妙法に貪悋を生ぜず、是の念を作さず――若し我れ彼に敎へなば彼則ち我れに勝れん――と。諸の衆生に於て其の心平等にして、能く內外を捨して一切に施し、法界に種種の相無きを觀察す、是の因緣を以て菩提を得るの時[一三]初無畏を成ず。復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、諸の道を遮するの法を了了に知る、了知するを以ての故に是

【四】知根上下力(Indriyaparāpara-j.)なり。晉譯に、觀ニ衆生根ー而爲ニ說法ー、知ニ其原ー已而度ニ脫之ーと云云といふ。
【五】知世間種性力(Nānādhātu-j.)、晉譯に、隨ニ人所好ー、如ニ其黎庶ー而建ニ立之ーと云云とす。
【六】種種解智力(Nānādhimukti-j.)、晉譯に如來了ニ知仙人衆生、若干種信、所樂無量ー、審如有レ知云云と。
【七】一切至處道智力(Sarvatragāminipratipat-j.)、晉譯に、如來普入ニ衆慧ー、靡レ不ニ周達ー、審如有レ知と。
【八】知一切諸禪三昧力(Sarvadhyānavimokṣasamādhisamāpattisaṃkleśavyavadānavyutthāna-j.)、晉譯に、如來曉ニ於黎庶一切禪思脫門三昧正受、塵勞懷結ーと。
【九】知宿命力(Pūrvanivāsānusmṛti-j.)、晉譯に、如來知ニ已及他衆生不可計量往古之事ー云云と。
【一〇】知天眼力(Cyutyupapatti-j.)、晉譯に如來至眞道眼徹視、靡レ不ニ覩見ーと。
【一一】漏盡力(Āsravakṣaya-j.)、晉譯に如來悉盡ニ諸漏ー慧者、開ニ示一切無漏之慧ーと、
【一二】晉譯四無所畏品第七。その說相やゝ詳し、可見。本經卷第三の第十一業以下第十

卷の第六

寶女品　第三之二

[一]爾の時寶女、復佛に白して言はく『世尊、經中に說くが如くんば、如來十の神力を具足すとは、十力に卽する是れ世尊と爲すや、十力を離れて世尊有りと爲すや。若し十力に卽する是れ世尊ならば、是を二法と名く。若し是れ二ならば卽ち是れ無常なり。若し十力を離れて世尊有らば、云何が如來、諸法等しと說きたまふ。世尊、若し一力中に十力を具せば、何の故に如來百力を說かざる、若し百を說かざれば、當に知るべし、一力十に非ず百に非ざるを。』

爾の時世尊、寶女を讃へて言はく『善い哉・善い哉、如來世尊は一に非ず二に非ず。若し一二に非ずんば、云何が十と言ひ、云何が百と言はん。菩薩摩訶薩は一二を遠離して阿耨多羅三藐三菩提を得。如來世尊は十力に卽するに非ず、十力を離るるに非ずして、能く十事を說く。故に如來十力を具足すと名く。如來是の如き十力を說くと雖も、而も一力中に無量の力を具す、流布の爲の故に說いて十力と言ふなり。』

寶女復言はく『善い哉善い哉、世尊、唯願はくは是の如き十力を廣說したまへ。』佛寶女に言はく『至心に諦聽せよ、吾當に汝の爲に分別解說すべし。[二]寶女、(1)菩薩の菩提道を修行する時は、聲聞乘を求め及び惡業を造ること、是の處有ること無し、是の堅心を以て、菩提を得るの時、初力を成就す。如來是の如き力を成就するが故に、大衆中に於て師子吼を作し能く法輪を轉ず。是の如き法輪は天・人・魔・梵・沙門・婆羅門の轉ずる能はざる所なり。(2)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、諸業悉く是れ一業なるを了知す。是の力を以ての故に、[三]過去未來現在の一切諸業と業の因緣、處及び非處とを了知し、菩提を得るの時第二力を成ず。(3)復次に寶女、菩薩の菩提道を修行する時、

【一】晉譯、寶女所問經卷第二、十種力品第六。

【二】以下の十力說は、本經第三卷の第一業――第十業までを參照せよ。

【三】晉譯は通途の所說の如く、知業報力(Karmavipāka-jñānabala)と處(ことわり)非處(ことわりならざること)を知るの力(Sthānāsthāna-j)とを分ち、後者を第一力とし前者を第二力に擧げたり。卽ち第一力に如來處處非處處事、有限無限靡如有ㇾ知とし、第二力に、過去當來現在罪福悉知二其原一云云となす。

舍利弗の言はく『寶女、汝今已に八力を具足せるや』。答へて言はく『大德、具足と言はゞ卽ち是れ顚倒なり、顚倒は卽ち是れ二相なり、二相は卽ち是れ有爲なり、有爲は卽ち無所有なり、無所有は卽ち是れ平等なり。大德、若し平等ならば云何が有力ならん、云何が無力ならん。云何が一二の數を說く可けん。大德、一切諸法皆虛空の如し、而も是の虛空は、內と說くべからず、外と說くべからず、明と說くべからず、闇と說くべからず、一切諸法亦復是の如くなり。若し一切の法、虛空に同じからば、云何が有力・無力・一二の數を說くべけん。大德、菩薩摩訶薩は亦有力にして亦無力なり。云何が有力にして云何が無力なる。煩惱力無くして智慧力有り、慳悋力無くして惠施力有り、破戒力無くして持戒力有り、瞋恚力無くして忍辱力有り、懈怠力無くして精進力有り、亂意力無くして禪定力有り、無明力無くして智慧力有り。是の故に菩藏は惡法を遠離して善法を修集す、是の故に菩薩は惡法力無くして善法力有り』と。

爾の時世尊、寶女を讚へて言はく『善哉、善哉、若し善男子、善女人有り、能く是の如く說かば、卽ち是れ眞實の說なり』と。寶女菩薩是の法を說く時、五百の菩薩、忍心を成就したり。

大方等大集經卷第五

と。

舍利弗の言はく、『世尊、何の業に緣るが故に是の女身をば受くる』。佛言はく『舍利弗、一切の菩薩は[72]女業を以て身を受くるにあらず、乃ち神通と智慧の力とを以て女身を示すのみ、諸の衆生を調伏せんと欲するが爲の故なり。舍利弗、汝今實に寶女菩薩は是れ女身なりと謂ふや、斯の觀を造す莫れ、何を以ての故に。女身を受くるは即ち是れ慧力と神通の力とによるなり。舍利弗、是の女久しく已に無量劫中に於て男女の身を離る。是の如き身は是れ過去に非ず、亦未來現在に非ず、此の身は即ち方便身なり。是の方便身は此の世界の九萬二千の諸女人等を化し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。是の故に是の方便身を示現す』と。

爾の時寶女、舍利弗に語るらく『大德、汝今能く女人の身を以て正法を說くや』。舍利弗の言はく『我れ男身に於て尙ほ厭悔を生ぜず、況んや女身をや』と。『舍利弗、汝男身に於て厭悔を生ぜるや』。舍利弗の言はく『是の如し』と。『大德、是の故に菩薩は諸の聲聞辟支佛等に勝る、何を以ての故に。汝諸の聲聞に厭悔せらるゝ處に、菩薩は中に於て樂を受けて悔ひざればなり。聲聞の人諸有を求めざるも、菩薩は甘樂じて之を受け、聲聞の人は諸功德に於て知足の想を生ずるも、菩薩の人は厭足有ること無く、聲聞の人は煩惱を厭離するも、菩薩の人は處りて懼れざればなり』と。

[73]舍利弗の言はく『寶女、菩薩の人は何等の力か有り、是の力を以ての故に心に厭離無きや』。寶女答へて言はく『大德、菩薩摩訶薩は八種の力有り、之に處りて厭く無し。何等か八と爲す、一に慧力、心[74]無礙の故に。二に悲力、[75]調伏の爲の故に。三に[76]實力、諸佛・己身・衆生を誑かざるが故に。四に慧力、煩惱を離るるが故に。五に方便力、心悔ひざるが故に。六に功德力、畏るる所無きが故に。七に[77]智力、無明を壞するが故に。八に精進力、放逸を破するが故に。是を八力と名く。菩薩は是の如き八力を具足したれば其の心悔いず』。

【七二】女身を受くべき罪業有るに非ず。晉譯の不下以二罪蓋一受中女人身上とあり。

【七三】晉譯、八力品第五。

【七四】晉譯に無レ二所加害一とす。

【七五】同に不レ捨二群黎一とす。

【七六】晉に和性之力不レ爲二下劣一とあり。

【七七】同に聖力といふ。

斷じ、能く人天の爲に正路を開き、能く[六九]八難の邪嶮徑を閉ぢん。諸根具足して盲聾ならずば、皆至心に菩提を發すに由り、能く十方の諸世尊を見、能く天上の甘露味を開かん。若し能く至心に菩提を發さば、是の人能く疑と憍慢とを破し、無量の智慧自在なることを得て、能く衆生の爲に法界を說かん。衆生之を見ること父母の如く、亦良醫・師・友の想の如く、能く衆生の煩惱の病を療し、敎誨して菩提道に趣かしめん」と。

『爾の時聖王、佛の是の發菩提心所得の功德を說きたまへるを聞き、其の心歡喜踊躍すること無量、其の眷屬內外の人民と、悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、即ち佛前に於て偈を說いて言はく、

「我れ今衆生を憐愍す、是の故に此の菩提心を發す、若し大自在を獲得せんと欲せば、應に此の生に於て退轉すべからず。生死は無量に苦惱を受け、而も自他に於て利益無し、*寧ろ此の心を發して大苦を受けんも、以て安樂を受くることを發さざるに非ず。若し衆生有りて菩提を發さば、即ち人・天・聖王の樂を得、亦寂靜無漏の樂を得、及び無上菩提の樂を得ん。最上慧と忍と三昧定と、四無量及び六度・三種の淨慧・六神通・四無礙智を具すると、大自在なると、無上の十力・四無畏、及び[七〇]三念處及び大悲あると十八法を成就具足すると――是の如きは皆菩提を發すに由る。能く十方の諸世界を動かし、亦十方衆生の心を知り、能く無量の諸衆生を度するも、皆菩提心を發すに由るなり」と。

『舍利弗。是の偈を說ける時、四萬の夫人・無量の衆生は、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發しぬ。

『爾の時聖王、萬億中に於て彼の佛を供養し、佛を供養し已り世を厭ひて出家し、既に出家し已つて四句を思惟したり、[七一]一に實句、二に法句、三に義句、四に調句なり。一億年に於て常に是の如き四句の義を思ひぬ。舍利弗汝知るや、爾の時の轉輪聖王とは豈に異人ならんや、即ち寶女是れなり」

【六九】佛を見ず、正法を聞くを得ざるを難といふ。八有り、一、在地獄、二、在畜生、三、在餓鬼の難（以上は苦劇しくして法を聞くを得ず）、四、在長壽天、五、在北倶盧洲の難（この二は樂のみ多くして法を聞くを得ず）、六、聾盲瘖瘂、七、世智辯聰の難（世智有る爲に外に交りて法を聞くを得ず）、八、生佛前佛後の難これなり。難、麗本に正に作る、今三本に從ふ。

※此心、麗本は於此に作るも今三本による。

【七〇】一、性念處（無生の空理を緣じて煩惱を斷ずること）。二、共念處（性念處によりて三明六通て具得すること）。三、緣念處（經によつて悟達すること）をいふ。

【七一】以下の四は晋譯に、至誠章句、法典章句、妙諦章句、律令章句といふ。

を種えたる』。佛舍利弗に言はく『過去無量阿僧祇劫なり、爾の時佛有し、[六二]分別見如來・應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、土を[六三]大淨と名け、兜率天の如し。菩薩と僧と七萬六千あり、一切皆是れ淸淨の梵行もて、不退轉陀羅尼門を得たり。爾の時轉輪聖王有り、[六四]淨德報王と名け、千世界に自在を得たり。後宮の婇女八萬四千あり、千子具足して、其の力皆[六五]蓮花力士に等しかりき。爾の時聖王、三萬六千億歲に於て種種に佛及び菩薩を供養したり。――所謂房舍・臥具・衣服・飮食・病瘦の醫藥なりき』。

舍利弗の言はく『世尊不審、彼の佛の壽命幾時なりしや』。『舍利弗、其の佛の壽命十[六六]中劫を滿たせり。時に轉輪王と其の後宮の眷屬婇女及び人民九萬二千億那由他と、種種無量無邊の供養の具を齎持し、往きて佛所に至り、八千億の上妙の珍寶を以て佛の上に散らし、頭面もて作禮し長跪合掌して口に是の言を宣ぶ、「世尊、我が今設くる所の供養の具、頗し復更に殊勝の供養にて、我れに勝るる者有りや不や」と。時に佛答へて言はく「大王、異れる供養有りて諸の供養に勝れたり、是の如きの供養は、此の供養に於て、百分千分萬分千萬分せんに其の一にだも及ばず」。王の言はく、「世尊是れ何の供養なる、願はくは樂聞せんと欲す、唯願はくは之を說きたまへ」。爾の時世尊卽ち偈を說いて曰はく、

『恒河沙等の如き世界の、中に妙寶を滿たし持用て施すに、是の如き無量の福有りと雖も、憐愍して菩提を發するに如かじ。無量億等の恒沙の佛に、淨妙の花香を以て供養せんに、是の如き福德も猶ほ、[六七]菩提心を發し[六八]七步にして退せんに如かじ。是の如き發心は卽ち施と、戒・忍・精進・禪・智慧との爲なり。若し憐愍の爲に大心を發さば、其の福無量にして盡すべからず。上色にして力財ある上族姓ならば、是の人乃ち能く菩提を發さん、千世界に主となり梵天に至らば、大自在を得て乃ち能く發さん。若し喜樂して菩提心を發さば、是の如きは乃ち能く惡有を

【六二】晉譯に維衞といふ。

【六三】同に淸淨といふ。

【六四】晉譯に福報淸淨といふ。

【六五】晉譯に悉皆力士、威勢難レ論とす。

【六六】人壽八萬四千歲の時より、百年每に壽一歲を減じて人壽十歲の時に至り、更に同樣にして人壽八萬四千歲の時に至る、一增一減の間を一小劫といひ、二十小劫を一中劫とす。劫の說、詳くは俱舍論卷第十二を見るべし。

【六七】この句晉譯に、佛道心哀勝、七步爲二超殊一といふ。

【六八】これ菩提心の功德を歎じ、僅かの間に退失すとも、尙ほその德の廣大なるを稱せるなるべし。

提心は無量無邊の功德を成就し、齊しく三十二事を說くべからず。何を以ての故に。聲聞寶能く佛寶を得るに非ず、緣覺寶能く佛寶を得るに非ず、菩薩寶能く佛寶を得るを以て、佛寶を得已れば則ち聲聞・辟支佛寶、菩薩・佛寶を得。是の故に菩薩を名けて寶聚と爲す』と。

[五三]爾の時舍利弗、佛に白して言はく『世尊、寶女の所說不可思議なり、我れ其の說を觀ずるに、是の女[五四]四無礙智を得るに似たり』。佛の舍利弗に告げたまはく、『汝今方に是の女未だ四無礙を得ずと謂ふや。是の女久しく已に具足成就せり。寶女說法の字不可盡なり、文句義味も亦不可盡なり』と。時に舍利弗、寶女に語つて言はく『仁者今當に廣く分別して四無礙智を說け』。[五五]寶女の言はく『大德、四無礙智は一切の法に於て悉く其事を成ず。大德、[五六]菩提心は無礙の句に名く、何を以ての故に、菩提心中に諸義を攝するが故に、是を[五七]義無礙智と名く。一切の法界は菩提心に入る、是を[五八]法無礙智と名く。實には文字無くして而も文字を說く、是を[五九]辭無礙智と名く。說法すべからざるを說いて斷絕せざる、是を[六〇]樂說無礙智と名く。義の不可說なるを義無礙と名け、一切諸法の皆幻相の如くなるを法無礙と名け、言說の業無きを辭無礙と名け、六入界に於て障礙有ること無きを樂說無礙と名く。義に了達するを義無礙と名け、寂靜を樂むを法無礙と名け、字法に合せず、法義に合せざるを辭無礙と名け、說卽ち是れ聲なるを樂說無礙と名く。如來の正覺卽ち菩提の義なるを義無礙と名け、菩提の義は能く法を生ずるを法無礙と名け、法の句と作すべきを辭無礙と名け、說き已つて義を得るを樂說無礙と名く。法の義は義無礙と名け、解脫は法無礙と名け、法相には法性有るに非ざるを演說するをば辭無礙と名け、法界及び非法界を分別するを樂說無礙と名く。僧卽ち無爲なるを義無礙と名け、諸僧一味なるを法無礙と名け、和合僧の故に辭無礙と名け、僧の功德を說くを樂說無礙と名く。大德、是の四無礙は一切法に遍ずるなり』と。

[六一]時に舍利弗の言はく『世尊、是の女人は發心已來久しと爲すや近きや。何佛の邊に在りて諸善根

【五三】晉譯、聰明品第三。

【五四】晉譯は明に四無礙智と云はず、聰明之慧とす。

【五五】實如言大德四無礙智の九字は麗宋二本に無し、元明に依りて補ふ。晉譯また此の相當文を寶女に歸したり。

【五六】晉譯に菩薩意者、分ニ別解脫一、爲ニ聰明慧一とす。

【五七】晉譯に攝ニ取一切諸誼之要一故發ニ道心一、是爲ニ於レ誼聰明之慧一とす。

【五八】晉譯等御ニ法界一故發ニ道心一、是則名曰ニ辯財之慧一とあり。

【五九】晉譯に彼所說者、皆歸ニ滅除一、是爲ニ滅盡辯才哲慧一といふもの、之に當るもの〻如し。

【六〇】晉譯に一切順レ旨、爲ニ聰明慧一、發ニ此心一已、至ニ無礙頌一無斷辯才とす。以下是の如く、兩者の所說明に合せず。

【六一】晉譯、問寶女品第四。

て智を修し、一切の闇を破し、眞實の知見もて法界に入る。十三に發心するは、衆生の平等無二にして皆一味なるを知らんが爲の故なり。十四に[四九]發心するは無貪無瞋にして利衰ろへ[五〇]譽を毀ち、其の心無二にして善法に安住し苦樂に動かされざるが爲にして、是の如き等をもつて衆生を護らんが爲の故なり。十五に發心するは無怖無畏を得、甚深の十二因縁を解して一切の見を離れんと欲するが爲なり。十六に發心するは智慧を及び功徳を莊嚴して厭足有ること無からんと欲するが爲なり。十七に發心するは、佛を見まつつて常に法を聞くことを離れざらんと欲するが爲なり。十八に發心するは聞くが如くに說かんと欲するが爲なり。十九に發心するは廣大の法聚を得て心に貪悋無からしめんが爲なり。二十に發心するは淨戒を讃歎し、聞くが如くに住して[五一]毀禁の人を教化慰喩せんと欲するが爲の故なり。二十一に發心するは一切衆生の[五二]七種の慢を破せんが爲の故なり。二十二に發心するは一切衆生の上中下の根を知らんが爲なり。二十三に發心するは諸魔・惡業を破せんが爲なり。二十四に發心するは衆生に安樂を施さんが爲なり。二十五に發心するは衆生所有の業苦を壞破して心に悔を生ぜざらしめんと欲するが爲なり。二十六に發心するは具足して佛法を得ることを成就せしめんと欲するが爲の故なり。二十七に發心するは、有爲の法は一切無常・苦・無我なるを知らんが爲なり、知り已つて離れず、心に厭悔無し。二十八に發心するは樂うて一切助菩提の法を修集せん爲なり。二十九に發心するは空・無相・願を見んが爲なり。衆生を以ての故に而も證を取らず。三十に發心するは諸有を畏ると雖も亦諸有を護らんが爲なり。三十一に發心するは生死の過を見て厭悔せざらんが爲なり。三十二に發心するは、若し菩提に近かば無上の樂を受くるに、是の妙樂を捨つるは衆生の爲の故に貧窮の苦を受けんが爲なり。舍利弗、是の三十二の發心の寶は悉く聲聞・辟支佛の心に無し。是の故に菩薩を、名けて寶聚と爲す』と。

爾の時世尊、寶女を讃して言はく『善哉善哉、汝眞實に菩薩摩訶薩の發菩提心を說けり。而も菩

【四九】この項、晋譯相當文に、「離二諸結滯一、而以二平等有爲無爲、有形無形一、亦無二歡欣一、不レ離二寂然一、無心熙怡、善住二安諦一、意不二動搖一、苦樂不レ移、將二護群黎一、則發二寶心一」と。この文の示すが如く、晋譯に比し、本經の文甚だ簡單なり。
【五〇】利は利養なり、利を以て身を養ふこと。
【五一】禁戒即ち戒律を毀ち犯すなり。
【五二】七慢は本經卷第二、註二七、五〇頁並にその本文を見よ。

と。是の法を説きたまへる時、十千の菩薩、無生忍を得たり。

爾の時寶女、心大に歡喜し、前んで佛に白して言はく『如來所説の眞實の法義及び毘尼は不可思議なり。若し菩薩有りて能く是の如く說かば、是の人則ち能く實に知り實に見るなり』と。

[四七]爾の時舍利弗、寶女に語りて言はく『汝今已に是の如き等の法を具す、能く演說するや不や』。寶女答へて曰ふ『大德舍利弗、實とは無貪に名け、無貪は即ち義なり。是の如き義は即ち不可說にして、不可說は即ち是れ毘尼なり。大德、若し是の如くならんに云何が說くべけん。復次に舍利弗、實とは即ち滅にして滅は即ち法なり、法は即ち淨にして淨は即ち義なり、義は即ち毘尼なり。是の如き等の法は文字有ること無し、若し文字無ければ云何が說くべけん。大德、實とは即ち如、如は即ち法なり、法は即ち無二、無二は即ち義なり。夫れ無二は亦調すべからず、若し調すべからずば、云何が調と名けん。是の如き等の法は悉く所有無し、若し所有無くんば云何が說くべけん』。

舍利弗の言はく『汝今何等の寶を成就せるが故に是の如き名を立てて寶女と名くるや』。答へて言はく『大德、三十二の菩薩の寶心有り、是の如き心中には悉く聲聞・辟支佛の心無し。何等か三十二なる、一に發心するは一切の諸衆生を度せんが爲の故なり。二に發心するは佛種をして斷絶せざらしめんが爲の故なり。三に發心するは佛の法を持し滅盡せざらしめんが爲の故なり。四に發心して僧を守護するが故に。五に發心するは衆生に聖法の樂を施さんが爲なり。六に發心して諸衆生の爲に大慈を修集し、衆をして煩惱の諸苦を遠離せしむ。七に發心して大悲を修集し内外の物を捨つ。八に發心して禁戒を護持し毀戒を調するが故に。九に發心して[四八]忍を修し不忍・憍慢・惡心・顛心・醉心・狂心・放逸自在の心を破壞するが故に。十に發心して精進するは、懈怠・畏退・悔心を破し、懈怠の諸衆生を調伏せんが爲の故なり。十一に發心して定を修するは亂心・狂心・妄念を破することを爲し、衆生をして四禪及び八解脫を獲得せしめ、欲界の諸衆生を調伏せんが爲の故に。十二に發心し

【四七】寶女所問經卷第二、發意三十二寶品第二。

【四八】忍辱なり。

は根無く作無く處無し、若し能く是の如き等の疑を破壞せば、是を名けて淨と爲し、是を不熱と名く。師の教に隨つて作す、是を有信と名け、是を有定と名け、是を毘尼と名く。

『云何が煩惱、云何が毘尼なる。[四六]十二の支有り、所謂無明乃至老死なり、是を煩惱性と名く。能く一切煩惱を調伏する、是を毘尼と名く。何を以ての故に。空・無相願は能く諸法を調す、若し法是れ空にして性と相と有ること無く、願ふべからざらんには、云何が貪恚癡等有らん。無作は能く一切諸法を調す、若し一切法にして作すべからざらんには、云何がして煩惱の諸結有らん。一切諸法は因緣より生ず、若し緣より生ぜば、云何が見るべけん。是の如き等の十二の有支を見なば、亦煩惱及び煩惱相を知らん。若し是の空智もて能く菩提を觀ぜば、卽ち是の空を以て煩惱を空ぜん。若し能く是の如き平等を觀察せば、是を毘尼と名く。若し能く是の如く義を演說せば、是を菩薩能く毘尼を說くと名く。若し是の毘尼能く我を知らば、卽ち是れ煩惱毘尼を了知するなり。

『云何が名けて知我毘尼と爲すや。謂はく無我を觀じ我性を觀じて、我の淨と我の實とを知り、我の分別と我の空と我の修とを知り、我の不動不說不著不生不滅なるを知るなり。若し能く是の如く我を知らば、卽ち是れ煩惱毘尼を了知せるなり。若し實に我無きに我の想を作さば、煩惱無きに煩惱の想を作すこと、亦復是の如けん。若し我本無ければ煩惱も亦爾り。若し毘婆舍那を具足する有らば、則ち能く是の如く觀察了知せん。是を知我煩惱毘尼と名く。煩惱とは過去・未來・現在に非ず、若し能く不作・不念・不求ならば、是を煩惱毘尼を知ると名く。毘尼も亦去來現在に非ず、心の如くにして色に非ず、內に非ず外に非ず、亦中間に非ず。煩惱も亦爾り、色に非ず內外及び中間に非ず。何を以ての故に、覺知無きが故に、諍競無きが故に、淸淨無きが故に、造作無きが故に。若し能く是の如く諸の煩惱の、不出不滅なるを知らば、是を煩惱毘尼を了知すと名く。寶女、菩薩若し是の如き等の知煩惱毘尼を得なば、亦衆生の爲に是の如き法を說かん、是を菩薩毘尼を演說すと名くるなり』

【四六】晋譯に何謂二塵勞一何決欲律といふ。

說くをば是を義を說くと名く。字の不可說なる。之を名けて義と爲し、是の如く說くをば是を義を說くと名く。眞實の義、之を名けて義と爲し、是の如く說くをば是を義を說くと名く。一切菩提の法は稱計すべからず、是を名けて義と爲し、菩薩摩訶薩是の如く說かば是を義を說くと名く。多聞の人如法に作す、是を名けて義と爲し、是の如く說くをば是を義を說くと名く。一切諸乘のうち、大乘は最たり、是を名けて義と爲し、能く是の如く說くをば是を義を說くと名くるなり。

『復次に寶女、分別する所無き、之を名けて義と爲す。衆生有ること無く、亦壽*命無く、一味にして不動不盡に、一事として不生・不出・不來・不去・不滅・不二にして觀見すべからず、造作有ること無く、無爲無作にして、心諂曲ならず、三世平等に、三分差無く、不失不得、不熱不冷、不淨不穢、不行にして爾の如く、不取不捨、道に非ずして道を示し、常に非ず・斷に非ず・亦中道にも非ず、不瞋不濁にして、法及び非法を觀ぜず、一切の字・音聲・辭語に非ず、心意識無く、貪瞋癡に於て分別を生ぜず、一切諸法の作相・有相と、空無相願との是の三卽ち空にして、眞實に法に入れば等と不等と皆悉く平等なり、智慧に因つて解脫を獲得す。寶女、菩薩若し能く是の如きの義を具せば、是を名けて義と爲し、是の如き義を說くをば、是を義を說くと名く』と。

『寶女、[四三]云何が菩薩毘尼を說く』と。佛說きたまはく『毘尼には凡そ二種有り、何等か[四四]二と爲す、一に犯毘尼、二に煩惱毘尼なり。云何が犯と爲し、云何が毘尼なる。[四五]犯じ已つて尋で不善の思惟なるを覺るなり。無明・顚倒・虛妄・欺誑・煩惱に因り、我に著する衆生の疑心は、解脫を得ずして掉・悔・憍慢・放逸・寡聞なり、是の如き等に因る、是を名けて犯と爲す。若し疑心を破せば解脫を獲得し、解脫を得るが故に有犯の處を見る。卽ち是れ處に非ず亦非處にも非ず、身口意に非ず、不取不捨にして覩見すべからず、是の身の作及び心口の作に非ず。若し是の三の作ならば卽ち是れ滅の法なり、若し是れ滅の法ならば誰か作し誰か犯して犯の如くならん。一切諸法も亦復是の如し。諸法

※壽、麗本、受に作る、今三本に從ふ。

【四三】この句晋譯に、何謂三菩薩奉二順律教一とあり。
【四四】同にこの二を、殃罪之律と決勞欲律とす。
【四五】同に彼何謂二殃罪之律一、所罪律、思想之本、不應順本、無明之本、愚癡之本、顚倒之本、無畏之本、虛僞之本、猗我之本、著人之本、懈怠之本、無所捨本、無所歸本、孤疑之本、慢恣之本、難致慧本、是謂殃罪之律と。本文に犯已尋覺、不善思惟云云と。

精進を修して善法を増長せしめ、寂靜の定を修して諸の散亂を攝し、無上の智を具して無明の闇を破し、慈心を修習して諸の衆生に等しくし、悲心を修集して衆の所作に隨ひ、親しく往きて營理し、喜心を修集して衆に法喜を施し、捨心を修集して苦樂を觀ぜず、[三九]財法を捨し已りて心に悔恪無く、[四〇]所言柔軟にして衆の惡心を壞し、[四一]他を利益して具足すること甚深に、[四二]同事を修行して大乘を勸發し、是の四攝を以て衆生を調伏し、一切の行は皆是れ無常・苦・空・無我なりと見、諸の煩惱を淨め、義に依止して字に依らず、智に依止して識に依らず、了義經に依りて不了義を捨て、法に依止して人に依らず、義無礙を說きて窮盡有ること無く、而も法界に於て分別する所無く、辭無礙を說いて解脫を獲得し、樂說無礙を說いて如法に說き、惠施を莊嚴して厭足を知らず、戒を莊嚴して善く成就を願じ、多聞を莊嚴して如法に作し、功德を莊嚴して相・好を具足し、智慧を莊嚴して諸の衆生の上中下根差別の相を知り、定を莊嚴して爲に心淸淨に智を莊嚴して三種の慧を得、四念處を修して爲に心散亂せず、四正勤を修して爲に善根を得、四如意を修して諸方に往來し、五根を修集して分別の句を辯じ、五力を修集して爲に煩惱を壞し、七覺分を修して爲に諸法を知り、八正道を修して惡道を爲さず、神通を修集して爲に退失せず。菩薩摩訶薩は是の如き義を解す、是を名けて義と爲す。若し菩薩摩訶薩有りて、能く是の義を說かんに、是を名けて義と爲す。

『復次に寶女、又復義とは、空定を修集して諸の有法を壞し、無相を修集して諸法の相を壞し、無願を修集して三界を求めず、若し能く是の如き三空を演說せば、是を義を說くと名く。一切諸行の修行すべからざる、是を名けて義と爲し、菩薩是の修行すべからざるを說く、是を義を說くと名く。一切の生を斷ずる、是を名けて義と爲し、菩薩若し諸法の無生を說かば、是を義を說くと名く。諸有の出無き、是を名けて義と爲し、是の如く說くをば、是を義を說くと名く。四眞諦は之を名けて義と爲し、是の如く說くをば是を義を說くと名く。我と我所と無き、之を名けて義と爲し、是の如く

[三九] 財寶を施する布施攝なり。
[四〇] 親愛の語を以てする愛語攝なり。
[四一] 三業の善業を以て衆生を利益する利行攝なり。
[四二] 形を變じて衆生に近づき、衆生と事業を同じくする同事攝なり。以上の四を四攝といふ。

心を生ぜず、自ら讃歎せず・他說を謗らず、飲食を以て他の爲に說法せず、他の善を遮して疑惑を生ぜしめず、他の犯罪を見て終に之を說かず、他法の中に於て輕賤を生ぜず、他の修行する所の法を遮止せず。凡そ所說の法は空・無相・無願を離れず、終に一切法界を分別せず、法界を動ぜず實性を動ぜず、字・識・人・不了義に依らず、依止せずと雖も亦誹謗せず、自他の衆に於て分別を生ぜず、亦十二因緣をも誹謗せず、世間に在るに非ずして世間を淨め、非法にして法を淨め、貪無く慳無く、毀戒有ること無く・破戒を捨てず、瞋無く妬無く懈怠有ること無く、道心を失せず・菩提を忘れず、無上の智慧を莊嚴せんと欲するが爲に、不休不息にして心に悔を生ぜず、他法の中に於て心に妬嫉無く、以て非[三四]修多羅に著し、修多羅を謗ぜず。[三五]毘尼[三六]摩得勒伽も亦復是の如し。正法の所に於て終に非を見ず、慢に因つて而も慢を增長せず、因果及び業と果報を謗ぜず、正法の中に於て心退轉する無く、恩を知り・恩を念じ・之を報ずることを忘れず、終に瞋恨の心を懷抱せず、我見に著せず・他の利を嫉まず、怨親の中に於て二想有ること無く、他の譏刺を得るも終に之を報ぜず、兩舌を作して彼此を鬪亂せず、諂曲を懷いて異を顯はし衆を惑はさず、他の喜の爲に菩薩戒・比丘戒・比丘尼戒・[三七]式叉摩那戒・沙彌戒・沙彌尼戒・優婆塞戒・優婆夷戒を受けず、空閑處に住して思惟寂默たり。勤めて心に十二部經を受讀し、勝他の爲の故に是の如き等の戒を受持守護せず、供養の爲に知足を現作せず、他の知足ならざるを顯はさんが爲の故に自ら知足を修せず、諸佛の無上菩提は他の所作なりと言はず、惡業を造りて邪惡の活命をせず、七財を捨てず・食を貪らず、聖種を斷ぜず、他を誹謗せず・自ら讃歎せず、佛法中に於て數量を作さず、大乘を讃歎して心に厭足無き、是を法語と名く』と。

爾の時世尊、復寶女に告げたまはく、『[三八]菩薩の義とは云何が義と名くる。所謂信心もて莊嚴を修する時虛誑有ること無く、一切善根を莊嚴せんと欲するが爲に、至心に專念して善法を修行し、衆生の疑を破して果報を求めず、諸の衆生に安隱快樂を施し、禁戒を護持して忍心を失はず、勤めて

【三四】梵に(Sūtra)、契經と譯す。
【三五】また毘那耶ともいふ。律(Vinaya)の梵語。
【三六】梵に(Mātṛkā)、本母、行母など譯す。論藏の別名なり。論藏は理を生ずる本なれば、本母といひ、行法を生ずる本なれば行母といふ。麗本には摩邪に作り、宋本には摩那に作る、今元明に從ふ。
【三七】梵に(Śikṣamāṇā)、學法女と譯す、沙彌尼より比丘尼に至る二年間、大尼の戒行を修學するものをいふ。
【三八】晉譯に何謂二菩薩義一應二威儀一と。

『寶女、若し菩薩有りて是の如き法語を具足せば、口に終に〔三二〕我を說かざるの語、衆生を說かざるの語、壽命を說かざる語、士夫を說かざる語、斷を說かざる語、常を說かざる語、有見を說かざる語・無見を說かざる語、兩斷を說かざる語、中に著せざる語、聚を說かざる語、滅を說かざる語、諍を說かざる語、偏を說かざる語、覺知せざる語、顚倒せざる語、疑心を增さざる語、法に逆せざる語、法界を觀ずる語、憍慢を破する語をなす。說法の菩薩如法に住し、如法に實語・法語・不斷語・不折語を說く。說法の菩薩は一切世間共に論ずる能はずして見る者怖畏す。法語の菩薩は能く空・無相・無願を演說し、三界及び諸有に著せず、他の乞に從はず、心・意・識無く、塵垢有ること無く、明無く・闇無く、他に繫屬せず自にも繫屬せず、高下有ること無く、一切境界の因緣を雜へず、淸淨寂靜にして導首有ること無く、知り難く覺り難く思惟すべからず、思惟せず、淸淨智を行ずる者のみ乃ち能く之を知る。受と受者と無くして永く諸受を斷ち、三世を過ぎて無滅の相を滅せず、無生の相を生ぜず、豐儉有ること無く、生無く・斷無く、增無く・減無く、當有無く・已有無く、修に非ず・見に非ず、魔見に非ず・眞實見に非ず、相に非ず・非相に非ず、一相に非ずして亦一相なり、屋宅有るに非ず、屋宅を遠離し、近に非ず・遠に非ず・離に非ず・別に非ず・縛に非ず・解に非ず、有漏に非ず・無漏に非ず・亦相似にも非ず、苦に非ず・樂に非ず、具足に非ず・不具足に非ず、名に非ず・色に非ず・著に非ず・脫に非ず・破に非ず・完に非ず、金剛不可壞の相に非ずと雖も眞實に爾の如し、近に非ず・遠に非ず、色無く因無し、亦〔三三〕頑嚚に非ず、此に非ず・彼に非ず・內に非ず・外に非ず・自に非ず・他に非ず、見に非ず・聞に非ず・憶に非ず・忘に非ず、識に非ず・知に非ず、識の境界に非ず・知の境界に非ざるなり。寶女、是を名けて法と爲す。若し能く是の如き等の法を廣說する、是を說法と名く。

『復次に寶女、法語の菩薩は一切世間と諍競せず、他の未學を輕んぜず慢せず、心輕笑せず・高

(身口意の三業に大慈を行ひて柔和に他人を和同愛敬すること)の六和敬あり。

【三一】肉眼・天眼・法眼・慧眼・佛眼の五。

【三二】以下の八を八不正見といふ、本經第二十六卷を見よ。

【三三】嚚は、をろかに、かまびすしきなり。

すと名く。然も其の滅する時は一法の滅する無く、不平等法も平等法と作る、是を滅を證するの觀と名く。奢摩他・毘婆舍那は其の相平等なり、覺無く・觀無く、平等有ること無く、繫無く、取無く、作無く變無き、是を道を修すと名く。眞實に是の如き等の諦を了知し、又能く其の義を分別廣說する、是を菩薩摩訶薩、實に是の眞實法を說くと名くるなり』と。時に十千の菩薩眞實の忍を得たり。

『寶女、[二五]法語とは、凡そ演說する所、法に依つて語り、法を觀じ・法を念じ・法を奉行し、至を行じて法に處り、法を求め・法を欲し・法を樂ひ・法を修し、法幢法杖もて法器・法燈・法明・法念・法意・法有・法疑を莊嚴し、瓔珞もて法床・法儀・法護・法財・法の無窮盡にして廣大無邊なる・法事法身・法口・法意を莊嚴するなり。菩薩摩訶薩は是の如き等の法を具足成就す。是を法語と名く。法とは眞實の語にして法語を守護し、人を敎へて父母・[二六]和上・耆舊・有德を供養し、菩提及び菩提道を讃歎せしめ、人をして菩提の心を捨てず、至心に念を繫けて菩提を忘れず、莊嚴を離れて菩提法を修せず、賢聖・善知識等に親近し、信心を修集して專念に法を聽き、正法を慕求して精進を勤め、法に貪著せずして恩を知り恩に報ひ、寂靜を樂うて聖種を斷ぜず、[二七]頭陀を敎化し勸めて[二八]十善を行じ、一切の善法を惠施し、願ふて菩提に向ふを讃歎し、至心に淸淨の戒律を受持し、忍辱を修集し、懈怠を除去し、淨禪定・智慧方便・慈悲喜捨を修し、四眞諦を修して諦に趣向し、四無礙智もて大神通を得、法施に隨順して四念處を修し、乃至八聖道分・定慧一法を修集して智解脫を得、如法に聲聞・緣覺・菩薩の諸乘を解說し、一切の所有福德を讃說し、十二甚深の因緣を觀ずるに當りて空門・無相・無願を分別して、畏懼する所無く、五陰をば幻の如く化の如しと說き、十八界をば虛空の相の如しと說き、諸入の性は空性に同じと說き、常に[二九]七財・六念・[三〇]六敬を說き、六波羅蜜を具足することを解說し、六常行を說き六神通を修し、[三一]五眼を具足して第一義を說き、世間に成就業語を流布し、一切衆生をして其の心平等に佛語を讃歎せしむるなり。

【二五】以下晉譯に「何謂菩薩應順於法、御行如法。則隨法敎、思惟於法、法爲志、恭敬於法、[illegible]修法行、欲慕於法、樂於法樂、多存於法、法爲妙英、法爲刀杖、被法之鎧、誓法自嚴、修法光明、法之庭燎、常志法念、以法爲意、遊步於法、分別經典、方便應法、遊步法行、法爲臥寐、法爲威儀、將護法事、以法布施、法爲財業、法無有盡、普弘演法、法爲嚴辦、常修法身、法爲言辭、思惟法念、而不放逸」と。

【二六】また和尚ともいふ、もと已が師を呼ぶ俗語なりしが、轉訛して經典に用ひらると。

【二七】梵に(Dhūta)、煩惱の塵垢を拂ひて佛道を求むること。

【二八】十惡の反對。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見なり。

【二九】七種の出世間の法財、是によつて道果を得るが故に財といふ。信・進・戒・愧・聞・捨・定の七なり。

【三〇】比丘の修すべき六種の行。同戒（他人と同じく戒品を持して和同愛敬すること）同見（同じく實相の正見に住して……）、同行（同じく正行を修して……）、身慈・口慈・意慈

三に愧語、四に[17]柔軟語、五に[18]不虚語、六に無護呵語、七に[19]不貪著語、八に不畏語、九に閉諸惡道語、十に開諸善道語、十一に聖行語、十二に慧行語、十三に內淨語、十四に外淨語、十五に[20]樂受語、十六に樂聽語、十七に[21]不澁語、十八に微妙語、十九に分別語、二十に妙音語、二十一に純善語、二十二に不誑語、二十三に不熱語、二十四に歡喜語、二十五に自勸喩語、二十六に勸喩他語、二十七に不失語、二十八に安穩語、二十九に福田語、三十に如佛語、三十一に實聞遠語、三十二に淨口語なり。

『復次に寶女、[22]菩薩の寶とは、凡そ言說する所、口と意と相稱ふ。云何が口意相稱ふと爲す。施を修集するが故に菩提を獲得し、慳貪に因つて能く之を得るに非ざる、是を意と口と相稱ひて語ると名く。能く一切に施す、之を名けて寶と爲す。』淨戒を修集して菩提を獲得し、毀戒に因つて能く之を得るに非ざる、是を意口相稱ひて語ると名く。戒の如くに住する、之を名けて寶と爲す。忍辱を修集して菩提を獲得し、瞋恚に因つて能く之を得るに非ざる、是を意口相稱ひて語ると名く。修忍を具足する、是を名けて寶と爲す。勤めて精進を行じて菩提を獲得し、懈怠に因つて能く能く之を得るに非ざる、是を意口相稱ひて語ると名く。精進を修するが之を名けて寶と爲す。禪定を修集して菩提を獲得し、亂心に因つて能く之を得るに非ざる、是を意口相稱ひて語ると名く。定心を修集する、之を名けて寶と爲す。智慧を修して菩提を獲得し、愚癡に因つて能く之を得るに非ざる、是を意口相稱ひて語ると名く。智慧を修するが故に之を名けて寶と爲す。三十七助菩提の法、四無量心も亦復是の如くなり。

『復次に寶女、夫れ[23]眞實とは所謂聖行なり、聖行とは苦・無常の行なり。又復聖行とは所謂苦を知り集を遠ざけ滅を證し道を修するなり。五陰に出生の相無きを知る、是を苦を知ると名く。[24]五陰の因は所謂愛の結、畢竟遠離して不貪不著、不讃不求、不去不來なる、是を集を離れ一切相を滅

【一七】晉譯に等修ニ於善一とあり。
【一八】同に不レ二爲劣惡一とあり。
【一九】同に不レ二爲卒暴一とあり。次に敎ニ化諸天一を加ふ。
【二〇】同に受ニ言敎一といふ。
【二一】同に無ニ執御說といふものに當るべし。
【二二】晉譯に所謂至誠、求願具足、所以者何、喜ニ布施一者、爲ニ菩薩道一云云とあり。
【二三】晉譯に菩薩亦當三翫ニ習奉ニ行賢聖之諦一とあり。
【二四】晉譯に斷ニ於習一者、於ニ五陰一愛無ニ所習一故、究竟思惟無ニ所習行一云云といふ。故に「五陰の因」とは、心身一切が五陰より成るを知らずして、之に苦を感ずる因は、愛(一一〇ー一一四)在るに因るを云へるなり。

佛の言はく『善い哉善い哉、至心に諦に聽け、吾當に汝の爲に分別解說すべし。寶女、[一一]菩薩摩訶薩は三種の實有り、何等か三と爲す、一に諸佛を誑かず、二に己身を誑かず、三に衆生を誑かず。云何が名けて諸佛と己身と衆生とを誑かずと爲す。寶女、若し菩薩有りて阿耨多羅三藐三菩提心を發し已り、聲聞・辟支佛乘に貪著せば、是れ則ち名けて諸佛・己身・衆生を欺誑すと爲す。云何が誑かざる。寶女、若し菩薩有りて阿耨多羅三藐三菩提心を發し已り、若しは地獄に在りて大苦惱を受け、若しは魔業に遇ひて邪見と同止し、若しは惡國に生れて惡煩惱を起し、身は刀說の斫刺、燒炙に遇はんに、是の如きの時に於て、終に菩提の心を捨離せず、不休・不息・不畏・不悔にして、菩提心をして更に增廣を遂げしめ、諸の衆生の爲に大苦惱を受け、受苦の者を見ては心更に增廣して、勤修精進もて菩提を得んと欲し、邪語の誑惑する所と爲らず、一切の邪風も傾動する能はざる、是を菩薩の諸佛・己身・衆生を誑かざる――と名く。寶女、若し菩薩有りて諸佛・己身・衆生を誑かずば、是を菩薩の眞實の實と名く。

『寶女、諸佛を誑かざるに復四事有り、一に其の心堅固なる、二に[一二]至處に住する、三に勢力を具足する、四に勤めて精進を修するなり。己身を誑かざるにも亦四事有り、一に[一三]淨心なる、二に至心なる、三に不誑なる、四に不曲なり。衆生を誑かざるに復四事有り、[一四]一に莊嚴、二に慈を修する、三に悲を修する、四には攝取なり。寶女、是を菩薩第一の實と名く。菩薩の實とは、初て發願するの時、衆生を捨てざるなり。

『復次に寶女、菩薩の實とは、[一五]不多語・守護語・不麁語・眞實語なり。若し獨り大衆・王邊に處する在るも發言誠實にして、財物の爲に故に妄語するに非ず、自在の爲に、故に妄語するに非ず、若し三千大千世界の中に七寶を滿すこと有るも、尙ほ之が爲に而も妄語を生ぜず、況んや餘*の小事にして妄語せんをや。寶女、是の如き實は三十二の淨有り。何等か[一六]三十二なる。一に慚語、二に功德語、

【一一】晉譯は菩薩有二三法一、常懷二至誠一。

【一二】晉譯に而應威勢（又は施）とあり。

【一三】以下、晉譯に、志性仁和、質直其心、無レ有二諛諂一亦無二虛詑一とあり。

【一四】以下晉譯に方便應レ病、慈心愍哀、加以二四恩一とあり。

【一五】晉譯に口寂然、護二於言語一、所說無レ缺、口辭眞諦とあり。

※餘、麗本、復に作る、今三本に從ふ。

【一六】以下の三十二、晉譯やや異り、本經の如く列擧せず、可見。

て寶花と成らしめんと欲せば、言の如く即ち成らん。若し[五]空曠の無水多乏なるところに於て、諸の衆生の爲に大誓願を發さば、其の中に即ち城邑聚落有り、人民大小の[六]漿水乏しきこと無けん。若し三千大千世界の所有諸色を如來の色の如くならしめんと願ぜば、即ち其の言の如く佛の妙色と成さん。若し一切の所有大衆を悉く虛空に住せしめんと言はんに、言ひ已らば即ち住せん。善男子、若し是の寶女、此處の虛空の中に於て、遍く十方諸佛の所說を聞かんと欲せんに、言の如く即ち聞かん。善男子、寶女童女は是の如き無量無邊の諸大功德を成就したり』と。爾の時寶女、即ち佛前に於て偈を說いて歎じて曰はく、

『我れ今大寶聚を成就したり、故に能く無上尊の、一切諸煩惱を遠離し、大寶を具足して菩提を助けたまへるを讃歎しまつる。如來は無上の寶を具足したまひ、大光能く無邊の世を照らす、無上寶幢佛世尊に、我れ今寶を獻じて以て供養しまつる。[七]車璖・瑪瑙・靑琉璃・金剛・眞珠・日月寶――是の如き寶を以て佛を供養しまつる、衆生をして菩提を成ぜしめんが爲に。世尊の身光は諸寶に勝る、衆生樂見して疲厭無し、一方に處在して十方を見、衆をして各前に佛有すと見せしむ。如來身の行住を見る有り、或は坐臥及び說法したまふを見、或は默然として宣べたまふ所無きを見、或は入定して智慧を修したまふを見る。[八]如來一一の毛孔の光は、能く十方の諸世界を照らし、光明淸淨にして最も無上なること、猶し秋月の蓮花を淨むるが如し』と。

爾の時寶女、偈もて佛を讃へ已り、復是の言を作す『世尊、我れ今此の[九]大集經の中に於て、少しく義を問ひまつらんと欲す。如來若し許したまはば乃ち敢て諮啓しまつらん』。佛の言はく『善い哉善い哉寶女、意に隨つて問を發せ。若し疑網有らば、我れ當に汝の爲に之を除滅せん』。

爾の時寶女、即ち佛に白して言さく『世尊、[一〇]云何が實語にして云何が實と爲し、云何が法語にして云何が法と爲し、云何が義語にして云何が義と爲し、云何が毘尼語にして云何が毘尼の義なる』。

【五】飲食物及び衣被の料の無き荒野なり。
【六】漿は飲料水なり。
【七】以下、晉譯に瑪瑙・首藏明珠・焰光之珠・無垢藏珠・日月之明を擧ぐ。
【八】如來の身の一一の毛孔より光を放つ。
【九】晉譯相當文に我身今欲ㇾ咨ニ問如來於ニ斯經典章品之句一、志所ㇾ趣向一とあり。
【一〇】以下晉譯は何謂ニ菩薩常懷ニ至誠一、云何如來爲ニ諸菩薩一說ニ眞實辭一。何謂ニ菩薩而應ニ順法一、云何如來……講ニ說經典一。何謂ニ菩薩尋ニ應威儀一、云何如來……而說ニ義趣一。何謂ニ菩薩奉ニ順律教一、云何如來……講ニ決律事一。麗本には、云何が義語以下の二句を缺く。元明に依つて之を加ふ。

卷の第五

[一]寶女品　第三之一

[二]爾の時世尊、故に欲・色二界中間の大寶坊中なる師子座上に在し、諸の大衆の與に圍遶せられて法を說きたまふ。爾の時會中に一童女有り、名けて寶女と曰ふ。卽ち坐より起ち、右手に白眞珠の貫けるを執持して是の言を作す『若し我れ眞實に能く十方無量世界に於て、是の如き[三]大集の正典を受持し、讀誦書寫し其の義を演說して廣く流布せしむるを得ば、願はくは此の珠貫、佛の頂髻及び諸菩薩に著せんことを』と。是の語を說き已りて卽ち珠貫を擲つに、佛の威神力及び誠言を以て、珠貫卽ち如來の頂上に在り、亦一切諸菩薩の首に遍じ、而も諸菩薩各各自ら首の貫珠中に於て、其の來世に成佛せん時の所有世界の菩提の樹を見、衆生の調伏及び往の願力を了了に見知し、見已りて各各奇特の想を生じ、佛に白して言さく『世尊、是の寶女は、云何がして乃ち是の如き無量の大功德か有る、我が無量阿僧祇劫の所有誓願を、今一念に於て悉く見ること了了たる』と。

佛の言はく『善い哉善い哉、善男子、實に所言の如し、是の寶女は已に過去九萬六億[四]那由他の佛に、諸善根を種え大善願を發して、所生の處常に眞實を得たり。是の故に是の女の凡そ思・念・言する所は虛發無し、若し此の大千世界をして、中に寶花を滿たさしめんと欲せば、言に卽して而も有り、若し此三千大千世界に種種の妙香を滿さしめんと欲すと言はんに、言ひ已らば卽ち有り。若し種種の形色――轉輪王色・四天王色・天帝釋色・梵天王色、或は沙門色・婆羅門色、或は比丘色・比丘尼色、優婆塞色・優婆夷色を示現せんと欲せんに、言の如くに卽ち得ん。若し風災起らん時は轉じて火災と爲し、火災の起る時は轉じて水災と爲し、水災の起る時は轉じて風災と爲さんとせば、言の如く卽ち轉ず。若し魔王有り、諸の兵衆を將ちへて刀杖・弓弩・箭矢・鉾矟戈楯を執持せるをば、轉變し

【一】西晋法護譯、寶女所問經(四卷)。

【二】同、問慧品第一。初に經の序分あり。是によれば、如來淨寶高座に於ける說法なり。

【三】晋譯に吾能具足持二斯經典一とあり。

【四】梵に(Nayuta)、百阿由多を一那由他とす。萬億、或は千億、或は數千萬といふ。

若し衆生有りて來りて我に問ふて「是の法何が名け云何が受持すべき」と言はば、當に云何が答ふべき、唯願はくは之を說きたまへ』と。佛の言はく『善男子、是を[一二]大悲說大悲法と名け、如來業受菩薩記と名く。當に是の如く持すべし』と。是の經を說き已りたまふに、人・天の大衆、歡喜頂戴して信受奉行したり。[一三]

大方等大集經卷第四

陀羅尼自在王菩薩品第二之四

【一二】晉譯に佛告…是經號如來大哀と。

【一三】西晉法護譯、大哀經(八卷)終る。

守護すべし』と。時に魔波旬[103]、復是の言を作すらく『世尊、若し人有りて能く是の經を受持せば、我其の人に於て終に魔業魔事を造作せじ』と。功德藏天子[104]の言はく『世尊、一切諸佛所得の菩提は悉く是の經に在り。若し人有りて能く受持・讀誦・書寫・解說せば、當に知るべし、是の人卽ち菩提を得ん』と。彌勒[105]菩薩の言はく『世尊、我れ當に彼の兜術天上に於て、是の如き無上の經典を廣宣すべし』と。大德迦葉[106]、復是の言を作さく『世尊、我れ聲聞人は智慧微なりと雖も、應當に力に任せて受持讀誦して其の義を宣說すべし』と。阿難[107]復言はく『世尊、我れ此の經を眞實に受持し、乃至一字一句を失はず、佛口より出でたるが如くにして異有る無けん。若し衆生有りて菩提心を發さば、我れ亦能く是の人の爲に廣說せん』と。

佛言はく『善い哉善い哉、善男子、汝等悉く能く我が滅後に於て正法を護持し毀滅せしめざれ。善男子、若し衆生有りて大乘を求め、未だ法忍を得ざるも是の經を受持せば、當に知るべし、是の人七佛を過ぎずして授記を得べし。若し聲聞人の受持する者有らば、彌勒成佛せんとき、初會[108]の中に在り、若し緣覺人の受持する有らば、我が滅後に於て道證を成ずるを得ん』と。

是の法を說きたまふ時、無量の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生、忍辱[109]を成就し、無量の衆生、不退心を得、無量の世界、六種に震動し、十方世界の諸の來れる菩薩は、好香花・伎樂・幡蓋を以て佛に供養し、咸是の言を作さく『我等此の七寶の坊中に來りて大善利を得たり。若し我れ脫して少福德力有らは、願はくは此の力を以て、釋迦如來をして世に久住せしめ、是の如き正典を十方世界に流布遍滿せしめて毀滅有ること無からしめん。若し優婆塞・優婆夷等有りて是の經を持せば、一切の優愁・怖畏を離れ、諸の病苦無からしめん』と。

[110]
爾の時陀羅尼自在王菩薩の言はく『世尊、今說きたまふ所の法は無量無邊不可思議にして、一切の邪法も傾動する能はず、乃ち是れ一切善法の本・三乘の根栽なり、復是れ一切諸法の初門たり。

【一〇三】梵に(Pāpīyān)。
【一〇四】晉譯に須深天子とす。
【一〇五】彌勒、もと南天の婆羅門（姓は阿逸多）にして兜率(又術)天に上生し、現に兜率の內院に在り、將來此の土に出興して釋迦佛の處を補ふ(故に補處の彌勒といふ)と信ぜらる。梵にMaitreya.
【一〇六】梵に(Kāśyapa)、佛十大弟子の一、佛成道後三年にして歸佛し、年佛よりも長じ、頗る重ぜられたり。佛滅後第一の結集をなせりと傳へられ、頭陀第一なりしといふ。
【一〇七】梵に(Ānanda)、佛の從弟、二十余年間佛に隨ひ、多聞第一と稱せらる。
【一〇八】最初の說法の會座なり。
【一〇九】晉譯に逮二得無所從生法忍一。
【一一〇】晉譯、囑累品第二十八。

佛言はく、『是の如く是の如し、善男子、汝所說の如き無量の功德を得ん。善男子、一切十方の諸佛の世界の中に七寶を滿し、以て如來に獻ぜんと、若し人有りて能く是の經を受持し、書寫讀誦して其の義を解說せんと、所得の福德は差別有ること無し。』[九八]

爾の時世尊、諸菩薩に告げたまはく『善男子、此の衆中に於て誰か能く我が[九九]滅度の後に於て、是の如き無上菩提を護持し、其の義を廣說して法をして久住せしむるや』と。爾の時衆中に諸の菩薩及び諸の天人各六萬億有り、聲を同じくして言はく[一〇〇]『我等能く如來の滅後に於て、是の如き無上の菩提を護持し、是の經を廣說して法をして久住せしめん。唯願はくは如來之が願力を加へたまへ』と。爾の時世尊、偈を說きて言はく、

『若し我れ實に十方の佛に同じく、永に生死の大苦海を渡りたらんには、是の如き功德無上の法、應當に久しく住して毀滅する無かるべし。若し我れ無量世に慈を修したるは、眞實に諸の衆生の爲にして、衆を觀ること平等にして二有ること無くんば、是の故に正法久しく住するを得ん。若し我れ二莊嚴を具足せんに、無量世中に衆生を利し、是の二法を以て衆生を化せん、是の故に正法久住するを得ん。若し能く煩惱の結を破壞し、并に及び諸の邪見を除滅せんに、一切の諸善法を具足せん、故に能善く是の願力を發す』と。

『善男子、獨り汝等のみならず、一切の人・天、一切の魔・梵、我が滅後に於て悉く能く是の如き正法を護持せん。善男子、虛空も色と作すべく、色も虛空に同ぜしむべけんも、我が願と神通力とは、異らしむるを得可からじ』と。

爾の時[一〇一]四天王、是の如き言を作さく『若し人有りて能く佛の滅後に於て、是の經を受持して讀誦・書寫し、其の義を解說せば、我等常に當に隋逐・守護すべし。』諸の[一〇二]梵天の言はく『我等當に禪定の妙樂を捨てて是の人を守護すべし』と。兜率天の言はく『我等も亦當に是の如き持經の弟子を

【九八】晉譯、この次に頌あり。

【九九】涅槃(Nirvāṇa)の譯、涅槃に入れば永く生死の苦を滅し、煩惱の波を超度するが故に滅度といふ。

【一〇〇】晉譯、この分は頌を以てす。

【一〇一】四王天に在りて佛法護持する四王、卽ち持國(東)、增長(南)、廣目(西)、多聞(北)の四天なり。これ三十三天の主たる帝釋の臣にして、麾下に各八將軍あり、共に四天下を巡りて出家を守護するが故に護世の諸天ともいふ。

【一〇二】晉譯に梵三鉢天王 Brahmasahāmpati)とす。

作を了知するを名けて根と爲し、無生に通達するを名けて業と爲す。生・法二慈を名けて根と爲し、無緣の慈を名けて業と爲す。畏懼する所無きを名けて根と爲し、能く正法を宣ぶるを名けて業と爲す。六思念處を名けて根と爲し、六念の義を名けて業と爲す。能く自ら利益するを名けて根と爲し、自利利他するを名けて業と爲す。正法を受持するを名けて根と爲し、能く人の爲に說くを名けて業と爲す。餘の一生の在るを名けて根と爲し、最後邊の身を名けて業と爲す。若し菩薩の心不退を得れば、卽ち知慧の根と業とを解了し、能く無生の上忍を得、能く無上菩提の門をば開かん』と。

[九四]爾の時陀羅尼自在王菩薩、佛に白して言はく、『世尊、佛所說の法は不可思議にして、無上菩提も亦不可思議なり。何を以ての故に。字の說に非ざるが故に、字の攝に非ざるが故に、如來の所說は無量無邊の故に、無量無邊の法門に入るが故に、十二因緣甚だ解し難きが故に、二法に著すれば知る能はざるが故に、[九五]利智の人も漸々に知るが故に、是れ[九六]六情の知見する所に非ざるが故に、亦二乘智の境界に非ざるが故に。世尊、是の如く菩提は悉く是れ一切諸法の印なり、造作すべからざること猶し虛空の如し、是れ屋宅に非ず、屋宅を離れたるが故に。一切の行と一切衆生の所有因果とを知り、一切の智慧廣大無邊にして一切無量の善法を莊嚴し、能く善法の爲に應器と爲り、能く神通を以て人に顯示す。二道に住すれば、示すに無二を以てし、一切佛の平等にして差無く字無く義無くして、宣說すべからず、聽聞すべからざるを示し、能く衆生に三寶の正聚及び三脫門と三界を解脫するとを示し、三種の慧と金剛の定因とを示して、一切諸佛の正法に住せしめ、悉く一切諸佛の智慧を聞かしめ、一切の衆を利し、亦能く一切諸佛を宣說す。世尊、若し善男子・善女人有り、能く是の如く菩提の所有功德を讚歎することを作さば、是の如き[九七]方等の經典を聞くことを得て受持・讀誦・書寫・演說せん。是を能く諸佛の恩に報ずと名く。』

【九四】晉譯、歎品第二十七、

【九五】利は鈍に對す。

【九六】喜・怒・哀・樂・愛・惡の六なり。

【九七】方は方廣、横に十方に遍きをいひ、等は平等にして竪に凡聖を該ぬるをいふ。大乘は皆方等實相を以て體とす。方等の經典とは大乘の經典をいふ。

子、是の衆の中、誰か能く是の如き等の義を解說する」と。其の中に言ふ有り「我當に思惟し、一月の日を經て乃ち能く之を解すべし」と。或は復言ふ有り「我半月を過ぎん」と。復言ふ有りて曰はく「我七日を過ぎん」と。或は言ふ「我一日一夜を過ぎて乃ち能く之を解せん」と。

『爾の時衆中に一菩薩有り、名けて[八九]念意と曰ふ。佛に白して言さく「世尊、我今此の坐を起たずして能く是の義を解かん」と。爾の時菩薩大衆中に於て、師子吼し已るに、其の地即時に六種に震動して大光明を放ち、諸の地神乃至阿迦尼吒の諸天を勸めて、一切悉く如來所に來詣せしめたり。爾の時大衆所坐の處は、縱廣百萬由旬を滿足したり。念意菩薩、諸の大衆悉く以て來集せるを見、神通力・智慧念力、陀羅尼力・四無礙力・無所畏力・佛神通力を以ての故に、是の百億の一一事中に百億の義を解し、豫め思惟せずして停滯有ること無く、是の義を說き已るに、是の大衆中の六萬の衆生は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、四萬の衆生は無生忍を得、地神諸天より乃至阿迦尼吒天など、一切悉く說法の聲を聞けり。善男子、汝知らん、爾の時の念意とは豈に異人ならんや、即ち慧聚是なり。是の因緣を以ての故に名けて慧聚と爲す』と。爾の時世尊、即ち頌を說いて曰はく、

[九〇]『說法を聞くが故に名けて根と爲し、法を演說するが故に名けて業と爲す、諸善を思惟するを名けて根と爲し、深義を解說するを名けて業と爲す。如法にして住するを名けて根と爲し、隨意に說法するを名けて業と爲す、奢摩他を修するを名けて根と爲し、三種の慧を具するを名けて業と爲す。四種の念處を名けて根と爲し、四正勤法を名けて業と爲す。[九一]信等の五根を名けて根と爲し、信等の五力を名けて業と爲す。[九二]七菩提分を名けて根と爲し、[九三]八正道分を名けて業と爲す。字に依止せざるを名けて根と爲し、義に依止するを名けて業と爲す。人に依止せざるを名けて根と爲し、法に依止するを名けて業と爲す。不了に依らざるを名けて根と爲し、了義に依止するを名けて業と爲す。識に依らざるを名けて根と爲し、智慧に依るを名けて業と爲す。無

【八九】晉譯に覺意といふ。

【九〇】晉譯この頌を缺く。

【九一】信（三寶四諦を信すること）、進（勇猛に善法を修すること）、念（正法を憶念すること）、定（心を一境に止めて散亂せしめざること）、慧（眞の理を思惟すること）。この五は一切の善法を生ずる本なれば、五根といふ。この五根增長して五障を退治するを五力とす。即ち信力は諸の邪信を破し、進力は身の懈怠を破し、念力は諸の邪念を破し、定力は諸の亂想を破し、慧力は三界の諸惑を破するなり。

【九二】また七覺支、七覺分ともいふ。擇法（智慧を以て法の眞僞を簡別す）、精進、喜（身心を輕利安適ならしむ）、念（常に定慧を忘れず、均等ならしむ）、定、行捨（一切の法を捨て、平心坦懷なる）をいふ。

【九三】正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八をいふ。以上の根力覺道に、四念處・四意斷・四如意を加へて、三十七菩提分と名く。

を知る、之を名けて業と爲す。施を念ずるを根と名け、能く煩惱を捨する、之を名けて業と爲す。天を念ずるを根と名け、淨天を獲得する、之を名けて業と爲す。聞き已つて思惟する、之を名けて根と爲し、世間に著せざる、之を名けて業と爲す。本無今作を知る、之を名けて根と爲し、作無く受無き、之を名けて業と爲す。涅槃を知る、之を名けて根と爲し、大解脫を得る、之を名けて業と爲す。自利を根と名け、自利利他、之を名けて業と爲す。八萬四千の法聚を受持する、之を名けて根と爲し、其の義に通達する、之を名けて業と爲す。能く法を演說する、之を名けて根と爲し、無明等を解する、之を名けて業と爲す。諸の衆生を菩提道に勸むる、之を名けて根と爲し、智慧方便を修して不退なることを勸むる、之を名けて業と爲す。諸有を畏れざる、之を名けて根と爲し、願ふて諸有に生ずる、之を名けて業と爲す。聞に從つて[七八]忍を得る、之を名けて根と爲し、思惟して得る者、之を名けて業と爲す。意に隨つて[七九]忍を得る、之を名けて根と爲し、[八〇]不生に因つて得る、之を名けて業と爲す。[八一]餘の一生の在る、之を名けて根と爲し、[八二]最後邊の身、之を名けて業と爲す。菩提樹下に坐する、之を名けて根と爲し、諸法を了知する、之を名けて業と爲す。[八三]』

是の慧根慧業を說く時、一切十方の諸佛世界及び此の寶坊、六種に震動す。爾の時、慧聚菩薩摩訶薩、佛に白して言さく『世尊、何の因緣の故に、十方世界及び此の虛空の七寶の坊庭は、是の如くに震動する』と。『善男子、是の慧根慧業は亦是過去の諸佛の所說たり。是の故に此の地大震動を爲す』と。

[八四]爾の時、具足四無礙智菩薩、佛に白して言さく『世尊、何の因緣の故に、慧聚菩薩、之を名けて聚と爲すや』。佛言はく『善男子、過去無量阿僧祇劫に佛有りて出世し、[八五]功德藏如來・[八六]應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號しまつり、[八七]土を善生と名け、劫を[八八]無垢と名けたり。其の土の衆生一切純善なりき。爾の時佛に三萬二千の大菩薩衆と八萬二千の聲聞大衆と有りき。爾の時世尊、菩薩を試みんと欲し、百億の事を以て諸菩薩に問ひたまふらく、「善男

【七八】忍位なり、大小乘によりて次位を異にす。晉譯の相當文に精勤自修、逮ニ音響忍一とあり。

【七九】晉譯の相當文に自將ニ其節一得ニ柔順忍一とす。

【八〇】同に若以逮ニ得不起法忍一とあり。

【八一】次の生に解脫するの意。晉譯に發レ意勤ニ修不退轉地一とす。

【八二】再び生死せざる最後の生に在るをいふ。晉譯に超然進ニ前阿惟越地一とす。

【八三】晉譯、この次に頌あり。

【八四】晉譯、智積菩薩品第二十六。

【八五】晉譯に首寂といふ。

【八六】應供の略、以下佛の異名、如來の十號と稱せらる、精しくは大般涅槃經卷十八參照。

【八七】晉譯は精勤とあり、

【八八】同に阿摩勤といふ。

根と爲し、一切を放捨する、之を名けて業と爲す。無所畏を修する、之を名けて根と爲し、能く廣く之を說く、之を名けて業となす。三昧を修集する、之を名けて根と爲し、定の次第を知る、之を名けて業と爲す。智慧を修集する、之を名けて根と爲し、一切法を知る、之を名けて業と爲す。菩提を莊嚴する、之を名けて根と爲し、菩提を得るの時、之を名けて業と爲す。苦・集*・道を證する、之を名けて根と爲し、滅を證盡するの時、之を名けて業と爲す。不了義に依らざる、之を名けて根と爲し、了義經に依る、之を名けて業と爲す。初めて法を聽受する、之を名けて根と爲し、其の義に依止する、之を名けて業と爲す。人に依らざる、之を名けて根と爲し、法に依止する、之を名けて業と爲す。法の無常を見る、之を名けて根と爲し、法の無生滅[を見る]、之を名けて業と爲す。諸法の苦を知る、之を名けて根と爲し、法の無作を知る、之を名けて業と爲す。法の無我を知る、之を名けて根と爲し、法性の淨を知る、之を名けて業と爲す。涅槃の淨を知る、之を名けて根と爲し、法本淨なる、之を名けて業と爲す。義を聞いて畏れざる、之を名けて根と爲し、義に依止する、之を名けて業と爲す。眞を聞いて怖れざる、之を名けて根と爲し、眞法に依止する、之を名けて業と爲す。字を知りて畏れざる、之を名けて根と爲し、知り已りて樂說する、之を名けて業と爲す。如來の無礙智力を說くを聞いて怖畏を生ぜざる、之を名けて根と爲し、如來の無礙智力に依止する、之を名けて業と爲す。生・法の[七四]一緣、之を名けて根と爲し、[七五]無緣の慈、之を名けて業と爲す。衆生を憐愍する、之を名けて根と爲し、能く壞苦を爲す、之を名けて業と爲す。善を思ひ喜を得る、之を名けて根と爲し、心法に著せざる之を名けて業と爲す。愛・恚・捨無き、之を名けて根と爲し、無一無二なる、之を名けて業と爲す。佛を念ずるを根と名け、法身を念ずる、之を名けて業と爲す。[七六]法を念ずるを根と名け、法性の淨を知る、之を名けて業と爲す。僧を念ずるを根と名け、[七七]僧の無爲を知る、之を名けて業と爲す。戒を念ずるを根と名け、持する者無き

※高麗本、集に作る、今三本に從ふ。

【七四】衆生緣慈悲（凡夫又は有學の、衆生を憐みて拔苦與樂せんとする心）と法緣慈悲（三乘の聖人、法空の理を解せざる衆生を憐み、その意に隨つて拔苦與樂する心）とをいふ。

【七五】諸佛の心は、諸緣の不實虛妄なるを知るが故に、心に所緣無し、但だ衆生の諸法實相を知らず、五道に往來して心諸法に著し、取捨分別するを以ての故に、諸法實相の智慧を以て、衆生に之を得しむるを無緣の慈といふ。

【七六】佛の法なり、晉譯に常念經典識其義理とあり。

【七七】晉譯に逮於無爲觀察無塵といふ。

『善男子、爾の時淨光明佛、是の法を說きたまへる時、光頂菩薩と及び三萬二千の菩薩と悉く皆是の陀羅尼を獲得したり。善男子、汝知るべし。爾の時の光頂菩薩とは豈に異人ならんや、卽ち汝の身是なり。是の故に汝今能く廣く是の陀羅尼を分別すべし、是の大衆中にて、是の持を得たる者、汝最第一なり』と。

[六六]爾の時會中に一菩薩有り、名けて[六七]慧衆と曰ふ、佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩、寶炬陀羅尼を得、得已りて失せず、能く此の法を以て衆生を調伏するや』。『善男子、若し菩薩有りて[六八]慧根に安住し慧業を造作せば、是の如き菩薩能く是の持を得、得已りて失せず、能く此の法を以て衆生を調伏せん』。慧衆菩薩復是の言を作す『善い哉世尊、唯願はくは演說したまへ、云何が慧根にして云何が慧業なる』。佛言はく『善い哉善い哉、善男子、至心に諦聽せよ、吾當に汝の爲に分別解說すべし。善男子、有し善男子善女人有り、未だ智慧を聞かずして之を聞くを得る、是を名けて根と爲し、聞き已りて廣く說く、之を名けて業と爲す。始めて諸法を觀ずる、之を名けて根と爲し、觀じ已りて廣く說く、之を名けて業と爲す。初めて善根を觀ずる、之を名けて根と爲し、轉じて以て人を化する、之を名けて業と爲す。不放逸を觀ずる、之を名けて根と爲し、轉じて以て人を化する、之を名けて業と爲す。自心を調伏する、之を名けて根と爲し、他心を調伏する、之を名けて業と爲す。寂靜に住する、之を名けて根と爲し、身口意を淨むる、之を名けて業と爲す。一乘を知る、之を名けて根と爲し、衆生の爲に說く、之を名けて業と爲す。奢摩他を修する、之を名けて根と爲し、三種の慧を具する、之を名けて業と爲す。[六九]三解脫を修する、之を名けて根と爲し、[七〇]三慧を證得する、之を名けて業と爲す。[七一]四念處を修する、之を名けて根と爲し、念を念ぜざる、之を名けて業と爲す。[七二]四正勤を修する、之を名けて根と爲し、煩惱性を離るる、之を名けて業と爲す。[七三]四如意を修する、之を名けて根と爲し、無如意を知る、之を名けて業と爲す。信心を修集する、之を名けて

【六六】 晋譯、智本慧業品第二十五、

【六七】 同に智積といふ。

【六八】 晋譯に智本とす。

【六九】 空・無相・無願の三三昧をいふ。

【七〇】 聞慧（經教を見聞して生ずる智慧）、思慧（理を思惟するに依つて生ずる智慧）、修慧（禪定を修するに依て生ずる智慧）の三。

【七一】 また四念住といふ、身の不淨を觀ずると、受（苦樂の感）は苦なりと觀ずると、心は無常なりと觀ずると、法は無我なりと觀じ、以て實の智慧を修するなり。

【七二】 また四意斷・四正斷・四正勝といふ。已生の惡を除斷せん爲と、未生の惡を生ぜざらしめん爲と、未生の善を生ぜしめん爲と、已生の善を增長せしめん爲に、勤めて精進するをいふ。

【七三】 また四如意足・四神足といふ。四種の禪定なり。前の四念住・四意斷に繼いで之を修し、定慧の均等を得るなり。智度論によれば、欲・精進・心・思惟の四を擧ぐ。切に樂ひ欲すると、一心に專注すると、間雜なく精進すると、專ら思考するとなり。

羅尼と名く。能く一切の諸煩惱を淨め、亦諸の魔業を遠離するを得、[六四]五陰を觀察して過咎を味ふ、是を寶炬陀羅尼と名く。善く諸の衆生を調伏することを知り、永く六根の因緣を離れ、衆の爲に說法して念を得しむる、是を寶炬陀羅尼と名く。是の如き陀羅尼に住せば、能く十方の佛世界に到り、佛を見て至心に法を聽受し、亦能く是の如きの法を廣說せん。旣に法を聞き已りて至心に持し、能く衆生の爲に字義を說かん、大念力の因緣を以ての故に、能く諸佛の微妙の語を解せん。能く無常・苦・無我と、諸法悉く緣に從つて果を得るとを說き、了了に諸の法界を觀察する、是を法炬陀羅尼と名く。樂說無礙智を成就し、[六五]三明三慧も亦是の如し、若し是の總持に住する者有らば、乃ち能く八解脫の義を得ん。佛無量の陀羅尼を說くも、悉く來りて此の持中に攝在す、若し是の如き陀羅尼を得なば、是を無量の持を成就すと名く。若し無量の諸禪定に入り、及び無量の諸神通を得なば、皆是の如き總持の力に由る、是の故に名けて持中の王と爲す。四大海の障礙無く、一切の河泉皆之に投ずる如く、諸法の衆流も亦是の如く、皆悉く是の持海に歸趣す。身の無邊と意の無盡とを得、能く廣く分別して法界を說き、無量の功德を成就せん者、乃ち能く是の陀羅尼を獲ん。若し是の如き微妙の持を得んに、卽ち三十二の相好を得、其の色殊勝にして種性に上れ、多饒の財寶に自在をば得ん。諸有の中に於て無生を得、能く廣く諸法の義を分別して、不退地に安住不動なる、皆是の陀羅尼を得るに由る。菩薩若し菩提を修せんと欲せば、當に是の如き陀羅尼を修すべし、是の持を得已らば修道易く、能く法を演說して衆生を調せん。無量劫に於て說法せん時、字義の二法盡すべからず、能く衆生の諸煩惱を淨むるも、是の如き陀羅尼を得るを以てなり。能く無上の正法輪を轉じ、能く衆生をして衆苦を脫せしめ、能く衆生を無上の道に進ましむるも、是の如き陀羅尼を得るを以てなり。若し衆生千萬口有り、一口に千萬舌有るも、成持者所得の無量の功德を宣說する能はざらん。

【六四】また五蘊といふ、色と受想行識となり。

【六五】晉譯相當文に三達三眼とし、次の八解脫を三脫の義とす。三達は三明の義、六通の中の宿命通、天眼通、漏盡通の三をいふ。

の爲に分別解說し、諸の衆生に隨つて種種に語言すべし』と。光頂菩薩復佛に白して言さく『唯願はくは世尊、分別廣說したまへ、我等聞き已つて當に修持するを得べし』と、佛言はく『善い哉善い哉、善男子、至心に諦に聽け、吾當に汝の爲に分別解說すべし』と。爾の時世尊、卽ち偈を說きて言はく、

『一切の諸煩惱を遠離し、清淨無垢なること猶し眞寶*のごとく、其の心能く大光明と作る、是を寶炬陀羅尼と名く。身口意の業淨く寂靜にして、猶し秋月の明淨なるが如く、大慈を修集して心平等なる、是を寶炬陀羅尼と名く。其の心諸の覺と觀と有ること無く、悉く二見を遠離するを得て、亦有想に非ず無想にも非ざる、是を寶炬陀羅尼と名く。念・意・慧を具足成就して、能く無上の大法門に入り、清淨無垢なること虛空の如き、是を寶炬陀羅尼と名く。[六〇]三種の塵勞の垢を遠離し、[六一]三種の清淨の慧を成就し、已に三有に於て解脫を得る、是を寶炬陀羅尼と名く。能く悉く貪・恚・癡を破壞し、亦煩惱の濁を遠離するを得て、無明の諸邪闇を除滅する、是を寶炬陀羅尼と名く。衆生の音聲の上中下を、一切悉く能く了了に知り、能く衆生の意に隨つて說法する、是を寶炬陀羅尼と名く。甚深無量の義を具足し、亦復諸の字句を具足して、我及び我所を遠離する、是を寶炬陀羅尼と名く。四依法を具足成就し、亦復四無礙智を具して、其の心常に四禪に在る、是を寶炬陀羅尼と名く。能く廣く第一義を分別し、具足して[六二]四梵行を得、五神通を修習具足する、是を寶炬陀羅尼と名く。四念處を受持專憶し、精進して四正勤を獲得し、四如意を莊嚴成就する、是を寶炬陀羅尼と名く。五根及び五力を成就して、一切の邪風も動かす能はず、無上の七覺分を修集する、是を寶炬陀羅尼と名く。定慧の二翅翼を成就し、平坦なる八正路を遊翔して、無上智解脫に趣向する、是を寶炬陀羅尼と名く。能く菩薩の道地を踐み、及び無上の眞解脫に住して、永く一切の煩惱の習を斷ずる、是を寶炬陀羅尼と名く。能く無量の大光明を作すこと、猶し世間の日月の如く、能く[六三]三種の清淨眼を淨むる、是を寶炬陀

※寶、麗本は實に作る。今元明兩本に依る。

【六〇】貪瞋癡。塵勞とは、心を勞する塵、卽ち煩惱をいふ。

【六一】聞（見聞によりて得たる智慧）、思（考察によりて得たる智慧）、と修（心に味ひ身に行ひて得たる智慧）の三。

【六二】四無量心なり。此の四心は梵天に生ずる行業なれば梵行といふ。

【六三】晉譯によれば、この三種は天眼・慧眼・佛眼を指すものの如し。

ん、若し是の如き持を成就するを得ば、讃歎する者有るも盡す能はざらん』と。

爾の時世尊、陀羅尼自在王菩薩を讃へたまふらく『善い哉善い哉、善男子、汝已に久しく是の陀羅尼を得たり、是の故に能善く所有る無量の功德の義を分別解說す。但に今日のみならず、已に過去無量の佛所に於ても亦是の如く分別解說したり。[五三]善男子、過去無量阿僧祇劫に、爾の時佛有して[五四]淨光明と號し、[五五]世界を淨劫と名け、亦淨純とも名けたり。淨琉璃を以て世界と爲し、猶ほ明鏡の如く、地平なること掌の如く、所有林樹七寶の所成たり。妙寶蓮花大さ車輪の如く、清淨鮮潔にして人の樂見する所たり。其の土の人民悉く七寶の樓殿堂閣に處ること天の如くにして異る無く、貪欲・恚・癡漸く已に輕微なり。土には日月無く唯佛光有るのみにして、青蓮華開けば則ち是れ夜なるを知り、赤蓮華敷けば則ち是れ晝なるを知りぬ。

『時に彼の佛に六*百萬億の大菩薩僧有り、出家の人は稱計すべからず、皆悉く無上の大乘を志樂したり。世界に乃至二乘の名無く、一切皆是れ[五六]不退の菩薩たり。其の佛の壽命半劫を具足し、人と天と差別有ること無く、地に在りては人と爲り空に處しては天と爲り、王者——佛法王を除きて——有ること無かりき。其の土の人民、諸天邪神に宗事し、及び歸依する者有ること無く亦女身・毀戒の名も無く、三戒を具足したり。何等をか[五七]三と爲す、一に從戒戒、二に從心戒、三に從慧戒なり。菩提心を發し生死を厭悔するを從戒戒と名け、三昧・慧を修するを從心戒と名け、智慧を修集して大智慧を得るを從慧戒と名く。

『爾の時衆中に一菩薩有り、名けて[五八]光頂と曰ふ、座より起ちて頭面もて足を禮し、右遶恭敬長跪合掌して佛に白して言さく「世尊、言ふ所の陀羅尼とは、云何が名けて陀羅尼と爲し、菩薩何の陀羅尼中に住して能く一切諸佛の名號を持し、諸の衆生の爲に分別解說するや」。佛言はく『善男子、陀羅尼有り名けて[五九]寶炬と曰ふ。菩薩是の陀羅尼中に住せば、能く一切諸佛の名號を持し諸の衆生

【五三】晉譯、卷第八、往古品第二十四。
【五四】晉譯に離垢光といふ。
【五五】晉譯は、世界曰二善離垢一劫名二照一明といふ。
※麗本、萬百に作る、今元明二本に依る。
【五六】不退轉(Avivaltika)の略、佛道修行の過程に於て、已に得たる功德を決して退失すること無き位をいふ。
【五七】晉譯は禁戒・守心・學智を擧げ、何謂爲レ戒、習二諸通慧一心念二不捨一、棄二捐諸行一。何謂二守心一、住二於定意一、逮二得神通一。何謂爲レ智、住二智度無極一、得二分別辯一と。
【五八】晉譯に光首といふ。
【五九】晉譯に寶曜といふ。

足するを得なば、功德と讃すること有るも盡す能はじ、能く清涼と作すこと秋月の如く、善法を增長せんこと亦是の如し。菩薩是の如き持を成就せば、能く無量の諸衆生を化せん、若し是の如き陀羅尼を具せば、自在を獲得せんこと大王の如くならん。能く衆生を大乘に化し、能く法財を施して貧窮を破し、能く法雨を降らさんこと龍王の如く、煩惱を摧滅せんこと惡雹の如くならん。若し是の如き陀羅尼を得なば、能く衆生を菩提に化し、過を說く能はざること帝釋の如く、字義の不盡なること虛空の如けん。若し陀羅尼を成就するを得ば、一切の大衆樂んで見聞し、其の意不散にして常に定に在り、無量の慈悲を修集し、清淨の梵行もて神通に遊び、是の四皆大梵天の如し。若し陀羅尼を成就するを得なば、卽ち能く十方の佛を供養し、了了に十方界を觀見し、其の世界に於て衆生を化せん。若し是の如き陀羅尼を具せば、卽ち佛の功德を具足するを得、常に十方佛の念ずる所と爲り、亦父母の一子の念ずるが如けん。若し菩薩有りて是の持を得ば、能く功德無量の聚を讃じ、戒・念・慧を具足成就し、能く衆生心の所行を解せん。若し陀羅尼を成就するを得ば、憍慢及び慳貪有ること無く、善く方便を知りて衆生を調し、慈悲を修集して煩惱を壞せん。若し陀羅尼を成就するを得なば、煩惱に汚れざること虛空の如く、善く衆生の隨意語を解し、亦能く意に隨つて法を演說せん。若し是の如き陀羅尼を具せば、悉く能く衆生の根を了知し、能く衆生種種の解を解し、其の所解に隨つて說法せん。對治の門に隨つて爲に說法し、三十七品もて衆生を調せん。若し是の如き陀羅尼を得ば、奢摩他を修して邊有ること無けん。若し是の如き陀羅尼を得なば、[五二]六度を具足すること諸佛の如く、一切煩惱海を了知し、寂靜に通達して而も之を壞せん。身口意の業悉く寂靜に、行・住・坐・臥亦是の如けん。若し是の如き持を成就するを得ば、復煩惱の諸習氣無く、淨法身を得て邊有る無く、生の所生に非ずして常に化生す。身口意の業は智に隨つて行じ、所有定念亦是の如くなら

【五二】　六波羅蜜の謂なり。

分中に於て唯一分を說くも猶ほ盡す能はず。是の陀羅尼は是の如き無量の功德を成就せり』と。爾の時陀羅尼自在王菩薩、即ち頌を說きて曰はく、

『如來八陀羅尼を說きたまふ、若し菩薩有りて具得せば、能く諸經の種種の義を解し、其の辭句の義盡すべからず。善業を具足して妙聲を得なば、能く無量の世間をして聞かしむ、衆生聞き已りて善法を修し、修し已りて解脫を獲得す。無量劫中に無法を說き、一法の根に因つて無盡を說き、亦一字に因つて多義を解す、是を如來際【五一】持を說くと名く。人中の牛王は二際を斷ち、中道の義を說いて邊有ること無く、智慧を具足して平等に觀じ、是の持を成ずと雖も得る者無し。四方の色等大海に現じ、一切の字印は菩薩に印す、說法の時障礙無く、大海陀羅尼を成就す。寶蓮華に坐して法を演說し、亦蓮華を雨らして大衆に散ずるに、蓮華も亦無量の法を說く、是を寂靜蓮華持と名く。一字を說いて障礙無く、無量の字中亦是の如く、無量の義を說いて滯有ること無し、是の如き無礙持を具足す。法の深義を說いて盡くる有ること無く、辭及び樂說も邊有ること無し、能く衆生の疑網心を破し、無上智總持を獲得せしむ、頂髻常に如來の像を出し、身口意の業、佛と異る無し、若し是の如き八持を具せば、劫を窮めて讃歎するも盡すべからず。是の八陀羅尼を具足せば、世に處して汚れざること蓮華の如く、世の最高に在ること須彌の如く、稱計すべからざること亦是の如し。世の邪も動かさゞること亦復然り、是の人是の如き持を具足せば、能く世道の諸邪見を壞すること猶ほ師子の獸中に吼ゆるが如し。若し無上陀羅尼を得なば、能く世間の清淨行を達し、能く無量の諸善法を增し、亦能く多の衆生を敎化せん。是の如き陀羅尼を具足せば、能く衆生の無明の闇を壞し、大光明と作ること朝日の如く、亦能く諸の黑闇をも除破す。說法の無礙なる、虛空の如く、衆生の爲に行くこと猛風の如く、法藥を施して煩惱を壞せんこと、世の良醫の病者を救ふが如くならん。若し無上の持を具

【五一】持とは陀羅尼の譯なり。

淨の法音を出す、其の音深廣にして諸方の喩多し、【四八】十二部音、清淨の音、斷煩惱の音なり。爾の時菩薩、默然として住するに、是の諸の蓮華皆能く法を演べ、亦種々無量の光明を出す、一切衆生皆菩薩の諸華臺に坐して佛事を施作するを見る、是を蓮華陀羅尼と名くるなり。

『入無礙門陀羅尼とは、菩薩摩訶薩の一法を說く時、罣礙有ること無く、若し二法・三法・四法乃至百千無量無邊恒河沙等の法、四天下の微塵等の如き法、乃至三千大千世界の微塵等の法、乃至恒河沙等の諸佛世界の微塵等の法を說くも、字・句・義に於て亦罣礙無き、是を入無礙門陀羅尼と名くるなり。

『四無礙智陀羅尼とは、所謂【四九】法無礙智・義無礙智・辭無礙智・樂說無礙智なり。東方無量世界の衆生にして法を問ふ有らば、菩薩隨つて法無礙を以て答ふ。南方無量世界の衆生にして義を問ふ有らば、菩薩隨つて義無礙を以て答ふ。西方無量世界の衆生にして辭を問ふ有らば、菩薩隨つて辭無礙を以て答ふ。北方無量世界の衆生にして樂說を問はば、菩薩樂說智を以て答ふ、是を四無礙智陀羅尼と名くるなり。

『佛瓔珞莊嚴陀羅尼とは、若し菩薩有りて是の如き七陀羅尼を獲得せば、其の【五〇】頂髻上に佛像の現ずる有り、其の色眞金にして大光明、三十二相八十種好有り。爾の時菩薩の身口意等、悉く佛業を作し、其の思念する所は佛の思念の如し。菩薩是の如き佛業を具足し、能く大衆の種種の心を知り、知り已りて、意に隨ひて爲に法を說くこと、若しは一日若しは二日、乃至無量百千萬歲なるも、其の所知の法門の文字句義を盡す能はず。又復四種の智慧を具足す。何等を四と爲す、一に衆生心を知り、二に字句を知り、三に所說の無盡を知り、四に眞實を知るなり。菩薩是の如き四智を具足し、能く衆生を調して阿耨多羅三藐三菩提を爲す。善男子、是を佛瓔珞莊嚴陀羅尼と名くるなり。

『善男子、是の八陀羅尼は其の分無量、是の一分中に於て、其一分を分ちて以て千分と爲し、是の

【四三】若は Jñā(知)なり。

【四四】婆は Bhava(有)の首綴なり。

【四五】車は Chanda(欲)の首部なり。

【四六】波は Pūrva(前)の首綴なり。

【四七】頗は Phala(果)の首綴なり、晋に果印とす。

【四八】晋譯に聞經・得經・聽經・分別經・現經・應時經・生經・方等經・未曾有經・譬喩經・法解經・行經を擧ぐ。卽ち十二部經なり。

【四九】菩薩の辯才を四種に分てるなり、又四無礙解ともいふ。一切諸法の名字と、義理とに通達して滯りなきを法無礙、義無礙といひ、一切衆生の殊方異語に從ひ、之が爲に演說して、よく解を得しむるを辭無礙といひ、一切衆の根性に從ひ、聞かんと欲する所の法を說きて滯りなきを樂說無礙とす。卷五、註五二以下、及びその本文を參照せよ。

【五〇】佛菩薩の頂骨隆起して髻の如きをいふ。

菩提を得たり。復殺の印有り、[二六]殺の言は六なり、如來は眞實に六入を了知する故に能く一切衆生を調伏す。復殺の印有り、殺の言は六なり、如來は六念處を具する故に大自在を得たり。復[二七]殺の印有り、殺の言は六なり。如來六神通を具足する故に能く神通を以て衆生を教化す。復[二八]婆の印有り、婆の言は左なり、如來世尊は左道を離るるが故に阿耨多羅三藐三菩提を得たり。復[二九]多の印有り、多の言は實なり、如來は善く眞實の性を覺するが故に正覺と名く。復耶の印有り、[三〇]耶の言は彼なり、如來は等しく此彼の平等を知る。復婆の印有り、[三一]婆の言は結なり、如來諸の煩惱を遠離するが故に[三二]阿梨呵と名く。復闍の印有り、[三三]闍の言は生老なり、如來已に生老の分を過ぎたるが故に世尊と名く、復[三四]曇の印有り、曇の言は法なり、如來の說法は清淨無垢なり。復[三五]奢の印有り、奢の言は奢摩他なり、如來は奢摩他を修するを成就す。復佉の印有り、[三六]佉の言は虛空なり、如來は一切の諸法虛空に同じきを知見す。復迦の印有り、[三七]迦の言は苦行なり、如來一切の苦行を遠離す。復[三八]婆の印有り、婆の言は實なり、如來所說の四眞諦は卽ち是れ眞實なり。復摩の印有り、[三九]摩の言は道なり、如來能く八正の道を說く。復伽の印有り、[四〇]伽の言は深なり、如來の所說は其の義甚深なり。復羼の印有り、[四一]羼の言は忍なり、如來忍波羅蜜を具足す。復呼の印有り、[四二]呼の言は讃なり、如來常に十方諸佛を讃す。復若の印有り、[四三]若の言は遍知なり、是の故に如來を一切智と名く。復婆の印有り、[四四]婆の言は有なり、如來已に一切の諸有を解す。復車の印有り、[四五]車の言は欲なり、如來一切の善法を欲す。復波の印有り、[四六]波の言は前なり、如來常に一切衆生の爲に現前說法す。復頗の印有り、[四七]頗の言は果なり、如來常に四沙門果を說く。善男子、是の如き字に因りて諸法を演說し、所有諸字悉く菩薩の口業の印に於て現ず、是を大海陀羅尼と名くるなり。

『蓮華陀羅尼とは、菩薩此の陀羅尼に住し已り、說法する處、常に七寶淨妙の蓮華を出し、以て法座と爲し、菩薩上に坐して法化を宣說す。又復多く無量の蓮華を雨らす、是の諸の蓮華も亦種種清

【二六】殺は Sat(六)の首綴、晉譯に燒咤印を擧げ、捨於燒熱とするものか。
【二七】晉譯に六印といふ。
【二八】婆は Vāmaka(左)の首綴なり。晉に左披印といふもの。
【二九】多は Tathatā(眞如)の首綴。晉譯に如印とす。
【三〇】耶は Yad(彼)より釋す。
【三一】婆は Vyasana(煩惱)の首綴なり。
【三二】梵に Arihan 阿羅漢の誤用。
【三三】闍は Jāti (生)の首綴なり。晉に生印とす。
【三四】曇は Dharma(法)の首綴なり。
【三五】奢は Śamatha の首綴なり。晉譯に寂印とす。
【三六】Kha(佉)は一切諸法如虛空聲の義ありとせらる。
【三七】迦の言、考へ得ず。
【三八】婆はこの場合、Paramārtha(眞實)より釋せるならん。
【三九】摩は Mārga(道)の首綴なり。
【四〇】伽は Gambhira(深)の首綴なり。
【四一】羼は Kṣānti(忍)の首綴なり。
【四二】呼の言、考へ得ず。

に非ざるを說く。菩薩摩訶薩は、色の是の如くなるを說いて、窮盡すべからず。善男子、是の無盡器陀羅尼は、無量無邊有りて分を說くべからず。此の一分を分ちて以て千分と爲さんに、我れ是の如き千分の中、唯一分を說くも猶ほ盡す能はざるなり。

『無量際陀羅尼とは、[18]際は所謂常見斷見、無量は謂く十二因緣なり。際は所謂無明行識乃至老死など衆苦の聚集なり。又無量とは所謂生・死、又復際とは謂はく始終無きなり。又復際とは謂はく[19]取・捨無きなり、又復際とは出無く滅無きなり。又復際とは汚無く淨無きなり、其の性淨なるが故に。又復際とは所謂可見なり。又復際とは所謂名色なり。又復際とは有爲・無爲なり、又復際とは所謂三世內外の業果、業無く果無き、善及び不善、有漏・無漏の業及び煩惱、我と無我、生死と涅槃となり。善男子、夫れ無量とは所謂微塵、際とは所謂地水火風なり、是を無量際陀羅尼と名く。菩薩は是の陀羅尼に住し已り、無量劫中衆の爲に說法す。而も其の所說の字句・義味窮盡すべからず、是の陀羅尼は是の如き無量の功德を成就す。

『大海陀羅尼とは、善男子、猶ほ大海に四天下中の所有諸色、衆生・卉木・藥樹・穀子、日月・星宿・雲・氣・雷電、國邑・聚落・城郭・殿堂・園池・山河、是の如き一切諸種々の色、悉く中に現ずるが如く、菩薩是の陀羅尼に住し已らば、亦復是の如く、一切衆生の身口意の業、各各是の菩薩の心中の一一の印に現じ、十方世界所有衆生の所有口業、悉く菩薩口中の印に現ず。是の故に菩薩の所有言說は皆悉く眞實なり。[20]印とは無所有に名く。謂はく諸法は覺觀有ること無く、說無く邊無く作無く貪無し、是を第一眞實の義と名く。復遮[21]の印有り、遮の言は眼なり、眼は卽ち無常にして淨むべく見るべし。復那[22]の印有り、那の言は名なり、一切諸法流布の故に眞實と名け名無し。復邏[23]の印有り、邏の言は世なり、一切の世間は愛と無明とに屬す。復陀[24]の印有り、陀の言は十なり、佛十力を具して能く衆生を化す。復波[25]の印有り、波の言は五なり、如來は五欲を遠離除滅して阿耨多羅三藐三

【一八】 晉譯、こゝに十二緣起を列す、而も通途のものと異る。曰はく、何謂二無量進退總持一、於レ彼迴旋、斷二絕計常一、而返二其流一。十二緣起從二無明緣一而自致レ行。從レ行致レ識、從レ識致二名色一、從二名色一致二六入一、從二六入一致レ更、從レ更致レ愛、從レ愛致レ痛、從レ痛致レ受、從レ受致レ有、從レ有致レ生、從レ生致二老病死一云云と。

【一九】 晉譯に亦受亦捨故曰二迴旋一、無受無捨此之謂也といへり。以下是の如き表現を用ひ、本經と出沒あり。參照すべし。

【二〇】 晉譯に無印とせるもの、之に當るが如し。以下の諸印同譯と出沒あるのみならず、此等字門の解釋を異にするものあり。

【二一】 遮は Caksu(眼) の首部を寫せるなり。

【二二】 那は Nāma(名 の首綴なり。晉譯に號印とす。

【二三】 邏は Loka(世)のそれなり。同に樂とするものか。

【二四】 陀は Daśa(十) の首部なり。晉譯に十印とす。

【二五】 波は Pañca(五)の首部なり、晉譯に被恐印といふ。

するが故に、能く眼を淨めて[一五]三明を得るが故に、能く耳を淨め[一六]天耳を獲得して佛聲を聞くが故に、能く鼻を淨めて悉く諸佛の淨戒の香を嗅ぐが故に、能く口を淨め甘露味に於て貪著せざるが故に、能く身を淨めて[一七]化身を得るが故に、能く意を淨めて善く思惟するが故に、能く色を淨めて三十二相あるが故に、能く聲を淨めて妙法を說くが故に、能く香を淨めて戒・聞・施等淸淨なるを得るが故に、能く味を淨めて無上味を得るが故に、能く觸を淨めて無上の諸三昧を修集するが故に、能く法を淨めて諸法界を觀じて無分別なるが故に、能く念を淨めて所聞の法の如くにして忘失せざるが故に、能く意を淨めて永く諸の魔黨に繫屬せざるが故に、能く行を淨めて甚深の諸法界を觀察するが故に。善男子、菩薩是の陀羅尼に住し已れば、說の音聲所至の處に隨ひ、身の光明も亦是の如く照らさん。善男子、是の陀羅尼は是の如き無量の功德を成就す。

『無盡器陀羅尼とは、菩薩是の陀羅尼に住し已らば、色の無常なるを說くこと、窮盡すべからず。色は是れ苦なるを說くこと、亦盡すべからず。色の無我を說き、色の沫の如く、幻・水月・夢・響・影・焰のごとくなるを說くこと、亦盡すべからず、色の無性なるを說くこと亦盡すべからず。色の無相・空・不可說にして、願求すべからず造作すべからず、生ぜず滅せず、是れ過去未來現在に非ず、內に非ず外に非ず淨に非ず穢に非ず、我・我所に非ず、去に非ず來に非ず、對に非ず礙に非ず一に非ず二に非ず、是れ衆生に非ず亦壽命にも非ず亦丈夫に非ず、貪瞋癡に非ず、有に非ず無に非ず、漏に非ず無漏に非ず、有爲に非ず無爲に非ず、盲に非ず聾に非ず跛に非ず躄に非ず、狂に非ず亂に非ず、草木石に非ず樹に非ず、地に非ず水火風に非ず、舍に非ず宅に非ず城に非ず郭に非ず、大村落に非ず山に非ず、圓に非ず方に非ず、四大の造に非ず、作に非ず受に非ず聲に非ず聞に非ず、是れ可說の十二因緣に非ざること窮盡すべからず、常に非ず斷に非ず、業無く果無く陰・入・界に非ず、欲界・色・無色界に住するに非ず、同に非ず異に非ず亦煩惱に非ず、淨に非ず汚に非ず、平に非ず曲

【一五】明、麗本眼に作る。今宋・元・明三本に從ふ。宿命(自他身の宿世の生死の相を知る)、天眼(自他身の未來の生死の相を知る)、漏盡(現在の空相を知り一切の煩惱を斷ずる智)を三明といふ。卽ち六通の中の三なり。

【一六】自在に一切の言語音聲を聞くを得る天耳通。

【一七】機に應じ形を變へて身を現ずるなり。

して忘れざるを得、善く字句及び其の義味を解せん。自ら說法せん時及び佛說を聽くとき、是の二事に於て各妨礙無し。一字中に一切法を說かん。一字とは所謂〔一三〕阿と爲す。阿は諸字の初なり。菩薩摩訶薩は阿字を說く時、卽ち能く一切の諸法を演說す。また阿は之を〔一四〕無と言ふ。無とは諸法根無く諸法生無く、諸法初無く諸法邊無く、諸法盡無く諸法作無く、諸法來無く諸法去無く、諸法住無く諸法性無く、諸法出無く諸法行無く、諸法增無く諸法高無く、諸法滅無く諸法主無く、諸法用無く諸法願無く、諸法戲論無く亦覺觀無く、說無く聽無く、處無く入無く、諸法我無く及び衆生無く、淨無く命無く名無く主無く、士夫有ること無く、內無く外無く常無く相無く※憶無く量無く、爲無く跡無く句無く字無く、礙無く共無く隨他無く隨己無く、執無く放無く取無く捨無く、數無く身無く淨無く穢無く、轉無く變無く受無く聲無く、相無く結無く汚無く狂無く、漏無く有無く覆無く濁無く、對無く色無く受無く想無く行無く識無く、因無く果無く陰入・界無く、因緣無く境界無く、受無く欲無く色無く無色無く、誘導無く黑無く白無く滓無く思惟無く、時無く歸無く淨無く雜無く、燒無く習無く屋無く支無く、動無く住無く堅無く脆無く、可見無く可觸無く、光無く闇無く曲無く罪無く、實無く虛無く癡無く觀無く、※證無く修無く見無く聞無く、覺無く智無く觸無く識無し。善男子、菩薩摩訶薩は是の如き淨聲光明陀羅尼を獲得する時、此の一字に於て一切の法を說く。菩薩は此の一字の中に於て無量の義を說き、錯謬有ること無く、法界を壞せず字義を失せず。菩薩は是の陀羅尼を得已りて身口意淨なり。擧動進止衆生樂見する。是を身の淨と名く。凡そ演說する所衆生樂聞する、是を口の淨と名く、慈悲喜捨の心を修集する、是を意の淨と名く。菩薩是の陀羅尼を得已り、能く二施――財施・法施を淨め、能く戒を淨めて毀戒の者を見るも惡心を生ぜず、能く忍を淨めて衆生を害するを見るも瞋惱を生ぜず、能く精進を淨め、善法を修行して休息有ること無く、能く禪定を淨めて憍慢を壞するが故に、能く智慧を淨めて無明を除くが故に、能く業を淨めて惡因を壞

【一三】A字なり。悉曇十二母韻の首、五十字門の一。此の音が本と爲つて一切の音を生じ、この字が元となつて一切の字を生ずと云はる。

【一四】Aは否定の接頭辭として用ひらるゝによる。

※憶、麗本、億に作る、今三本に依る。

※證、麗本、見に作る、今三本に從ふ。

の威神力を見て、即ち阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。世尊、假使我が身をして恒沙の劫中、地獄の苦を受けしむとも、然る後乃ち無上道を成ぜば、亦終に菩提の心を捨てじ』と。佛の言はく『善哉・善哉、善男子、汝能善く阿耨多羅三藐三菩提心を發したり、汝も亦當に是の如き無量の神通の力を得べし』と。

[八]是の時會中に復菩薩有り [九]師子幢と名く。陀羅尼自在王菩薩に語つて言はく『善男子、菩薩摩訶薩は何等の陀羅尼門をか獲得して、能く一切の佛語をば受持する。凡そ演說する所の字句及び義は窮盡有ること無ければなり』と。陀羅尼自在王菩薩の言はく『善男子、八陀羅尼有り、菩薩摩訶薩若し得る者有らば、則ち能く一切の佛語の、凡そ演說する所の字句及び義の而も窮盡無きを受持せん。何等をか [一〇]八と爲す。一は淨聲光明陀羅尼、二は無盡器陀羅尼、三は無量際陀羅尼、四は大海陀羅尼、五は蓮華陀羅尼、六は入無礙門陀羅尼、七は四無礙智陀羅尼、八は佛莊嚴瓔珞陀羅尼なり、是を名けて八と爲す。若し菩薩有りて是の如き八陀羅尼に安住せば、則ち能く一切の佛語の凡そ演說する所の字句及び義の窮盡無きを受持せん』と。師子幢菩薩の言はく『善い哉大士、唯願はくは廣說せよ。菩薩聞き已りて當に一切の佛法を受持するを得べし』と。

陀羅尼自在王菩薩の言はく『善男子、諦に聽き諦に聽け、當に汝が爲に說くべし。淨聲光明陀羅尼とは、菩薩摩訶薩若し住することを得ば、能く無量無邊の佛所に於て、無量の功德を具足成就し、四大を淨むるを得ん。是の因緣を以て其の聲微妙にして法を宣說する時は其の音、一佛世界・二佛世界・五佛世界・十佛世界・二十佛世界・三十佛世界・四十佛世界・五十佛世界・百佛世界・千佛世界・萬佛世界乃至百　萬萬佛世界——稱るべからず數ふべからざる——に遍滿し、說法する所に隨つて遍く聞くを得ん。其の說法の時、坐する所の法座・師子床は、或は一 [一一]由旬或は須彌の如く、或は [一二]梵處の如き、是の如き處に坐す。設ひ十方無量の諸佛有りて講宣道化せんに、普く之を聞き受持

【八】以下、晉譯は卷第七、八總持品二十三。
【九】晉譯に師子英といふ。
【一〇】この八陀羅尼、晉譯は一名淨光音、二名無盡法藏、三名無量退進、四名海印意、五名蓮華嚴、六名入無礙印、七名分別辯、八名建立佛莊嚴といふ。
【一一】梵に Yojana、輪王一日行軍の里程、或は四十里或は三十里なりといふ（六町一里）。
【一二】梵天なり。

卷の第四

陀羅尼自在王菩薩品　第二之四

[一]爾の時世尊、身を擧げ顧眄して諸の大衆を觀たまふこと、象王の廻るが如くにして、是の言を作したまふ『諸の善男子、誰か能く是の如き供具及び此の寶坊をば守護して、毀壞・滅沒・損滅せざらしめ、以て[二]彌勒の正覺を成ずるを待ち已り、十六年の後彼の佛及び[三]賢劫中の五百の如來を供養する』と。是の時會中に一菩薩の[四]諸法神通自在王と名くる有り、卽ち坐より起ち、䠒跪合掌して此の言を作す『世尊、我能く是の如きの供具及び此の寶坊を守護し、毀壞・滅沒・損減せざらしめ、以て彌勒の正覺を成ぜんを待ち已り、十六年の後、彼の佛及び賢劫中の五百の如來を供養すべし』と。

爾の時衆中に一魔王有り、名けて[五]神通と曰ひ、其の所住の國を四天下と名く。諸法神通自在王菩薩に語りて言はく『善男子、汝今是の如き供具幷に及び寶坊を安置するに、何の器中に置きてか之を守護し、之を毀壞せざらしむるや』。『善男子、凡そ器と言ふは性是れ無常なり、而も我が此の身は常住無變なり。善男子、汝今應當に我が身を諦觀すべし』と。爾の時魔王是の語を聞き已り、敎の如く諦觀して其の身中を見るに、一世界有りて水王光と名け、佛世尊有りて[六]寶優鉢羅と號す。其の世界中に大寶山有り、如來中に處りて[七]結加趺坐し、諸菩薩の與に正法を宣說したまへり。爾の時魔王、是の事を見已り、心に甚だ奇訝し、卽ち諸法神通自在王菩薩を禮し讚じて言はく『善い哉・善い哉、大士、我れ今始めて汝に妙器有り、是の如き供具及び此の寶坊を護持して毀滅せざらしむるに堪ふるを知る』と。

爾の時魔王、卽ち佛に白して言はく、『世尊、我れ往より未だ是の如き菩薩を見ず、未だ是の如き微妙の法を聞かざりし時、聲聞を學んで涅槃に入らんと欲したり。我れ今旣に諸法神通自在王菩薩

【一】晉譯大哀經卷第六、如來道品第二十二の續き。

【二】梵に(Maitreya)、慈氏と譯す。未來佛として尊敬せらる。

【三】世界の成立より消滅し終るまでを四期(四劫といふ)に分ち、現在はその第二住劫なり。この劫中に多數の佛出世したまふべければ賢劫と名く。

【四】晉譯に變動諸法王といふ。

【五】晉譯に所作所立堅處といふ。

【六】晉譯に樂蓮華首といふ。

【七】坐相なり、左の趾を右の股の上に置き右の趾を左の股上に置くなり。

中或は[一四一]周羅の寶、頂の寶、髮・[一四二]手釧の雜寶・瓔珞、日珠・月珠・指環珠・帶寶・珮髮の飾を以て、或は耳環を以て、以て如來に奉る。謂はく、[一四三]青琉璃及び蓮華珠・金翅鳥珠、閻浮寶珠・帝釋寶珠、火珠・光珠・無量光珠、無量色珠・柔軟淨珠、金剛寶珠及び白眞珠などなり。復雜香を以てす、所謂[一四四]末香・金沙和雜の栴檀の香・多伽羅香・沈水・彌佉多摩羅跋香なり。復諸の花を散らしぬ、所謂曼陀羅花・摩訶曼陀羅花、曼珠沙花・摩訶曼殊沙花・拘毘陀羅花・[一四五]波利質多羅花、樂花、[一四六]娑羅花・大娑羅花、百葉花・千葉花、饒葉花・大光花、香葉花・樂香花・樂見花、無量色花・無定色花、[一四七]水生花、[一四八]優波羅花・波頭摩花、拘物頭花・分陀利花、[一四九]陸生花、[一五〇]婆利師花・[一五一]摩梨花、須曼那花・育地花、檀內伽梨花、阿提目多伽花、瞻婆花・阿叔迦花なり。種種の伎樂・種種の幢・幡蓋もて、十方界の諸の來れる菩薩、各虛空の寶坊の上に昇り、放身投下して佛を供養し、投身して散じ已り、其の身を現ぜず、七寶の網を化して遍く其の上を覆ひ、復其の身を現じて珠網の中に在り。爾の時十方一切の諸佛、各各一[一五二]波利の樹を遣し、以て釋迦如來を供養するに。佛力を以ての故に、一一の諸樹、各寶坊に至りて其の處を莊嚴したり。爾の時會中の無量の衆生は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生は無生法忍を得たり。

大方等大集經卷第三

火色寶珠、月光寶珊、若干種色……紫磨栗金、雜碎白銀などとす。

【一四四】晋譯に、本檔雜香、栴檀雜香、黑妙雜香、丹赤眞珠、似人雜香とす。栴檀は梵に(Candana)、多伽羅(Tagara)は、甘松、零凌香など譯す。沈水は沈香なり。多摩羅跋(Tamālapattra)は藿葉香と譯す。彌佉は考へ得ず。

【一四五】梵に(Pariceitra)香遍樹と譯す、忉利天の喜見城にありといふ。

【一四六】梵に(Śāla)、高遠と譯す、高さ百尺餘に達すればなり、淡黃色の花を著く。

【一四七】梵に(Jalaja)、蓮花なり。

【一四八】以下の四は、Utpala、青蓮花。Padma、赤蓮花。Kumuda、黃蓮花。Puṇḍarika、白蓮花なり。

【一四九】梵に(Sthalaja)。

【一五〇】梵に(Vārṣiki)夏生、雨生と譯す。

【一五一】梵に(Mallikā)鬘花と譯す。素馨花の一種なりと。以下順次に、Sumanā(善稱意と譯す)。Yūthikā(玉提伽、素馨花の一種)。Dhānuṣkārī Atimuktaka(善思花と譯す)。Campaka (金色花と譯す)。Aśoka(無憂花と譯す)。

【一五二】波利質多羅の略、前出。

【一三五】『善男子、如來世尊は是の如き三十二の業を具足し、則ち能く無量の衆生を調伏す。善男子、如來世尊は衆生の爲に是の諸業を說くと雖も、而も如來の業は眞實無量にして稱計すべからず。善男子、一切世間の所有衆生は、思惟する能はず、了知する能はず、宣說する能はじ。是の如き業は、悉く能く等しく一切國土の、猶し虛空の如くなるを知る。何を以ての故に。十方の諸佛悉く平等なるが故に。善男子、諸佛の說く所は、衆生及び佛の世界を觀察せると、解脫涅槃の等しくして差別無きとなり。佛は法界皆一味なるを觀じ已りて、【一三六】不可轉の正法の輪を轉ず。善男子、譬へば善く眞寶を識る匠の如し、寶山の中に於て一珠を獲得し、得て以て水に漬け、漬より出し已りて【一三七】酢漿中に置き、酢漿より出し已りて之を豆汁に置き、意猶ほ已まずして復苦酒に置き、苦酒より出し已りて衆藥中に置き、藥より出し已りて【一三八】氀毼を以て磨く、是を眞正の【一三九】青琉璃珠と名く。善男子、如來も亦爾り、衆生界の明淨ならざるを知るが故に、無常・苦及び不淨を說く。生死に貪樂せる心を壞せんが爲に、如來は精進して休息有ること無し。復空と無相・願とを演說せんが爲に、佛の正法を了知せしめんが爲に、如來は精進して猶ほ休息せず。復法を說き、其をして菩提の心を退せざらしめんが爲に、三世の法を知り菩提道を成じたるを、大珍寶・良祐の福田と名く。是の故に當に知るべし、如來の諸業は思惟すべからず、稱量すべからず、宣說すべからず。如來は三十二業を具足し、已身猶ほ虛空の如しと知ると雖も、而も世界に於て其の身を示現し、亦復不可說の法を宣說し、永く一切心の因緣を斷じ、悉く一切衆生の心界を知り、一切菩薩の境界を知るなり。善男子、如來世尊の眞實の業は、終に菩薩の【一四〇】受記を斷絕せじ、是を如來眞實の業と名く』と。

爾の時世尊、是の業を說きたまふに、十方の世界六種に震動し、大光遍く照して無量無邊の香花を雨らし、諸の此の坊に在る人 天の大衆、阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人及び非人など、如來の業を聞きて心大に歡喜し、復種種の香花・伎樂・寶幢・幡蓋、供養の具を以て佛を供養したり。其の

【一三五】晉譯、如來道品第二十二。

【一三六】晉譯には則爲㆓衆生㆒、轉㆓其法輪㆒、令㆑不㆔退㆓轉阿惟越致㆒とあり。

【一三七】晉譯、酢漿、豆汁、苦酒等を說かず、酢漿はすなり。苦とは惡なり。

【一三八】宋等の三本に依る、毛織物なり。

【一三九】Vaiḍūrya は青色なれば青琉璃といふ。晉譯に夜光寶珠となす。

【一四〇】記別（豫言、特に未來に成佛すべきを云へるもの）を受くるなり。

【一四一】譯して小寶といふ。Kṣudra?

【一四二】釧、麗本に玔に作る、今宋等の三本に從ふ。梵に Valaya. 腕環なり。

【一四三】晉譯相當文によれば、馬寶、天帝珠紺大青寶珠、

『復次に善男子、[一三一]如來の智慧は未來世を知る、其の智無礙にして亦障ゆる者無し。云何が智と爲す。未來世に若しは出で若しは滅すると、一切世界の——幾劫にして水災あり・幾劫にして火災あり・幾劫にして風災ある——[一三二]成壞の數と、幾の佛世界に幾の佛か出世すべく、世界の中に、幾の微塵あり、幾の聲聞・緣覺・菩薩か有るべきやを知る。亦彼の佛幾か食し、幾か息し、幾の行・幾の住・幾の坐・幾の臥かありと、幾の人か聲聞の解脱を獲得し、幾の人か緣覺の解脱を獲得し、幾の人か正覺の解脱を獲得し、幾の人か[一三三]慈・悲・喜・捨を修集すべきやを知る。亦復幾所の衆生次第に心生じ次第に心滅すべきを了知す。了了に能く是の如き等の事を知らんと、亦比智に非ず。是を如來の三十一業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく、

『如來は未來世と、一切諸法の出沒とを了知し、佛世界と及び佛ならびに衆の心次第に生滅する等を知り、既に知を得已りて憍慢無し、三十一の如來業と名く』と。

『復次に善男子、[一三四]如來の智慧は現在世を知り、其の智無礙にして亦障ゆる者無し。云何が智と爲す。如來は悉く十方の現在の世界と、諸の佛・聲聞・緣覺・菩薩と、衆數の日月・星宿・草木・微塵と、地・水・火・風と四大海の滴と、衆生の毛髮と種種の形色と、心意の次第に生滅出沒するとを知る。亦地獄畜生餓鬼の現業・果報と、幾の時か世に住し・幾の時にか解脱するとを知る。亦人天の業果の因緣と、幾の時か世に住し・幾の時にか解脱するとを知る。また煩惱界及び諸根界・意界・法界を知る。如來は復種種に知り已ると雖も、高心を生せず、口も亦二種の言を出さず。是を如來の三十二業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく、

『無上如來は思議す叵ず、佛所緣の境を知るもの有ること無し、如來の所知は虛空の如く、量無く稱無く邊界無し。所說の微妙なる第一義は、衆生をして是の業を得しめんが爲なり、總持もて自在に能く佛に問へば、無上世尊は意に隨つて答ふ』と。

【一三一】 如來十八不共法の第十七、知未來無礙、Anāgate adhvany asaṅgaṃ apratihataṃ jñānadarśanaṃ pravartate.

【一三二】 世界の成立より破滅し終るまでには(一)成立(成)と、(二)存續(住)と、(三)破壞(壞)と、(四)消滅(空)との四階段を分ち、第三の破壞の時代の終に、火、水、風の三災相繼いで起るとせらる。

【一三三】 慈(Maitrī)は愛念にして樂を與ふる心。悲(Karuṇā)あはれみて、自ら代つて苦を受け、迷を拔きて解脱を得しむる心。喜(Muditā)は人の離苦得樂を見て慶悦の心を生ずるなり。捨(Upekṣā)は上の三心を捨し、また怨・親の想を捨するをいふ。

【一三四】 如來十八不共法の第十八。知現在無礙、Pratyutpanne adhvany asaṅgaṃ apratihataṃ jñānadarśanaṃ pravartate.

解せしむ。凡そ演說する所、念を作さず、更に衆の心境界を觀ぜず、如來の音聲は響の相の如く、無說無聞なること亦是の如し。大慈大悲は清淨語もて、衆生の爲に種種の法を解す、是の故に如來の業を宣說す、二十八業は先佛の如くなり』と。

『復次に善男子、[127]如來の意業は智慧に隨つて行ず。何を以ての故に。如來は一切衆生の心意識等を了知し、亦意に隨ひ・緣に隨ひ・貪に隨ひ・恚に隨ひ・癡に隨はず、誑惑及び我と我所と無明の闇翳とを遠離し、平等清淨にして邊際有る無きこと、猶ほ虛空の如くなり。是の故に如來所修の意業は智慧に隨つて行ず、是を如來の二十九業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說きて曰はく、

『如來の心は量るべからざること、毫毛を以て須彌を擧げんが如し、常に衆生の心の所緣を觀じ、諸の魔と煩惱界とを遠離す、人中の象王の、善業を說くは、衆生の種種の惡を壞せんが爲なり、衆生の身・口・意を淨めんが爲に、二十九業今已に說けり』と。

『復次に善男子、[128]如來の智慧は過去世を知る、其の智無礙にして亦障ゆる者無し。云何が智と爲す。過去佛の無量無數なる、及び其の世界所有の草木と衆生の數と、其の心所緣の種種の音聲とを知る。亦其の佛幾所の法を說き、幾の衆生有りて聲聞乘・辟支佛乘及び菩薩乘を得たるかを知る。亦彼の佛所有の世界の壽命の[129]脩短、[130]衆數の多少、名字・種種の喘息・飮食と、衆生の根界・意界・法界・心界・行界と、其の心の次第に生滅出沒したるとを知る。如實に了知して其の數量を知ること、比智の知るところに非ず、是を如來の第三十業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說きて曰はく、

『佛智無礙にして障ふる者無し、故に能く悉く無量の土を知り、一切諸佛の事、衆生の諸根及び法界を了知す。人師子王の、過去を知ること掌中の阿摩勒を觀るが如し、無邊の身の、三十業を說くは、衆生をして過去を知らしめんが爲なり』と。

【一二七】如來十八不共法の第十五、一切意業隨智慧行、Sarvamanaskarma jñānapūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti.

【一二八】如來十八不共法の第十六、知過去無礙、Atīte adhvany asaṅgam apratihataṃ jñānadarśanaṃ pravartate.

【一二九】脩は長。

【一三〇】衆生なり。

せず、三世に著せずして心性淨なり。凡そ演說する所解脫たり。諸の衆生に無上道を勸む、二十六業は非業の故に、大慈大悲は衆のうちに處りて說く』と。

『復次に善男子、[一一七]如來の身業は智慧に隨つて行じ、智に圍遶せらる。是の業を以ての故に、衆生聞見するに說法默然たり、行・住・坐・臥、飲食、城邑聚落に出入するに、三十二相・八十種好悉く調伏を得たり。是の故に如來の一切の身業は智慧に隨つて行ず。是を如來の二十七業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說きて曰はく、

『如來は身業もて衆生の爲に、故に種種の妙相好を示す、凡そ擧動する所衆生を調す、大悲もて衆の爲に是の業を說く』と。

『復次に善男子、[一一八]如來の口業は智慧に隨つて行ず、何を以ての故に。說法淨なるが故に、脫失無きが故に。[一一九]眞正語、易解語・易知語、非高語・非下語、非曲語・非麁語、非惡語・非闇語、柔軟語・非輕語、非疾語・非畏語、非不解義語、非惡聲語、非緩語、甘露語・可愛語、次第語・莊嚴語、恭敬語・樂聞語、不貪語・不垢語、淸淨語・畢竟語、不誑語・不癡語、無礙語・廣語、眞實語・不作語、不盡語・安樂語・身寂靜語・心寂靜語、貪寂靜語・瞋寂靜語、癡寂靜語・壞魔語、破邪命語、[一二〇]梵聲・[一二一]迦陵頻伽聲、[一二二]釋聲・[一二三]大海潮音聲、[一二四]拘崙闍聲、秋月孔雀聲、[一二五]拘枳羅聲、[一二六]命命鳥聲、鵝王聲・鹿王聲・琴聲・鼓聲・貝聲、伎樂聲・人樂聞聲・耳根樂聲、增善法語、句義無盡語、合字句義語、時語・略語、知足語、調諸根語、施莊嚴語、淸淨戒語、共忍行語、精進神通語、遠離欲界語、具足智慧語、慈語・悲語、喜語・捨語、說三乘語、不斷三寶語、解三聚語、解三世語、解三解脫語、分別四諦語、修集語・讚歎語、佛語・聖語、無邊語・無行語なり。善男子、如來は是の如き等の語を成就す。是の故に如來所有の口業は智慧に隨つて行ず、是を如來の二十八業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說きて曰はく

『如來の所說は淨珠の如し、無量の諸功德を成就し、其の聲十方の界に遍滿し、一音能く種種に

【一一七】如來十八不共法の第十三、一切身業隨智慧行、Sarvakāyakarma jñānapūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti.

【一一八】如來十八不共法の第十四、一切口業隨智慧行、Sarvavākkarma jñānapūrvaṃgamaṃ jñānānuparivarti

【一一九】以下は佛の音聲と說相との形容なり。晉譯はかくの如く羅列せず。

【一二〇】大梵天所出の音聲にして五種淸淨の音ありといふ。

【一二一】梵に(Kalaviṅka)妙聲と譯す。その聲の妙たる、如來の音聲を除きて他に及ぶものなしと稱せらる。鳥の名。

【一二二】帝釋天の音聲、晉譯に音如哀鸞、聲如天帝と。

【一二三】晉譯によれば、其響哀和、亦如江海と。

【一二四】Krauñca (鶴)の音寫か。

【一二五】梵に(Kokila)、鵾鴣なり。

【一二六】また共命鳥、梵に(Jīvaṃjīvaka)。

を得しめんが爲に、正法を演說す。是を如來の二十四業と名く。』爾の時世尊、即ち頌を說いて曰はく、

『如來は等しく一切の法を觀ず、是の故に常に定心にして亂無し、三界の所攝と爲らず、諸根・四大も亦是の如し。一切の諸法は差別なし、平等に善と不善とを觀察す、如來の所說は是の如き業なり、諸衆生の爲に是の定を得』と。

『復次に善男子、[一四]如來の智慧は常にして減少するなし。是の智力を以て一切法を知り、能く衆生の意趣に隨つて法を說き無礙智を得、一切の義を知り、一切の字を知り、一切の句を知り、無量劫に於て一句法を演べ、無量の義を出して一切の疑を斷じ、三乘の法幷に[一五]八萬四千の法門を說き、亦八萬四千の法聚をも說く、是を無量無邊の智慧と名く。衆生をして是の智を得しめんが爲の故に正法を宣說す。是を如來の二十五業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく、

『佛智は礙無く邊有る無し、能く無礙無邊の法を說き、一字を演べて無量の句と作し、一句を演べて無量の義と作す。八萬四千の法門と、亦爾所の諸法聚とを說く、衆をして無礙智を得しめんが爲に、是の故に是の如き業を宣說す』と。

『復次に善男子、[一六]如來の解脫は減少有ること無し、聲聞の人は他より聞くが故に解脫を得、緣覺の人は因緣に從ふが故に解脫を得。如來は師無く自然に覺悟し、永く煩惱及び習氣を斷じ、過去は斷たず、未來に著せず、現在に住せず、亦眼・色の二法に貪著せず、乃至意法にも亦復是の如くにして、心性の淨を知る。是の故に唱へて「如來は一念に阿耨多羅三藐三菩提を得」と言へり。衆生をして一念に阿耨多羅三藐三菩提を得しめんが爲の故に正法を演說す、是を如來の二十六業と名く』と。

爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく、

『諸の聲聞をば解脫を聞くと爲し、亦緣覺をば因緣によつて悟ると爲す、如來は解脫して有に著

【一四】如來十八不共法の第十一、慧無減、Nāsti prajñāya hāni.

【一五】數の多きを示すに、この數字を用ふること極めて多し。略して八万四千とも云ふ。煩惱に八万四千あるに對して、八万四千の法藏或は法門ありとせらる。能詮の義を法藏とし、之が顯はす義を法門と名く。

【一六】如來十八不共法の第十二、解脫無減、Nāsti vimukter hāni.

『如來の欲は增減無し、大慈大悲の故に說法す、三乘を斷ぜざる無邊の身もて、衆の爲に是の如き業を演說す』と。

『復次に善男子、[一〇九]如來の精進に休息有ること無し。云何が息まざる、所謂衆生を調伏して說法化度す。假使一人有り、能く無量劫のあいだ、佛邊に法を聽くも、如來は當に爲に說いて休息せざるべし。若し一佛有り、無量劫に法を演說せば、如來亦聽いて心に懈廢無けん。若し無量恒沙の世界を過ぎて、一衆生の應に化を受くべき者有らば、如來要ず當に隨逐して捨てず、不食不息にして疲倦悔退の心を生ぜず、常に衆生を勸めて勸めて精進せしむべし。是を如來の第二十二業と名く』と。

爾の時世尊、即ち頌を說いて曰はく、

「精進を具せる人師子王は、大衆の中に於て精進を讚ふ、精進・說法に休息無し、是の故に進業は二十二なり』と。

『復次に善男子、[一一〇]如來の[一一一]念心は增減有ること無し、何を以ての故に。如來初めて阿耨多羅三藐三菩提を得たる時、遍く一切の去・來・現在の衆生の心を觀じ、後に說法の時は先の念を失せず。念は三※聚及び三種の根に本づく。凡そ演說する所、念を作さざる無し。是を如來の二十三業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく、

『如來初めて菩提を得たる時、遍く衆生如實の心を觀じたり。凡そ說法する所念を失はず、二十三業は佛の所說なり』と。

『復次に善男子、[一一二]如來の三昧は一切法に於て平等無減なり、是の故に諸佛は一切平等なり。一億種の貪欲・恚・癡、及び一億種の無貪・恚・癡に於ても、其の心平等にして差別有ること無し。有爲・無爲・生死・涅槃に於ても亦復是の如し。是の如き等の平等三昧を具し、眼・耳・鼻・舌・身・意を[一一三]離れず。四大・三界は此に非ず彼に非ず、亦一切に非ず、增に非ず減に非ざるなり。衆生をして是の三昧

【一〇九】如來十八不共法の第八、精進無減、Nāsti vīryasya-hāni.

【一一〇】如來十八不共法の第九、念無減、Nāsti smṛter hāni.

【一一一】晉譯に意之所念といふ。

※晉譯に入於衆三處諸性、入諸人根、觀衆生行といふ。

【一一二】如來十八不共法の第十、定無減、Nāsti samādher hāni.

【一一三】離、麗本雜に作る。今宋元明三本に從ふ。

不受とを分別するの想、正見・邪見を分別するの想無し。是の故に如來は種種の想無し、衆生の是の如き諸想を壞せんが爲に、是の業を宣說す。是を如來の第十九業と名く』と。爾の時世尊、頌を說きて曰はく、

『如來は永く一切の想を斷ず、是の故に諸法界を了知す。衆生の若干の想を破せんが爲に、如來の十九業を宣說す』と。

『復次に善男子、[103]如來は[104]智に從ひて心を捨て、捨を知らざる無し。何を以ての故に、[105]身を修するが故に、戒を修するが故に、心を修するが故に、慧を修するが故に、癡を斷つが故に。如來は心を捨てて世間を出づ、卽ち是れ聖捨なり、是れ畢竟の捨なり、梵輪を轉ずる捨なり、[106]共大悲の捨なり、衆生を利せんが爲の捨なり、對治を知る捨なり。是の如き等の捨は、增無く減無く高ならず下ならず、煩惱を雜へず、一ならず二ならず、時節を觀じ、礙無く對無く、不住不動不隱不顯にして、眞實不虛なり。如來は是の如き大捨を成就して能く諸衆生の爲に說法す。是を如來の第二十業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說いて曰はく、

『如來は身・戒・心・慧を修し、智慧に從つて捨心を修し、諸衆生に於て愛・恚無く、不動不住にして眞實に捨せり。大慈大悲の無上尊は、是の如き大捨を具足し、無礙の智慧もて衆生を調し、清淨の二十業を演說す』と。

『復次に善男子、[107]如來の欲業は增無く減無し。何等をか[108]欲と名くるとならば、善法を欲するなり。所謂大慈大悲もて說法して人を度し、寂靜に安住して、諸菩薩を勸めて菩提道を學し、三乘の種を相繼いで絕えざらしむるなり。是の如きの諸欲は、欲に隨つて出でずして智に隨つて生ず、一切衆生をして阿耨多羅三藐三菩提を具足せしめんと欲するが故に正法を演說す。是を如來の第二十一業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說きて曰はく、

【一〇三】如來十八不共法の第六、無不知捨心、Nāsty apratisaṃkhyāyopekṣā.

【一〇四】晉譯に無レ有二猶豫一所二觀察一者悉見二根源一不二復思惟一とあり。

【一〇五】晉譯に身行謹勅、心懷二柔軟一、戒禁鮮明、智慧殊絕云云とあり。

【一〇六】不共に對す。佛の具せる功德の中、他の聖者等と共通するものをいふ。

【一〇七】如來十八不共法の第八、欲無減、Nāsti candasyahāni.

【一〇八】晉譯に貪とす。

愁憂を生ぜず。凡そ造す所の善事成らざる無く、終に不善の業を造作せず。如來は實に世間の諍事無く、亦常に無諍三昧を修集す。如來は我無く我所有ること無し。衆生の是非の諍訟を壞せんが爲に、是の如き業を說くなり。是を如來の第十六業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說いて曰はく、

『如來は無諍定を修集す、是の故に其の心に瞋・喜無し、如來は衆の煩惱を斷ぜんが爲に、是の故に十六業を宣說す』と。

『復次に善男子、[九八]如來の心に忘誤有ること無し、[九九]八解脫に於て念心を失せず、常に一切衆生の意行を觀じ、觀じ已りて復能く宜きに隨つて說法す。四無礙に於ても亦念失無く、三世の中に於て憶念して忘れず、旣に自ら憶念の心を失せず、復衆生の爲に是の念の法を說く、是を如來の第十七業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說きて曰はく、

『如來八解脫を修集す、故に諸法に於て念を失せず、衆生の心を知り意に隨つて說く、念を得しめんが爲に是の業を說くなり』と。

『復次に善男子、[一〇〇]如來は眞實にして不定の心無し、若しは行き・若しは住し・若しは坐し・若しは臥し、若しは語り・若しは默するも、常に諸法深妙の義を知る。一切世間の若しは定に入る有り、若しは定に入らざるもの、悉く能く如來の心を知るもの無きなり。唯諸佛より其の道力を借らんをば除く。一切無量の衆生をして常に定に在らしめんと欲するが故に、是の如き業を說く、是を如來の第十八業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說きて曰はく

『如來正覺は常に定に在り、作す所の諸事に散亂無し、常に三昧に入りて知る者無し、是の故に十八業を宣說す』と。

[一〇一]『復次に善男子、[一〇二]如來は眞實に種種の想無し、所謂福田・非福田を分別するの想無く、亦諸衆生を分別するの想、及び法想・正覺の想・法界の想、持戒及び毀戒を分別するの想無く、亦怨想・親想・受と

【九八】如來十八不共法の第三、意無失。Nāsti musitasmṛti-tā.

【九九】內有色想觀外色解（外の色想を觀じて、內身の色想の貪を除く）、內無色想觀外色解脫（內身に色想なく貪を除きたれども尙之を堅牢ならしめん爲に、外の不淨の色を觀じて貪を起さざらしむること）淨解脫身作證具足住（淨色を觀じて貪を起さざらしむるを淨解脫といひ、この淨解脫を身中に證得して定に住するを身作證具足住といふ）、空無邊處解脫、識無邊處解脫、無所有處解脫、非想非々想處解脫（以上の四は、各その下地の貪を棄捨するが故に解脫と名く）、滅受想定解脫身作證具足住（滅盡定のこと、滅盡定は受想等の心を厭ひて永く無心に住せしむるが故に解脫と名く）。

【一〇〇】如來十八不共法の第四、無不定心、Nāsty asamāhita-citta.

【一〇一】晉譯、卷第六、十八不共品第二十一の餘。

【一〇二】如來十八不共法の第五、無異想、Nāsti nānātvasam-jñā. この段も亦晉譯や〻異る、就て見るべし。

『如來は寂靜の法を了知す、親近する者有らば解脫を得、如來は師無く敎ふる者無くして、自然に甘露味を得たり。三十七助法を修する有らば、煩惱の結滅して解脫を得ん、思惟して善く眞實の法を知らば、法性に著せずして眞に解脫す。如來は法を見ること虛空の如く、猶し幻化・熱時の炎の如し、十力を具足せる無邊の身は、衆の爲の故に十四業を說く』と。

〔九三〕『復次に善男子、〔九四〕如來の身業は過失有ること無し、若しは愚なる、若しは智あるもの、能く佛に過失有るを宣說する無し。何を以ての故に。如來は若しは行き・若しは坐し・若しは住し、著衣持鉢して若は飮食を受け、若しは見・若しは聞き・若しは所說有り、城邑・村落・舍宅に入出するに、足地を蹈まず、常に千葉蓮花の上を行く。若し衆生有りて佛影に遇觸せば、七日安樂にして飮食の想無く、是の身を捨て已りて善有に生る。如來の衣服身を離るる四寸、暴猛の風力も、動かす能はざる所たり。如來是の如き等の事有りと雖も、其の內心未だ嘗て不定ならず、是の故に如來の身には過失無し。善男子、如來の口業も亦過失無し。何を以ての故に。〔九五〕時語・眞語・實語・正語・期語・義語・不多語・如持而語・淨語・解一切語・微妙語・無異語・一音語をなす。是の故に如來は口の過失無し。如來の意業も亦過失無し。何を以ての故に。如來は常に一切の佛事を作し、而も其の內心、初より憍慢無し、知慮を役せずして法を知り盡す。是を如來の無罣礙智と名く。是の故に如來の意は過失無し。衆生の是の如き過失を壞せんが爲の故に法を宣說す。是を如來の第十五業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說いて曰はく、

『如來の身口意は寂靜なり、是の故に能く過有りと說くもの無し、實には不可說なるを、流布の爲に、是の業・非業を說いて業となす』と。

〔九六〕『復次に善男子、〔九七〕如來は天・人・魔・梵・沙門・婆羅門と諍訟を生ぜず。何を以ての故に、愛と恚とを離るるが故なり。一切の世間供養恭敬するも、心に高を生ぜず、歡喜せず、一切世間の毀呰輕慢も

【九三】晉譯、十八不共法品第二十一の一。以下に如來の十八不共法を說く。佛のみに有したまふ特色にして他と共通ならざるが故に不共といふ。本經卷第六の十八不共法の文を參照せよ。この十八は大乘の所說にして、小乘のそれは異る、智度論二十六に三種の不共法を說く。

【九四】佛十八不共法の第一、身無失　Nāsti tathāgatasya skhalita.

【九五】以下晉譯は、如來至眞所言以レ時、演辭至誠、如實無虛、應レ儀合レ法順ニ如律教一、所言平等言行相應、語無ニ違失一、靡レ不レ應レ時、口所說者、皆悅ニ一切衆生之心一、無レ有ニ復重一、議理美要、成ニ就莊嚴一、口演ニ一音一、悉應ニ衆生志性所念一、各得ニ聞知一析然解達とす。

【九六】晉譯この段やゝ異る、就て見るべし。

【九七】如來十八不共法の第二、口無失、Nāsti ravitam.

り惡を以て己が身に加ふる、亦復是の如くなり、是を名けて九と爲す。復十法有り、所謂十惡なり――一に殺生、二に偸盜、三に婬泆、四に妄語、五に兩舌、六に惡口、[84]七に無義語、八に貪嫉、九に瞋害、十に邪見なり。若し比丘有りて惡思惟を起し、是の因緣を以て多く諸過咎を爲す有るを知らず、知らざるを以ての故に顚倒心を生じ、顚倒の因緣は五蓋を增長し、五蓋增すが故に諸煩惱をして善法を遮障せしめ、煩惱の因緣と身口意の業もて諸惡を造作す。如來は實の如く是の如き法能く道を遮するを知り、既に自ら知り已りて衆の爲に演說するは、是の如き道を遮障する法を壞せんが爲なり。是を如來第十三の業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說いて曰はく、

『若し放逸を修集する有らば、眞實に解脫を得る能はず、身口意等の諸惡業と、無慚無愧の諸煩惱と、惡法に親近するとは能く道を遮す。善く對治と不對治とを覺し、煩惱を壞せんが爲の故に演說するは、大慈大悲の十三業なり』と。

『復次に善男子、[85]如來は實に聖道を說いて畢竟す。若し衆生有りて正念に親近すれば必ず解脫を得。我れ都て人・天・魔・梵・沙門・婆羅門の、眞實に記して道を修する者は畢竟無上解脫を得ずと言ふを見ず。云何が名けて眞實の聖道と爲す。一種有り、所謂一乘なり。復[86]二種有り、謂はく舍摩他・毘婆舍那なり。復三種有り、謂はく空三昧と無相と無願となり。復四種有り、謂く[87]四念處なり。復五種有り、謂はく信等の[88]五根なり。復六種有り、謂はく六念處なり。復七種有り、謂はく[89]七覺分なり。復八種有り、謂はく[90]八正道なり。復[91]九種有り、所謂初禪乃至滅定なり。復十種有り、所謂[92]十善なり、是を畢竟眞實の聖道と名く。又畢竟道は能く增減取捨を作す有ること無く、執無く放無し、正に非ず邪に非ず、一に非ず二に非ず。是を眞實畢竟の道と名く。如來世尊は一切を憐愍し、諸の衆生の爲に是の如き道を說く。是を如來の第十四の業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說いて曰はく、

【八四】 次の三を晉譯に綺語・無明・鬪諍とす。

【八五】 如來四無畏の第四。說盡苦道無畏を述ぶ。

【八六】 晉譯に寂然・所願と譯す。

【八七】 また四意止。晉譯に一身意・二日痛痒意・三日思想意・四日法意。

【八八】 晉譯は信・精進・意・定・智の五根をあぐ。

【八九】 晉譯は意・法・精進・歡悅・信・定・護の七覺意を擧ぐ。

【九〇】 晉譯に正見・正念・正言・正業・正語・正便・正意・正定の八をあぐ。

【九一】 四禪、四無色定と滅盡定となり。晉譯に第一禪乃至第四禪、虛空慧正受・以慧正受・有想無想而爲正受・不用慧正受・滅於一切諸痛思想正受を擧ぐ。

【九二】 晉譯に殺生・盜竊・貪婬・妄言・兩舌・惡口・詈罵・綺語・瞋恚・邪見無き十善を擧ぐ。

て人・天・魔・梵・沙門・婆羅門の、眞實に佛の漏未だ盡きずと言ふを見ず」と。云何が名けて如來の漏盡くとは爲す。佛は[七三]欲漏に於て心解脱を得たり。[七四]有漏・[七五]無明漏・一切習氣・一切見漏に於て心解脱を得たり。是の故に如來を名けて漏盡と爲す。第一義中の聖人の、*眞智は、覺無く斷無く證無く修無きも、流布の爲の故に說いて漏盡と言ふ。何を以ての故に、盡くれば卽ち是れ生無く滅無し、盡くる無くんば宣說すべからず、不可說の故に之を無爲と名く。夫れ無爲は出と滅と住と無し、佛は若し世に出づるも世に出でざるも法性は常住なり。如來は我及び我の斷を覺せず、如來は大慈大悲に住し、衆生の爲の故に我の斷を宣說す、是を如來の第十二の業と名く』と。爾時世尊、卽ち頌を說いて曰はく、

『如來は永く諸漏の結、及び無邊の諸習氣を斷ず、是の故に世も汚す能はず、花の水に處して泥著かざるが如し。大悲は人中の師子王、衆生の爲の故に說いて流布せしむ。眞實に出・滅無きを知る、我・我所無きこと亦復然り。一切の諸法增減無し、其の性・相に隨つて眞實に說く、如來は大自在力を得、衆の爲の故に十二業を說く』と。

『復次に善男子、[七六]如來は眞實に道を遮するの法を說く、我れ都て人・天・魔・梵・沙門・婆羅門の、說いて是の法は遮する能はずと言ふを見ず。云何が遮し、云何が遮せざる。一法有り能く道を遮す、所謂[七七]放逸なり。復二法有り、所謂[七八]無慚無愧なり。復三法有り、謂はく身・口・意の惡なり。復四法有り、所謂[七九]欲・瞋・[八〇]怖・癡なり。復五法有り、所謂殺生・偸盜・婬泆・妄語・飮酒なり。復六法有り、所謂佛と法と僧と戒と三昧と不放逸とを敬せざるなり。復[八一]七法有り、——一に慢、二に大慢、三に慢々、四に邪慢、五に邪語、六に邪命、七に邪念なり。復八法有り——一に邪見、二に邪思惟、三に邪語、四に邪業、五に邪命、六に邪方便、七に邪念、[八二]八に邪定なり。復[八三]九法有り所謂人有りて諸惡を作さんと欲し、現に作し、作し已りて己が親に加ふ。人有り善を以て己が怨に加へ、人有

【七三】欲界の煩惱なり、衆生欲界の見思二惑に因つて諸業を作し、欲界に漏落して出離する能はざれば欲漏と名く。
【七四】色界無色界の煩惱の中、無明を除きたるもの。
【七五】三界一切の無明をいふ。無明能く衆生を生死に漏落せしむるを以て漏と名く。以上の三を三漏とす。
※智、麗本知とす、今三本に依る。
【七六】如來四無畏の第三、說障道無畏を述ぶ。
【七七】晉譯に心憒亂不レ能ニ專精一とあり。
【七八】無慚は自ら罪を作りながら自身をながめて毫も恥づる心なきをいひ、無愧は他の賢聖をながめて恥づる心なきをいふ。
【七九】晉譯に恚恨。
【八〇】同に觸忌。
【八一】同に自大・甚慢・重慢・是我・邪慢・過諸貢高・無能及我とす。
【八二】以上を八邪といふ、之に反するを八正道とす。
【八三】晉譯によれは、(一)我所敬者を輕蔑すると、(二)我所憎者を敬愛すると、(三)に我を侵すとの三につき、過・現・未に分つが故に九を成ず。

しめ、善思惟を修して淨眼を得、衆生無く士夫無きを知る。大悲もて諸衆生を憐愍し、十力四無畏を具足し、爲に煩惱を斷じて智無礙なり、是の故に第十業を宣說す』と。

〔六九〕『復次に善男子、如來は〔七〇〕四無所畏を具足して如來の業を成ず。如來業とは悉く已に一切諸法を覺知するなり。若しは天若しは人、若しは魔、若しは梵、若しは沙門、若しは婆羅門、如實にして如來は法を覺せず知らずと言はゞ、是の處有ること無し。何を以ての故に、如來世尊は名けて正覺・覺平等法と名く。若しは凡夫法若しは聖人法、若しは聲聞法若しは緣覺法、若しは菩薩法若しは佛法、若しは〔七一〕學法若しは無學法、若しは世法若しは出世法、若しは善法若しは不善法、若しは有漏法若しは無漏法、若しは有爲法若しは無爲法、是の如き等の法を平等に覺知す、故に正覺と名く。平等と言ふは、空平等なるを見る、法眞實の故に。無相平等、諸相を壞するが故に。無願平等、三界に著せざるが故に。不生平等、生の性無きが故に。無行平等、行の性無きが故に。無出平等、出の性無きが故に。無至處平等、至處の性無きが故に。眞實平等、三世の性無きが故に。智解脫平等、無明の性無きが故に。涅槃平等、生死の性無きが故に。是の如きの法皆悉く平等なるを見る。是の故に如來を名けて正覺と爲す。是の如く觀じ已り、大慈悲を以て、諸の衆生の爲に稱揚宣說す。若し世尊に非ずして世尊の想を作し、若し正覺に非ずして正覺の想を作し、若し漏盡に非ずして漏盡の想を作さば、如來四無所畏を具足して、能く是の如き諸惡想等を壞す。是を如來の第十一業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說いて曰はく、

『佛は一切法の平等を知る、是の故に一切智と名くるを得、凡・聖・菩薩及び佛の業、世と出世、
　善惡の業は、空にして相・願無く生・滅無し、一切悉く其の眞實なるを見る、如來悉く平等を見
　るが故に、衆の爲に第十一の業を宣說す』と。

『復次に善男子、〔七二〕如來は眞實に永く諸漏を盡す。是の故に唱へて言はく「我れ諸漏を盡す、我れ都て

【六九】晋譯、四無畏品第二十。

【七〇】佛說法のとき畏怖の相なきを、一切智無所畏(Sarva-dharmābhisaṃbodhivaiśāradya)漏盡無所畏(Sarvāsravakṣayajñānavaiśāradya)說障道無所畏(Antarāyikadharmānanyathātvaniścitavyākaraṇavaiśāradya)說盡苦道無所畏(Sarvasaṃpadadhigamāyanairyāṇikapratipattathātvaiśāradya)の四となす。第十一業より第十四業まで之に當る。本經卷第六の四無畏を參照せよ。

【七一】また有學といふ、無學に對す。無漏の戒定慧、及び擇滅の理を學修する者をいふ。(阿羅漢以外の四向三果の修業者)。之に對して三界の煩惱を斷じ盡して更に學ぶべき無き(阿羅漢果)位を無學とす。

【七二】如來四無畏の第二、漏盡無所畏を述ぶ。

生悉く見る者無し。是を如來第九の業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說いて曰はく、

『無量劫中に善業を修し、是の如き淨天眼を獲得し、能く十方の諸衆生の、善惡の色を具足成するを見たり。上中下の諸衆生を見、亦善惡の有を受くるを見、能く身口意の善業と、業因所得の諸果報とを知る。亦聲聞・辟支佛・菩薩の人の善法の境を知り、十方の佛、魔兵を破り、正法輪を轉じて涅槃に入るを見る。諸聲聞の解脫を得、衆生を教化して滅度を取るを見、辟支佛の、神通を示し以て施主の恩德を報ずるを見る。如來所說の眞實の法、聞き已らば能く生死海を度る、聲聞・緣覺及び菩薩は、佛所見の處を知る能はず。如來は細微塵を覩見し、亦無量無邊界を見る、如來は佛の度すべき所を教化す、是の故に第九業を宣說す』と。

[六六]『復次に善男子、如來世尊は諸漏盡き畢竟解脫して——我が生已に盡き、梵行已に立し、所作已に辦じて更に後有無き——を知る。佛の[六七]漏盡智は清淨微妙なり。清淨と言ふは諸の習氣無きなり。聲聞の智は有邊有量なり、何を以ての故に、習氣有るが故に。辟支佛の智も亦邊量有り、何を以ての故に、大悲無きが故に。佛の漏盡智は無量無邊なり、何を以ての故に、一切の行を知るが故に、一切智を具足成就するが故に、永く一切の諸習氣を斷つが故に。大慈大悲を攝取し、四無所畏を莊嚴し、一切法に於て取相の習無く、一切世間の勝る能はざる所、行住坐臥に諸の過失無くして、猶し虛空の清淨明了にして煙雲を雜へざるが如し。如來は清淨を成就し是の漏盡智を具足し、能く衆生の爲に敷揚宣說し、彼の聞く者をして諸の煩惱を斷たしむ。菩薩聞き已り大莊嚴を發し、爲に煩惱を斷ず、是を如來第十の業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく、

『佛の漏盡智は邊有ること無く、清淨にして煩惱の習を雜へず、聲聞緣覺は[六八]習に結の氣あり、是の故に漏盡智は不淨なり。如來は大慈悲を具足す、是の故に其の智無邊際なり、一切の行を具足成就す、故に衆生の漏の行處を知る。演說すべき所常我無く、衆生をして空無樂なるを知ら

【六六】晉譯、諸漏盡品第十九、此の段は漏盡力(asravakṣaya-jñ)を述ぶ。
【六七】一切の煩惱を斷盡して涅槃を緣ずる智。
【六八】二乘はその修行に於て未だ煩惱を斷ぜざるをいふ。

べし。佛力を以ての故に悉く、往昔所種の無量善根――若しは佛邊に種え、若しは聲聞緣覺の邊に種えたる――を憶念するを得ん。既に憶念し已らば、如來卽ち爲に意に隨つて說法し退轉ぜざらしむ。是を如來第八の業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說いて曰はく、

『如來は無量世の、若しは自、若しは他の善惡業を憶念し、明に無量劫中の事を見ること、猶し掌中の菴羅果を觀るがごとし。種姓・生名は悉く能く知る、色・劫・生滅も亦復是の如し、亦壽命及び住處を知り、善惡の業因亦復然り。衆の無量の次第心を知り、及び心の因・生滅の處を知る、遍く無量劫中の生を知るも、亦無礙智を盡さず。佛智は無量にして稱すべからず、二乘其の境界を知らず、衆生をして過去を念ぜしめむが爲に、意に隨つて第八業を宣說す』と。

〔六三〕『復次に善男子、如來の天眼は清淨微妙にして、諸衆生の生滅墮落――若しは善色を受け若しは惡色を受け、若しは善有に生じ若しは惡有に生ずる――を見、亦能く明了に諸の業因を知り、是の衆生の身口意の惡を以て、聖人を誹謗し邪見を增長し、惡業を以ての故に此の身を捨て已りて卽ち地獄に墮するを知り、是の衆生、身口意の善を以て、聖人を謗らず正見を增長し、是の業緣を以て此の身を捨て已りて卽ち善有に生ずるを知る。如來の天眼は能く十方諸佛世界の、邊際有ること無くして猶ほ虛空の如く、限量有ること無くして猶ほ法界の如くなるを見、悉く衆生の生時・滅時を見、諸世界の成時・壞時を見、亦衆生發菩提心の生時・滅時を知り、一切の佛、始めて正覺を成じ正法輪を轉じ入涅槃の時を見、諸聲聞の、解脫を證得し、解脫を得已りて涅槃を取る時を見、諸緣覺の、〔六四〕神通力を以て諸衆生に信施の恩を報ずるを見る。是の如き等の事、一切の〔六五〕五通あるもの・聲聞・緣覺及び諸菩薩の見る能はざる所なり。如來の天眼は是の如き無量の功德を成就す。天眼を以ての故に、諸衆生の――誰か應に佛の爲に化度せらるべき、誰か復應に聲聞緣覺の爲に化度せらるべき――を觀ず。若し應に佛に從つて得度すべくんば、如來卽ち爲に其の身を示現するも、其の餘の衆

【六三】晉譯、徹視品第十八、この段は知天眼力(Cyutyupapatti-j.)を述ぶ。天眼とは色界天趣の四大(地水火風)にて造られたる清淨の眼根を得て、色界及び欲界の六道の中なる遠近麁細の形色、及び六道衆生の死此生彼を知りて、通達無礙なるものをいふ。

【六四】晉譯に、皆復見二此緣覺之法一、顯二示神足一而爲二衆生一作レ祐とあり。

【六五】五神通は天眼・天耳・他身・宿命・如意の五種の神通をいふ。晉譯によれば、外道異學五通仙人眼所レ不レ覩として、聲聞等と分てり。

一切の聲聞・緣覺・菩薩は悉く知る能はず。如來亦說法の因緣を知る、聲聞三昧說法の因緣を得、緣覺三昧說法の因緣を得、菩薩三昧を得、知り已りて、隨意に爲に演說す。是を如來第七の業と名く』と。爾の時世尊卽ち頌を說いて曰はく、

『如來は生死の因を了知し、亦復解脫の因に通達す、旣に了知し已りて爲に說法し　生死不善の因を破壞す。不善の思惟は無明の因なり、無所の因緣は生死を長ぜしめ、煩惱の因緣は業果を受けしめ、諸見の因緣は愛の結を增す。爲し善知識に親近するを得、至心に無上の法を聽受し、內外の空三昧を觀察せば、卽ち能く生死海を越度せん。無上の定と智慧とを修集し、法の平等と去來無きとを觀じ、若し能く生滅無きを觀見せば、卽ち了了寂靜の眼を得ん。無上の三脫門を修集し、盡智無生智を具足し、旣に自ら無礙智を獲得せば、復能く諸の衆生の爲に說かん。初禪に入りて滅定に出で、滅定に入りて隨意に出づ、如來の三昧は次第無し、是の故に名けて常在定と爲す。如來所入の種種の定は、諸の法界と差別無し、二乘は佛の住處を知らず、菩薩は甚深定を知らず。衆生常に無明の闇を行き、如來入出の處を知らず、無上世尊は衆生を憐む、是の故に第七業を宣說す』と。

[五九]『復次に善男子、[六〇]如來は善く自身の所有過去世の業を知ること、若は一生・二生より無量の生に至り、一災二災より無量の災に至り、一劫二劫より無量の劫に至り、生・名・種・姓・飲食と色貌・形質・苦樂・壽命を憶念し、他[六一]有に滅して他有に生じたるを念ず。自身の如く他も亦是の如し。亦衆生の所有業因と是の諸の衆生、是の業因を造つて他有の身を得、[六二]是の諸の衆生、是の業因を造つて此有の身を得たることを知る。衆生の心及び因緣と、是の心滅し已りて次第に心を生ずるとを知る。是の如き等の事、恒沙の衆生も知る能はざる所なり。佛は宿命智を以て悉く三世の始終有ること無きを知る。是の如きの智慧稱量すべからず。諸の衆生に勸む、汝今當に過去世中更ふる所の善惡を念ず

想非非想處　に屬する禪定なり。

【五八】八種の解脫觀。此の觀によつて無漏の智慧を[illegible]し、三界の惑を斷じ[illegible]をさとるが故に解脫といふ。舊に八背捨といふ。

【五九】晉譯、卷第五、知衆生本行品第十七。

【六〇】知宿命力（Pūrvanivāsānusmṛti-j.）を述ぶ。衆生の宿命を知り、無漏の涅槃を知る知力をいふ。

【六一】有は生死の相續すること。此有他有とは三有を意味するなり。晉譯に於某處沒、復生於某處云云と。

【六二】麗本この一句を先の苦樂壽命の句の次に置くも、今三本に從つて、こゝに挿入す。

と爲す。識に因るが故に則ち名色を生ず、是の故に識を則ち因と爲し名色を緣と爲す。名色に因るが故に則ち六入を生ず、是の故に名色を因と爲し六入を緣と爲す。六入に因るが故に則ち[五〇]觸を生ず、是の故に六入を因と爲し觸は則ち緣と爲す。觸に因つて[五一]受を生ず、是の故に觸は則ち因と爲し受は則ち緣と爲す。受に因りて愛を生ず、是の故に受は則ち因と爲し愛は則ち緣と爲す。愛に因つて[五二]取を生ず、是の故に愛は則ち因と爲し、取は則ち緣と爲す。取に因つて有を生ず、是の故に取は則ち因と爲し、有は則ち緣と爲す。有に因つて生を生ず、是の故に有は則ち因と爲し生は則ち緣と爲す。生に因つて則ち老死等の苦有り、是の故に生は則ち因と爲し老死は緣と爲す。煩惱を因と爲し諸業を緣と爲す。諸見を因と爲し、愛結を緣と爲す。煩惱を因と爲し五蓋を緣と爲す。是を名けて因と爲し、是を名けて緣と爲す。而も諸の衆生は是の因緣を以て生死に貪樂す。

『何の因緣の故に涅槃に貪樂すとならば、二因二緣有り、諸衆生をして涅槃を樂はしむ、一には法を聽くを樂喜し、二には正思惟を樂む。復[五三]二種有り、一に舍摩他、二に毘婆舍那。復二種有り、一に不去智、二に不來智。復二種有り、一に生死を觀じ、二に涅槃を觀ず。復二種有り、一に如法に持し、二に得證ず。復二種有り、一に解脫の門を修し、二に解脫の果を得るなり。復二種有り、一に[五四]盡智、二に無生智。復二種有り、[五五]一に諦智、二に十二因緣を觀ずるなり。是を名けて因と爲し、是を名けて緣と爲す。而も諸の衆生、是の因緣を以て涅槃を樂む。如來は悉く是の如き等の禪・三昧・解脫を知り、既に了知し已りて、欲・惡・不善の法を捨離し、有觀・有覺・[五六]離生喜樂して初禪に入り、初禪に入りて[五七]滅定に出で、滅定に入りて初禪に出で、乃至[五八]八解脫も亦復是の如し。一切衆生は悉く如來世尊出入の處を知る能はず。如來悉く定に住すること平等なるを知る。及び上下の衆生は、佛一の三昧に入ると謂ふも、而も佛は實に一切の三昧に入るなり。衆生は佛一切定より起つと見るも、而も佛は實に一定三昧に入るなり。如來の三昧は次第有ること無く、然も不定に非ず、

【五〇】 晉譯に所更とす。

【五一】 晉譯に痛とす。

【五二】 晉譯に受とす。

【五三】 梵に(Samatha)(Vipaśyana) 止・觀と譯す。止は禪定及び戒を、觀は智慧を內容とす。止は攝心歸住して邪念を遮し、觀は正智を開發して諸法を觀照す。晉譯はこの二種を一曰而一ニ其心一專志學問、心不憒亂二曰曉三了方便寂然之議一觀ニ察其源一。

【五四】 無學果に至つて起る無漏智、有頂の第九品の修惑を斷じて、我已に苦を知り・集を斷じ・滅を證り・道を修せりと知る智慧を盡智。更に進んで、我已に苦を知る、復知るべからず、已に集を斷ず、復斷ずべからず、已に滅を證る、復證るべからず、已に道を修せり、復修すべからずと知るの智慧を無生智とす。晉譯に、一曰至ニ滅盡慧一而無ニ所著一、二曰無ニ所生慧一常無ニ所倚一とあり。

【五五】 晉譯に則以ニ至誠一而致ニ道一、二曰常以ニ審實一獲ニ於成就一、とあり。

【五六】 色界初禪天のことをまた離生喜樂地ともいふ。欲界の惡を離れて喜樂の二受を生ずればなり。

【五七】 一切の心想滅盡して寂靜となる定、無色界第四天（非

三種あり、一は無明の因緣、二は[四五]我見の因緣、三は疑網の因緣なり。復次に[四六]如來は諸衆生の苦遲得通すると苦速得通するとを知る。苦の遲なる者、能く樂の速を得るを知り、樂の速なる者、能く苦の遲を得るを知り、樂の遲なる者、能く樂の速を得るを知る。修力有るを知り、知力有るを知る。又道有り、修力を具足して智力を具せず、智力を具して修力を具せざる有り、修力及び智力を具する有り、修力を具せず智力を具せざる有るを知る。又道有りて、能く淨心を作すも莊嚴する能はざる有り、能く莊嚴するも淨心なる能はざる有り、淨心を作して能く莊嚴を具する有り、淨心を具せず莊嚴を具せざる有るを知る。又道有りて、能く其の身を淨むるも口・意を淨めざる有り、口・意を淨むるも其の身を淨めざる有り、身・口・意の淨なる有り、身・口・意の不淨なる有るを知る。是を如來第六の業と名く』と。爾の時世尊、卽ち頌を說いて曰はく

『如來善く所至の處を知り、亦衆生の諸因緣を知り、亦能く定と不定とを了知し、通達して明に調と不調とを曉り、邪定の爲に法を演說せず、亦下根の者を調伏せず。貪・瞋・癡の三種の說を知り、亦諸結輕重の相を知り、四の道に於て轉と不轉とを知る、是の故に佛は道の畢竟を知る。修力智力を眞實に知り、下・中・上力も亦是の如し。身・口・意の淨と不淨とを知り、心及び莊嚴も亦復然り、衆生諸根と煩惱界とは、如來知り已つて爲に破壞す、彼の無明・闇の衆生の爲に、如來第六の業を宣說す』と。

[四七]『復次に善男子、如來は[四八]禪・解脫・三昧・煩惱解脫を知る。云何が知る、諸の衆生因緣を以ての故に生死に貪樂し、因緣を以ての故に涅槃に貪樂するを知る。[四九]云何が因と名け、云何が緣と名くる。若し諸の衆生不善を思惟すれば、是を生死の因緣と名く、不善の思惟に因るが故に無明を生長す、是の故に不善を因と爲し無明を緣と爲す。無明に因るが故に則ち行を生ず、是の故に無明を因と爲し、諸の行を緣と爲す。諸の行に因るが故に則ち識を生ず、是の故に行を則ち因と爲し、識を則ち緣

【四五】晉譯にこの二を或有レ貪レ見レ身故、或有三沈二吟之一故とあり。

【四六】同譯に如來知下則以二苦行一了本神通上。諸根明者、因下從二苦行一加二痛致二神通一、愞劣根者、以二安隱行一速成二神通一、根利涌者、以二勤苦行一成二神通一定、懦劣根者、亦因レ加レ痛而致二神通一とあり。是に依れば、後の四句は四通行を云へるものなるべし。卽ち(一)無色定と未至と中間定とに依る無漏道を苦通行と名けその中、利根の者を苦遲通行、鈍根の者を苦速通行といひ、(二)色界四根本定による無漏道を樂通行と名け、その中、利根の者を樂速通行、鈍根の者を樂遲通行といふ。偈文中に四道とあるは是なり。

【四七】晉譯、一心定意品第十六。知一切諸禪三昧力 Sarvadhyāna vimokṣasamādhisamāpattisaṃkleśavyavadānavyutthāna-j. を述ぶ、諸の禪定、八解脫三三昧を知る智力をいふ。

【四八】晉譯に知二其一心脫門定意正受之業一云云とあり。

【四九】晉譯に何謂二緣報一、何謂二事業一とす。

有熟の根を知る。生死の根を知り、解脱の根を知り、莊嚴の根を知り、具足の根を知る。一切の根性・因緣・果報を悉く知り悉く見たり。是を如來第五の業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく。

『如來は根を知りて彼岸に至る、故に衆生の種種の解を知り、亦根の上中下を了知す、幷に及び諸業も亦是の如し。亦煩惱の輕重の相を知り、及び諸根の調し難きと易きとを知り、生死及び解脱を知樂し、眼根より意根に至るまでを了知す。根の行處及び滅處を知り、一切三乘の根に、轉ずべきと轉ずべからざると有るを了知し、衆生の根の熟と不熟とを知る。其の意種に隨つて爲に說法し、善く呵責・歎語もて調すべきを知り、敎誨を受けざる者有るを知りては、則ち其の人に於て捨心を修す。如來善く諸の方便を知り、煩惱を破するが爲に智を莊嚴す、衆生の煩惱を破せんが爲に、如來の第五業を演說す』と。

[四〇]『復次に善男子、如來は[四一]眞實に處に至るの道を知る、云何がして知る、正定聚を知り、邪定聚及び不定聚を知る。因力及び果報力を知る。過去世福德の因緣を知り、現在世莊嚴の因緣と、難調・易調と、略說廣解・廣說略解を知り、是の衆生の能く解脱を得ると解脱を得ざるとを知る。不定は善知識に遇へば正定聚に住し、善友を得ざれば則ち解脱無きを知る。如來知り已り、其の意趣に隨ひて爲に說法す。彼法を聞き已り、繫念思惟して善果を獲得す。如來の出世は惟不定の爲にして、終に彼の邪定の爲に說法せず。何を以ての故に、是れ器に非ざるが故に、眞解脱を獲得する能はざるが故に。是を如來是の人所に於て捨心を修集すと名く。菩薩摩訶薩は、眞實に知り已りて莊嚴を勤修するは、是の如き邪定の衆生を破せんが爲なり。是の故に菩薩は阿耨多羅三藐三菩提心を發す。

『如來は善く貪に三種有るを知る、[四二]一は淨と見るに因るが故に、二は受の因緣の故に、三は[四三]本因緣の故に。[四四]瞋に三種有り、一ば瞋の因緣の故に、二は受の因緣の故に、三は本因緣の故に。癡も亦

【四〇】晉譯、普遊品第十五。
【四一】一切至處道智力 Sarvatragāminipratipat-j. を述ぶ。五戒十善の行は、人間天上に至り、八正道の無漏法は涅槃に至る等の如く、各その行因の至る所を知るなり。
【四二】晉譯に、この三を、世尊或以貪欲人故…。又以貪欲而見繫縛、欲令出家故、…。或以宿命貪悋緣故。而爲興出と云ふ。
【四三】前世の因緣によるをいふ。
【四四】晉譯によれば、或以瞋恚而見繫縛、思想之故、…、或有所願不具足故、…、或有宿世陰蓋所纏故とす。

其の性本來常にして清淨なるに通達す。內外眞實にして所有無く、五陰・諸入・十八界・身・口・意の業及び四大など、是の如き諸法悉く實無し。是の如き等の衆生界、皆悉く虛空の境に同じく、三界の性相眞實無し、諸の煩惱界亦是の如くなるを知る。煩惱の性相堅牢なる無く、無漏の解脫亦復然り、如來は眞實の界を知ると雖も、終に知ると言ひて慢を生ぜず。虛空は無量無邊際なり、一切衆生界亦然り、如來の智慧無邊際にして、[三三]三種有爲の相を遠離す。佛智無上にして甚だ深奧なり、一切衆生知る能はず、如來は衆生を憐愍するが故に、是の如き第四力を宣說す』と。

[三四]『復次に善男子、[三五]如來は善く一切衆生の諸根の利鈍を知る。云何がして知る。上中下を知り、增を知り、減を知る。亦貪欲に一億種有り、瞋恚と愚癡と各一億種あるを知る。貪欲の重きを知り、貪欲の輕きを知る、瞋恚の重きを知り、瞋恚の輕きを知る、愚癡の重きを知り、愚癡の輕きを知る。一種の根能く生死を增すを知り、一種の根能く生死を滅するを知る。善根を了知し不善根を知り、非善・非不善根を知り、解脫の根を知り、[三六]六情の根、男根・女根・命根、苦根・樂根、[三七]憂根・喜根・捨根・信根、進根・念根・定根・慧根、未知・欲知根、知根・知已根を知る。[三八]眼根の因乃至意根の因を知り、[三九]耳根の因と作眼根の緣とを知り、鼻根の因と作舌根の緣とを知り、舌根の因と作身根の緣とを知る。戒莊嚴は能く施を修するを知り、施莊嚴は能く戒を修するを知る。如來悉く誰にか施を說くべき、誰にか戒を說くべきを知る。乃至智慧も亦復是の如し。誰にか爲に四念處乃至八聖道分を說くべき、誰にか爲に聲聞乘・辟支佛乘・無上佛乘を說くべきかを知る。緣覺の根にして聲聞乘を學ぶを知り、正覺の根にして聲聞乘・辟支佛乘を學ぶを知る。下根人にして能く上根を修し、上根の人にして下根を修するを知る。衆生の根未だ調すべからざるを知らば、則ち捨心を生じ、調伏すべくんば爲に正法を說く。如來悉く熟にして不熟の根*、不熟にして熟の根、不熟にして不熟の根、熟にして

【三三】生（法の始めて有るをいふ）、住（生じ已つて相似て相異るをいふ）、滅（後に無なるをいふ）の三なり。

【三四】晉譯、曉衆生根本品第十四

【三五】知根上下力（Indriya-parāpara-j.）を述ぶ。

【三六】また六根ともいふ、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根なり。これに男根以下、知已根に至る十六根を加へて二十二根を數ふ。その中、苦以下の五は所謂五受なり、次の五は信等の五根なり、最後の三は所謂三無漏根なり、倶舍論十二卷參照。

【三七】憂・喜・捨の三根、晉譯には歡根・恐根・觀根とし、信以下の五根を擧げて後、只、無異根・所當知根を置くのみ。

【三八】晉譯に其根所由、眼根因緣、耳根所住とあり。

【三九】晉譯に因二耳之緣一而有二鼻根之所立處一、從二鼻因緣一有二立舌根一とあり。

※根、麗本は相に作る、今宋等の三本に依る。

るを。如來悉く知る、[二六]邪聚の衆生能く正聚と作り、不定の衆生正定に住せんを。如來悉く知る、欲界の衆生、色・無色界の欲解有るを。聲聞の人、緣覺の欲解有り、佛の欲解有るを知る。如來眞實に通達して知るが故に說法を爲す。是を如來第三の業と名く。』と。爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく、

『衆生の欲解に種種有り、其の意若干にして一塗に非ず、如來は眞實に諸欲を知る、故に能く意に隨つて法を演說す。貪欲・瞋恚・愚癡の性は相に隨ひ、而も顚倒無きを知る、下中上品も亦是の如し、善惡業の因果は眞實なり。三聚に通達すれば定有ることなし、一切の三乘も亦復然り、智もて三世は三の攝に非ざるを知り、諸の衆生の爲に三力を說くなり』と。

[二七]『復次に善男子、[二八]如來は悉く無量世界の、若しは善行を修し、若しは惡法を行じ、若しは無礙行を知る。云何が知ると名くる、[二九]內空・外空・內外空の故に。復次に如來は眼を知り・色を知り及び眼識を知る。云何がして知る、虛空の如くなるが故に。復次に如來は欲・色界及び無色界を知る。云何がして知る、[三〇]覺觀の如くなるが故に。復次に如來は行界を知る。云何して知る、行性の如くなるが故に。復次に如來は煩惱界を知る。云何がして知る、客塵の性の故に。復次に如來は[三一]不汚界を知る、云何がして知る、一切諸法の性本淨なるが故に。復次に如來は[三二]生死界を知る、云何がして知る、無明の緣の故に。復次に如來は涅槃界を知る、云何がして知る、實の思惟の故に。復次に如來は世の住界を知り、世の愛界を知り、世の瞋界を知り、世の癡界を知り、世の淨界を知り。世の淨心界を知る。界を知るを以ての故に、能く實のごとく說法す、是を如來第四の業と名く』と。爾の時世尊、即ち頌を說きて曰はく、

『如來は人中の師子王なり、能く眞實に衆生界を知る、如來の智慧は邊有ること無し、是の故に能く世の無邊を知る。善惡行と解脫行とを知り、亦眼・色と眼識の行とを知り、一切無量の法、

【二六】 修道の上よりせる三分(邪定聚・正定聚・不定聚)も究竟のものに非ず、聲・緣・菩の三乘亦然るをいふ。

【二七】 晉譯、號衆種類品第十三。

【二八】 知世間種性力 Nānādhātu-j... を述ぶ。世間の衆生の境界の同じからざるに、普く之を如實に知る力なり。

【二九】 內身に不淨充滿して淸淨の相なく(內空)、外境も汚染にして淸淨の相なく(外空)、この共に淸淨の相なきこと(內外空)。晉譯はこの三空を、次の句(眼を知り云云)の說明としたり。

【三〇】 晉譯は此の二句、やゝ異る。

【三一】 晉譯に瞋恨界といふ。

【三二】 晉譯に行界といふ。

もの無し、是の如き妙法は、宣ぶべきこと難し、邪見を破せんが爲に、憐愍して說くなり』と。

[18]『復次に善男子、[19]如來世尊は、善く去・來・現在の衆生の所有る諸業を知る。業を知りて報を知り、[20]因を知りて處を知る。若し過去の業、是れ不善の因ならば、如來は、是れ未來の世に不善の果を得んことを知る。若し未來の業にして退の因緣有らば、如來は實に是れ退の因なるを了知す。若し未來の業能く法を增長せば、如來は悉く是の因緣を以て能く法を增長せんことを知る。若し現在の業にして若は進・若は退ならば、如來は悉く是の因緣を以て進有り・退有るを知る。若し業を作す有りて、是れ聲聞の因・是れ緣覺の因・是れ菩薩の因・是れ如來の因ならんに、如來悉く是の因緣を以て、是れ聲聞の因・是れ緣覺の因・是れ菩薩の因・是れ如來の因なるを知る。是を如來第二の業と名く。』爾の時世尊、復頌を說きて曰はく、

『如來は無上智を獲得す、是の故に能く業の因果を知る、智もて三世は三の攝に非ざるを知り、能く衆生の三世の業を知る、善く衆生安樂の因を解し、亦能く苦惱の因を了知す。如來は邪に「因果無し」とするを壞す、是の故に第二業を修集し、進退二法の因に通達す、善惡の業果も亦復爾り、如來の知見は障礙無く、掌中の[21]菴羅果を視るが如し。下中上の眞實相を知る、三乘の所因亦復爾り、如來は善く衆生の業を知り、亦善惡の諸業果をも知る、衆生の業果は三世の攝なり、知見謬らざるを正覺と名く』と。

[22]『復次に善男子、[23]如來世尊は諸衆生の[24]種種の欲解を知る。若しは[25]貪欲・若しは瞋恚若しは愚癡なり。現在世の貪は未來世に貪・恚・愚癡を起し、現在世の瞋は未來世に貪・瞋恚・癡を起し、現在世の癡は未來世に貪・瞋恚・癡を起す。如來悉く知る、現在善欲に住するも未來は惡欲なるを、現在は惡欲に住するも未來は善欲なるを。如來悉く知る、現在は下欲に住するも、未來世には下中上分なるを、現在は中欲に住するも未來世には下中上分なるを、現在は上欲に住するも未來世には下中上分な

【一八】晋譯、大哀經卷第四、了三世品第十一。
【一九】第二力、知業報力(Karmavipākajñānabala)を說ぐ。
【二〇】麗本に恩となすも、宋元明三本に因となす。今之に從ふ。
【二一】菴摩羅(Āmra)の略、樹名。その果胡桃の如しと。
【二二】晋譯、了衆生所品第十二。
【二三】第三に、種種解智力Nānādhimukti-j.を述ぶ。
【二四】晋譯に、所好不同志學各異と。
【二五】貪欲(Rāga)、我が情に順應せる境に愛著してむさぼる心。瞋恚(Dvēṣa)己が心に逆ふものに對して怒ること。愚癡(Moha)事に惑ひ理を辨へざること。

見有りて聖道を得んこと、斯れ是の處有り。須陀洹の人、[一三]第八有を得んこと、是の處有ること無く、須陀洹の人卽ち涅槃せんこと、亦是の處無く、阿那含の人[一四]欲有の身を受けんこと、亦是の處無く、阿羅漢の人、後有を受けんこと、是の處有ること無く、賢聖の人、異師に諮承せんこと、是の處有ること無し。不退の忍を得て菩提を退せんこと、是の處有ること無く、菩薩、菩提樹下に坐し、菩提を得ずして起ち去らんこと、是の處有ること無く、如來若し煩惱の習有らんこと、亦是の處無し。諸佛世尊の智に障礙有らんこと、是の處有ること無く、若し能く如來の頂を見る者有らんこと、亦是の處有ること無し。若し衆生有りて能く如來の心境界を知らんこと、是の處有ること無く、如來の心常に定ならざること、亦此の處無し。如來世尊に二語有らんこと、是の處有ること無く、如來世尊に過失有らんこと、亦是の處無し。善男子、是を如來第一の業と名く』と。爾の時世尊、頌を說きて曰はく、

『大地は動轉の相と說くべく、猛風は停住の相と說くべく、虛空は有色の相と說くべきも、佛は處を說いて非處とは爲さず。虛空は[一五]界像を作すと說くべきも、佛は處を說いて非處とは爲さず、如來は處・非處を演說して、上中下分悉く眞實なり。是處・非處を一と說かざるも、是の如きの二處各無二なり。如來亦下中上を說くも、各各三種の相有ること無し。佛は是處・非處を知り已る、故に能く無上の法を宣說す。如來は衆生の心を了知し、善能く細微の相を分別す。沙門・[一六]梵志は闇處を行き、是處・非處の因を知らず、衆生は處・非處を知らず、是の故に解脫を得る能はず。如來悉く處・非處を知る、是の故に稱して無上尊と爲す。若し諸の衆生にして無法の器ならんには、如來是に於て[一七]捨心を修し、大方便を設けて時節を待つ、彼をして眞解脫を得しめんが爲なり。如來世尊は智無上なり、是を則ち名けて第一法と爲す。是の如き淸淨第一の業は、衆生をして調伏を得しめん爲なり。如來是の第一力を說く、甚深難測にして能く知る

【一〇】梵に(Brahmadeva)、色界初禪天の主にして又三界の主なり。
【一一】梵に(Uttarakuru)、また北俱盧州といふ。須彌を中心として四方に四の世界あるうちの一(北方に在り)、その土の人すべて悅樂に醉ふと云はる。
【一二】佛の正法。
【一三】人界の七生と欲天の七生とを合して七有といふ、預流果の聖者は欲界九品の修惑七有を潤生するのみ、第八有を受くることなし。
【一四】欲界。一三、一四は卷二の註一一、一二を參照。
【一五】虛空は無形無色なれども說いて形有り相あるものとなすを得んも、佛は處と非處とを混同せざるをいふ。
【一六】梵に(Brahmacārin)、婆羅門四時期の第二、修學期に在るものなり。
【一七】內心平等にして、執著無きを捨と名く。

卷の第三

陀羅尼自在王菩薩品　第二の三

『[一]善男子、如來は復[二]三十二の業有り、何等か三十二なる。[三]善男子、[四]如來は能く是處と非處とを知る。云何が是處、云何が非處なる。善男子、若し身口意の惡を造作して安樂を受くるを得ること有らば、是の處有ること無し、是を非處と名く。若し身口意の善を造作して樂果を受くる有らば、斯れ是の處有り、是を是處と名く。若し慳貪を習して大富を得なば、是の處有ること無く、惠施を修行して大富を得んこと、斯れ是の處有り。禁戒を毀破して天身を受くるを得ること、是の處有ること無く、淨戒を護持して天身を受くるを得ること、斯れ是の處有り。瞋恨の人、身の[五]端正を得んこと、是の處有ること無く、[六]忍辱を修集して身の端正を得んこと、斯れ是の處有り。懈怠の人大神通を得んこと、是の處有ること無く、精進を勤修して大神通を得んこと、斯れ是の處有り。放心散亂にして定地を得んこと、是の處有ること無く、攝心不亂にして定を得んこと、斯れ是の處有り。愚癡の人、煩惱の氣を斷ぜんこと、是の處有ること無く、修智の人、煩惱の氣を斷ぜんこと、斯れ是の處有り。若し[七]五逆を作して無漏を得んこと、是の處有ること無く、若し五逆無くして無漏を得んこと、斯れ是の處有り。女人の身を以て[八]轉輪王と作らんこと、是の處有ること無く、男子の身を以て轉輪王と作ること、斯れ是の處有り。[九]帝釋・[一〇]梵王・佛も亦是の如し。若し轉輪王の、非法もて國を治せんこと、是の處有ること無く、轉輪聖王の、正法を以て治化せんこと、斯れ是の處有り。[一一]鬱單曰の人、三惡道に墮せんこと、是の處有ること無く、鬱單曰の人、壽終して生天せんこと、斯れ是の處有り。殺生の因緣もて長壽を得んこと、是の處有ること無く、是の因緣を以て壽命の促短ならんこと、斯れ是の處有り。若し邪見有りて[一二]聖道を得んこと、是の處有ること無く、若し正

【一】以下晉譯は處(業)處品第十。

【二】この三十二業とは、佛の十力と四無畏と十八不共法とを數へ擧げたるものなり。卷六參照。

【三】第一業を說く。十力の第一是處非處智力なり。梵に Sthānāsthāna-jñānabala

【四】晉譯には則以二佛無上之慧一、處處如有レ知、非處如有レ知、有限無限、有爲無爲、靡レ不二通達一とす。

【五】端はただしきなり。

【六】苦痛屈辱を忍びて、恨を報ぜざること。

【七】父・母・阿羅漢を殺し、和合僧を破し、佛身より血を出すを五逆罪とす。

【八】梵に(Cakravartti-rāja)、須彌山の四方にある天下を統領する王なりといふ。王位に卽くとき感得する輪寶の種類により、四類の別あり。この輪寶を轉じて一切を威服するが故に轉輪王の名あり。女人は輪王となるを得ざること五障の一として數へらる。

【九】梵に(Śakradevendra)、帝はインドラの譯、釋はシャクラ。梵漢列べ擧げたり。須彌の頂(忉利天)に在りて四天王及び他の三十二天を領する天主なり。

『爾の時、世尊、定力を以ての故に、八萬四千劫のあひだ、此の身を隱密し、衆をして見せしめず。是の劫を過ぎ已るに、[九一]彼の人即ち人中の大長者の家に下生す。[九二]八十年を過ぎて彼の佛即ち三昧より起ちて長者の家に詣るに、其の家の大小悉く見る者無く、唯是の童子のみ獨り之を見るを得たり。爾の時、世尊、彼の人をして[九三]五欲の中に於て、心に厭離を生ぜしめ、而も爲に說法す。彼の人聞き已り、即ち不退の阿耨多羅三藐三菩提心を得たり。如來知り已りて即ち授記を爲す。「善男子、汝來世に於て七萬二千阿僧祇百千劫を過ぎて、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べし、號して寶上と曰はん」と。是の如きの音聲は餘の聞く者無し、唯一萬二千の諸天同じく之を聞くを得、聞き已りて悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、倶に是の言を作す、「願はくは彼の寶上の成佛せん時、我等當に是の佛の法中に於て、正法を諮受して弟子と爲らん」と。爾の時如來是の事を知り已り、復授記を與へて「寶上如來作佛を成ぜん時、汝等當に受法の弟子と作るべし、彼の佛亦當に汝に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし」と。時に栴檀窟佛、彼に記を授け已り、乃ち畢竟して涅槃に入りぬ。一切の諸天大に供養を設けたり。

『善男子、如來は是の如き大悲を具足す、聲聞緣覺の知る所に非ず。善男子、爾の時彼の佛、佛種を斷ぜざりき。若し衆生有りて三寶を供養せんに、また是の如くなり』と。

佛是の如き大悲の功德を說きたまふ時、此の會の衆中に三恒河沙等の衆生有りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、半會の大衆は[九四]忍を成ずるを得、半中の半は是の如き十六大悲を具するを得、其の餘半の半は[九五]佛の法忍を得たり。爾の時一切の諸天世人、法を聞きて歡喜し、同聲に讚歎すらく『善い哉、善い哉、甚奇甚特なり、快く是の如き大悲の法門を說きたまへることや』と。

大方等大集經卷第二

【九一】前節に云へる、非想非非想處に在りし一人の未調者なり。

【九二】晉譯によれば、年適八歲とあり。十の字恐らくは衍。

【九三】財・色・飮食・名・睡眠の五欲。

【九四】晉譯に逮二柔順法忍一とす。

【九五】晉譯に法忍名二阿惟顏一とす。

記を授く。聲聞の悲心は慈の因緣の爲なり、菩薩の大悲は調衆生の爲なり、如來の大悲は畢竟じて度せん爲なり。聲聞の悲心は麁苦に因つて生じ、菩薩の大悲は離苦に因つて生じ、如來の大悲は一切の因緣を斷ずるに因つて而も生ず。善男子、如來は是の如き大悲を修集したり。若し一人の爲に住して一劫百劫千劫萬劫を經、無量劫に至るも、終に畢竟じて涅槃に入らず。善男子、如來の大悲は是の如き無量の功德を成就したり。

[八五]『善男子、乃往過去無量無邊阿僧祇劫に、時に世に佛有り栴檀窟と號す。界をば[八六]大香柄と名け、劫を上香と名く。爾の時世尊、三百三十二萬劫中に於て、常に正法を以て諸聲聞を敎へたり。時に佛身上の一一の毛孔より出す所の香氣は、三千大千世界に遍滿せり。爾の時此の界には臭穢の名有ること無く、所有草木山河の屬悉く栴檀香あり、衆生の身香また是の如く、一切身口意の惡有ること無かりき。諸の佛弟子此の香を聞き已りて卽ち四禪を得たり。爾の時乃ち一萬の諸佛有り、次第に興世し、皆同一號にて、栴檀窟と號したり。是の故に彼の劫を名けて上香と曰ふ。

『爾の時[八七]如來佛事を作し已りて涅槃に入らんと欲し、諸衆生を觀て、誰か未調の者あらば、我當に之を調すべしと。爾の時如來淨[八八]天眼を以て、一人有りて[八九]非有想非無想處に在るを見るに、已に先の佛に於て下上の善根を種え、定んで當に佛に因りて度脫を得べく、聲聞に因つて解脫を得るに非ず、壽八萬四十劫を過ぎ已り、乃ち當に下生し來りて五欲を受くべく、當に大乘經典を聞くを得て、阿耨多羅三藐三菩提心を發して、安住不退なるべきを見たり。

『爾の時世尊、大悲を以ての故に大方便を起し、諸比丘に告げて「我が涅槃の時到る」と。是の言を作し已りて卽便ち[九〇]不悔三昧に入り、諸衆生に示して涅槃を知らしむ。旣に如來の入涅槃を知り已り、諸の大衆をして廣く供養を設けしめぬ。正法世に住すること六十八萬四千歲を滿足せん。爾の時に當り、佛の諸弟子、乃至一人の、正法の所に於て邪法の想を作すもの有ること無し。

【八五】以下晉譯は宣劫品第九。

【八六】晉に香土といふ。

【八七】栴檀窟如來なり。

【八八】禪定(天)に依つて得る眼、明了自在にして能く三千界乃至十方を見るを得。

【八九】無色界の第四天、この地は識處の有想を離れ、無所有處の無想をも離れたるが故に、この名あり、三界中の最上に在るが故に有頂ともいふ。

【九〇】晉譯に無厭定意正受とあり。

す、如來は號して眞の導師と爲す、闇の衆生に無上道を示したまへ。如來は大慈悲有りと雖も、衆生を憐愍したまふこと一子の如し、我れ今法を勸請する、應に爾るべし、願はくは無上の正法輪を轉じたまへ。往にし三佛の轉法輪の如く、唯願はくは如來また爾らんを。畢竟導師は退轉無し、暗の衆生に一の眞道を示したまはんを。雨の潤して諸草木を長ぜしめ、諸の衆生をして熱渇を除かしむるが如く、佛の法雨を衆生に施したまふは、無上無量の果を得しめんが爲なり。如來初生に誓を發して言はく、「我當に彼の苦の衆生を救ふべし」と、衆生は甘露味を渴仰す、願はくば大施主、法雨を施したまはんを」と。』

爾の時世尊、既に請を受け已り、[七六]波羅奈[七七]鹿野林中の仙人住處に往き、正法輪を轉じたまへり。是の如き法輪は、諸天・魔・梵及び餘の[七八]沙門・[七九]婆羅門等の轉ずる能はざる所なり。爾の時世尊、四諦を說きたまへる時、[八〇]憍陳如比丘は[八一]法眼淨を得、其の聲遍く三千大千世界に聞えたり。爾の時世尊、[八二]優陀那を說きて

『甚深の義は說くべからず、第一實義は聲字無し、憍陳比丘は諸法に於て、眞實の知見を獲得す、卽ち是我往にし無量世に、得る所の菩提を、今已に得たり』と。

如來是の正法輪を轉じたまへる時、無量の衆生悉く調伏を得、是の如き大悲神通を示現す。衆生見已りて[八三]阿僧祇の人[八四]阿耨多羅三藐三菩提を發しぬ。

『善男子、如來の是の如き十六大悲は、悉く衆生の爲に之を修起したまへるなり。如來は是の悲の因緣を以ての故に、一一の衆生の爲に、恒河沙劫の大地獄中に於て、諸の苦惱を受けて心悔退せず、而も其の悲心も亦損減無し。是の義を以ての故に、如來の大悲は不可思議なり。善男子、聲聞人の大悲は猶ほ畫ける皮の如く、菩薩の大悲は猶ほ破肉の如く、如來の大悲は骨を破り髓に徹す。聲聞の悲は佛の所知を讃し、菩薩の大悲は他を勸めて行ぜしめ、如來の大悲は人に阿耨多羅三藐三菩提の

【七六】婆羅奈斯(Vārāṇasī)の略、江繞城と譯す、中印度の國名。
【七七】梵に(Mṛgadāva)、佛成道の後、始めて說法したまひし所として有名なり。
【七八】室囉摩拏(Śramaṇa)の略、勤息、止息等と譯す。諸の善法を勤修して諸の惡法を止息するものゝ意、出家して佛道を修するもの。
【七九】梵に(Brāhmaṇa)、印度に於ける四姓の最上に位する僧侶階級なり。
【八〇】梵に(Kauṇḍinya)、晋譯に拘輪(本際と譯す)といふ。佛成道後の最初の弟子の一人なり。
【八一】一切諸法を觀ずる眼。
【八二】梵に(Udāna)、集施と譯す、少言の偈文に多義を含めて暗誦に便ならしめたるもの。
【八三】阿僧祇耶(Asaṃkhyeya)の略、無數と譯す。
【八四】梵に(Anuttarasamyaksaṃbodhi)、無上正遍智と譯す。

淨と曰ひ、法界を分別する無きを名けて寂靜光明無諍と曰ふ。內外淸淨なる、之を名けて淨と爲し、內外の法に於て不取不著なるを名けて寂靜光明無諍と爲す。眞に五陰を知る、之を名けて淨と爲し、眞實に界を知るを名けて寂靜光明と爲し、諸入を遠離するを名けて無諍と爲す。過去の盡を見る、之を名けて淨と爲し、未來の不生を見るを名けて寂靜と爲し、現在の法、法界に住し動轉有ること無きを見るをば光明無諍と名く。淸淨と寂靜と光明と無諍と、是の如き四法、等しく一界・一法・一句に入る、是の如き三法は卽ち是れ涅槃なり。煩惱を遠くるが故に之を名けて淨と爲し、畢竟淨の故に名けて寂靜と曰ひ、闇冥無き故に名けて光明と曰ひ、不可說の故に名けて無諍と爲す。是を以ての故に、釋迦如來は默して所說無しと言ふなり。

『善男子、夫れ菩提は卽ち是れ虛空なり。虛空は之を名けて法と爲す。法の如く衆生亦爾り、衆生の如く[七四]福田亦爾り、福田の如く涅槃亦爾り。是の義を以ての故に、一切諸法は涅槃に同じ。如來能く是の如き法界を覺す、是の故に佛と名く。淸淨・寂靜・光明・無諍を修集具足す、是の如き四句、之を名けて佛と爲す。如來能く善方便を知るが故に、初て菩提を得るや默然として住し、宣說する所無く、梵王の請を待てり。爾の時[七五]尸棄梵王、六萬八千の諸梵天人と、我が所に來至し、頭面もて作禮し、合掌して言はく、「唯願はくは如來、諸衆生の爲に正法輪を轉じたまへ」と。而も偈を說いて曰はく、

「如來の法は離*にして淨・寂なり、大光無礙にして諍有ること無く、無字無聲亦無說にして、眞實に法界の如く覺知したまふ。佛は衆生の爲に無量劫のあいだ、苦行して世間の戒を受持したまへるは、無明の、衆生を睡らしめて、久しく放逸を行じ、實義に迷はしむるを悟りたまはん爲なり。又此の會中の無量の衆は、無量の佛に善根を積みたれば、能く甚深の眞實義を解せん、唯願はくは無上輪を轉じたまはんを。此の衆已に一切の魔を調し、甘露の門を開闡せしめんと欲

【七四】晉譯に國土とす。

【七五】梵に(Sikhin)色界初禪天の主、大梵天王なり。

※離は雜染を離れたるをいふ。

は知らず、如來此に於て大悲を起し、正法を演說するは、知らしめんが爲の故なり。

『善男子、夫れ菩提は無漏[六五]無取なり。云何が無漏、云何が無取なる。無漏とは[六六]四流を遠離するなり、四流とは欲流・有流・無明流・見流なり。無取とは[六七]四取を遠離するなり、四取とは欲取・有取・見取・戒取なり。而も諸の衆生は無明に覆はれて四取を行じ、[六八]渴愛を以ての故に我と我所とを作す。如來は我取の根本を了知す、是の故に我淨なり、我淨の故に能く衆生を淨む。我淨とは則ち一切諸法を覺知せず、亦一切の非法を思惟せず、無明を起さず、不起無明の因緣の故に、十二[六九]因緣の有を起さず、十二因緣の有起らざるが故に則ち不生、不生の故に[七〇]決定聚に入る。決定聚に入るとは名けて[七一]了義と爲し、了義は第一義と名け、第一義は無衆生と名け、無衆生は不可說と名け、不可說の義とは卽ち十二因緣の義、十二因緣の義とは卽ちこれ法の義、法の義とは卽ち是れ如來なり。是の義を以ての故に我れ經中に說く、「若し十二因緣を見ることを得る有らば、卽ち法を見ると爲す。法を見る者は如來を見ると爲す。如來を見る者は卽ち所見なし。所見は是れ邪なり」と。夫れ邪見とは想數の法を謂ふ、如來は想無く亦想數無し。是の義を以ての故に、如來を見る者は所見無しと爲す。若し如來の無想・無作・無知・無覺なるを見なば、是を眞實に如來を見ると名く。如來も亦爾り、一切諸法の平等を覺知す。[七二]是の如く法界の無取・無漏なるを、一切凡夫は覺知する能はず。如來此に於て大悲を起し、正法を演說するは、知らしめんが爲の故なり。

『善男子、夫れ菩提は清淨[七三]寂靜光明無諍なり。云何が淨と爲し、云何が寂靜、云何が光明、云何が無諍なる。煩惱を雜へざる、之を名けて淨と爲し、空解脫門は之を寂靜と名け、無相無願を名けて光明と爲し、無生無滅を名けて無諍と爲す。又無生は之を名けて淨と爲し、無滅は名けて寂靜と爲し、無取は光明に名け、不出は無諍に名く。性は名けて淨と爲し、諸の煩惱無きを名けて寂靜・光明・無諍と爲す。法界を淨と名け、眞實の性を名けて寂靜・光明・無諍と曰ふ。虛空の性は之を名けて

【六五】晉譯に無所受とす。
【六六】四暴流ともいふ、百八煩惱を四種に分けたるもの。晉譯は四漏とす。欲流は欲界の貪瞋等、有流は色・無色界の貪慢など、無明流は三界の無明、見流は三界の見惑。
【六七】取は執持、執取の義。煩惱を四種に分つをいふ。欲取は五塵(色聲香味觸)の境に於て、貪欲取著するをいひ、見取は五蘊の法に於て、我見邊見等を妄計取著するをいふ、戒取は外道所說の如き非理の戒禁を取著するをいひ、有取は我見我慢に取著するをいふ。
【六八】凡夫の五欲に執すること、渴して水を愛する如きにいふ。
【六九】晉譯は有數といふ。
【七〇】晉譯に寂然とす。
【七一】晉譯に無誼(義)とす。
【七二】是、宋等の三本に依つて加ふ。次の無漏の二字亦同じ。
【七三】晉譯は無垢無染といふ。

て「解脫を得とは名く」と言はん。是の故に如來は無縛無解なり。是の如き等の法は一切の凡夫、知見する能はず、如來此に於て大悲を起し、正法を演說するは、知らしめんが爲の故なり。

『善男子、夫れ菩提は虛空に同じ、虛空の性は[五九]不平不下にして、菩提も亦爾り。若し法にして無性ならば說いて有平有下と言ふべからず。如來世尊は、一切法の無平無下、乃至微塵の平下を作さざるを知る。若し法にして有性ならば卽ち如實智なり、如實智とは、一切法本無くして今有り、已に有りて還無く、出づる時・滅する時、繫屬する所無く、緣に從つて出で、緣に從つて滅するを知るなり。是の義を以ての故に、之を名けて道と爲す。是の道を斷つが故に名けて菩提と爲す。凡夫衆生は是の如き眞實の道を知らざるが故に、如來此に於て大悲を起し、正法を宣說するは、知らしめんが爲の故なり。

『善男子、[六〇]夫れ菩提は眞實の句に名く。眞實の句とは卽是菩提なり。色も亦是の如し、是の如く二句等しくして無差別なり。[六一]受・想・行・識、[六二]地・水・火・風、眼界・色界・眼識界、乃至意界・法界・意識界また是の如し。[是を]法流布と名く。[如來は]眞實に是の如き陰・入・界の法を覺知して、顚倒有ること無し。不顚倒とは、過去法の不生不滅、未來法の不生不滅、現在の法も亦不生不滅なるを知るなり。是の如く知り已るを不顚倒と名け眞實句と名く。眞實句とは、一法の如く一切法も亦是の如く、一切法の如く一法も亦是の如きをいふ。是の眞實句をば凡夫は知らず、如來此に於て大悲を起し、正法を演說するは、知らしめんが爲の故なり。

『善男子、夫菩提は[六三]內に非ず外に非ず。云何が內と爲し、云何が外と爲す。內に非らずとは造作する所無く、外に非らずとは覺知する所無きなり。內とは謂はく作、外とは謂はく相。菩提の體は作に非らず相に非らず、是の故に名けて非內非外といふ。又非內とは身口意の業に非ず、非外とは三業の緣に非ざるなり。非內とは[六四]無相解脫門、非外とは空解脫門なり。是の如き等の義をば凡夫

【五九】晉譯に無等無邪といふ。

【六〇】晉譯に道如二眞跡一といふ。

【六一】晉譯は受に代ふるに痛を以てす。

【六二】晉譯は以下此等の種に就て云ふ。

【六三】晉譯に道者入室則入無室といふ。

【六四】空、無相、無願を又三解脫門といふ、解脫を得る三種の方法なればなり、この無相解脫門(諸法に差別の相なしと觀ずること)と次の空解脫門(諸法の空なるを觀ずること)とは卽かの二に當る。

『善男子、夫れ菩提は無取[五七]無緣なり、云何が無取なる、云何が無緣なる。眼の眞實を知るを名けて無取と爲し、眼に境無きを知るを名けて無緣と爲す。乃至意の眞實を知るを名けて無取と爲し、意の境無きを知るを名けて無緣と爲す。如來世尊は是の如きの義を以て、菩提の取著無きを知るが故に名けて無取と爲す。屋宅無きが故に名けて無緣と爲す。眼識は彼の色中に住せざるを、屋宅無しと名く。乃至意識もまた是の如し。一切衆生の心は住處なし、如來世尊は、實の如くに心の住處無きを知る。無住處には四種有り、[五八]色受想行なり。是の四法に於て心住する所無し、是を心無住處と名く。是の故に名けて一切諸法悉く住處無しと爲す。如來世尊は如實に之を知るも、一切の凡夫知る能はざるが故に、如來此に於て大悲を起し、正法を演說するなり。

『善男子、夫れ菩提は之を名けて空と爲す。而も菩提の中に空相有ること無し、是の故に空と名く。一切の法は空にして菩提も亦爾り。如來世尊は眞實に能く是の如きの空を知る。*是の故に如來を名けて空を知ると爲し、諸佛をば一切諸法を覺すと名く。空中の空を覺知せざるも、亦能く無上菩提の空と及び菩提とは卽ち是れ一如なるを了知す。空と菩提と是れ一にして二に非ず、空を離れて菩提は別に法有らば二と說くを得べし、二無きを以ての故に之を名けて空と爲し、名字無きが故に之を名けて空と爲し、相貌無きが故に之を名けて空と爲し、威儀無きが故に之を名けて空と爲し、修行無きが故に之を名けて空と爲し、言說無きが故に之を名けて空とは爲す。

『善男子、第一義とは諸法無きを謂ふ。云何が空と說く。善男子、譬へば虛空の無言無說なるが如く、言ふべき無く說くべき無きが故に、故に虛空と名く。言說すべき無き中に言說有ること無し、是を名けて空と爲す。一切諸法また是の如し。無名字の法を說いて名字と爲すも、是の如き名字は亦住處無し、若し名にして無住處ならば、名下の法また是の如くならん。如來は眞實に是の如き法の不生不滅を知る。眞に知るを以ての故に解脫を得たりと名く。本より繫縛無きをば、云何が說い

【五七】晉譯に無所依とあり。

【五八】晉譯に一曰色心之處、二曰痛痒、三曰思想、四曰生死之處所といふ。

※本文に、是故如來名爲知空、諸佛名覺一切諸法、而不覺知空中之空、亦能了知、無上菩提空、及菩提卽是一如。

名く。若し無性ならば則ち二有ること無し、是の故に菩提は無身・無爲なり。一切の衆生は、菩提の無身無爲なるを知らず、如來了了に知らしめんが爲の故に、大悲を起して正法を演說するなり。

『善男子、[五五]夫れ菩提は分別有ること無く、句義有ること無し。云何が分別なる、云何が句義なる。所住無きを無分別と名け、字攝せざるが故に無句義と名く。二有るに非ざるが故に無分別と名け、法界に入らざるを無句義と名く。動搖無きが故に無分別と名け、變易せざるが故に無句義と名く。不可說の故に無句義と名け、空の故に無分別と名く。覺觀無きが故に無分別と名け、無相の故に無句義と名く。不發の故に無分別と名け、無願の故に無句義と名く。衆生界は虛空に同じと知るを無分別と名け、衆生界無しとするを無句義と名く。不生の故に無分別と名け、無宅の故に無句義と名く。不滅の故に無分別と名け、無爲の故に無句義と名く。平等を知るが故に無分別と名け、寂靜の故に無句義と名く。衆生は是の如き等の義を知らず、如來は了了に知らしめんが爲の故に、大悲を起して正法を演說するなり。

『善男子、夫れ菩提は、[五六]身を以て得べからず、心を以て得べからず。何を以ての故に、身・心は幻の如くなるが故に。若し能く身心の眞實を了知せば、是を菩提と名く。流布の爲の故に名けて菩提と爲す、而し其の性相は實に不可說なり。

『善男子、夫れ菩提は　身と說くべからず、心と說くべからず、法と說くべからず、非法と說くべからず、有と說くべからず、無と說くべからず、實と說くべからず、空と說くべからず。何を以ての故に、性は不可說の故なり。菩提は住處有ること無く、宣說すべからざること猶し虛空の如し。眞實に一切諸法を知らんが爲には、宣說すべからず。字中に法無く、法中に字無ければなり。流布の爲の故には、故に宣說すべし。一切の凡夫は眞實を知らず、是の故に如來、此の衆生に於て大悲を起し、正法を演說するは、知らしめんが爲の故なり。

【五五】晉譯に無所壞・跡を說く。參照せよ。

【五六】晉譯に道不レ從レ身、而成二正覺一、亦不レ從レ心、以下參照すべし。

『善男子、一切衆生の心性は本淨なり、性もと淨とは、煩惱の諸結も染著する能はざること、猶し虛空の[五一]沾汚すべからざるがごとし。心性と空性とは等しくして二有ること無し。衆生は心性の淨を知らざるが故に、欲煩惱の繫縛する所と爲る。如來此に於て大悲を起し、正法を演說するは、知らしめんと欲するが故なり。

『善男子、夫菩提は[五二]不取不捨なり。云何が不取なる。如來は一切諸法の此岸と彼岸を見ず。何を以ての故に。一切の諸法は此彼を離るゝが故なり。如來世尊は實の如く之を知る、是を不取と名く。云何が不捨なる、一切の衆生は法界を知らず、如來敎へて了了に知らしむる故に、是を不捨と名く。如來此に於て大悲を起し、正法を演說するは、衆生をして是の二法を知らしめんが爲なり。

『善男子、夫菩提は無想無緣なり。云何が無想なる、眼識乃至意識を見ず、色相乃至法相を見ざるなり。是の法中に於て、不知不見なるが故に取著無し、是を無緣と名く。無想無緣なる、是を聖行と名く。云何が聖行なる、所謂三界の行を行ぜざるなり。善男子、是の如き不行を名けて聖行と爲す。一切の聖人は行を行ぜず、衆生は是の如き聖行を行ぜず。如來此に於て大悲を起し、正法を演說するは、知らしめんと欲するが故なり。

『善男子、夫れ菩提は是れ三世に非ず、三世に非ずとは名けて三等と爲す。過去の意・未來の識・現在の貪、是を三分と名く。能く了了に三分を知るを以ての故なり。意と識と及び貪とは住處有ること無し。是の義を以ての故に、過去を念ぜず、未來を求めず、現在を愛せず。若し三世悉く平等なりと見なば、是を正見と名く。如來は一切衆をして是の如き等の平等の正見を得しめんが爲の故に、大悲を起して正法を演說するなり。

『善男子、夫れ菩提は無身[五三]・無爲にして眼識の界に非ず、乃至意識の界に非ず、是を無身と名く。不生不滅不盡不住にして[五四]三相有ること無し、是を無爲と名く。善男子、一切の法性は是を無性と

【五一】うるほしけがすこと。

【五二】晉譯は無精進、亦無不精進を擧ぐ。

【五三】晉譯は無數とす。

【五四】生・住・滅の三なり。

爾の時陀羅尼自在王菩薩、是の法を聞き已り、心に歡喜を生じ、踊躍無量にして、佛に白して言さく『世尊、甚だ奇なり、甚だ特なり。快く是の如き不可思議を說きたまへり。如來此に於て已に菩薩瓔珞の莊嚴、菩薩の光明、菩薩の大悲、菩薩の善業を說きたまふ。唯願はくは宣說したまへ、云何が如來は諸の衆生を觀じて大悲を起したまふや、云何が悲と名け、悲に何の行有り、何の相貌有り、何の因緣より起れる。云何が佛業と名け、佛業に何の行有り、何の相貌有り、何の因緣有りて起れるやを。善い哉、世尊、一切の知見、唯願はくは如來の業を廣說したまはんことを』と。

佛言はく『善い哉・善い哉、善男子、汝今諦に聽き善く之を思念せよ、吾當に汝の爲に分別解說すべし。善男子、一切如來の所有大悲は[四六]不出不行なり。何を以ての故に。[四七]常にして不變なるが故に、無量の劫中修集して得たるが故に。是の故に大悲は不行不轉なり。修せず捨せざるも亦一切衆生の爲なり。善男子、一切諸佛所有の大悲は、無量無邊にして其の心平等なり、久遠よりこのかた、無量の舌力も宣說する能はず。善男子、如來・世尊は未だ嘗て是の如き大悲を遠離せず。無上の[四八]菩提と及び大悲と、是の如き二法は等くして差別なし。如來所得の無上菩提は、根無く住なし。根とは我見を名け、住とは四顚倒に名く。如來世尊は根を知り住を知る。是の故に菩提は根無く住無し。一切衆生は皆悉く無根無住なること有ることなければ、衆生に無根無住を施さんと欲して大悲心を起すなり。如來此に於て知らしめんと欲するが故に、正法をば演說す。

『善男子、夫れ菩提は淸淨寂靜なり。云何が[四九]淨と爲し、云何が寂靜なる。淨は名けて內と爲し、寂靜は外と名く。內とは眼の空に名け、空は無我に名け、我所有ること無し。何を以ての故に。性はこれ一なるが故に。[五〇]乃至意も亦是の如し。何を以ての故に、性これ一なるが故に。眼の空なるを知り已れば、色に著せず色と心とに著せず、是を寂靜と名く。意法また是の如し。一切衆生は菩提の淸淨寂靜なるを知らず、如來此に於て大悲を起し、正法を演說するは、知らしめんが爲の故なり。

【四六】晉譯に世尊不レ興二大哀一亦不二奉行一也といふ。
【四七】同に世尊常加二大哀一不レ捨二衆生一といふ。
【四八】梵に(Bodhi)、覺・道・智など譯す、佛のさとりの智慧なり。
【四九】晉譯に澹泊とす。
【五〇】耳鼻舌身の四を略して云ふ。

り。二十五に諸の衆生有りて貧窮困苦す、菩薩見已りて[39]七財を修集するは、衆生の是の如き貧窮を壞せんが爲なり。二十六に諸の衆生有り、常に[40]四大毒蛇の爲に病まさる。菩薩見已りて[41]身念處を修するは、衆生をして是の如き四大毒病を遠離せしめんが爲なり。二十七に諸の衆生有り、無明の闇を行く、菩薩見已りて智慧を修集するは、衆生をして慧燈を然さしめんが爲の故なり。二十八に諸の衆生有りて三有の獄を樂む、菩薩見已りて出離の道を修するは、衆生に出離を知ることを示さん爲の故なり。二十九に諸の衆生有りて常に左道を行ず、菩薩見已りて右道を修集するは、衆生をして左道を捨てしめんが爲の故なり。三十に諸の衆生有りて身命に貪著す、菩薩見已りて自身の命に於て不貪著を修するは、衆生をして貪著を捨てしめん爲の故なり。三十一に諸の衆生有り、能く三寶を恭敬供養せず、菩薩見已りて信心を修集するは、衆生をして三寶を信ぜしめん爲の故なり。三十二に諸の衆生有り、實には世の尊に非ずして自ら世尊と謂ふ、菩薩見已りて[42]六念を修集するは、彼等をして眞實の法を知らしめんが爲の故なり。善男子、是を衆生の三十二の業と名く。菩薩見已りて自の業を修治し、一切の善法を成就・具足して諸の惡法を壞し、諸の衆生を勸めて善業を行ぜしむるなり。

[43]『善男子、菩薩摩訶薩は無量の業有り、何を以ての故に。衆生の煩惱に無量の門有り、衆生の煩惱の門を閉ぢんが爲の故に、菩薩は無量の善業を修するなり。善男子、恒河沙等の如き世界の衆生、悉く聲聞・辟支佛乘に住して、菩薩初發心の業に比せんと欲するに、百分千分すとも喩と爲すべからず。何を以ての故に、[44]二乘の人は自ら解脫せんが爲に煩惱を觀ずるも、菩薩は爾らず、常に衆生の解脫を得んが爲の故に諸煩惱を觀ずればなり。善男子、菩薩摩訶薩の作す所の諸業は、諸の[45]凡夫・二乘の業中に於て最も殊勝と爲す。何を以ての故に、衆生の業性はこれ顚倒なり、二乘の業は邊際有るを以ての故に。菩薩の業は無邊無量なり。是の故に菩薩は一切の聲聞緣覺に勝れたるなり』と。

【三九】七種の出世間の法財なり、是に依つて道果を得るが故に財といふ。信財・進財(精進)・戒財・慚愧財・聞財(聞法)・捨財(布施)・定慧財。

【四〇】一切の色法(物質)は地・水・火・風の所造なるに、之を知らずして、物質に執着を起し、之に惱まさるるを毒蛇に喩へたるなり。

【四一】梵に(Kāyasmṛtyupa-sthāna)、四念處の一、身は不淨なりと觀ずる觀法なり。

【四二】六念とは佛・法・僧・施・戒・天の六を念ずるをいふ。

【四三】以下晉譯、道慧品第八。

【四四】聲聞・辟支佛の二乘。

【四五】聖者に對す、智慧淺く愚鈍なる衆生のこと。

有りて慳貪悋惜たり、菩薩見已りて一切の施を修するは、衆生の慳貪心を壞せん爲の故なり。九に諸の衆生有りて禁戒を毀犯す、菩薩見已りて淨戒を修持するは、衆生の毀禁心を破せん爲の故なり。十に諸衆生有りて心常に瞋恨す、菩薩見已りて慈悲の忍を修するは、衆生の是の如き瞋恨を壞せんが爲なり。十一に諸の衆生有りて懶惰懈怠なり、菩薩見已りて勤精進を修するは、衆生の是の如き懈怠を壞せんが爲なり。十二に諸の衆生有りて其の心狂亂す、菩薩見已りて定心を修集するは、是の如き狂亂を壞せんが爲なり。十三に諸の衆生有りて邪智心を覆ふ、菩薩見已りて正智を修集するは、衆生の是の如き邪智を壞せんが爲なり。[三八]十四に諸の衆生有り、義を說くこと顚倒す、菩薩見已りて正義を思惟するは、衆生の是の如き顚倒を壞せんが爲なり。十五に諸の衆生有り、樂んで世行を造る、菩薩見已りて善方便を修するは、衆生の世行を樂むを壞せん爲の故なり。十六に諸の衆生有りて煩惱に繫屬す、菩薩見已りて先づ自ら除斷するは、衆生の煩惱の繫縛を壞せんが爲なり。十七に諸の衆生有りて我見に縛せらる、菩薩見已りて自ら我見を除くは、衆生の是の如き我見を斷たんが爲なり。十八に諸の衆生有りて諸根不調なり。菩薩見已りて自ら諸根を調するは、衆生の是の如き不調を調せん爲なり。十九に諸の衆生有り、說いて「作なく受者有ることなし」と言ふ。菩薩見已りて「作有り及び受者有り」と宣說するは、衆生の是の如き邪說を壞せんが爲なり。二十に諸の衆生有りて恩義を知らず、菩薩見已りて知恩の法を說くは、衆生の是の如き不知恩義を壞せんが爲なり。二十一に諸の衆生有り、未得を得と謂ふ。菩薩見已りて正法を修集するは、是の如き增長慢を壞せんが爲の故なり。二十二に諸の衆生有りて惡口麁穬なり、菩薩見已りて善く口業を修するは、衆生の是の如き惡口を壞せんが爲なり。二十三に衆生有り、貪にして厭足無し、菩薩見已りて知足を修集するは、衆生の足るを知らざるを壞せんが爲の故なり。二十四に諸の衆生有りて父母師長を恭敬する能はず、菩薩見已りて不放逸を修するは、衆生をして父母師長を供養・恭敬せしめんが爲な

【三八】晉譯は以下一六—二四相違あり、可見。

見あり。菩薩は智の光明を施さんが爲の故に、此の衆生に於て悲心を生じ、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の是の如き所見を斷たんが爲なり。十三には諸衆生を見るに、生死を樂み[30]五聚陰に於て親想を生ず。是の故に菩薩は此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の是の如き三有を斷たんが爲なり。十四には諸衆生を見るに、魔の爲に縛せらる。是の故に菩薩は此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故の正法を宣說す。衆生の是の如き魔網を壞せんが爲なり。[31]十五には諸衆生を見るに、快樂を甘樂して眞實の樂因を知る能はず。是の故に菩薩この衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。諸の衆生に眞實の樂因を示さんとてなり。十六には諸衆生を見るに、涅槃の門を求むも處を知る能はず。是の故に菩薩、此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。此の衆生の爲に涅槃の門を開かんとなり。菩薩の悲を修するは、悉く是の如き十六の因緣に因るなり。

[32]『善男子、一切衆生には三十二の不善の業有り、菩薩の見已りて善業を修集するは、衆生の是の如き惡業を壞せんが爲なり。何等か三十二なる。一に諸の衆生有りて無明のために睡眠す、菩薩見已りて智慧を修集するは、衆生の是の如き睡眠を悟らしめんとなり。二に諸衆生を見るに[33]下解下欲なり、菩薩見已りて上解・上欲を修集するは、大乘を以て之を敎化せんが爲なり。三に諸の衆生有り、樂んで非法を爲す、菩薩見已りて正法を修集するは、衆生をして諸法の中に於て大自在を得しめんが爲なり。四に諸の衆生有り、[34]邪命を修集す、菩薩見已りて正命を修集するは、衆生の是の如き邪命を壞せんが爲なり。五に諸の衆生有りて[35]邪林に入る、菩薩見已りて正見を修集するは、衆生をして邪林を出でしめんが爲の故なり。六に諸の衆生有り、樂んで[36]放逸を爲す、菩薩見已りて不放逸を修するは、衆生をして放逸を離れしめんが爲の故なり。七に諸の衆生有り、樂んで[37]麁穬を爲す、菩薩見已りて如法の住を修するは、衆生の是の如き麁穬を壞せん爲なり。八に諸の衆生

【三〇】五蘊なり。梵語塞犍陀(Skandha)を陰、衆、蘊など譯す。名義集六によれば、蘊は積聚の義。陰は蓋覆の謂。有爲を積聚し、眞性を蓋覆するの義なりとす。

【三一】この項晉譯に缺く。

【三二】以下晉譯は開化品第七。

【三三】晉譯に志ヲ樂於小卑劣之乘一、計二吾我人一云云と。

【三四】邪なる方法に依って活命すること。晉譯に戒不二清淨一といふ。

【三五】晉譯に墮二于邪見六十二疑一云云と。

【三六】晉譯に無明顚倒を擧ぐ。

【三七】同に遠離法行を擧ぐ。

五には諸衆生を見るに、六入の海に沈み、眼は色相を取り、耳は聲相を取り、鼻は香相を取り、舌は味相を取り、身は觸相を取り、意は法相を取る、是を名けて沈と爲す。是の故に菩薩は此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の是の如き沈沒を拔かんが爲なり。六には諸衆生を見るに[二七]七種の慢有り——一は慢、二は大慢、三は慢慢、四は我慢、五は增上慢、六は下慢、七は邪慢なり。菩薩摩訶薩、下慢の者に於ては自ら「汝に勝る」と言ひ、慢慢の者には自ら「最勝にして我が色勝れ乃至識勝る」と言ひ、增上慢の者には菩薩語りて「汝實に聖に非ず、應に便ち聖人の想を起すべからず」と言ひ、邪慢の者の爲には正見を宣說す。是の故に菩薩、此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の是の如き憍慢を斷たんが爲なり。七には諸衆生を見るに、聖道を離れ、樂んで世道惡道を行ず、是の故に菩薩此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の世道と惡道とを斷たんが爲なり。八には諸の衆生を見るに、惡道の行を造り、無明と愛と妻と息との所繫に屬し自在を得ず、是の故に菩薩此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の是の如き繫縛を斷ち、惡道を出離せしめんが爲なり。[二八]九には諸衆生を見るに惡友に親近して善友を遠離し、其の心惡業を造作するを甘樂す。是の故に菩薩、此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の是の如き惡業を斷ち、惡友を遠離し善友に親近せしめんが爲なり。十には諸衆生を見るに慳貪を造作し、無明と愛とに於て心厭足無きに、智慧を施さんが爲に、是の故に菩薩、是の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の是の如き慳貪・無明及び愛を斷ち、智慧を施與せんが爲なり。十一には諸衆生の我見と斷見とを見、衆生に十二因緣の眞の智慧を施さんが爲の故に、菩薩此に於て悲心を生じ、悲の因緣の故に正法を宣說す。衆生の我見と斷見とを斷ち、十二因緣の智を施與せんが爲の故なり。十二には諸衆生を見るに無明の闇を行き、[二九]我見・衆生見・命見・士夫見・別異見・邪見・著

【二七】晉譯七を數へず。慢（下劣の者に對し我勝れたりと思ふこと）、過慢又は大慢（同類の中にて我勝れたりと思ふこと）、慢過慢又は慢慢（勝れたる者に對して我勝れたりと思ふこと）、我慢（自の能とする所を恃みて他を凌ぐこと）、增長慢（うぬぼれ）、卑劣慢又は下慢（謙遜して却て之を慢ずること）、邪慢（自の德無く行無きに、ありと執して三寶を敬はず慢ずること）の七。

【二八】晉譯はこの次に、衆生の鬪諍瞋恚あるを除く一項を擧ぐ。

【二九】我見は實の我體ありとの迷執、衆生見は五蘊和合の生卽ち衆生ありとの迷執、命見は實に長短の壽命ありとの迷執、士夫見とは衆生實に士夫の用ありて能く一切の營務を作すとの執見なり。

法を知らん。樂んで無漏の流に住せば、四沙門果を了し、菩提道の行を知る、故に無礙智を修せよ。邪を破して實の光を修し、衆の無所畏に入り、眞實義を樂説せば、爲に生死の法を破せん。眼・耳淨くして障無く、能く色・聲を見・聞し、過去の念謬らざれば、亦他心をも了知せん。十方に到ること無礙にして、法の虚空の如きを知り、無漏の智慧を得ば、爲に諸の衆生を調せん、功德・智慧を具せば、爲に諸の衆生を利せん、無量世の中に於て、是の二莊嚴を求めよ。樂んで淨戒を受持し、樂んで佛法を護り、眞實光を修集するを、如法に住すと爲す。我無量の光を說くは、衆生をして得しめんが爲なり、若し是の經を信ずる者あらば、即ち此の諸光を得ん』と。

[二三]爾の時世尊、復陀羅尼自在王菩薩に告げたまはく、『善男子、菩薩摩訶薩は大悲を修集するに十六事有り、何等か十六なる。一に菩薩摩訶薩は諸の衆生、[二四]我見に貪著し、我見を以ての故に諸の見を增長し、常に生死の爲に繫縛せらるゝを見る。是の故に菩薩は此の衆生の爲に大悲心を修し、悲の因緣の故に法を宣說して化す。衆生の是の如き妄見を壞せんが爲なり。二に諸の衆生を見るに、心に顚倒を懷きて常を無常と見、無常を常と見、苦を樂と見、樂を苦と見、淨を不淨と見、不淨を淨と見、我を無我と見、無我を我と見る。[二五]是の故に菩薩は此の衆生の爲に悲心を修集し、悲の因緣の故に法要を宣說す。衆生の是の如き四倒を壞せんが爲なり。三に諸の衆生を見るに、心に憍慢を懷き、實には物有ること無きに物想を生じ、實には事有ること無きに事想を生ず。是の因緣を以て七種の慢を起し、是の慢を以ての故に惡法を增長す。是の故に菩薩は此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に法要を宣說して、衆生の是の如き憍慢を破壞するなり。四には諸の衆生を見るに[二六]五蓋に覆はる。蓋に覆はるゝを以ての故に、心多く疑を生じて深義を解せず、是の故に菩薩は此の衆生に於て悲心を修集し、悲の因緣の故に法要を宣說す。衆生の是の如き五蓋を壞せんが爲なり。

【二三】以下晉譯、第三卷、大哀品第六。
【二四】實の我有りと執する謬見。
【二五】以上を四顚倒といふ。
【二六】五種の煩惱、欲貪蓋・瞋恚蓋・惛眠蓋（心沈みて睡眠を催すこと）・掉悔蓋（心に落付なく常に輕く飛び擧りて後悔ゆること）、疑蓋の五。

能く正色を見る、二は耳光、能く正聲を聞く、三は念光、能く過去阿僧祇劫の所有衆生を念ず、四は[15]性光、性を觀じて衆生の心を淨むるが爲に、五は[16]虚空光、大神通光を以て遍く十方無量の世界に到る、六は[17]方便光、無漏智を具するが故に、七は功德莊嚴光、一切衆生を利益せんが爲の故に、八は智慧莊嚴光、一切衆生の疑心を壞せんが爲の故に。是を神通光の八種と名く。(8)無礙智光にも亦[18]八種あり――一は智光、二は意光、三は慧光、四は佛光、五は正見光、六は淨衆生心光、七は解脱光、八は畢竟光なり。是を八無礙智光と名く』と。

爾の時世尊、重ねて此義を宣べんと欲して偈を說いて言はく、

『念心を修集し、善惡業を忘れず、經を樂聞讀誦して、[19]不放逸を修集せよ。能く諸根を調伏し、寂靜に安住し、善法を増長して念光を修集せよ。能く惡法を遮止すること、猶し善く門を守る者のごとく、能く法城を守護して[20]四魔をして入らしめざれ。音聲に隨逐せず、眞實義を思惟し、善知識に親近して、如法に住することを喜樂せよ。其の意無邊に上り、永く諸煩惱を斷たば、邪法も能く動かさず、惡世にも誹を生ぜじ。誠心もて菩提を念じ、小乘心を說かず、常に上意を樂念し、衆の爲に下意を破すべし。魔と煩惱とを畏れず、大慈悲を修集し、衆生を害するを念ぜずば、其れ大智光を得。能く諸の疑心を壞し、甚深の義を解了し、眞實の方便を知りて、[21]四無礙智を修せよ。樂んで十二緣の、衆生の因とする所たるを觀じ、作と受者と無きを知らば、能く大光法を修す。能く諸佛の法を知り、世・出世の行を行じ、能く十方の土に到り、人天の業を了知せよ。無上智を修集し、三は一乘に歸するを說き、八正道を修集せば、爲に三世の法を壞せん。有漏と無漏とに於て、如實に而も之を知り、能く人天を利益し、有漏の法を斷ぜしめよ。[22]爲と無爲とを謬らず、眞實に而も之を知り、寂靜の光、闇無く、有爲の相に著せざれ。結の入出の緣を知り、衆の心性の淨なるを知り、若し大乘の定有らば、即ち是の如きの

【一二】梵に(Anāgāmin)、不還と譯す。前の九品を斷じたる聖者。欲界の惑に引かれて再び欲界に還り生るゝこと無き故に不還といふ。
【一三】梵に(Arhat)三界の見、思の惑を斷じ盡して無學の位に住し、世間の供養を受くるに堪ゆる聖者。以上の四を聲聞の四果と稱す。
【一四】一より五までは、晉譯やゝ異る。
【一五】晉譯は本淨光明とす。
【一六】晉譯に無礙光明とす。
【一七】同に慧光明とす。
【一八】此の八種、晉譯に遵修聖慧・志智慧明・行正見明・奉觀察光・照衆生照曜・脩其脫心・無瞋恚心・遵修其明令永究竟とす。
【一九】梵に(Apramāda)、惡法を防ぎ善法を修むる心の活き。
【二〇】蘊・煩惱・死・天の四種の魔。
【二一】四無礙辯なり。
【二二】有爲(Sisvnrn)。因緣に依つて生じたる諸の現象。

卷の第二

陀羅尼自在王菩薩品　第二之二

[一]佛復陀羅尼自在王菩薩に告げたまはく、『善男子、菩薩摩訶薩は八の光明有り、是の八明を以て能く諸の闇を壞し菩薩行を淨む。何等を八と爲す。一に念光、二に[二]意光、三に[三]行光、四に法光、五に智光、六に[四]實光、七に神通光、八に[五]無礙智光なり。(1)念光にまた八種あり――一は過去の善法を失せず、二は未來の善を作す、三は法を聞いて忘れず、四は實義を思惟す、五は[六]六塵の爲に壞せられず、六は憶持して守門の人の如く惡法を遮止し、眞の善法の爲に善法の城門を守る、七は邪法の爲に誑惑せられず、八は能く大に純善の法を增長するなり。是を念光の八種と名く。(2)意光にも亦八種あり――一は義意にして字意に非ず、二は智慧にして識意に非ず、三は法意にして人意に非ず、四は實意にして虛意に非ず、五は菩薩意にして聲聞意に非ず、六は上意にして下意に非ず、七は佛意にして退意に非ず、八は憐愍意にして害意に非ざるなり。是を意光の八種と名く。(3)行光にも亦八種あり――一は法行、二は[七]一切行、三は衆生行、四は衆生心行、五は十二因緣行、六は廣說行、七は行行、八は一切佛法行なり。是を行光の八種と名く。(4)法光にも亦八種あり――一は世法光、二は出世法光、三は無漏法光、四は[八]無爲法光、五は解脫法光、六は心解脫法光、七は畢竟解脫法光、八は破無明慧法光なり。是を法光の八種と名く。(5)智光にも亦八種有り――[九]一は八正智光、二は[一〇]須陀洹智光、三は[一一]斯陀含智光、四は[一二]阿那含智光、五は[一三]阿羅漢智光、六は辟支佛智光、七は菩薩智光、八は正覺智光なり、是を智光の八種と名く。(6)實光にも亦八種有り――一は[一四]正定行、二は得須陀洹果、三は斯陀含果、四は阿那含果、五は阿羅漢果、六は辟支佛果、七は菩薩、八は佛菩提なり。是を實光の八種と名く。(7)神通光にも亦八種有り――一は眼光、

【一】以下晉譯卷第二、八光(明)品。
【二】晉譯に志光明といふ。
【三】同に遊光明といふ。
【四】同に至誠光明といふ。
【五】同に奉行光明といふ。
【六】六境をいふ。
【七】二、三、四は晉譯の相當文に、遊知衆生志操所念と、所遊之處分別辯習の二句を擧ぐるのみ。
【八】爲は爲作、造作の謂。本來常住にして何物にも造作せらるゝ無き法を無爲といふ。梵に Asaṃskṛta. 以下晉譯やや異る、就て見るべし。
【九】一より五までは晉譯に一曰八等光諸道、二曰諸道跡光慧、三曰往來光照、四曰不還明、五曰演無著曜とあり。
【一〇】梵に(Srotāpanna)、預流と譯す、三界の見惑(八十八使)を斷じ、始めて聖者の流類に預り入る位なり。
【一一】梵に(Sakṛdāgāmin)、一來と譯す、欲界修惑の(九品の中)上六品を斷じたる聖者。餘の下三品の惑は、その惑力によつて、人天の各一生を感生せしむるが故に、人中(天上)に在つてこの果を得れば、必ず先づ天上(人中)に往き再び人中(天上)に還つて涅槃す。かく天と人とを一往來するが故に一往來果といふ。

界を了知し、字を知り及び義を知り、[七七]世諦に於て闇無く、一たび聞きて能く法を持し、衆生の語を解了し、能く諸の邪道を壞し、無上智を修し、無上の四依に依り、大總持を瓔珞す。我れ功德の鬘を說くは、菩提心を嚴ずる爲なり、衆に於て無畏を說くは、善く天神の語を解すればなり、能く衆の疑網を壞し、能く諸の法界を開く、能く三寶を讃へ、人を勸めて佛と衆とに供養親近し、無上智を修集せしめむとてなり。我れ四瓔珞を說いて、能く佛菩薩を嚴ず、若し至心に信ずる有らば、卽ち是の莊嚴を得ん』と。[七八]

大方等大集經卷第一

き衆生と事業を同くして）攝招するなり。

【六八】　五蓋なり。

【六九】　念佛・念法・念僧・念戒・念施・念天・念休息・念安般・念身・身死を十念とす。晋に六思念とあり。前六を取る。

【七〇】　以下第三に慧莊嚴を明す。

【七一】　樂神、乾闥婆は巧に樓閣を幻作して人に見せしむ。之を乾闥婆城といひ、物の幻有無實に喩ふ。

【七二】　Dharmakāya 三身の一、無色無形の理佛。

【七三】　第四に總持莊嚴を明す。

【七四】　眞如、實際をいふ。

【七五】　修道の上より、人を、（一）正定（必ず涅槃に至るべきもの）、（二）邪定（必ず惡道に墮つべきもの）、（三）不定（上二者の中間に在り、道を修して進退不定の者）の三種に分つなり。

【七六】　乘は運載の義。菩薩乘・聲聞乘・緣覺乘なり。

【七七】　眞諦に對す、萬有の眞性に依つて　れたる相狀にして、世俗智の對境となる境界。

【七八】　麗本は次に「大集經第一卷校正後序」として六十卷本成立の大要と、六十卷本採用の所以とを記す。

亦二の淨慧を知り、能く三界を了知するを、瓔珞莊嚴と名く。意淨にして慢を生ぜず、不淨不輕と見、法の不可說を知るを、瓔珞莊嚴と名く。慧能く智を莊嚴す、智も亦慧を莊嚴す、自他の菩提淨きを、瓔珞莊嚴と名く。法は夢幻の如しと知り、諸法の無を說かず、能く世間に隨つて說くを、瓔珞莊嚴と名く。慧能く戒を莊嚴し、戒能く慧を瓔珞し、身口の菩提淨なるを、瓔珞莊嚴と名く。法は水月の如く亦熱き時の炎の如しと見、法は響の相の如く、[七一]乾闥婆城の如しと說き、非法をば法と作さゞるを、慧瓔珞嚴と名く。慧能く忍を莊嚴し、忍能く慧を莊嚴して、身口の菩提淨きを、瓔珞莊嚴と名く。法に隨つて增減せず、解し已つて衆生を調し、至心に[七二]法身を觀ずるを、瓔珞莊嚴と名く。慧能く進を莊嚴し、進能く慧を莊嚴す、悔動せずして心の淨なるを、瓔珞莊嚴と名く。慧能く定を莊嚴し、定能く慧を莊嚴し、能く深法界を說き、無勝の神通を得しむ。

[七三]能く諸方便を知り、無上の總持を得、法と土と衆生と淨なるを、瓔珞莊嚴と名く。衆根の利・鈍を知り、煩惱と諸魔を壞し、身心自在を得るを、瓔珞莊嚴と名く。道に去來有ること無く、亦去來する者無し、過に非ず未來に非ず、現に非ず、修者に非ず、法界を分別せず、能く畢竟定を淨め、諸の陰・入・界を知るを、慧炬莊嚴と名く。陰・入・界は空の如し、我なく我所なく、生滅は十二に因る、是を智慧淨と名く。諦に[七四]第一義を知り、亦陰・入・界をも知り、法に於て諍を生ぜず、三世の無礙を知り、[七五]三聚の衆を分別して、能く爲に[七六]三乘を說き、能く三寶を以て敎へ、三無相定を修す、無相なるも一相なるを知り、幻に非ざるも幻の如しと知り、無說なるも能く說と爲し、空をば不空と說く。諸法は常に變ずるに非ず、法界を毀壞せざれ、和合の因緣の故に、法界に流布す。是を名けて眞知と爲す、法界を分別せざれ。二の動と不動とを知り、二の淺深を知り、二の常と無常とを知る、是を大淨智と名く。常に念心を失はず、法

【五三】五蘊（色受想行識）なり。晉譯に慧品とす。
【五四】十八界なり。生理機關としての眼耳鼻舌身意（六根）とその對境としての六境（色聲香味觸法）と及び心理機關としての六識となり。
【五五】十二處ともいふ、六根と六境となり。
【五六】我の所有物。
【五七】正理を顚倒したる四種の見解、常樂我淨。
【五八】この九種、晉譯大に異る、可見。
【五九】晉譯に懷來道議といふ。
【六〇】この四種、次の六種、晉譯やゝ異る。
【六一】始の四對を法の四依と名く。
【六二】不了義經に對す、眞實の義理を明了に顯說したる經。
【六三】この九種と次の十種、晉譯大に異る。
【六四】以下第一に戒の莊嚴を說く。
【六五】兩舌・惡口・妄語・綺語。
【六六】以下第二の定莊嚴を明す。
【六七】菩薩が衆生を度するに、先づ用ひて衆生を攝招する四種の法、（一）布施（財實二施を以て）、（二）愛語（親愛の語を以て）、（三）利行（三業の善行を以て衆生を利益して）、（四）同事（形を變じて衆生に近づ

爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんとして、偈頌を以て曰はく、

『四の莊嚴瓔珞は、能く大乘を端嚴ならしむ、所謂戒・定・慧と無上の陀羅尼となり。[六四]能く三業をして淨ならしめ、一切の人に愛せられ、永く三惡道を斷つ、是を戒瓔珞と名く。願の如く具足して人・天の身を獲得するを得、能く勤・精進を修する、是を戒瓔珞と名く。能く無上定を修し、二種の解脫を得て、無上の涅槃を見る、是を戒瓔珞と名く。其の戒は不破と漏となり、無上の戒不雜にして、能く大自在を得るを、瓔珞莊嚴と名くるなり。戒の淨は能く施を淨む、戒淨にして能く忍を淨む、戒の淨は五度を淨む、戒瓔珞嚴と名く。戒の淨は能く有を淨め、大不放逸と無畏心と不悔とを淨む、是を戒瓔珞と名く。戒の淨は聖性を得、亦能く身心を淨め、無邊定を獲得す、是を戒瓔珞と名く。怖畏せず動ぜず、定んで清淨の有を得、能く煩惱の縛を斷つ、是を戒瓔珞と名く。能く難調の根を調し、能く大名稱を得、自在心を莊嚴する、是を戒瓔珞と名く。能く說の如くに作し、能く口の[六五]四種を淨め、諸の煩惱を遠離するを、瓔珞莊嚴と名く。

[六六]『能く自の佛土を淨め、能く諸の衆生を調し、能く大慈悲を修するを、瓔珞莊嚴と名く。諸の惡業を作さず、菩薩の行を修し、能く大力無畏なるを、瓔珞莊嚴と名く。能く大涅槃を嚴じ、能く大因果を得、慈心もて衆生を滿たすを、瓔珞莊嚴と名く。能く慳詃の心を離れ、柔輭の[六七]四攝を修し、愛・瞋・怖・癡を斷ずるを、瓔珞莊嚴と名く。能く[六八]五惡蓋を破し、[六九]十念の心・助道・不放逸を修集するを、瓔珞莊嚴と名く。二翼を具足し、如法に義を思惟し、もと寂靜に住することを樂ふを、瓔珞莊嚴と名く。

[七〇]『法に於て疑ふ所なく、亦癡・亂心も無く、眞實に四諦を解するを、瓔珞莊嚴と名く。持戒の心著なく、また慢を生ぜず、戒と戒者とを取らざるを、瓔珞莊嚴と名く。無上の慧は定を淨む、

集中して雜念の起るを防ぎ、進んで菩提分の修業に轉ずるなり。

【四七】晉譯、四意斷といふ。(一)已生の惡法を斷じ、(二)未生の惡法を生ぜしめず、(三)未生の善法を生ぜしめ、(四)已生の善法を增長せしむる爲に、一心に精進するをいふ。

【四八】四如意足ともいふ。神通を得、無漏智を得るに至る迄の修行道程を四段とせるもの。(一)欲(神通に至るべき願望)、(二)念(一心に專注すること)、(三)精進(間雜なく精進すること)、(四)思惟(專ら思考すること)。

【四九】菩提を證知する機關方法(根)としての(一)信(佛に歸し法を信じ僧に入りて戒を持すること)、(二)精進(四正勤を修すること)、(三)念(四念處を修すること)、(四)定(四禪の修行)、(五)慧(主に四諦の證悟)。

【五〇】五根を道行の德として見たるもの。

【五一】また七覺支ともいふ。菩提を得る爲に五障を除き、正知に進む修行の七項なり。

【五二】また八正道分ともいふ、道德修行の項目を分類したるもの、八邪を離れたる、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定をいふ。

想、七は解脫を觀ずるの想、八は貪を離るるを觀ずるの想、九は盡を觀ずるの想なり。復十種有り、一は諸法の猶ほ幻の如きを觀ずるの想、二は夢の如き想、三は炎の如き想、四は響の如き想、五は芭蕉樹の如き想、六は水中の月の如き想、七は影の如き想、八は法界の增減なきを觀ずるの想、九は諸の法界、去住有ること無きを觀ず、十は無爲に於て生滅有ること無きを觀ずるなり。是を慧瓔珞莊嚴と名く。

『善男子、陀羅尼瓔珞莊嚴に一種有り、所謂念心なり。復二種有り、一は[五九]先受、二は畢竟して能く持するなり。復三種有り、一は義を知り、二は字を知り、三は說を知るなり。復[六〇]四種有り、一は正語、二は了語、三は無礙語、四は不謬語なり。復五種有り、所謂[六一]五依なり。一に義に依りて字に依らず、二に智に依つて識に依らず、三に[六二]了義經に依りて不了義經に依らず、四に法に依つて人に依らず、五に出世に依つて世に依らざるなり。復六種有り、一は說の如くに持し、二は所言誠實に、三に發言は人に樂聞せらる、四は憐愍語、五は善芽を生ずる語、六は時語なり。復七種有り、一は利語、二は莊嚴語、三は無礙語、四は無滯語、五は無二語、六は先づ知りて語る、七は了語なり。復八種有り、一に方俗の語を知り、二に鬼神の語を知り、三に諸天語を知り、四に諸龍の語を知り、五に乾闥婆の語を知り、六に阿修羅の語を知り、七に金翅鳥の語を知り、八に畜生の語を知るなり。復[六三]九種有り、一には無畏語、二には無縮語、三には無難語、四には解說を知るの語、五には如法の答を知るの語、六には廣說を知る語、七には次第を知る語、八には無常を說く語、九には無盡語なり。復十種有り、一に疑網を壞する語、二に界を開示する語、三に法門を開く語、四に智慧を開く語、五に闇冥を破する語、六に一一の字を解する語、七に佛を讚歎する語、八に煩惱を呵する語、九に根の利鈍を分別する語、十に佛功德の妙を開く語なり。善男子、是を陀羅尼瓔珞莊嚴と名く』と。

知る、更に知るべからず、…我已に道を修す、更に修すべからずと知る無生の正見と倶なる勝解をいふ。

【三九】また解脫知見蘊(Vimukti-jñānadarśana-s.)　無學已に四諦を知・斷・證・修せりと知る盡知と、更に四諦を知斷證修すべからずとする無生智とをいふ。――以上の五を無漏の五蘊といふ。

【四〇】檀那(Dāna)の略、布施と譯す。波羅蜜(Pāramitā)は度又は到彼岸と譯す、生死海を度し涅槃の彼岸に至る意。

【四一】尸羅(Śīla)の略、持戒と譯す。

【四二】梵に Kṣānti 忍辱と譯す。

【四三】梵に Vīrya 精進と譯す。

【四四】禪那(Dhyāna)の略、靜慮と譯す。

【四五】梵に Upāya といふ。菩薩方便を以て種々に身を現し衆生を濟度するをいふ。晉譯は智度無極として、智慧(Prajñā)波羅蜜の義とす。以上の六は菩薩の修すべき行とせらる。

【四六】晉譯、四意止といふ。身は不淨なり、受は苦なり、心は無常なり、法は無我なりと、或は同時に、或は別々に觀ずるをいふ。心念を一點に

り。復[三四]四種有り、一に苦を知り、二に集を斷じ、三に滅を證し、四に道を修するなり。復五種有り、一に[三四]戒衆清淨、二に[三六]定衆清淨、三に[三七]慧衆清淨、四に[三八]解脱衆清淨、五に[三九]解脱知見衆清淨なり。復六種有り、一は[四〇]淨檀波羅蜜にして三種あり、——一に内淨にして法は幻の如しと觀じ、二に衆生淨にして之夢の如しと觀じ、三に菩提淨にして果報を求めざるなり。二は[四一]淨尸波羅蜜にして三種あり——一に身は影の如しと觀じ、二に口は響の如しと觀じ、三に心は幻の如しと觀ずるなり。三は[四二]淨羼提波羅蜜にして三種有り——一に毀を聞いて瞋らず、二に讃を聞いて喜ばず、三に若し割截及び命を奪はるゝ時も能く法界を觀ずるなり。四は[四三]淨毘梨耶波羅蜜にして復三種有り——一に不想、二に堅固、三に法相を見ざるなり。五は[四四]淨禪波羅蜜にして三種有り——一に諸法に著せず、二に心退轉せず、三に所緣清淨なり。六は[四五]淨方便波羅蜜にして三種有り——一に衆生を攝取す、解脱の爲の故に、二に淨陀羅尼、法を持する爲の故に、三に所願清淨、佛土を淨むる爲の故なり。復七種有り、一は[四六]四念處を修して不取不著なり、二は[四七]四正勤を修して不出不滅、三は[四八]四神足を修して身心清淨なり。四は[四九]五根を修して根と無根とを知る、五は[五〇]五力を修して能く煩惱を破す、六は[五一]菩提分を修して法界の眞實を知る、七は[五二]聖道を修集して去來有ることなきなり。復八種有り、一は定を修す、畢竟淨の爲の故に、二は智を修す、闇を壞せん爲の故に、三は[五三]陰を知るの智を修す、法衆を知らんが爲の故に、四は[五四]界を知るの智を修す、法界の虚空に等しきを解せんが爲の故に、五は[五五]入を知るの智を修す、法性の平等を知らんが爲の故に、六は十二因緣を知るの智を修す、我無く[五六]我所なきを觀ぜん爲の故に、七は諦を觀ずる智を修す、[五七]四倒を壞するが故に、八は分別して法界を知るの智を修集す、眞實を知らんが爲の故なり。復[五八]九種有り。一は無常を觀ずるの想、二は無常と苦とを觀ずるの想、三は苦と無我とを觀ずるの想、四は食の不淨を觀ずる想、五は世間の樂むべからざるを觀ずる想、六は諸の生死の過患多きを觀ずるの

---

anantyāyatana)。

【二七】 故に識無邊處(Vijñāna-anantyāyatana)。

【二八】 故に無所有處 Ākiñcan-yāyatana)。

【二九】 非想非非想處(Naivasaṃjñānasaṃjñāyatana)といふ。此等の四を四無色(Ārūpya)定といひ、前の四と合して(有心の)八等至と稱す。

【三〇】 晉譯やゝ異る。

【三一】 梵に Śamatha 止と譯す、心妄りに外境に動かされず、一切の亂想を止めて寂靜なるをいふ。

【三二】 賢聖の性。

【三三】 晉譯に於ニ一切法一而不ニ卒暴一といふ。

【三四】 苦(Duḥkha)と苦の集(Samudaya)と、苦の滅(Nirodha)と苦滅の道(Mārga)の四諦なり。

【三五】 また戒蘊(Śīlaskandha)、無學卽ち阿羅漢の身中の無漏の身語業をいふ。

【三六】 また定蘊(Samādhi-s.)無學の空・無相・無願の三三昧をいふ。

【三七】 また慧蘊(Prajñā-s.)、無學の正見智なり、晉譯に解品清淨といふ。

【三八】また解脱蘊(Vimukti-s.)、無學が自ら我已に苦を知り・集を斷じ・滅を證し・道を修せりと知る正見と、我已に苦を

如來の諸功德を得るが爲の故に。八には淨慧、大神通の故に。九には淨方便、諸の魔衆を破するが故に。十には淨戒、不共法の爲の故なり。善男子、是の如き等の事を、戒瓔珞莊嚴と名くるなり。

[一四]『三昧瓔珞莊嚴に一種有り、所謂諸の衆生の爲に慈心を修集するなり。復二種有り、一には質直、二には柔軟。復三種あり、一には不虛誑、二には不麁獷、三には不邪諂なり。復四種有り、一には不愛行、二には不瞋行、三には不畏行、四には不癡行なり。復五種有り、所謂[一五]五蓋を遠離する三昧なり。復六種有り、所謂[一六]六念を修集する三昧なり。復七種有り、所謂[一七]七覺を修集する三昧なり。復八種有り、所謂[一八]八正を修集する三昧なり。復九種有り、一に菩薩は菩提心及び大慈悲心を修集し、一切無量の衆生に於て念心を修集し、惡・欲・不善の法を遠離し、[一九]覺有り觀有り、寂靜喜樂して初[二〇]禪を得るなり。二に覺觀を遠離し、內に喜心を得、至心に無覺・無觀を思惟し、定に[二一]喜・樂を生じて[二二]第二禪を得るなり。三に喜を離れ[二三]捨を修し、念・心を具足して放逸有ること無く、身に安樂を受けて[二四]第三禪を得るなり。四には苦・樂を遠離して憂喜の心を滅し、非苦非樂にして捨念・寂靜念を修集して[二五]第四禪を得るなり。五に色相を遠離して無量の空相を修するなり。[二六]六に空相を遠離して無量の識相を修するなり。[二七]七に識相を遠離し無所有の相を修するなり。[二八]八に無所有相を遠離して非想非々想の相を修するなり。[二九]九に未だ善方便智を成就せずと雖も、三昧力を以て衆生を敎化するなり。復[三〇]十種有り、一に法を觀じて錯謬有ること無し、二に[三一]舍摩他を具足成就す、三に精進して休息有ること無し、四によく時節を了知す、五に至心に善法を受持す、六に其の心を寂靜にす、七に身を觀ず、八に常に法界を觀ず、九に心自在を得、十に[三二]聖性を獲得するなり。是を三昧瓔珞莊嚴とは名く。

『善男子、智慧瓔珞莊嚴には一種あり、[三三]所謂心に疑網無きなり。復二種有り、一に疑心を遠離し、二に瞋心を遠離す。復三種有り、一に無明を遠離し、二に無明の鷇を破り、三に大光明と作るな

【一四】次に定に依って莊嚴することを擧ぐ。
【一五】心を蓋ふ五種の煩惱なり、晋譯は貪欲・瞋恚・睡眠・調戲・狐疑の五蓋を列擧す。
【一六】晋譯には念佛・念法・念僧・念戒・念施・念天の六思念を列擧す。
【一七】七覺支なり、晋譯に意念・法・歡悅・精進・信・定・護とす。
【一八】八正道なり、晋譯に正見・正命・正語・正業・正念・正便・正意・正定とす。
【一九】覺(Vitarka)觀(Vicāra)は又尋・伺と譯す、心の麁なる性とその細なる性となり。
【二〇】禪那(Dhyāna)の略、靜慮と譯す、以下の三を合して四靜慮といふ。
【二一】眼等の五識無別分に悅豫するを樂といひ、意識の分別して悅豫するを喜といふ。初禪には前の覺觀とこの喜樂とあるを特色とす。
【二二】二禪には覺觀を離れ、喜樂のみあり。
【二三】二禪の麁喜を離れて心平等なるをいふ。
【二四】三禪には喜樂を離れ、別の樂(心の悅ばしき性)を具ふ。
【二五】以上の凡てを離るるを第四禪とす。詳しくは倶舍論廿八、瑜伽論十一を見よ。
【二六】故に空無邊處(Ākāśa-

能く一切の魔及び魔業を壞し、大疑心を破りて能く諸佛甚深の境界を解し、衆生界と衆生の心性とを知り、能く無量の諸佛世界を見、能く如來無上の正法を護り、能く諸法に於て大自在を得ん』と。

爾の時佛、陀羅尼自在王菩薩を讃して言はく『善い哉、善い哉、善男子、能く如來に甚深の義を問へり。よく佛の無量の行を行ぜん者、乃ち能く汝の如く斯の深問を發す。汝今至心なれ、當に汝の爲に說くべし。菩薩若し能く是の如きの功德を成就具足せば、當に諸法に於て大自在を得べし』。

『世尊、今正に是れ時なり、唯宣說を垂れ給へ』と。

佛言はく『善男子、菩薩に四の瓔珞莊嚴有り、一には戒瓔珞莊嚴、二には三昧瓔珞莊嚴、三には智慧瓔珞莊嚴、四には陀羅尼瓔珞莊嚴なり。[七]戒瓔珞莊嚴に一種有り、謂はく衆生に於て害心有ること無し。菩薩若し惡害の心無ければ、一切衆生の常に樂見する所たり。復[八]二種有り、一は惡道を閉塞し、二は能く善門を開く。復三種有り、一に身淨、二に口淨、三に意淨なり。復四種有り、一に求むる所悉く得、二に所願具足し、三に所願成就し、四に欲する所能く作すなり。復[九]五種有り、一には信、二には戒、三には定、四には念、五には慧なり。復[一〇]六種有り、一には不破戒、二には不漏戒、三には不雜戒、四には不悔戒、五には自在戒、六には無屬戒なり、復七種有り、所謂七淨なり。[一一]一には施淨、二には忍淨、三には精進淨、四には禪定淨、五には智慧淨、六には[一二]方便淨、七には善方便淨なり。復八種有り、所謂八具足なり、一は無作具足、二は地具足、三は不忘心具足、四は[一三]不緩具足、五には諸根具足、六は佛世具足、七は離難具足、八は善友具足なり。復九種有り、一には不動、二には不畏、三には定智、四には寂靜、五には至心、六には淸淨、七には結緩、八には調心、九には住調伏地なり。復十種有り、一には淨身、三十二相の爲の故に。二には淨口、言二無きが爲の故に。三には淨意、解脫の爲の故に。四には淨田、衆生の福德をして增さしむる爲の故に。五には淨心、衆生を調する爲の故に。六には淨有、衆生を行化する爲の故に。七には菩薩名淨、

【七】戒（尸羅 Sīla）を以て成就莊嚴するところを擧ぐるなり。

【八】善惡二業に據つて趣くべき善惡の二道を擧ぐ。

【九】この五種、晋譯全く異る。

【一〇】この六種晋譯に依れば（一）毀犯する所無く、（二）所缺の漏無く、（三）沾汚有らず、（四）瑕疵を爲さず、（五）博く聽受して欲穢に從はず、（六）若し聽く所有るも人を戴仰せざる謂なり。

【一一】以下の五は六波羅蜜の中、戒を除ける五なり。

【一二】方便波羅蜜（Upāya-pāramitā）即ち十度の第七、菩薩方便を以て種種に身を現じ衆生を濟度すること。晋譯は之に代ふるに六度中の戒を加ふ。

【一三】以下、晋譯全く異る。

らく、

『如來は法に於て自在を得たまふ、其の光能く世間の闇を破す、世尊の佛眼罣礙なく、能く諸法の眞實義を見たまふ。無量の諸功德を具足し、師無くして獨り諸の法界を悟りたまふ、如來の放光は衆生の爲なり、今我が身に入るは何の因緣ぞや。我本所知の念不明なり、陀羅尼の眼*亦是の如し、此の光今來りて我が身に入るに、了了として諸の法界を知るを得たり。身と心と大清淨を獲得し、受樂無上にして邊有る無し、我今已に佛の境界を知り、亦【五】樂說無礙辯をも得たり。十方の諸佛は親近し難く、愚者は能く之に師事せず、我今佛神力を承くるが故に、少しく問を發して衆生を利せんと欲す。何の因緣によつて菩提心を發し、復何の義を以て佛出世したまへる。何の緣にて光を放ちて十方に遍からしめ、復何の因を以て神通を示し、何の緣にて佛衆の爲に【六】授記したまふや、願はくは大衆の爲に分別して說きたまへ。今此の大衆勝れたること上なく、悉く能く佛の法界を受持せん、此の衆は魔及び魔業無し、唯佛の法藏を開示する有らんを。我が智淺近にして邊崖有り、何ぞ能く無上尊に諮請せん、今如來の無邊智に問ひまつる、云何が諸方便を知ることを得んや。願はくは今諸弟子を敎誨したまへ、我學び已つて法の自在を得ん、得已らば能く大法雨を施して、當に十方諸佛の恩を報じまつるべし。

『世尊、諸佛如來は不可思議なり、菩薩の所行邊際有ること無し、是の故に我今如來無上法王大慈悲衆に問ひ、衆生を利せんが爲に甚深の義を問ひまつらんとす。云何が名けて菩薩の行と爲す、何の瓔珞を以て菩薩を莊嚴し、菩薩をして所行清淨ならしむる、云何が能く愚癡の諸闇を壞する、云何が能く疑網の心を斷つ、云何が菩薩、諸衆生の爲に慈悲心を修する、云何が菩薩、衆生を擁護する、云何が菩薩、眞實に能く菩薩の業・善業・不誨業を修する、唯願はくは如來哀愍して宣說したまはんを。又此の大衆利根にして智慧あり、能く佛語を解し能く法界を知る、能く菩薩所行の無礙の法門に達し、

※眼、麗本根に作る今三本に依る。

【五】四無碍辯（又は解）の一。

【六】記別（Vyakaraṇa）－佛の修行者に對する未來の豫言を授けたまふこと。

初發心をして[一六四]不退を得しむるが故に、久發心の者をして增長を得しむるが故に、菩提道を行じて意を淨むるを得るが故に、不退の菩薩、佛法を學するが故に、一生[一六五]の菩薩、瓔珞莊嚴するが故に、※後身の菩薩、阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に、[一六六]定性の衆生、因緣を增長するが故に、未定性の者に因緣と作るが故に、未だ佛法に入らざる者をして入るを得しむるが故に、已に佛法に入れる者、佛法を敬ふが故に、三乘を樂む者に一乘を說くが故に、世間の人・天に樂を施すが故に。世尊、如來出世したまへば、是の如き等の不可思議の事あり。世尊、今此の大衆の一一の菩薩、悉く能く諸の大神通を示現す。是の故に諸佛及び諸菩薩は思議すべからず。世尊、云何が衆生は無明を愛重する。菩薩の是の如き神通を見ると雖も、而も故に聲聞緣覺に於て卑下の心を生ず。世尊菩薩初て菩提心を發す時、已に一切の聲聞緣覺に勝れたり。世尊、譬へば人有り諸の琉璃を捨て水精を取るが如し、一切の衆生また是の如く、大乘を捨て聲聞辟支佛乘を喜樂す。若し衆生の已に[一六七]阿耨多羅三藐三菩提心を發さんとする者有らば、是の如きの人、悉く當に是の如きの功德を獲得すべし』と。爾の時會中に三十億[一六八]那由他百千萬億の衆生の天と人と有り、阿耨多羅三藐三菩提心を發しぬ。

陀羅尼自在王菩薩品　第二之一

[一]爾の時世尊、諸の菩薩悉く已に大に集まれるを知り、是の思惟を作したまふ。『今日是の如き善丈夫等、皆諸法の實義を知るを得、能く如來甚深の法藏を持せんとし、諸の菩薩の行・無礙の法門を聞受するを得んと欲す』と。尋で眉間の[二]白毫より、光明の[三]無所畏と名くるを放ちたまふに、諸大衆を遶ること七匝を滿し已り、[四]陀羅尼自在王菩薩の頂上に入る。

爾の時陀羅尼自在王菩薩、佛の神力を承け、寶蓋を化作す。猶し三千大千世界の如く、七寶もて莊嚴したるを以て、如來寶座の上を覆ひ、頭面もて禮を作し、合掌長跪して、偈を說いて佛を讚ふ

界の惑を斷じて羅漢果を得。
※一、麗本之に作る、今三本に從ふ。
【一六四】佛道修行に於て、既に得たる功德を退失せざる位。大小乘によつて、其の位次を異にす。
【一六五】一生補處の菩薩、卽ち次生には決定して佛位を得る菩薩。
※最後身の菩薩、卽ち此生に得道すべき菩薩。
【一六六】聲聞・緣覺・菩薩の三乘に於て、各唯一の種子を具する衆生を定性といふ。
【一六七】梵に Anuttarasamyaksambodhi 無上正等正覺、無上正遍智など譯す。佛のさとりをいふ。阿耨多羅三藐三菩提心とはこのさとりを得んとする心なり。
【一六八】梵 Nayuta 百阿由多(Ayuta)をいふ。
【一】以下、晉譯は莊嚴法本品第四。
【二】佛の眉間に白玉の毫(Ūrṇākośa)あり、清淨柔軟にして右旋し、常に光を放つ、三十二相の一に數へらる。
【三】晉譯は無畏辯とす。
【四】同に總勢とす。

るも亦爾り。善男子、汝等今佛に說法を請ふ。是の因緣を以て、汝等當に無明の闇を破し、諸の衆生の爲に、智慧の明と作るを得べし』と。

[一五二]爾の時衆中に一菩薩有り、名けて[一五三]法自在王といふ、佛に白して言はく『世尊、如來の境界は不可思議なり、何を以ての故に。如來發心して將に說法せんとするや、能く一切の大衆をして雲集せしめたまふ。[一五四]菩提の爲の故に大莊嚴と大法神通とを作し、無量の世間に大名稱を得、身心寂靜にして解脫を獲得し、及び不可思議法界を得ての十方諸佛に讚歎せられ、一切の[一五五]十波羅蜜を具足し、善權方便を成就し通達して、能く一切諸魔の疑網を裂き、能く衆生惡邪の諸論を滅したまふ。よく一切の法界を分別し、無礙の智慧を逮得具足し、[一五六]念と意とを具して、智慧を行じたまふこと勇健に、四無礙智を具足獲得して、善く衆生諸根の利鈍を知り、衆生界を知りて隨意に說法し、常に能く淸淨の法界を宣說し、善く一切方俗の言を解し、能く一切淸淨の梵音を得たまひ、慈悲の心を具足成就し、諸の邪異見も能く動ぜしめず、[一五七]破壞すべからざること金剛山の如く、具に[一五八]三相を修して法幢を建立し、已に甚深の[一五九]十二因緣の河を渡り、[一六〇]斷常の見を斷ちて能く大衆を調し、無量劫中に不可思議の法樂を得、能く衆病を療すること大醫王の如く、深法を聞き已つて怖畏を生ぜず、[一六一]三十二相八十種好もて其の身を莊嚴し、[一六二]三十七品及び[一六三]八解脫を具足成就し、身口意の業純善無雜にして、能く衆生をして悉く來つて法を聽かしめたまふ。世間の法も汚す能はざるところ、常に安樂を受け、常に法界を修し、法寶を惠施して法に厭くことなく、諸の有法に於て心染著せざること、猶し蓮華の塵水に染まざるが如し。明勝の諸光智深きこと海の如く、三寶の性を紹ぎて衆生界を調し、能く佛藏を開いて佛法を護持し、無量の功德智慧を具足し、無量の劫中に無量の功德を修集莊嚴し、常に一行・*一心・一色・一處を獲得せんとして、是の如き等の功德を具せる菩薩、悉く來つて集會す。唯願はくは如來、菩薩の行無礙の法門を說き、過去未來現在の諸菩薩等を利益したまへ。

【一五二】晉譯、以下無盡法門品第三。

【一五三】同に法務王とあり。

【一五四】以下晉譯は六十項を數へ擧げたり就て見るべし。

【一五五】波羅蜜多(Pāramitā)の略、度と譯す、菩薩の修すべき十種の行、施・戒・忍・進・定・慧・方便・願・力・智。

【一五六】記憶して忘れざること。

【一五七】晉譯に其志堅强、猶如金剛、不可破壞、如鐵圍山とす。

【一五八】一に解脫相(生死の相なきをいふ)。二に無相(涅槃の相なきをいふ)。三に滅相(生死涅槃の無相なる、その相も亦無相なるをいふ)。

【一五九】衆生存在の所以をば、十二支を以てその相依相資に依るを示されたる說。

【一六〇】斷見(常住なるものをも無常なりと見る)と常見(その反對)、共に因果の理を知らざる說。

【一六一】佛菩薩の身に現れたる特色を擧げて或は三十二相とし、或は更に精しく八十を數ふ。

【一六二】菩薩の修すべき七科(四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道分)の道品。

【一六三】八種の解脫觀、これによつて欲界の五欲を離れ、三

示するが故に—是の如き等の諸因緣を以ての故に、如來師子寶座に昇りたまふ。

爾の時、[一四一]寶杖菩薩、佛の神力を承けて佛の瓔珞莊嚴三昧に入り、三昧力を以ての故に、能く大衆をして悉く種種の瓔珞莊嚴を得しむ。時に[一四二]稱力王菩薩、復佛の神力を承けて蓮華三昧に入り、三昧力を以ての故に、悉く大衆をして皆妙花を得、佛及び諸菩薩を供養せしむ。時に[一四三]大海慧智菩薩亦佛の神力を承けて妙香三昧に入り、三昧力を以ての故に、能く大衆をして皆妙香を得、佛及び諸菩薩を供養せしむ。時に[一四四]寶網菩薩亦佛力を承けて光明三昧に入り、三昧力を以ての故に、悉く大衆をして身に光明を得しむ。時に[一四五]悲心菩薩、亦佛神力を承けて無礙三昧に入り、三昧力を以ての故に、悉く大衆をして如來の目未だ會て瞬かざるを仰瞻せしむ。時に[一四六]無邊淨意菩薩、亦佛神力を承けて喜三昧に入り、三昧力を以て悉く大衆をして法を聽くことを喜樂せしむ。時に[一四七]莊嚴樂說菩薩、亦佛神力を承けて寂靜意三昧に入り、三昧力を以て悉く大衆をして[一四八]五蓋を遠離せしむ。時に[一四九]一切法神足王菩薩、亦佛神力を受けて不忘三昧に入り、三昧力を以て悉く大衆をして、菩提心を專念し忘失せざらしむ。時に[一五〇]勇健菩薩、亦佛神力を受けて無勝三昧に入り、三昧力を以て悉く大衆をして諸魔を摧伏せしむ。

一時に[一五一]破魔菩薩、亦佛神力を承けて破魔三昧に入り、三昧力を以て、此の三千大千世界一億の魔王を召すに、寶坊に來集して佛所に至り、頭面作禮合掌恭敬して皆是の言を作す『唯願はくは如來、廣く衆生の爲に甘露の門を開きたまはんことを。我等皆破魔菩薩の威神力に因るが故に、當に一切魔業を遠離するを得て、諸大衆の心に於て妨礙する無かるべし』と。佛言はく『善い哉・善い哉、善男子、汝等今已に魔業を離るゝを得たり。是の因緣を以て未來世に復當に一切の魔業を離れ得べし。善男子、譬へば一處の百年の闇室をも、一燈能く破せんが如し。汝等亦爾り、無量世中の無明の黑闇、今日能く破せむこと、日月の寶光の如くならん。信と戒と施と慧と禪定とに住す

【一四一】晋譯に寶幢とあり。
【一四二】同に名聞力とあり。
【一四三】晋譯に三昧時海覺とあり。
【一四四】晋譯に明網とあり。
【一四五】晋譯に大哀念とあり。
【一四六】晋譯に離垢察無底とあり。
【一四七】晋譯に辯嚴とあり。
【一四八】五種の煩惱。
【一四九】晋譯に變諸法王とあり。
【一五〇】晋譯に心勇とあり。
【一五一】晋に降諸魔とあり。

便もて衆の爲に色心を說きたまふ、如來の神通は猶し幻の如し、諸法界を知りたまふこととまた然り。一切衆生の心は常に淨し、或時〔一三三〕客煩惱の爲に汚さる、諸佛如來は解脫を得、神通等を示現したまふこと幻の如し。虛空は〔一三四〕地なく住處なし、如來の心亦是の如し、衆の爲の故に師子座に昇り、先の諸佛の如く甘露を說きたまふ。一切の大衆は去來なく、亦說を聽くなく受くる者なし、諸法は悉く皆虛空の如し、唯願はくは眞實界を開闡したまはんことを。世尊、我が師子座を受けて、願はくは衆生の爲に師子吼したまへ、衆を愍むが故に梵音聲を演べ、智燈を熾然して癡闇を破したまはんことを。十方の諸來聽法の衆は、悉く來りて此の寶坊に集會す、願はくは佛當に大法施を施し、無量世の貧窮の際を破したまはんを』と。

爾の時世尊、大慈悲を以て諸法自在功德花子菩薩摩訶薩を憐愍し、其の所奉の師子寶座に昇り、一切諸菩薩の行無礙の法門、一切の佛法・十力〔一三五〕四無所畏を具足し、一切法自在陀羅尼に入るの法門、〔一三六〕入四無礙智の法門、入大神通の法門、法輪を退轉せず、住處を退せず、一切〔一三七〕乘を攝して一切法界無分別法界を具し、善く一切衆生の心根を知り、法界は眞實堅固にして沮し難く、能く一切四魔の怨讎を壞し、一切の惡見煩惱を調伏し、〔一三八〕不共の善權方便を獲得すること、大平等心を得て無二なるが故に、一切諸佛等の入りたまへる處、無罣礙の處を說かんと欲し、一切法の悉く眞實なるを說くが故に、諸法は覺に非ず非覺に非ざるを演說するが故に、十二因緣の平等の相を觀ずる故に、智慧の大莊嚴を具足するが故に、佛身・佛音聲を莊嚴するが故に、無盡に意を念じ智慧を行ずるが故に、眞實の〔一三九〕四聖諦を演說するが故に、能く聲聞の身心をして淨ならしむるが故に、〔一四〇〕辟支佛をして紹位の床に坐せしむるが故に、大乘の菩薩をして法の自在を得しむるが故に、諸佛所有の功德を廣宣するが故に、一佛の法を解說宣示するが故に、諸菩薩の大功德を說くが故に、諸衆生の疑網心を裂くが故に、一切の惡邪論を摧滅するが故に、如來・佛の正法を增長するが故に、衆生に佛の神力を顯

【一三二】物・心といふが如し。
【一三三】衆生の心は本來清淨なるも、煩惱の爲に汚さるを以て客といふ。
【一三四】依止するところ無きをいふ。
【一三五】佛は十智力を具したまへるが故に、衆の中に在つて法を說くも畏るゝ無きを四項に數へたるもの。
【一三六】佛の說法したまふや、自在の辯才あるを四項に攝めたるもの。
【一三七】のりものの義、法門の謂。
【一三八】共通せざる、卽ち獨特の意。
【一三九】苦、苦の集、苦の滅、滅の道を四諦といふ。
【一四〇】Pratyeka-buddha、緣覺と譯す。

つる、諸佛の法界は思議し叵し、[一二四]菩提の法輪もて[一二五]涅槃に入る』と。

時に諸菩薩偈もて佛を讃歎し頭面もて禮し已り、已が神力を以て佛の上方に床座を作化し、次第して坐せり。爾の時、一念中の間に、十方無量の諸大菩薩は、一時に大寶坊中に雲集したり。

[一二六]爾の時世尊即ち三昧より安詳として起ちたまふに、謦欬の聲十方に徹し、一切衆生悉く之を聞くを得、聞き已つて即ち佛寶・僧寶に於て信敬の心を生ず。十方世界のあらゆる[一二七]比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、若しは人・非人など、佛聲を聞き已りて身心寂靜たり。佛の功德威神力を以ての故に、悉く寶階の梯隥を覩見するを得、一念の頃に於て悉く寶階を蹬りて寶坊中に至り、各その位に隨ひ次第して坐す。諸の梵天人亦その聲を聞く。[一二八]梵天・大梵天・梵師天・梵衆天・光天・少光天・無量光天・淨天・少淨天・無量淨天・無雲天・福德天・廣果天・無誑天・無熱天・善見天・樂見天・阿迦尼吒天なども亦一念の頃に、倶に寶坊に至り、佛世尊を見まつり、頭面もて禮し已り、次第して坐するに床座を化作す。

爾の時世尊、諸の大衆皆已に集會せるを見、眉間より光を放ちたまふ、其の光を名けて示菩薩力といふ。諸菩薩を遶ること七匝し、諸菩薩の[一二九]頂髻に於て入る。爾の時會中に一菩薩有り、[一三〇]諸法自在功德花子と名く。即ち三昧に入る、其の三昧を瓔珞莊嚴と名く。三昧力を以ての故に、寶坊中に於て師子座を出す、座の高さ八萬億[一三一]多維樹、七寶もて莊嚴し種々の花を散らす。諸衆生の樂見する所たり。能く一切衆生の心を淨む。爾の時諸法自在功德花子菩薩摩訶薩、是の如き師子座を化作し已り、其の三昧より安詳として起ち、合掌恭敬頭面作禮し、即ち佛前に於て偈を以て讃へて曰はく、

『日月の光明は現冥を壞するに、佛の光は能く三世の闇を壞す、如來は神通力を具足して、一切諸天の光に勝れたまふ。佛は法界を了して覺知無きこと、幻の水月の去來なきが如し、生なく受なく作者なきを、眞實に知り已りて衆の爲に說きたまふ。[一三二]色心中に色心なきを知りつゝ、方

【一二四】梵に Bodhi、佛のさとり(正覺)の智慧。
【一二五】梵に Nirvāṇa また泥洹ともいふ、迷妄を脫し、寂滅無爲の法性を究め、不生不滅の法ォの眞證に歸せるをいふ。
【一二六】以下晉譯、嘆會品第二。
【一二七】Bhikṣu(乞士)、Bhikṣuṇī(乞女)、Upāsaka(近事男)、Upāsikā(近事女)。後二者は佛道に入りたる在俗の男女なり。この四者を四衆と稱す。
【一二八】以下は欲界の上なる色界の十八天なり、初は初禪の四天、次は二禪の三天、次は三禪の三天、次は四禪の八天なり。最後は Akaniṣṭha(色究竟天)の音譯なり。晉譯には光音告勅梵天、梵忍天」、梵身人王、梵滿天王、梵度著天王、大梵天王、光曜天、少光天、無量光天、光音天、淨嚴天、少淨天、無量淨天、難還天、淨身天、用果天、無捷天、於是大善施天、善所施天とあり。
【一二九】又肉髻ともいふ、頂骨の隆起せる樣、髻に似たるによる。梵に烏瑟膩沙(Uṣṇīṣa)。
【一三〇】晉譯に首藏華諸法自在といふ。
【一三一】梵に Tāla といふ。印度に於て高さを量る尺度としたり。一多羅樹の高さ七仞(四十九尺)なりと。

て娑婆世界に來至し、釋迦牟尼佛を見まつり、頭面もて禮を作して右遶萬匝し、妙香花を以て佛を供養し、復佛前に於て偈を以て讃して曰はく、

『佛甚深の諸法界を知り、常に寂靜を樂んで〔一六〕無の想を修し、及び衆生の諸心想を知り、諸法虚空の如しと說きたまふ。一心の中に住して三世を知り、また能く種々の業を知り、心想・衆生想を生ぜず、無量世に無相の想を修したまふ』と。

時に諸菩薩、偈もて佛を讃歎し、頭面もて禮し已り、己が神力を以て、佛の東北に床座を化作し次第して坐せり。爾の時下方に佛世界有り、名けて〔一七〕樂光といひ佛を〔一八〕寶優鉢華と號しまつる。彼に菩薩有り〔一九〕莊嚴樂說と名く。斯の光に遇ひ已り、即ち十方恒河沙等の諸大菩薩と倶に、共に發ちて娑婆世界に來至し、釋迦牟尼佛を見まつり、頭面禮敬右遶萬匝し、妙香花を以て佛を供養し、復佛前に於て、偈を以て讃して曰はく、

『無量智者たる佛の眞子は、數十方の微塵等の如し、無量劫に於て佛に諮問するも、如來の一字義を盡さず。是の故に如來の智は邊無く、功德・〔二〇〕總持亦是の如し、名稱力勢邊際無く、猶し大海・十方の界の如し』と。

時に諸菩薩偈もて佛を讃歎し、頭面作禮し、己が神力を以て如來の下方に床座を化作し、次第して坐す。爾の時上方に佛の世界有り、瓔珞莊嚴と名け、佛を大名稱と號しまつる。彼に菩薩有り〔二一〕一切法神通王と名く。斯の光に遇ひ已り、即ち十恒河沙等の諸菩薩衆と倶に、共に發ちて娑婆世界に來至し、釋迦牟尼佛を見まつり、頭面禮敬右遶萬匝し、妙香花を以て佛を供養し、即ち佛前に於て偈を以て讃して曰はく、

『佛身の身業は邊際無く、〔二二〕心及び口の業も亦是の如し、唯佛のみ能く佛の〔二三〕三業を知りたまふ、餘は知らざること虚空の邊の如し。如來は師無く、敎ふる者なし、是の故に衆生は大師と稱しま

〔一六〕晉譯に「省二察諸空想一」といふ。

〔一七〕晉譯に照明とあり。

〔一八〕同に深青蓮首とあり。

〔一九〕同に辯嚴といふ。

〔二〇〕陀羅尼(Dhāraṇī)の譯。

〔二一〕晉譯に諸法變王といふ。

〔二二〕本文に心口及業とあるも、上の如き意なるべし。

〔二三〕身・口・意の作す所を三業といふ。

次第して坐す。爾の時西南方に佛世界有り、名けて[一〇五]善見といひ、佛を[一〇六]心平等と號しまつる。彼に菩薩有り[一〇七]大悲心と號す。斯の光に遇ひ已り、卽ち十恒河沙等の諸菩薩衆と倶に、共に發ちて娑婆世界の大寶坊中に來至し、釋迦牟尼佛を見まつり、頭面もて禮敬し、右遶萬匝し、妙香花を以て佛を供養し、復佛前に於て偈を以て讃じて曰はく、

『無量世中に[一〇八]禁戒を護ること、猶し犛牛の其の尾を愛する如し。戒を毀つ有るを見ては悲心を生じ、亦憍慢にして己身を讃したまはず。如來の心は須彌の如く、十方の邪見も能く動かさず、智慧甚深にして底を得るなきこと、猶し大海の思議し難きが如し。佛自ら一切の[一〇九]有を解脫し、亦苦の縛より解脫するを得しめたまふ。所得の解脫實に差なきも、道行の時に隨つて別異あり』と。

時に諸菩薩、偈もて佛を讃歎し、頭面にて禮し已り、己が神力を以て、佛の西南に床座を化作し、次第して坐す。爾の時西北方に佛世界有り、名けて[一一〇]壞闇といひ、佛を[一一一]大神通王と號しまつる。彼に菩薩有り、名けて[一一二]寶網といふ。斯の光に遇ひ已り、卽ち十恒河沙等の諸菩薩衆と倶に、共に發ちて娑婆世界の大寶坊中に來至し、釋迦牟尼佛を見、頭面もて禮敬し、右遶萬匝し、妙香花を以て佛を供養し、復佛前に於て偈を以て讃へて曰はく、

『如來世尊は猶し幻の如く、而も衆生の爲に幻事を說きたまふ。實に眞物無きが故に幻と名け、衆生有ること無きに衆生と說く。人の夢中に諸色を見、寤め已て眞實には色相無きが如し、衆生を度せんが爲に世行を示したまふも、如來には眞實に世行無きなり』と。

時に諸菩薩偈もて佛を讃歎し、頭面もて禮し已り、己が神力を以て佛の西北に床座を化作し、次第して坐す。爾の時東北方に佛世界有り、名けて[一一三]淨住といひ、佛を[一一四]心同虛空と號しまつる。彼に菩薩有り[一一五]無邊淨意と名く。斯の光に遇ひ已り、卽ち十方恒河沙等の諸菩薩衆と倶に、共に發ち

【一〇三】晋譯に除衆疑冥といふ。
【一〇四】同に普曜といふ。
【一〇五】晋譯に善觀といふ。
【一〇六】同に大哀觀衆生といふ。
【一〇七】同に思於大哀といふ。
【一〇八】戒律(Śīla)のこと。※犛は、からうし尾の長き牛なり。
【一〇九】生死の相續、存在のこと。
【一一〇】晋譯に離暗冥といふ。
【一一一】同に光淨王といふ。
【一一二】同に光曜網といふ。
【一一三】晋譯に住淨離苦とあり。
【一一四】同に空城離垢心とあり。
【一一五】同に譽無底離垢とあり。

『無量劫に於て善き願を發したまふ、是の故に身淨くして[98]無漏なるを得たり。如來の行業は虚空の如く、無礙の音聲は十方に遍し、如來の梵聲は雷音の如し、此の聲は業無く因の出すところに非ず、聽無く受無く衆生無し、大悲何の故にか音聲もて說きたまへる』と。

時に諸菩薩、偈もて佛を讃歎し、頭面もて禮し已り、己が神力を以て、佛の西邊に於て床座を化作し、次第して坐す。爾の時北方に佛世界有り、[99]寶莊嚴と名く、佛を[100]無量功德莊嚴と號しまつる。彼に菩薩有り[101]大海智と名く。斯の光に遇ひ已り、卽ち十恒河沙等の諸菩薩衆と倶に、共に發ちて娑婆世界の大寶坊中に來至し、釋迦牟尼佛を見、頭面もて禮敬し、右遶萬匝し、妙香花を以て佛を供養し、復佛前に於て偈を以て歎じて曰はく、

『如來の無上金光明は、能く一切世間の闇を壞したまふ、若し衆生有りて斯の光に遇はゞ、遇ふ者悉く能く煩惱を壞せん、設身は高く大千界を出で、神通道力邊際無きも、是の人[102]頂相を見る能はじ、大悲は曠世に何の業をか造りたまはん』と。

時に諸菩薩、偈もて佛を讃歎し、頭面にて禮し已り、己が神力を以て佛の北邊に於て床座を化作し、次第して坐せり。爾の時東南方に佛世界有り、名けて無憂といひ、佛を[103]能壞一切闇と號しまつる。彼に菩薩有りて[104]無勝光と名く。斯の光に遇ひ已り、卽ち十恒河沙等の諸菩薩衆と倶に、共に發ちて娑婆世界大寶坊中に來至し、釋迦牟尼佛を見まつり、頭面もて禮敬し、右遶萬匝し、妙香花を以て佛を供養し、復佛前に於て偈を以て讃じて曰はく、

『無量界は一毛孔に入りて、亦諸衆生を嬈害せず、如來の境界は知る者無し、是の故に神通は思議し難し。能く一身をして無量と作らしめ、而も其の眞身に增減なし、衆生の爲に神變を現ずと雖も、然も其の內心憍慢無し』と。

時に諸菩薩、偈もて佛を讃歎し、頭面にて禮し已り、己が神力を以て佛の東南に床座を化作し、

【八二】晉譯に首藏華諸法自在といふ。
【八三】梵にSaha忍土と譯す、內に煩惱、外に風雨寒暑等の苦に忍ばざるべからざる國土の謂。
【八四】Śākya族のMuni(默寂)卽ち修道者の義より轉じて個有名詞となれり。
【八五】佛に向つて右に佛を遶るなり。
【八六】生死海(の此岸)に對して涅槃(の彼岸)をいふ。
【八七】釋迦族の師子王卽ち佛。
【八八】智解德行の鈍きもの。
【八九】晉譯に佛辯とあり。
【九〇】同に無量寶德辯とあり。
【九一】同に寶柱といふ。
【九二】八正道なり。
【九三】煩惱をいふ。
【九四】三界なり。
【九五】晉譯に照耀といふ。
【九六】同に普明といふ。
【九七】同に顯音契王といふ。
【九八】漏は結漏の義、卽ち煩惱をいふ。無漏(Anāsrava)とは煩惱を增長せしめざるものをいふ。
【九九】晉譯に衆寶錦界といふ。
【一〇〇】同に無量德寶光といふ。
【一〇一】同に海覺といふ。
【一〇二】佛の八十種好の一に無見頂相といふあり、佛の頂骨隆起するも他より見る能はずとせらるるに依り此の名有り。

爾の時東方に佛世界有り、名けて[八〇]無量功德寶聚神通といふ。佛世尊ましまして[八一]淨大淨光七菩提分寶花無斷光王と號す。彼に菩薩有り、[八二]諸法自在功德花子と名く。斯の光に遇ひ已り、十恒河沙等の諸大菩薩と倶に、共に發ちて[八三]娑婆世界の大寶坊中に來至し、[八四]釋迦無牟佛を見、頭面もて禮敬し、[八五]右遶萬匝、妙香花を以て佛を供養しまつり、卽ち佛前に於て偈を以て讃じて曰はく、

『一切功德もて[八六]彼岸に到り、常に十方佛の所稱たり、無礙の名號は十方に遍ねし、大慈大悲たり[八七]釋師子。如來の法界は差別なし、[八八]鈍根の者の爲に差別を說き、一法の無量たるを宣說したまふこと、大幻師の衆事を示すが如し』と。

時に諸菩薩、偈もて佛を讃歎し頭面もて禮し已り、己が神力を以て、佛の東邊に床座を化作し、次第して坐す。爾の時南方に佛世界有り、名けて[八九]佛光といふ。佛世尊有して[九〇]無量功德寶と號す。彼に菩薩有り名けて[九一]寶杖といふ。斯の光に遇ひ已り、卽ち十恒河沙等の諸菩薩衆と倶に、共に發ちて娑婆世界大寶坊中に來至し、釋迦牟尼佛を見、頭面もて禮敬して右遶萬匝し、妙香花を以て佛を供養しまつり、卽ち佛前に於て偈を以て讃じて曰はく、

『大慈の法雲は法雨を降らし、常に無常・空・無我を說き、[九二]八正の水を以て[九三]結の火を滅し、能く衆生の諸善根を長ぜしめたまふ。佛の光能く無明の闇を破し、能く放逸の諸菩薩を誨へ、能く[九四]三有の諸愛種を焦き、能く眞實の道と非道とを示したまふ』と。

時に諸菩薩偈もて佛を讃歎し、頭面もて禮し已り、己が神力を以て、佛の南邊に床座を化作し、次第して坐す。爾の時西方に佛世界有り、名けて[九五]光明といふ、佛を[九六]普光と號しまつる。彼に菩薩有り、[九七]稱力王と名く。斯の光に遇ひ已り、卽ち十恒河沙等の諸菩薩と倶に、共に發ちて娑婆世界大寶坊中に來至し、釋迦牟尼佛を見まつり、頭面もて禮敬し、右遶萬匝して、妙香花を以て佛を供養し、復佛前に於て偈を以て讃して曰はく、

五。晉譯に無憍樂天とあり。
【六八】如來の智力十種を數へたるもの。
【六九】形色無きをいふ。
【七〇】梵に Paranirmitavaśavartina、六欲天の最高なり。
【七一】身心のあらゆる故意の活動を止息して平靜なること。
【七二】心を精らにして道に進むなり。
【七三】解脱を得る三の方法、(一)諸法の空なるを觀じ、(二)諸法に差別の相なしと觀じ、(三)更に欲求の思を離るることをいふ。空・無相・無願の三三昧ともいふ。
【七四】鬚とは、花の蘂をいふ。
【七五】敷は花の開けるをいふ。この句、晉譯相當文に以二寂然一爲レ華、解脱成二其實一とあり。
【七六】晉譯に無蓋法門娛樂とあり。
【七七】維は角也、四隅をいふ。
【七八】貪欲(Rāga)・瞋恚(Pratigha)・愚癡(Moha)の三毒なり、晉に婬・怒・愚癡とあり。
【七九】優曇鉢羅華(Udumbara)の略、靈瑞華と譯す。三千年に一度開くと云はる。
【八〇】晉譯に無量功德寶普辟といふ。
【八一】同に離苦淨光海華無斷光といふ。

つる。其の心平等にして虚空の如く、香塗と割刺とに心無二にして、能く無量衆生の垢を淨む、我れ今佛の法河を敬禮しまつる』と。

時に他化自在天王と諸天子、偈もて佛を讚じ已り、即ち佛後に尋ぐ。諸天各各佛を讚歎し已る。爾の時如來、無量神通道力を示現し、漸漸に彼の七寶の坊中に至りたまふ、四天下の如きは佛の上昇したまふを見る。三千大千世界の所見また是の如し。爾の時世尊、寶坊の中に至り師子座に昇りたまふに、聲聞菩薩各各次第に寶座に坐す。爾の時世尊、佛の三昧に入りたまふ。其の三昧を[七六]無礙解脱と名く。一一の毛孔より大光明を放つ、其の數無量にして恒沙等の如し。東方無量の世界を照し、南西北方四[七七]維上下また是の如し。地獄も光を蒙り衆苦息むことを得、其の餘の衆生は[七八]貪・恚・癡を除き、慈心もて相向ふこと父の如く子の如し。爾の時佛の功德力を以ての故に、其の光明中に是の如きの偈を說きたまふ、放逸の諸菩薩を勸めんが爲の故なり。

『如來の精進は無量邊なり、精進の力無量劫を過ぐ、誰か能く佛光明の德を讚へむ、唯十方の諸世尊有して、十方の諸菩薩の、放逸を樂み禪を修せざるを勸めんが爲に、釋迦如來この光を放ち、諸の菩薩を召して此の界に集めたまふ。佛は十力を具足成就して、能く世界の諸魔王を破し、世法の汚さざること蓮花の如し、これ其の光明量有ること無し。如來此の無上輪を轉じたまふ、諸天世人の能はざる所、諸衆生の爲に法輪を轉ずること、もと十方佛の轉ずる所の如し。如來今は大會を集めたまふ、見難きこと猶し[七九]優曇花の如し、若し信心成就の者有らば、悉く聽法の爲に佛所に至れ』と。

是の光明中所說の偈頌は遍く十方に告げ、一切の諸菩薩等を勸喩し、一切世界大地を振動し、普く一切の衆生に安樂を施し、能く一切衆生の煩惱を淨め、衆生の無明癡闇を破壞し、能く一切天魔の宮殿を蔽ひ、光十佛に遍して還頂より入る。

【五三】 鳩槃荼(Kumbhāṇḍa)か。
【五四】 厭人。梵に烏蘇慢と。
【五五】 印度の禮法。兩膝を地に着けて禮するなり。
【五六】 伽陀(Gātha)卽ち韻文なり。
【五七】 地獄・餓鬼・畜生の三惡趣なり。
【五八】 Sarvasiddha。一切成就と譯す。薩婆悉達多の略、釋尊の幼名なり。
【五九】 佛法守護の四方の天王―持國(東)、增長(南)、廣目(西)、多聞(北)なり。
【六〇】 帝釋(Indra)は須彌山の頂上、忉利天(Trāyastriṃśa)の主、四天王及び他の三十二天を領し佛法に歸せる者を守り、阿修羅の軍を征す。
【六一】 天眼・天耳・他心・宿命・神足・漏盡の六種の神通。
【六二】 また無等倫(Asamasama)、ともに等しきもの無き意にて佛をいふ。
【六三】 梵に Yāmā、欲界六天の第三、晉譯に須深(焰)天王とあり。
【六四】 邊際なり。
【六五】 また覩史多(Tuṣita)、欲界六天の第四。
【六六】 諸法の體性、卽ち眞如のこと。
【六七】 また樂變化(Nirmāṇaratuya)といふ、欲界六天の第

時に夜摩天王と夜摩天子、偈もて佛を讃し已り、尋で佛後に侍す。爾の時[六五]兜率天王と兜率天子、其の界次の階上に佛を見、天の花香微妙の伎樂を以て之を供養し、偈を以て佛を讃ふらく

『佛は諸法の幻炎の如くにして、受なく作なく字說なきを知りたまふも、衆を愍みたまふ故に、不可說と說き、記して無我を說き[六六]法性を知らしめたまふ』と。

時に兜率陀天王と兜率天子、偈もて佛を讃し已り、尋で佛後に侍す。爾の時[六七]化樂天王と善化樂天子、其の界次の階上に佛を見、天の花香・微妙の伎樂を以て之を供養し、偈を以て佛を讃へ、

『如來具足して[六八]十力を得、諸の法界は虚空の如くなるを知しめされ、[六九]無色なれども哀愍して形色を示し、其の心平等に衆生を視たまふ。如來常に世尊の行を行じ、衆生の爲の故に世行を行じて、無分別の諸法界を開きたまふ、我れ今非天人を敬禮しまつる』と。

時に化樂天王と諸天子、偈もて佛を讃し已り、尋で佛後に侍す。時に[七〇]他化自在天王と他化自在天子、其の界次の階上に於て佛を見、天の香花・微妙の伎樂を以て之を供養し、偈もて佛を讃ふらく、

『戒の如くして[七一]寂靜地に住し、無上の三昧定を修集したまふ、其の知礙無く邊有る無し、我れ畢竟解脫者を禮しまつる。大慈大悲の微妙の語、眞實に能く道と非道とを知る、勇健の[七二]精進力は勝るるなし、我れ今無能動を敬禮しまつる。常に能く[七三]三解脫を修集し、能く稱讃して其の德を盡すなし、烏は金烏に同じからずと雖も飛び、亦能く力に任せて遊翔す、我れ今烏の如く力に任せて讃へん、唯願はくは哀愍して微歎を受けたまはんことを。種せずんば其の果實を收めえず、如來を讃へざれば解脫なし、憐愍を葉と爲し智慧を花とす、三昧を[七四]鬚と爲し解脫を[七五]敷とす。菩薩の蜂王甘露を食す、我れ今佛の法蓮華を禮しまつる。大悲の智慧光圓滿にして、能く衆生の無明の闇を破す、其の戒淸淨にして衆樂んで見る、我れ今佛の法月を敬禮しま

といふ。

【三八】動・起・涌・震・吼・擊の六種なり、六反震動ともいふ。

【三九】Śrāvaka の譯、佛の敎により六十劫の修行を經て阿羅漢を證する聖者。

【四〇】塗香とは、身體に塗る香料。

【四一】末香とは、粉末にせる香。

【四二】Manda(or ā)rava。白團華、適意華などと譯す。高潔にして異香あり、見るものを悅ばしむと。

【四三】Mahā〜。大白(蓮)華と譯す。

【四四】Mañjūṣaka。赤團華、柔輭華など譯す。天華の名、見るもの强剛の三業を離るといふ。

【四五】Mahā〜。大柔輭、大赤團花と譯す。

【四六】晉譯には只、天龍八部衆を揭ぐるのみ。

【四七】乾闥婆(Gandharva)なるべし。

【四八】阿修羅(Asura)の譯語。

【四九】迦樓羅(Garuḍa)の譯、龍をとりて食すと云はるゝ鳥類の王。

【五〇】摩睺羅伽(Mahoraga)の譯。

【五一】畢舍遮(Piśāca)の意譯なるべし。

【五二】薜荔多(Preta)か。

き、微妙の音を出し、四天下の如し、三千大千世界また是の如し。

爾の時世尊、三昧より起ちたまふに、大千世界[三八]六種に振動せり。亦無勝最大の光明を放ち、卽ち[三九]聲聞菩薩大衆に前後圍遶せられて、彼の坊に往かんと欲したまふ。一切諸天は尊重讃歎し、香花・伎樂[四〇]・塗香[四一]・末燒香・[四二]曼陀羅花・[四三]摩訶曼陀羅花・[四四]曼殊沙花・[四五]摩訶曼殊沙花等を以て供養を爲す。能く無量無邊の世界を動かし、光明遍く照らして大に明さざるなく、諸佛神通の功德を示現せり。

爾の時に當り耆闍崛山の一切大衆、忽然として現ぜず、蹬中の階節虛空に上昇す。時に無量億の[四六]諸天龍等及び不護神・[四七]伎樂神・[四八]非天神・[四九]金翅鳥舞神・[五〇]腹行神・[五一]嗜肉神・[五二]善餓鬼神・[五三]甕耳鬼神・住厠の羅刹・[五四]厭人鬼・能狂鬼・影鬼・產乳羅刹・持髮鬼・常碎鬼、是の如き等の衆悉く佛に侍從し、天の香花・微妙の天樂を以て之を供養す。

爾の時四天王、合掌[五五]長跪し[五六]偈を以て佛を讃ふらく、

『如來の光明は一切に勝れ、能く[五七]三惡道の黑闇を壞したまふ。今我れ歸依し、樂うて[五八]薩婆悉達無上尊に依止す』と。

時に[五九]四天王と諸の天人、偈もて佛を讃し已り、尋で佛後に侍す。爾の時[六〇]帝釋と忉利天人其の界次の階上に佛を見、天の香華・微妙の伎樂を以て之を供養し、偈を以て佛を讃ふらく

『如來は[六一]六神通を具足したまひ、所得の大悲能く勝るゝなし。佛の功德を以て十方を嚴ず、我今[六二]無與等を敬禮しまつる』と。

時に帝釋と忉利天、偈もて佛を讃し已り、尋で佛後に侍す。爾の時[六三]夜摩天王と夜摩天子、其界次の階上に佛を見、天の香花微妙の伎樂を以て之を供養し、偈を以て佛を讃へり、

『無礙の智慧は[六四]邊有ること無く、善く衆生三世の事を解し、一心にして能く無量の心を知りたまふ、是の故に無上を稽首し禮したてまつる』と。

り。
【二七】　法門の意。
【二八】　神變不可思議にして無礙自在なる通力。
【二九】　また三摩地(Samādhi)、等持と譯す、定を修し心を一境に安住せしめて動かざるをいふ。
【三〇】　三界(欲・色・無色)の中の下二界なり。晉譯には上至ニ欲界及無色界一といふ。
【三一】　一世界(須彌山を中心とし、之に日月、四天下並に諸の天を合したるもの)の千倍を小千世界。小千世界の千倍を中千世界。中千世界の千倍を大千世界、又は三千大千世界といふ。
【三二】　檐。麗に簷に作る。今宋等三本に從ふ。檐はのきなり。
【三三】　幡は、はた、蓋は天蓋なり。
【三四】　佛を人中の師子に喩へ、その床座を師子座といふ。
【三五】　須彌の四方の鹹海に在る四大洲なり。南瞻部洲(Jambudvīpa)、東勝身洲(Pūrvavideha)、西牛貨洲(Aparagodānīya)、北瞿盧州(Uttarakuru)の四これなり。
【三六】　階。麗本は梐に作る、今宋元明三本に從ふ。
【三七】　Yojana。印度の里數の名、四十里又は三十里に當る

諸佛の一切世界を見、善[一九]法藏を積んでは猶し大海の如く、諸の[二〇]陀羅尼・寂靜の聖行及び大慈悲を具足成就し、清淨に[二一]定慧二目を莊嚴し、久しく已に深法[二二]怖畏を遠離せり。無量[二三]劫中所修の[二四]菩提、未だ畢竟せざれば、終に休息せず、菩薩のあらゆる功德を成就せり。其の[二五]名を慧光無礙眼菩薩摩訶薩、見一切田莊嚴瓔珞菩薩摩訶薩、不斷如來性出世意菩薩摩訶薩、爲諸衆生示現細行神足菩薩摩訶薩、無量樂說無礙神足幢名稱菩薩摩訶薩、淨衆光自在王菩薩摩訶薩、善能論解字義廣說論義神足菩薩摩訶薩、無量功德智慧莊嚴住菩薩摩訶薩、是の如き等の菩薩摩訶薩、常に如來と同止共住せり。如來常に爲に菩薩所行法門の法を分別宣說したまへり。

爾の時如來、[二六]佛道を成得し、始めて十六年、廣く衆中の多く梵行を修せるもの、悉く來りて大に集まり、菩薩の[二七]法藏を受持するに堪任ふるを知りたまふ。爾の時如來即ち是の念を作したまふ。『我れ今當に是の如き無量の象王衆中に於て、菩薩所行の法を宣說すべし。先づ當に諸佛如來の[二八]大神通力を示現すべし。諸の菩薩をして諸佛の深境界を知らしめむが爲の故に』と。

爾の時世尊即ち[二九]三昧に入りたまふ。其の三昧を佛境神通實見衆生と名く。佛の功德威神力を以ての故に、[三〇]欲・色天二界の中間に於て、大坊庭を出す。猶し[三一]三千大千世界の如し。定・慧二力の成就するところにして、佛の遊居せらるゝに堪任へたり。復大光を出すに其の明、清淨にして、遍く十方諸佛の世界を照し、能く衆生をして知足の心を得しめ、諸天宮に於て最も殊勝たり。能く十方の放逸なる菩薩を勸む。其の坊は四に白瑠璃樹を匝らし、眞金を牆と爲し、功德の寶室は馬瑙を以て垂[三二]檐とし、雜寶の欄楯あり、白眞珠網を以て其の上を覆ひ、種々の[三三]幡蓋を以て莊嚴と爲し、衆香を地に塗り、雜香を燒散せり。十方世界の衆生の有らゆる上妙の莊嚴悉く中に於て現じ、無量百千萬億の[三四]師子法座を安置せり。其の座には各無量雜色柔軟の敷具あり、能く衆生をして歡喜愛樂せしむ。諸の[三五]四天下に各七寶を以て四[三六]梯階を作し、金剛の階隥廣さ十[三七]由旬、其の行く時の如

【一三】晉譯に決了普知、諸通敏慧と云ひ、大比丘僧を形容する句につゞけたり。
【一四】三十七道品なり。
【一五】善き果報を受くべき善因。
【一六】本は因の義。
【一七】また蘇迷盧(Sumeru)、妙高山と譯す。一世界の中心にして、水面より高さ八万由旬、縱廣亦然り、環らすに七重の山海を以てすと稱せらる。こゝはその堅住不動なるに喩へたり。
【一八】梵は清淨の義なり。
【一九】多くの功德の謂なり。
【二〇】梵 Dhāraṇī 總持、能遮などと譯す。
【二一】禪定と智慧となり。
【二二】晉譯に於深妙法而無所畏・あり。
【二三】劫波(Kalpa)の略、長時と譯す。
【二四】Bodhi の音寫、覺或は道と譯す。
【二五】以下の八菩薩は晉譯に普觀見無盡、皆覩諸國莊嚴遍現、如來種性成就無退、威儀化衆示無瞋恚、無量辨才幢英變音、積累清淨金光威神王、分別光明辯解散句、生無量福積累親業とあり。
【二六】晉譯相當文に於レ是世尊、班ヲ宣法門ノ名曰ニ生諸菩薩一。佛成ニ正覺一時十六年云云とあ

大方等大集經

北凉の天竺三藏曇無讖姑臧に於て譯す

卷の第一

[一]瓔珞品 第一

是の如く我聞く。一時佛王舍城[二]耆闍崛山の中、往古諸佛の本所住の處たる大塔中に在し、諸大菩薩の讃歎する所たり。其の地潔淨微妙最勝にして諸佛の法座たり、諸の天・龍・鬼・[三]乾闥婆等常に稱詠を行じ、又能く無量の善根を增長し、常に諸佛の微妙なる光明有りて、無量無邊の功德を成就し、諸佛所行の處を具足したまふ。如來[四]菩提道を成じ得已りて、[五]妙法輪を轉じ、無量無邊の衆生を[六]調伏し、一切法に於て自在を得たまふ。世尊一切法中に於て無礙の智慧を逮得し、よく一切衆生の諸根の利鈍を分別し、永く一切[七]煩惱の習氣を斷ち、莊嚴を待たず諸法を了知し、大[八]比丘[九]僧六萬八千の與に、一切調伏して煩惱の習氣を斷たしめたまへり。皆これ佛子にして善く深義を解し、悉くこれ[一〇]福田にして能く諸[一一]有を斷ち、淨戒の果を得て不生不滅たり。復無量の諸[一二]菩薩僧有り、[一三]無礙智・甚深智・無知智を具し、大慈大悲もて法雨を降注し、能く一切に甘露の法味を施し、諸の衆生等の心に於て地の如し。[一四]助菩提法を增長成就し、智慧の光明もて能く黑闇を破し、悉く能く善惡の道を照明し、能く衆生善心の蓮華を開かしめ、能く衆生の[一五]善根をして成熟せしめ、善の芽を增長し煩惱の海を乾かす。智慧の翼を具して空に遊ぶに礙無きこと、之を喩ふれば日の如く、よく衆生の善惡を增損すること、之を喩ふれば月の如く、諸の善[一六]本と爲りては[一七]須彌山の如し。至心寂靜に[一八]梵行を修行し、世論の動轉するところと爲らず、無上出家の法に安住し、能く

【一】西晉法護譯、大哀經卷第一、諸菩薩所生莊嚴大會法典品第一。

【二】鷲峰、また靈鷲山ともいふ。(Gṛdhrakūṭa)。

【三】また揵沓和(Gandharva)、尋香、食香と譯す。帝釋の樂神、唯香のみを食する飛行神なり。

【四】等正覺。

【五】法を說いて煩惱を破り邪見を摧くをば輪王の輪寶に喩へたるなり。

【六】善宜開化、衆生の身口意の業を調和して惡行を制伏すること。

【七】惑、結ともいふ、心身を惱亂する精神作用なり。屢煩惱を起したるが爲にくせづきたる餘薫を習氣といふ。

【八】梵に Bhikṣu 又苾蒭ともいふ。乞士、勤事男などと譯す。僧のこと。

【九】僧伽(Saṃgha)。衆と譯す。

【一〇】僧の謂なり、佛及び僧に供養すれば福德を生ずること、大地の物を生ずるが如くなるに喩ふ。

【一一】生死の相續する迷の境界。

【一二】菩提薩埵(Bodhisattva)の略、覺有情、大士などと譯す。

られることを說いて居る(卷十七)。

そこへ長者の形をした魔が來るので、佛は、この不可思議神變の經典を聞いて解するもの少きことを述べられると、魔に憂色あり、虛空藏是を尋ねると、我れ如來所說の法中に於て、無量の留難の事を作せるに依るといふ。虛空藏勸めて佛に懺悔せしめ、次で金山王菩薩以下の諸菩薩が、魔界を過ぐることを說かれる。

佛、魔に勸むるに、菩提心を發すべきことを以てされると、魔子醜面並に餘の魔子が是に反對するので、虛空藏菩薩が呪を說くに、五百の怖るべき蜜迹執金剛が出でたので、魔等は菩提心を發し、波旬に受記の事がある。

時に申越といふ長者あり、此の妙典を聞いて疑悔卽ち除き、安樂行を得たので、諸の財寶をば佛並に下賤のものに供養し、六十八億の菩薩が、世尊の滅後、正法を護持すべきことを述べる。虛空藏之を讃し、この經を受持する者が得る福を尋ねると、佛答へて、鬪諍疾病を除く呪、四天王、梵釋の呪を說き、此の經を彌勒に、而して重ねて阿難に付囑される。功德莊嚴王は、更に法の滅盡せんとする時、この經を受持せんとし、佛亦大光明を放つてこの經を囑累したまふて終る(卷十八)。

【一】唐譯に依ると、卷第四は「云何菩薩善知軌儀」(本位の威儀の行成就に當る)の項より始まり、次で迅辨(本經の速辨)の、虛空藏

菩薩に對する問より、佛が功德莊嚴王の物語をされる間に、虛空藏菩薩が、諸種の神通を示する項有り。卽ち迅辨菩薩に對して優波羅吉祥如來蓮花を雨らし、寶莊嚴菩薩に對して細抹金以下の諸寶を、時王菩薩に對して種々飮食衣服を、醫王菩薩に對して上藥草を、摧惡趣菩薩に對し、大悲を雨らし、戒莊嚴菩薩に對して戒波羅蜜等を、普遍光菩薩に對して、餘の世界の有情を饒益することを示現す。次で舍利弗と虛空藏との問答に移り、一切天灌頂王の物語を出し、更に舍利弗と虛空藏との間に、大乘に住する久近などの問答がある。卷五は常希奇菩薩の問あり、次で寶吉祥菩薩の請により虛空藏が諸種の三摩地を說き、終つて、福報莊嚴(本經の功德莊嚴)王の物語を出す。故に本經卷十六の前半と後半とは、唐譯に在つては前後す。

昭和五年七月二十日

譯者 蓮澤成淳 識

(各品概要 その一 終)

心增長の三十二法とを說いて居る。

次で不可說が佛に向つて、六波羅蜜の不可說なることを述べ、終つて佛の阿難に對する付囑がある。

虛空藏菩薩品(卷十四―十八)

婆伽婆(佛)が妙寶莊嚴堂に在はすと、東方の大莊嚴世界より、虛空藏と名くる一菩薩來つて、佛に問ふやう、云何が菩薩は六度・六念などを行ずるやと。佛は四法・八法を以て六度を成ずることを、詳しく述べられる(卷十四)。

次で虛空藏に對し、菩薩が功德智を行じて虛空と等しきこと、念佛・念法・念僧・念捨・念戒・念天を成就すること、諸法平等を行じて涅槃の如くなること、行相を分別すること、諸佛の法藏を持すること、衆生が無始より清淨なるを分別して敎化することと、諸通を退せざること、甚法門に入ること、法界性門に入ること、淳至堅固なること、陀羅尼を得て念を失せざること、自在を得て生死を受くること、功德資糧を莊嚴して衆生を利益すること、諸の塵界を知つて無礙なること、威儀の行を成就することなどを、佛が說かれる(卷十五)。

時に速辯といふ菩薩有り、虛空藏と名くる所以を問ふと、佛が普光明王如來の世界に、功德莊嚴王といふ輪王があり、虛空藏菩薩はこの輪王の子の一人であつた物語をされる。

すると會中の諸菩薩が虛空藏の神通を見んと願ふ。虛空藏は三昧に入り、虛空中に三種の妙物を雨らせる。生疑といふ菩薩は、虛空藏發心の時期を尋ねると、過去の衆天灌頂輪王こそ、虛空藏の前身であるとて、その物語がある。

爾の時生疑と虛空藏との間に、大乘に於て疲倦無きやなどの問答があり、虛空藏は菩薩三昧の行業を生疑に說き、更に舍利弗が生疑といふ名義に就て問ふ所がある(卷十六)。

次で佛が大誓莊嚴、乘莊嚴、道莊嚴などを虛空藏に說かれ、次に寶德菩薩と虛空藏との間に、出世間聖道を修することに關して問答があり、更に佛の稱讚に對して虛空藏が、これ世尊の慧明に依る所以を述べる。

次に寶德と虛空藏との間に、何ぞ己が勢を隱して佛力となすや等の問答あり、次で阿難が虛空藏の辯才を歎じ、種々問ふ所がある。

時に五百の大聲聞が、その上衣を虛空藏に上るに、衣皆姿を沒したので、佛が、東方袈裟幢世界に行つた事を解說され、次で光明莊嚴梵天が來ると、善根、資糧、方便、智などに關する細說がある。

爾の時、寶手菩薩の爲に、虛空藏が、一切佛法の根本を安する菩提心が、二法に、更にそれが順次四法、八法、十六法、三十二法、六十四法、百二十八法に攝せ

次で佛が四天王呪、帝釋呪、諸魔呪、梵天呪などを說き、此等によつて四天王、梵釋などの擁護を得べきことを述べ、この經の功德を示して終る(卷十一)。

無言菩薩品(卷十二)

佛欲色二界中間の大寶坊中に在ます。時に王舍城師子將軍家に一子生れ、無言と名ける。その名の如く、瘂の如くにして聲を出さない。一日父母と共に寶坊中に至ると、舍利弗が、この子の無言なるを佛に尋ねる。佛は大菩薩であつて、衆生調伏の爲に、かゝる身を示すことを述べられる。次で童子は神通を示し、始て口を開いて南無佛陀と唱へ、更にかゝる身を示す所以を說く。舍利弗が名を無言といふのに、云何ぞ言を出すやと問ふに始まつて、兩者の間に長き問答があり、主として正見に就て語られる。次で無言が信・進・念・慧の四力に關して佛に述べる。

次に蓮花と名くる菩薩と無言との間に長い問答が續き、佛が蓮花菩薩の爲に慧燈三昧を說かれる。

終つて佛の臍中より一菩薩(金剛臍といふ)が現はれ、無言との間に問答をなし、後自國に歸らんと云ふと、無言はこの娑婆世界は卽ち汝の國であり、釋迦佛こそ汝の師の慧憍如來であるとて、金剛三昧に入る、佛は爲に金剛三昧を說かれる。

時に無言が、父王に向つて菩提心を發すべきことを勸め、父王とその眷屬との爲に四十莊嚴菩提心を說く。佛阿難に經を付囑して終る(卷十二)。

不可說菩薩品(卷十三)

世尊が寶坊中に在はすと、會中に不可說と名くる菩薩あり、諸佛菩薩は清淨寂靜なること、菩薩の戒は不可宣說なることなどを說き、菩薩は如來を誑かざることを述べる。

爾の時會中に一菩薩(無所畏)あり、不可說に如來を誑かずとはどんな事かを尋ね、不可說之に答へる。そこで世尊が、佛の出世に就て述べられる。

次に「佛の出」を始めとして諸の事柄に就き、寶女と無畏との間に長い問答があり、次で寶女と舍利弗との問答が續き、更に無畏と寶女との問答があり、終つて無畏が寶女に、上衣を供養せんとするや、受けずして「法は貪を離る」以下の說法をなす。

次に一切法の不可說に就て、不可說菩薩と勝意天子との問答、不可說が化作(けさ)した一比丘と舍利弗との問答、この化比丘に關して舍利弗と不可說との問答があつて後、佛が菩薩の受記に就て述べられる。

時に魔王が一比丘に化して不可說菩薩にいふ、魔來る、何の方便をか設くるやと。不可說のいふ、來らば菩提心を發さしめんとて、菩提成就の十六法と、菩提

更にこの三昧を得んには、菩提を淨め一切滓濁の心を遠離すべしといひ、更に諸魔を陰・煩惱・死・天の四種に約し、是を壞することを述べ、衆生に種々の調伏、種種の解脱あることを說かれる。

次に舍利弗と佛との間に、菩薩初發心の時、不驚不怖なるに就て問答があり、佛は更に勤精進如來の國土に堅固莊嚴といへる菩薩有り、よく精進を勸めたることを話して精進を勸めて居られる。

次に修悲梵天が、海慧菩薩に對して、佛法とは何ぞやを尋ねると、海慧菩薩は、佛法とは一切法に名く、乃至佛法は處に非ず非處に非ず、生に非ず滅に非ずといつた風な解釋を施こし、終に八種の力あつて深佛法を聞くも怖れざるを述べる、佛がまた海慧に菩提性の不可說なるを說かれ、續いてこの不可說なる佛法を護持することに就て、淨光國の法慧菩薩の物語をなされる。こゝに於て諸天諸菩薩など護法のことをいひ、最後に此の經典所在の處には十種の利益あることを述べて終る(卷九)。

次で海慧が大乘に就て(大乘は何の法に攝せられ、何の法に利益せられ、何の法にては得難く、何の法が障礙し、何の因緣の故に大乘と名くるなど)佛に尋ねると、佛は一法より四法に及ぶ法數を以て之を細說したまひ、更に海慧に對して、此の經を持せんと欲し、その深心を寂靜ならしめんとせば門句、法句、金剛句を持すべきを說かれる(卷十)。

次にまた海慧に對して菩薩の誓願力等に就て語り、更に淨聲輪王の物語や一師子王と獼猴との物語を述べ、如法の說、如法の住を說かれると、蓮花菩薩を初として諸の菩薩が、如法の說や如法の住に就て意見を述べ、海慧菩薩も是を述べると共に魔業に關說する。佛この說を讃し重ねて魔業を說かれる。

そこへ天魔がやつて來たので、佛は如何にしてこの魔軍を禦ぐべきかを問はれる。海慧は我れ魔王及び眷屬を莊嚴國に置き、我は魔の處に住せんと答ふるを聞き、魔王は佛に救護を請ふ。佛答へて我れこの事に於て自在を得ず、海慧能く是をなさんと云はれるので、魔王は海慧に求哀懺悔する。菩薩は手を以てその頂を摩するに、魔はかの土(莊嚴國)に至るので、彼の土の諸菩薩が、この不淨の人何處より來るやをあやしむ、その土の佛說いて西方娑婆世界の海慧といへる菩薩が來らしめた事を說かれる。魔王は菩提心を起して、海慧の說いた大集經法を說くので、この國人は釋迦佛及びその菩薩を見んことを願ひ、娑婆の衆生も亦かの魔王を見んと願ふ。佛これを知つて、海慧をして、互に見んとする所を見せしめたまひ、魔王また海慧を念じて彼の國より歸るを得る。

るやと。佛答へて如來は非一非異、如來は十力に卽するに非ず・離するに非ずとて、十力を說きたまひ、次で四無畏・十八不共法を述べ、更に不共の法ありとて、無見頂、無能勝者、見者除惱、處衆無畏等二十八種をあげて居る。

次で如來の三十二相は何等の業因によつて成就せるや(寶女の問)に對し、佛の略說がある。

更に云何が菩薩は法行を行ずるやの(寶女の)問に對し、佛答へたまひ、終つて菩薩の不退印に就て、舍利弗と寶女との問答がある。

次に寶女が佛に、大乘とは何ぞやを問ひ、更に衆生をして大乘を得しめざる障礙の法を尋ねると、佛三十二を擧げて疾く大乘を得しめざる所以を說示し、進んで三十二事あり、衆生をして疾く大乘を得しむるを述べ、後に經の付囑あつて終るのである(卷六)。

此の品の中、卷五の後半に於ける舍利弗と寶女との問答、卷六の初に在る佛と寶女との問答は注意すべきものである、何となれば前者に於ける寶女の女身は女人の爲に方便身を現じたりとする點、並に一切皆空の表現と、後者の否定的表現とは、一は女人成佛思想に關係し、一は般若思想のそれに見るものなるが故に。

不眴菩薩品(卷七)

佛欲色二界中間の大寶坊中に在り、東方世界より不眴と名くる菩薩來り、何の三昧を修して速に無上正遍知を得るやを問ふと、佛は一切法自在三昧を以て是を得とて、この三昧を說きたまへば、不眴菩薩更に何の法を成就してこの三昧を得るやを尋ね、佛は一法より十法を數へて答へたまふ。

次に須菩提と不眴菩薩との間に問答あり、終つて佛また心の自在を得れば諸法自在三昧を得とて、不眴に心の自在に就て述べられる。

次で須菩提が佛に向つて不眴のことを問ひまつると、佛は彼の前生談をなし、その中に八陀羅尼門(念佛、念法、念僧、眞實思惟、知高不可說、修舍摩他、修毘婆舍那、修方便智)や、八精進(求法、持法、觀法、說法、護法、供養法師、護受法者、如法住)や、八法(修慈、修悲、觀法、觀智、護諸衆生、善思惟、修助道法、護法)や、八莊嚴(捨、戒、功、德、智、舍摩他、毘婆舍那、發心)や八發心などを述べられる。

次で梵行に關して不眴と須菩提との談話あり、終つて經の付囑がある(卷八)。

海慧菩薩品(卷八—一一)

佛が大寶坊中に在ますと、下方の寶莊嚴世界より海慧と名くる菩薩來り、佛に淨印三昧を尋ねると、淨印三昧は九種性を離れることを示し、この三昧を修集する法を敎へ、次で淨印三昧の根本を述べ、この三昧は三十法を具し、八不共法あるを示される(卷八)。

大悲と善業とに就て質問する。佛は是に對して大悲と菩提との別なきを說き、菩提の法を詳述し(此の場合、菩提は分別無く句義なし、内に非ず外に非ず、など否定的な表現が特に目立つ)菩薩は大悲の爲に、無量劫に至るも、入涅槃せざるを述べ、栴檀窟如來の物語などを配して卷(二)を終る。

次には、如來に三十二の業あるを說かれる。この三十二は所謂佛の十力・四無畏・十八不共法に當るのである(卷三)。

次には陀羅尼自在王菩薩が、會中の一菩薩(師子幢)の、菩薩は何等の陀羅尼門を獲てか、一切の佛語を受持するやの問に答へて、菩薩には淨聲光明、無盡器、無量際、大海、蓮華、入無礙門、四無礙智、佛莊嚴瓔珞の八陀羅尼ありて、よく是を持するを述べると、佛は陀羅尼菩薩を稱して、但に今日のみならず、過去世に淨劫世界に於ても、光頂菩薩として、亦之を說きたるを物語りたまふ。

爾の時、會中の一菩薩慧聚の問に對し、慧根と慧業とを細說し、重ねて慧聚菩薩の前生を述べる。

次で陀羅尼菩薩が、佛所說の不思議と、無上菩提の不思議なる所以とを說きて、この說法を歎じ世尊は是の經を阿難に附囑したまふ事あつて終る(卷四)。

この二品は、その內容から見れば別たるべきでない、異譯大哀經一部はこの二品に相當する、是によつて開元錄十一には、この二品を一に數へ、僧就合集の際も、亦同樣であつたらしい。それはともかく、この二品は大集經一部の模型と云つても差支ない程、よくその一斑を示して居ることは注意すべきで、或は大集一部の最も原始的な部分を作るものであるかも知れない。

寶女品(卷五—六)

佛大寶坊中に在り、會中の一童女(寶如)、この大集經に就て、少しく義を問はんとて、云何が實語、云何が法語を尋ぬるに、佛は菩薩に三種の實あることと、法語・義・毘尼とに就て說き、終つて舍利弗と寶女との問答あるや、何等の德を成就してか寶女と云ふと云へば、寶女は三十二の寶心あるを述べ、次に四無礙智に就て兩者問答し、舍利弗更に寶女發心の時を尋ぬるに、佛爲に寶女が、過去に轉輪聖王であつた由來を敎へ、而も今女身を現はすは、諸女人の爲にして、方便の身に過ぎずとのたまふ。次に又寶女と舍利弗との問答あり、寶女の銳鋒當り難きものがある。例へば菩薩は何等の力あつて心に厭離無きやと問へば、寶女八力を說き、舍利弗が汝是を有するやと云ふに、具足と云へば顚倒、顚倒は卽ちこれ二相、：…、一切の法皆虛空の如し云云と(卷五)。

寶女問ふ、經中に如來十力を具すといふか、十力卽ち世尊か、十力外に世尊あ

（卷第五十六）に掲げた諸國（經では諸の國々を擧げて、之を各星宿に付囑して攝護養育せしめて居る）は、單に印度のみならず、中亞西域より、遠く震丹にまで及んで居るのは、よし月藏經が、此等の國々を知つた、中亞に於て成立したと云ひ得ないまでも、少くとも「この部分」は中亞に於て成り、從つて當時の中亞に於ける文化に依つた事を物語るに外ならない。（シルバン・レヴイ教授も極東佛蘭西學院學報、一九〇二年に、この事を注意して居られる。現代佛教、昭和三年五月號參照）。

かくて一部としての大集經の内容全般に亙つては、空思想を立ち場として、是に密教的分子と通俗信仰とを始として諸多の思想信仰を配し、法相を說くのが主で、部分的な重復矛盾などは、經の成立上止むを得ざるものと云はねばならぬ。

（付、以上の所論は大正五年四・五月、宗教研究第一・二號所載、松本文三郎教授、「大集經論」に負ふ所多し。記して謝意を表す）

八、各品概要（其一）

瓔珞品（卷一）

如來、佛道を成じたまひてより十六年の或る時、王舍城耆闍崛山の中に在し、三昧力を以て、欲界と色界との中間に大坊庭を現出し、この七寶の坊中に入りて光明を放ち、この光明中に偈を說きたまふに、十方恒河沙等の諸佛菩薩、この偈を聞きて娑婆世界の大寶坊中に雲集し、一切の衆生、また佛の三昧より起ちて出された謦欬の聲を聞き、寶坊中に來至すると、諸の菩薩は佛の神力を受けて、大衆をして瓔珞莊嚴、妙花、妙香等等を得しめる。

陀羅尼自在王品（卷一—四）

爾の時、佛はこの諸菩薩等が、みな諸法の實義を知らんと欲し、能く如來甚深の法藏を持し、諸菩薩行無礙法門を聞くを得んと欲するを知りたまふ。時に陀羅尼自在王菩薩が、何の瓔珞を以て菩薩を莊嚴し、菩薩の所行を清淨ならしむる、云何が癡闇を壞し、云何が諸衆生の爲に慈悲心を修し、云何が菩薩能く眞實に善行を修するやなどと問ふに對して、佛は、先づ菩薩には四種の瓔珞莊嚴があり、戒・三昧・慧・陀羅尼の四瓔珞莊嚴是である。而も此等の四種の各は又十種に分たれ、一種より十種に及んで居ることを說かれる（卷一）。

次で佛は、菩薩に念・意・行・法・智・實・神通・無礙智の八光明あつて、（この各も亦、それぞれ八種に分れる）よく諸闇を壞することを述べられ、進んで菩薩が大悲を修するに十六事あること。一切衆生には三十二の不善業があり、菩薩は善業を修して之を破すること。などを示し給ふと、陀羅尼自在王菩薩は更に、菩薩の

終に、大集經の前後を通じて、各品の說かれた場所を一覽すると次の如くなる。

大集經品名	說法の場所	異譯經名	說法場所
一、瓔珞品	佛在㆓王舍城耆闍崛山㆒、入㆓三昧㆒、於㆓欲色天二界中間㆒、出㆓大坊庭㆒	大哀經	佛在王舍城靈鷲山
二、陀羅尼自在菩薩品			
三、寶女品	欲色二界中間大寶坊	寶女所問經	如來寶淨高座
四、不眴菩薩品	同		
五、海慧菩薩品	同	海意菩薩所問淨印法門經	大寶莊嚴最勝道場(大菩薩宮中)
六、無言菩薩品	同	無言童子經	羅閱者闍崛山中
七、不可說菩薩品	同		
八、虛空藏菩薩品	如來行處妙寶嚴堂		
九、寶幢分	欲色二界中間大寶坊	寶星陀羅尼經	王舍城竹林迦蘭陀池邊
十、虛空目分	同		
一一、寶髻菩薩品		寶髻菩薩所問經(寶積四七)	靈鷲山
一二、無盡意菩薩品	王舍城如來行處寶莊嚴堂	阿差末菩薩品	寶嚴淨魏魏道場
一三、日密分	欲色二界中間大寶坊		
一四、日藏分	王舍城迦蘭陀竹園。次昇㆓須彌頂㆒。後往㆓佉羅帝山㆒		
一五、月藏經	佉羅帝山		
一六、須彌藏分	同		
一七、十方菩薩品	舍衞國法淸淨處		

七、大集經の內容に就て

本經の內容は、經題の示すが如く、法相・法數の集であり、法寶の聚であつて、これが經の中心をなして居る。而してこの中心に配するに、經は一面に於て般若系統の空思想と、他面に於て所謂密教的分子を以てして居る。即ち本經は至る處に法相・法數を說くが、是を說く場合に於て、著しく眼につくのは、無又は非などの否定的の語を用ふることである。佛教では始から否定的な表現が好んで用ひられ、積極的に規定指示することは、佛陀の努めて避けられた處であるから、消極的な表現は必ずしも般若系統には限られない。けれども「凡てを否定」して一切皆空とするのは、般若中觀の特色であり、本經また著しくこの色彩を帶びて居ること、經を一瞥する者の等しく認め得る處である。それと共に經には密教的分子が溢れて居る。自在王品には八種の陀羅尼を說き、卷第十一に梵釋四王の呪を揭ぐるを始として、陀羅尼・呪は到る處に發見される。その外、寶幢分や日藏分に於ける星宿の說(即ち一種の天文說)や曆日の法など、若しそれが密教に限られたものでないと云はば、當時の通俗文化の採用でなくて何であらう。況して月藏經

歷代三寶記十二には日藏經と月藏經とを明示するのみであるが、開元錄十一に依ると、この二經の後に明度五十校經を十方菩薩品と改めて置き、更に無盡意經を加へて五十八卷となした樣である。而も別に六十卷の本もあつて、それには日密分の前に寶髻品が第二十六・七卷にありながら、第三十一・二卷に重ねて寶髻品を入れて居るといふ。この二種は、麗藏大集經第一卷校正後序に、異本六ありとして居る內の第四本と第五本とに當るものである。後序はこの寶髻品を重出せるものを、「是れ卽ち第五本也」とし、續いて「今以㆓品次㆒驗㆑之、則今兩藏(國宋)本經六十卷者是矣。但不㆑重㆓載寶髻品㆒、斯爲㆓小異㆒耳、卽於㆓前第四本五十八卷經中㆒、分㆓彼日藏分中十卷㆒、爲㆓十二卷㆒足㆓㆑成六十㆒耳」と云つて、第四本五十八卷を開いて六十卷となすものあるを記して居る。然し何れも須彌藏分の存否に就て云ふものが無いけれども、恐らく同じく編入されて居たのであらう。

先づ日藏經はかの日密分と同本異譯であるが、日密分はその文極めて撮略なると、その終の部分が約一卷も闕けて居るので、之を補ふ目的を以て、續いてこの經を置き、第十一分としたものであらうし、月藏卷は開元錄十一に依ると、また大乘大集經月藏分第十二と題するもの有り、(麗本では初の十卷に、月藏分第十四といひ、後の八卷には月藏分第十二とある。聖語藏本では初の十卷も第十二となすを以て、麗藏に第十四とあるは第十二の誤なるべし)、經の初には、「化㆓諸龍衆㆒、說㆓日藏經㆒已」の後に、この經を說くことになつて居るから、日藏經の後に月藏經が置かるべき順序である。

次に須彌藏分は、經の初に題して大乘大集經須彌藏分第十五といひ、十方菩薩品には第十三とある。僧就が明度五十計校經を改題して、月藏分の次にこの經を編入した時、第十三としたものであらうし、この次には例の無盡意經が置かれたので、須彌藏分が第十五となつた譯であらう。

麗藏では、この四經みな那連提耶舍の譯となつて居るが、校正後序には、十方菩薩品は耶舍の譯にあらずして、後漢(二五—二二〇)安世高の譯とし、出三藏記二、安世高の條に五十校計經(或云明度五十校計經)を擧げ、法經錄、開元錄亦然り、而も大集經別譯の條には載せざるを以て、安世高の譯といふべし。若し支流迦讖が大集經二十七卷を譯したと傳へらるゝことが、眞實ならば、現存大集經の大半は旣に紀元前に成立して居たと云ひ得る。然し是は確實性を缺くにより暫く措くも、右の安世高の譯によつて、大集經の少くとも一部分が旣に早く紀元一世紀には存在した事がわかる。

の方即ち序分にのみであり、六十卷本では、一品の序分が數行に過ぎぬものさへあつて、略された事が明であるのを併せ考へると、各品は一類の經典ではあつたが、一經として次第づけられてなかつたものを、編纂して一部の經とする際に、重復又は矛盾する恐れある序分を削り、前後の連絡と一經としての體裁とを整へるに至つたものと考へられるのである。

然し經の內容を檢べると、同樣の事柄に就ても、明に前後に於て、相一致しないものがある。例へば自在王品(第四卷)と海慧菩薩品(第十卷)とには、各々字門の解釋が出て居る。「阿字は一切の法門なり、阿とは無を云ふ、一切諸法はみな悉く無常なればなり」といふ如く、或る字音を取り、その意味する所に依つて、是に種々の釋義を施すものであるから、必ずしも一定のものではないが、この兩品に見ゆる此等字門の解釋は、同一の文字に對して全く相異るものも多い。然もそれ等の解釋が、各々其の場合に於て、絕對的に必要なものとも考へられないとなると、始めから纏つた一部の經典として說かれたものでなくて、もと一群をなせる經典をば、たゞ次第付けたのみで、內容の重複や矛盾は、措いて問はざりしに由るものと云はねばならぬ。而して「大集」なる名も、此等の諸經を纏めた際に、經の內容からして、新につけられたものであらう。

然らば此等の諸品が何時、そして何處で斯くの如き形に編まれたかが問題となるが、今之を決する積極的の資料がない。恐らく多くの大乘經典の場合に於けると同じく、それは中央アジアの邊に於て行はれ、其の時期は、此の經の別品が初めて譯出された時代を隔たること、甚だ遠からざる時代であらう。法護の初譯は西紀二八一に出でた寶女品で、大哀經之につぎ、無言・阿差末の二品も、その前後に譯されたものであらうから、當時西域に於ても、諸品が獨立の一經をなして居たのが普通であつたらしい。それが五世紀の初頭には一部の經として曇識の譯出する所となつて居るから、現存の經典に據る限り、法護と曇識との中間の時代、恐らくは西紀四世紀頃に、此等が一經としてまとめられるに至つたものと考へられ、これが內容をなす各品は、更に遡つて、西紀一・二世紀頃には、略現形を具へた經として存在したものと推定せられる。

六、大集經の後半に就て

曇無讖の譯に歸せられる大集經へ、更に日藏以下の諸經を、隋の僧就が付け加へたものが五十八卷(或は六十卷)本であると云はれる。僧就がこの大本を編んだ時、付け加へた諸品は何々であつたか。

聚一、

（海慧菩薩品終）

十方諸來諸菩薩等……作二如是言一……是故此經、名二大寶聚一。

（不可說菩薩品終）

如是正法、名字何等、云何奉持、……是經名二方等大集一、亦復名爲二不可說法一、亦復名二入一切佛法、斷一切佛所有名字一、

（虛空藏菩薩品終）

此經名二勸發菩薩莊嚴菩提一。

（寶髻菩薩品終）

是經名曰二方等大集大陀羅尼大行菩薩入處一、

（無盡意品終）

此經名二無盡意所說不可盡義章句之門一、又名二大集一。

諸相、菩薩應時遵修法行、說不退轉輪印、講演大乘、聚會之品、寶女所問一、

（海意菩薩所問經終）

世尊告……今此正法、是大法眼、是妙法印、是勝法幢、決擇諸法、分別諸法。

此の句唐譯缺。

（寶髻菩薩會 大寶積經第四十七會 終）

此經名レ何、……名曰二淨行寶髻所問一、

（阿差末經終）

此經名曰二阿差末菩薩之所講說義理章句而不可盡一、其要名曰二阿差末品一。

中には經名を擧げないものもあるが、各品いづれも一部として纒まつたものである。大集經は是等を編纂したものであることは、內容の或る文句を、異譯と對照することに依つても知られる。それは此の經內には經題と同じ大集經なる名が屢用ひられて居るが、此等を異譯と對照すると、必ずしも大集に相當する原語が、當該箇處にあつたとは想像されない。寶女品の初に「我今於二大集經中一、欲二少問一レ義」とあるも、異譯には「我身今欲レ咨下問如來、於二斯經典章品之句一、志所中趣向上」とあり、海慧菩薩品の初に「我等於二此大集經中一、欲二少發レ問」とあるに對し、異譯には「我於二如來一……今有レ所レ問……」と云ふのみ。また無言菩薩品に「今復因二於無言菩薩一、聽二受如レ是大集經典一、幷來覲二見供二養於我一」とあるに、異譯には「今者故來行二供養德一、亦欲レ覲二見於此大會奉二覲佛聖一」と云ひ、「欲三往聽二受大集妙典一」の相當文には「來二詣此會一、聽二レ說經典一」とあるが如き、その一例である。その他、經に受持如是大集經典とあるも、異譯に持斯經典とのみあつて、大集の名を冠せざるなど、或は編者の加筆によるものかと考へられる。

尤も海慧菩薩品の終には、「佛……爲下過二數量一諸菩薩等上、說二大集經一」とあるに對し、異譯には「如來……爲二十方世界諸來集會菩薩衆一、廣大宣二說大集會正法一」と云ひ、不眴菩薩品の初に我等「於二此大集經中一欲二少發レ問」とあり、異譯には「於二此大集會正法之中一、而有レ所レ聞」と云つて居るのは、原文に爾うあつたからであること勿論である。虛空藏所問經に「與レ我俱來、詣二至娑婆世界一、爲レ欲レ聽二聞大集經一」とある句の相當文が、虛空藏品には缺けて居るので、此の場合の原語の推定は困難であるが、如上の對比によつて、特に大集の二字が加はつて居るのは、初

（出ニ第二卷一）、菩薩導示行經一卷、調伏衆生業經一卷、大慈無滅經一卷（以上、出ニ第三卷一）、魔業經（出ニ第十一卷一）、菩薩出要行無礙法門經一卷（出ニ第十二卷一）、過魔法界經一卷（出ニ第十六卷一同上）、無言菩薩流通法經一卷（出ニ第十七卷一）、（虛空藏初中）佛弟子化魔子誦偈經一卷、その他部分譯と覺しきもの三十部を出し、同卷第一には大集經別品殊譯として、大哀經、寶女經、無言童子經、何差末經、虛空藏經、寶髻菩薩經外五經を揭げて居る。而もその多くは西晉の法護の譯で、出三藏記の二によると大哀經は元康元年（二九一）に、寶女經は太康八年（二八二）に譯したとあるから紀元三世紀には、大集經各品の別譯や、その部分譯が行はれて居る。而して此等別譯の或るものは、經錄によると前後五回も譯出されて居るが、現存するものを、經に對照すると次の如くである。

現藏　品名卷	異譯　經名	卷	譯者
一、瓔珞品（卷一） 二、陀羅尼自在王品（卷一―四）	大哀經	八卷	西晉　法護
三、寶女品（卷五―六）	寶女所問經	四（又は三）卷	西晉　法護
四、不眴菩薩品（卷七）			
五、海慧菩薩品（卷八―一一）	海意菩薩所問淨印法門經		宋　惟淨
六、無言菩薩品（卷一二）	無言童子經	二卷	西晉　法護
七、不可說菩薩品（卷一三）			
八、虛空藏品（卷一四―一八）	大集大虛空藏菩薩所問經	八卷	唐　不空
九、寶幢分（一九―二一）	寶星陀羅尼經	十卷	唐　波羅頗蜜多羅
十、虛空目分（卷二二―二四）			
十一、寶髻菩薩品（卷二五―二六）	寶髻菩薩所問經（寶積經四七會）		西晉　法護
十二、無盡意菩薩品（卷二七―三〇）	阿差末菩薩經	七卷	西晉　法護

此等の諸異譯は、すべて一經の體裁を具へ、初に序分があり、正宗分是に次ぎ、終に流通分が有り、何時何處で何の因緣の故に、經が說かるゝに至つたかの所以を初に記し、經を說き終へては如何にしてこの法を持し、如何が名くべきかを示して居る。それが大集經に入つて居るものになると、初の序分の記事が極めて簡潔になり、その大部が略され、或る處まで來ると、兩者殆んど平行して最後に至るのが普通である。試に最後の、經名を擧げる部分を兩者對照すると、

現藏	異譯
（陀羅尼品終） 是法名レ何、云何受持……是名ニ大悲說大悲法一、名ニ如來業受菩薩記一。	（大哀經卷八終） 是經典者、所レ名爲レ何、云何奉持、是經如來大哀。
（寶女品終） 是經何名、云何奉持……是經名爲ニ眞實法義毘尼方便、成就發心無量寶聚、無量陀羅尼十力四無畏不共法	（寶女所問經終） 是經法、名曰ニ眞諦曉了義律達門之品一、又名ニ無量之德發意所說、如來十力四無所畏十八不共諸佛之法、分別

智嚴寶雲譯を載せ、出二大集經一と註記して居るが、前にも述べた如く、この譯には疑はしいところがあるから、八卷本大集經に入つて居る方は法眷譯であつたが、是を明記しなかつた爲に、別に法眷譯としての殊譯が揭げられたのではあるまいか。

日密分に就て。 僧祐の記によれば、無讖譯大集經には、日密分を含んで居ない。開元錄十一に、僧祐の記と比較した經本には、無盡意品の代りにこの日密分が第十一分となり、曇無讖の譯となすものの如くであるが、諸經錄にはこの經の翻譯に就て記すものが見當らない。既に僧祐の所謂舊錄之を含まず、彼の見た別本にも見えず、他にも之を記さないのであるから、此の譯を無讖に歸するのは謂れ無き事と云はねばならぬ。麗藏幷に宋、元、明本は、日密分三卷の中、初二卷を無讖に、後の一卷を那連提耶舍に歸して居るが、その根據何れに在るや不明である。

元來現存日密分は、開元錄十一にも云ふ如く、完本では無くして、恐らく後の一卷を闕くものの如く、而もその部分は當代既に「尋求するも得ず」とあるから、恐らく未完の本が經の一部に編入されたものであらう。無讖既に之を譯せず、耶舍また之を譯したとは思はれないから、梁以後隋代に至る間に於て、何人かの手によつて編入せられたものであらう。尤もこの編入は理由無くして行はれたものではない。經によれば虛空目安那般那甘露門を說き了つて、日密分を說くことになつて居る。この點からすれば、開元錄十一もいふ如く、虛空目分に續いて、日密分が置かれるべきで、その間に寶髻品のあるのは不當かも知れないが、虛空目分の次に寶髻品の在るのは、曇無讖本以來の例になつて居るのと、この經が未完のものであつたが爲に、曇無讖譯本の最後に置かれたものと考へられる。

五、大集經前半の各品に就て

所謂曇無讖譯とせらるゝ、大集經の前半を構成する各品は、その形式から見て、各々單獨の一經を成して居る。その內容に於て、他の諸大乘經典に見るが如く、物語の連續もなく、所說の法に何等の次第も有ることなく、此の點から云へば、各品の順位に何等の絕對性も無い。端的に云へば、此等の各品は法相・法數を說くといふ點に於て、互に共通して居るのみで、是が中心となつて、諸の單一經を一まとめにして、所謂大集經を形くるに至つたのかも知れない。

出三藏記第四の失譯雜經錄の下には、抄大集又は抄方等大集經と註した經が數多く列記せられ、法經錄第二には、大集經の別生として、舍利弗問寶如經一卷

譯闕本）とし、同十四の、有譯闕本の頂に

阿差末經四卷（呉維祇難譯、第一譯）
同　同　（支謙譯、第二譯）
無盡意經十卷（法眷譯、第五譯）

を掲げて居る。

從つて出三藏記がこれ等の二經を別の如くに扱へるの誤なるを知ると共に、法護・法眷譯以外に曇無讖・支謙・智嚴寶雲・維祇難などの譯があつた事になる。無讖の別譯に就ては出三藏記が記すのみで他は云はず、既に大集經をまとめ譯した無讖が重ねて別出したとすることの疑はしい事は、虚空藏品に於けると同様であり、維祇難譯本と支謙の譯本とは、内典錄二に依ると、小異ありと云はるるが、開元錄の云ふが如く、已に失せたとすれば、さして問題とならない。次に智嚴寶雲譯本のことは、歷代三寶記に智嚴の下に、無盡意經六卷（亦云ニ阿差末經一云云）を出し、内典錄の四及び六、古今譯經圖記三、大周錄二などに之を出すも、出三藏記以下隋の諸錄に之を出さざるは怪しむべきである。反對に法眷譯は、出三藏記や法經錄、並に内典錄六などに出で、彥悰錄、靜泰錄、開元錄などは闕本となして居る。而して法護譯は別本として今も存在するから、梁代に失はれて居た大集經の無盡意品も、後に他の譯を以て補つたものであらうし、それには法眷譯か智嚴等の譯かを以てしたに相違ない。而して現藏では後者となつて居るが、前述の如き疑もあるから、法眷譯を以てしたのではなからうかと考へられる。而も僧就が新に大集經を編んだ時、是の品を最後に置いたと云はれるから、その頃までこの品は闕けたまゝになつて居た爲、僧就が日藏以下の諸經を加へた後、この品の別譯を追加したものではなからうか。若しそれ以前に補はれて居たとすると、僧就が之を最後に「加へた」理由が解し難くなる。

内典錄六には無讖譯大集經三十卷を擧げ、續いて日藏月藏の二經と共に大方等大集經八卷を列して、

已前四經並大集之宗致、……前後翻別、今合レ之爲ニ六十卷一或五十八卷、
見ニ費長房開皇三寶錄一

と註記し、次に十五經の大集經別品殊譯を掲げて居る中に、法眷譯無盡意經十卷も存して居る。然るに開元錄十一によると、

内典錄及大周錄中、更有ニ大集經八卷一、尋ニ其文句一卽是合部大集經第六秩也、初之兩卷、名ニ十方菩薩品一乃是明度五十校計經。……後六卷、乃是無盡意經、既是繁重、亦除不レ錄。

とあつて、内典錄に出す八卷の大集經は、丁度僧就が最後に置いたと云はれる、明度五十校計經と無盡意經との合本といふことになる。而して開元錄では、この八卷本大集經を擧げず、無盡意經の方は

が、これ亦非なること明である。何者、無盡意經の首には「大集經中無盡意菩薩說不可盡義品第三十二」とある、而して品とは卽ち分のことで、これが第三十二經を成すべきであるから、日藏、月藏、地藏十輪、須彌藏、虛空孕、念佛三昧、賢護、譬喩王を列して後に無盡意を置き八十卷となすべし」と云つて居る。（この說では初品と第二品とは、內容から見て連續して居るにより一品とすべしと云ひ、日藏は日密と共に第十一分をなし、以下八經を加ふるも十九經を成すのみで、第三十二經とはならない。却つて品は卽ち品で、彼に云ふ如く、第一自在王品一、第二寶女品一、第三不眴菩薩品一、第四海慧品一、第五虛空藏品一、第六無言本品一、第七不可說品一、第八寶幢分十三品、第九虛空目分十品、第十寶髻分一品、第十一無盡意品一とせば無盡意品は第三十二となる。）

開元錄のこの說は、僧就の編した五十八卷本は憑准無き故に依るべからず、若し合せんと欲せば、總じて八十卷を成す上記の如くならしむべしといふ意見であつて、八十卷本が存した譯ではなく、異本は僧就の說に從つて最後に置くものか、僧祐の舊錄及び麗藏に於ける如く第十二分とするものかの二種で、丹、番、宋・元・明の諸本は、何れも之を缺いて、日密分を最後にして居る。（卽ち僧就の五十八卷又は六十卷本の前半に當る。）

この品も亦、僧祐の見た別本には闕けて存しない。從つて後人の補ふ所となつたこと、虛空藏品に於けるが如くであらう。故に一應諸經錄を檢べることにする。

出三藏記二には法護譯經の條に無盡意經四卷と阿差末經四卷とを擧げ、同卷の新集異出經錄にも

無盡意經（竺法護出、無盡意、四卷。竺法眘出、無盡意十卷。曇摩讖、大集後無盡意四卷。右一經三人出）

阿差末經（支謙出、阿差末二卷。法護出、阿差末四卷）

の二を別出して居るのは、これ等を別の經と考へたからであらう。

然るに法經錄一には、大集經別品殊譯の下に、

阿差末經七卷（是無盡意品、或四卷、法護譯）

無盡意經四卷（亦是阿差末經、法護譯）

を擧げて兩者の同本異譯なるを示し、更に無盡意經には法眘譯十卷本のあつた事を記して居る。

開元錄十一には、この經典の異譯とその存闕とについて、

阿差末經七卷（晋曰無盡意、或四卷、或五卷、法護譯、第三譯）

無盡意經六卷（亦云阿差末經、出大集經、智嚴共寶雲譯、第四譯）

とを記し、右二經同本異譯（前後五譯、三

べきを想像せしむる一助となる。

玆で吾人は、更に諸異本に於ける、虚空藏品の地位を併せ考へねばならぬ。別表の示すが如く、日密分までに於ては、無盡意品を除いて、その順位の問題となつたものは、虚空藏品以外にない。而もその順位は、諸の異本に於て、二類になつて居る。一は不可說品と寶幢分との間に置くもので、僧祐の見た舊錄を初とし、僧就の合集本、後序の第五本、並に麗本であり、他は海慧品と無言品との間に置くもので、丹本、並に宋・元・明の三藏本の如き、これである。

此經の前半に於ける諸品は、最初の二品(又は一品)以外は、その形式から云つても、その內容から見ても、決定的の順序を付し得るものでなく、前にも一言した如く、各獨立の經の編輯であつて、その順位の前後の如きは、本質的に何等の問題をも提供しない。從つて虚空藏品の如く、一本では前に在り、一本ではやゝ後に位したとて、一部の經としては、何等の差支も無い譯ではあるが、只此の品のみに、その地位の問題が起る所に、注意の價値があり、況して一旦或る時代に、初譯の本の中で、この品のみが闕けて居たとなると、この品に關する限り、その順位は、重大な問題となる。即ち此の品の失はれた部分を、何時か、何人かが、他の(而して恐らく聖堅譯)本を以て補つた際に、一は僧祐の舊記に依つて、不可說品の後に編し、一は海慧品の後に第六として編入した所に起因するものと見得るであらう。海慧品の後に第六として入れることは、僧祐の記に明記した如く、舊錄本も、別本も、共に第六を闕いて居たから、その所へこの品を挿入し、以後漸次に順位を附したものであらう。

かくて虚空藏品は、現藏に無識譯とはなすものの、その實は異譯を取り入れたもので、それが爲に其の順序に於ても、如上の二類の異本が存することになつたものと考へられる。若し無識譯の虚空藏品がそのまゝ傳はつて居たならば、かゝる次第の不同を生ずる筈はなく、これのみに不同の生じたのは、僧祐の見た別本に於けるが如く、闕けた所が二箇處あつたが爲である。

無盡意品に就て。 現藏に依れば、無盡意品は、智嚴が寶雲と共に譯出した事になつて居るが、僧祐の記には、明に大集經第十二分をして無盡意品を擧げて居るから、曇無識譯の大集經には、この品が最後をなして居たものと見ねばならぬ。然るに開元錄十一に曰ふ、「この記に、日密分無くして無盡意品のあるのは甚だ不當である、何となれば無盡意經は大集の別分ではあるが、無識釋に非ざるを以てであるといふ。そして隋の僧就が六十卷本を編んだ時も、是を最後に置いて居る

別生虛藏品、無識所レ譯、非ニ異譯者ー。
或卽是經是無識譯、非ニ聖堅出ー)。
と云ふ根據も、かくて薄弱と云はざるを得ない。却つてこの經は聖堅の譯とする方が、此等の經錄に通じた所であり、法經錄以下も聖堅譯虛空藏經の存在を示して居る。卽ち虛空藏品の別本と稱せらるるものは、曇無讖譯とするよりも聖堅譯と見るのが、諸經錄の示す所に、よりよく合致する譯である。

次に僧祐の云ふが如く、舊錄には虛空藏品の名目が存するけれども、彼の見た別本に是れが闕けて居たのだから、(その原因乃至理由は判定出來ないが)、梁以後に於ける大集經の虛空藏品は、恐らく後人の補遺に成つたと考へて大過無かるべく、是を補ふに際して、古くよりその別本と稱せられたものを用ひたと考へることが出來ないであらうか。現藏の大集經の虛空藏品も、從つて無讖の譯では無くて聖堅の譯出といふことになる。

この事は、同品の形式的內容を吟味することによつて、その大半が決せられる譯であるが、今試に二三の特色と考へらるるものを擧ぐれば、大集經の各品には、後に示すが如く、屢〻大集經なる文字が用ひられて居るのに、此の品に限り

亦爲ニ此大普集經、分ニ別少法門分ー(異譯に亦爲ニ分ニ別此大集會微妙法門ー)

とか

爾時虛空藏菩薩、雨ニ妙華……… 及此大普集經ー

などといひ、大集とは云はない。同一人の手に成る譯ならば、他の場合の如く大集と譯すべきで、此の品に限り、別に大普集の字を用ふべき必要は無い筈である。

更に說法の場所としては、此の品と無盡意品との外は、皆欲色二界中間大寶坊庭となすに、この二品は妙寶(又は寶)莊嚴堂と云つて居る。妙寶莊嚴堂と欲色二界中間の大寶坊といふとは、一見異るが如きも、寶女品や海慧品には欲色二界中間の大寶坊とあるに對して、その異譯には如來寶淨高座とが大寶莊嚴道場などとある所を以て見ると、この二譯は必ずしも、その原語を異にするのでは無くして、譯し方の相違に因るもので、これ亦同一譯者の手に成らざるを示す一證と見るを得やう。更に此の品では偈文が七言のものも無いでは無いが、五言或は四言より成るものが極めて多い。ところが無讖譯の他の部分では、七言の偈が主であつて四言のものは見當らない。偈文は譯者の異なるに從つて、その語數の異るのが普通で、これは各その得意とする所に從ふによるからであつて、何等の規定の存する譯では無い。同一人ならば大抵同じ形式を用ひるべきを、特に異なつた四言などの偈の存在は、亦異人の譯出たる

品並に日密分の有無とであつて、他は三本共に不同無しと云つてゐる。但し僧祐の記に云ふ所の、かの兩本が第六品を缺くのは、第七品とあるのが、實は第六品とすべきものゝ誤で、以下順次に一つ宛繰り上ぐべきか、それとも兩本共に第六品を失したのかは不明であるが、後の諸經錄は餘り之を問題にして居らず、玆に別の品目の有る異本も無かつた樣であるから、或は六とは七の誤で以下順次に一つ宛繰り上ぐべきもの歟。

虛空藏品に就て。 僧祐の別本では闕けて居り、他の諸本皆之を存して居る。彼が舊錄によつて記した大集經の品目に第八として之を揭ぐる以上、曇無讖が確に譯出したのであらうが、いつしか失せて梁代には之が無かつたことは、彼の特に注意した所であり、同時に別に大虛空藏經五卷有つて、卽ち此の經(大集經)の虛空品なりと記して居るが、如何にしてこの五卷本が、かの虛空藏品の別譯と判じたか、而もそは何人の譯であつたかが問題となる。

そこで出三藏記二を見ると、

方等王虛空藏經五卷(或曰二大虛空藏一檢二經文一與二大集經第八卷虛空藏品一同、未レ詳二是別出不一。別錄云、河南乞佛寺沙門釋聖堅譯出)

をば、曇無讖譯經の下に擧げて居る。而もこの經をば聖堅譯とする說もあつたことがわかり、同卷には別にまた

虛空藏經八卷(右一部凡八卷、宋武帝世、河南乞佛時沙門聖堅出)

を擧げ、異出經錄の下には

虛空藏經(曇摩讖出、方等王虛空藏五卷。曇摩蜜多出、虛空藏經一卷。聖堅出、虛空藏五卷。佛陀耶舍出、虛空藏一卷)右一經、四人出

のことを述べて居る。これに依ると無讖の譯の外に聖堅譯など三本があつたことになる。

曇無讖が大集經二十九卷を譯しながら、そのうちの一部分(卽ち虛空藏品)を別に譯出するといふことは、疑ふべき所であるのみならず、僧祐が「別に大虛空藏經五卷の本があつて、此の經(大集經)の虛空藏品と同じ」といふも、無讖の譯とは云はず、方等王虛空藏經に就て、其の經本を檢するに大集經の第八分と同じといふも、彼の見た本には虛空藏品が缺けて居ると明記して居るから、對照のしやうが無い筈であり、從つて「別出か否か」も不明なのが當然で、大集經の虛空藏品と同じいといふのは、彼自ら檢した所に依つたものでは無くて、他の錄にでも依つて記入したものに相違ない。開元錄十四に

方等王虛空藏經八卷(亦云二虛空藏所問一五卷。乞伏沙門釋聖堅譯。右一經是大集虛空藏品異譯、藏中縱有、乃是

菩薩品、第六無言菩薩品、第七不可說菩薩品、第八虛空藏菩薩品、第九寶幢分、第十虛空目分、第十一寶髻菩薩品、第十二無盡意菩薩品がそれである。然るに別に二十四卷本があつて、右の第八虛空藏所聞品(五卷)と第十二の無盡意所說不可思議品(四卷)との二品四卷を缺く外、經文悉く同じく、只殘りの二十卷を分つて二十四卷にしたものに過ぎない。この兩本は共に海慧菩薩品を第五とし、第六無くして、直ちに無言菩薩品を第七として居るが、第六品を缺く所以は不詳であるといふ。また錄を檢すると、別に大虛空藏經の五卷本があるが、これは卽ち此經の虛空藏品であり、無盡意經の四卷本があつて本經末の無盡意品がそれであるといふ。

以上の記錄によると、僧祐の見た舊錄に依るものと別本とは、同一系のもので、何れも第六品を缺いて居り、後者は尙ほ二品少い點で、前者と異つて居る。

然るに開元錄十一には、右の僧祐の記を引いて後、「今經本を檢するに僧祐の記と同じからず、第一陀羅尼自在王品、第二寶女品、第三不眴菩薩品、第四海慧菩薩品、第五虛空藏菩薩品、第六無言菩薩品、第七不可說菩薩品、第八寶幢分、第九虛空目分、第十寶髻品、第十一日密分である。而して第一陀羅尼自在王品の中に、別に瓔珞品を別出する經本あるも、この二品は一段を成すもので、別出すべきではない。また僧祐の見た舊錄の中のものは、日密分無くして無盡意品があるのは不可である。蓋し無盡意經は大集の別分ではあるが、曇無讖の譯では無いから。次に祐は虛空藏品を不可說品の後に置くが、その所以を明にしない。要するに陀羅尼自在王品より日密分に至る間は總じて十一分である」といふ。

開元錄によると、これが所謂大集經の前半を成すことになり、前の二本に對して別種の一本があることになる。

麗藏大集經卷一の終に、校正後序があつて、宋本・丹本との比較を示して、宋本には首に瓔珞品があるが丹藏には無く、虛空藏品は宋本などには不可說の後に在り、丹藏では無言品の前に在り、宋本等は寶髻本の後に無盡意品四卷あるも、丹藏には無くて、日密分三卷があるといひ、更に本經各品の出沒、次第の不同によつて、異本六種を擧げて居る。その第一本なるものは、僧祐の「舊錄に依るもの」と同じく、第二本は前に引いた開元錄と同じもので、丹本卽ち是である。(第三本以下は後半を合したものであるから後に說く。)

以上が先づ、吾人が假に前半と稱したものの内容を成すのであるが、玆に問題となつたのは、虛空藏品の位置並にその脫落(僧祐の記す別本に於て)と、無盡意

や靜泰錄なども「單譯經」の條下に出して居る。若し三寶記のいふ如く、支讖や羅什の譯が實際にあつたとすれば、異人の別譯を見ずとする僧祐の註記や、法經、靜泰などが單譯經として出したことが解せられなくなる。寧ろ支讖・羅什の譯があつたとする說の方が、却つて疑を容るる餘地がないであらうか。

三寶記の說は、この二譯も當時存して居た事をいふのではなくして李廓錄や二秦錄などに據つたもので、特に羅什譯の條には、「經題の上に新の字を加へて居るのは、舊出卽ち支讖譯のあつたことを知つて居たからである」となして居る。羅什譯のことは暫く措くとして、支讖が後漢代に二十七卷の大集經を譯出して居るとすると、それより遠からぬ西晋時代(二六五—三一六)に法護がその一部分を五種類も別譯して居り、それが大集經前半の大部分を占むるものであることを見ると、李廓錄にあつたとはいへ、その實在性が聊か疑はれぬでもない。何となれば、法護譯の四種は、各獨立の經として別名を持つて居り、その組織も、普通の經典に見るが如く、序分(序說)と正宗分(本論)と流通分とを具へたもので、單に經の一部を抄出したとか別出したとかいふ種數のものではない。從つて法護の右諸譯を見ると、大集經二十七卷などといふ纒つたものが、彼より一世紀も以前に存在した事が疑はれるからであつて、異譯から考へると、この前半も亦六十卷に於けるが如く、誰人かゞ同類の經を編輯して成つたものに非ざるやをさへ思はしめる。彥悰錄五の疑僞部には、蕭子良造とする三十五經の中に方等大集經十二卷を擧げ、靜泰錄一には單譯經の下に、譯者不詳の大方等大集經八卷を擧げて居る。此等はその內容を知る由もないが、支讖・羅什の譯と云はるるものも、若しあつたとすればかゝる種類のものと何等かの關係あるものでは無からうか。僧祐錄及び法經錄などに依る限り、前二譯の存在は極めて疑はしい。

【二】歷代三寶記第四に、大集經、二十七卷、初出、見㆓李廓錄㆒。

【三】第二出、與㆓漢世支讖譯㆒小異、見㆓李廓錄、今別錄及二秦錄、題上並有㆓新字㆒、知㆓舊出㆒明矣。

【四】第三出、與㆓支讖所出二十七卷、秦世羅什所出三十卷㆒、廣略小殊、或二十九、或三十三、不定者、由㆔初出未㆓勘定㆒、卽抄寫致㆓不同㆒、今翻驗矣、見㆓竺道祖錄㆒。

四、その內容

何れにするも現藏に編入されて居るものは、第十二、無盡意菩薩品を除く外は、曇無讖譯と稱せらるるものであつて、出三藏記九に、僧祐が見た舊錄に於ける內容と略同一のものである。彼の記によると、二十九卷より成り、首尾十二段有つて、第一瓔珞品、第二陀羅尼自在王品、第三寶女品、第四不眗菩薩品、第五海慧

謂前哲の所翻で、どれだけが僧就によつて加へられたかは、前述の諸經錄も、記載明瞭を缺くので、俄に決定しかねるが、ともかく隋以前に大集經と云つたのは三十卷內外の本であつた事は、經錄の一致する所であるから、今假に六十卷本に就ても前半と後半とを分け、前半とは、僧就新合以前に大集經と呼ばれたものを指し、後半とは僧就の編入した部分を云ふものとして、以下これ等の部分の飜譯とその內容、特にその品數を一瞥しやう。尙ほ參考の爲に諸異本に於ける品數と其の次第とを對照すると次の如くになる

〔諸異本に於ける內容の比較〕

<table>
<tr><th rowspan="2">麗藏</th><th colspan="2">祐錄</th><th rowspan="2">丹本</th><th rowspan="2">僧就本</th><th rowspan="2">後序第五本</th><th rowspan="2">宋元明三本</th></tr>
<tr><th>甲</th><th>乙</th></tr>
<tr><td>一、瓔珞品</td><td>1</td><td>1</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td><td>1</td></tr>
<tr><td>二、陀羅尼自在王品</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td></tr>
<tr><td>三、寶女品</td><td>3</td><td>3</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>3</td></tr>
<tr><td>四、不眴菩薩品</td><td>4</td><td>4</td><td>3</td><td>3</td><td>3</td><td>4</td></tr>
<tr><td>五、海慧菩薩品</td><td>5</td><td>5</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>5</td></tr>
<tr><td>六、無言菩薩品</td><td>7</td><td>7</td><td>6</td><td>5</td><td>5</td><td>7</td></tr>
<tr><td>七、不可說菩薩品</td><td>8</td><td>8</td><td>7</td><td>6</td><td>6</td><td>8</td></tr>
<tr><td>八、虛空藏品</td><td>9</td><td></td><td>5</td><td>7</td><td>7</td><td>6</td></tr>
<tr><td>九、寶幢分</td><td>10</td><td>9</td><td>8</td><td>8</td><td>8</td><td>6</td></tr>
<tr><td>十、虛空目分</td><td>11</td><td>10</td><td>9</td><td>9</td><td>9</td><td>10</td></tr>
<tr><td>一一、寶髻菩薩品</td><td>12</td><td>11</td><td>10</td><td>10(?)</td><td>10
12</td><td>11</td></tr>
<tr><td>一二、無盡意菩薩品</td><td>13</td><td></td><td></td><td>14</td><td>16</td><td></td></tr>
<tr><td>一三、日密分</td><td></td><td></td><td>11</td><td rowspan="2">11</td><td>11</td><td>12</td></tr>
<tr><td>一四、日藏分</td><td></td><td></td><td></td><td>13</td><td></td></tr>
<tr><td>一五、月藏分</td><td></td><td></td><td></td><td>12</td><td>14</td><td></td></tr>
<tr><td>一六、須彌藏分</td><td></td><td></td><td></td><td>15</td><td>17</td><td></td></tr>
<tr><td>一七、十方菩薩分</td><td></td><td></td><td></td><td>13</td><td>15</td><td></td></tr>
</table>

三、大集經の前半に就て

費長房が歷代三寶記第四に、大集經には後漢(二五—二二〇)の支婁迦讖の第一譯[二](二十七卷)と、姚秦(三八四—四一七)の鳩摩羅什の[三]第二譯(三十卷)と、北涼(四一二—四三九)曇無讖の[四]第三譯(三十一卷)とがあつた事を錄してより、大唐內典錄以下の諸經錄皆之を記し、開元錄十一には、第三譯のみ存し初・二の二譯共に闕けたることを云つて居る。然るに梁僧祐の出三藏記一の支讖や羅什の譯經錄中には、大集經の、名を出さざるのみならず、その部分譯と覺しきものも無く、同九の大集・虛空藏・無盡意三經記には、舊錄を尋ぬるに、大集經はこれ晉安帝の世に、天竺の沙門曇摩讖が、西涼に於て譯出する所で、二十九卷有り、首尾十二段有つて共に一經を成すといひ、特に「更不レ見ニ異人別譯一」と附記して居り、法經錄

を後世に傳へ、この經を如何に名くるかを說く部分をいふ。大集經は各品の終にこの流通分があつて、これが各品各獨立の一經であつた事の一證據をなす。この事は後に論ずる。

二　大集經六十卷本の由來

本經の和譯は、他の諸經に於けると同じく、高麗藏を底本とした大正一切經に據つた。而して大正一切經では、大集經は六十卷より成つて居るが、大方等大集經の名に於て本輯に譯出せられるのは、そのうちの前半(卷一―三二)であり、それ以後は、大集經の一部としてでは無く、別本として譯出せられることになつて居る。これは單に編纂上の都合に因るのみではなく、自ら據る所有るものと云はねばならぬ。何となれば、六十卷本は、經錄の示す所によると、隋代に僧就が編んだのに始まるものであつて、古くは大集經は多く三十卷内外の本を指し、他は大集部に屬しつゝも夫れ〳〵別名を以て記されて居たのである。而してこの三十卷内外の大集經は、六十卷本の前半と少異あるのみであるから、便宜上、六十卷本の前半を、そのまゝ大集部第一第二として譯出するに至つたのである。(現に宋・元・明の三大藏經に於ても、大集經としては、日密分までを含み、その間、無盡意菩薩品を除いて、三十卷をなして居る。)

僧就が大集經六十卷を編むに至つたのは歷代三寶記十二によると、招提寺沙門の釋僧就が、闍那崛多三藏から、かねて于闐の東南二千餘里に遮拘迦と云ふ國があり、その國王亦純信にして大乘を敬重し、諸國の名僧至るも、試練して大乘の學人のみ請ひ停らしめ、王宮内に摩訶般若、大集、華嚴など各十萬偈の本を持して祕藏し、此の國の東南二十餘里の地にも、大集、華嚴、寶積等十二部の、各十萬偈なるを安置し、防護守視せしむる有るを聞き、大集經完本の在らざるを恒に嗟歎して居たが、高齊の世に月藏經が譯され、次いで開皇六年(五八六)に日藏經の譯出を見、何れも大集經廣本の一部なるを知り、欣躍して前哲の所翻に此等を合し、六十軸の新合本を編んだとある。彼のこの編輯は、大集經の完本を成さんとするより外他意が無かつた。而して前に譯されて居た大集經(その卷數は或は二十七、三十、三十一などとあつて、一定して居ない)に、新に編入した諸經は、開元錄十一によると、前記の日藏月藏二經以外に、十方菩薩品と題して月藏經の次に置いた明度五十校經と、無盡意經とであつて、全部五十八卷より成つて居たらしい。内典錄五には大方等大集經(六十卷或五十八卷)、曇無讖譯前三十卷。北齊隋時耶舍譯後三十卷といひ、大周錄以下の諸經錄、また多く之に倣つて居るが、現藏と對照して、果してどれだけが、所

是經名爲二眞實法義・毘尼方便・成就發心無量寶聚・無量陀羅尼・十力四無畏不共法聚一。

とあり、卷第十二の海慧菩薩品の終には

是經名二大寶聚一

といひ、卷第十三の不可說菩薩品の終には

是經名爲二方等大集一

とし、卷第二十六の寶髻品の終には

是經名曰二方等大集大陀羅尼大行菩薩入處一

といひ、卷第三十の無盡意菩薩品の終には

此經名曰二無盡意所說不可盡義章句之門一、又名二大集一、

と云つて居る。玆には大集の語の外に寶聚、大寶聚又は聚などの語が見られるが、これは獨り經の終に限らず、海慧菩薩品五の三(卷第十)には、海慧菩薩の、「大乘は、何の法か攝取し、何の法か利益し、何の法をもつてか得難く、何の法か障碍し、何の因緣の故に名けて大乘とは爲す」の問に對し、佛が多くの法數を以て答へ終つて後、

是大寶聚亦無二增減一、若有下至二此寶聚之中一、乃至不レ能レ取二一寶一者上、是人常住二三惡道中一、………。若有三受二持如レ是經典一、是人則具二一切善法一、………是大智聚。

と云つて居られる。從つて大集とは「寶の聚」と義を異にするものでは無いと云ひ得る。而して寶は卽ち法であるから、大集とは亦法の聚であらねばならぬ。

總じて大集經は法數を擧げることが著しく、全卷殆んど法數を以て滿たされて居る。勿論說明の爲に三義五義などを數ふることは、極めて有りふれたことであるが、この經に於ては只數へんが爲に數へて居ると見らるゝ部分が極めて多く、(各品概要參照)、法數を擧げ法聚を列擧することが、その中心をなして居る。從つて法數に據つて解說するよりも、單に羅列するに止まつて、法相相互の間に內容の聯關を認め難いもの反覆重說に及ぶものも極めて多く、大集經は法數・法相を擧ぐること多き經典の編輯なりと云つても過言ではあるまい。寶女品や、海慧品の流通分に記された寶聚といふ經名も、その內容に照せば、自らその意味が明になり、卷第二十四の虛空目分の終には明了に

我初未レ聞二是大法聚一、今得レ聞レ之。

とあり、卷第十二の無言菩薩品の終にも

佛告二阿難一、………是經典中、分二別演二說一切法相一云云

とあるのから推するも、本經の題目たる大集とは、多人數の集りなる大衆聚を指すものではなくて、法數、法の聚、法相の聚を意味すると見るのが、より妥當であらう。

【一】 經典の終に於て、佛が云何に此の經

大方等大集經解題

一、「大集」の名義

本經に依ると、大集なる語は、少くとも兩義に用ひられて居る。卷一に

悉來大集（異譯に集會）

悉已大集（異譯は皆來大集）

などいひ、卷二十に

若欲下聽二受無上正法一見中大集會上、宜當三往二詣……釋迦如來所住之處一。（異譯には欲レ見……無量佛集一、今正是時、可下共我等、往中彼世界釋迦所住之處、大集法會上）

とあり、卷二十一には

娑婆世界、當レ有二十方無量諸佛菩薩集會一、是大集時、汝於二此中一當レ得……菩提記一（異譯には釋迦如來、以二大願一故大集二諸佛及菩薩衆一、汝當三於レ彼得レ受二……記）

と云ひ、卷二十二には

爲二此大集一、於二大（衆）集中一、演二說正法一（異譯に是故彼佛、爲二大衆說一レ法）

などとあるのは、異譯も示すが如く、正しく佛菩薩などの多數の「集り」を云ふ爲に用ひられた所である。

然しかゝる多人數の集りをいふ場合には、又諸佛の大會とか大會衆とか、牟尼衆集とか大衆とかの語が用ひられ、寧ろその方が普通であるから、これを示すのに大集の文字を用ふるのは、やゝ特例と云つて差支へないであらう。

ところが海慧菩薩品の

如來所說大集妙典、猶未レ訖耶（異譯には大集會中所有正法、今尙說耶）

とか、無言菩薩品の

我今……欲三往聽二受大集妙典一（異譯に來二詣此會一、聽レ說二經典一）

とか、虛空藏菩薩品の

亦爲三此大普集經、分二別少法門分一故（異譯に亦爲三分二別此大集會微妙法門一）

とか、寶幢分第五品の

以二汝因緣一、有二是大集一（異譯に由二汝因緣一、今得二此處大集法門一）

とか、同第七品の

應當三供二養是大集經受者說者一、何以故、是大集經、卽是十方諸佛印封、若能供二養如レ是大集一、卽是供二養十方諸佛一（異譯に若有二善男子善女人一、當四共受二持書三寫大集法門一――以下相當文を缺く）

の句に於ける大集の語は、前に云つたものとやゝ異なる意味を持つて居る。

これは各品の終に於ける流通分の文と併せ考ふべきであつて、卷第七の寶女品の終には

異譯の對照と註釋とに就て

一、本經の和譯に際して、異譯の存するものは、一應これと對照し、必要と覺しき部分は、繁に亙らざる範圍内に於て、是を註釋欄中に註記した。而して是を記するに當り、本文の理解に資する所あるべしと思惟せられた場合と、著名熟知せらるる語句の、異譯せられたる場合とを、主として取つた。經中隨處に見らるる法數は、異譯に在つては多くの場合同一譯を以てせられて居らず、項目の數に於ても兩者の間にかなりの出入があり、一々註記せんことは餘りに繁雜を來すを恐れ、唯兩者の平行せざることのみを記した場合も少くない。

一、本經の性質上、同一の語句が、同一の卷中に於てすら、再三再四あらはれて居るが、その註釋は、本文行文の前後を按じて、隨時之を加へることにした。從つて同一卷中に於て、同一語の註記が、或は二箇所に出でた場合無しとしないがそれは各々の場合に於ける本文を考慮に入れての上であるから、あらかじめ諒解を得て置き度い。

一、前例に依れば、卷末には、索引が付け加へらるべきである。然し本經の如き、他の諸經とその性質を異にしたものは、大集經一部としての内容索引をまとめ作る方が、妥當と考へられるので、全部を譯了した後に更めて編纂することにした。

譯者識

目次

大集部一

蓮澤成淳譯

(28)

國譯一切經

大東出版社藏版